

# Cosminexus V9 アプリケーションサーバ リファレンス 定義編(サーバ定義)

文法書

3020-3-Y16-60

## ■ 対象製品

マニュアル「アプリケーションサーバ & BPM/ESB 基盤 概説」の前書きの対象製品の説明を参照してください。

## ■ 輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替及び外国貿易法の規制並びに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

## ■ 商標類

AMD は、Advanced Micro Devices, Inc.の商標です。

BIG-IP、3-DNS、iControl Services Manager、FirePass および F5 は F5 Networks, Inc. の商標または登録商標です。

Borland のブランド名および製品名はすべて、米国 Borland Software Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

CORBA は、Object Management Group が提唱する分散処理環境アーキテクチャの名称です。

GIF は、米国 CompuServe Inc.が開発したフォーマットの名称です。

gzip は、米国 FSF(Free Software Foundation)が配布しているソフトウェアです。

HP-UX は、Hewlett-Packard Development Company, L.P.のオペレーティングシステムの名称です。

IBM、AIX は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

IIOB は、OMG 仕様による ORB(Object Request Broker)間通信のネットワークプロトコルの名称です。

Intel は、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

Internet Explorer は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Linux は、Linus Torvalds 氏の日本およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

OMG、CORBA、IIOB、UML、Unified Modeling Language、MDA、Model Driven Architecture は、Object Management Group, Inc.の米国及びその他の国における登録商標または商標です。

Oracle と Java は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

Red Hat は、米国およびその他の国で Red Hat, Inc. の登録商標もしくは商標です。

SOAP (Simple Object Access Protocol) は、分散ネットワーク環境において XML ベースの情報を交換するための通信プロトコルの名称です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標がついた製品は、米国 Sun Microsystems, Inc. が開発したアーキテクチャに基づくものです。

UNIX は、The Open Group の米国ならびに他の国における登録商標です。

VisiBroker は、英国、米国、その他の国における Micro Focus (IP) Limited の商標または登録商標です。

Win32 は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows Vista は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

その他記載の会社名、製品名は、それぞれの会社の商標もしくは登録商標です。

Eclipse は、開発ツールプロバイダのオープンコミュニティである Eclipse Foundation, Inc.により構築された開発ツール統合のためのオープンプラットフォームです。

This product includes software developed by the Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>).

## ■ 発行

2015 年 4 月 3020-3-Y16-60

■ 著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2012, 2015, Hitachi, Ltd.

## 変更内容

変更内容(3020-3-Y16-60) uCosminexus Application Server 09-70, uCosminexus Application Server(64) 09-70, uCosminexus Client 09-70, uCosminexus Developer 09-70, uCosminexus Service Architect 09-70, uCosminexus Service Platform 09-70, uCosminexus Service Platform(64) 09-70

追加・変更内容	変更箇所
webservice.jsp.compile.backcompat プロパティの JDK7 に対応する指定可能値を追加した。	4.14.1
JavaVM の Permanent 領域用オプション名を Metaspace 領域用オプション名に変更した。	5.2, 5.3, 10.4
次の Metaspace 領域に関するオプションを追加した。 <ul style="list-style-type: none"> <li>-XX:MetaspaceSize</li> <li>-XX:MaxMetaspaceSize</li> <li>-XX:CompressedClassSpaceSize</li> </ul>	16.4, 16.5
次の Permanent 領域に関するオプションを削除した。 <ul style="list-style-type: none"> <li>-XX:PermSize</li> <li>-XX:MaxPermsize</li> </ul>	16.4, 16.5
-XX:[+!-]UseParNewGC オプションを削除した。	16.5
JavaVM の Permanet 領域用オプション名を Metaspace 領域用オプション名に変更した。	—

uCosminexus Application Server 09-60, uCosminexus Application Server(64) 09-60, uCosminexus Client 09-60, uCosminexus Developer 09-60, uCosminexus Service Architect 09-60, uCosminexus Service Platform 09-60, uCosminexus Service Platform(64) 09-60

追加・変更内容	変更箇所
ログファイルの非同期出力機能のオプション (-XX:[+!-]JavaLogAsynchronous) を追加した。	16.2
ファイナライズ滞留解消機能のプロパティ (JP.co.Hitachi.soft.jvm.autofinalizer) を追加した。	16.3
次の G1GC に関するオプションを追加した。 <ul style="list-style-type: none"> <li>-XX:[+!-]UseG1GC</li> <li>-XX:ConcGCThreads</li> <li>-XX:MaxGCPauseMillis</li> </ul>	16.5
-XX:ParallelGCThreads オプションの説明に G1GC 使用時の説明を追加した。	16.5
-XX:[+!-]UseCompressedOops オプションを追加した。	16.5

単なる誤字・脱字などはお断りなく訂正しました。

# はじめに

---

このマニュアルをお読みになる際の前提情報については、マニュアル「アプリケーションサーバ & BPM/ESB 基盤 概説」のはじめにの説明を参照してください。



# 目次

1	ファイルの概要	1
1.1	ファイルの種類	2
1.2	ファイルの説明の記述形式	5
1.3	ファイル編集時の注意事項	7
2	J2EE サーバで使用するファイル	9
2.1	J2EE サーバで使用するファイルの一覧	10
2.2	hitachi_web.properties (J2EE サーバ用 Web アプリケーションプロパティファイル)	11
2.3	usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル)	13
2.4	usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル)	23
2.5	server.policy (J2EE サーバ用セキュリティポリシーファイル)	127
2.6	criticalList.cfg (保護区リストファイル)	132
3	バッチサーバで使用するファイル	135
3.1	バッチサーバで使用するファイルの一覧	136
3.2	usrconf.cfg (バッチサーバ用オプション定義ファイル)	137
3.3	usrconf.properties (バッチサーバ用ユーザプロパティファイル)	141
3.4	server.policy (バッチサーバ用セキュリティポリシーファイル)	154
3.5	criticalList.cfg (保護区リストファイル)	158
3.6	usrconf.cfg (バッチアプリケーション用オプション定義ファイル)	160
3.7	usrconf.properties (バッチアプリケーション用ユーザプロパティファイル)	165
4	Smart Composer 機能で使用するファイル	167
4.1	Smart Composer 機能で使用するファイルの一覧	168
4.2	cmxserver.properties (サーバ設定プロパティファイル)	170
4.3	.cmxrc (クライアント設定プロパティファイル)	171
4.4	cmxclient.properties (クライアント共通設定プロパティファイル)	175
4.5	lb.properties (負荷分散機定義プロパティファイル)	180
4.6	簡易構築定義ファイル	183
4.6.1	概要	183
4.6.2	簡易構築定義ファイルの指定内容	183
4.6.3	Web システムの定義	193
4.6.4	負荷分散機の定義	194
4.6.5	cookie スイッチングの定義	196
4.6.6	仮想サーバの定義	198
4.6.7	物理ティアの定義	200

4.6.8	サービスユニットの定義	205
4.6.9	論理サーバの定義	207
4.6.10	論理サーバのコンフィグレーション定義	211
4.6.11	ホストの定義	212
4.7	構成変更定義ファイル	215
4.8	論理サーバ参照定義ファイル	219
4.9	スケールアウト用ホスト定義ファイル	221
4.10	簡易構築定義ファイルおよび構成変更定義ファイルに指定できるタグ	224
4.10.1	J2EE アプリケーションを実行するシステムで指定できるタグ	224
4.10.2	バッチアプリケーションを実行するシステムで指定できるタグ	236
4.11	システムの構成パターンと定義する論理サーバ	244
4.11.1	J2EE アプリケーションを実行するシステムを構築する場合	244
4.11.2	バッチアプリケーションを実行するシステムを構築する場合	245
4.12	各論理サーバ共通で指定できるパラメタ	246
4.12.1	論理サーバ共通で指定できるパラメタ	246
4.13	論理 Web サーバで指定できるパラメタ	251
4.13.1	Web サーバ用定義を設定するパラメタ	251
4.13.2	HTTP Server 用リダイレクト動作定義を設定するパラメタ	255
4.13.3	ワーカ定義を設定するパラメタ	257
4.13.4	HTTP Server のログの出力方法を設定するパラメタ	259
4.14	論理 J2EE サーバで指定できるパラメタ	265
4.14.1	J2EE サーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタ	265
4.14.2	J2EE サーバ用オプション定義を設定するパラメタ	303
4.14.3	J2EE サーバの JavaVM のシステムプロパティに設定できるパラメタ	304
4.14.4	J2EE サーバの拡張パラメタ	308
4.14.5	バッチサーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタ	310
4.14.6	バッチサーバ用オプション定義を設定するパラメタ	317
4.14.7	バッチサーバの JavaVM のシステムプロパティに設定できるパラメタ	318
4.14.8	バッチサーバの拡張パラメタ	319
4.14.9	運用監視エージェントプロパティを設定するパラメタ	320
4.14.10	Management イベント発行用プロパティを設定するパラメタ	320
4.14.11	JP1 連携を設定するパラメタ	321
4.14.12	SecurityManager の使用を設定するパラメタ	325
4.14.13	統合ユーザ管理の使用を設定するパラメタ	325
4.14.14	JavaVM の起動パラメタで使用するファイルを設定するパラメタ	327
4.15	論理パフォーマンストレーサで指定できるパラメタ	329
4.16	論理 SFO サーバで指定できるパラメタ	331
4.16.1	SFO サーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタ	331
4.16.2	SFO サーバ用オプション定義を設定するパラメタ	335
4.16.3	SFO サーバの JavaVM のシステムプロパティに設定できるパラメタ	336



4.16.4	SFO サーバの拡張パラメタ	337
4.16.5	運用監視エージェントプロパティを設定するパラメタ	337
4.16.6	Management イベント発行用プロパティを設定するパラメタ	337
4.16.7	JP1 連携を設定するパラメタ	338
4.17	論理 CTM ドメインマネージャで指定できるパラメタ	340
4.18	論理 CTM で指定できるパラメタ	342
4.19	論理スマートエージェントで指定できるパラメタ	347
4.20	論理ユーザサーバで指定できるパラメタ	348
4.21	論理ネーミングサービスで指定できるパラメタ	349
<b>5</b>	<b>サーバ管理コマンドで使用するファイル</b>	<b>351</b>
5.1	サーバ管理コマンドで使用するファイルの一覧	352
5.2	usrconf (サーバ管理コマンド用オプション定義ファイル)	353
5.3	usrconf.bat (サーバ管理コマンド用オプション定義ファイル)	356
5.4	usrconf.properties (サーバ管理コマンド用システムプロパティファイル)	359
<b>6</b>	<b>JPA で使用するファイル</b>	<b>365</b>
6.1	CJPA プロバイダで使用するファイルの一覧	366
6.2	persistence.xml	367
6.2.1	persistence.xml の詳細	367
6.2.2	<property>タグに指定できる CJPA プロバイダ独自のプロパティ	370
6.3	O/R マッピングファイル	373
6.3.1	entity-mappings 以下の要素	390
6.3.2	persistence-unit-metadata 以下の要素	392
6.3.3	table-generator 以下の要素	394
6.3.4	named-query 以下の要素	395
6.3.5	named-native-query 以下の要素	395
6.3.6	sql-result-set-mapping 以下の要素	396
6.3.7	mapped-superclass 以下の要素	396
6.3.8	entity 以下の要素	402
6.3.9	embeddable 以下の要素	415
6.3.10	その他の要素	416
6.4	クエリヒント	426
<b>7</b>	<b>CJMS プロバイダで使用するファイル</b>	<b>427</b>
7.1	CJMS プロバイダで使用するファイルの一覧	428
7.2	admin.properties (管理コマンドプロパティファイル)	429
7.3	commonconfig.properties (CJMSP ブローカー共通プロパティファイル)	432
7.4	config.properties (CJMSP ブローカー個別プロパティファイル)	434

8	CTM で使用するファイル	441
8.1	CTM で使用するファイルの一覧	442
8.2	CTM ユーザ環境変数定義ファイル	443
8.3	CTM コマンドオプションファイル	446
9	Web サーバ連携で使用するファイル	447
9.1	Web サーバ連携で使用するファイルの一覧	448
9.2	isapi_redirect.conf (Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイル)	449
9.3	mod_jk.conf (HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイル)	453
9.4	uriworkermap.properties (Microsoft IIS 用マッピング定義ファイル)	461
9.5	workers.properties (ワーカ定義ファイル)	462
10	Manager で使用するファイル	467
10.1	Manager で使用するファイルの一覧	468
10.2	adminagent.properties (運用管理エージェントプロパティファイル)	470
10.3	AdminAgentrc (運用管理エージェント自動起動設定ファイル)	488
10.4	adminagentuser.cfg (運用管理エージェント用オプション定義ファイル)	489
10.5	adminagent.xml (運用管理エージェント設定ファイル)	491
10.6	mngagent.<実サーバ名>.properties (運用監視エージェントプロパティファイル)	494
10.7	mserver.properties (Management Server 環境設定ファイル)	496
10.8	mserver.cfg (Management Server 用オプション定義ファイル)	507
10.9	mserverenv.cfg (Management Server 用環境変数定義ファイル)	508
10.10	manager.cfg (Manager 設定ファイル)	510
10.11	maction.properties (Management アクション実行用プロパティファイル)	514
10.12	Management イベント発行用プロパティファイル	518
10.13	Management イベント発行用メッセージ ID リストファイル	520
10.14	Management Server 管理ファイル用回避対象定義ファイル	523
10.15	.mngsvrutilrc (mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイル)	525
10.16	mngsvrutil.properties (mngsvrutil コマンドのサーバ側定義ファイル)	529
10.17	mngsvrutilcl.properties (mngsvrutil コマンドのクライアント側共通定義ファイル)	532
10.18	.mngsvrmonitorrc (JP1/IM 連携用モニタ起動コマンドの設定ファイル)	534
10.19	JP1/IM 連携用システムログメッセージマッピングファイル	536
10.19.1	mserver.jp1event.system.mapping.properties (Management Server 用メッセージマッピングファイル)	536
10.19.2	manager.jp1event.system.mapping.properties (J2EE サーバ共通メッセージマッピングファイル)	537
10.19.3	manager.<論理サーバ名>.jp1event.system.mapping.properties (J2EE サーバ個別メッセージマッピングファイル)	537
10.19.4	JP1 イベントへの変換	538
10.20	setup.cfg (セットアップウィザード用設定ファイル)	541

10.21	論理ユーザサーバ定義ファイル	543
<b>11</b>	<b>仮想化システムで使用するファイル</b>	<b>551</b>
11.1	仮想化システムで使用するファイルの一覧	552
11.2	<LB 接続情報の識別名>.properties (仮想サーバマネージャ側の負荷分散機接続設定プロパティファイル)	553
11.3	rasetup.cfg (rasetup コマンド用設定ファイル)	555
11.4	sinaviagent.cfg (サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル)	557
11.5	sinaviagent.properties (サーバ通信エージェント用プロパティファイル)	563
11.6	tier.properties (ティア別プロパティファイル)	565
11.7	tierlb.properties (ティア側の負荷分散機接続設定プロパティファイル)	568
11.8	version.properties (インタフェースバージョン定義ファイル)	570
11.9	vmi.properties (仮想サーバマネージャプロパティファイル)	572
11.10	vmclient.properties (仮想サーバマネージャのクライアント共通設定プロパティファイル)	574
11.11	.vmirc (仮想サーバマネージャのクライアント設定プロパティファイル)	576
11.12	vmsetup.properties (管理者設定用プロパティファイル)	577
11.13	仮想サーバグループ情報ファイル	579
<b>12</b>	<b>ログの運用で使用するファイル</b>	<b>581</b>
12.1	ログの運用で使用するファイルの一覧	582
12.2	snapshot ログ収集対象定義ファイル	583
<b>13</b>	<b>監査ログの設定で使用するファイル</b>	<b>587</b>
13.1	監査ログの設定で使用するファイルの一覧	588
13.2	監査ログ定義ファイル	589
<b>14</b>	<b>Java アプリケーションで使用するファイル</b>	<b>595</b>
14.1	Java アプリケーションで使用するファイルの一覧	596
14.2	usrconf.cfg (Java アプリケーション用オプション定義ファイル)	597
14.3	usrconf.properties (Java アプリケーション用ユーザプロパティファイル)	603
14.4	Java アプリケーションに指定するシステムプロパティ	620
14.5	Java アプリケーションのユーザログ用プロパティ設定ファイル	628
<b>15</b>	<b>Web アプリケーションで使用するファイル</b>	<b>631</b>
15.1	Web アプリケーションで使用するファイルの一覧	632
15.2	コンパイル対象外リストファイル	633
15.3	実行結果リストファイル	634

16	JavaVM 起動オプション	635
16.1	JavaVM 拡張オプションの一覧	636
16.2	JavaVM 拡張オプションの詳細	647
-XX:+Hitachi	(一覧表示オプション)	648
-XX:[+ -]HitachiThreadDump	(拡張スレッドダンプ情報出力オプション)	648
-XX:[+ -]HitachiThreadDumpToStdout	(拡張スレッドダンプ標準出力抑止オプション)	657
-XX:[+ -]HitachiThreadDumpWithHashCode	(拡張スレッドダンプハッシュコード出力オプション)	657
-XX:[+ -]HitachiThreadDumpWithCpuTime	(拡張スレッドダンプ CPU 利用時間出力オプション)	658
-XX:[+ -]HitachiThreadDumpWithBlockCount	(拡張スレッドダンプブロック回数出力オプション)	658
-XX:HitachiJavaLog	(ログファイル名のプリフィックス指定オプション)	659
-XX:HitachiJavaLogFileSize	(最大ログファイルサイズ指定オプション)	660
-XX:[+ -]HitachiJavaLogNoMoreOutput	(ログファイル入出力エラー発生時指定オプション)	660
-XX:HitachiJavaLogNumberOfFile	(最大ログファイル数指定オプション)	661
-XX:[+ -]JavaLogAsynchronous		662
-XX:[+ -]HitachiOutputMilliTime	(詳細時間出力オプション)	662
-XX:[+ -]HitachiVerboseGC	(拡張 verbosegc 情報出力オプション)	663
-XX:[+ -]HitachiCommaVerboseGC	(CSV 出力オプション)	670
-XX:HitachiVerboseGCIntervalTime	(拡張 verbosegc 情報出力間隔指定オプション)	676
-XX:[+ -]HitachiVerboseGCPrintCause	(GC 要因内容出力オプション)	677
-XX:[+ -]HitachiVerboseGCPrintDate	(拡張 verbosegc 情報日付出力オプション)	679
-XX:[+ -]HitachiVerboseGCCpuTime	(拡張 verbosegc 情報 CPU 利用時間出力オプション)	679
-XX:[+ -]HitachiVerboseGCPrintTenuringDistribution	(Survivor 領域の年齢分布出力オプション)	680
-XX:[+ -]HitachiVerboseGCPrintJVMInternalMemory	(C ヒープ情報出力オプション)	681
-XX:[+ -]HitachiVerboseGCPrintThreadCount	(スレッド数の出力オプション)	682
-XX:[+ -]HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit	(java.io.File.deleteOnExit()が使用するヒープサイズの出力オプション)	683
-XX:[+ -]PrintCodeCacheInfo	(コードキャッシュ領域情報出力オプション)	685
-XX:CodeCacheInfoPrintRatio	(コードキャッシュ領域使用率指定オプション)	687
-XX:[+ -]PrintCodeCacheFullMessage	(コードキャッシュ領域枯渇メッセージ出力オプション)	688
-XX:[+ -]HitachiOutOfMemoryCause	(例外発生要因種別出力オプション)	689
-XX:[+ -]HitachiOutOfMemoryStackTrace	(スタックトレース出力オプション)	690
-XX:HitachiOutOfMemoryStackTraceLineSize	(スタックトレース行サイズ指定オプション)	692
-XX:[+ -]HitachiOutOfMemorySize	(メモリサイズ出力オプション)	692
-XX:[+ -]HitachiOutOfMemoryAbort	(強制終了オプション)	693
-XX:[+ -]HitachiOutOfMemoryAbortThreadDump	(スレッドダンプ出力オプション)	694
-XX:[+ -]HitachiOutOfMemoryAbortThreadDumpWithJHeapProf	(クラス別統計情報出力オプション)	695
-XX:[+ -]HitachiOutOfMemoryHandling	(OutOfMemory ハンドリングオプション)	695
-XX:HitachiOutOfMemoryHandlingMaxThrowCount	(最大発生回数の設定オプション)	699
-XX:[+ -]HitachiJavaClassLibTrace	(クラスライブラリのスタックトレース出力オプション)	700

-XX:HitachiJavaClassLibTraceLineSize (クラスライブラリのスタックトレース行サイズ指定オプション)	701
-XX:[+ -]HitachiLocalsInThrowable (例外発生時のローカル変数情報収集オプション)	701
-XX:[+ -]HitachiLocalsInStackTrace (スレッドダンプ出力時のローカル変数出力オプション)	704
-XX:[+ -]HitachiLocalsSimpleFormat (ローカル変数情報の出力フォーマット変更オプション)	705
-XX:[+ -]HitachiTrueTypeInLocals (ローカル変数情報の実型名出力オプション)	706
-XX:HitachiCallToString (ローカル変数情報出力オプション)	707
-XX:[+ -]HitachiFullCore (システムリソース解除オプション)	709
-XX:[+ -]HitachiReserveSwapSpace (スワップ領域の予約オプション)	709
-XX:[+ -]HitachiUseExplicitMemory (明示管理ヒープ機能オプション)	710
-XX:HitachiExplicitHeapMaxSize (Explicit メモリブロックの最大サイズ指定オプション)	711
-XX:HitachiExplicitMemoryLogLevel (明示管理ヒープ機能のログ出力レベル指定オプション)	712
-XX:HitachiExplicitMemoryJavaLog (明示管理ヒープ機能のログファイル出力先指定オプション)	712
-XX:HitachiExplicitMemoryJavaLogFileSize (明示管理ヒープ機能の最大ログファイルサイズ指定オプション)	713
-XX:HitachiExplicitMemoryJavaLogNumberOfFile (明示管理ヒープ機能の最大ログファイル数指定オプション)	714
-XX:[+ -]HitachiExplicitMemoryMoveToTenuredFirst (明示管理ヒープ機能の明示解放機能オプション)	714
-XX:[+ -]HitachiExplicitMemoryAutoReclaim (明示管理ヒープ機能の自動解放機能オプション)	715
-XX:[+ -]HitachiExplicitMemoryCompatibleToV8 (明示管理ヒープ機能のバージョン互換設定オプション)	716
-XX:[+ -]HitachiAutoExplicitMemory (明示管理ヒープ機能の自動配置機能オプション)	716
-XX:HitachiAutoExplicitMemoryFile (明示管理ヒープ機能の自動配置機能ファイルパス指定オプション)	717
-XX:ExplicitMemoryFullGCPolicy (明示管理ヒープ機能の Explicit メモリブロックへのオブジェクト移動制御オプション)	718
-XX:[+ -]ExplicitMemoryUseExcludeClass (明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能オプション)	718
-XX:ExplicitMemoryExcludeClassListFile (明示管理ヒープ機能適用除外設定ファイルパス指定オプション)	719
-XX:ExplicitMemoryNotExcludeClassListFile (明示管理ヒープ機能適用除外無効設定ファイルパス指定オプション)	720
-XX:[+ -]HitachiExplicitMemoryAutoRefReclaim (HTTP セッションで利用する Explicit ヒープの省メモリ化オプション)	721
-XX:HitachiJITCompileMaxMemorySize (JIT コンパイル時の確保メモリ上限値指定オプション)	722
-XX:[+ -]JITCompilerContinuation (JIT コンパイラ稼働継続機能オプション)	724
-XX:[+ -]UseCompressedOops (圧縮オブジェクトポインター機能で使用する Java オプション)	725
-XX:HitachiThreadLimit (スレッド数の上限値指定オプション)	726
16.3 JavaVM で使用するプロパティ	728
jvm.userprf.Enable	728
jvm.userprf.ExtendedSetting	729
jvm.userprf.File	730
jvm.userprf.Limit	731
jvm.userprf.Trace	732
jvm.userprf.LineNumber	733
jvm.userprf.ThrowableName	733

jvm.userprf.ThrowableNameEditMethod	734
jvm.userprf.LogLevel	735
JP.co.Hitachi.soft.jvm.autofinalizer	736
16.4 Application Server で指定できる Java HotSpot VM のオプションのデフォルト値	737
16.5 Application Server で指定できる Java HotSpot VM のオプション	739
16.6 JavaVM で使用する環境変数の一覧	746
16.7 JavaVM で使用する環境変数の詳細	747
JAVACOREDIR	747

## 付録 749

付録 A 拡張 MIB オブジェクト定義ファイル	750
付録 A.1 拡張 MIB オブジェクト定義ファイルのテーブル	750
付録 B Web アプリケーション用 DD (web.xml)	828
付録 B.1 拡張子と MIME タイプの対応づけ	828
付録 C 論理サーバのコンフィグレーションに指定できるパラメタ (互換用)	833
付録 C.1 各論理サーバ共通で指定できるパラメタ (互換用)	833
付録 C.2 論理 Web サーバで指定できるパラメタ (互換用)	834
付録 C.3 論理 J2EE サーバで指定できるパラメタ (互換用)	835
付録 C.4 論理 SFO サーバで指定できるパラメタ (互換用)	841

## 索引 847

# 1

## ファイルの概要

この章では、アプリケーションサーバで使用するファイルの種類、説明の記述形式、編集時の注意事項について説明します。

なお、この章ではアプリケーションサーバで使用するファイルのうち、サーバに関する定義情報を記載するファイルについて説明します。

J2EE アプリケーションの設定で使用する属性ファイルについては、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス 定義編(アプリケーション/リソース定義)」の「3. J2EE アプリケーションの設定で使用する属性ファイル」を参照してください。リソースの属性ファイルの定義については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス 定義編(アプリケーション/リソース定義)」の「4. リソースの設定で使用する属性ファイル」を参照してください。

## 1.1 ファイルの種類

アプリケーションサーバでは、実行するアプリケーションの種類によって使用できるファイルが異なります。このマニュアルでは、ファイルを次の5種類に分類しています。

- J2EE アプリケーションを実行するシステムで使用するファイル
- バッチアプリケーションを実行するシステムで使用するファイル
- Java アプリケーションを実行するシステムで使用するファイル
- Web アプリケーションを実行するシステムで使用するファイル
- Web サービスを実行するシステムで使用するファイル

それぞれのファイルについて次の表に示します。

表 1-1 J2EE アプリケーションを実行するシステムで使用するファイル

ファイルの種類	ファイルの説明	参照先マニュアル	参照先
J2EE サーバで使用するファイル	J2EE サーバが使用する JavaVM のプロパティや J2EE サーバの起動オプションなどを設定するファイルです。 例：usrconf.properties, usrconf.cfg*	このマニュアル	2 章
Smart Composer 機能で使用するファイル (サーバ設定プロパティファイル)	Smart Composer 機能のコマンドで構築するシステムについて設定するファイルです。 例：cmxserver.properties, .cmxrc		4 章
サーバ管理コマンドで使用するファイル	サーバ管理コマンド実行時の JavaVM のプロパティやサーバ管理コマンドの動作を設定するファイルです。 例：usrconf, usrconf.bat		5 章
JPA で使用するファイル	CJPA プロバイダ機能を使用する場合に、永続化ユニットの設定、エンティティオブジェクトのキャッシュ機能および悲観的ロック機能などの設定をするファイルです。 例：persistence.xml, O/R マッピングファイル		6 章
CJMS プロバイダで使用するファイル	CJMS プロバイダ機能を使用する場合に、コネクションサービス、メッセージルーティングサービスなどについて設定するファイルです。 例：commonconfig.properties, config.properties		7 章
CTM で使用するファイル	CTM を使用してリクエストのスケジューリングや負荷分散をする場合に、CTM で使用する環境変数やコマンドのオプションなどを設定するファイルです。 例：CTM ユーザ環境変数定義ファイル なお、CTM は、構成ソフトウェアに Component Transaction Monitor を含む製品だけで利用できます。利用できる製品については、マニュアル「アプリケーションサーバ & BPM/ESB 基盤 概説」の「2.2.1 製品と構成ソフトウェアの対応」を参照してください。		8 章
Web サーバ連携で使用するファイル	HTTP Server, または Microsoft IIS を利用して Web サーバと連携する場合に、リダイレクタやワーカの動作などを設定するファイルです。 例：mod_jk.conf, workers.properties		9 章



ファイルの種類	ファイルの説明	参照先マニュアル	参照先
Manager で使用するファイル	運用管理ドメインを管理するためのプロパティや、環境変数やログの収集先などを設定するためファイルです。 例：adminagent.properties, mserver.properties	このマニュアル	10 章
仮想化システムで使用するファイル	仮想サーバ上にアプリケーションサーバを構築する場合に、負荷分散機への接続情報や、仮想サーバマネージャのクライアント共通設定プロパティなどを設定するファイルです。 例：tierlb.properties, vmclient.properties		11 章
ログの運用で使用するファイル	アプリケーションサーバのログを収集する場合に、snapshot ログの収集先などを設定するファイルです。 例：snapshotlog.conf		12 章
監査ログの設定で使用するファイル	監査ログのセットアップ時に、監査ログ出力時のログファイルなどを設定するファイルです。 例：auditlog.properties		13 章
統合ユーザ管理で使用するファイル	統合ユーザ管理機能を使用する場合に、JAAS 対応ユーザ管理やシングルサインオンの情報などを設定するファイルです。 例：jaas.conf, ua.conf	アプリケーションサーバ 機能解説 セキュリティ管理機能編	12 章

注※

J2EE サーバのオプション定義ファイル (usrconf.cfg) に設定する製品の JavaVM (以降、JavaVM と呼びます) 拡張オプションについては、「16. JavaVM 起動オプション」を参照してください。

表 1-2 バッチアプリケーションを実行するシステムで使用するファイル

ファイルの種類	ファイルの説明	参照先
バッチサーバで使用するファイル	バッチサーバが使用する JavaVM のプロパティやバッチサーバの起動オプションなどを設定するファイルです。 例：usrconf.properties, usrconf.cfg*	3 章
Smart Composer 機能で使用するファイル (サーバ設定プロパティファイル)	Smart Composer 機能のコマンドの実行環境を設定したり、共通引数のデフォルト値を設定したりするファイルです。 例：cmxserver.properties, .cmxrc	4 章
サーバ管理コマンドで使用するファイル	サーバ管理コマンド実行時の JavaVM のプロパティやサーバ管理コマンドの動作を設定するファイルです。 例：usrconf, usrconf.bat	5 章
Manager で使用するファイル	運用管理ドメインを管理するためのプロパティや、環境変数やログの収集先などを設定するためファイルです。 例：adminagent.properties, mserver.properties	10 章
ログの運用で使用するファイル	アプリケーションサーバのログを収集する場合に、snapshot ログの収集先などを設定するファイルです。 例：snapshotlog.conf	12 章
監査ログの設定で使用するファイル	監査ログのセットアップ時に、監査ログ出力時のログファイルなどを設定するファイルです。 例：auditlog.properties	13 章

## 1 ファイルの概要

### 注※

バッチサーバのオプション定義ファイル (usrconf.cfg) に設定する JavaVM 拡張オプションについては、「16. JavaVM 起動オプション」を参照してください。

表 1-3 Java アプリケーションを実行するシステムで使用するファイル

ファイルの種類	ファイルの説明	参照先
Java アプリケーションで使用するファイル	Java アプリケーションを使用する場合に、JavaVM のプロパティや起動オプションなどを設定するファイルです。 例：usrconf.properties, usrconf.cfg*	14 章

### 注※

Java アプリケーションのオプション定義ファイル (usrconf.cfg) に設定する JavaVM 拡張オプションについては、「16. JavaVM 起動オプション」を参照してください。

表 1-4 Web アプリケーションを実行するシステムで使用するファイル

ファイルの種類	ファイルの説明	参照先
Web アプリケーションで使用するファイル	アプリケーション起動時に、アプリケーションに含まれる JSP ファイルをコンパイルする場合に、コンパイル対象外にするファイルや実行結果を出力するファイルを設定するファイルです。	15 章

表 1-5 Web サービスを実行するシステムで使用するファイル

ファイルの種類	ファイルの説明	参照先マニュアル	参照先
Web サービスで使用するファイル	システム共通の動作、またはプロセス固有の動作を設定する場合に設定するファイルです。 例：cjwconf.properties, cjrconf.properties	アプリケーションサーバ Web サービス開発ガイド	10.1, 13.1

## 1.2 ファイルの説明の記述形式

ファイルの説明の記述形式と使用する記号について説明します。

### (1) 記述形式

2章以降、ファイルの説明を次の形式で記述します。

形式

ファイルの記述形式を示します。

ファイルの格納先

ファイルの格納先を示します。

機能

ファイルの機能について説明します。

指定できるキー

ファイルの中で指定できるキーについて説明します。

指定できるパラメタ

ファイルの中で指定できるパラメタについて説明します。

記述例

ファイルの内容の記述例を示します。

注意事項

ファイルを設定または使用する際の注意事項を説明します。

参考

すべてのファイルで上記の項目をすべて説明しているわけではありません。また、上記以外に、各ファイルの固有情報を記載している場合があります。

### (2) 使用する記号

ファイルの説明は次の表に示す記号および構文要素を使用して記述します。

表 1-6 ファイルの説明で使用している記号

記号	意味
	横に並べられた複数の項目に対する項目間の区切りを示し、「または」を意味します。 (例) A   B A または B を指定することを示します。
{ }	この記号で囲まれている複数の項目のうちから一つを選択することを示します。項目が横に並べられ、記号   で区切られている場合は、そのうちの一つを選択します。 (例) {A   B   C} A, B または C のどれかを指定することを示します。
[ ]	この記号で囲まれている項目は省略してもよいことを示します。複数の項目が横に並べて記述されている場合には、すべてを省略するか、記号 { } と同じくどれか一つを選択します。 (例 1) [A] 「何も指定しない」か「A を指定する」ことを示します。 (例 2) [B   C]

## 1 ファイルの概要

記号	意味
[ ]	「何も指定しない」か「BまたはCを指定する」ことを示します。
…	記述が省略されていることを示します。 (例) ABC… ABCの後ろに記述があり、その記述が省略されていることを示します。
< >	この記号で囲まれている項目は、該当する要素やファイルなどを指定することを示します。 (例 1) <プロパティ> プロパティを記述します。またはプロパティが表示されます。 (例 2) <ファイル名> ファイル名を指定します。
…	この記号の直前に示す記号を繰り返し、複数個指定できることを示します。 (例) <プロパティ>… プロパティは複数個、繰り返して指定できます。

注 すべての半角文字を使用してください。

## 1.3 ファイル編集時の注意事項

---

Windows Server 2012, Windows Server 2008, Windows 8, Windows 7, または Windows Vista でファイルを編集する場合の注意事項を次に示します。なお、システムドライブを C ドライブとして説明します。

### 定義ファイルを更新する場合

アプリケーションサーバが提供する定義ファイルは、管理者特権で更新する必要があります。管理者特権のないユーザが定義ファイルを更新しても、C:\Program Files 以下のディレクトリにある定義ファイルは更新されません。管理者特権のないユーザが更新したファイルは、次に示すディレクトリ以下に保存されます。

C:\Users\<ユーザ名>\AppData\Local\VirtualStore

なお、アプリケーションサーバは管理者特権で起動されるため、管理者特権のないユーザが更新した定義ファイルの内容は無視されます。

### Unicode の補助文字を使用する場合

Windows Server 2012, Windows Server 2008, Windows 8, Windows 7, または Windows Vista で追加された文字には Unicode の補助文字が含まれます。アプリケーションサーバで使用する定義ファイルに、Unicode の補助文字は使用できません。

Unicode の補助文字を使用できない定義の例を示します。

- EAR, WAR, JAR, EJB-JAR, サブレット, JSP, クラス, メソッド, 引数, および変数の名称
- DD 内の各種定義
- そのほか, 各種定義ファイルの設定値

また、実行時の文字エンコーディングに変換できない文字をログファイルへ出力した場合、正しく出力されません。



# 2

## J2EE サーバで使用するファイル

この章では、J2EE サーバで使用するファイルの形式、格納先、機能、指定できるキーなどについて説明します。

## 2.1 J2EE サーバで使用するファイルの一覧

J2EE サーバで使用するファイルの一覧を、次の表に示します。

表 2-1 J2EE サーバで使用するファイルの一覧

ファイル名	分類	概要	参照先
hitachi_web.properties	J2EE サーバ用 Web アプリケーションプロパティファイル	Web アプリケーション個別のプロパティを指定します。	2.2
usrconf.cfg	J2EE サーバ用オプション定義ファイル	J2EE サーバを実行する JavaVM の起動オプションを指定します。	2.3
usrconf.properties	J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル	J2EE サーバを実行する JavaVM のシステムプロパティを指定します。	2.4
server.policy	J2EE サーバ用セキュリティポリシーファイル	J2EE サーバを実行する JavaVM のセキュリティポリシーを指定します。	2.5
criticalList.cfg	保護区リストファイル	保護区としてメソッドキャンセルを禁止するクラスを設定します。	2.6



## 2.2 hitachi\_web.properties (J2EE サーバ用 Web アプリケーションプロパティファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 値にスペースを含むパスを指定する場合、パスをダブルクォーテーション (") で囲む必要はありません。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
<Web アプリケーションの WEB-INF ディレクトリ>\*
- UNIX の場合  
<Web アプリケーションの WEB-INF ディレクトリ>/

### (3) 機能

Web アプリケーション個別のプロパティを指定します。なお、J2EE サーバ全体でのシステムプロパティ設定は、usrconf.properties で指定します。usrconf.properties と WEB-INF/hitachi\_web.properties で同じキーが指定されている場合は、WEB-INF/hitachi\_web.properties の値が優先されます。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次に示します。このキーに不正な値を指定した場合、動作は保証されません。

キー名称	内容	デフォルト値
webservice.jsp.keepgenerated	JSP ファイルをコンパイルした結果得られた Java ファイルを保持するかどうかを指定します。 true を指定した場合： Java ファイルを保持します。 false を指定した場合： Java ファイルを保持しません。	false
webservice.xml.validate	タグライブラリ・ディスクリプタ (TLD ファイル) が DTD で記述されたスキーマに沿って書かれているかチェックするかどうかを指定します。 true を指定した場合： チェックします。 false を指定した場合： チェックをしません。	true

(5) 記述例

```
webserver.jsp.keepgenerated=false  
webserver.xml.validate=true
```

## 2.3 usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 値の後ろには、空白やコメントなどの文字列は追加できません。追加した場合、不正な値と解釈されます。

(例) <キー名称> = <値> #<コメント>

- 実行時の文字エンコーディングと異なる文字エンコーディングでは記述できません。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>%CC%server%usrconf%ejb%<サーバ名称>%
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/CC/server/usrconf/ejb/<サーバ名称>/

### (3) 機能

J2EE サーバを実行する JavaVM の起動オプションを指定します。

J2EE サーバの稼働中に、このファイルの内容を変更した場合、変更した内容は次に J2EE サーバを起動したときに反映されます。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次の表に示します。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

表 2-2 usrconf.cfg に指定できるキーとデフォルト値 (J2EE サーバ)

キー名称	内容	デフォルト	VR
add.jvm.arg	<p>指定されたオプションを使って JavaVM を起動します。</p> <p>なお、システムプロパティを指定したい場合は、"-D"を利用しないで、usrconf.properties ファイルに指定します。</p> <p>複数のオプションを指定する場合、同じキー名称を使用して、次のように複数回指定してください。</p> <p>(指定例)</p>	<p>デフォルト値については [2.3(5) J2EE サーバでの JavaVM オプションのデフォルト値] を参照してください。</p>	—

キー名称	内容	デフォルト	VR
add.jvm.arg	<p>add.jvm.arg= -Xms256m add.jvm.arg= -Xmx512m</p> <p>なお、次のように複数のオプションを指定できません。指定をした場合、JavaVMの初期化に失敗します。 (指定例) add.jvm.arg=-Xms256m -Xmx512m</p> <p>add.jvm.argで指定できるJavaVMのオプションについては、「16.1 JavaVM拡張オプションの一覧」および「16.5 Application Serverで指定できるJava HotSpot VMのオプション」を参照してください。</p>	デフォルト値については「2.3(5) J2EEサーバでのJavaVMオプションのデフォルト値」を参照してください。	—
add.class.path	<p>コンテナ拡張ライブラリ用のクラスパスを指定します。</p> <p>なお、スペースを含むパスを指定する場合、パスをダブルクォーテーション (") で囲む必要はありません。</p> <p>また、ダブルクォーテーションでの指定は有効となりません。</p>	なし	—
add.library.path*1	JNI用の共有ライブラリを指定します。コンテナ拡張ライブラリがJNIを利用する場合だけ指定します。	なし	—
cpp.library.version	<p>プロセス内で使用するlibstdc++ライブラリのバージョンを指定します。なお、このキーは、Linux用です。</p> <p>指定できる文字列を次に示します。</p> <p>6: libstdc++.so.6ライブラリを使用します。</p> <p>09-00以降では、設定できるのは「6」だけです。</p> <p>このキーはRed Hat Enterprise Linux以外のプラットフォームで設定しても無効です。</p>	6	—
ejb.public.directory	<p>指定されたディレクトリをJ2EEサーバの作業ディレクトリとしてJ2EEサーバを開始します。J2EEサーバのカレントディレクトリを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Windowsの場合 &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;%ejb%&lt;サーバ名称&gt;</li> <li>UNIXの場合 &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;/ejb/&lt;サーバ名称&gt;</li> </ul> <p>ディレクトリ名称は絶対パスで指定してください。指定できる文字は、半角英数字、アンダースコア「_」、またはハイフン「-」です。パス長は、アプリケーションサーバの作業ディレクトリの見積もり式で算出した範囲内で指定できま</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windowsの場合 &lt;Application Serverのインストールディレクトリ&gt;%CC%server%public</li> <li>UNIXの場合 /opt/Cosminexus/CC/server/public</li> </ul>	—

キー名称	内容	デフォルト	VR
ejb.public.directory	<p>す。J2EE サーバの作業ディレクトリについては、マニュアル「アプリケーションサーバ システム構築・運用ガイド」の「付録 C.1 J2EE サーバの作業ディレクトリ」を参照してください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合            &lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt;%CC%server¥public</li> <li>UNIX の場合            /opt/Cosminexus/CC/server/public</li> </ul>	—
ejb.server.corefilenum (UNIX 用)	<p>J2EE サーバ再起動時に残す core ファイルの数を 0~16 の整数で指定します。なお、このキーは、UNIX 用です。</p> <p>次の対象 core ファイルのうち、作成日時が新しいものから指定した数のファイルを残し、それ以外のファイルは削除されます。通常は J2EE サーバダウン時に出力する core ファイル数の 1 を指定します。</p> <p>対象 core ファイル            &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;/ejb/&lt;サーバ名称&gt;/core*</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>再起動時にすべての core ファイルを削除する場合は、0 を指定します。</li> <li>手動による運用または Management Server を使用する場合は、1 以上を指定します。</li> </ul> <p>対象 core ファイルのうち、上書き、または削除される可能性のある core ファイルについては再起動時にリネームされます。</p> <p>Linux (プロセス ID 付きの設定) の場合            core.&lt;core 生成プロセス ID&gt; →            core.&lt;core 生成プロセス ID&gt;.&lt;core ファイル作成日時&gt;</p> <p>上記以外の場合            core → core.&lt;core ファイル作成日時&gt;</p> <p>&lt;core ファイル作成日時&gt;の形式は、            yymmddHHMMSS です。</p> <p>なお、core ファイルのリネーム、または削除に失敗した場合はメッセージ KDJE40047-E を出力し、J2EE サーバ起動処理を中止して異常終了します。</p> <p>また、次のことに注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>対象 core ファイルと同じ名称のファイルを作成した場合はユーザが作成したファイルが削除されます。</li> <li>core ファイルの削除は J2EE サーバ再起動時に処理されるため、再起動するまでは定義数以上の core ファイルが出力されている場合があります。</li> </ul>	1	—

## 2 J2EE サーバで使用するファイル

キー名称	内容	デフォルト	VR
ejb.server.corefilenum (UNIX 用)	<ul style="list-style-type: none"> <li>定義数+n 分の core ファイルが残るためディスク容量に注意してください (n:再起動されるまでに J2EE サーバが出力する core ファイル数)。</li> </ul>	1	—
ejb.server.log.directory	<p>指定されているディレクトリをログファイル※2の出力先として使用します。パス長は、1~200 バイトで指定します。Windows の場合、UNC 名を含むパスは指定できません。UNIX の場合、nfs マウントされたディスク上へのパスは指定できません。</p> <p>このキーを指定する場合、サーバ開始前にログ出力先ディレクトリを作成してください。存在しないディレクトリが指定された場合は、J2EE サーバ開始時に KDJE40024-E のメッセージが出力され、異常終了します。</p> <p>ほかの J2EE サーバや Web コンテナサーバ (互換機能) とログ出力先が、同じディレクトリにならないように注意してください。同じディレクトリを指定した場合、動作は保証されません。</p> <p>なお、このキーを指定して、作業ディレクトリ以外にログを出力する場合、変更先ディレクトリ下のログファイルはサーバをアンセットアップする時に削除されません。ログファイルを削除したい場合には、手動で削除してください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;¥ejb¥&lt;サーバ名称&gt;¥logs</li> <li>UNIX の場合 &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;/ejb/&lt;サーバ名称&gt;/logs</li> </ul>	—
ejb.server.log.mode	<p>ログファイルの出力形態を指定します。指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>6 Version 6 互換モードにします。保守用のログファイルを Version 6 以前と同じディレクトリに出力します。</li> <li>7 Version 7 モードにします。</li> </ul> <p>なお、Version 6 互換モードから Version 7 モード、または Version 7 モードから Version 6 互換モードに変更した場合、保守用のログファイルを各モードの出力先に移動しません。ログファイルの出力モードを変更したあと、出力先変更前の保守用のログファイルは必要に応じて削除してください。※2</p>	7	—
ejb.server.log.stdout.filesize	cjstdout.log ファイルのサイズの上限値を 4096~2147483647 の範囲 (単位: バイト) の整数で指定します。	1048576	—
ejb.server.log.stderr.filesize	cjstderr.log ファイルのサイズの上限値を 4096~2147483647 の範囲 (単位: バイト) の整数で指定します。	1048576	—
jvm.type	使用する JavaVM のタイプを指定します。指定できる値は次のどちらかです。	server	—

キー名称	内容	デフォルト	VR
jvm.type	<ul style="list-style-type: none"> <li>server Java HotSpot Server VM が使用されます。</li> <li>client Java HotSpot Client VM が使用されます。</li> </ul> <p>J2EE サーバ、または J2EE アプリケーションの開始および停止の頻度が高い開発環境などでは、"client"を指定することで性能が向上する場合があります。指定値に誤りがあった場合は、"server"→"client"の順で JavaVM を検索します。なお、このとき KDJE40020-W メッセージが出力されます。</p>	server	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

注※1

cjstartsv コマンドまたは cjstartweb コマンドの実行時に add.library.path と OS の環境変数 (LIBPATH など) が両方設定されていた場合、add.library.path の設定が優先されます。

注※2

次に示すログファイルが変更の対象になります。

ログの種類	内容	ログ取得ディレクトリおよびログファイル名
メッセージログ	稼働ログ	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%cjmessage?.log</li> <li>UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/cjmessage?.log</li> </ul>
	ログ稼働ログ	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%cjlogger.log</li> <li>UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/cjlogger.log</li> </ul>
ユーザログ	Web サブレットログ	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%web_servlet?.log</li> <li>UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/web_servlet?.log</li> </ul>
	ユーザ出力ログ	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%user_out?.log</li> <li>UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/user_out?.log</li> </ul>
	ユーザエラーログ	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%user_err?.log</li> <li>UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/user_err?.log</li> </ul>
	JavaVM の保守情報および GC のログ	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%javalog???.log</li> </ul>

ログの種類	内容	ログ取得ディレクトリおよびログファイル名
ユーザログ	JavaVMの保守情報およびGCのログ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• UNIXの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/javalog??.log</li> </ul>
イベントログ	JavaVMの明示管理ヒープ機能イベントログ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windowsの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%ehjavalog??.log</li> <li>• UNIXの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/ehjavalog??.log</li> </ul>
例外ログ	障害発生時の例外情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windowsの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%cjexception?.log</li> <li>• UNIXの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/cjexception?.log</li> </ul>
保守用ログ	保守情報	Version 6 互換モード <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windowsの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%cjmaintenance?.log</li> <li>• UNIXの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/cjmaintenance?.log</li> </ul> Version 7 モード <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windowsの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%CC%cjmaintenance?.log</li> <li>• UNIXの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/CC/maintenance/cjmaintenance?.log</li> </ul>
	コンソールメッセージ	Version 6 互換モード <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windowsの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%cjconsole?.log</li> <li>• UNIXの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/cjconsole?.log</li> </ul> Version 7 モード <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windowsの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%CC%cjconsole?.log</li> <li>• UNIXの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/CC/maintenance/cjconsole?.log</li> </ul>
	EJB コンテナの保守情報	Version 6 互換モード <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windowsの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%cjejbcontainer?.log</li> <li>• UNIXの場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/cjejbcontainer?.log</li> </ul> Version 7 モード <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windowsの場合</li> </ul>



ログの種類	内容	ログ取得ディレクトリおよびログファイル名
保守用ログ	EJB コンテナの保守情報	<p>&lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%CC%maintenance %cjejbcontainer?.log</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/CC/maintenance/ cjejbcontainer?.log</li> </ul>
	Web コンテナの保守情報	<p>Version 6 互換モード</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%cjwebcontainer?.log</li> <li>• UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/cjwebcontainer?.log</li> </ul> <p>Version 7 モード</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%CC%maintenance %cjwebcontainer?.log</li> <li>• UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/CC/maintenance/ cjwebcontainer?.log</li> </ul>
	起動プロセス標準出力情報	<p>Version 6 互換モード</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%cjstdout.log</li> <li>• UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/cjstdout.log</li> </ul> <p>Version 7 モード</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%CC%maintenance %cjstdout.log</li> <li>• UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/CC/maintenance/ cjstdout.log</li> </ul>
	起動プロセス標準出力情報バックアップ	<p>Version 6 互換モード</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%cjstdout_save.log</li> <li>• UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/cjstdout_save.log</li> </ul> <p>Version 7 モード</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%CC%maintenance %cjstdout_save.log</li> <li>• UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/CC/maintenance/ cjstdout_save.log</li> </ul>

ログの種類	内容	ログ取得ディレクトリおよびログファイル名
保守用ログ	起動プロセス標準エラー情報	Version 6 互換モード <ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%cjstderr.log</li> <li>UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/cjstderr.log</li> </ul> Version 7 モード <ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%CC%maintenance %cjstderr.log</li> <li>UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/CC/maintenance/cjstderr.log</li> </ul>
	起動プロセス標準エラー情報バックアップ	Version 6 互換モード <ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%cjstderr_save.log</li> <li>UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/cjstderr_save.log</li> </ul> Version 7 モード <ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%CC%maintenance %cjstderr_save.log</li> <li>UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/CC/maintenance/cjstderr_save.log</li> </ul>
	終了プロセス情報	Version 6 互換モード <ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%cj_shutdown?.log</li> <li>UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/cj_shutdown?.log</li> </ul> Version 7 モード <ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%CC%maintenance %cj_shutdown?.log</li> <li>UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/CC/maintenance/cj_shutdown?.log</li> </ul>
リソースアダプタの保守用ログ	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;%connectors%リソースアダプタの表示名?.log</li> <li>UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/connectors/リソースアダプタの表示名?.log</li> </ul>

ログの種類	内容	ログ取得ディレクトリおよびログファイル名
TPBroker のトレース	TPBroker のトレース情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;¥TPB 配下</li> <li>UNIX の場合 &lt;ejb.server.log.directory キーの値&gt;/TPB 配下</li> </ul>

(凡例)

– : 該当しない。

## (5) J2EE サーバでの JavaVM オプションのデフォルト値

J2EE サーバでの Java VM オプションのデフォルト値を示します。

- -Xms256m
- -Xmx512m
- -XX:MetaspaceSize=128m
- -XX:MaxMetaspaceSize=128m
- -XX:SurvivorRatio=8
- -XX:HitachiJavaLog:<ejb.server.log.directory>
- -XX:HitachiJavaLogFileSize=4m
- -XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace
- -XX:-HitachiThreadDumpToStdout
- -XX:+HitachiOutOfMemoryAbort
- -XX:+HitachiJavaClassLibTrace
- -XX:HitachiJavaClassLibTraceLineSize =1024
- -XX:+HitachiLocalsSimpleFormat
- -XX:+HitachiTrueTypeInLocals
- -XX:+HitachiLocalsInStackTrace
- -XX:+HitachiVerboseGC
- -XX:+HitachiVerboseGCPrintCause
- -XX:+HitachiOutputMilliTime
- -XX:+HitachiUseExplicitMemory
- -XX:HitachiExplicitHeapMaxSize=64m
- -XX:HitachiExplicitMemoryLogLevel:normal
- -XX:HitachiExplicitMemoryJavaLog:<ejb.server.log.directory>
- -XX:HitachiExplicitMemoryJavaLogFileSize=4m
- -XX:-HitachiAutoExplicitMemory
- -XX:+HitachiExplicitMemoryAutoReclaim
- -XX:-HitachiExplicitMemoryCompatibleToV8
- -XX:+HitachiOutOfMemoryHandling

## (6) 記述例

- Windows の場合

```
# java vm options
add.jvm.arg=-Xms256m
add.jvm.arg=-Xmx512m
add.jvm.arg=-XX:MetaspaceSize=128m
add.jvm.arg=-XX:MaxMetaspaceSize=128m
add.jvm.arg=-XX:+HitachiVerboseGC
add.jvm.arg=-XX:HitachiVerboseGCIntervalTime=600
```

```
# ejb public directory
ejb.public.directory=c:%workdir
```

```
# ejb.server.log.directory
ejb.server.log.directory=c:%logdir%servername
```

- UNIX の場合

```
# java vm options
add.jvm.arg=-Xms256m
add.jvm.arg=-Xmx512m
add.jvm.arg=-XX:MetaspaceSize=128m
add.jvm.arg=-XX:MaxMetaspaceSize=128m
add.jvm.arg=-XX:+HitachiVerboseGC
add.jvm.arg=-XX:HitachiVerboseGCIntervalTime=600
```

```
# ejb public directory
ejb.public.directory=/opt/workdir
```

```
# ejb.server.log.directory
ejb.server.log.directory=/CC logs/server/servername
```

```
# ejb.server.corefilenum
ejb.server.corefilenum=3
```

## (7) 注意事項

- コマンドプロンプトで設定されている CLASSPATH 環境変数は、J2EE サーバには渡りませんが、その他の環境変数 (PATH など) は渡ります。
- OS のロケールと異なる文字エンコーディングで記述しないでください。また、OS のロケールに UTF-8 を使用する場合、BOM 付き UTF-8 では記述しないでください。
- usrconf.properties と usrconf.cfg の add.jvm.arg の -D に同じキーが指定されている場合は、usrconf.properties の値が優先されます。
- usrconf.cfg で設定されていない JavaVM のオプションは JavaVM のデフォルト値になります。
- 次に示すプロパティは "-D" で指定できません。
  - java.endorsed.dirs
  - java.security.policy
  - java.class.path
  - java.library.path
- add.class.path キーに指定されている値の中に、<cosminexus.home>タグを使用してコンテナ拡張ライブラリ用の JAR を指定しているものがあります。これは Application Server のインストール先を意味しているため、add.class.path キーの記述内容を変更する必要はありません。なお、add.class.path キーにコンテナ拡張ライブラリを追加する場合は、インストールおよびアンインストール時の動作を保証できなくなるおそれがあるので、<cosminexus.home>タグを使用しないでください。

## 2.4 usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル)

---

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 値の後ろには、空白やコメントなどの文字列は追加できません。追加した場合、不正な値と解釈されます。

(例) <キー名称> = <値> #<コメント>

- 記載する文字は Java の仕様に従って、ISO 8859-1 文字エンコーディングを使用してください。
- Java の仕様に従わない形式の場合、J2EE サーバの起動に失敗することがあります。

(例) 不正な Unicode エスケープシーケンスを含む場合 ("¥u"に続く文字列が適切な Unicode 16 進数の値ではない)。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>¥CC¥server¥usrconf¥ejb¥<サーバ名称>¥
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/CC/server/usrconf/ejb/<サーバ名称>/

### (3) 機能

J2EE サーバを実行する JavaVM のシステムプロパティを指定します。

usrconf.properties と usrconf.cfg の add.jvm.arg の -D に同じキーが指定されている場合は、usrconf.properties の値が優先されます。

J2EE サーバの稼働中に、このファイルの内容を変更した場合、変更した内容は次に J2EE サーバを起動したときに反映されます。

### (4) J2EE サーバの予約済みキー

J2EE サーバでは、次に示す接頭子で始まるキーを内部的に利用します。このため、アプリケーションでこれらの接頭子で始まるキーを利用してはいけません。

- ejbserver.\*
- webserver.\*
- applclient.\*

- j2eeserver.\*

### (5) J2EE サーバのカスタマイズ用キー

J2EE サーバでは、次に示すシステムプロパティのキーに値を設定することで、J2EE サーバの動作をカスタマイズできます。

ここでは、キーを次の分類に分けて説明します。

- cosminexus.jpa から始まるキー
- ejbserver.application から始まるキー
- ejbserver.client から始まるキー
- ejbserver.commonj から始まるキー
- ejbserver.compiler から始まるキー
- ejbserver.connectionpool から始まるキー
- ejbserver.connector から始まるキー
- ejbserver.container から始まるキー
- ejbserver.ctm から始まるキー
- ejbserver.deploy から始まるキー
- ejbserver.distributedtx から始まるキー
- ejbserver.DynamicStubLoading から始まるキー
- ejbserver.ejb から始まるキー
- ejbserver.ext から始まるキー
- ejbserver.http から始まるキー
- ejbserver.instrumentation から始まるキー
- ejbserver.jca から始まるキー
- ejbserver.jndi から始まるキー
- ejbserver.jpa から始まるキー
- ejbserver.jta から始まるキー
- ejbserver.logger から始まるキー
- ejbserver.management から始まるキー
- ejbserver.manager から始まるキー
- ejbserver.naming から始まるキー
- ejbserver.rmi から始まるキー
- ejbserver.security から始まるキー
- ejbserver.server から始まるキー
- ejbserver.stateful から始まるキー
- ejbserver.stdoutlog から始まるキー
- ejbserver.watch から始まるキー
- ejbserver.webj2ee から始まるキー

- https から始まるキー
- java から始まるキー
- vbj から始まるキー
- vbroker から始まるキー
- webserver.application から始まるキー
- webserver.connector から始まるキー
- webserver.container から始まるキー
- webserver.context から始まるキー
- webserver.dbsfo から始まるキー
- webserver.eadssfo から始まるキー
- webserver.errorpage から始まるキー
- webserver.http から始まるキー
- webserver.jsp から始まるキー
- webserver.logger から始まるキー
- webserver.servlet から始まるキー
- webserver.session から始まるキー
- webserver.static から始まるキー
- webserver.work から始まるキー
- webserver.xml から始まるキー

(a) cosminexus.jpa から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
cosminexus.jpa.logging.level.operation.<category>	J2EE サーバの JPA 機能を利用する場合に、JPA プロバイダ稼働ログのカテゴリごとのログレベルを指定します。カテゴリ名、およびログレベルは大文字と小文字を区別します。 未設定の場合、稼働ログには出力されません。セキュリティや性能面に対する影響があるため、出力レベルの設定には注意してください。 Off を指定した場合： JPA プロバイダ稼働ログに対するログを出力しません。 Information を指定した場合： JPA プロバイダ稼働ログに JPA の稼働情報を出力します。 Detail を指定した場合： JPA プロバイダ稼働ログに JPA の詳細な稼働情報および、Information で出力される情報を出力します。	Off	08-00
cosminexus.jpa.exception.logging.sql <sup>※</sup>	JPA プロバイダが SQL 文を実行してデータベースから例外を受け取った場合に、例外メッセージに例外が発生した原因となった SQL 文を含むかどうかを指定します。	Off	08-00

キー名称	内容	省略値	VR
cosminexus.jpa.exception.logging.sql <sup>*</sup>	<p>Off を指定した場合：</p> <p>JPA プロバイダが実行した SQL 文と?パラメタ（プレースホルダ）への指定値を例外メッセージに含みません。</p> <p>Information を指定した場合：</p> <p>JPA プロバイダが実行した SQL 文を例外メッセージに含みます。</p> <p>Detail を指定した場合：</p> <p>JPA プロバイダが実行した SQL 文と?パラメタ（プレースホルダ）への指定値を例外メッセージに含みます。</p>	Off	08-00

## 注※

このプロパティで指定した値は、例外ログの出力内容にも反映されます。

Information, および Detail の場合は、SQL 文や?パラメタ（プレースホルダ）の内容が例外ログにも出力されるため、セキュリティに注意してください。開発時や保守のために必要に応じて値を指定してください。

バイナリデータを扱う場合、?パラメタ（プレースホルダ）にはバイナリオブジェクトのハッシュ値が出力されません。

SQL 発行の準備が完了する以前に通信異常によるコネクション取得エラーなどが発生した場合、?パラメタ（プレースホルダ）値を取得できない場合があります。

## (b) ejbserver.application から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.application.InitTermProcessClasses	<p>コンテナ拡張ライブラリを使用する場合に、サーバ起動・停止フックのクラス名を指定します。複数のクラスを指定する場合は、","で区切って指定してください。なお、","とクラス名の間には、空白を入れなくてください。J2EE サーバ起動時には、指定した順で、サーバ起動・停止フック機能のサーバ起動フックメソッドが呼び出されます。J2EE サーバ終了時には、指定した逆順にサーバ起動・停止フック機能のサーバ停止フックメソッドが呼び出されます。</p>	なし	—
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称> <sup>*</sup> 1.appname	<p>AppName のフィールドに出力するデフォルトのアプリケーション名を 0~16 バイトの半角文字セットで指定します。プログラム上で、AppName のフィールドの値が指定されていない場合、このプロパティの値が AppName のフィールドに出力されます。</p> <p>使用できる文字セットの定義を満たしているが、値の長さが制限を超えている場合、警告メッセージが出力されて、制限の長さより大きい部分のデータが切り捨てられ、制限の長さまでのデータが使用されます。</p> <p>"null"という文字列が指定された場合は、空文字列""の指定として扱われ、appname フィールドには何も表示されません。また、このプロパティから appname に"null"という文字列の出力指定はできません。</p>	user_app	—
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称> <sup>*</sup> 1.count	<p>ログファイルの面数を次の範囲の整数で指定します。</p> <p>CJMessageFileHandler を使用した場合： 2~16</p>	2	—



キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.application.serlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>*1.count	<p>CJMPMessageFileHandler を使用した場合： 2~64</p> <p>ここで指定した面数まで増加し、指定した面数に到達すると、次の番号は初めの"1"に戻ります。</p> <p>同名の旧ログファイル、または同名のユーザファイルがあった場合は上書きされます。</p>	2	—
ejbserver.application.serlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>*1.encoding	<p>出力する文字列のエンコーディングを 0~1024 バイトで指定します。省略した場合は、デフォルトのエンコーディングが使用されます。</p> <p>指定された値が範囲を超えた場合、および"null"という文字列が指定された場合は、encoding の指定なし (encoding にはデフォルト値を使用する) と扱われます。null という名称のエンコードは使用できません。</p> <p>JavaVM 上で java.nio.charset.Charset.isSupported(String charsetName) が true となる文字セットで指定してください。エンコーディングに指定できる文字セットと指定する文字列については、Java 標準 API の java.nio.charset.Charset などの仕様に従ってください。次に指定値の例を示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• US-ASCII : 7 ビット ASCII (ISO646-US/Unicode charset の Basic Latin ブロック)</li> <li>• ISO-8859-1 : ISO Latin Alphabet No. 1 (ISO-LATIN-1)</li> <li>• UTF-8 : 8 ビット UCS 変換形式</li> <li>• SJIS : Shift-JIS, 日本語</li> <li>• EUC_JP : JIS X 0201, 0208, 0212, EUC エンコーディング, 日本語</li> <li>• MS932 : Windows 日本語 (Windows 用の指定値)</li> <li>• JIS0201 : JIS X 0201, 日本語</li> <li>• JIS0208 : JIS X 0208, 日本語</li> <li>• JIS0212 : JIS X 0212, 日本語</li> </ul> <p>なお、性能劣化の原因となるため、不要なエンコーディング処理をしないでください。</p>	null	—
ejbserver.application.serlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>*1.filter	<p>使用するフィルタを、パッケージ名を含むフルネームで指定します。値は 0~4096 バイトのクラス文字セットで指定してください。</p> <p>指定されたハンドラ名称のハンドラは、ここで指定されたフィルタを Reflection 機能で作成して利用します。</p> <p>指定された値が範囲を超えた場合、フィルタの指定はなしとみなされます。また、"null"という文字列が指定された場合は、フィルタなし (フィルタは使わない) として扱われます。</p> <p>"null"という名前のフィルタを作成しないでください。</p>	null	—
ejbserver.application.serlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>*1.formatter	<p>使用するフォーマッタを、パッケージ名を含むフルネームで指定します。値は 0~4096 バイトのクラス文字セットで指定してください。</p> <p>指定できる値を次に示します。</p>	null	—

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>*1.formatter	<p>CJMessageFileHandler クラスに接続する場合：</p> <p>com.hitachi.software.ejb.application.userlog.CJSimpleFormatter か、またはユーザ作成の Formatter クラスを指定します。</p> <p>Java2-1.4 標準の SimpleFormatter や XMLFormatter を CJMessageFileHandler に指定しないでください（セパレータが改行であるため、メッセージレコードが 1 行で表示されません）。また、ユーザ作成の Formatter クラスを指定する場合は、改行などの制御コードを含まないメッセージを作成するフォーマッタを作成する必要があります。</p> <p>Java2-1.4 の Handler クラスに接続する場合：</p> <p>特に決まりはありません。</p> <p>指定されたハンドラ名称のハンドラは、ここで指定されたフォーマッタを Reflection 機能で作成して利用します。</p> <p>指定された値が範囲を超えた場合、フォーマッタの指定はなしとみなされます。また、"null"という文字列が指定された場合は、フォーマッタなし（フォーマッタは使わない）として扱われます。"null"という名前のフォーマッタを作成しないでください。</p>	null	—
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>*1.level	<p>ログの取得レベルの上限を半角英字で指定します。指定は、Java の定数で定義されている値で指定します。大文字と小文字は区別されます。</p> <p>ここで指定した値よりも低いレベルのメッセージだけがログへ出力されます。指定できるレベルを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• OFF：ロギングをオフにするために使われる特殊なレベル</li> <li>• SEVERE：重大な障害を示すメッセージレベル</li> <li>• WARNING：潜在的な問題を示すメッセージレベル</li> <li>• INFO：メッセージを情報として提供するメッセージレベル</li> <li>• CONFIG：静的な構成メッセージのメッセージレベル</li> <li>• FINE：トレース情報を提供するメッセージレベル</li> <li>• FINER：トレースレベル 2（FINE より高い）</li> <li>• FINEST：トレースレベル 3（FINER より高い）</li> <li>• ALL：すべてのメッセージのログを取得</li> </ul> <p>OFF と ALL は特殊なレベルです。例えば、ロガーとハンドラに対して OFF を指定すると、ログのレベルに関係なくログは一切取得されません。ALL を指定すると、すべてのレベルのログが出力されます。</p>	SEVERE	—
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>*1.limit	<p>ログファイルの容量（単位：バイト）を次の範囲の整数で指定します。</p> <p>CJMessageFileHandler を使用した場合：</p> <p>8192～2147483647</p> <p>CJMPMessageFileHandler を使用した場合：</p> <p>8192～16777216</p> <p>ここで指定した容量まで増加し、指定した容量に到達すると次のログファイルに切り替わります。</p>	1048576	—

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.application.serlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>*1.limit	<p>トレース共通ライブラリの場合、容量チェックがメッセージの書き込み前であるため、実際の最大容量が設定値より、最大で約 4200 バイト超えることがあります (1 バイトでも指定した容量に満たなければ、メッセージが書き込まれてしまうため)。</p> <p>例えば、このキーに 8192 を指定した場合で out1.log の現在使用中の領域が 8000 バイト、空き容量が 192 バイトのときに 4000 バイトのメッセージが出力されると、メッセージは out1.log に出力されます。このため、out1.log は上限値を超えたサイズになります。</p>	1048576	—
ejbserver.application.serlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>*1.msgid	<p>MsgID のフィールドに出力するデフォルトのメッセージ ID を 0~21 バイトの半角文字セットで指定します。プログラム上で、MsgID の値が指定されていない場合、このプロパティの値が MsgID のフィールドに出力されます。</p> <p>使用できる文字セットの定義を満たしているが、値の長さが制限を超えている場合、警告メッセージが出力されて、制限の長さより大きい部分のデータが切り捨てられ、制限の長さまでのデータが使用されます。</p> <p>"null"という文字列が指定された場合は、空文字列""の指定として扱われ、msgid フィールドには何も表示されません。また、このプロパティから msgid に"null"という文字列の出力指定はできません。</p>	0001	—
ejbserver.application.serlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>*1.path	<p>ログファイル名のプリフィックスを 1~255 バイトの範囲で指定します。パスは、相対パスで指定します*2。なお、パス名の終端に、半角数値を指定しないでください。</p> <p>ここで指定したプリフィックスに"xx (1~16 の整数) .log"が付加された値が、トレース情報ファイルの名称になります。</p> <p>パスに指定された半角英文字の大文字と小文字は区別されません。また、パス値の長さは、次の A+B+C 値の合計が値の範囲に収まるよう指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• A (Windows の場合) : &lt;ログ出力先ルート (ejb.server.log.directory の値)&gt;¥user¥ (デフォルトは&lt;製品の作業ディレクトリ&gt;¥ejb¥&lt;J2EE サーバ名&gt;¥logs¥user¥)</li> <li>• A (UNIX の場合) : &lt;ログ出力先ルート (ejb.server.log.directory の値)&gt;/user/ (デフォルトは&lt;製品の作業ディレクトリ&gt;/ejb/&lt;J2EE サーバ名&gt;/logs/user/)</li> <li>• B : ユーザの指定したプリフィックスの長さ</li> <li>• C : "xx.log"の 6 文字</li> </ul> <p>このほか、パスを指定するときには次の点に注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Properties ファイルには native の 2 バイトコードなどは使用できないため、native2ascii などを利用して Unicode の文字列を取得して指定してください。</li> <li>• 絶対パスで指定しないでください。また、相対パスの".. ¥" (UNIX の場合, "../") は使用しないでください。</li> <li>• パスに日本語文字などを含む場合は、その文字を処理できるロケール設定がされている環境下で JavaVM が動作している必要があります。</li> <li>• パスをほかのハンドラと同一に設定することはできません。そのような設定にした場合、そのハンドラは作成されません。</li> </ul>	user_log	—

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.application.serlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称> >*1.separator	<p>CJSimpleFormatter を利用して、1 文でメッセージを出力するためのセパレータを 0~1024 バイトの半角文字セットで指定します。セパレータは文字列で指定できます。</p> <p>使用できる文字セットの定義を満たしているが、値の長さが制限を超えている場合、警告メッセージが出力されて、制限の長さより大きい部分のデータが切り捨てられ、制限の長さまでのデータが使用されます。</p> <p>トレース共通ライブラリ形式の出力の場合、メッセージ内に次の制御文字を指定しないでください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合: "%r", "%n" など</li> <li>• UNIX の場合: "/t", "/n" など</li> </ul> <p>これらの文字を指定した場合、出力内容がずれたり、1 レコードが 1 行で出力されなくなったりします。"null" という文字列が指定された場合は、空文字列""の指定として扱われます。そのため、セパレータに"null"という文字列は使用できません。また、このプロパティからセパレータに"null"という文字列の出力指定はできません。</p>	ストローク []	—
ejbserver.application.serlog.loggers	<p>使用するロガーの名称を宣言するプロパティです。0~65535 バイトで指定します。";"で区切ることで、複数のロガー名称を指定できます。また、ロガー名称のすぐ後ろに";"で区切ってそのロガーで使用する地域対応化用リソースバンドル名称を指定できます。</p> <p>なお、ロガー名称には、java.net または javax.swing のように"."で区切られ、サブシステムのパッケージ名またはクラス名に基づいた名前が推奨されています。*3 また、ロガーの名称には","や";"を使用しないでください。</p> <p>複数のクラス名を定義しており、指定された値の長さが範囲を超えた場合は、長さの範囲内に収まり、値の規則を満たしたクラス名だけが設定されます。</p> <p>ここで宣言された名称のロガーは、CJLogManager クラスのロガー構築対象として処理されます (J2EE サーバの起動時にロガーが構築されます)。</p> <p>ここで指定しなかったロガーについては、自動生成されないため、コード上でロガーを作成してください。</p>	なし	—
ejbserver.application.serlog.Logger.<ロガー名称>*3.filter	<p>ロガーで使用するフィルタを、パッケージ名を含むフルネームで指定するプロパティです。値は 0~4096 バイトのクラス文字セットで指定してください。</p> <p>指定されたロガー名称のロガーは、ここで指定されたフィルタを Reflection 機能で作成してメッセージの取捨選択に利用します。</p> <p>指定された値が範囲を超えた場合、フィルタの指定はなしとみなされます。また、"null"という文字列が指定された場合は、フィルタなし (フィルタを使わない) として扱われます。"null"という名前のフィルタを作成しないでください。</p>	null	—
ejbserver.application.serlog.Logger.<ロガー名称>*3.handlers	<p>指定のロガー名称に対して、ハンドラクラスを接続 (addHandler(Handler)) するためのプロパティです。ハンドラクラスは、Reflection 機能で作成するため、0~65535 バイトのパッケージ名を含むフルネームで指定してください。";"で区切ることで複数のハンドラクラスを指定できます。</p> <p>指定できるハンドラクラスを次に示します。</p>	なし	—

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>* <sup>3</sup> .handlers	<ul style="list-style-type: none"> <li>com.hitachi.software.ejb.application.userlog.CJMessageFileHandler</li> <li>com.hitachi.software.ejb.application.userlog.CJMPMessageFileHandler</li> <li>java.util.logging.ConsoleHandler</li> <li>java.util.logging.FileHandler</li> <li>java.util.logging.SocketHandler</li> <li>java.util.logging.StreamHandler</li> <li>java.util.logging.MemoryHandler</li> </ul> <p>ユーザが独自に作成した Handler クラスのパッケージ名を含むフルネーム</p> <p>CJLogHandler 系の場合は、ハンドラクラス名の後ろに";"で区切ってハンドラ名称を指定することで、指定のハンドラ名称の設定で初期化してハンドラクラスを作成し、ロガーに接続します。</p> <p>Java2-1.4 標準の Logging クラスについては、";"で区切ってハンドラ名称を指定しても無効になります。Java2-1.4 標準の Logging クラスの設定方法については、該当するクラスの仕様に従ってください。</p> <p>ハンドラ名称は、半角英数字で始まる 1~1024 バイトのクラス文字セットで指定してください。</p> <p>複数のクラス名を定義しており、指定された値の長さが範囲を超えた場合は、長さの範囲内に収まり、値の規則を満たしたクラス名だけが設定されます。</p> <p>ejbserver.application.userlog.loggers でロガー名称が指定されていない場合、ロガーは作成されません。</p>	なし	—
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>* <sup>3</sup> .level	<p>ロガーのログ出力レベルまたは"null"を半角英字で指定します。大文字と小文字は区別されます。ログメッセージを出力するためには、ロガーのログ出力レベルと出力に利用するハンドラの出力レベルをクリアする必要があります。指定できる値を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.&lt;ハンドラ名称&gt;.level に指定できる値</li> <li>"null"</li> </ul> <p>"null"という名称が指定された場合、ロガーのレベルを null で初期化します。ロガーのレベルが"null"で初期化された場合、そのロガーは親ロガーのレベルを継承します。</p>	SEVERE	—
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>* <sup>3</sup> .useParentHandlers	<p>ログレコードを受け取ったロガーから、親ロガーの接続しているハンドラへログレコードを伝播させるかどうかを半角英字で指定します。伝播させる場合は true を、伝播させない場合は false を指定してください。</p> <p>このロガーを通過したログの出力レベルは、親ロガーの接続しているハンドラのレベルにだけ影響されます（親ロガーのレベルが OFF、親ロガーが接続しているハンドラのレベルが ALL の場合、すべてのメッセージは表示されます）。</p>	true	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

## 注

ユーザログ機能についてのプロパティ定義 (ejbserver.application.InitTermProcessClasses キー以外) で使用するそれぞれの文字セットで指定できる値は、次のとおりです。

- **クラス文字セット (クラス名の定義に使用する文字セット)**  
半角英数字 (a~z, A~Z, 0~9), ピリオド (.), ドル記号 (\$) およびアンダースコア (\_)
- **半角文字セット**  
半角英数字 (a~z, A~Z, 0~9), ピリオド (.), ドル記号 (\$), アンダースコア (\_), ハイフン (-), ストローク (|), コロン (:), アンパサンド (&), 単価記号 (@), シャープ (#) およびパーセント (%)

指定した値が、使用できる文字セットの条件を満たさない、または指定できる値の範囲を満たさない不正な値の場合は、警告メッセージが出力され、その時点で有効なデフォルトの値が採用されます。その時点で有効なデフォルトの値とは、<ハンドラ名称>=default の場合のそのキーの値、または「デフォルト値」欄のデフォルト値を指します。

## 注※1

ハンドラ名称はプロパティの値を区別するために使用します。半角英数字で始まる 1~1024 バイトのクラス文字セットで指定してください。"default"を指定した場合は、すべての CJLogHandler が共通のデフォルト値として認識するプロパティを示します。

## 注※2

出力先の起点は、次の規則に従ってください。

<ejb.server.log.directoryの値>%user, または<ejb.server.log.directoryの値>/user

ejb.server.log.directory の値は、ejb.server.log.directory の仕様に従ってください。J2EE サーバの ejb.server.log.directory のデフォルトの値を次に示します。

- Windows の場合  
<製品の作業ディレクトリ>%ejb%<J2EE サーバ名>%user%<ユーザ指定値>
- UNIX の場合  
<製品の作業ディレクトリ>/ejb/<J2EE サーバ名>/user/<ユーザ指定値>

## 注※3

ロガー名称は、Logger.getLogger(<ロガー名称>)でロガーのインスタンスを取得するときに指定する"."付きの名称で、あらかじめ、ejbserver.application.userlog.loggers プロパティで宣言する必要があります。ロガー名称については、java.util.logging.Logger の仕様に従ってください。

半角英数字で始まる 1~1024 バイトのクラス文字セットで指定してください。"default"を指定した場合は、すべての CJLogHandler が共通のデフォルト値として認識するプロパティを示します。

なお、ロガー名称で識別されるプロパティは、ユーザログ機能のロガークラスの初期化で使用されません。

ロガー名称の最後を.handlers で終了させた場合、ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.handlers のプロパティ指定時に紛らわしくなるため、ロガー名称は".handlers"で終了させないことを推奨します。

## (c).ejbserver.client から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.client.ctm.RequestPriority	CTM 内のキューに滞留したリクエストを引き出す時のプライオリティ（優先順位）を 1~8 の整数で指定します。指定値が小さいほどプライオリティは高くなります。指定値が誤っている場合、または省略した場合は、4 が設定されます。	4	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

#### (d) ejbserver.commonj から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.commonj.WorkManager.non_daemon_work_threads	WorkManager で短寿命 Work の実行を行うスレッドプールの最大プールサイズを指定します 1~65535 の整数で指定します。	10	08-50

#### (e) ejbserver.compiler から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.compiler.jvm.maxHeapSize	J2EE アプリケーション開始時に起動される javac コマンドのヒープサイズの最大値を指定します。 指定する値は、java コマンドの-Xmx、-Xms オプションが受け付ける形式で指定してください。それ以外の形式で指定された場合の動作は保証されません。 次のように指定してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 2048~4294966272 の値を指定してください。ただし、ejbserver.compiler.jvm.minHeapSize に指定した以上の値にしてください。</li> <li>• キロバイト単位で指定する場合は、文字「k」または「K」を付けて指定してください。</li> <li>• メガバイト単位で指定する場合は、文字「m」または「M」を付けて指定してください。</li> </ul> このプロパティはアプリケーションサーバ 09-00-01 以前で有効です。アプリケーションサーバ 09-00-02 以降は指定しても無視されます。	256m	—
ejbserver.compiler.jvm.minHeapSize	J2EE アプリケーション開始時に起動される javac コマンドのヒープサイズの初期値を指定します。 指定する値は、java コマンドの-Xmx、-Xms オプションが受け付ける形式で指定してください。それ以外の形式で指定された場合の動作は保証されません。 次のように指定してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 1024~-Xmx 指定値の値を指定してください。</li> </ul>	32m	—



キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.compiler.jvm.minHeapSize	<ul style="list-style-type: none"> <li>キロバイト単位で指定するには、文字「k」または「K」を付けて指定してください。</li> <li>メガバイト単位で指定するには、文字「m」または「M」を付けて指定してください。</li> </ul> <p>このプロパティはアプリケーションサーバ 09-00-01 以前で有効です。アプリケーションサーバ 09-00-02 以降は指定しても無視されます。</p>	32m	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

#### (f) ejbserver.connectionpool から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.connectionpool.applicationAuthentication.disabled	<p>コンテナ管理のサインオンの最適化機能を有効にするかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合：</p> <p>コンテナ管理のサインオンが最適化された動作となります。ただし、これを指定した場合、アプリケーション管理によるサインオンは使用できません。</p> <p>false を指定した場合：</p> <p>コンテナ管理のサインオンは最適化されません。コンテナ管理によるサインオン、およびアプリケーション管理によるサインオンを使用できます。</p> <p>なお、DB Connector 以外のリソースアダプタを使用する場合には、このプロパティに true を指定することはできません。</p>	false	—	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「3.14.8 DB Connector のコンテナ管理でのサインオンの最適化」
ejbserver.connectionpool.association.enabled	<p>1.4 モードの場合に、コネクションアソシエーション機能を有効にするかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合：</p> <p>コネクションアソシエーション機能を有効にします。</p> <p>false を指定した場合：</p> <p>コネクションアソシエーション機能を無効にします。</p>	false	—	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「3.14 パフォーマンスチューニングのための機能」
ejbserver.connectionpool.association.enabledDespiteUnshareableSetting	<p>サブレットや Enterprise Bean の標準 DD の&lt;res-sharing-scope&gt;に Unshareable を</p>	false	—	



キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.connectionpool.association.enabledDespiteUnshareableSetting	<p>指定している場合に、コネクションアソシエーションを行うかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合：</p> <p>サーブレットや Enterprise Bean の標準 DD の&lt;res-sharing-scope&gt;に Unshareable を指定している場合でも、コネクションアソシエーションを行います。ただし、ejbserver.connectionpool.association.enabled=true が指定されている必要があります。</p> <p>false を指定した場合：</p> <p>サーブレットや Enterprise Bean の標準 DD の&lt;res-sharing-scope&gt;に Unshareable を指定している場合、コネクションアソシエーションを行いません。</p> <p>アプリケーションサーバのバージョンが 06-50 より前のバージョンで動作実績のあるアプリケーションを、アプリケーションサーバ 06-50 以降で動作させる場合、次のことに注意してください。</p> <p>アプリケーションが、&lt;res-sharing-scope&gt;に Unshareable を指定している場合でも、コネクションアソシエーション機能が動作することを期待している場合（具体的には、ローカルトランザクション内でコネクションを2本以上取得する場合など）には、true を指定する必要があります。</p> <p>なお、アプリケーションを新規に開発する場合には、このキーは指定しないでください。</p>	false	—	
ejbserver.connectionpool.sharingOutsideTransactionScope.enabled	<p>1.4 モードの場合に、アプリケーションサーバが管理するトランザクションの外で複数回コネクションの取得を行ったときのコネクションシェアリングの動作を指定します。なお、リソースアダプタのトランザクションサポートレベルに NoTransaction を指定した場合は、コネクションシェアリングは行われません。</p> <p>true を指定した場合：</p> <p>コネクションシェアリングを行います。なお、true を指定した場合でも、サーブレットや Enterprise Bean の標準 DD の&lt;res-sharing-scope&gt;に Unshareable を指定している場合には、コネクションシェアリングは行いません。</p> <p>false を指定した場合：</p> <p>アプリケーションサーバが管理するトランザクションの外ではコネクションシェアリングを行いません。</p>	false	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.connectionpool.validation.timeout	コネクション障害検知機能のタイムアウト時間およびコネクション数調節機能によるコネクション削除処理のタイムアウト時間(単位:秒)を1~2147483647の整数で指定します。	5	08-00	

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

空欄 : 関連情報はありません。

### (g) `ejbserver.connector` から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.connector.logwriter.filenum	リソースアダプタ用ログファイルの面数を1~16の整数で指定します。	4	—
ejbserver.connector.logwriter.filesize	リソースアダプタ用ログファイルのサイズ(単位:バイト)を4096~2147483647の整数で指定します。	2097152	—
ejbserver.connector.statementpool.clear.backcompat	ステートメントプリーング機能で、ステートメントを再利用する際にステートメントを初期化する内容を指定します。 true を指定した場合： 次の内容が初期化されます。 ・パラメタ ・SQL コマンドリスト ・Statement オブジェクトに関して報告されたすべての警告 false を指定した場合： 次の内容が初期化されます。 ・パラメタ ・SQL コマンドリスト ・Statement オブジェクトに関して報告されたすべての警告 ・データベースから取り出す必要がある行数 ・文字またはバイナリの値を格納する ResultSet 列に対する最大バイト数の制限値 ・ResultSet オブジェクトが含むことのできる最大行数の制限値 ・クエリタイムアウト	true	08-70

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

## (h) ejbserver.container から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.container.audit_trail.enabled	データベース監査証跡連携機能を有効にするかどうかを指定します。  true を指定した場合： データベース監査証跡連携機能を有効にします。  false を指定した場合： データベース監査証跡連携機能を無効にします。	false	—	
ejbserver.container.bmp.backcompatible	Entity Bean(BMP)のロック制御の動作を指定します。  true を指定した場合： EJB コンテナでロックを制御します。  false を指定した場合： EJB コンテナでロックを制御しません。  なお、このプロパティの変更を有効にするには、開始中の J2EE アプリケーションをいったん削除し、再作成または再インポートしてください。	false	—	
ejbserver.container.ejhome.sessionbean.reconnect.enabled	EJB ホームオブジェクトへの再接続機能を有効にするかどうかを指定します。  true を指定した場合： EJB ホームオブジェクトへの再接続機能を有効にします。  true を指定した場合は、必ず vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port プロパティにポート番号を指定してください。  false を指定した場合： EJB ホームオブジェクトへの再接続機能を無効にします。	false	—	
ejbserver.container.passivate.scan.interval	Enterprise Bean のタイムアウトやプールの状態を監視するスレッドの起動間隔を、0～2147483 の整数（単位：秒）で指定します。0 を指定した場合は監視しません。  Enterprise Bean のタイムアウトやプールの状態を監視するスレッドはここに指定した間隔で、次の処理を実行します。	0	—	「機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「2.11 EJB コンテナでのタイムアウトの設定」

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.container.passivate.sc an.interval	<ul style="list-style-type: none"> <li>タイムアウト時間を経過した Stateful Session Bean や Entity Bean のインスタンスを削除します。</li> <li>Stateless Session Bean や Entity Bean のプールを対象に最小値を超えてプーリングされているインスタンスを徐々に削減します。</li> </ul>	0	—	「機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「2.11 EJB コンテナでのタイムアウトの設定」
ejbserver.container.rebindpolicy	<p>EJB メソッドの呼び出し時に通信障害が発生した場合の、EJB クライアント側での接続の再接続動作とリクエストの再送動作を指定します。</p> <p>VB_TRANSPARENT :</p> <p>    接続を再接続してリクエストを再送します。</p> <p>NO_RECONNECT :</p> <p>    接続を再接続しないで、リクエストを再送しません。</p> <p>    この場合、通信障害によって接続が切断されると、再接続されないため、そのオブジェクトリファレンスは再利用できなくなります。</p>	VB_TRA NSPARE NT	—	「機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「2.13 EJB のリモートインタフェースの呼び出し」
ejbserver.container.security.disabled	<p>Enterprise Bean のアクセス制御機能を有効にするかどうかを指定します。Enterprise Bean のアクセス制御機能の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「2.10 Enterprise Bean へのアクセス制御」を参照してください。</p> <p>このプロパティは server.policy (J2EE サーバ用セキュリティポリシーファイル) で指定するセキュリティポリシーとは関係ありません。</p> <p>true を指定した場合 :</p> <p>    Enterprise Bean のアクセス制御機能が無効になります。この場合、EJB レベルおよびアプリケーションレベルでのセキュリティ定義が無効となり、EJB 実行時のメソッド実行権限のチェックが一切行われません。</p> <p>false を指定した場合 :</p> <p>    Enterprise Bean のアクセス制御機能が有効になります。</p>	false	—	
ejbserver.container.remove.sc an.interval	<p>活性化状態の Stateful Session Bean のタイムアウトを監視するスレッドの起動間隔を、0~153722867280912 の整数 (単位:分) で指定します。</p> <p>0 を指定した場合または 0 未満を指定した場合、監視しません。</p>	5	—	「機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「2.11.2 Stateful Session Bean

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.container.remove.sc an.interval	153722867280912 より大きい値を指定した 場合、153722867280912 が設定されま す。 数値以外を指定した場合、デフォルト値が設 定されます。	5	—	のタイムアウ ト」

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

空欄 : 関連情報ははありません。

#### (i).ejbserver.ctm から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.ctm.ActivateTimeO ut	CTM 機能を使用する場合に必要なプロパ ティです。CTM 機能を使用する J2EE アプ リケーションのデプロイ時、J2EE サーバはス ケジュールキューを活性化します。このとき の待ち時間 (単位: 秒) を 0~2147483647 で指定します。0 を指定した場合、無限に待 ち続け、省略した場合は、180 (秒) が設定 されます。	180	—	
ejbserver.ctm.CTMDomain	CTM 機能を使用する場合に必要なプロパ ティです。J2EE サーバが属する CTM ドメ イン名称を 1~31 文字の英数字またはアン ダースコア ( ) で指定します。"CTM" また は "ctm" で始まる CTM ドメイン名称は指定 できません。省略した場合、 "CTMDOMAIN" が設定されます。	CTMDO MAIN	—	「機能解説 拡張 編」の「3.3.5 CTM ドメイン と CTM ドメイ ンマネージャ」
ejbserver.ctm.CTMID	CTM 機能を使用する場合に必要なプロパ ティです。J2EE サーバを制御する CTM デーモンの CTM 識別子を 1~31 文字の英 数字、アンダースコア ( ) またはピリオド (.) で指定します。ただし、IP アドレスで識 別子を指定する場合にだけピリオドが使用で きます。 "CTM" または "ctm" で始まる CTM 識別子は 指定できません。また CTM ドメイン名称と 同じ名称を指定できません。省略した場合、 IP アドレスが設定されます。	<IP アド レス>	—	
ejbserver.ctm.CTMMYHost	CTM 機能を使用する場合に必要なプロパ ティです。マルチホームまたは IP アドレス を引き継ぐ系切り替え環境で CTM が使用す	<hostna me コマン ドで取得	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.ctm.CTMMMyHost	<p>るホスト名称または IP アドレスを 1~64 文字の文字列で指定します。</p> <p>省略した場合は、hostname コマンドで取得できるホスト名称が設定されます。</p> <p>ejbserver.ctm.CTMID プロパティを省略してこのプロパティを指定した場合、デフォルトの CTM 識別子は、このプロパティで指定した IP アドレスになります。</p>	されるホスト名称>	—	
ejbserver.ctm.DeactivateTimeOut	<p>CTM 機能を使用する J2EE アプリケーションのアンデプロイ時、J2EE サーバはスケジュールキューを非活性化します。このときの待ち時間(実行中のリクエストの完了待ち)を 0~2147483647 (単位:秒) で指定します。0 を指定した場合、無限に待ち続け、省略した場合は、180 (秒) が設定されます。</p> <p>CTM 経由で仕掛かり中のリクエストがある状態でアプリケーションを停止しようとした場合に、強制停止できなくなるため、0 は指定しないでください。</p>	180	—	
ejbserver.ctm.enabled	<p>CTM 機能の使用の有無を指定します。</p> <p>true を指定した場合：</p> <p>CTM 機能を使用します。CTM は、構成ソフトウェアに Component Transaction Monitor を含む製品だけで利用できます。利用できる製品については、マニュアル「アプリケーションサーバ &amp; BPM/ESB 基盤 概説」の「2.2.1 製品と構成ソフトウェアの対応」を参照してください。</p> <p>J2EE サーバ起動時 CTM との接続の確立および初期化をします。これに成功すると CTM 機能が使用できる状態で J2EE サーバが起動します。</p> <p>CTM との接続および初期化に失敗した場合、J2EE サーバの起動に失敗します。</p> <p>false を指定した場合：</p> <p>CTM 機能を使用しません。</p> <p>J2EE サーバ起動時に、CTM との接続の確立および初期化をしないため、J2EE サーバは CTM を使用できる状態で起動しません。この状態で CTM を使用するアプリケーションのデプロイはできません。CTM 機能が使用できない状態でも J2EE サーバを起動したい場合は、false を指定します。</p> <p>このプロパティの指定を省略した状態で、07-50 以前のバージョンからバージョンアップインストールした場合、バージョンアップ前のアプリケーションサーバのエディ</p>	<p>09-00 以降のバージョン： false</p> <p>09-00 より前のバージョンの場合： true</p>	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.ctm.enabled	シオンによって、手動で次の値を設定する必要があります。 Application Server Enterprise の場合： true そのほかのエディションの場合： false	09-00 以降のバージョン： false 09-00 より前のバージョンの場合： true	—	
ejbserver.ctm.QueueLength	CTM 機能を使用する J2EE アプリケーションのデプロイ時、J2EE サーバは CTM キューを生成します。このときの CTM キューの長さを、1~32767 で指定します。省略した場合、CTM デーモンで保持している CTM キューの生成時の長さ (-CTMMaxRequestCount オプションで指定した長さ) が有効となります。CTM キューを共有する場合、CTM キューはすでに作成されているため、指定された値ではなく作成済みの長さが有効となります。	なし	—	
ejbserver.ctm.useGlobalJNDI	CTM 機能を使用する構成で、Enterprise Bean に別名を指定しなかった場合に使用する、デフォルトのルックアップ名称を切り替えます。 true の場合： java:global/~から始まる Portable Global JNDI 名を使用します。 false の場合： HITACHI_EJB/~から始まる Global JNDI 名を使用します。	false	09-00	

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

(j) **ejbserver.deploy** から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.deploy.annotations.l oad_libjars.enabled	J2EE アプリケーションのデプロイで、ライブラリ JAR のアノテーションの情報を読み込むかどうかを指定します。	true	09-5 0	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「12.3 ロード対象のクラスとロード時に必

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.deploy.annotations.l oad_libjars.enabled	<p>true を指定した場合： ライブラリ JAR のアノテーションの情報を 読み込みます。</p> <p>false を指定した場合： ライブラリ JAR のアノテーションの情報を 読み込みません。</p> <p>このキーは、ライブラリ JAR のアノテーショ ンの情報が不要であり、クラス数が膨大なラ イブラリ JAR を含むアプリケーションに対 してインポート時のメモリ使用量の制限に有 効です。</p> <p>注意事項：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ライブラリ JAR のアノテーションの 情報を読み込まない場合、ライブラリ JAR に含まれるクラスのアノテー ションの情報は使用できません。例え ば、Enterprise-Bean アプリケーショ ン内のクラスで、ライブラリ JAR に含 まれるクラスをインターセプタに指定 した場合、呼び出し先クラスのアノ テーションの情報 (@PostConstruct など) が無効になります。そのため、 呼び出し先クラスはインターセプタと して動作しません。</li> <li>このプロパティの設定前に読み込んだ アノテーションの情報はインポート時 に保存されるため、変更後はアプリ ケーションの停止、削除および再イン ポートが必要です。</li> </ul>	true	09-5 0	要なクラスパ ス]
ejbserver.deploy.app.stopforci bly.disabled	<p>J2EE アプリケーションの強制停止を無効に するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： J2EE アプリケーションの強制停止を無効 にします。</p> <p>false を指定した場合： J2EE アプリケーションの強制停止を有効 にします。</p>	false	—	
ejbserver.deploy.annotations.l oad_check.enabled	<p>アノテーションの情報取得のためのクラス ロードで例外が発生した場合に無視するかど うかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： エラーとなり処理を中断します。</p> <p>false を指定した場合： 例外ログを取得し処理を続行します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新規イ ンス トール 時 false</li> <li>08-00 より前 からの 更新イ ンス</li> </ul>	08-0 0	「機能解説 基 本・開発編(コン テナ共通機能)」 の「12.3 ロー ド対象のクラス とロード時に必 要なクラスパ ス」



キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.deploy.annotations.load_check.enabled	<p>アノテーションの情報取得のためのクラスロードで例外が発生した場合に無視するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： エラーとなり処理を中断します。</p> <p>false を指定した場合： 例外ログを取得し処理を続行します。</p>	<p>トール時 true</p>	08-00	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「12.3 ロード対象のクラスとロード時に必要なクラスパス」
ejbserver.deploy.context.check_interval	<p>アプリケーション構成ファイルの更新を検知する間隔を、0~2147483647 の整数 (単位: 秒) で指定します。</p> <p>0 や 1~2147483647 以外の数字を指定した場合は、自動リロードしません。コマンドリロードだけ受け付けます。</p>	0	—	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「13.8.6 J2EE アプリケーションの更新検知インターバル」
ejbserver.deploy.context.reload_scope	<p>app : EJB アプリケーション, サブレット, JSP でリロード機能を使用します。</p> <p>jsp : JSP でリロード機能を使用します。</p> <p>none : リロード機能を使用しません。</p> <p>web : サブレット, JSP でリロード機能を使用します。</p> <p>上記以外 : デフォルト値が設定されます。</p>	app	—	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「13.8.2 リロードの適用範囲」
ejbserver.deploy.context.update.interval	<p>アプリケーション構成ファイルの更新を待つ時間を、0~2147483647 の整数 (単位: 秒) で指定します。</p> <p>0 や 1~2147483647 以外の数字を指定した場合は、待ち時間なしとなります。</p>	0	—	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「13.8.7 J2EE アプリケーションの構成ファイル更新用インターバル」
ejbserver.deploy.exclusive.lockAliveInterval	<p>サーバ処理終了後、コマンドから送信された次のレスポンスを受け取るまでの最大待ち時間を、1~2147483647 の整数 (単位: 秒) で指定します。</p> <p>このプロパティの影響を受けるコマンドは、J2EE サーバで使用するコマンドのうち、更新、参照、特権に分類されているコマンドです。更新、参照、特権に分類されるコマンドは、J2EE サーバで使用するコマンドの一覧で確認できます。J2EE サーバで使用するコマンドについては、マニュアル「アプリケーション</p>	60	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.deploy.exclusive.lockAliveInterval	<p>ンサーバリファレンス コマンド編」の「2. J2EE サーバで使用するコマンド」を参照してください。</p> <p>不正な値を指定した場合は、警告メッセージを出力して、デフォルト値が設定されます。指定した時間以上コマンド側からの通信がない場合、サーバはコマンドが不正終了したと見なし、コマンド排他を強制解除します。待ち時間とは、コマンドがサーバ間を往復する時間とコマンドの処理時間の合計時間です。</p>	60	—	
ejbserver.deploy.resourcefile.scramble.enabled	<p>作業ディレクトリ以下に展開される DataSource, JavaMail, ResourceAdapter に関する DD ファイルをスクランブルするかどうかを設定します。なお、このプロパティの値を切り替えて J2EE サーバを起動してもすでにインポート・デプロイされているリソースの DD ファイルは定義情報の更新を行わないかぎり状態は変化しません。</p> <p>true を指定した場合： スクランブル化します。</p> <p>false を指定した場合： スクランブル化しません。</p>	false	—	
ejbserver.deploy.session.work.directory	<p>Web アプリケーションのセッション情報 ファイルを設定した &lt;ejbserver.deploy.session.work.directory プロパティ値&gt;¥web¥&lt;コンテキストルート名&gt;配下ディレクトリに出力します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt; ¥CC ¥server ¥repository ¥&lt;サーバ名称&gt;</li> <li>UNIX の場合 &lt;Application Server</li> </ul>	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.deploy.session.work.directory	Web アプリケーションのセッション情報ファイルを設定した <ejbserver.deploy.session.work.directoryプロパティ値>*web*<コンテキストルート名>配下ディレクトリに出力します。	のインストールディレクトリ >/CC / server / repository< サーバ 名称>	—	
ejbserver.deploy.stub.generation.scope	スタブなどの通信に必要なクラスを生成する対象範囲を指定します。新規インストール時は ejb, アップグレードインストール時は app を指定します。  ejb : EJB-JAR の DD に指定されているホームインタフェース, コンポーネントインタフェースからスタブなどの通信に必要なクラスを生成します。  app : EJB-JAR, WAR 内の java.rmi.Remote を継承したクラスからスタブなどの通信に必要なクラスを生成します。  上記以外 : サーバを起動時に KDJE42257-W のメッセージが出力され, デフォルト値が設定されます。	ejb	—	

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

空欄 : 関連情報はありません。

## (k) ejbserver.distributedtx から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.distributedtx.ots.recoverFailMessageCount	未決着トランザクションの走査をリトライする時に, 何回リトライを実行したら KFCB40139-W メッセージを出力するかを指定します。0~2147483647 の整数で指定します。	0	08-7 0	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.distributedtx.ots.recorderFailMessageCount	<p>J2EE サーバを開始する際のトランザクションリカバリ実行時、またはトランザクション決着処理中の通信障害発生時に、アプリケーションサーバはトランザクションに参加しているリソースマネージャに対して、未決着トランザクションの走査を実行します。走査が失敗した場合、アプリケーションサーバは成功するまで無限にリトライを続けますが、リソースアダプタ単位で実行される未決着トランザクションの走査が連続してこのプロパティで指定した回数分失敗したときには、KFCB40139-W メッセージを出力します。</p> <p>なお、未決着トランザクションの走査は、5 秒ごとにリトライされます。</p> <p>0 を指定した場合、未決着トランザクションの走査に何度失敗しても KFCB40139-W メッセージは出力されません。1 を指定した場合、走査が 1 回失敗したら KFCB40139-W メッセージが出力されます (2 回目以降の失敗時に KFCB40139-W メッセージは出力されません。ただし、一度走査に成功するか、または J2EE サーバが停止すると、回数はリセットされます。この場合は、次に 1 回失敗した時に KFCB40139-W メッセージが出力されます)。</p> <p>このプロパティに 1 以上を指定すると、参加しているリソースマネージャに接続できない状態となったことを早期に知ることができます。しかし、アプリケーションサーバを起動したあとでリソースを起動する運用をしている場合、通常の運用でも KFCB40139-W メッセージが出力されることがあります。</p>	0	08-70	
ejbserver.distributedtx.ots.status.directory1 <sup>※1</sup>	<p>インプロセストランザクションサービスのステータスファイルおよび保守資料としてのステータスファイルのバックアップを格納するディレクトリを指定します。パス区切り文字は” / ” を使用してください。相対パスを指定した場合は、次のディレクトリからのパスとなります。</p> <p>Windows の場合：        &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;¥ejb¥&lt;サーバ名称&gt;</p> <p>UNIX の場合：        &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;/ejb/&lt;サーバ名称&gt;</p>	otsstatus	—	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「3.4 トランザクション管理」
ejbserver.distributedtx.ots.status.directory2 <sup>※1</sup>	<p>インプロセストランザクションサービスのステータスファイルを二重化する場合、予備ステータスファイルおよび保守資料としての予備ステータスファイルのバックアップを格納</p>	なし	—	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「3.4 トラン

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.distributedtx.ots.stat us.directory2*1	<p>するディレクトリを指定します。パス区切り文字は” / ” を使用してください。</p> <p>相対パスを指定した場合、J2EE アプリケーションの実行ディレクトリからのパスとなります。</p> <p>同一マシン内で稼働するほかの J2EE サーバや J2EE アプリケーションのプロセスと重ならないように、別のディレクトリを指定する必要があります。</p> <p>このプロパティを指定しない場合、予備ステータスファイルは作成されないため、二重化されません。</p>	なし	—	「ザクソン管理」
ejbserver.distributedtx.recovery.completionCheckOnStoppin g.timeout	<p>グローバルトランザクションを使用する場合の J2EE サーバ停止時、および Transacted Delivery 機能を使用する際の J2EE アプリケーション停止時に行われるトランザクション仕掛かり完了確認のタイムアウトを、-1～2147483647 の数値（単位：秒）で指定します。ただし、次の場合はタイムアウトしません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• -1 を指定した場合</li> <li>• 無効な文字列を指定した場合</li> <li>• このキーを指定しない場合</li> </ul> <p>この場合、J2EE サーバまたはリソースマネージャが認識する未決着トランザクションが存在しないことが確認できるまで、J2EE サーバまたは J2EE アプリケーションの停止は無限に保留されます。</p> <p>0 以上 2147483647 までの整数が指定された場合には、指定された時間（秒）が経過した時点でトランザクション仕掛かり完了確認をタイムアウトし、未決着トランザクションが存在しないことが確認できていなくても、J2EE サーバまたは J2EE アプリケーションを停止します。</p> <p>アプリケーションの運用時には、トランザクションの ACID を保証するために、タイムアウトしない設定にする必要があります。また、アプリケーションの開発時の、トランザクションの ACID よりも利便性を優先する場合には、タイムアウトする設定にできます。</p>	-1（タイムアウトしません）	—	
ejbserver.distributedtx.recovery.port	<p>1.4 モードの場合に、グローバルトランザクションを使用するとき、トランザクションリカバリで使用する固定ポート番号を 1～65535 の整数で指定します。無効な値を指定した場合や、指定したポートがすでに使用されていた場合には、起動が中断されます。</p> <p>なお、ライトトランザクションを有効として起動した場合は、このプロパティは無視されます。</p>	20302	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.distributedtx.rollbackClientTxOnSystemException	<p>システム例外が発生した場合に、呼び出したクライアントトランザクションをロールバックにマークするかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： クライアントトランザクションをロールバックにマークします。</p> <p>false を指定した場合： クライアントトランザクションをロールバックにマークしません。</p> <p>プロパティが指定されていない場合や、無効な値を指定した場合は、false が設定されます。</p> <p>J2EE サーバが 1.4 モードで稼働時に、クライアントのトランザクションを開始して J2EE サーバにあるリモートインタフェースを実装した EJB を、ローカル呼び出し最適化で呼び出し、呼ばれた EJB で新たなトランザクションを開始するかトランザクションを開始しない場合にだけ、このプロパティが有効になります。</p>	false <sup>※2</sup>	—	
ejbserver.distributedtx.XATransaction.enabled	<p>1.4 モードの場合に、グローバルトランザクションを使用するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： ライトトランザクション機能が無効となり、グローバルトランザクションを利用できます。</p> <p>false を指定した場合： ライトトランザクション機能が有効となり、ローカルトランザクションに最適化された環境となります。ただし、グローバルトランザクションは利用できません。</p>	false	—	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「3.4.2 ローカルトランザクションとグローバルトランザクション」

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

空欄 : 関連情報はありません。

注※1

インプロセストランザクションサービスのステータスファイルには、J2EE サーバの識別情報としてホスト名または IP アドレスを取り込んでいます。このため、ホスト名または IP アドレスを変更する場合には、J2EE サーバの停止などの作業が必要です。ステータスファイルの格納ディレクトリに関するホスト名または IP アドレスの変更は、J2EE サーバの動作設定のカスタマイズ時に実行します。J2EE サーバの動作設定のカスタマイズについては、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「3.15.13 実行環境での設定」を参照してください。

注※2

06-50 より前のバージョンから更新インストールした場合、1.4 モードが設定されているとき (ejbserver.server.j2ee.feature プロパティに「1.3standard」または、「1.3advanced」が指定されているとき) は、ユーザ定義に

このプロパティを追加し true に設定します。

06-50 以降のバージョンから更新インストールした場合は、ユーザ定義を変更しません。

## (l) ejbserver.DynamicStubLoading から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.DynamicStubLoading.Enabled	<p>ダイナミッククラスローディングを使用するかどうかを指定します。</p> <p>false を指定した場合：</p> <p>ダイナミッククラスローディングは機能しません。EJB オブジェクトのスタブ、EJBHome オブジェクトのスタブ、またはビジネスインタフェースのリファレンスのスタブをダウンロードして、EJB クライアントのユーザクラスパスに指定してください。</p> <p>true を指定した場合：</p> <p>ダイナミッククラスローディングが機能します。EJB オブジェクトのスタブ、EJBHome オブジェクトのスタブ、またはビジネスインタフェースのリファレンスのスタブを EJB クライアントのユーザクラスパスに指定する必要はありません。</p>	false	—	「機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「3.7.3 ダイナミッククラスローディング」

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

## (m) ejbserver.ejb から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.ejb.cmp20.cmr.use.existing_table	<p>デプロイ時に既存の CMR 表を使用するオプションです。通常はデプロイ時に CMR 表を生成するので既存の CMR 表を使用する必要はありませんが、障害から回復する場合に一時的に指定します。</p> <p>false を指定した場合：</p> <p>デプロイ時にすでに CMR 表がある場合はエラーになります。</p> <p>true を指定した場合：</p> <p>デプロイ時にすでにある CMR 表を使用します。</p>	false	—
ejbserver.ejb.timerservice.maxCallbackThreads	J2EE サーバ全体で、TimerService でのタイムアウトメソッドをコールバックする最大スレッド数を、1~100 の整数で指定します。	1	—
ejbserver.ejb.timerservice.retryCount	TimerService での、タイムアウトメソッドのコールバックをリトライする最大回数を、0~2147483646 の整数で指定します。	1	—

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.ejb.timerservice.retryInterval	TimerService での、タイムアウトメソッドのコールバックをリトライする間隔を、1~604800 の整数（単位：秒）で指定します。	5	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

#### (n) ejbserver.ext から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.ext.method_observation.interval	<p>このプロパティの設定には、次の二つの意味があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• J2EE アプリケーション実行時間監視機能を使用するかどうかを指定します。</li> <li>• 動作中のリクエスト処理がタイムアウトしていないかを監視する時間間隔、タイムアウトしたリクエスト（メソッド）をキャンセルする時間間隔として、0~86400 の整数（単位：秒）を指定します。</li> </ul> <p>0 を指定した場合： J2EE アプリケーション実行時間監視機能を使用しません。また、タイムアウトを監視しません</p> <p>0 以外の有効値を指定した場合： J2EE アプリケーション実行時間監視機能を使用します。また、指定された時間間隔で、タイムアウトとメソッドキャンセルを異なるスレッドで実行します。</p> <p>上記以外の無効な値を指定した場合： デフォルト値が設定されます。</p>	0	—	「機能解説 運用／監視／連携編」の「5. J2EE アプリケーションの運用」

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

#### (o) ejbserver.http から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.http.port	簡易 Web サーバのポート番号を 1~65535 の整数で指定します。すでにほかのアプリケーションで使用または確保されているポート番号は指定できません。また、複数の J2EE サーバで Web サー	8080	—



キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.http.port	バとの通信に使用するポートのポート番号に同じ値を設定しないでください。同一のポート番号を指定した J2EE サーバは cjstartsv コマンドで複数起動できません。	8080	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

#### (p) ejbserver.instrumentation から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.instrumentation.enabled	Management Server と連携するかどうかを指定します。 true を指定した場合： Management Server と連携できます。 false を指定した場合： Management Server と連携できません。	true	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

#### (q) ejbserver.jca から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.jca.adapter.tp1.bind_host	TP1 インバウンド連携機能の通信（受信および送信）で使用する IP アドレスまたはホスト名を指定します。ただし、ホスト名を指定した場合で、アドレスを解決できないときは、省略値を使用します。	システムによって自動選択された有効なローカルアドレス	08-50

#### (r) ejbserver.jndi から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.jndi.cache	ネーミングでのキャッシングをするかどうかを指定します。	on	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.jndi.cache	キャッシングをする場合は on を、キャッシングをしない場合は off を指定します。	on	—	
ejbserver.jndi.cache.interval	ネーミングでのキャッシングをする場合、キャッシュをクリアする間隔（単位：秒）を指定します。 ただし、1～2147483647 以外の値を指定した場合、クリアしません。	0	—	
ejbserver.jndi.cache.interval.clear.option	インターバル経過後のネーミングでのキャッシュ領域に対する動作を決定します。 refresh を指定した場合： キャッシュの全領域をクリアします。 check を指定した場合： 無効なキャッシュをクリアします。CTM を使用している場合、キャッシュされたグローバル CORBA ネーミングサービスの EJB ホームオブジェクトのオブジェクトリファレンスは、アプリケーションが停止していても無効なキャッシュとしてクリアされません。詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「2.8.4 ネーミングでのキャッシングの注意事項」を参照してください。	refresh	—	
ejbserver.jndi.cache.reference	DataSource オブジェクトのキャッシング機能を使用するかどうかを指定します。 on を指定した場合： DataSource オブジェクトのキャッシング機能が有効になり、検索の要求に対して同じインスタンスが返ります。 off または無効な文字列を指定した場合： 通常どおりに動作し、検索ごとに異なるインスタンスが返ります。	off	—	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「3.14.7 DataSource オブジェクトのキャッシング」
ejbserver.jndi.global.enabled	アプリケーション開始時に、ネーミングサービスに対して Portable Global JNDI 名でオブジェクトを登録するかどうかを指定します。 true を指定した場合： Portable Global JNDI 名でオブジェクトを登録します。 false を指定した場合： Portable Global JNDI 名でオブジェクトを登録しません。	true	09-00	
ejbserver.jndi.namingservice.group.<Specify group name>.providerurls	各グループに属するネーミングサービスのルート位置をプロバイダ URL で指定します。	なし	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.jndi.namingservice.group.<Specify group name>.providerurls	<Specify group name>には、ejbserver.jndi.namingservice.group.list 内に指定したグループ名を指定します。 プロバイダ URL は、URL スキーマ "corbaname" を使用して記述します。 指定形式： <プロバイダURL>[;<プロバイダURL>]*	なし	—	
ejbserver.jndi.namingservice.group.list	ラウンドロビン検索をする場合に、検索対象になる論理ネーミングサービスのグループを定義します。指定するグループ名は、英数字 (A~Z, a~z, 0~9) またはアンダースコア ( _ ) で構成される、ejbserver.jndi.namingservice.group.list 内で一意に識別できる名前にします。 指定形式： <Specify group name>[;<Specify group name>]* なお、*は繰り返しを示します。	なし	—	
ejbserver.jndi.request.timeout	ネーミングサービスとの通信タイムアウト時間 (単位: 秒) を 0~86400 の整数で指定します。0 を指定した場合、またはこのプロパティを指定しない場合、タイムアウトしません。また、86400 を超える値を設定した場合、警告メッセージを出力して、タイムアウトしません。	0	—	「機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「2.11.5 RMI-IIOP 通信のタイムアウト」

(凡例)

\* : [] 部分の繰り返しを示します。

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

## (s) ejbserver.jpa から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.jpa.defaultJtaDsName	デフォルトの JTA データソースの参照を指定します。このプロパティは persistence.xml の jta-data-source を指定しなかった場合、または空白文字を指定した場合に使用されます。	なし	08-00
ejbserver.jpa.defaultNonJtaDsName	デフォルトの非 JTA データソースの参照を指定します。このプロパティは persistence.xml の non-jta-data-source を指定しなかった場合または空白文字を指定した場合に使用されます。	なし	08-00
ejbserver.jpa.defaultProviderClassName	デフォルトの JPA プロバイダクラス名を指定するプロパティです。このプロパティは、persistence.xml の provider を指定しなかった場合または空白文字が指定した場合に使用されます。	com.hitachi.software.jp.a.PersistenceProvider	08-00
ejbserver.jpa.disable**	アプリケーションサーバの JPA 機能を使用する場合に指定します。	false	08-20

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.jpa.disable※	true を指定した場合： アプリケーションサーバの JPA 機能は無効になります。 false を指定した場合： アプリケーションサーバの JPA 機能は有効になります。	false	08-20
ejbserver.jpa.overrideJtaDsName	persistence.xml の jta-data-source に指定した値、および ejbserver.jpa.defaultJtaDsName に指定した値より優先して使用する JTA データソースの参照を指定します。	なし	08-00
ejbserver.jpa.overrideNonJtaDsName	persistence.xml の non-jta-data-source に指定した値、および ejbserver.jpa.defaultNonJtaDsName に指定した値より優先して使用する非 JTA データソースの参照を指定します。	なし	08-00
ejbserver.jpa.overrideProvider	persistence.xml の provider に指定した値、および ejbserver.jpa.defaultProviderClassName に指定した値より優先して使用する JPA プロバイダクラス名を指定します。	なし	08-00
ejbserver.jpa.emfprop. <property key>	JPA プロバイダ独自のプロパティのキーを指定します。すべての 永続化ユニットのデプロイ時に、「ejbserver.jpa.emfprop.」プリ フィックスを除去したプロパティが JPA プロバイダに渡されます。	なし	08-00

注※ ejbserver.jpa.disable=true を指定した場合の注意事項

アプリケーションに persistence.xml が含まれる場合、アプリケーションサーバはアプリケーション開始時に persistence.xml を読み込まなくなります。また、アプリケーションのリロード機能を利用している場合、persistence.xml が更新検知の対象ではなくなります。

アプリケーションがアプリケーションサーバの管理する永続化コンテキストまたは永続化ユニットを利用している場合、アプリケーションの開始ができなくなります。

#### (t) ejbserver.jta から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.jta.TransactionManager.defaultTimeOut	J2EE サーバ上で開始されるトランザクションのトランザクションタイムアウトのデフォルト値（単位：秒）を次の範囲で指定します。 1.4 モードの場合： 1～2147483647	180	—	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「3.15.8 トランザクションタイムアウトとステートメントキャンセル」

(凡例)

—：08-00 より前のバージョンを示します。

#### (u) ejbserver.logger から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.logger.channels.definition.DevelopmentLogFile.filename	J2EE サーバの開発調査ログ機能で出力するログファイルの面数を、1～6の整数で指定します。	4	09-00	
ejbserver.logger.channels.definition.DevelopmentLogFile.filesize	J2EE サーバの開発調査ログ機能で出力するログファイルのサイズ（単位：バイト）を、4096～2147483647の整数で指定します。	1048576	09-00	
ejbserver.logger.DevelopmentLogFile.level	J2EE サーバの開発調査ログ機能のログの出力レベルを指定します。 開発時には INFO レベルを設定することを推奨します。開発しているアプリケーションの障害調査のために INFO レベルよりさらに詳細な情報が必要な場合は、より詳細なログを出力するレベルを指定してください。 指定できる値は次のとおりです。出力情報はこの順番で多くなります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• OFF（出力しない）</li> <li>• SEVERE</li> <li>• WARNING</li> <li>• INFO</li> <li>• CONFIG</li> <li>• FINE</li> <li>• FINER</li> <li>• FINEST</li> <li>• ALL（すべて出力）</li> </ul>	OFF	09-00	
ejbserver.logger.channels.definition.<チャンネル名>*.filename	J2EE サーバのログファイルの面数を、1～16の整数で指定します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• チャンネル名が WebAccessLogFile の場合 16</li> <li>• チャンネル名が MaintenanceLogFile または WebServlet LogFile の場合 16</li> </ul>	—	

2 J2EE サーバで使用するファイル

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.logger.channels.define.<チャンネル名>*.filenum	J2EE サーバのログファイルの面数を、1~16の整数で指定します。	eの場合 4 • チャンネル名が上記以外の場合 2	—	
ejbserver.logger.channels.define.<チャンネル名>*.filesize	J2EE サーバのログファイルのサイズ（単位：バイト）を、4096~2147483647の整数で指定します。	• チャンネル名がWebAccessLogFileの場合 2097152 • チャンネル名がMaintenanceLogFileの場合 16777216 • チャンネル名がWebServletLogFileの場合 4194304 • チャンネル名が上記以外の場合 1048576	—	
ejbserver.logger.enabled.*	J2EE サーバのログレベルを指定します。Error, Warning, Information, Debugのうち、一つまたは複数指定します。一つだけ指定した場合は、該当するログレベルのログだけが出力されます。複数指定する場合は、レベル名の文字列の間をコンマ (,) で区	Error	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.logger.enabled.*	切ります。通常はデフォルトのまま利用してください。	Error	—	
ejbserver.logger.systemlog.enabled	J2EE サーバの起動、停止および異常終了に関するメッセージを、イベントログ (UNIX の場合は、syslog) へ出力するかどうかを指定します。  true を指定した場合： イベントログ (UNIX の場合は、syslog) へログを出力します。  false を指定した場合： イベントログ (UNIX の場合は、syslog) へログを出力しません。	true	—	
ejbserver.logger.rotationTime	J2EE サーバのログの出力先ファイルを切り替える時刻を HHMMSS の形式で指定します。  指定がない場合は、ログのファイルサイズで出力先を切り替えます。  なお、このキーを指定した場合も、ファイルサイズの指定は有効になります。このキーに指定した時刻になったとき、または出力先ファイルが指定したファイルサイズになったときに、出力先ファイルが切り替わります。	なし	09-00	「機能解説 保守／移行編」の「3. トラブルシューティングのための準備」
ejbserver.logger.rotationStyle	J2EE サーバのログの出力先ファイル切り替え時のファイル名付与規則を指定します。  SHIFT を指定した場合： シフトモードでファイル名を付与します。 ファイルの合計数は、指定した出力先ファイル面数 + 1 (現在の出力先ファイル分) となります。  WRAP を指定した場合： ラップアラウンドモードでファイル名を付与します。	WRAP	09-00	「機能解説 保守／移行編」の「3. トラブルシューティングのための準備」

## (凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

空欄 : 関連情報はありません。

## 注※

チャンネル名称として次に示す名称を設定できます。

- アプリケーションサーバシステムのログ出力用のチャンネル

MessageLogFile, MaintenanceLogFile, ExceptionLogFile, ConsoleLogFile, EJBContainerLogFile, WebContainerLogFile, ServletLogFile, UserOutLogFile, UserErrLogFile, WebAccessLogFile, JPAOperationLogFile, JPAMaintenanceLogFile

- リソース枯渇監視ログ出力用のチャンネル

MemoryWatchLogFile, FileDescriptorWatchLogFile, ThreadWatchLogFile, ThreaddumpWatchLogFile, RequestQueueWatchLogFile, HttpSessionWatchLogFile, ConnectionPoolWatchLogFile

資料の取得については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 保守／移行編」の「2.3 資料の取得」を参照してください。

## (v) ejbserver.management から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.management.JVM.stats_monitor.FullGCCCount.enabled	FullGC 回数の監視を有効にするかどうかを指定します。 true : 有効にします。 false : 無効にします。	true	—	「機能解説 運用／監視／連携編」の「3.4 イベントの発行機能」
ejbserver.management.JVM.stats_monitor.FullGCCCount.threshold	FullGC 回数の監視でのしきい値となる回数を、1~2147483647 の整数で指定します。	10	—	「機能解説 運用／監視／連携編」の「3.4 イベントの発行機能」
ejbserver.management.JVM.stats_monitor.FullGCCCount.interval	FullGC 回数の監視でのしきい値監視間隔を、1~2147483647 の整数（単位：秒）で指定します。	600	—	「機能解説 運用／監視／連携編」の「3.4 イベントの発行機能」
ejbserver.management.statistics.interval	稼働情報収集間隔を、1~86400 の整数（単位：秒）で指定します。	60	—	「機能解説 運用／監視／連携編」の「3.3 稼働情報ファイルの出力機能」
ejbserver.management.stats_file.base_time	稼働情報ファイルの時間切り替え運用での基点時刻を、ローカルタイムの 1970 年 1 月 1 日 0 時 0 分 0 秒からの増分として 0~1439 の整数（単位：分）で指定します。 ローカルタイムの 1970 年 1 月 1 日 h 時 m 分を基点にする場合には、h×60 + m を指定します。	0	—	
ejbserver.management.stats_file.dir	稼働情報ファイルの出力先ディレクトリを指定します。出力先ディレクトリを変更する場合は、J2EE サーバごとに別々のディレクトリを指定してください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;*ejb *&lt;サーバ名称&gt;*stats</li> </ul>	—	



キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.management.stats_file.dir	稼働情報ファイルの出力先ディレクトリを指定します。出力先ディレクトリを変更する場合は、J2EE サーバごとに別々のディレクトリを指定してください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>UNIX の場合 &lt;製品 の作業 ディレ クトリ &gt;/ejb/ &lt;サー バ名称 &gt;/stats</li> </ul>	—	
ejbserver.management.stats_file.enabled	稼働情報ファイル出力機能を有効にするかどうかを指定します。  true : 有効にします。  false : 無効にします。	true	—	「機能解説 運用／監視／連携編」の「3.3 稼働情報ファイルの出力機能」
ejbserver.management.stats_file.num	稼働情報ファイルの面数を、2～168 の整数で指定します。	7	—	「機能解説 運用／監視／連携編」の「3.3 稼働情報ファイルの出力機能」
ejbserver.management.stats_file.period	稼働情報ファイルの時間切り替え運用での切り替え時間を、1～744 の整数（単位：時）で指定します。	24	—	
ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.whole_waiting_request_count.enabled	Web コンテナ単位の全体実行待ちリクエスト数の監視を有効にするかどうかを指定します。  true : 有効にします。  false : 無効にします。	true	09-00	
ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.whole_waiting_request_count.high_threshold	Web コンテナ単位の全体実行待ちリクエスト数の割合が警告域に達したことを知らせるメッセージを出力する際の割合を 1～100 の整数（単位：%）で指定します。 ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.whole_waiting_request_count.low_threshold 以上の値を指定してください。  Web コンテナ単位の全体実行待ちリクエスト数の割合が指定した値以上になると、メッセージが出力されます。  100 を指定した場合、Web コンテナ単位の全体実行待ちリクエスト数の格納率が 100% になると、アラートメッセージが出力されます。	80	09-00	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.whole_waiting_request_count.low_threshold	<p>Web コンテナ単位の全体実行待ちリクエスト数の割合が正常域に達したことを知らせるメッセージを出力する際の割合を 0~99 の整数 (単位: %) で指定します。</p> <p>ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.whole_waiting_request_count.high_threshold 以下の値を指定してください。</p> <p>Web コンテナ単位の全体実行待ちリクエスト数の割合が指定した値以下になると、メッセージが出力されます。</p> <p>0 を指定した場合、Web コンテナ単位の全体実行待ちリクエスト数の格納率が 0% になると、アラートメッセージが出力されます。</p>	0	09-00	
ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.waiting_request_count.enabled	<p>Web コンテナ単位の実行待ちリクエスト数の監視を有効にするかどうかを指定します。</p> <p>true : 有効にします。</p> <p>false : 無効にします。</p>	true	09-00	
ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.waiting_request_count.high_threshold	<p>Web コンテナ単位の実行待ちリクエスト数の割合が警告域に達したことを知らせるメッセージを出力する際の割合を 1~100 の整数 (単位: %) で指定します。</p> <p>ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.waiting_request_count.low_threshold 以上の値を指定してください。</p> <p>Web コンテナ単位の実行待ちリクエスト数の割合が指定した値以上になると、メッセージが出力されます。</p> <p>100 を指定した場合、Web コンテナ単位の実行待ちリクエスト数の格納率が 100% になると、アラートメッセージが出力されます。</p>	80	09-00	
ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.waiting_request_count.low_threshold	<p>Web コンテナ単位の実行待ちリクエスト数の割合が正常域に達したことを知らせるメッセージを出力する際の割合を 0~99 の整数 (単位: %) で指定します。</p> <p>ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.waiting_request_count.high_threshold 以下の値を指定してください。</p> <p>Web コンテナ単位の実行待ちリクエスト数の割合が指定した値以下になると、メッセージが出力されます。</p> <p>0 を指定した場合、Web コンテナ単位の実行待ちリクエスト数の格納率が 0% になると、アラートメッセージが出力されます。</p>	0	09-00	

(凡例)

- : 08-00 より前のバージョンを示します。

## (w) ejbserver.manager から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.manager.agent.Agent.conf	Management Server との連携に必要な設定をします。なお、この内容は Management Server が J2EE サーバに自動で設定します。Management Server が J2EE サーバに自動で設定する内容については、マニュアル「アプリケーションサーバ システム構築・運用ガイド」の「付録 E.5 Management Server が J2EE サーバに自動で設定する内容」を参照してください。	なし	—
ejbserver.manager.agent.Agent.enabled	Management Server との連携に必要な設定をします。なお、この内容は Management Server が J2EE サーバに自動で設定します。Management Server が J2EE サーバに自動で設定する内容については、マニュアル「アプリケーションサーバ システム構築・運用ガイド」の「付録 E.5 Management Server が J2EE サーバに自動で設定する内容」を参照してください。	false	—
ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.conf	JP1 連携に関する設定ファイルのパスを指定します。	なし	—
ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.enabled	JP1 と連携するかどうかを指定します。	false	—
ejbserver.manager.jp1event.event_server_name	使用する JP1/Base のイベントサービスのイベントサーバ設定ファイル (conf) に指定した、ports パラメタのアドレスと同じ値を指定します。ports パラメタに複数のアドレスを指定している場合は、指定したアドレスのうちのどれか一つを指定します。なお、ports パラメタのアドレスに「0.0.0.0」(デフォルト値)を指定したイベントサービスを使用する場合は、このキーを省略するか、自マシンのホスト名または localhost を指定します。	localhost	—
ejbserver.manager.agent.MEventAgent.conf	Management イベント発行用プロパティファイルを絶対パスで指定します。指定がない場合、または指定したファイルが存在しない場合は Management イベントを発行しません。 Management イベント発行用プロパティファイルの詳細は、「10.12 Management イベント発行用プロパティファイル」を参照してください。	なし	—
ejbserver.manager.agent.MEventAgent.enabled	Management イベント発行機能を有効にするかどうかを指定します。 true を指定した場合： Management イベント発行機能を有効にします。 false を指定した場合： Management イベント発行機能を無効にします。 不正な値が指定された場合は、デフォルト値が設定されます。	false	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

## (x) ejbserver.naming から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.naming.exec.args	<p>CORBA ネーミングサービスを自動起動モード (ejbserver.naming.startupMode=automatic または inprocess) で使用する場合に、起動させる CORBA ネーミングサービスに付加する実行時オプションを指定します。通常はこのプロパティに値を設定する必要はありません。CORBA ネーミングサービス自動起動モード使用時に CORBA ネーミングサービスで障害などが発生した場合に、その調査、対策および回避をするために使用します。</p> <p>実行時オプションは、nameserv のコマンドライン引数に指定する形式と同じ文字列を指定します (各プロパティの先頭に"-J"を付加して、スペース区切りで指定します。なお、実際は一行で指定します)。</p> <p>(指定例)</p> <pre>ejbserver.naming.exec.args=-J-Dvbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.Listener.port=900 -J-Dvbroker.agent.enableLocator=false</pre> <p>ただし、inprocess モードで CORBA ネーミングサービスを使用する場合は、次のプロパティを指定できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• javax.rmi.CORBA.StubClass</li> <li>• javax.rmi.CORBA.UtilClass</li> <li>• javax.rmi.CORBA.PortableRemoteObjectClass</li> <li>• vbroker.serverManager.name</li> <li>• vbroker.orb.enableServerManager</li> <li>• vbroker.agent.enableLocator</li> <li>• vbroker.se.iiop_tp.host</li> </ul> <p>このプロパティ値は、ejbserver.naming.port や vbroker.agent.enableLocator プロパティで指定された値よりも優先されます。ただし、inprocess モードで CORBA ネーミングサービスを起動する場合、ejbserver.naming.exec.args で指定されたプロパティと同一のプロパティがシステムプロパティで設定されているときは、システムプロパティに設定されている情報が優先されます。</p> <p>CORBA ネーミングサービスの実行時に指定できるプロパティについては、マニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) デベロッパーズガイド」、およびマニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) プログラマーズリファレンス」を参照してください。</p>	なし	—
ejbserver.naming.host	<p>J2EE サーバがネーミングサービスとして利用する CORBA ネーミングサービスが起動しているホスト名称または IP アドレスを指定します。</p> <p>ネーミングの切り替え機能を使用する場合、ホスト名称として "localhost" は使用しないでください。CORBA ネーミングサービスが起動しているホスト名称または IP アドレスを指定してください。</p>	localhost	—

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.naming.host	CORBA ネーミングサービスを自動起動モード (ejbserver.naming.startupMode=automatic または inprocess) で使用する場合、デフォルト値 ("localhost"), または J2EE サーバを起動させるホスト名称もしくは IP アドレスを指定してください。	localhost	—
ejbserver.naming.namerooot	CORBA ネーミングサービスを自動起動モード (ejbserver.naming.startupMode=automatic または inprocess) で使用する場合に、起動させる CORBA ネーミングサービスに名称を付加するときに指定します。英数字 (A~Z, a~z, 0~9) またはアンダースコア (_) で構成される文字列で指定します。この名称は、VisiBroker の nsutil コマンドのパラメタなどに使用されます。 省略した場合、VisiBroker で自動的に "NameService" という名称が設定されます。 なお、nsutil コマンドの使用方法、使用条件などについては、マニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) デベロッパーズガイド」を参照してください。	なし	—
ejbserver.naming.port	J2EE サーバがネーミングサービスとして利用する CORBA ネーミングサービスのポート番号を 1~65535 の整数で指定します。ポート番号には、すでにほかのアプリケーションで使用されているポート番号は指定できません。ほかのアプリケーションで使用されているポート番号を指定して J2EE サーバを起動した場合、起動処理が完了しないことがあります。	900	—
ejbserver.naming.protocol	J2EE サーバがネーミングサービスとして利用する CORBA ネーミングサービスへのアクセスプロトコルを指定します。現状、corbaname だけサポートしています。ただし、旧バージョンで使用されていたプロトコル (iioploc または iiopname) でも動作できます。	corbaname	—
ejbserver.naming.startupMode*	CORBA ネーミングサービスの起動モードを指定します。 manual を指定した場合： CORBA ネーミングサービスを手動起動モードで使用する場合に指定します。 J2EE サーバを開始する前に CORBA ネーミングサービスを手動で開始する必要があります。 J2EE サーバ開始時に ejbserver.naming.host, ejbserver.naming.port で指定した CORBA ネーミングサービスを手動で指定します。このプロパティ値が指定された場合には、J2EE サーバ起動処理からは CORBA ネーミングサービスの自動起動をしません。 automatic を指定した場合： CORBA ネーミングサービスを自動起動モードで使用する場合に指定します。 J2EE サーバ開始時に自動で、CORBA ネーミングサービスをアウトプロセスで開始します。 このモードでは、J2EE サーバ終了時に自動で CORBA ネーミングサービスも停止します。ただし、J2EE サーバ開始時に ejbserver.naming.port で指定した CORBA ネーミングサービスが自ホスト上ですでに開始されている場合には自動開始処理	<ul style="list-style-type: none"> <li>新規インストール時 inprocess</li> <li>06-00 より前からの更新インストール時 既存の指定値が設定されます。省略していた場合は、manual が設定されます。</li> </ul>	—

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.naming.startupMode*	<p>をしないで、その CORBA ネーミングサービスを利用します。また、この場合、J2EE サーバ終了時の CORBA ネーミングサービスの自動停止はしません。</p> <p>inprocess を指定した場合： CORBA ネーミングサービスを自動起動モードで使用する場合に指定します。 J2EE サーバ開始時に自動で、CORBA ネーミングサービスをインプロセスで開始するモードです。J2EE サーバ開始時に ejbserver.naming.port で指定した CORBA ネーミングサービスが自ホスト上ですでに開始されている場合には、エラーメッセージを出力して J2EE サーバの起動処理が失敗します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新規インストール時 inprocess</li> <li>06-00 より前からの更新インストール時 既存の指定値が設定されます。省略していた場合は、manual が設定されます。</li> </ul>	—
ejbserver.naming.startupRetryCount	<p>ejbserver.naming.startupWaitTime で指定した CORBA ネーミングサービスの起動待ち時間経過後、CORBA ネーミングサービスがまだ起動していない場合に、ejbserver.naming.startupWaitTime で指定された秒数だけ起動待ちを繰り返す回数を 0~2147483647 の整数で指定します。0 が指定された場合は CORBA ネーミングサービス起動状態チェック処理のリトライをしません。 なお、ejbserver.naming.startupWaitTime に 0 が指定されている場合は、このプロパティ値は無効です。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新規インストール時 9</li> <li>06-00 より前からの更新インストール時 0</li> </ul>	—
ejbserver.naming.startupWaitTime	<p>J2EE サーバ起動時に CORBA ネーミングサービスが利用可能になるまで待つ時間（単位：秒）を 0~2147483647 の整数で指定します。0 を指定した場合は、CORBA ネーミングサービスの起動待ちをしません。 ejbserver.naming.startupMode に inprocess を設定している場合には、0 を指定しないでください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新規インストール時 1</li> <li>06-00 より前からの更新インストール時 manual モードで使用していた場合には 0 が設定されます。 automatic モードを使用し、このプロパ</li> </ul>	—

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.naming.startupWaitTime	J2EE サーバ起動時に CORBA ネーミングサービスが利用可能になるまで待つ時間 (単位: 秒) を 0~2147483647 の整数で指定します。0 を指定した場合は、CORBA ネーミングサービスの起動待ちをしません。 ejbserver.naming.startupMode に inprocess を設定している場合には、0 を指定しないでください。	ティ値を設定していた場合は、既存の指定値がデフォルト値となります。省略していた場合 10 となります。	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

注※

Management Server を利用して J2EE サーバを起動する場合、automatic 以外を指定してください。automatic を指定した場合、CORBA Naming Service プロセスが TPBroker 運用支援機能のプロセス監視対象外となり、プロセスがダウンしても再起動されなくなります。

#### (y) ejbserver.rmi から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.rmi.localinvocation.scope	ローカル呼び出し最適化機能の適用範囲を指定します。 none を指定した場合： 適用範囲はありません。05-05 より前からの更新インストール時は互換性のため、これが指定されます。 app を指定した場合： 同一アプリケーション内が適用範囲になります。 all を指定した場合： 同一 J2EE サーバ内が適用範囲になります。	app	—	「機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「2.13 EJB のリモートインタフェースの呼び出し」
ejbserver.rmi.logger.filenum	J2EE サーバの RMI 通信ログの面数を、2~16 の整数で指定します。 数値以外の文字列や範囲外の数値が指定された場合、または文字列が何も指定されていない場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。	4	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.rmi.logger.filesize	J2EE サーバの RMI 通信ログのサイズ(単位: バイト)を, 8192~2147483647 の整数で指定します。	1048576	—	
ejbserver.rmi.naming.host	マルチホームドホスト環境で, J2EE サーバが使用する RMI レジストリや MBean サーバのホスト名称, または IP アドレスを指定します。指定した半角英文字の大文字, 小文字の区別はしません。	なし	—	
ejbserver.rmi.naming.port	J2EE サーバが利用する RMI レジストリのポート番号を, 1~65535 の整数で指定します。ポート番号には, すでにほかのアプリケーションで使用されているポート番号は指定できません。ほかのアプリケーションで使用されているポート番号を指定して J2EE サーバを起動した場合, 起動処理が完了しないことがあります。	23152	—	
ejbserver.rmi.passbyreference ※	true を指定した場合, リモートインタフェースを持つ EJB のメソッド呼び出しで, 引数および戻り値を値渡し (pass by value) ではなく参照渡し (pass by reference) にします。ただし, <code>ejbserver.rmi.localinvocation.scope</code> で設定された範囲を超えた呼び出しをした場合, 参照渡しの機能は無効になります。参照渡しでは, 値をコピーして生成するコストを削減できますが, 渡された参照を用いて元の値を変更できるため注意が必要です。	false	—	
ejbserver.rmi.remote.listener.port	任意の値を指定して, JMX クライアント (運用管理エージェント, JPI/Performance Management - Agent Option for uCosminexus Application Server など) による稼働情報取得時のリクエスト受付ポートを固定できます。0~65535 の整数を指定します。  ポート番号には, すでにほかのアプリケーションで使用されているポート番号は指定できません。ほかのアプリケーションで使用されているポート番号を指定して J2EE サーバを起動した場合, 起動処理が完了しないことがあります。  このプロパティを設定しない場合, または値に 0 を指定した場合, ランダムな値が設定されます。	0	—	
ejbserver.rmi.request.timeout	クライアントとサーバ間の通信タイムアウト時間 (単位: 秒) を 0~86400 の整数で指定します。  0 を指定した場合, またはこのプロパティを指定しない場合, タイムアウトしません。なお, 86400 を超える値を設定した場合, 警告	0 (秒)	—	「機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「2.11.5 RMI-IIOP 通信のタイムアウト」



キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.rmi.request.timeout	メッセージを出力して、タイムアウトしません。	0 (秒)	—	「機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「2.11.5 RMI-IIOP 通信のタイムアウト」
ejbserver.rmi.stateless.unique_id.enabled	Stateless Session Bean の remove メソッドの呼び出しに対して、呼び出しを不要とするか、必要とするかを指定します。 true を指定した場合： Stateless Session Bean の EJBObject に対して remove メソッドの呼び出しを不要とします。 remove メソッドの呼び出し後にビジネスメソッドを呼び出した場合には、java.rmi.NoSuchObjectException 例外は発生しないで、ビジネスメソッドが実行されます。 false を指定した場合： Stateless Session Bean の EJBObject に対して remove メソッドの呼び出しを必要とします。 remove メソッドの呼び出し後にビジネスメソッドを呼び出した場合には、java.rmi.NoSuchObjectException 例外が発生します。	false	—	「機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「4.3.1 Stateless Session Bean 実装時の注意事項」

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

空欄 : 関連情報はありません。

注※

サーバ管理コマンドから EJB 単位での参照渡し (Pass-by-reference) の設定をすることもできます。

## (z) ejbserver.security から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.security.digest.algorithm	セキュリティ管理機能での認証に使用するメッセージダイジェストアルゴリズムを指定します。指定可能値は MD5, SHA-1, SHA-256, またはその他の JDK がサポートしている MessageDigest アルゴリズムです。Java SE の API リファレンスの java.security.MessageDigest を参照してください。不正な値を指定した場合、デフォルト値が設定されます。	SHA-1	09-70

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.security.digest.algorithm	<p>プロパティの値を変更した場合は、ユーザを削除し再作成する必要があります。この機能では、文字列が異なれば別のメッセージダイジェストアルゴリズムとみなします。</p> <p>SHA-1 以外のアルゴリズムを使用し、かつ EJB クライアントでセキュリティの実装をする場合、EJB クライアントは 09-70 以降の必要があります。09-70 より前の EJB クライアントの場合、認証に失敗します。</p> <p>09-70 より前の EJB クライアントを使用してセキュリティの実装をする場合、認証先の J2EE サーバのダイジェストアルゴリズムを SHA-1 にする必要があります。</p>	SHA-1	09-70

## (aa) ejbserver.server から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.server.eheap.ajp13.enabled	<p>リダイレクタとの通信用オブジェクトを Explicit ヒープに配置するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： リダイレクタとの通信用オブジェクトを Explicit ヒープに配置します。</p> <p>false を指定した場合： リダイレクタとの通信用オブジェクトを Java ヒープ領域に配置します。</p> <p>ただし、JavaVM オプション HitachiUseExplicitMemory を無効にした場合、このプロパティは無効 (false 指定時と同じ挙動) となります。</p>	true	08-00	
ejbserver.server.eheap.httpsession.enabled	<p>HTTP セッションに格納するオブジェクトを Explicit ヒープに配置するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： HTTP セッションに格納するオブジェクトを Explicit ヒープに配置します。</p> <p>false を指定した場合： HTTP セッションに格納するオブジェクトを Java ヒープ領域に配置します。</p> <p>ただし、JavaVM オプション HitachiUseExplicitMemory を無効にした場</p>	true	08-00	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.server.eheap.httpsession.enabled	合は、このプロパティは無効 (false 指定時と同じ挙動) となります。	true	08-00	
ejbserver.server.j2ee.feature	Component Container の動作モードを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>1.4 J2EE1.4 の先進機能が付加されたモード (DB を含む各種リソースをトランザクションで使用するシステムに適用)</li> </ul>	1.4	—	
ejbserver.server.mutex.invocation.timeout	同時に同一プライマリーキーの Entity Bean にアクセスした場合に掛かる排他のタイムアウト時間 (単位: 秒) を、45~92233720368547758 の整数で指定します。タイムアウト時間は、デフォルト値 (45 秒) 以上 java.lang.Long.MAX_VALUE/1000 (秒) 以下の範囲で指定してください。デフォルト値未満の値を指定した場合、タイムアウト時間は 45 (秒) で動作します。 java.lang.Long.MAX_VALUE/1000 (秒) を超える値を指定した場合、タイムアウト時間は java.lang.Long.MAX_VALUE (ミリ秒) で動作します。さらに、java.lang.Long.MAX_VALUE を超える値を指定した場合は、デフォルト値になります。	45	—	
ejbserver.server.prf.PRFID	PRF 識別子を指定します。 PRF デーモン起動時に PRF 識別子を指定した場合に、同じ PRF 識別子を指定します。 PRF デーモン起動時に PRF 識別子を省略した場合は、指定しないでください。PRF 識別子が一致しないと、性能解析トレースが取得されません。	PRF_ID	—	
ejbserver.server.threaddump.filename	J2EE サーバが障害を検知して自発的にスレッドダンプを出力する場合のスレッドダンプのファイル数の上限を、1~2147483647 の整数で指定します。 範囲外の値を指定した場合は、デフォルト値が設定されます。 環境変数 JAVACOREDIR を指定している場合、環境変数 JAVACOREDIR で指定したディレクトリとデフォルトの出力先ディレクトリ (Windows の場合: <製品の作業ディレクトリ>¥ejb¥<サーバ名称>, UNIX の場合: <製品の作業ディレクトリ>/ejb/<サーバ名称>) の両方のスレッドダンプのファイルの個数の合計が上限になります。 また、外部からのスレッドダンプ出力要求に対しては、このオプションの設定に関係なくスレッドダンプのファイルが出力されます。外部からのスレッドダンプ出力要求の例を次に示します。	256	—	「機能解説 運用 / 監視 / 連携編」の「4. リソースの枯渇監視」

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
ejbserver.server.threaddump.filename	<ul style="list-style-type: none"> <li>• jheapprof コマンド</li> <li>• cjdumpsv コマンド</li> <li>• cjstopsv コマンドの-fd 指定</li> <li>• J2EE サーバ実行コンソールでの Ctrl +Break (Windows の場合)</li> <li>• J2EE サーバプロセスへの kill コマンド -3 (SIGTERM) 指定 (UNIX の場合)</li> </ul>	256	—	「機能解説 運用 / 監視 / 連携編」の「4. リソースの枯渇監視」

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

空欄 : 関連情報はありませぬ。

### (ab) ejbserver.stateful から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.stateful.passivate.switch	<p>Stateful Session Bean の非活性化、活性化の機能を使用するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合 :</p> <p>Stateful Session Bean の非活性化、活性化の機能が動作します。</p> <p>false を指定した場合 :</p> <p>Stateful Session Bean の非活性化、活性化の機能が動作しません。</p>	false	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

### (ac) ejbserver.stdoutlog から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.stdoutlog.autoflush	<p>ユーザ出力ログおよびユーザエラーログの自動フラッシュ機能を有効にするかどうかを指定します。</p> <p>自動フラッシュ機能とは、ユーザ出力ログ (user_out[n]log)、ユーザエラーログ (user_err[n].log) の出力に使用している java.io.PrintStream の自動フラッシュオプションのことです。</p>	false	08-00

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.stdoutlog.autoflush	<p>true を指定した場合：</p> <p>自動フラッシュ機能を有効にします。無効のケースよりも性能が劣化することがあります。</p> <p>false を指定した場合：</p> <p>自動フラッシュ機能を無効にします。java.io.PrintStream.print()など、PrintStream クラスの自動フラッシュ対象外の処理がされた場合、ユーザ出力ログ、ユーザエラーログに出力される内容がバッファにたまり、メモリを圧迫する要因となります。</p>	false	08-00

## (ad) ejbserver.watch から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.watch.defaultRequestQueue.enabled	<p>デフォルトの実行待ちキューの場合の HTTP リクエスト実行待ちキュー監視のアラート出力を有効にするかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合：</p> <p>デフォルトの実行待ちキューの場合の HTTP リクエスト実行待ちキュー監視のアラート出力を有効にします。</p> <p>false を指定した場合：</p> <p>デフォルトの実行待ちキューの場合の HTTP リクエスト実行待ちキュー監視のアラート出力を無効にします。</p>	true	—
ejbserver.watch.defaultRequestQueue.interval	デフォルトの実行待ちキューの場合の HTTP リクエスト実行待ちキュー監視間隔を、1~2147483647 の整数（単位：秒）で指定します。	30	—
ejbserver.watch.defaultRequestQueue.threshold	アラートメッセージを出力するしきい値を、1~100 の整数（単位：%）で指定します。監視対象のリクエストのデフォルトの実行待ちキューの格納率が、このキーで指定された値以上になるとアラートメッセージを出力します。	80	—
ejbserver.watch.defaultRequestQueue.writefile.enabled	<p>デフォルトの実行待ちキューの場合の HTTP リクエスト実行待ちキュー監視結果をファイル出力するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合：</p> <p>デフォルトの実行待ちキューの場合の HTTP リクエスト実行待ちキュー監視結果をファイル出力します。</p> <p>false を指定した場合：</p> <p>デフォルトの実行待ちキューの場合の HTTP リクエスト実行待ちキュー監視結果をファイル出力しません。</p>	true	—
ejbserver.watch.enabled	<p>すべてのリソース枯渇監視を有効にするかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合：</p> <p>すべてのリソース枯渇監視を有効にします。</p>	true (06-00 以前からのバージョン)	—

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.watch.enabled	false を指定した場合： すべてのリソース枯渇監視を無効にします。この場合、各リソース枯渇監視が有効に設定されていても、すべてのリソース枯渇監視が無効になります。	アップの場合は、false)	—
ejbserver.watch.fileDescriptor.enabled	ファイルディスクリプタ監視のアラート出力を有効にするかどうかを指定します。なお、ファイルディスクリプタ監視は、Windows の場合、および AIX の場合は使用できません。  true を指定した場合： ファイルディスクリプタ監視のアラート出力を有効にします。  false を指定した場合： ファイルディスクリプタ監視のアラート出力を無効にします。	true	—
ejbserver.watch.fileDescriptor.interval	ファイルディスクリプタ監視間隔を 1~2147483647 の整数（単位：秒）で指定します。なお、ファイルディスクリプタ監視は、Windows の場合、および AIX の場合は使用できません。	60	—
ejbserver.watch.fileDescriptor.threshold	ファイルディスクリプタの使用状態を監視するしきい値を、1~2147483647 の整数で指定します。使用中のファイルディスクリプタ数がしきい値以上になった場合にアラートを出力します。指定するしきい値は次のように設定してください。  OS のプロセスに割り当て可能なファイルディスクリプタ数* > ファイルディスクリプタ見積もり式から求めた値 > ファイルディスクリプタしきい値  注※ プラットフォームによってシステムの上限が存在しない場合があります。  なお、ファイルディスクリプタ監視は、Windows の場合、および AIX の場合は使用できません。	2147483647	—
ejbserver.watch.fileDescriptor.writefile.enabled	ファイルディスクリプタ監視結果をファイル出力するかどうかを指定します。なお、ファイルディスクリプタ監視は、Windows の場合、および AIX の場合は使用できません。  true を指定した場合： ファイルディスクリプタ監視結果をファイル出力します。  false を指定した場合： ファイルディスクリプタ監視結果をファイル出力しません。	true	—
ejbserver.watch.memory.enabled	メモリ監視のアラート出力を有効にするかどうかを指定します。  true を指定した場合： メモリ監視のアラート出力を有効にします。  false を指定した場合： メモリ監視のアラート出力を無効にします。  true を指定する場合、次の JavaVM オプションを同じ値で設定する必要があります。  • -XX:MetaspaceSize • -XX:MaxMetaspaceSize  異なる値を設定した場合、アラートが出力されないで FullGC が発生する場合があります。	true	—

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.watch.memory.interval	メモリ監視間隔を 1~2147483647 の整数 (単位: 秒) で指定します。	60	—
ejbserver.watch.memory.threshold	メモリの使用状態を監視するしきい値を, 1~100 の整数 (単位: %) で指定します。次の条件のどれかで, FullGC の予兆を検知した場合に, アラートを出力します。 SerialGC 有効時: <ul style="list-style-type: none"> <li>• Tenured 領域消費サイズの Tenured 領域合計サイズに対する割合 (リソース枯渇監視情報の Rate1 に出力される値) がしきい値以上</li> <li>• New 領域合計サイズの Tenured 領域最大空きサイズに対する割合 (リソース枯渇監視情報の Rate2 に出力される値) がしきい値以上</li> <li>• Metaspace 領域消費サイズの Metaspace 領域最大サイズ (リソース枯渇監視情報の Rate3 に出力される値) に対する割合がしきい値以上</li> </ul> G1GC 有効時: <ul style="list-style-type: none"> <li>• Java ヒープ領域消費サイズの Java ヒープ領域最大メモリサイズに対する割合 (リソース枯渇監視情報の Rate1 に出力される値) がしきい値以上</li> <li>• Metaspace 領域消費サイズの Metaspace 領域最大サイズに対する割合 (リソース枯渇監視情報の Rate3 に出力される値) がしきい値以上</li> </ul>	80	—
ejbserver.watch.memory.writefile.enabled	メモリ監視結果をファイル出力するかどうかを指定します。 true を指定した場合: メモリ監視結果をファイル出力します。 false を指定した場合: メモリ監視結果をファイル出力しません。	true	—
ejbserver.watch.thread.enabled	スレッド監視のアラート出力を有効にするかどうかを指定します。なお, Linux ではスレッド数を監視できません。 true を指定した場合: スレッド監視のアラート出力を有効にします。 false を指定した場合: スレッド監視のアラート出力を無効にします。	true	—
ejbserver.watch.thread.interval	スレッド監視間隔を, 1~2147483647 の整数 (単位: 秒) で指定します。なお, Linux ではスレッド数を監視できません。	60	—
ejbserver.watch.thread.threshold	スレッドの使用状態を監視するしきい値を, 1~2147483647 の整数で指定します。生成済みのスレッド数がしきい値以上になった場合にアラートを出力します。指定するしきい値は次のように設定してください。 OSのプロセスに割り当て可能なスレッド数* > スレッド見積もり式より求めた値 > スレッドしきい値 注※ プラットフォームによってシステムの上限が存在しない場合があります。 なお, Linux ではスレッド数を監視できません。	2147483647	—

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.watch.thread.writefile.enabled	スレッド監視結果をファイル出力するかどうかを指定します。なお、Linux ではスレッド数を監視できません。 true を指定した場合： スレッド監視結果をファイル出力します。 false を指定した場合： スレッド監視結果をファイル出力しません。	true	—
ejbserver.watch.thread.dump.enabled	スレッドダンプ監視のアラート出力を有効にするかどうかを指定します。 true を指定した場合： スレッドダンプ監視のアラート出力を有効にします。 false を指定した場合： スレッドダンプ監視のアラート出力を無効にします。	true	—
ejbserver.watch.thread.dump.interval	スレッドダンプ監視時間間隔を、1~2147483647 の整数（単位：秒）で指定します。	30	—
ejbserver.watch.thread.dump.threshold	スレッドダンプ監視のしきい値を、上限値に対する割合 1~100 の整数（単位：%）で指定します。 スレッドダンプのファイル数の上限値に対する現在値の割合がしきい値以上になった場合にアラートを出力します。 環境変数 JAVACOREDİR を指定している場合、環境変数 JAVACOREDİR で指定したディレクトリとデフォルトの出力先ディレクトリの両方のスレッドダンプのファイルの個数の合計が現在値となります。	80	—
ejbserver.watch.thread.dump.writefile.enabled	スレッドダンプ監視結果をファイル出力するかどうかを指定します。 true を指定した場合： スレッドダンプ監視結果をファイル出力します。 false を指定した場合： スレッドダンプ監視結果をファイル出力しません。	true	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

#### (ae) ejbserver.webj2ee から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.webj2ee.connectionAutoClose.enabled	J2EE サーバの動作モードが 1.4 モードの場合に、自動クローズ機能を使用するかどうかを指定します。動作モードがベーシックモード（互換機能）の場合、このプロパティは無視され、自動クローズ機能は無効となります。 true を指定した場合： 自動クローズ機能を有効にします。	true	—



キー名称	内容	省略値	VR
ejbserver.webj2ee.connectionAutoClose.enabled	false を指定した場合： 自動クローズ機能を無効にします。 不正な値を指定した場合は、デフォルト値が設定されます。	true	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

#### (af) https から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
https.cipherSuites	HttpsURLConnection で使用する推奨暗号スイートを設定します。*	※	09-00
https.protocols	HttpsURLConnection で使用するプロトコルを設定します。*	※	09-00

注※

キーの詳細については、JDK のドキュメントを参照してください。

#### (ag) java から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
java.naming.factory.initial	JNDI の InitialContext がデレゲートするコンテキストの実装クラスのファクトリクラスを指定します。各設定値での動作を次に示します。  com.hitachi.software.ejb.jndi.InsContextFactory : JNDI ラウンドロビン検索機能を使用しないで、通常の検索機能を使用する場合に指定するコンテキストです。  com.hitachi.software.ejb.jndi.GroupContextFactory : J2EE サーバ内アプリケーション (EJB) の実行時に、JNDI ラウンドロビン検索機能を使用する場合に指定するコンテキストです。	com.hitachi.software.ejb.jndi.InsContextFactory	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

#### (ah) vbj から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
vbj.java2iioption.maxHeapSize	<p>J2EE アプリケーション開始時に起動される java2iioption コマンドのヒープサイズの最大値を指定します。</p> <p>指定する値は、java コマンドの-Xmx, -Xms オプションが受け付ける形式で指定してください。それ以外の形式で指定された場合の動作は保証されません。</p> <p>次のように指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 2048~4294966272 の値を指定してください。ただし、vbj.java2iioption.minHeapSize に指定した以上の値を指定してください。</li> <li>• キロバイト単位で指定する場合は、文字「k」または「K」を付けて指定してください。</li> <li>• メガバイト単位で指定する場合は、文字「m」または「M」を付けて指定してください。</li> </ul>	128m	—
vbj.java2iioption.minHeapSize	<p>J2EE アプリケーション開始時に起動される java2iioption コマンドのヒープサイズの初期値を指定します。</p> <p>指定する値は、java コマンドの-Xmx, -Xms オプションが受け付ける形式で指定してください。それ以外の形式で指定された場合の動作は保証されません。</p> <p>次のように指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 1024~-Xmx 指定値の値を指定してください。</li> <li>• キロバイト単位で指定する場合は文字「k」または「K」を付けて指定してください。</li> <li>• メガバイト単位で指定する場合は、文字「m」または「M」を付けて指定してください。</li> </ul>	16m	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

#### (ai) vbroker から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

#### ！ 注意事項

ここに記載していない TPBroker のプロパティは指定できません（指定した場合の動作は保証されません）。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
vbroker.agent.enableLocator	<p>スマートエージェントを使用するかどうかを指定します。</p> <p>通常は設定不要のプロパティです。デフォルトのままご使用ください。</p> <p>また、CTM 連携機能を有効 (ejbserver.ctm.enabled キーに true を指定) にした場合は、J2EE サーバの起動時に自動的に true が設定されます。</p> <p>この目的以外でスマートエージェントが必要な場合は、true を設定してください。</p> <p>なお、このプロパティに true を指定した場合は、スマートエージェントを先に起動する必要があります。</p> <p>スマートエージェントの詳細については、マニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) プログラマーズリファレンス」を参照してください。</p>	false	—	
vbroker.agent.port	<p>スマートエージェントのポート番号を指定します。詳細については、マニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) プログラマーズリファレンス」を参照してください。</p>	14000	—	
vbroker.ce.iiop.ccm.htc.readerPerConnection	<p>リモートインタフェースとして定義された EJB メソッドの呼び出しでタイムアウトが発生した場合に、接続のクローズを抑制するかどうかを設定します。</p> <p>true を指定した場合 タイムアウト発生時の接続のクローズを抑制します。</p> <p>false を指定した場合 タイムアウト発生時の接続のクローズを抑制しません。</p>	false	09-50	
vbroker.ce.iiop.ccm.htc.threadStarter	<p>リプライ受信専用スレッドを管理するスレッドを起動するかどうかを設定します。</p> <p>vbroker.ce.iiop.ccm.htc.readerPerConnection=true を設定する場合に、"true"を設定してください。</p>	false	09-50	
vbroker.orb.htc.comt.entryCount	<p>TPBroker 通信トレースファイル 1 個当たりのエントリ数の上限値を 100~30000000 の範囲で指定します。</p>	120000	—	
vbroker.orb.htc.comt.fileCount	<p>TPBroker 通信トレースファイルの個数の上限値を 1~256 の範囲で指定します。</p>	3	—	
vbroker.orb.htc.tracePath	<p>TPBroker のトレースファイル出力先のパスを 1~210 バイトの範囲で指定します。指定したパスのサブディレクトリとして comtrc と mdltrc をあらかじめ作成しておく必要があります。デフォルトの出力先の場合、サブディレクトリ comtrc と mdltrc はサーバ初回起動時に自動</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;製品の作業ディレ</li> </ul>	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
vbroker.orb.htc.tracePath	作成されます。ディレクトリのパスの区切り記号には、"/"を使用してください。 例えば、Windows の場合、work ディレクトリとして C:¥temp¥work を設定するときは、次のように指定します。 (指定例) vbroker.orb.htc.tracePath=c:/temp/work	クトリ >¥ejb ¥< サーバ 名称> ¥logs ¥TPB ¥logj  • UNIX の場合 <製品 の作業 ディレ クトリ >/ejb /< サーバ 名称 >/ logs/T PB/ logj	—	
vbroker.se.iiop_tp.host	任意の値を指定して、J2EE サーバ単位で EJB コンテナの IP アドレスを固定します。	なし	—	「機能解説 基本・開発編 (EJB コンテナ)」の [2.14 EJB コンテナの通信ポートと IP アドレスの固定 (TPBroker のオプション)]
vbroker.se.iiop_tp.proxyHost ※	J2EE サーバおよび CORBA ネーミングサービスが配置してあるホスト名を指定します。ここで指定するホスト名は、EJB クライアントでは NAT の IP アドレスとして解決されるように設定してください。また、NAT を経由しない EJB クライアントがある場合は、そのホストでは J2EE サーバの IP アドレスとして解決されるように設定してください。	なし	09-50	
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_t p.listener.port	任意の値を指定して、J2EE サーバ単位で通信ポートを固定できます。ポート番号は、ほかのプログラムなどと重複しないようにしてください。このプロパティを設定しない場合は、TPBroker によってランダムな値が設定されます。 また、 ejbserver.container.ejbhome.sessionbean.reconnect.enabled に true を指定した場合は、必	0	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port	ず値を指定して、ポート番号を固定にしてください。	0	—	
vbroker.se.iiop_ts.proxyHost ※	J2EE サーバおよび CORBA ネーミングサービスが配置してあるホスト名を指定します。ここで指定するホスト名は、EJB クライアントでは NAT の IP アドレスとして解決されるように設定してください。また、NAT を経由しない EJB クライアントがある場合は、そのホストでは J2EE サーバの IP アドレスとして解決されるように設定してください。	なし	09-50	

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

注※

EJB クライアントと J2EE サーバ間に NAT が設置されている場合に、J2EE サーバおよび CORBA ネーミングサービスに対して設定するキーです。設定方法は、CORBA ネーミングサービスの起動モードによって異なります。

CORBA ネーミングサービスの起動モードをインプロセスで自動起動するモードの場合、J2EE サーバ用ユーザプロパティファイルにこれらのキーを指定します。J2EE サーバを配置したマシンのホスト名が「MyJ2EEHost」の場合の設定例を示します。

```
# CORBAネーミングサービス起動モード設定
ejbserver.naming.startupMode=inprocess
```

```
# NATを介した構成でのEJBクライアント-J2EEサーバ間通信用設定
vbroker.se.iiop_ts.proxyHost=MyJ2EEHost
vbroker.se.iiop_tp.proxyHost=MyJ2EEHost
```

CORBA ネーミングサービスをアウトプロセスで自動起動するモードの場合、J2EE サーバ用ユーザプロパティファイルおよび J2EE サーバ用ユーザプロパティ ejbserver.naming.exec.args の両方にこれらのキーを指定します。J2EE サーバを配置したマシンのホスト名が「MyJ2EEHost」の場合の設定例を示します。なお、ejbserver.naming.exec.args の設定は-J ごとにスペースで区切って一行で指定してください。また、既存のシステムで ejbserver.naming.exec.args に設定値がある場合は、そのコマンドに追加で指定してください。

```
# CORBAネーミングサービス起動モード設定
ejbserver.naming.startupMode=automatic
```

```
# NATを介した構成でのEJBクライアント-J2EEサーバ間通信用設定
vbroker.se.iiop_ts.proxyHost=MyJ2EEHost
vbroker.se.iiop_tp.proxyHost=MyJ2EEHost
ejbserver.naming.exec.args=-J-Dvbroker.se.iiop_ts.proxyHost=MyJ2EEHost -J-Dvbroker.se.iiop_tp.proxyHost=MyJ2EEHost
```

CORBA ネーミングサービスをアウトプロセスで手動起動するモードの場合、J2EE サーバ用ユーザプロパティファイルおよび nameserv コマンド起動オプションの両方にこれらのキーを指定します。J2EE サーバを配置したマシンのホスト名が「MyJ2EEHost」の場合の設定例を示します。

```
# CORBAネーミングサービス起動モード設定
ejbserver.naming.startupMode>manual
```

```
# NATを介した構成でのEJBクライアント-J2EEサーバ間通信用設定
vbroker.se.iiop_ts.proxyHost=MyJ2EEHost
vbroker.se.iiop_tp.proxyHost=MyJ2EEHost
```

nameserv コマンドの実行例を示します。なお、nameserv コマンドの実行の際は-J ごとのスペース区切りによって一行で設定してください。また、既存のシステムで nameserv コマンドを実行している場合は、そのコマンドに追記してください。

```
nameserv -J-Dvbroker.agent.enableLocator=false
-J-Djava.security.policy="Application Serverのインストールディレクトリ>%CC%server%sysconf%cli.policy"
-J-Dvbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=<ポート番号>
```

```
-J-Dvbroker.se.iiop_ts.proxyHost=MyJ2EEHost
-J-Dvbroker.se.iiop_tp.proxyHost=MyJ2EEHost
```

## (aj) webserver.application から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
webserver.application.lower_version	Web アプリケーションのバージョン設定機能で設定したい Web アプリケーションのバージョンを指定します。 2.4 を指定した場合は、web.xml で定義された Web アプリケーションバージョンが 2.4 以下の Web アプリケーションをバージョン 2.4 の Web アプリケーションとして実行します。 2.5 を指定した場合は、web.xml で定義された Web アプリケーションバージョンが 2.5 以下の Web アプリケーションをバージョン 2.5 の Web アプリケーションとして実行します。	なし	08-20

## (ak) webserver.connector から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webserver.connector.ajp12.backlog	旧バージョンとの互換性を保つためのキーです。 webserver.connector.ajp13.backlog として使用されます。指定できる値については、webserver.connector.ajp13.backlog キーの説明を参照してください。 このキーと webserver.connector.ajp13.backlog の両方が指定されていた場合、このキーの値が使用されます。	なし	—	
webserver.connector.ajp12.max_threads	旧バージョンとの互換性を保つためのキーです。 webserver.connector.ajp13.max_threads として使用されます。指定できる値については、webserver.connector.ajp13.max_threads キーの説明を参照してください。 このキーと webserver.connector.ajp13.max_threads の両方が指定されていた場合、このキーの値が使用されます。	なし	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webserver.connector.ajp12.max_threads	1025 以上の値が設定されていた場合、webserver.connector.ajp13.max_threads のデフォルト値の 100 が使用されます。	なし	—	
webserver.connector.ajp12.port	旧バージョンとの互換性を保つためのキーです。 webserver.connector.ajp13.port として使用されます。指定できる値については、webserver.connector.ajp13.port キーの説明を参照してください。 このキーと webserver.connector.ajp13.port の両方が指定されていた場合、このキーの値が使用されます。	なし	—	
webserver.connector.ajp13.backlog	リダイレクタからの接続要求の最大の待ち行列数を指定します。1~2147483647 の整数で指定します。 有効な最大値は実行するプラットフォームで指定できる Socket の Listen キューの最大値となります。実際の Listen キューの最大値は OS によって異なるため、詳細は各 OS の listen 関数についてのマニュアルを参照してください。 このキーに指定した値は、java.net.ServerSocket クラスのコンストラクタの backlog 引数に設定されます。ただし、この指定値が OS の制限値を超えた場合は、OS の制限値が設定されたものと解釈され、エラーにはなりません。制限値は OS によって異なります。制限値を拡張する方法については、OS のマニュアルを参照してください。	100	—	
webserver.connector.ajp13.bind_host	Web サーバ連携で使用する IP アドレスまたはホスト名称を指定します。 IP アドレス、またはホスト名称の前後の半角スペースは無視されます。値を指定しない場合は、ワイルドカードアドレスが使用されます。 このプロパティを指定するときは、ワーカホスト名称にもローカルホスト名称または IP アドレスを指定する必要があります。 同一ホストで実行している Web サーバと Web サーバ連携をしている構成で、次のどちらかの設定をしている場合、Web コンテナは Web サーバからのリクエストを受信できません。 <ul style="list-style-type: none"> <li>webserver.connector.ajp13.bind_host プロパティにローカルホスト名称、または IP アドレスを指定し、リダイレクタのワー</li> </ul>	なし	—	「機能解説 基本・開発編 (Web コンテナ)」の「4.7 IP アドレス指定 (Web サーバ連携)」

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webserver.connector.ajp13.bind_host	<p>カホスト名称に localhost などのループバックアドレスを指定している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>webserver.connector.ajp13.bind_host プロパティに localhost などのループバックアドレスを指定し、リダイレクタのワーカホスト名称にローカルホスト名称、または IP アドレスを指定している。</li> </ul>	なし	—	「機能解説 基本・開発編 (Web コンテナ)」の「4.7 IP アドレス指定 (Web サーバ連携)」
webserver.connector.ajp13.max_threads	<p>Web コンテナがリクエストを処理する同時実行数を指定します。*1</p> <p>1~1024 の整数で指定します。</p> <p>指定されたリクエストの同時実行数分のスレッドがサーバ起動時に生成されます。</p>	10	—	「機能解説 基本・開発編 (Web コンテナ)」の「2.16 Web コンテナ単位での同時実行スレッド数の制御」
webserver.connector.ajp13.port	<p>Web サーバとの通信に使用するポート番号を指定します。</p> <p>1~65535 の整数で指定します。</p> <p>すでにほかのアプリケーションで使用または確保されているポート番号は指定できません。また、複数の J2EE サーバで Web サーバとの通信に使用するポートのポート番号に同じ値を設定しないでください。同一のポート番号を指定した J2EE サーバは cjstartsv コマンドで複数起動できません。</p>	8007	—	
webserver.connector.ajp13.receive_timeout	<p>リクエスト受信処理のリダイレクタへのデータ要求処理で、リダイレクタからの応答を待つ時間 (通信タイムアウト値) を 0~3600 の整数 (単位: 秒) で指定します。</p> <p>0 を指定した場合は、リダイレクタからの応答を受け取るまで待ち続け、タイムアウトは発生しません。</p>	600 (秒)	—	
webserver.connector.ajp13.send_timeout	<p>レスポンス送信処理のタイムアウト値を 0~3600 の整数 (単位: 秒) で指定します。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値を指定した場合は、メッセージを出力し、デフォルト値を使用します。</p> <p>タイムアウト値に 0、または TCP の持つデータ送信の再送タイマより長い時間を設定した場合、タイムアウト値は TCP の持つタイムアウト値になります。その場合、不正なタイムアウト値が指定されたことを示すメッセージは出力されません。</p>	600	—	
webserver.connector.http.bind_host	<p>簡易 Web サーバで使用するローカル IP アドレス、または解決できるローカルホスト名称を指定します。</p>	なし	—	「機能解説 互換編」の「5.2.1 簡易 Web サーバ」



キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservers.connector.http.bind_host	IP アドレスまたはホスト名称の前後の半角スペースは無視されます。値を指定しない場合は、ワイルドカードアドレスが使用されます。	なし	—	での IP アドレス指定 (バインド先アドレス設定機能)」
webservers.connector.http.permitted.hosts	簡易 Web サーバへのアクセスを許可するホストの IP アドレス (10 進表記) またはホスト名を指定します。 なお、ローカルホストは明記しなくても常にアクセスできます。したがって、このキーの指定を省略した場合、アクセスできるのはローカルホストだけになります。 複数指定する場合には IP アドレスまたはホスト名の間をコンマ (,) で区切ります。アクセス制限をしない場合はアスタリスク (*) だけを指定します。IP アドレスまたはホスト名の前後の半角スペースは無視されます。	なし	—	
webservers.connector.inprocess_http.backlog	Web クライアントからの接続要求を格納する TCP リスンキューの長さを 1~2147483647 の整数で指定します。 有効な指定値の最大値や実際に設定される TCP リスンキューの長さは OS によって異なります。 数値以外の文字列、範囲外の数値、空文字列または空白文字 <sup>※2</sup> を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。	511	—	
webservers.connector.inprocess_http.bind_host	インプロセス HTTP サーバで使用する IP アドレスまたはホスト名を指定します。 IP アドレスまたはホスト名の前後の半角スペースは無視されます。値を指定しない場合は、ワイルドカードアドレスが使用されます。 指定されたホスト名または IP アドレスが解決できない場合、ローカルではないホストのホスト名または IP アドレスを指定した場合はメッセージが出力され、ワイルドカードアドレスが使用されます。	なし	—	
webservers.connector.inprocess_http.enabled	インプロセス HTTP サーバ機能を有効にするかどうかを指定します。 true を指定した場合： インプロセス HTTP サーバ機能を有効にします。 false を指定した場合： インプロセス HTTP サーバ機能を無効にします。 true または false 以外の文字列を指定した場合、空文字列または空白文字 <sup>※2</sup> を指定した場	false	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.connector.inprocess_http.enabled	<p>合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p> <p>なお、インプロセス HTTP サーバ機能が有効の場合は、Web サーバ連携は使用できません。</p>	false	—	
webservice.connector.inprocess_http.enabled_methods	<p>アクセスを許可する HTTP メソッドを指定します。</p> <p>複数のメソッドを指定する場合は、コンマ (,) で区切ります。メソッド名には HTTP/1.1 で定義されたメソッドを指定します。</p> <p>また、アスタリスク (*) を指定した場合は、すべてのメソッドが許可されます。</p> <p>HTTP メソッドでは大文字、小文字が区別されるため、このプロパティに指定する値も区別されます。</p> <p>メソッド名には RFC2616 で規定されている値を使用する必要があります。ただし、文字列 "*" をメソッド名として指定できません。</p> <p>各メソッド名の前後の空白文字※<sup>2</sup>は無視されます。不正な値、空文字列または空白文字※<sup>2</sup>を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	GET,HEAD,POST,PUT,DELETE,OPTIONS	—	
webservice.connector.inprocess_http.error_custom.list	<p>エラーページカスタマイズ機能で使用するエラーページカスタマイズ定義名を指定します。</p> <p>指定できる値の最大長は 1024 文字で、英数字 (A~Z, a~z, 0~9) またはアンダースコア ( _ ) で構成される文字列で指定します。定義名一つの文字列長は 1~32 文字です。</p> <p>定義名を複数指定する場合は、コンマ (,) で区切ります。コンマの前後の空白文字※<sup>2</sup>は無視されます。また、同じエラーページカスタマイズ定義名を複数回指定できません。</p> <p>不正な値を指定した場合、メッセージが出力され、すべてのエラーページカスタマイズ定義は無効となります。</p>	なし	—	
webservice.connector.inprocess_http.error_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.file	<p>エラーページカスタマイズ機能で、エラーページカスタマイズ時のレスポンスボディとして使用するファイルを絶対パスで指定します。</p> <p>パスの区切り記号には " / " を使用します。</p> <p>webservice.connector.inprocess_http.error_custom.list で設定されていないエラーページカスタマイズ定義名を使用してこのプロパティを設定した場合、プロパティは無効になります。</p> <p>webservice.connector.inprocess_http.error_custom.list で指定したエラーページカスタマイズ定義名について、このプロパティ、ま</p>	なし	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webserver.connector.inprocess_http.error_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.file	<p>たは</p> <p>webserver.connector.inprocess_http.error_custom.&lt;エラーページカスタマイズ定義名&gt;.redirect_url のどちらか一方だけを必ず指定してください。両方のプロパティを指定した場合、どちらも指定しなかった場合、絶対パスで指定しなかった場合、または存在しないファイルや読み取り権限のないファイルを指定した場合は、メッセージが出力され、このエラーページカスタマイズ定義は無効となります。</p> <p>空文字列または空白文字※2を指定した場合、プロパティは無効となります。</p>	なし	—	
webserver.connector.inprocess_http.error_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.file.content_type	<p>エラーページカスタマイズ機能で、エラーページカスタマイズ時のレスポンスの Content-Type ヘッダの値を指定します。</p> <p>webserver.connector.inprocess_http.error_custom.list で設定されていないエラーページカスタマイズ定義名を使用してこのプロパティを設定した場合、プロパティは無効となります。</p> <p>webserver.connector.inprocess_http.error_custom.&lt;エラーページカスタマイズ定義名&gt;.file が設定されていない場合、プロパティは無効となります。</p>	text/html	—	
webserver.connector.inprocess_http.error_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.redirect_url	<p>エラーページカスタマイズ機能で、リダイレクト URL を絶対パスで指定します。</p> <p>webserver.connector.inprocess_http.error_custom.list で設定されていないエラーページカスタマイズ定義名を使用してこのプロパティを設定した場合、プロパティは無効となります。</p> <p>webserver.connector.inprocess_http.error_custom.list で指定したエラーページカスタマイズ定義名について、このプロパティ、または</p> <p>webserver.connector.inprocess_http.error_custom.&lt;エラーページカスタマイズ定義名&gt;.file のどちらか一方だけを必ず指定してください。</p> <p>値が正しいかどうかのチェックは行われなため、実際に動作させて確認する必要があります。</p>	なし	—	
webserver.connector.inprocess_http.error_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.request_url	<p>エラーページカスタマイズ機能で、エラーページカスタマイズを適用するリクエスト URL をスラッシュ (/) で始まる絶対パスで指定します。ワイルドカード (*) はスラッシュの直後に 1 回だけ指定できます。"*"は必ずワイルドカードと解釈されるため、通常の文字としては使用できません。</p>	/*	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.connector.inprocess_http.error_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.request_url	<p>また、このプロパティで指定した値と webservice.connector.inprocess_http.error_custom.&lt;エラーページカスタマイズ定義名&gt;.status で指定した値は、ほかのエラーページカスタマイズ定義と完全に一致してはいけません。</p> <p>webservice.connector.inprocess_http.error_custom.list で設定されていないエラーページカスタマイズ定義名を使用してこのプロパティを設定した場合、プロパティは無効となります。</p> <p>不正な値を指定した場合、メッセージが出力され、このエラーページカスタマイズ定義は無効となります。</p>	/*	—	
webservice.connector.inprocess_http.error_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.status	<p>エラーページカスタマイズ機能で、エラーページのカスタマイズを行うレスポンスのステータスコードを 400～599 の整数で指定します。</p> <p>このプロパティで指定した値、および webservice.connector.inprocess_http.error_custom.&lt;エラーページカスタマイズ定義名&gt;.request_url で指定した値は、ほかのエラーページカスタマイズ定義と完全に一致してはいけません。</p> <p>webservice.connector.inprocess_http.error_custom.list で設定されていないエラーページカスタマイズ定義名を使用してこのプロパティを設定した場合、プロパティは無効となります。</p> <p>webservice.connector.inprocess_http.error_custom.list で指定したエラーページカスタマイズ定義名について、このプロパティは必ず指定してください。指定しなかった場合、または不正な値を指定した場合、メッセージが出力され、このエラーページカスタマイズ定義は無効となります。</p>	なし	—	
webservice.connector.inprocess_http.gateway.host	<p>ゲートウェイのホスト名または IP アドレスを指定します。Host ヘッダのないリクエストに対して welcome ファイルなどにリダイレクトするとき、Location ヘッダに指定する URL のホスト名部分が指定値となります。</p>	なし	—	
webservice.connector.inprocess_http.gateway.port	<p>ゲートウェイのポート番号を 1～65535 の整数で指定します。</p> <p>Host ヘッダのないリクエストに対して welcome ファイルなどにリダイレクトするとき、Location ヘッダに指定する URL のポート番号部分が指定値となります。</p> <p>webservice.connector.inprocess_http.gateway.host が指定されていない場合は、このプロパティの指定は無視されます。</p>	なし	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.connector.inprocess_http.gateway.port	<p>また、webservice.connector.inprocess_http.gateway.host を指定し、このプロパティを省略した場合は下記の値が設定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>webservice.connector.inprocess_http.gateway.https_scheme に true を指定している場合：443</li> <li>webservice.connector.inprocess_http.gateway.https_scheme に false を指定している場合、または未指定の場合：80</li> </ul> <p>数値以外の文字列、または範囲外の数値を指定した場合は、メッセージが出力され、指定されなかったものとみなされます。</p>	なし	—	
webservice.connector.inprocess_http.gateway.https_scheme	<p>クライアントからのリクエストのスキームは https で、SSL アクセラレータなどによって Web サーバへのスキームが http となる場合に true を指定します。</p> <p>true を指定した場合： Web サーバへのリクエストのスキームが https とみなされます。</p> <p>false を指定した場合： 何もありません。</p> <p>true または false 以外の文字列を指定した場合、空文字列または空白文字<sup>*2</sup>を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	false	—	
webservice.connector.inprocess_http.hostname_lookups	<p>インプロセス HTTP サーバで受信したリクエストに対して、Web コンテナがホスト名のルックアップの逆引きをしてクライアントの IP アドレスをホスト名に変換するかどうかを指定します。</p> <p>ただし、ホスト名の逆引きをすると、スループットが低下します。</p> <p>ホスト名を解決しなかった場合、javax.servlet.ServletRequest インタフェースの getRemoteHost() メソッドの結果や、ログファイルに出力するクライアントの IP アドレスは、ドット (.) で区切られた書式の IP アドレスとなります。</p> <p>true を指定した場合： IP アドレスをホスト名に変換します。</p> <p>false を指定した場合： IP アドレスをホスト名に変換しません。</p> <p>true または false 以外の文字列を指定した場合、空文字列または空白文字<sup>*2</sup>を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	false	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.connector.inprocess_http.init_threads	<p>サーバ起動時に生成するインプロセス HTTP サーバのリクエスト処理スレッド数を 1～1024 の整数で指定します。</p> <p>指定する値は、Web クライアントとの最大接続数 (webservice.connector.inprocess_http.max_connections に指定した値) 以下である必要があります。これを超える値を指定した場合、メッセージが出力され、Web クライアントとの最大接続数が値として設定されます。また、有効な最大値は実行する OS によって異なります。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または空白文字<sup>※2</sup>を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	10	—	
webservice.connector.inprocess_http.keep_start_threads	<p>サーバ起動時に作成したスレッド数を維持するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： サーバ起動時に作成したスレッド数を維持します。プールに保持された予備スレッド数が、予備スレッド数の最大数 (webservice.connector.inprocess_http.max_spare_threads に指定した値) を超えた状態でも、サーバ起動時に作成したスレッド数を下回りにません。</p> <p>false を指定した場合： サーバ起動時に作成したスレッド数を維持しません。予備スレッドとして保持する最大数、最小数に従って調節します。</p> <p>また、サーバ起動時に作成したスレッド数が予備スレッド数の最小数 (webservice.connector.inprocess_http.min_spare_threads に指定した値) よりも小さい場合、このプロパティの設定に関係なく予備スレッドの最小数に指定した値でスレッド数が維持されます。</p> <p>このプロパティに false を指定した場合、サーバ起動時に作成したスレッドは予備スレッド数の最大数以下になるように調整されます。サーバ起動時に予備スレッドの最大数より大きい数のリクエスト処理スレッドを作成した場合、予備スレッドの最大数を超えたスレッドは、サーバ起動後に 1 秒間隔で一つずつ破棄されます。</p> <p>true または false 以外の文字列を指定した場合、空文字列または空白文字<sup>※2</sup>を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	false	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webserver.connector.inprocess_http.limit.max_headers	<p>HTTP リクエストに含まれる HTTP ヘッダの個数の上限を 0~32767 の整数で指定します。上限値を設定しない場合は、0 を指定してください。</p> <p>このプロパティで指定した HTTP ヘッダの個数に満たない場合でも、webserver.connector.inprocess_http.limit.max_request_header で指定したサイズを超えた場合はエラーとなります。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または空白文字※2 を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	100	—	
webserver.connector.inprocess_http.limit.max_request_body	<p>HTTP リクエストのリクエストボディの最大サイズ（単位：バイト）を -1~2147483647 の整数で指定します。上限値を設定しない場合は、-1 を指定してください。また、リクエストボディがチャンク形式で送信された場合、チャンクヘッダのサイズも指定するサイズに含める必要があります。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または空白文字※2 を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	-1	—	
webserver.connector.inprocess_http.limit.max_request_header	<p>HTTP リクエストのリクエストヘッダの最大サイズ（単位：バイト）を 7~65536 の整数で指定します。</p> <p>このプロパティで設定したリクエストヘッダの最大サイズに満たない場合でも、webserver.connector.inprocess_http.limit.max_headers で指定した HTTP ヘッダを超えた場合はエラーとなります。</p> <p>また、HTTP ヘッダの終わりを示す改行文字 (CR(0x0d)+LF(0x0a)の 2 バイト) も指定するサイズに含める必要があります。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または空白文字※2 を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	16384	—	
webserver.connector.inprocess_http.limit.max_request_line	<p>リクエストラインの最大長（単位：バイト）を -1 または 7~8190 の整数で指定します。上限値を指定しない場合は、-1 を指定してください。リクエストラインは、HTTP メソッドやクエリ文字列を含む、URI および HTTP バージョンを含みます。</p> <p>指定する値は、リクエストヘッダの最大サイズ (webserver.connector.inprocess_http.limit.max_request_header に指定した値) 以下で</p>	8190	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservers.connector.inprocess_http.limit.max_request_line	<p>ある必要があります。これを超える値を指定した場合は、メッセージが出力され、リクエストヘッダの最大サイズがリクエストラインの最大長として設定されます。</p> <p>また、リクエストラインの終わりを示す改行文字 (CR(0x0d)+LF(0x0a)の2バイト) も指定するサイズに含める必要があります。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または空白文字<sup>※2</sup>を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	8190	—	
webservers.connector.inprocess_http.max_connections	<p>Web クライアントとの最大接続数を 1～1024 の整数で指定します。有効な最大値は実行する OS によって異なります。</p> <p>このパラメタに指定した値がリクエスト処理スレッドの最大値になります。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または空白文字<sup>※2</sup>を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	100	—	
webservers.connector.inprocess_http.max_execute_threads	<p>Web コンテナがリクエストを処理する同時実行数を 1～1024 の整数で指定します。</p> <p>指定する値は、Web クライアントとの最大接続数 (webservers.connector.inprocess_http.max_connections に指定した値) 以下である必要があります。これを超える値を指定した場合は、メッセージが出力され、Web クライアントとの最大接続数が値に設定されます。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または、空白文字<sup>※2</sup>を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	10	—	
webservers.connector.inprocess_http.max_spare_threads	<p>プールに保存する予備スレッドの最大数を 1～1024 の整数で指定します。</p> <p>指定する値は、Web クライアントとの最大接続数 (webservers.connector.inprocess_http.max_connections に指定した値) 以下である必要があります。これを超える値を指定した場合は、メッセージが出力され、Web クライアントとの最大接続数が値に設定されます。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または空白文字<sup>※2</sup>を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	20	—	
webservers.connector.inprocess_http.min_spare_threads	<p>プールに保持する予備スレッドの最小数を 1～1024 の整数で指定します。</p>	5	—	



キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservers.connector.inprocess_http.min_spare_threads	<p>設定する値はプールに保持する予備スレッドの最大数 (webservers.connector.inprocess_http.max_spare_threads に指定した値) 以下である必要があります。プールに保持する予備スレッドの最大数を超える値を設定した場合は、メッセージが出力され、プールに保持する予備スレッドの最大数がプールに保持する予備スレッドの最小数として設定されます。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列、または空白文字*2を指定した場合は、メッセージが出力されデフォルト値が設定されます。</p>	5	—	
webservers.connector.inprocess_http.permitted.hosts	<p>インプロセス HTTP サーバへのアクセスを許可するホストの IP アドレス (10 進表記)、またはホスト名を指定します。複数指定する場合は、IP アドレスまたはホスト名の間をコンマ (,) で区切ります。アクセス制限をしない場合はアスタリスク (*) だけを指定します。</p> <p>なお、ローカルホストは明記しなくても常にアクセスが許可されます。</p> <p>空文字列または空白文字*2を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p> <p>指定されたホスト名が解決できない場合は、メッセージが出力され、ローカルホストからのアクセスだけが許可されます。</p> <p>なお、IP アドレスまたはホスト名の前後の半角スペースは無視されます。</p>	*	—	
webservers.connector.inprocess_http.persistent_connection.max_connections	<p>Persistent Connection で保持する TCP コネクションの最大数を 0~1024 の整数で指定します。</p> <p>設定する値は Web クライアントとの最大接続数 (webservers.connector.inprocess_http.max_connections に指定した値) 以下である必要があります。Web クライアントとの最大接続数を超える値を設定した場合は、メッセージが出力され、Web クライアントとの最大接続数が Persistent Connection で保持する TCP コネクションの最大数として設定されます。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値を指定した場合は、メッセージが出力され、webservers.connector.inprocess_http.max_connections に指定した値がデフォルト値として設定されます。また、空文字列または空白文字*2を指定した場合は、webservers.connector.inprocess_http.max_</p>	webservers.connector.inprocess_http.max_connections に指定した値	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
websrvr.connector.inprocess_http.persistent_connection.max_connections	connections に指定した値がデフォルト値として設定されます。	websrvr.connector.inprocess_http.max_connections に指定した値	—	
websrvr.connector.inprocess_http.persistent_connection.max_requests	Persistent Connection による TCP コネクションを持続したままの連続接続回数の上限を 0~2147483647 の整数で指定します。上限値を設定しない場合は、0 を指定してください。 数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または空白文字*2 を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。	100	—	
websrvr.connector.inprocess_http.persistent_connection.timeout	Persistent Connection で TCP コネクションを持続した状態での、リクエスト待ち時間 (単位: 秒) を 0~3600 の整数で指定します。0 を指定した場合、タイムアウトしません。 数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または空白文字*2 を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。	3	—	
websrvr.connector.inprocess_http.port	インプロセス HTTP サーバが使用するポート番号を 1~65535 の整数で指定します。すでにほかのアプリケーションで使用されているポート番号は指定できません。ほかのアプリケーションで使用されているポート番号や確保されているポート番号を指定した場合、メッセージが出力され、J2EE サーバが起動されません。 数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または空白文字*2 を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。	80	—	
websrvr.connector.inprocess_http.receive_timeout	Web クライアントからのリクエスト受信で、タイムアウトするまでの時間 (単位: 秒) を 0~3600 の整数で指定します。0 を指定した場合、タイムアウトしません。 数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または空白文字*2 を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。	300	—	
websrvr.connector.inprocess_http.redirect.<リダイレクト定義名>.file	リダイレクト機能で、リダイレクト時のレスポンスボディとして使用するファイルを絶対パスで指定します。パスの区切り記号には” / ” を使用します。	なし	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservers.connector.inprocess_http.redirect.<リダイレクト定義名>.file	<p>webservers.connector.inprocess_http.redirect.&lt;リダイレクト定義名&gt;.statusに200を指定した場合、必ずこのプロパティを指定します。</p> <p>webservers.connector.inprocess_http.redirect.&lt;リダイレクト定義名&gt;.statusに200を指定し、このプロパティが指定されていない場合、メッセージが出力され、このリダイレクト定義は無効となります。</p> <p>webservers.connector.inprocess_http.redirect.listで設定されていないリダイレクト定義名を使用してこのプロパティを設定した場合、空文字列または空白文字<sup>*2</sup>を指定した場合、プロパティは無効となります。</p> <p>絶対パスでない値を指定した場合は、メッセージが出力され、このリダイレクト定義は無効となります。存在しないファイルや読み取り権限のないファイルを指定した場合は、J2EEサーバ起動時にメッセージが出力され、このリダイレクト定義は無効となります。</p>	なし	—	
webservers.connector.inprocess_http.redirect.<リダイレクト定義名>.file.content_type	<p>リダイレクト機能で、リダイレクト時のレスポンスのContent-Typeヘッダの値を指定します。</p> <p>webservers.connector.inprocess_http.redirect.listで設定されていないリダイレクト定義名を使用してこのプロパティを設定した場合、プロパティは無効となります。</p> <p>webservers.connector.inprocess_http.redirect.&lt;リダイレクト定義名&gt;.fileを設定していない場合、プロパティは無効となります。</p>	text/html	—	
webservers.connector.inprocess_http.redirect.<リダイレクト定義名>.redirect_url	<p>リダイレクト機能で、リダイレクトURLを絶対URLで指定します。</p> <p>webservers.connector.inprocess_http.redirect.&lt;リダイレクト定義名&gt;.statusに200を指定した場合、このプロパティは設定できません。</p> <p>webservers.connector.inprocess_http.redirect.&lt;リダイレクト定義名&gt;.statusに200を指定し、このプロパティを指定した場合、メッセージが出力され、リダイレクト定義は無効となります。</p> <p>webservers.connector.inprocess_http.redirect.&lt;リダイレクト定義名&gt;.statusに200以外を指定した場合、必ずこのプロパティを指定します。</p> <p>webservers.connector.inprocess_http.redirect.&lt;リダイレクト定義名&gt;.statusに200以外を指定し、このプロパティを指定しなかった場合、メッセージが出力され、そのリダイレクト定義は無効となります。</p>	なし	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservers.connector.inprocess_http.redirect.<リダイレクト定義名>.redirect_url	webservers.connector.inprocess_http.redirect.list で設定されていないリダイレクト定義名を使用してこのプロパティを設定した場合、プロパティは無効となります。 値が正しいかどうかのチェックは行われなため、実際に動作させて確認する必要があります。	なし	—	
webservers.connector.inprocess_http.redirect.<リダイレクト定義名>.request_url	リダイレクト機能で、リダイレクトを行うリクエスト URL をスラッシュ (/) で始まる絶対パスで指定します。ワイルドカード (*) はスラッシュの直後に 1 回だけ指定できます。ワイルドカードは 0 文字以上の任意の文字列を表します。"*"は必ずワイルドカードと解釈されるため、通常の文字としては使用できません。また、ほかのリダイレクト定義で指定した値と同じ値は指定できません。 webservers.connector.inprocess_http.redirect.list で指定したリダイレクト定義名について、必ずこのプロパティを指定する必要があります。指定しなかった場合、メッセージが出力され、そのリダイレクト定義は無効となります。 webservers.connector.inprocess_http.redirect.list で設定されていないリダイレクト定義名を使用してこのプロパティを設定した場合、プロパティは無効となります。 不正な値を指定した場合は、メッセージが出力され、そのリダイレクト定義は無効となります。	なし	—	
webservers.connector.inprocess_http.redirect.<リダイレクト定義名>.status	リダイレクト機能で、リダイレクト時のレスポンスのステータスコード (200, 300, 301, 302, 303, 305, 307) を指定します。 webservers.connector.inprocess_http.redirect.list で設定されていないリダイレクト定義名を使用してこのプロパティを設定した場合、プロパティは無効となります。 不正な値、空文字列または空白文字 <sup>※2</sup> を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。	302	—	
webservers.connector.inprocess_http.redirect.list	リダイレクト機能で使用するリダイレクト定義名を指定します。 このプロパティに指定できる値の最大長は 1024 文字です。リダイレクト定義名は、英数字 (A~Z, a~z, 0~9) またはアンダースコア (_) で構成される文字列で指定します。また、リダイレクト定義名一つの文字列長は 1 文字~32 文字です。 リダイレクト定義名を複数指定する場合は、コンマ (,) で区切ります。コンマの前後の空	なし	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservers.connector.inprocess_http.redirect.list	<p>白文字※2は無視されます。同じリダイレクト定義名は複数回指定できません。</p> <p>不正な値を指定した場合は、メッセージが出力され、すべてのリダイレクト定義は無効となります。</p>	なし	—	
webservers.connector.inprocess_http.rejection_threads	<p>アクセスを拒否するリクエスト処理スレッドの数を0~1023の整数で指定します。指定する値は、リクエスト処理スレッドの最大数 (webservers.connector.inprocess_http.max_connectionsに指定した値) よりも小さくする必要があります。Webクライアントとの最大接続数以上の値を設定した場合は、メッセージが出力され、Webクライアントとの最大接続数よりも1小さい値がアクセスを拒否するリクエスト処理スレッド数として設定されます。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または空白文字※2を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	1	—	
webservers.connector.inprocess_http.response.header.server	<p>レスポンスに自動的に付加する Server ヘッダの値を指定します。</p> <p>空文字列または空白文字※2を指定した場合、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	CosminexusComponentContainer	—	
webservers.connector.inprocess_http.send_timeout	<p>Webクライアントへのレスポンス送信で、タイムアウトするまでの時間 (単位: 秒) を0~3600の整数で指定します。0を指定した場合、タイムアウトは有効になりません。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または空白文字※2を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	300	—	
webservers.connector.limit_max_parameter_count	<p>リクエストパラメータ数の上限値を-1~2147483647の整数で指定します。</p> <p>リクエストパラメータ数の上限値の有効範囲は、リクエストのクエリストリングと、Content-Type ヘッダの値が application/x-www-form-urlencoded または multipart/form-data のフォームデータのパラメータ数の合計とします。</p> <p>リクエストパラメータ数の上限値を設定しない場合は、-1を指定します。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値、空文字列または空白文字を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p> <p>リクエストのパラメータ数が指定した値を超えた場合、APIによって次のように動作し、</p>	10000	09-00	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.connector.limit.max_parameter_count	<p>KDJE39341-W, または KDJE39342-E のメッセージが出力されます。</p> <p>IllegalStateException をスローする API</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>javax.servlet.http.HttpServletRequest.getPart(String)</li> <li>javax.servlet.http.HttpServletRequest.getParts()</li> </ul> <p>読み込んだ分のリクエストパラメータを用いて戻り値を返す API</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>javax.servlet.ServletRequest.getParameter(String)</li> <li>javax.servlet.ServletRequest.getParameterMap()</li> <li>javax.servlet.ServletRequest.getParameterNames()</li> <li>javax.servlet.ServletRequest.getParameterValues(String)</li> </ul>	10000	09-00	
webservice.connector.limit.max_post_form_data	<p>POST リクエストのフォームデータの最大サイズを、-1~2147483647 の整数 (単位: バイト) で指定します。最大サイズを設定しない場合は、-1 を指定します。</p> <p>次の数値または文字列を指定した場合、メッセージが出力され、デフォルト値が適用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>数値以外の文字列</li> <li>指定範囲外の数値</li> <li>空文字列または空白文字</li> </ul> <p>Content-Type ヘッダの値が application/x-www-form-urlencoded の場合:</p> <p>リクエストの Content-Length ヘッダの値が、指定した最大サイズを超える場合、ステータスコード 413 (Request Entity Too Large) エラーが返却され、メッセージ KDJE39336-E が出力されます。</p> <p>リクエストボディがチャンク形式の場合、Servlet API 呼び出しの延長で、受信した POST リクエストサイズが指定した最大値を超えると、java.lang.IllegalStateException をスローし、メッセージ KDJE39336-E が出力されます。</p> <p>Content-Type ヘッダの値が multipart/form-data の場合:</p> <p>Servlet API 呼び出しの延長で、マルチパート形式で受信したフォームデータのうち、ファイル以外のすべてのデータについて、パラメータの名前や値のサイズを合計</p>	2097152	08-50	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservers.connector.limit.max_post_form_data	した値が指定された上限値を超えるかどうか確認します。上限値を超えた場合、java.lang.IllegalStateException がスローされ、メッセージ KDJE39336-E が出力されます。	2097152	08-50	
webservers.connector.redirect_https.port	Web サーバが使用している HTTPS のポート番号を指定します。 1~65535 の整数で指定します。 指定しない場合、HTTPS ポートにリダイレクトしません。 すでにほかのアプリケーションで使用または確保されているポート番号は指定できません。また、複数の J2EE サーバで Web サーバとの通信に使用するポートのポート番号に同じ値を設定しないでください。同一のポート番号を指定した J2EE サーバは cjstartsv コマンドで複数起動できません。	なし	—	

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

#### 注※1

- 有効な最大値は実行するプラットフォームに依存します。
- Web サーバに到着するリクエストの一部が Web コンテナに転送されるため、Web サーバの最大同時接続数は、URL グループ単位、Web アプリケーション単位およびデフォルトの実行待ちキューサイズの総和 + Web コンテナ単位の最大同時実行スレッド数より大きく設定する必要があります。

また、データベース操作をするサーブレットや JSP については、データベースコネクションの数よりも多くの多重度は得られないため、Web コンテナの同時実行数を増やす場合は、利用できるデータベースコネクションの数も増やす必要があります。

性能のチューニング時には、次に示す関係を常に考慮して、各パラメタの値を調整してください。

〈Webサーバの最大同時接続数〉 > 〈URLグループ単位、Webアプリケーション単位およびデフォルトの実行待ちキューサイズの総和〉 + 〈Webコンテナ単位の最大同時実行スレッド数〉

〈Webコンテナ単位の最大同時実行スレッド数〉 ≥ 〈データベースコネクションの数〉

Web コンテナ単位での同時実行スレッド数の制御については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(Web コンテナ)」の「2.16 Web コンテナ単位での同時実行スレッド数の制御」を参照してください。

Web サーバでの処理の同時接続数については Web サーバのマニュアルを参照してください。

#### 注※2

空白文字とは、半角スペース、タブ、LF (0x0a)、CR (0x0d) または FF (0x0c) のことを指します。

#### (a) webservers.container から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.container.ac.logEnabled	<p>Web コンテナの保守用のトレースログを出力するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： トレースログを出力します。</p> <p>false を指定した場合： トレースログを出力しません。</p>	false	—	
webservice.container.jaxws.webservice.no_webxml.enabled	<p>Web サービスのクライアントから SOAP 要求メッセージが到着した際、WAR ファイルに web.xml が完全に、または部分的に含まれていなくても、この製品の JAX-WS 機能を利用して開発した Web サービス実装クラスまたはプロバイダ実装クラスが含まれていれば、SOAP 要求メッセージを受け付けて、Web サービス実装クラスに振り分けるかどうか指定します。</p> <p>strict または true を指定した場合： WAR ファイルに web.xml が含まれない場合、@javax.jws.WebService アノテーション、または @javax.xml.ws.WebServiceProvider アノテーションの情報に基づき、SOAP 要求メッセージを Web サービス実装クラス、またはプロバイダ実装クラスに振り分けます。</p> <p>lax を指定した場合： WAR ファイルに web.xml が完全に、または部分的に含まれない場合、@javax.jws.WebService アノテーション、または @javax.xml.ws.WebServiceProvider アノテーションの情報に基づき、SOAP 要求メッセージを Web サービス実装クラス、またはプロバイダ実装クラスに振り分けます。</p> <p>none または false を指定した場合： WAR ファイルに web.xml が含まれない場合、SOAP 要求メッセージを Web サービス実装クラスに振り分けません。</p> <p>意図しないクラスが誤って URL と関連づけられ、ユーザが外部からアクセス可能な状態になることを防ぐため、デフォルトは none(false) に設定されています。</p>	none	08-00	
webservice.container.jaxws.webservice.wsee.no_webxml.enabled	<p>Web サービスのクライアントから SOAP 要求メッセージが到着した際、設定用の WAR ファイルに web.xml が完全に、または部分的に含まれていなくても、この製品の JAX-WS</p>	lax	08-70	



キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.container.jaxws.webservice.wsee.no_webxml.enabled	<p>機能を利用して開発した Web サービス実装クラスが含まれていれば、SOAP 要求メッセージを受け付けて、Web サービス実装クラスに振り分けるかどうか指定します。</p> <p>strict を指定した場合： 設定用の WAR ファイルに web.xml が含まれない場合、@javax.jws.WebService アノテーションの情報に基づき、SOAP 要求メッセージを Web サービス実装クラスに振り分けます。</p> <p>lax を指定した場合： 設定用の WAR ファイルに web.xml が完全に、または部分的に含まれない場合、@javax.jws.WebService アノテーションの情報に基づき、SOAP 要求メッセージを Web サービス実装クラスに振り分けます。</p> <p>none を指定した場合： 設定用の WAR ファイルに web.xml が含まれない場合、SOAP 要求メッセージを Web サービス実装クラスに振り分けません。</p>	lax	08-70	
webservice.container.jaxws.webservice.wsee.warname	<p>EJB-JAR ファイルに含まれる Web サービス実装クラスに対する、設定用の WAR ファイルのパス名を指定します*1。</p> <p>設定用 WAR ファイルは、ユーザが作成する場合とデプロイ時に自動生成する場合があります。デプロイ時に自動生成する場合は設定不要のプロパティです。</p>	CosminexusWSEEWar	08-70	
webservice.container.server_id.enabled	<p>サーバ ID の Cookie を HTTP レスポンスに付加するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： サーバ ID の Cookie を HTTP レスポンスに付加します。 webservice.container.server_id.value で、サーバ ID を指定してください。</p> <p>false を指定した場合： サーバ ID の Cookie を HTTP レスポンスに付加しません。</p> <p>true または false 以外の文字列を指定した場合、空文字列、または空白文字*2 を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	false	—	
webservice.container.server_id.name	<p>サーバ ID の Cookie を HTTP レスポンスに付加する場合に、Cookie の名前を指定します。1~64 文字の文字列で指定します。半角英数字 (A~Z, a~z, 0~9) またはアンダースコア ( _ ) が使用できます。ただし、次の名</p>	ServerID	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservers.container.server_id.name	<p>前は Web コンテナが使用するため、大文字・小文字の区別なく使用できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• JSESSIONID</li> </ul> <p>注意事項：</p> <p>webservers.container.server_id.enabled キーで true を指定し、このプロパティで Cookie の名前を指定、またはデフォルトの「ServerID」としている場合、webservers.session.cookie_config.name キーで同じ Cookie 名を指定しているとき、このプロパティの値が優先されます。なお、webservers.session.cookie_config.name キーで指定する Cookie 名にはデフォルトが使用されます。</p> <p>不正な値を指定した場合は、警告メッセージが出力されて、デフォルト値が設定されます。</p>	ServerID	—	
webservers.container.server_id.value	<p>サーバ ID の Cookie を HTTP レスポンスに付加する場合に、Cookie の値を指定します。1～64 文字の文字列で指定します。半角英数字 (A～Z, a～z, 0～9) またはアンダースコア ( _ ) が使用できます。</p> <p>webservers.container.server_id.enabled に true を指定した場合に、このプロパティを省略したとき、または不正な値、空文字列、もしくは空白文字<sup>*2</sup>を指定したときは、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	ホスト名と J2EE サーバ名 / Web コンテナサーバ名 (互換機能) からハッシュ関数を用いて生成されます。生成された値は、64 文字の 16 進数です。	—	
webservers.container.servlet.default_mapping.enabled	<p>サーブレットのデフォルトマッピングを有効にするかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： 有効になります。</p> <p>false を指定した場合： 無効になります。</p>	false	08-00	
webservers.container.thread_control.enabled	<p>Web アプリケーション単位の同時実行スレッド数の制御機能を使用するかどうかを指定します。J2EE サーバモードでだけ有効です。</p> <p>true を指定した場合： Web アプリケーション単位の同時実行スレッド数の制御機能を有効にします。</p> <p>false を指定した場合： Web アプリケーション単位の同時実行スレッド数の制御機能を無効にします。</p>	true	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.container.thread_control.queue_size	Web アプリケーション単位の同時実行スレッド数の制御機能を使用する場合に、デフォルトの実行待ちキューサイズを0～2147483647の整数で指定します。J2EEサーバモードでだけ有効です。 ただし、webservice.container.thread_control.enabledにfalseを指定した場合、プロパティは無効になります。	8192	—	「機能解説 基本・開発編 (Web コンテナ)」の「2.17 Web アプリケーション単位の同時実行スレッド数の制御」

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

注※1

設定用 WAR ファイルをユーザが作成する場合は、このプロパティで指定した EAR ファイル内の相対パスに一致するように、設定用 WAR ファイルを作成します。なお、設定用 WAR ファイルには、EJB-JAR ファイルに含まれる Web サービスへの SOAP 要求メッセージを振り分けるための web.xml を含みます。

EJB-JAR ファイルに含まれる Web サービス実装クラスが存在し、設定用の WAR ファイルが存在しない展開ディレクトリ形式のアプリケーションをデプロイする場合、パス名は1～255バイトで指定します。なお、パス名の長さは次の A + B + C の合計です。

A : 展開ディレクトリ形式のアプリケーションのアプリケーションディレクトリのパス長

B : パス区切り文字 (1 バイト)

C : このプロパティに指定したパスの長さ

このプロパティの値を変更するには、EJB の Web サービスを含む Web アプリケーションを停止してください。Web アプリケーションを開始した状態で、プロパティの値を変更した場合、動作は保証されません。ほかのアプリケーションが不正となり、予期しない例外が発生するおそれがあります。

注※2

空白文字とは、半角スペース、タブ、LF (0x0a), CR (0x0d) または FF (0x0c) のことを指します。

#### (am) webservice.context から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.context.check_interval	Web アプリケーションの更新検知インターバルを0～2147483647の範囲 (単位: 秒) の整数で指定します。0を指定した場合、更新の自動検知は行われません。 J2EE アプリケーションのリロード機能が無効の場合、このプロパティは設定できません。設定した場合無視されます。	ejbserver.deploy.context.check_intervalに設定した値 (デフォルト値: 0)	—	「機能解説 基本・開発編 (コンテナ共通機能)」の「13.8 J2EE アプリケーションの更新検知とリロード」

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.context.check_interval	数値以外の文字列、範囲外の数値または空文字列を指定した場合はメッセージを出力し、デフォルト値が設定されます。	ejbserver.deploy.context.check_interval に設定した値(デフォルト値: 0)	—	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「13.8 J2EE アプリケーションの更新検知とリロード」
webservice.context.reload_delay_timeout	Web アプリケーションのリロードの遅延実行機能の最大遅延期間を、負の整数または 0~2147483647 (単位: 秒) で指定します。 0 を指定した場合は、リロードの遅延実行機能は使用されません。 J2EE アプリケーションのリロード機能が無効な場合、このプロパティは設定できません。設定した場合無視されます。 負の整数を指定した場合は、最大遅延期間を設定しないで、リロードの遅延実行機能が使用されます。	0	—	
webservice.context.update_interval	更新するファイルのコピーに必要な時間のインターバルを 0~2147483647 の範囲 (単位: 秒) の整数で指定します。なお、インターバルは余裕のある値にしてください。リソースの更新を検知してから指定したインターバルのあとに、処理中リクエストの監視が開始されます。 JSP のリロード機能が無効の場合、このプロパティは設定できません。設定した場合無視されます。 数値以外の文字列、範囲外の数値または空文字列を指定した場合はメッセージを出力し、デフォルト値が設定されます。	ejbserver.deploy.context.update_interval (デフォルト値: 0)	—	

(凡例)

—: 08-00 より前のバージョンを示します。

#### (an) webservice.dbsfo から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
webservers.dbsfo.attribute_data_size.max	グローバルセッション情報に含めることができる HTTP セッションの属性情報の最大サイズをバイト単位で設定します。	1024	08-00
webservers.dbsfo.check_size.mode	HTTP セッションの属性情報のサイズ見積もり機能 (データベースセッションフェイルオーバー機能) を有効にするかどうかを指定します。  on を指定した場合： HTTP セッションの属性情報のサイズ見積もり機能が有効となります。  off を指定した場合： HTTP セッションの属性情報のサイズ見積もり機能が無効となります。	off	08-00
webservers.dbsfo.connector.name	データベースセッションフェイルオーバー機能で使用する DB Connector の別名を設定します。	COSMINE XUS_SFO_ DBCONNECTOR	08-00
webservers.dbsfo.enabled	データベースセッションフェイルオーバー機能を有効にするかどうかを指定します。  true を指定した場合： J2EE サーバ上のすべての Web アプリケーションでデータベースセッションフェイルオーバー機能が有効となります。  false を指定した場合： データベースセッションフェイルオーバー機能が無効となります。	false	08-00
webservers.dbsfo.exception_type_backcompat	データベースセッションフェイルオーバー機能を抑止する対象リクエストのエラーページ内で HttpServletRequest#getSession メソッドを実行した場合に発生する例外的な互換オプションを指定します。  true を指定した場合： com.hitachi.software.web.dbsfo.DatabaseAccessException 例外をスローします。  false を指定した場合： com.hitachi.software.web.dbsfo.SessionOperationException 例外をスローします。	false	08-70
webservers.dbsfo.exclude.extensions	データベースセッションフェイルオーバー機能を抑止する拡張子を指定します。  URL のパスが指定した拡張子と合致した場合、該当するリクエストでデータベースセッションフェイルオーバー機能は無効となります。指定した拡張子と URL の比較では大文字、小文字の区別はしません。  また、データベースセッションフェイルオーバー機能を抑止する拡張子を設定しない場合、空文字列、またはコンマ「,」を指定します。	txt,html,html,js,css,jpg,gif,js	08-00
webservers.dbsfo.exclude.uris	データベースセッションフェイルオーバー機能を抑止する URI を指定します。リクエスト URI のパスが指定した URI と一致した場合、該当するリクエストはデータベースセッションフェイルオーバー機能が無効となります。	なし	08-50

キー名称	内容	省略値	VR
webservers.dbsfo.exclude.uris	指定した URI とリクエスト URI の比較では大文字、小文字が区別されます。 データベースセッションフェイルオーバ機能を抑止する URI を設定しない場合、空文字列を設定します。	なし	08-50
webservers.dbsfo.integrity_mode.enabled	データベースセッションフェイルオーバ機能の完全性保障モードを有効にするかどうか指定します。 true を指定した場合： 完全性保障モードを有効にします。 false を指定した場合： 完全性保障モードを無効にします。	false	08-70
webservers.dbsfo.negotiation.high_level	データベースセッションフェイルオーバ機能を使用する場合、Web アプリケーション開始で実施するネゴシエーションが失敗したときに、Web アプリケーションの開始処理を続行するか中止するかを指定します。 true を指定した場合： Web アプリケーションの開始処理を中止します。 false を指定した場合： Web アプリケーションの開始処理を続行します。	false	08-70
webservers.dbsfo.session_read_only.uris	データベースセッションフェイルオーバ機能の参照専用リクエストとする URI を指定します。指定できる URI を次に示します。 • スラッシュ (/) から始まる文字列 • 正規化した URI • 512 文字までの URI 複数の URI を指定する場合はセミコロン (;) で区切ります。参照専用リクエストを設定しない場合は、空文字列を指定します。 指定した URI とリクエスト URI が合致した場合、このリクエストは参照専用リクエストになります。指定した URI とリクエスト URI の比較では大文字と小文字を区別します。	なし	08-70
webservers.dbsfo.thread_control_queue.enabled	Web アプリケーション単位の同時実行スレッド数制御機能の有効時にデータベースセッションフェイルオーバ機能を使用する場合に、実行待ちキューの空きが不足したときの動作を指定します。 true を指定した場合： 実行待ちキューの空き不足時にクライアントに 503 エラーを返します。 false を指定した場合： 実行待ちキューの空き不足時にクライアントに 503 エラーを返しません。	false	08-70

## (ao) webservers.eadssfo から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

指定できるキーに関する情報は、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 拡張編」の「7. EADs セッションフェイルオーバ機能」を参照してください。

キー名称	内容	省略値	VR
webservers.eadssfo.application.cache.name	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用するアプリケーション情報キャッシュのキャッシュ名を指定します。	EADsSFO_APP_INFO	09-50
webservers.eadssfo.check_size.mode	HTTP セッションの属性情報のサイズ見積もり機能 (EADs セッションフェイルオーバー機能) を有効にするかどうかを指定します。 on を指定した場合： HTTP セッションの属性情報のサイズ見積もり機能が有効となります。 off を指定した場合： HTTP セッションの属性情報のサイズ見積もり機能は無効となります。	off	09-50
webservers.eadssfo.client.retry.count	EADs セッションフェイルオーバー機能で EADs サーバへのアクセス失敗時にリトライする回数を 1 から 2147483647 までの整数値で指定します※1。	2	09-50
webservers.eadssfo.client.retry.interval	EADs セッションフェイルオーバー機能で EADs サーバへのアクセス失敗時にリトライする間隔 (単位：ミリ秒) を 1 から 2147483647 までの整数値で指定します※1。	2000	09-50
webservers.eadssfo.eads.client.<接続先 EADs サーバ名>.address	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです※3。 Web アプリケーションを開始する際の EADs クライアントの初期設定で接続する EADs サーバの IP アドレスまたはホスト名を指定します。 パラメタの可変部には、 eads.client.node.list に定義した名称を指定します。	なし※2	09-50
webservers.eadssfo.eads.client.<接続先 EADs サーバ名>.port	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです※3。 Web アプリケーションを開始する際の EADs クライアントの初期設定で接続する EADs サーバのポート番号を指定します。パラメタの可変部には、 eads.client.node.list に定義した名称を指定します。	24600	09-50
webservers.eadssfo.eads.client.node.list	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです※3。 Web アプリケーションを開始する際の EADs クライアントの初期設定で、接続する接続先の EADs サーバを識別するための名称を指定します。 複数指定する場合はコンマ(,)で区切ります。複数指定した場合は、その中の一つの EADs サーバに接続します。接続に失敗した場合、別の EADs サーバへの接続を試みます。	なし※2	09-50
webservers.eadssfo.eads.connection.buffer.size	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです※3。 コネクションの読み込み、または書き込みデータの送受信バッファのサイズ (単位：バイト) を指定します。 なお、このプロパティは、EADs サーバに格納するデータのサイズに応じて適切な値を設定する必要があります。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	※4	09-50



## 2 J2EE サーバで使用するファイル

キー名称	内容	省略値	VR
webservers.eadssfo.eads.connection.retry	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです*3。 接続確認での通信失敗時のリトライ回数を指定します。	1	09-50
webservers.eadssfo.eads.connection.timeout	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです*3。 接続確認やデータ送受信の監視時間（単位：ミリ秒）を設定します。	※4	09-50
webservers.eadssfo.eads.connectionPool.poolsize	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです*3。 同一接続先に対してプールしておくコネクションの最大個数を指定します。	※4	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.commdump.enable	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです*3。 EADs クライアントによって出力される電文ダンプの出力を有効にするかどうかを指定します。	※4	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.commTrace.enable	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです*3。 EADs クライアントによって出力される通信トレースの出力を有効にするかどうかを指定します。	true	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.commTrace.filename	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです*3。 EADs クライアントによって出力される通信トレースのファイル数を指定します。	※4	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.commTrace.filesize	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです*3。 EADs クライアントによって出力される通信トレースの 1 ファイル当たりのファイルサイズ（単位：バイト）を指定します。	※4	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.dir	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです*3。 EADs クライアントによって出力されるメッセージログの出力先ディレクトリを指定します。	\$ {ejbserver.log.directory}	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.message.console.enable	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです*3。 EADs クライアントによって出力されるメッセージログの標準出力への出力を有効にするかどうかを指定します。	※4	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.message.filename	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです*3。 EADs クライアントによって出力されるメッセージログのファイル数を指定します。	※4	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.message.filesize	EADs セッションフェイルオーバー機能で使用する EADs のクライアント定義用のプロパティです*3。 EADs クライアントによって出力されるメッセージログの 1 ファイル当たりのファイルサイズ（単位：バイト）を指定します。	※4	09-50



キー名称	内容	省略値	VR
webserver.eadssfo.enabled	EADs セッションファイルオーバ機能を有効にするかどうかを指定します。  true を指定した場合： J2EE サーバ上のすべての Web アプリケーションで EADs セッションファイルオーバ機能が有効となります。  false を指定した場合： J2EE サーバ上のすべての Web アプリケーションで EADs セッションファイルオーバ機能が無効となります。	false	09-50
webserver.eadssfo.exclude.url_patterns	EADs セッションファイルオーバ機能を抑止する URL パターンを指定（完全一致指定、プリフィックス一致指定、拡張子一致指定）します。  指定した URL パターンとリクエスト URI が合致した場合、該当するリクエストで EADs セッションファイルオーバ機能は無効となります。  完全一致指定、プリフィックス一致指定の比較の際、大文字と小文字は区別されます。  拡張子一致指定の比較の際、大文字と小文字は区別されません。  EADs セッションファイルオーバ機能を抑止しない場合は、空文字列を指定してください。  複数の URL パターンを指定する場合は、セミコロン (;) で区切ります。	*.txt;*.htm;*.html;*.jpg;*.gif;*.js	09-50
webserver.eadssfo.session.cache.name	EADs セッションファイルオーバ機能で使用するセッション情報キャッシュのキャッシュ名を指定します。	EADsSFO_SESSIONS	09-50
webserver.eadssfo.session_read_only.url_patterns	EADs セッションファイルオーバ機能での参照専用リクエストとする URL パターンを指定（完全一致指定、プリフィックス一致指定、拡張子一致指定）します。  指定した URL パターンとリクエスト URI が合致した場合、該当するリクエストは参照専用リクエストとなります。  完全一致指定、プリフィックス一致指定の比較の際、大文字と小文字は区別されます。  拡張子一致指定の比較の際、大文字と小文字は区別されません。  参照専用リクエストを設定しない場合は、空文字列を指定してください。  複数の URL パターンを指定する場合は、セミコロン (;) で区切ります。	なし	09-50

## 注※1

リトライ回数(webserver.eadssfo.client.retry.count)×リトライ間隔 (webserver.eadssfo.client.retry.interval) が、障害が発生した EADs サーバが EADs サーバのクラスタ監視でクラスタから削除される間隔よりも大きくなるように値を指定してください。

障害が発生した EADs サーバがクラスタから削除される間隔の最大値は、EADs サーバの設定値から次の式で求められます。

ハートビートの送信間隔 (eads.cluster.heartbeat.interval) × 2 + ハートビートのタイムアウト時間 (eads.cluster.heartbeat.timeout) + (生存確認の接続タイムアウト時間 (eads.cluster.failureDetector.connect.timeout) または生存確認の受信タイムアウト時間 (eads.cluster.failureDetector.read.timeout) の大きい方の値) × (1 + 生存確認タイムアウト時のリトライ回数 (eads.cluster.failureDetector.retry))

## 注※2

省略した場合、KDJE34454-E メッセージが出力され、EADs セッションフェイルオーバー機能を使用する Web アプリケーションの開始に失敗します。

## 注※3

EADs のクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。なお、このキー名称から「webserver.eadssfo.」を除いた名称が EADs のパラメタ名に該当します。

## 注※4

EADs のクライアント定義のデフォルト値が適用されます。

## (ap) webserver.errorpage から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
webserver.errorpage.ack_trace.enabled	例外発生時、デフォルトのエラーページにスタックトレースを出力するかどうかを指定します。  true を指定した場合： スタックトレースを出力します。  false を指定した場合： スタックトレースを出力しません。  true または false 以外の文字列を指定した場合、空文字列または空白文字※を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。	false	—

## (凡例)

—：08-00 より前のバージョンを示します。

## 注※

空白文字とは、半角スペース、タブ、LF (0x0a)、CR (0x0d) または FF (0x0c) のことを指します。

## (aq) webserver.http から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
webserver.http.request.encoding	リクエストボディおよびクエリのデコードに使用する文字エンコーディングを指定します。  デフォルトの文字エンコーディングとして設定できる文字は、JavaVM がサポートしている文字エンコーディングとなります。JavaVM がサポートしている文字エンコーディングについては、JDK のドキュメントのサポートされているエンコーディングに関する説明を参照してください。また、指定できる文字列は、java.nio API 用の正準名と java.lang API 用の正準名に記載されている文字エンコーディング、およびそれらの別名となります。	なし	—
webserver.http.request.uri_decode.enabled	サブレットパス、追加のパス情報をデコードするかどうかを指定します。	false	08-00

キー名称	内容	省略値	VR
webservice.http.request.uri_decode.enabled	true を指定した場合： デコードします。 false を指定した場合： デコードしません。	false	08-00
webservice.http.response.encoding	レスポンスボディのエンコードに使用する文字エンコーディングを指定します。 デフォルトの文字エンコーディングとして設定できる文字は、JavaVM がサポートしている文字エンコーディングとなります。JavaVM がサポートしている文字エンコーディングについては、JDK のドキュメントのサポートされているエンコーディングに関する説明を参照してください。また、指定できる文字列は、java.nio API 用の正準名と java.lang API 用の正準名に記載されている文字エンコーディング、およびそれらの別名になります。	なし	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

#### (ar) webservice.jsp から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.jsp.additional.import.list	JSP コンパイル時に暗黙にインポートしたいクラス名 (完全修飾名のクラス名または、「パッケージ名.*」) を指定します。複数のクラス名を指定する場合は、クラス名とクラス名の間をコンマ (,) で区切ります。存在しないクラス名や、クラスパスの通っていないクラス名など不正な値を指定した場合、メッセージを出力し、コンパイルエラーになります。	なし	08-70	
webservice.jsp.check_interval	JSP の更新検知インターバルを 0～2147483647 の範囲 (単位: 秒) の整数で指定します。 0 を指定した場合、更新の自動検知は行われません。 JSP のリロード機能が無効の場合、このプロパティは設定できません。設定した場合無視されます。 数値以外の文字列、範囲外の数値または空文字列を指定した場合はメッセージを出力し、デフォルト値が設定されます。	ejbserver.deploy.context.check_interval に設定した値 (デフォルト値: 0)	—	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「13.8 J2EE アプリケーションの更新検知とリロード」

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservr.jsp.compile.ba ckcompat	<p>JSP から生成されたサープレットの java ソースのコンパイル時に、Java コンパイラの Java 言語仕様のバージョンを指定します。このプロパティは、JSP ファイル内のスクリプティングで Java SE 8 の言語仕様に反したコーディングをしており、JSP から生成されたサープレットのソースファイルがコンパイルできない場合に指定します。JSP から生成されたサープレットのソースファイルのコンパイルが正常にできている場合、このプロパティの指定は不要です。指定できる値を次に示します。</p> <p>1.7 または 7 :</p> <p>Java SE 7 の言語仕様に依存したソースコードを JSP ファイルのスクリプティングに記述している場合に指定します。</p> <p>1.6 または 6 :</p> <p>Java SE 6 の言語仕様に依存したソースコードを JSP ファイルのスクリプティングに記述している場合に指定します。</p> <p>1.5 または 5 :</p> <p>Java SE 5.0 の言語仕様に依存したソースコードを JSP ファイルのスクリプティングに記述している場合に指定します。</p> <p>1.4 :</p> <p>J2SE 1.4 の言語仕様に依存したソースコードを JSP ファイルのスクリプティングに記述している場合に指定します。</p> <p>1.3 :</p> <p>J2SE 1.3 の言語仕様に依存したソースコードを JSP ファイルのスクリプティングに記述している場合に指定します。</p> <p>1.2 :</p> <p>J2SE 1.2 の言語仕様に依存したソースコードを JSP ファイルのスクリプティングに記述している場合に、指定します。</p> <p>true :</p> <p>J2SE 1.2 の言語仕様に依存したソースコードを JSP ファイルのスクリプティングに記述している場合に、指定します。</p>	false	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webserver.jsp.compile.backupcompat	<p>false :</p> <p>JSP ファイル内にスクリプティングを記述していない場合、スクリプティングを記述している場合でも Java SE 7 以前のバージョンに依存しない場合に指定します。</p> <p>Java SE 8 の Java 言語仕様に従って Java ソースファイルをコンパイルします。</p> <p>指定可能なパラメタ値以外の文字列、空文字列または空白文字※を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	false	—	
webserver.jsp.el2_2.enabled	<p>EL2.1 と EL2.2 の処理系を切り替えます。</p> <p>true :</p> <p>EL2.2 が使用されます。</p> <p>false :</p> <p>EL2.1 が使用されます。</p>	true	09-00	
webserver.jsp.precompile.jsp_work_dir	<p>JSP 事前コンパイル機能によって生成された JSP ファイルのコンパイル結果の格納先ディレクトリ名を指定します。</p> <p>ディレクトリ名は、半角の英数字 (A~Z, a~z, 0~9) またはアンダースコア ( _ ) で構成される文字列で指定します。</p> <p>不正な値を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。また、予約語である次の文字列を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• classes</li> <li>• lib</li> <li>• tags</li> </ul>	cosminexus_jsp_work	—	
webserver.jsp.keepgenerated	<p>JSP ファイル、またはタグファイルのコンパイルで生成された java ファイルを保持するかどうかを指定します。</p> <p>次の値を指定します。</p> <p>true を指定した場合 :</p> <p>java ファイルを保持します。</p> <p>false を指定した場合 :</p> <p>java ファイルを保持しません。</p>	false	—	
webserver.jsp.pageEncoding	<p>JSP の文字エンコーディングを指定します。デフォルトの文字エンコーディングとして設定できる文字は、</p>	なし	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservers.jsp.pageEncoding	JavaVM がサポートしている文字エンコーディングとなります。 JavaVM がサポートしている文字エンコーディングについては、JDK のドキュメントのサポートされているエンコーディングに関する説明を参照してください。また、指定できる文字列は、java.nio API 用の正準名と java.lang API 用の正準名に記載されている文字エンコーディング、およびそれらの別名になります。	なし	—	
webservers.jsp.translation.backcompat.customAction.declareVariable	複数のカスタムタグで、スクリプト変数名とスクリプト変数のスコープが重複する場合、JSP ファイルから生成された Java コードで 2 回目のカスタムタグに対応するスクリプト変数の変数宣言を出力するかどうかを指定します。  true : 2 回目以降のスクリプト変数を宣言します。  false : 2 回目以降のスクリプト変数を宣言しません。(*)スクリプト変数のスコープは、 javax.servlet.jsp.tagext.TagExtraInfo クラスのサブクラス、または TLD ファイルの variable 要素内の scope 要素で指定できます。	false	—	
webservers.jsp.translation.backcompat.tag.noCheckRtexprvalue	Expression が指定できないタグの属性値に Expression が指定されているかどうかを検証するかどうかを指定します。  true : Expression が指定されているかどうかを検証しません。  false : Expression が指定されているかどうかを検証します。	false	—	
webservers.jsp.translation.backcompat.tag.rtexprvalueTerminate	タグの属性値が、「<%=」または「<%=」で開始しており、「%>」(「<%=」で開始した場合は「%>」)で終了していない属性値の「」(または「」)で囲まれた値を文字列として扱うかどうかを指定します。  true : 「」までを文字列として扱います。	false	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webserver.jsp.translation.backcompat.tag.rtxprvalueTerminate	false : 「%>」までを属性値とします。	false	—	
webserver.jsp.translation.backcompat.taglib.noCheckPrefix	taglib ディレクティブの前に、taglib ディレクティブで指定した prefix を使用したカスタムタグを記述しているかチェックするかどうかを指定します。  true : チェックしない。  false : チェックする。	false	—	
webserver.jsp.translation.backcompat.useBean.noCheckClass	JSP トランスレーション時に <jsp:useBean>タグのクラス属性値のチェック処理を実行するかどうかを指定します。  true : クラス属性値をチェックしません。  false : クラス属性値をチェックします。	false	—	
webserver.jsp.update.interval	JSP のリロード監視対象ファイルのコピーに必要な時間のインターバルを 0~2147483647 の範囲 (単位: 秒) の整数で指定します。なお、インターバルは余裕のある値にしてください。JSP ファイルの更新を検知してから指定したインターバルのあとに、JSP のリロードが実行されます。  JSP のリロード機能が無効の場合、このプロパティは設定できません。設定した場合無視されます。  数値以外の文字列、範囲外の数値または空文字列を指定した場合はメッセージを出力し、デフォルト値が設定されます。	ejbserver.deploy.context.update.interval に設定した値 (デフォルト値: 0)	—	
webserver.jsp.translation.customAction.ignoreCaseAttributeName	カスタムタグで指定された属性が、TLD ファイルもしくはタグファイルで定義されているかどうかをチェックする際に、大文字小文字を区別するかどうかを指定します。  true を指定した場合: 大文字小文字を区別しません。  false を指定した場合: 大文字小文字を区別します。	false	08-00	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.jsp.translation.useBean.noCheckDuplicateId	<jsp:useBean>タグの id 属性値が重複しているかどうかをチェックします。true の場合、id 属性値が重複してもトランスレーションエラーは発生しません。false の場合、id 属性値が重複している時にトランスレーションエラーが発生します。	false	08-00	
webservice.jsp.tld.mapping.java_ee_tag_library.enabled	Servlet2.5 仕様以降の Web アプリケーションで、Java EE 仕様に含まれるタグライブラリ (JSTL, JSF) の TLD と URL のマッピングを自動的に実行するかどうかを指定します。 true を指定した場合： 自動的にマッピングします。 false を指定した場合： 自動的にマッピングしません。 また、Servlet2.5 仕様以降の Web アプリケーションでアプリケーションサーバが提供するタグライブラリ (JSTL, JSF) 以外を使用する場合は、false を指定してください。	true	08-00	
webservice.jsp.jsp_page_bom.enabled	Servlet2.5 仕様以降の Web アプリケーションの JSP ページで、BOM による文字エンコーディングの指定を有効にするかどうかを指定します。 true を指定した場合： BOM による文字エンコーディングの指定が有効になります。 false を指定した場合： BOM による文字エンコーディングの指定が無効になります。	true	08-00	
webservice.jsp.debugging.enabled	JSP デバッグ機能を有効にするかどうかを指定します。なお、このプロパティは J2EE サーバモードにだけ有効です。 true を指定した場合： JSP デバッグ機能が有効となり JSP ファイルから作成されたサーブレットの class ファイルに SMAP を埋め込みます。 false を指定した場合： JSP デバッグ機能が無効になります。	false	08-00	

(凡例)

- : 08-00 より前のバージョンを示します。

注※

空白文字とは、半角スペース、タブ、LF (0x0a)、CR (0x0d) または FF (0x0c) のことを指します。



## (as) webserver.logger から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
webserver.logger.access_log.inprocess_http_enabled	<p>インプロセス HTTP サーバのアクセスログ機能の有効・無効を設定します。</p> <p>true を指定した場合： アクセスログ機能を有効にします。</p> <p>false を指定した場合： アクセスログ機能を無効にします。</p> <p>true または false 以外の文字列を指定した場合、空文字列または空白文字<sup>*1</sup>を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	true	—
webserver.logger.access_log.format_list	<p>インプロセス HTTP サーバのアクセスログ機能で使用するフォーマット名を指定します。</p> <p>指定できる文字列の最大長は 1024 文字です。フォーマット名は、英数字 (A~Z, a~z, 0~9) またはアンダースコア ( ) で構成される文字列で指定します。また、一つ当たりのフォーマット名の文字列長は最大 32 文字です。format_list と mode_list は不正なフォーマット名として扱われるため、フォーマット名に指定できません。フォーマット名を複数指定する場合は、コンマ (,) で区切ります。一つ目に設定されたフォーマット名が指すフォーマット名はデフォルトのフォーマット名として扱われます。また、同じフォーマット名を複数回指定できません。common と combined はアクセスログ機能での予約フォーマットのため指定できません。</p> <p>(設定形式)</p> <p>&lt;フォーマット名&gt;[,&lt;フォーマット名&gt;]* ([* : ]部分の 0 回以上の繰り返しを示します)</p> <p>次の場合はメッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>文字列が何も指定されていない。</li> <li>フォーマット名が 32 文字を超えた。</li> <li>不正なフォーマット名を指定した。</li> <li>プロパティに指定できる値の最大長が 1024 文字を超えた。</li> <li>同じフォーマット名を複数回指定した。</li> <li>予約フォーマットの common, combined のどちらか、または両方を削除した。</li> </ul>	common,combined	—
webserver.logger.access_log.<フォーマット名>	<p>&lt;フォーマット名&gt;で定義されるアクセスログのフォーマットの形式<sup>*2</sup>をフォーマット引数で指定します。</p> <p>指定できる値の最大長は 1024 文字です。使用できる文字は、ASCII コードの 32 (10 進数) 以上 127 (10 進数) 未満の文字です。</p> <p>webserver.logger.access_log.format_list に定義されたすべてのフォーマット名について、webserver.logger.access_log.&lt;フォーマット名&gt;を設定する必要があります。</p> <p>webserver.logger.access_log.format_list に定義されていないフォーマット名でこのプロパティを設定した場合、プロパティは無効</p>	%h %l %u %t "%r" %>s %b	—

キー名称	内容	省略値	VR
webservers.logger.access_log.<フォーマット名>	<p>となります。ただし、common と combined のフォーマット名は指定する必要はありません。common と combined のフォーマット名を指定した場合は、無効となります。</p> <p>文字列が何も指定されていない場合、フォーマット形式が 1024 文字を超えた場合、または範囲外の文字を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	%h %l %u %t "%r" %>s %b	—
webservers.logger.access_log.inprocess_http.filename	<p>インプロセス HTTP サーバのアクセスログ機能で使用するログを出力するファイル名<sup>*3</sup>を絶対パスで指定します。指定できる値の最大長は 210 文字です。</p> <p>210 文字を超えた文字列を指定した場合、範囲外の数値や文字を指定した場合、または文字列が何も指定されていない場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p> <p>指定したディレクトリが存在しない場合は、ディレクトリが作成されます。ディレクトリが作成されなかった場合は、J2EE サーバの起動に失敗します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;%ejb%&lt;サーバ名称&gt; %logs %http %cjhttp_access.inprocess_http</li> <li>UNIX の場合 &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;/ejb/&lt;サーバ名称&gt;/logs/http/cjhttp_access.inprocess_http</li> </ul>	—
webservers.logger.access_log.inprocess_http.fileenum	<p>インプロセス HTTP サーバの Web コンテナのログファイルの面数を 1~256 の整数で指定します。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値を指定した場合、または文字列が何も指定されていない場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	16	—
webservers.logger.access_log.inprocess_http.filesize	<p>インプロセス HTTP サーバのアクセスログファイルのサイズ（単位：バイト）を 4096~2147483647 の整数で指定します。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値を指定した場合、または文字列が何も指定されていない場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p> <p>なお、アクセスログファイルのラップアラウンドの判定はログを書き込む前に行われるため、指定したファイルサイズを超える場合があります。</p>	4194304	—

キー名称	内容	省略値	VR
webservers.logger.access_log.inprocess_http.us age_format	インプロセス HTTP サーバのアクセスログ機能で使用するフォーマットを選択します。 文字列が何も指定されていない場合、定義されていないフォーマット名を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。	common	—
webservers.logger.com munication_trace.inpro cess_http.filenum	インプロセス HTTP サーバの通信トレース機能のログファイルの面数を 1～256 の整数で指定します。 数値以外の文字列や範囲外の数値を指定した場合、または文字列が何も指定されていない場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。	16	—
webservers.logger.threa d_trace.inprocess_http. filenum	インプロセス HTTP サーバのスレッドトレース機能のログファイルの面数を 1～256 の整数で指定します。数値以外の文字列や範囲外の数値を指定した場合、または文字列が何も指定されていない場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。	16	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

注※1

空白文字とは、半角スペース、タブ、LF (0x0a)、CR (0x0d) または FF (0x0c) のことを指します。

注※2

指定できるフォーマット引数と出力例を次の表に示します。

フォーマット引数	出力内容	出力例
%	% 記号。	%
%a	Web クライアントの IP アドレス。	10.20.30.40
%A	J2EE サーバの IP アドレス。	10.20.30.100
%b	HTTP ヘッダを除く送信バイト数。0 バイトのときは「-」となります。	2048
%B	HTTP ヘッダを除く送信バイト数。0 バイトのときは「0」となります。	1024
%h	Web クライアントのホスト名または IP アドレス。ホスト名が得られない場合は IP アドレスとなります。	10.20.30.40
%H	リクエストプロトコル。	HTTP/1.1
%l	リモートログ名 (RFC 1413 で規定されている Identification プロトコルによって得られる Web クライアント側のユーザ名)。	-
%m	リクエストメソッド。	GET
%p	Web クライアントからのリクエストを受け付けたポート番号。	80
%q	クエリ文字列。「?」から始まります。クエリ文字列がない場合は空文字となります。	?id=100&page=15

フォーマット引数	出力内容	出力例
%r	リクエストライン。	GET /index.html HTTP/1.1
%>s	最終ステータスコード（内部リダイレクトされた値は出力しません）。	200
%S	ユーザのセッション ID。セッション ID がない場合は「-」となります。 %S で表示されるメモリセッション ID はクッキー名 JSESSIONID の値であり、セッションフェイルオーバー機能でのグローバルセッション ID とは異なります。グローバルセッション ID を出力する場合は、%(GSESSIONID)c を指定します。GIDCookieName を変更した場合は、変更した GIDCookieName の値を指定します。	00455AFE4DA4E7B778 9F247B8FE5D605
%t	Web クライアントからのリクエストの処理を開始した時刻 [dd/MMM/YYYY:HH:mm:ss Z]。	[18/Jan/2005:13:06:10 +0900]
%T	Web クライアントのリクエストの処理に要した時間（単位：秒）。	2
%d	Web クライアントからのリクエストの処理を開始した時刻。次の形式で表示します。[dd/MMM/YYYY:HH:mm:ss.nnn Z] (nnn はミリ秒)	[18/Jan/ 2005:13:06:10.152 +0900]
%D	Web クライアントのリクエストの処理に要した時間（単位：ミリ秒）。	2000
%u	ベーシック認証ユーザ名、またはフォーム認証ユーザ名。認証ユーザ名がない場合は「-」となります。	user
%U	リクエストファイルパス。	/index.html
%v	J2EE サーバのローカルホスト名。	server
%{foo}i	リクエストヘッダ foo の内容。foo ヘッダが存在しない場合は「-」になります。 一度の HTTP リクエストまたは HTTP レスポンスで同じヘッダ名が複数回送信された場合、最初に読み込んだヘッダの内容を出力します。	%{Host}i の場合 www.example.com:8888
%{foo}c	Web クライアントが送信した Cookie 情報で Cookie の名前が foo の内容。Cookie の名前に foo がない場合は「-」になります。	%{JSESSIONID}c の場合 00455AFE4DA4E7B778 9F247B8FE5D605
%{foo}o	レスポンスヘッダ foo の内容。foo ヘッダが存在しない場合は「-」になります。 一度の HTTP リクエストまたは HTTP レスポンスで同じヘッダ名が複数回送信された場合、最初に読み込んだヘッダの内容を出力します。	%{Server}o の場合 CosminexusComponent Container

注※3

ファイル名の末尾に<連番>.log が追加されます。

#### (at) webserver.servlet から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
webservice.servlet_api.exception.getCause.backcompat	<p>javax.servlet.ServletException のコンストラクタ ServletException (String, Throwable) および ServletException (Throwable) で指定した根本原因の例外を getCause() により取得できないようにします。</p> <p>同様に javax.servlet.jsp.JspException のコンストラクタ JspException (String, Throwable) および JspException (Throwable) で指定した根本原因の例外を getCause() により取得できないようにします。</p> <p>true を指定した場合： 根本原因の例外を取得できません。</p> <p>false を指定した場合： 根本原因の例外を取得できます。</p>	false	08-00

#### (au) webservice.ServletContainerInitializer.jar から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
webservice.ServletContainerInitializer.jar.include.path	ServletContainerInitializer の実装クラスを含む JAR ファイルのパスを絶対パスで指定します。複数のパスを指定する場合は、コンマ (,) で区切ります。ディレクトリの区切り文字はスラッシュ (/) を使用します。	なし	09-00

#### (av) webservice.session から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.session.cookie_config.http_only	<p>Web アプリケーションで作成される HTTP セッションのセッション ID を示す HTTP Cookie に HttpOnly 属性を付けるかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： Web アプリケーションで作成される HTTP セッションのセッション ID を示す HTTP Cookie に HttpOnly 属性を付けます。</p>	false	09-50	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.session.cookie_config.http_only	false を指定した場合： Web アプリケーションで作成される HTTP セッションのセッション ID を示す HTTP Cookie に HttpOnly 属性を付けません。	false	09-50	
webservice.session.cookie_config.name	Web アプリケーションで作成される HTTP セッションのセッション ID を示す HTTP Cookie の名称、または URL のパスパラメータ名を指定します。 注意事項： webservice.container.server_id.enabled キーで true を指定している場合、 webservice.container.server_id.name キーと異なる値を指定してください。 webservice.container.server_id.name キーと同じ値を指定すると、 webservice.container.server_id.name キーでの値が優先されます。このキーで指定する Cookie 名にはデフォルトが使用され、ワーニングメッセージ (KDJE39008-W) が出力されません。	HTTP Cookie の名称の場合 JSESSIONID URL のパスパラメータ名の場合 jsessionid	09-50	
webservice.session.delete_cookie.backcompat	HTTP セッションを無効にした場合、Web クライアントが保持するセッション ID を示す HTTP Cookie を削除するかどうかを設定します。 true を指定した場合： HTTP セッションを無効化した場合、Web クライアントが保持するセッション ID を示す HTTP Cookie を削除しません。 false を指定した場合： HTTP セッションを無効化した場合、HTTP レスポンスのヘッダに Web クライアントが保持するセッション ID を示す HTTP Cookie を削除するための HTTP Cookie を付加します。	false	08-00	
webservice.session.max_log_interval	次に示すメッセージのインターバルを、0~2147483647 の整数 (単位：秒) で指定します。 • KDJE34380-E データベースセッションフェイルオーバー機能使用時にデータベース	60	—	

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webserver.session.max.logging_interval	<p>のレコード数を超過して HttpSession オブジェクトを生成しようとした場合に出力されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• KDJE39225-E HttpSession 数の上限値を超過して HttpSession オブジェクトを生成しようとした場合に出力されます。</li> </ul> <p>メッセージ KDJE39225-E が出力されてからこのプロパティで指定したインターバルの間、メッセージ KDJE39225-E の出力を抑制します。0 を指定した場合、メッセージ KDJE39225-E の出力を抑制しません。なお、この設定は Web アプリケーション単位に適用されます。数値以外の文字列や範囲外の数値を指定した場合は、警告メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	60	—	
webserver.session.max.throughHttpSessionLimitExceededException	<p>HTTP セッションオブジェクト数が上限値を超えた時に、com.hitachi.software.web.session.HttpSessionLimitExceededException 例外をスローするかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： java.lang.IllegalStateException 例外の派生クラスである com.hitachi.software.web.session.HttpSessionLimitExceededException 例外をスローします。</p> <p>false を指定した場合： java.lang.IllegalStateException 例外をスローします。</p>	false	08-00	
webserver.session.server_id.enabled	<p>セッション ID にサーバ ID を付加するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： セッション ID にサーバ ID を付加します。</p> <p>false を指定した場合： セッション ID にサーバ ID を付加しません。</p> <p>通常は true を指定し、webserver.session.server_id.value で、サーバ ID を指定してください。06-51 以前から 06-70 以降に移行す</p>	true	—	「機能解説 基本・開発編(Web コンテナ)」の「2.7 セッション管理機能」

キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webserversession.server_id.enabled	<p>ると、このプロパティのデフォルト値が false から true に変更になります。true の場合は、false の場合に比べてセッション ID の文字列長がサーバ ID の長さ分増加します。これによって問題が発生する場合、次の対処をしてください。</p> <p>負荷分散機によって複数の Web コンテナでシステムを冗長構成にしている場合：</p> <p>    false を指定し、サーバ ID をセッション ID に付加しないでください。</p> <p>負荷分散機によって複数の Web コンテナでシステムを冗長構成にしている場合：</p> <p>    true を指定し、セッション ID の文字列長が増加することで発生する問題を対策してください。false を指定した場合、動作は保証できません。</p> <p>true または false 以外の文字列を指定した場合、空文字列または空白文字※を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	true	—	「機能解説 基本・開発編(Web コンテナ)」の「2.7 セッション管理機能」
webserversession.server_id.value	<p>セッション ID に付加するサーバ ID を、1～64 文字の文字列で指定します。半角英数字 (A～Z, a～z, 0～9) またはアンダースコア ( _ ) が使用できます。</p> <p>webserversession.server_id.enabled に true を指定し、このプロパティを省略した場合、またはプロパティに不正な値、空文字列、もしくは空白文字※を指定した場合、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。</p>	ホスト名と J2EE サーバ名 / Web コンテナサーバ名 (互換機能) からハッシュ関数を用いて生成されます。生成される値は、64 文字の 16 進数です。	—	「機能解説 基本・開発編(Web コンテナ)」の「2.7 セッション管理機能」
webserversession.tracking_mode	<p>Web アプリケーションで作成される HTTP セッションの管理方法を指定します。COOKIE, URL, または両方を指定できます。両方のセッション管理方法を指定する場合は COOKIE と URL の間をコンマ ( , ) で区切ります。なお、COOKIE または URL の前後の半角スペースは無視されます。</p> <p>COOKIE だけを指定した場合</p> <p>    HTTP Cookie によるセッション管理だけが有効となります。この</p>	COOKIE, URL	09-50	



キー名称	内容	省略値	VR	関連情報
webservice.session.tracking_mode	<p>とき、URL 書き換えにより生成される文字列にセッション ID を示す URL パスパラメータを含みません。</p> <p>URL だけを指定した場合 URL 書き換えによるセッション管理だけが有効となります。このとき、レスポンスにセッション ID を示す HTTP Cookie の情報を含みません。</p> <p>COOKIE と URL の両方を指定した場合： HTTP Cookie によるセッション管理と URL 書き換えによるセッション管理が有効となります。</p>	COOKIE, URL	09-50	

(凡例)

－：08-00 より前のバージョンを示します。

注※

空白文字とは、半角スペース、タブ、LF (0x0a)、CR (0x0d) または FF (0x0c) のことを指します。

#### (aw) webservice.static から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
webservice.static_content.cache.enabled	<p>静的コンテンツキャッシュ機能の有効/無効/強制的な無効を指定します。</p> <p>true を指定した場合： 静的コンテンツキャッシュ機能を有効にします。</p> <p>false を指定した場合： 静的コンテンツキャッシュ機能を無効にします。</p> <p>forceoff を指定した場合： DD ファイル (web.xml) またはアプリケーション属性ファイルで静的コンテンツキャッシュが有効と設定されていても、キャッシュ機能を強制的に無効にします。</p> <p>このプロパティが false および forceoff の場合、webservice.static_content.cache.size, webservice.static_content.cache.filesize.threshold の設定は無効となります。</p> <p>DD ファイル (web.xml) またはアプリケーション属性ファイルで、静的コンテンツキャッシュ機能の有効/無効が設定されていない Web アプリケーションでは、このプロパティに指定した値が有効になります。また、静的コンテンツキャッシュ機能の有効/無効が設定されている Web アプリケーションではこのプロパティに指定した値は無効となります。ただし、forceoff を指定した場合は、</p>	false	－

キー名称	内容	省略値	VR
webservice.static_content.cache.enabled	DD ファイル (web.xml) またはアプリケーション属性ファイルの設定に関係なく、このプロパティに指定した値が有効になります。 true, false, forceoff 以外の文字列、空文字列または空白文字※を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。	false	—
webservice.static_content.cache.size	静的コンテンツキャッシュ機能が有効な場合、メモリにキャッシュできるサイズ (単位: バイト) の上限を 0~2147483647 の整数で指定します。 Web アプリケーション単位で、キャッシュの合計サイズが指定した値を超えた場合は、アクセスされていない時間が最も長いキャッシュから削除していき、キャッシュの合計サイズが指定した値以下になるまでキャッシュの削除が繰り返されます。 0 を指定した場合、キャッシュできるサイズに上限を設けません。 DD (web.xml) またはアプリケーション属性ファイルで、キャッシュできるメモリサイズが設定されていない Web アプリケーションでは、このプロパティに指定した値が有効となります。また、キャッシュできるメモリサイズが設定されている Web アプリケーションでは、このプロパティに指定した値は無効となります。 無効な値、webservice.static_content.cache.filesize.threshold で指定した値よりも小さい値、空文字列または空白文字※を指定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。	10485760	—
webservice.static_content.cache.filesize.threshold	静的コンテンツキャッシュ機能が有効な場合、キャッシュできるファイルサイズ (単位: バイト) を 0~2147483647 の整数で指定します。 指定した値を超えるサイズのファイルはキャッシュされません。 0 を指定した場合、キャッシュできるファイルのサイズに上限を設けません。 DD (web.xml) またはアプリケーション属性ファイルで、キャッシュできるファイルサイズが設定されていない Web アプリケーションでは、このプロパティに指定した値が有効になります。また、キャッシュできるファイルサイズが設定されている Web アプリケーションでは、このプロパティに指定した値は無効となります。 無効な値、webservice.static_content.cache.size で指定した値より大きい値、空文字列または空白文字※を設定した場合は、メッセージが出力され、デフォルト値が設定されます。	524288	—
webservice.static_content.encoding.extension	静的コンテンツに使用する文字エンコーディングを適用させる拡張子を指定します。webservice.http.response.encoding キーが指定されている場合に有効になります。 キーの値に何も設定しない場合、このキーは無効になります。	なし	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

注※

空白文字とは、半角スペース、タブ、LF (0x0a)、CR (0x0d) または FF (0x0c) のことを指します。

## (ax) webservice.work から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
webserver.work.clean	JSP 用テンポラリディレクトリ下に生成したディレクトリをサーバ起動時、および終了時に削除するかどうかを指定します。  true が指定された場合： ディレクトリを削除します。  false が指定された場合： ディレクトリを削除しません。	false	—
webserver.work.directory	JSP 用テンポラリディレクトリを指定します。絶対パスによるディレクトリ名を指定します。*  ディレクトリのパスの区切り記号には、"/"を使用してください。 例えば、Windows の場合、work ディレクトリとして C:¥temp ¥work を設定するときは、次のように指定します。 (指定例) webserver.work.directory=c:/temp/work	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt; ¥CC ¥server ¥repository¥&lt;サーバ名称&gt; ¥web</li> <li>UNIX の場合 /opt/ Cosmin exus/C C/ server/ repository/&lt;サーバ名称 &gt;/web</li> </ul>	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

注※

使用する OS によってファイル名長に制限があります。例えば、Windows では 250 バイト程度となっています。このため、ディレクトリ階層の深い場所でサーブレットや JSP を実行できません。特に JSP ファイルから生成されるファイル名は Web アプリケーションで配置されたディレクトリ階層の深さに比例して長くなり、JSP ファイルに対する Java ファイルを生成できないことがあります。これを回避するためには Web アプリケーションの配置ディレクトリの階層を浅くしたり、プロパティ webserver.work.directory に絶対パスで浅いディレクトリ階層を指定したりすることで回避してください。Application Server の作業ディレクトリについては、マニュアル「アプリケーションサーバシステム構築・運用ガイド」の「付録 C.1 J2EE サーバの作業ディレクトリ」を参照してください。

#### (ay) webserver.xml から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	省略値	VR
webserver.xml.validate	<p>Servlet 2.3 の Web アプリケーションについて、タグライブラリ・ディスクリプタ (TLD ファイル) が、DTD で記述されたスキーマに沿って記述されているかチェックするかどうかを指定します。</p> <p>J2EE サーバモードで起動した場合の web.xml, および Servlet 2.4 以降の Web アプリケーションの TLD ファイルには、このプロパティの指定は無効となります。また、Servlet 2.4 以降の Web アプリケーションに含まれる TLD ファイルは TLD のバージョンにかかわらずすべてチェックされます。</p> <p>次の値を指定します。</p> <p>true を指定した場合： タグライブラリ・ディスクリプタだけをチェックします。</p> <p>false を指定した場合： チェックしません。</p>	true	—

(凡例)

— : 08-00 より前のバージョンを示します。

## (6) 記述例

```
ejbserver.server.j2ee.feature=1.4
```

```
ejbserver.deploy.stub.generation.scope=ejb
ejbserver.compiler.jvm.maxHeapSize=256m
ejbserver.compiler.jvm.minHeapSize=32m
```

```
ejbserver.naming.host=localhost
ejbserver.naming.port=900
ejbserver.naming.protocol=corbaname
ejbserver.naming.startupMode=inprocess
ejbserver.naming.startupWaitTime=1
ejbserver.naming.startupRetryCount=9
```

```
ejbserver.logger.enabled.*=Error,Warning,Information,Debug
ejbserver.logger.channels.define.MessageLogFile.filenum=2
ejbserver.logger.channels.define.MessageLogFile.filesize=1048576
```

```
ejbserver.application.InitTermProcessClasses=InitTermClass1,InitTermClass2
```

```
webserver.connector.http.permitted.hosts=host1,host2
webserver.work.directory=c:/work
```

## 2.5 server.policy (J2EE サーバ用セキュリティポリシーファイル)

---

### (1) 形式

J2SE のセキュリティポリシーファイル形式に従います。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Server のインストールディレクトリ>%CC%server%usrconf%ejb%<サーバ名称>%`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/CC/server/usrconf/ejb/<サーバ名称>/`

### (3) 機能

J2EE サーバを実行する JavaVM のセキュリティポリシーを指定します。

J2EE サーバの稼働中に、このファイルの内容を変更した場合、変更した内容は次に J2EE サーバを起動したときに反映されます。

### (4) 記述例

使用されるポリシーファイルの内容を次に示します。

```
// (1)
// Grant all permissions to the java extensions
grant codeBase "file:${java.home}/lib/ext/" {
permission java.security.AllPermission;
};

// (2)
// Grant all permissions to the java tools, etc
// Note: java.home is the jre, not the installation dir for the jdk
grant codeBase "file:${java.home}/../lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};

// (3)
// Grant all permissions to anything loaded from the
// EJB server itself

grant codeBase "file:${ejbserver.install.root}/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${tpbroker.java.home}/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/DABJ/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/manager/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/c4web/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/c4web/exlib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/jaxws/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
```

```

grant codeBase "file:${cosminexus.home}/jaxrs/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/jaxp/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/CTM/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/PRF/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/wss/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/XMLSEC/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${ejbserver.install.root}/sfo/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${hntrlib.home}/classes/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/common/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${ejbserver.install.root}/weld/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};

// (4)
// Grant all permissions to the container generated stubs and
// implementation classes
grant codeBase "file:${ejbserver.http.root}/ejb/${ejbserver.serverName}/containers/-" {
permission java.security.AllPermission;
};

// (5)
// Grant all permissions to imported resource (datasource) implementations
// implementation classes
grant codeBase "http://*/ejb/${ejbserver.serverName}/import/resjars/-" {
permission java.security.AllPermission;
};

// (6)
// Grant permissions to resource adapters
//
grant codeBase "file:${ejbserver.http.root}/ejb/${ejbserver.serverName}/rarjars/-" {

// For uCosminexus TP1 Connector & TP1/Client/J
permission java.util.PropertyPermission "*", "read, write";

// For uCosminexus TP1 Connector & TP1/Client/J & Cosminexus Reliable Messaging
permission java.io.FilePermission "<<ALL FILES>>", "read, write, delete";
permission java.net.SocketPermission "*", "connect, listen, accept";

// For TP1/Message Queue - Access
permission java.lang.RuntimePermission "loadLibrary.*";

// For TP1/Message Queue - Access & Cosminexus Reliable Messaging
permission java.lang.RuntimePermission "modifyThreadGroup";
permission java.lang.RuntimePermission "modifyThread";

// For DB Connector
permission java.lang.reflect.ReflectPermission "suppressAccessChecks";

// For authentication (from J2EE RI server.policy file)
permission javax.security.auth.PrivateCredentialPermission "* * ¥"*¥", "read";

// For Cosminexus Reliable Messaging
permission javax.security.auth.AuthPermission "modifyPrivateCredentials";
permission java.lang.RuntimePermission "getenv.HRMDIR";

```

```

// For Cosminexus SOA FTP Inbound Adapter
permission java.lang.RuntimePermission "getClassLoader";
permission java.lang.RuntimePermission "setContextClassLoader";
permission java.lang.RuntimePermission "accessDeclaredMembers";
};

// (7)
// Grant permissions to JSP/Servlet
//
grant codeBase "file:${ejbserver.http.root}/web/${ejbserver.serverName}/-" {
permission java.lang.RuntimePermission "loadLibrary.*";
permission java.lang.RuntimePermission "queuePrintJob";
permission java.lang.RuntimePermission "modifyThread";
permission java.lang.RuntimePermission "modifyThreadGroup";
permission java.net.SocketPermission "*", "connect";
permission java.io.FilePermission "<<ALL FILES>>", "read, write";
permission java.util.PropertyPermission "*", "read";
permission javax.security.auth.AuthPermission "getSubject";
permission javax.security.auth.AuthPermission "createLoginContext.*";
};

// (8)
// Grant permissions to Cosminexus Service Coordinator
//
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/CSC/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};

// (9)
// Grant permissions to custom login modules
//
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/manager/modules/-" {
permission java.io.FilePermission "<<ALL FILES>>", "read";
permission javax.security.auth.AuthPermission "modifyPrincipals";
permission javax.security.auth.AuthPermission "modifyPublicCredentials";
};

// (10)
// Grant minimal permissions to everything else:
// EJBs
// client implementation classes
grant {
permission java.util.PropertyPermission "*", "read";
permission java.lang.RuntimePermission "queuePrintJob";
permission java.net.SocketPermission "*", "connect";
};

```

記述例の (1) ~ (10) について説明します。

(1)

JDK の ext ディレクトリ下のクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのアクセス権を許可

(2)

JDK の lib ディレクトリ下のクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのアクセス権を許可

(3)

J2EE サーバが使用するクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのアクセス権を許可

(4)

J2EE サーバが生成するスタブとスケルトンなどのクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのアクセス権を許可

(5)

J2EE サーバが使用するリソースのクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのアクセス権を許可

(6)

J2EE サーバが使用するリソースアダプタのクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのプロパティ情報に対して読み取り、および書き込みを許可
- すべてのファイルに対して読み取り、書き込み、および削除を許可
- すべてのソケット通信に対してネットワークへの接続、接続での待機、および接続の受け付けを許可
- すべてのライブラリのロードを許可
- スレッドグループの変更を許可
- スレッドの変更を許可
- すべてのリフレクション操作を許可
- 任意の Subject が所有する、すべての非公開 Credential へのアクセスを許可
- Subject に関連づけられた非公開 Credential の Set の変更を許可
- 環境変数 HRMDIR の値の取得を許可
- クラスローダの取得を許可
- コンテキストクラスローダの設定を許可
- クラスの宣言されたメンバへのアクセスを許可

#### 注意事項

- リソースアダプタ内の JAR ファイルの展開先である J2EE サーバ管理下のディレクトリが記載されています。
- J2EE サーバで動作するすべてのリソースアダプタが有効範囲です。

(7)

JSP/サーブレットのクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのライブラリのロードを許可
- 印刷ジョブ要求を許可
- スレッドの変更を許可
- スレッドグループの変更を許可
- すべてのソケット通信に対してネットワーク接続を許可
- すべてのファイルに対して読み取り、および書き込みを許可
- すべてのプロパティ情報の読み取りを許可
- Subject の参照を許可
- あらゆる名称で LoginContext クラスのインスタンス化を許可



**注意事項**

次の定義は、07-00 より前の環境で構築したサーバには記載されていません。

Web アプリケーションでユーザスレッドを作成する必要がある場合、追加してください。

- `permission java.lang.RuntimePermission "modifyThread";`
- `permission java.lang.RuntimePermission "modifyThreadGroup";`

(8)

Service Coordinator のクラスファイルに対し次の権限を許可します。

- すべてのアクセス権を許可

(9)

統合ユーザ管理のカスタムログインモジュールに対し次の権限を許可します。

- すべてのファイルに対する読み込みを許可
- Subject に Principal および Credential の追加を許可

(10)

すべてのクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのプロパティ情報の読み取りを許可
- 印刷ジョブ要求を許可
- すべてのソケット通信に対してネットワーク接続を許可

**(5) 注意事項**

- 構文が不正または適切なアクセス権限が設定されていない `server.policy` ファイルを使用した場合、`java.lang.StackOverflowError` または `java.lang.OutOfMemoryError` が発生して J2EE サーバが異常終了することがあります。
- サーバをセットアップするときに生成された `server.policy` ファイルには、J2EE サーバを動作させるために最低限必要な権限が記述されています。生成された `server.policy` ファイルの記述行の削除および変更はしないでください。

## 2.6 criticalList.cfg (保護区リストファイル)

保護区としてメソッドキャンセルを禁止するクラスを設定します。

この保護区リストファイルの設定が必要な場合は、アプリケーションサーバの各製品の構成ソフトウェアおよび関連製品で提供されるドキュメントの注意事項に記載されます。記載されている指示に従って設定してください。

### (1) 形式

次の形式で指定します。

<要素>

<要素>には、次のどちらかを指定できます。

- <クラス名>

保護区に指定するクラス名称を指定します。

- <プリフィックス名>

保護区に指定するクラスが含まれるパッケージのプリフィックス名を指定します。指定したプリフィックスを持つクラスは、すべて保護区として指定されます。

#### 指定方法

- 指定可能な要素を改行で区切って指定します。
- 空行は無視されます。
- シャープ (#) で始まる行はコメントとみなされます。
- <要素>の後ろに空白やコメントを追加することはできません。  
(例) <クラス名> #<コメント>
- クラス名は、パッケージを含めて記述します。ただし、サフィックス".class"は記述しないでください。  
(例) pacA.pacB.pacC.pacD.MyTestClass.class  
この場合は、pacA.pacB.pacC.pacD.MyTestClass と記述します。
- クラス名称のプリフィックスは指定できません。  
(例) pacA.pacB.pacC.pacD.My\*  
"My"をプリフィックスに持つクラス名称 (MyTestClass) を保護区指定する場合、クラス名称にアスタリスク (\*) は使用できません。  
この場合は、pacA.pacB.pacC.\*と記述します。
- アスタリスク (\*) だけの指定はできません。
- <要素>の前後にある半角空白は無視されます。
- <要素>の前後にある全角空白は文字とみなされ、不正な値と判断されます。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
<Application Server のインストールディレクトリ>%CC%server%usrconf%
- UNIX の場合  
/opt/Cosminexus/CC/server/usrconf/

### (3) 記述例

#### プリフィックス名を指定する場合

---

```
#プリフィックス名指定  
pacA.pacB.*
```

---

パッケージ pacA.pacB 以下のクラスおよびパッケージに含まれるクラスが、すべて保護区になります。

例えば、パッケージ pacA.pacB.pacC 以下に、pacA.pacB.pacC.pacD がある場合、pacA.pacB.pacC.pacD 以下のクラスもすべて保護区になります。

#### クラス名を指定する場合

---

```
#クラス名指定  
pacX.pacY.pacZ.MyTestpacX.pacY.pacZ.CommonTest
```

---

### (4) 注意事項

- 保護区リストファイルは製品単位の定義です。Component Container をインストールしたマシン上で動作するすべての J2EE サーバで有効になります。
- 保護区リストファイルは J2EE サーバの起動時に読み込まれます。変更内容を有効にしたい場合は、J2EE サーバを再起動する必要があります。
- J2EE サーバ起動時に、保護区リストファイルが存在しない、または設定が不正な場合、J2EE サーバの起動に失敗します。



# 3

## バッチサーバで使用するファイル

この章では、バッチサーバで使用するファイルの形式、格納先、機能、指定できるキーなどについて説明します。

## 3.1 バッチサーバで使用するファイルの一覧

バッチサーバで使用するファイルの一覧を、次の表に示します。

表 3-1 バッチサーバで使用するファイルの一覧

ファイル名	分類	概要	参照先
usrconf.cfg	バッチサーバ用オプション定義ファイル	バッチサーバを実行する JavaVM の起動オプションを指定します。	3.2
usrconf.properties	バッチサーバ用ユーザプロパティファイル	バッチサーバを実行する JavaVM のシステムプロパティを指定します。	3.3
server.policy	バッチサーバ用セキュリティポリシーファイル	バッチサーバを実行する JavaVM のセキュリティポリシーを指定します。	3.4
criticalList.cfg	保護区リストファイル	保護区としてメソッドキャンセルを禁止するクラスを設定します。	3.5
usrconf.cfg	バッチアプリケーション用オプション定義ファイル	cjexecjob コマンド, ckilljob コマンドおよび cjlistjob コマンドを実行する JavaVM の起動オプションを指定します。	3.6
usrconf.properties	バッチアプリケーション用ユーザプロパティファイル	cjexecjob コマンド, および ckilljob コマンドを実行する JavaVM のシステムプロパティを指定します。	3.7

## 3.2 usrconf.cfg (バッチサーバ用オプション定義ファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 値の後ろには、空白やコメントなどの文字列は追加できません。追加した場合、不正な値と解釈されます。

(例) <キー名称> = <値> #<コメント>

- 実行時の文字エンコーディングと異なる文字エンコーディングでは記述できません。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>%CC%server%usrconf%ejb%<サーバ名称>%
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/CC/server/usrconf/ejb/<サーバ名称>/

### (3) 機能

バッチサーバを実行する JavaVM の起動オプションを指定します。

バッチサーバの稼働中に、このファイルの内容を変更した場合、変更した内容は次にバッチサーバを起動したときに反映されます。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーの概要とデフォルト値を次の表に示します。キーの詳細については、「2.3 usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル)」を参照してください。なお、参照する場合は「J2EE サーバ」および「J2EE アプリケーション」を「バッチサーバ」および「バッチアプリケーション」と読み替えてください。

#### ! 注意事項

ファイル内でマルチバイト文字を使用する場合は、次の個所で使用しているマルチバイト文字とエンコードを統一してください。

- usrconf.cfg (バッチアプリケーション用オプション定義ファイル)
- cjexecjob コマンド (バッチアプリケーション実行コマンド) の引数
- バッチアプリケーションのソースコード (java.lang.System.out または java.lang.System.err)

表 3-2 usrconf.cfg に指定できるキーとデフォルト値 (バッチサーバ)

キー名称	概要	デフォルト値
add.jvm.arg	指定されたオプションを使って JavaVM を起動します。 add.jvm.arg で指定できる JavaVM のオプションについては、「16.1 JavaVM 拡張オプションの一覧」および「16.5 Application Server で指定できる Java HotSpot VM のオプション」を参照してください。	デフォルト値については「3.2(5) バッチサーバでの JavaVM オプションのデフォルト値」を参照してください。
add.class.path	コンテナ拡張ライブラリ用のクラスパスを指定します。 スペースを含むパスを指定する場合、パスをダブルクォーテーション (") で囲む必要はありません。また、ダブルクォーテーションでの指定は有効となりません。 バッチアプリケーションクラスローダのクラスパスに JAR を追加する場合は、バッチアプリケーション用オプション定義ファイルで add.class.path キーを指定してください。	なし
add.library.path <sup>※</sup>	JNI 用の共有ライブラリを指定します。コンテナ拡張ライブラリが JNI を利用する場合だけ指定します。	なし
batch.service.enabled	このキーは、手動で編集しないでください。 cjsetup コマンドに -batch オプションを指定して実行した場合に、キーの値に true が表示されます。	true(-cjsetup コマンドに -batch オプションを指定して実行した場合)
cpp.library.version	プロセス内で使用する libstdc++ ライブラリのバージョンを指定します。なお、このキーは、Linux 用です。 指定できる文字列を次に示します。 6: libstdc++.so.6 ライブラリを使用します。Red Hat Enterprise Linux 以外のプラットフォームで設定しても無効です。 09-00 以降では、設定できるのは「6」だけです。	6
ejb.public.directory	指定されたディレクトリをバッチサーバの作業ディレクトリとしてバッチサーバを起動します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt;¥CC ¥server¥public</li> <li>UNIX の場合 /opt/ Cosminexus/CC/ server/public</li> </ul>
ejb.server.corefilenum (UNIX 用)	バッチサーバ再起動時に残す core ファイルの数を指定します。	1
ejb.server.log.directory	ログファイルの出力先ディレクトリを指定します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;¥ejb¥&lt;サーバ名称&gt;¥logs</li> <li>UNIX の場合</li> </ul>



キー名称	概要	デフォルト値
ejb.server.log.directory	ログファイルの出力先ディレクトリを指定します。	<製品の作業ディレクトリ>/ejb/<サーバ名称>/logs
ejb.server.log.mode	ログファイルの出力形態を指定します。	7
ejb.server.log.stdout.filesize	cjstdout.log ファイルのサイズの上限值を指定します。	1048576
ejb.server.log.stderr.file size	cjstderr.log ファイルのサイズの上限值を指定します。	1048576
jvm.type	使用する JavaVM のタイプを指定します。	server

注※

cjstartsv コマンドまたは cjstartweb コマンド実行時、add.library.path と OS の環境変数 (LIBPATH など) の両方が設定されている場合、add.library.path の設定が優先されます。

### (5) バッチサーバでの JavaVM オプションのデフォルト値

バッチサーバでの Java VM オプションのデフォルト値を示します。

- -Xms256m
- -Xmx512m
- -XX:MetaspaceSize=128m
- -XX:MaxMetaspaceSize=128m
- -XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace
- -XX:SurvivorRatio=8
- -XX:HitachiJavaLog:<ejb.server.log.directory>
- -XX:HitachiJavaLogFileSize=4m
- -XX:-HitachiUseExplicitMemory
- -XX:+HitachiVerboseGC
- -XX:+HitachiVerboseGCPrintCause
- -XX:+HitachiOutputMilliTime
- -XX:-HitachiThreadDumpToStdout
- -XX:+HitachiOutOfMemoryAbort
- -XX:+HitachiJavaClassLibTrace
- -XX:HitachiJavaClassLibTraceLineSize=1024
- -XX:+HitachiLocalsSimpleFormat
- -XX:+HitachiTrueTypeInLocals
- -XX:+HitachiLocalsInStackTrace
- -XX:HitachiExplicitHeapMaxSize=64m
- -XX:HitachiExplicitMemoryLogLevel:normal
- -XX:HitachiExplicitMemoryJavaLog:<ejb.server.log.directory>

- -XX:HitachiExplicitMemoryJavaLogFileSize=4m

#### (6) 注意事項

- add.class.path キーに指定されている値の中に、<cosminexus.home>タグを使用してコンテナ拡張ライブラリ用の JAR を指定しているものがあります。これは Application Server のインストール先を意味しているため、add.class.path キーの記述内容を変更する必要はありません。なお、add.class.path キーにコンテナ拡張ライブラリを追加する場合は、インストールおよびアンインストール時の動作を保証できなくなるおそれがあるので、<cosminexus.home>タグを使用しないでください。

## 3.3 usrconf.properties (バッチサーバ用ユーザプロパティファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 値の後ろには、空白やコメントなどの文字列は追加できません。追加した場合、不正な値と解釈されます。

(例) <キー名称> = <値> #<コメント>

- 記載する文字は Java の仕様に従って、ISO 8859-1 文字エンコーディングを使用してください。
- CJBATCHUSRCONFDIR に指定するパスは絶対パスで指定してください。
- Java の仕様に従わない形式の場合、バッチサーバの起動に失敗することがあります。  
(例) 不正な Unicode エスケープシーケンスを含む場合 (“\u”に続く文字列が適切な Unicode 16 進数の値ではない)。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>%CC%server%usrconf%ejb%<サーバ名称>%
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/CC/server/usrconf/ejb/<サーバ名称>/

### (3) 機能

バッチサーバを実行する JavaVM のシステムプロパティを指定します。

usrconf.properties と usrconf.cfg の add.jvm.arg の -D に同じキーが指定されている場合は、usrconf.properties の値が優先されます。

バッチサーバの稼働中に、このファイルの内容を変更した場合、変更した内容は次にバッチサーバを起動したときに反映されます。

### (4) バッチサーバの予約済みキー

バッチサーバでは、次に示す接頭子で始まるキーを内部的に利用します。このため、アプリケーションでこれらの接頭子で始まるキーを利用してはいけません。

- ejbserver.\*
- webserver.\*

- appclient.\*
- j2eeserver.\*

#### (5) バッチサーバのカスタマイズ用キー

バッチサーバでは、次に示すシステムプロパティのキーに値を設定することで、バッチサーバの動作をカスタマイズできます。

ここでは、キーを次の分類に分けて説明します。

- ejbserver.application から始まるキー
- ejbserver.batch から始まるキー
- ejbserver.client から始まるキー
- ejbserver.connectionpool から始まるキー
- ejbserver.connector から始まるキー
- ejbserver.container から始まるキー
- ejbserver.ctm から始まるキー
- ejbserver.deploy から始まるキー
- ejbserver.ext から始まるキー
- ejbserver.http から始まるキー
- ejbserver.instrumentation から始まるキー
- ejbserver.jndi から始まるキー
- ejbserver.jta から始まるキー
- ejbserver.logger から始まるキー
- ejbserver.management から始まるキー
- ejbserver.manager から始まるキー
- ejbserver.naming から始まるキー
- ejbserver.rmi から始まるキー
- ejbserver.server から始まるキー
- ejbserver.stdoutlog から始まるキー
- ejbserver.watch から始まるキー
- https から始まるキー
- java から始まるキー
- vbroker から始まるキー
- webservice.connector から始まるキー

それぞれに指定できるキーの概要とデフォルト値を次の表に示します。キーの詳細については、「2.4 usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル)」を参照してください。なお、参照する場合は「J2EE サーバ」および「J2EE アプリケーション」を「バッチサーバ」および「バッチアプリケーション」と読み替えてください。

## (a) ejbserver.application から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.application.InitTermProcessClasses	コンテナ拡張ライブラリを使用する場合に、サーバ起動・停止フックのクラス名を指定します。	なし
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.appname	AppName のフィールドに出力するデフォルトのアプリケーション名を指定します。	user_app
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.count	ログファイルの面数を指定します。	2
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.encoding	出力する文字列のエンコーディングを指定します。	null
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.filter	使用するフィルタを指定します。	null
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.formatter	使用するフォーマッタを指定します。	null
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.level	ログの取得レベルの上限を指定します。	SEVERE
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.limit	ログファイルの容量を指定します。	1048576
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.msgid	MsgID のフィールドに出力するデフォルトのメッセージ ID を指定します。	0001
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.path	ログファイル名のプリフィックスを 1~255 バイトの範囲で指定します。	user_log
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.separator	CJSimpleFormatter を利用して、1 文でメッセージを出力するためのセパレータを指定します。	(ストローク)
ejbserver.application.userlog.loggers	使用するロガーの名称を指定します。	なし
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.filter	ロガーで使用するフィルタを指定します。	null

### 3 バッチサーバで使用するファイル

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.application.serlog.Logger.<ロガー名称>.handlers	指定のロガー名称に対するハンドラクラスを指定します。	なし
ejbserver.application.serlog.Logger.<ロガー名称>.level	ロガーのログ出力レベルを指定します。	SEVERE
ejbserver.application.serlog.Logger.<ロガー名称>.useParentHandlers	ログレコードを受け取ったロガーから、親ロガーの接続しているハンドラへログレコードを伝播させるかどうかを指定します。	true

#### (b).ejbserver.batch から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.batch.application.exit.enabled	バッチアプリケーションから VM 終了メソッドを呼び出した時のバッチサーバの動作を指定します。 true を指定した場合： JavaVM を終了しないでバッチアプリケーションのスレッドを終了します。 false を指定した場合： バッチサーバを終了します。	true
ejbserver.batch.gc.watch.threshold	GC を実行するメモリ使用量のしきい値を、0~100 (単位：%) の整数で設定します。次の条件のどれかの場合に GC を実行します。0 を指定した場合は GC の監視を行いません。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Tenured 領域消費サイズの Tenured 領域合計サイズに対する割合がしきい値以上 (SerialGC 有効時)</li> <li>• New 領域合計サイズの Tenured 領域最大空きサイズに対する割合がしきい値以上 (SerialGC 有効時)</li> <li>• Java ヒープ領域消費サイズの Java ヒープ領域サイズに対する割合がしきい値以上 (G1GC 有効時)</li> <li>• Metaspace 領域消費サイズの Metaspace 領域最大サイズに対する割合がしきい値以上</li> </ul>	0
ejbserver.batch.schedule.group.name	CTM によって管理されるバッチサーバ群のグループ名を、英数字、およびアンダースコア「_」を使って 63 文字以内で指定します。	JOBGROUP
ejbserver.batch.queue.length	CTM で作成されるスケジュールキューの長さを 1~32767 の間で指定します。	50

注 このキーは、バッチサーバ用ユーザプロパティファイル特有のキーです。J2EE サーバ用ユーザプロパティファイルには存在しません。

#### (c).ejbserver.client から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.client.ctm.RequestPriority	CTM 内のキューに滞留したリクエストを引き出す時のプライオリティ (優先順位) を指定します。	4

## (d) ejbserver.connectionpool から始まるキー

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	概要	デフォルト値	関連情報
ejbserver.connectionpool.applicationAuthentication.disabled	コンテナ管理のサインオンの最適化機能を有効にするかどうかを指定します。	false	
ejbserver.connectionpool.association.enabled	コネクションアソシエーション機能を有効にするかどうかを指定します。	false	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「3.14 パフォーマンスチューニングのための機能」
ejbserver.connectionpool.sharingOutsideTransactionScope.enabled	アプリケーションサーバが管理するトランザクションの外で複数回コネクションの取得を行ったときのコネクションシェアリングの動作を指定します。	false	
ejbserver.connectionpool.validation.timeout	コネクション障害検知機能のタイムアウト時間およびコネクション数調節機能によるコネクション削除処理のタイムアウト時間(単位:秒)を1~2147483647の整数で指定します。	5	

(凡例)

空欄：関連情報はありません。

## (e) ejbserver.connector から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.connector.logwriter.filenum	リソースアダプタ用ログファイルの面数を指定します。	4
ejbserver.connector.logwriter.filesize	リソースアダプタ用ログファイルのサイズを指定します。	2097152

## (f) ejbserver.container から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.container.audit_trail.enabled	データベース監査証跡連携機能を有効にするかどうかを指定します。	false

## (g) ejbserver.ctm から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.ctm.ActivateTimeOut	スケジューリング機能が有効な場合、バッチサーバは起動時にCTMキューを活性化します。このときの待ち時間(単位:秒)を0~2147483647で指定します。0を指定した場合、無限に待ち続けます。	180

### 3 バッチサーバで使用するファイル

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.ctm.CTMDomain	CTM 機能を使用する場合に必要なプロパティです。バッチサーバが属する CTM ドメイン名称を指定します。	CTMDOMAIN
ejbserver.ctm.CTMID	CTM 機能を使用する場合に必要なプロパティです。バッチサーバを制御する CTM デーモンの CTM 識別子を指定します。	<IP アドレス>
ejbserver.ctm.CTMMYHost	CTM 機能を使用する場合に必要なプロパティです。マルチホームまたは IP アドレスを引き継ぐ系切り替え環境で CTM が使用するホスト名称または IP アドレスを指定します。	<hostname コマンドで取得されるホスト名称 >
ejbserver.ctm.DeactivateTimeout	スケジューリング機能が有効な場合、バッチサーバは停止時に CTM キューを非活性化します。このときの待ち時間（単位：秒）を 0~2147483647 で指定します。	180
ejbserver.ctm.enabled	<p>スケジューリング機能の使用の有無を指定します。</p> <p>true を指定した場合：</p> <p>スケジューリング機能を使用します。バッチサーバ起動時に CTM との接続の確立、および初期化をします。これに成功するとスケジューリング機能が使用できる状態でバッチサーバが起動します。</p> <p>CTM との接続および初期化に失敗した場合、バッチサーバの起動に失敗します。</p> <p>false を指定した場合：</p> <p>スケジューリング機能を使用しません。スケジューリング機能を使用しない状態でバッチサーバが起動します。</p> <p>このプロパティの指定を省略した状態で、07-50 以前のバージョンからバージョンアップインストールした場合、バージョンアップ前のアプリケーションサーバのエディションによって、手動で次の値を設定する必要があります。</p> <p>Application Server Enterprise の場合：</p> <p>true</p> <p>その他のエディションの場合：</p> <p>false</p>	false

#### (h) ejbserver.deploy から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.deploy.exclusive.lockAliveInterval	サーバ処理終了後、コマンドから送信された次のレスポンスを受け取るまでの最大待ち時間を指定します。	60
ejbserver.deploy.resourcefile.scramble.enabled	作業ディレクトリ以下に展開される DataSource, JavaMail, ResourceAdapter に関する DD ファイルをスクランブルするかどうかを設定します。	false

#### (i) ejbserver.ext から始まるキー

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。



キー名称	概要	デフォルト値	関連情報
ejbserver.ext.method_observation.interval	このプロパティの設定には、次の二つの意味があります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• J2EE アプリケーション実行時間監視機能を使用するかどうかを指定します。</li> <li>• 動作中のリクエスト処理がタイムアウトしていないかを監視する時間間隔、タイムアウトしたリクエスト（メソッド）をキャンセルする時間間隔を指定します。</li> </ul>	0	「機能解説 運用／監視／連携編」の「5. J2EE アプリケーションの運用」

## (j) ejbserver.http から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.http.port	簡易 Web サーバのポート番号を指定します。	8080

## (k) ejbserver.instrumentation から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.instrumentation.enabled	Management Server と連携するかどうかを指定します。	true

## (l) ejbserver.jndi から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.jndi.cache	ネーミングでのキャッシングをするかどうかを指定します。	on
ejbserver.jndi.cache.interval	ネーミングでのキャッシングをする場合、キャッシュをクリアする間隔を指定します。	0
ejbserver.jndi.cache.interval.clear.option	インターバル経過後のネーミングでのキャッシュ領域に対する動作を決定します。	refresh
ejbserver.jndi.cache.reference	DataSource オブジェクトのキャッシング機能を使用するかどうかを指定します。	off
ejbserver.jndi.naming-service.group.list	ラウンドロビン検索をする場合に、検索対象になる論理ネーミングサービスのグループを定義します。	なし
ejbserver.jndi.naming-service.group.<Specify group name>.providerurls	各グループに属するネーミングサービスのルート位置をプロバイダ URL で指定します。	なし
ejbserver.jndi.request.timeout	ネーミングサービスとの通信タイムアウト時間を指定します。	0

## (m) ejbserver.jta から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.jta.TransactionManager.defaultTimeOut	バッチサーバ上で開始されるトランザクションのトランザクションタイムアウトのデフォルト値を指定します。	180

## (n) ejbserver.logger から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.logger.channels.define.<チャンネル名>*.filenum	バッチサーバのログファイルの面数を指定します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>チャンネル名が MaintenanceLogFile の場合 4</li> <li>チャンネル名が上記以外の場合 2</li> </ul>
ejbserver.logger.channels.define.<チャンネル名>*.filesize	バッチサーバのログファイルのサイズを指定します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>チャンネル名が MaintenanceLogFile の場合 16777216</li> <li>チャンネル名が上記以外の場合 1048576</li> </ul>
ejbserver.logger.enabled.*	バッチサーバのログレベルを指定します。	Error
ejbserver.logger.rotationStyle	J2EE サーバのログ出力ファイルのローテーション方式を指定します。 SHIFT を指定した場合： シフトモードでローテーションします。 WRAP を指定した場合： ラップアラウンドモードでローテーションします。	WRAP

## 注※

チャンネル名称として次に示す名称を設定できます。

- アプリケーションサーバのログ出力用のチャンネル  
MessageLogFile, MaintenanceLogFile, ExceptionLogFile, ConsoleLogFile, EJBContainerLogFile, UserOutLogFile, UserErrLogFile
- リソース枯渇監視ログ出力用のチャンネル  
MemoryWatchLogFile, FileDescriptorWatchLogFile, ThreadWatchLogFile, ThreaddumpWatchLogFile, ConnectionPoolWatchLogFile

資料の取得については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 保守/移行編」の「2.3 資料の取得」を参照してください。

## (o) ejbserver.management から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.management. JVM.stats_monitor.Ful lGCCCount.enabled	FullGC 回数の監視を有効にするかどうかを指定します。	true
ejbserver.management. JVM.stats_monitor.Ful lGCCCount.threshold	FullGC 回数の監視でのしきい値となる回数を指定します。	10
ejbserver.management. JVM.stats_monitor.Ful lGCCCount.interval	FullGC 回数の監視でのしきい値監視間隔を指定します。	600
ejbserver.management. .statistics.interval	稼働情報収集間隔を指定します。	60
ejbserver.management. .stats_file.base_time	稼働情報ファイルの時間切り替え運用での基点時刻を指定します。	0
ejbserver.management. .stats_file.dir	稼働情報ファイルの出力先ディレクトリを指定します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合            &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;¥ejb¥&lt;サーバ名称&gt;¥stats</li> <li>• UNIX の場合            &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;/ejb/&lt;サーバ名称&gt;/stats</li> </ul>
ejbserver.management. .stats_file.enabled	稼働情報ファイル出力機能を有効にするかどうかを指定します。	true
ejbserver.management. .stats_file.num	稼働情報ファイルの面数を指定します。	7
ejbserver.management. .stats_file.period	稼働情報ファイルの時間切り替え運用での切り替え時間を指定します。	24

## (p) ejbserver.manager から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.manager.age nt.Agent.conf	Management Server との連携に必要な設定をします。	なし
ejbserver.manager.age nt.Agent.enabled	Management Server との連携に必要な設定をします。	false

### 3 バッチサーバで使用するファイル

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.conf	JP1 連携に関する設定ファイルのパスを指定します。	なし
ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.enabled	JP1 と連携するかどうかを指定します。	false
ejbserver.manager.agent.MEventAgent.conf	Management イベント発行用プロパティファイルを指定します。	なし
ejbserver.manager.agent.MEventAgent.enabled	Management イベント発行機能を有効にするかどうかを指定します。	false

#### (q) ejbserver.naming から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.naming.host	バッチサーバがネーミングサービスとして利用する CORBA ネーミングサービスが起動しているホスト名称または IP アドレスを指定します。	localhost
ejbserver.naming.namerooot	CORBA ネーミングサービスを自動起動モードで使用する場合に、起動させる CORBA ネーミングサービスに名称を付加するときに指定します。	なし
ejbserver.naming.port	バッチサーバがネーミングサービスとして利用する CORBA ネーミングサービスのポート番号を指定します。	900
ejbserver.naming.startupRetryCount	ejbserver.naming.startupWaitTime で指定した CORBA ネーミングサービスの起動待ち時間経過後、CORBA ネーミングサービスがまだ起動していない場合に、ejbserver.naming.startupWaitTime で指定された秒数だけ起動待ちを繰り返す回数を指定します。	9
ejbserver.naming.startupWaitTime	バッチサーバ起動時に CORBA ネーミングサービスが利用可能になるまで待つ時間を指定します。	1

#### (r) ejbserver.rmi から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.rmi.naming.host	マルチホームドホスト環境で、バッチサーバが使用する RMI レジストリや MBean サーバのホスト名称、または IP アドレスを指定します。	なし
ejbserver.rmi.naming.port	バッチサーバが利用する RMI レジストリのポート番号を指定します。	23152
ejbserver.rmi.remote.listener.port	バッチサーバ内でエクスポートするリモートオブジェクトのポート番号を指定します。	0
ejbserver.rmi.request.timeout	クライアントとサーバ間の通信タイムアウト時間を指定します。	0

## (s) ejbserver.server から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.server.prf.PR FID	PRF 識別子を指定します。	PRF_ID
ejbserver.server.thread dump.fileenum	バッチサーバが障害を検知して自発的にスレッドダンプを出力する場合のスレッドダンプのファイル数の上限を指定します。	256

## (t) ejbserver.stdoutlog から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.stdoutlog.aut oflush	ユーザ出力ログおよびユーザエラーログの自動フラッシュ機能を有効にするかどうかを指定します。	false

## (u) ejbserver.watch から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.watch.enabl ed	すべてのリソース枯渇監視を有効にするかどうかを指定します。	true
ejbserver.watch.memo ry.enabled	メモリ監視のアラート出力を有効にするかどうかを指定します。	true
ejbserver.watch.memo ry.interval	メモリ監視間隔を指定します。	60
ejbserver.watch.memo ry.threshold	メモリの使用状態を監視するしきい値を指定します。	80
ejbserver.watch.memo ry.writefile.enabled	メモリ監視結果をファイル出力するかどうかを指定します。	true
ejbserver.watch.fileDe scriptor.enabled	ファイルディスクリプタ監視のアラート出力を有効にするかどうかを指定します。なお、ファイルディスクリプタ監視は、Windows の場合、および AIX の場合は使用できません。	true
ejbserver.watch.fileDe scriptor.interval	ファイルディスクリプタ監視間隔を指定します。なお、ファイルディスクリプタ監視は、Windows の場合、および AIX の場合は使用できません。	60
ejbserver.watch.fileDe scriptor.threshold	ファイルディスクリプタの使用状態を監視するしきい値を指定します。なお、ファイルディスクリプタ監視は、Windows の場合、および AIX の場合は使用できません。	2147483647
ejbserver.watch.fileDe scriptor.writefile.enabl ed	ファイルディスクリプタ監視結果をファイル出力するかどうかを指定します。なお、ファイルディスクリプタ監視は、Windows の場合、および AIX の場合は使用できません。	true
ejbserver.watch.thread .enabled	スレッド監視のアラート出力を有効にするかどうかを指定します。なお、Linux ではスレッド数を監視できません。	true
ejbserver.watch.thread .interval	スレッド監視間隔を指定します。なお、Linux ではスレッド数を監視できません。	60

### 3 バッチサーバで使用するファイル

キー名称	概要	デフォルト値
ejbserver.watch.thread.threshold	スレッドの使用状態を監視するしきい値を指定します。なお、Linux ではスレッド数を監視できません。	2147483647
ejbserver.watch.thread.writefile.enabled	スレッド監視結果をファイル出力するかどうかを指定します。なお、Linux ではスレッド数を監視できません。	true
ejbserver.watch.thread.dump.enabled	スレッドダンプ監視のアラート出力を有効にするかどうかを指定します。	true
ejbserver.watch.thread.dump.interval	スレッドダンプ監視時間間隔を指定します。	30
ejbserver.watch.thread.dump.threshold	スレッドダンプ監視のしきい値を、上限値に対する割合で指定します。	80
ejbserver.watch.thread.dump.writefile.enabled	スレッドダンプ監視結果をファイル出力するかどうかを指定します。	true

#### (v) https から始まるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	概要	デフォルト値
https.cipherSuites	HttpsURLConnection で使用する推奨暗号スイートを設定します。※	※
https.protocols	HttpsURLConnection で使用するプロトコルを設定します。※	※

注※

キーの詳細については、JDK のドキュメントを参照してください。

#### (w) java から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
java.naming.factory.initial	JNDI の InitialContext がデレゲートするコンテキストの実装クラスの実装クラスを指定します。	com.hitachi.software.ejb.jndi.InitialContextFactory

#### (x) vbroker から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
vbroker.agent.enableLocator	スマートエージェントを使用するかどうかを指定します。スケジューリング機能を使用するバッチサーバを起動する場合、自動的に"true"が設定されます。	false
vbroker.agent.port	スマートエージェントのポート番号を指定します。	14000

キー名称	概要	デフォルト値
vbroker.ce.iiop.ccm.htc.readerPerConnection	リモートインタフェースとして定義された EJB メソッドの呼び出しでタイムアウトが発生した場合に、接続のクローズを抑制するかどうかを設定します。 true を指定した場合 タイムアウト発生時の接続のクローズを抑制します。 false を指定した場合 タイムアウト発生時の接続のクローズを抑制しません。	false
vbroker.ce.iiop.ccm.htc.threadStarter	リプライ受信専用スレッドを管理するスレッドを起動するかどうかを設定します。vbroker.ce.iiop.ccm.htc.readerPerConnection=true を設定する場合に、"true"を設定してください。	false
vbroker.orb.htc.comt.entryCount	TPBroker 通信トレースファイル 1 個当たりのエントリ数の上限値を指定します。	120000
vbroker.orb.htc.comt.fileCount	TPBroker 通信トレースファイルの個数の上限値を指定します。	3
vbroker.orb.htc.tracePath	TPBroker のトレースファイル出力先のパスを 1~210 バイトの範囲で指定します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;¥ejb¥&lt;サーバ名称&gt;¥logs¥TPB¥logj</li> <li>UNIX の場合 &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;/ejb/&lt;サーバ名称&gt;/logs/TPB/logj</li> </ul>
vbroker.se.iiop_tp.host	任意の値を指定して、バッチサーバ単位で EJB コンテナの IP アドレスを固定します。	なし
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port	任意の値を指定して、バッチサーバ単位で通信ポートを固定します。	0

## (y) webserver.connector から始まるキー

キー名称	概要	デフォルト値
webserver.connector.a.jp13.bind_host	Web サーバ連携で使用する IP アドレスまたはホスト名称を指定します。	なし
webserver.connector.a.jp13.port	Web サーバとの通信に使用するポート番号を指定します。	8007

## 3.4 server.policy (バッチサーバ用セキュリティポリシーファイル)

---

### (1) 形式

J2SE のセキュリティポリシーファイル形式に従います。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>%CC%server%usrconf%ejb%<サーバ名称>%
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/CC/server/usrconf/ejb/<サーバ名称>/

### (3) 機能

バッチサーバを実行する JavaVM のセキュリティポリシーを指定します。

バッチサーバの稼働中に、このファイルの内容を変更した場合、変更した内容は次にバッチサーバを起動したときに反映されます。

### (4) 記述例

使用されるポリシーファイルの内容を次に示します。

```
// (1)
// Grant all permissions to the java extensions
grant codeBase "file:${java.home}/lib/ext/-" {
permission java.security.AllPermission;
};

// (2)
// Grant all permissions to the java tools, etc
// Note: java.home is the jre, not the installation dir for the jdk
grant codeBase "file:${java.home}/../lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};

// (3)
// Grant all permissions to anything loaded from the
// EJB server itself

grant codeBase "file:${ejbserver.install.root}/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${tpbroker.java.home}/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/DABJ/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/manager/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/c4web/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/c4web/exlib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/jaxp/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
```



```

grant codeBase "file:${cosminexus.home}/CTM/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/PRF/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/wss/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/XMLSEC/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${ejbserver.install.root}/sfo/lib/*" {
permission java.security.AllPermission;
};
grant codeBase "file:${hntplib.home}/classes/*" {
permission java.security.AllPermission;
};

// (4)
// Grant all permissions to the container generated stubs and
// implementation classes
grant codeBase "file:${ejbserver.http.root}/ejb/${ejbserver.serverName}/containers/-" {
permission java.security.AllPermission;
};

// (5)
// Grant all permissions to imported resource (datasource) implementations
// implementation classes
grant codeBase "http://*/ejb/${ejbserver.serverName}/import/resjars/-" {
permission java.security.AllPermission;
};

// (6)
// Grant permissions to resource adapters
//
grant codeBase "file:${ejbserver.http.root}/ejb/${ejbserver.serverName}/rarjars/-" {

// For Cosminexus TP1 Connector & TP1/Client/J
permission java.util.PropertyPermission "*", "read, write";

// For Cosminexus TP1 Connector & TP1/Client/J & Cosminexus Reliable Messaging
permission java.io.FilePermission "<<ALL FILES>>", "read, write, delete";
permission java.net.SocketPermission "*", "connect, listen, accept";

// For TP1/Message Queue - Access
permission java.lang.RuntimePermission "loadLibrary.*";

// For TP1/Message Queue - Access & Cosminexus Reliable Messaging
permission java.lang.RuntimePermission "modifyThreadGroup";
permission java.lang.RuntimePermission "modifyThread";

// For DB Connector
permission java.lang.reflect.ReflectPermission "suppressAccessChecks";

// For authentication (from J2EE RI server.policy file)
permission javax.security.auth.PrivateCredentialPermission "* * ¥"*¥", "read";

// For Cosminexus Reliable Messaging
permission javax.security.auth.AuthPermission "modifyPrivateCredentials";
permission java.lang.RuntimePermission "getenv.HRMDIR";

// For Cosminexus SOA FTP Inbound Adapter
permission java.lang.RuntimePermission "getClassLoader";
permission java.lang.RuntimePermission "setContextClassLoader";
permission java.lang.RuntimePermission "accessDeclaredMembers";
};

// (7)
// Grant permissions to JSP/Servlet
//

```

### 3 バッチサーバで使用するファイル

```
grant codeBase "file:${ejbserver.http.root}/web/${ejbserver.serverName}/-" {
permission java.lang.RuntimePermission "loadLibrary.*";
permission java.lang.RuntimePermission "queuePrintJob";
permission java.lang.RuntimePermission "modifyThread";
permission java.lang.RuntimePermission "modifyThreadGroup";
permission java.net.SocketPermission "*", "connect";
permission java.io.FilePermission "<<ALL FILES>>", "read, write";
permission java.util.PropertyPermission "*", "read";
};

// (8)
// Grant permissions to Cosminexus Service Coordinator
//
grant codeBase "file:${cosminexus.home}/CSC/lib/*" {
permission java.lang.security.AllPermission;
};

// (9)
//
// Grant minimal permissions to everything else:
// Batch applications
// EJBs
// client implementation classes
grant {
permission java.security.AllPermission;
};
```

記述例の (1) ~ (9) について説明します。

(1)

JDK の ext ディレクトリ下のクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのアクセス権を許可

(2)

JDK の lib ディレクトリ下のクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのアクセス権を許可

(3)

バッチサーバが使用するクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのアクセス権を許可

(4)

バッチサーバが生成するスタブとスケルトンなどのクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのアクセス権を許可

(5)

バッチサーバが使用するリソースのクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのアクセス権を許可

(6)

バッチサーバが使用するリソースアダプタのクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのプロパティ情報に対して読み取り、および書き込みを許可
- すべてのファイルに対して読み取り、書き込み、および削除を許可
- すべてのソケット通信に対してネットワークへの接続、接続での待機、および接続の受け付けを許可
- すべてのライブラリのロードを許可

- スレッドグループの変更を許可
- スレッドの変更を許可
- すべてのリフレクション操作を許可
- 任意の Subject が所有する、すべての非公開 Credential へのアクセスを許可
- Subject に関連づけられた非公開 Credential の Set の変更を許可
- 環境変数 HRMDIR の値の取得を許可

#### 注意事項

- リソースアダプタ内の JAR ファイルの展開先であるバッチサーバ管理下のディレクトリが記載されています。
- バッチサーバで動作するすべてのリソースアダプタが有効範囲です。

(7)

JSP/サーブレットのクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのライブラリのロードを許可
- 印刷ジョブ要求を許可
- スレッドの変更を許可
- スレッドグループの変更を許可
- すべてのソケット通信に対してネットワーク接続を許可
- すべてのファイルに対して読み取り、および書き込みを許可
- すべてのプロパティ情報の読み取りを許可

(8)

Service Coordinator のクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのアクセス権を許可

(9)

すべてのクラスファイルに対して次の権限を許可します。

- すべてのアクセス権を許可

### (5) 注意事項

- 構文が不正または適切なアクセス権限が設定されていない server.policy ファイルを使用した場合、java.lang.StackOverflowError または java.lang.OutOfMemoryError が発生してバッチサーバが異常終了することがあります。
- サーバをセットアップするときに生成された server.policy ファイルには、バッチサーバを動作させるために最低限必要な権限が記述されています。生成された server.policy ファイルの記述行の削除および変更はしないでください。ただし、signedBy、codeBase、および principal が指定されていない grant にある java.security.AllPermission は、次の権限を設定すれば削除できます。
  - java.util.PropertyPermission "\*", "read";
  - java.lang.RuntimePermission "queuePrintJob";
  - java.net.SocketPermission "\*", "connect";

## 3.5 criticalList.cfg (保護区リストファイル)

保護区としてメソッドキャンセルを禁止するクラスを設定します。

この保護区リストファイルの設定が必要な場合は、アプリケーションサーバの各製品の構成ソフトウェアおよび関連製品で提供されるドキュメントの注意事項に記載されます。記載されている指示に従って設定してください。

### (1) 形式

次の形式で指定します。

<要素>

<要素>には、次のどちらかを指定できます。

- <クラス名>

保護区に指定するクラス名称を指定します。

- <プリフィックス名>

保護区に指定するクラスが含まれるパッケージのプリフィックス名を指定します。指定したプリフィックスを持つクラスは、すべて保護区として指定されます。

#### 指定方法

- 指定可能な要素を改行で区切って指定します。
- 空行は無視されます。
- シャープ (#) で始まる行はコメントとみなされます。
- <要素>の後ろに空白やコメントを追加することはできません。  
(例) <クラス名> #<コメント>
- クラス名は、パッケージを含めて記述します。ただし、サフィックス".class"は記述しないでください。  
(例) pacA.pacB.pacC.pacD.MyTestClass.class  
この場合は、pacA.pacB.pacC.pacD.MyTestClass と記述します。
- クラス名称のプリフィックスは指定できません。  
(例) pacA.pacB.pacC.pacD.My\*  
"My"をプリフィックスに持つクラス名称 (MyTestClass) を保護区指定する場合、クラス名称にアスタリスク (\*) は使用できません。  
この場合は、pacA.pacB.pacC.\*と記述します。
- アスタリスク (\*) だけの指定はできません。
- <要素>の前後にある半角空白は無視されます。
- <要素>の前後にある全角空白は文字とみなされ、不正な値と判断されます。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
<Application Server のインストールディレクトリ>%CC%server%usrconf%
- UNIX の場合  
/opt/Cosminexus/CC/server/usrconf/

### (3) 記述例

#### プリフィックス名を指定する場合

---

```
#プリフィックス名指定  
pacA.pacB.*
```

---

パッケージ pacA.pacB 以下のクラスおよびパッケージに含まれるクラスが、すべて保護区になります。  
例えば、パッケージ pacA.pacB.pacC 以下に、pacA.pacB.pacC.pacD がある場合、  
pacA.pacB.pacC.pacD 以下のクラスもすべて保護区になります。

#### クラス名を指定する場合

---

```
#クラス名指定  
pacX.pacY.pacZ.MyTestpacX.pacY.pacZ.CommonTest
```

---

### (4) 注意事項

- 保護区リストファイルは製品単位の定義です。Component Container をインストールしたマシン上で動作するすべてのバッチサーバで有効になります。
- 保護区リストファイルはバッチサーバの起動時に読み込まれます。変更内容を有効にしたい場合は、バッチサーバを再起動する必要があります。
- バッチサーバ起動時に、保護区リストファイルが存在しない、または設定が不正な場合、バッチサーバの起動に失敗します。

## 3.6 usrconf.cfg (バッチアプリケーション用オプション定義ファイル)

---

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 値の後ろには、空白やコメントなどの文字列は追加できません。追加した場合、不正な値と解釈されます。

(例) <キー名称> = <値> #<コメント>

- 実行時の文字エンコーディングと異なる文字エンコーディングでは記述できません。
- CJBATCHUSRCONFDIR に指定するパスは絶対パスで指定してください。

### (2) ファイルの格納先

環境変数 CJBATCHUSRCONFDIR に usrconf.cfg (バッチアプリケーション用オプション定義ファイル) の格納先のパスを設定するか、バッチアプリケーションで使用するコマンドを実行するディレクトリに usrconf.cfg (バッチアプリケーション用オプション定義ファイル) を格納してください。usrconf.cfg (バッチアプリケーション用オプション定義ファイル) は、バッチアプリケーションで使用するコマンドを実行する実行時に、次の順で検索されます。

1. 環境変数 (CJBATCHUSRCONFDIR) に設定したディレクトリ
2. cjexecjob コマンド (バッチアプリケーション実行コマンド) を実行したディレクトリ

### (3) 機能

バッチアプリケーションを実行する JavaVM の起動オプションを指定します。

バッチアプリケーションの実行中に、このファイルの内容を変更した場合、変更した内容は次にバッチアプリケーションを実行したときに反映されます。

### (4) 定義値

バッチアプリケーションで使用するコマンドを実行する場合、スケジューリング機能を使用するか、使用しないかによって有効となるオプションが異なります。

バッチアプリケーションで使用するコマンドごとに次の表に示します。

オプション名	cjexecjob		cjkiljob		cjlistjob	
	スケジューリング機能未使用	スケジューリング機能使用	スケジューリング機能未使用	スケジューリング機能使用	スケジューリング機能未使用	スケジューリング機能使用
add.jvm.arg	○	○	–	–	–	–
add.class.path	○	○	–	–	–	–
batch.ctm.enabled	○	○	○	○	○	○
batch.log.directory	○	○	○	○	○	○
batch.log.lockInterval	○	○	○	○	○	○
batch.log.lockRetryCount	○	○	○	○	○	○
batch.log.maintenance.fileenum	○	○	○	○	○	○
batch.log.maintenance.filesize	○	○	○	○	○	○
batch.log.message.fileenum	○	○	○	○	○	○
batch.log.message.filesize	○	○	○	○	○	○
batch.log.stdout.enabled	○	○	–	–	–	–
batch.request.timeout	–	○	–	○	–	○
batch.schedule.group.name	–	○	–	○	–	○
batch.vbroker.agent.addr	–	○	–	○	–	○
batch.vbroker.agent.port	–	○	–	○	–	○

(凡例)

○：オプションが有効になります。

–：オプションが無効になります。

## (5) 指定できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次の表に示します。

### ! 注意事項

ファイル内でマルチバイト文字を使用する場合は、次の個所で使用しているマルチバイト文字とエンコードを統一してください。

- usrconf.cfg (バッチサーバ用オプション定義ファイル)
- cjexecjob コマンド (バッチアプリケーション実行コマンド) の引数
- バッチアプリケーションのソースコード (java.lang.System.out または java.lang.System.err)

表 3-3 usrconf.cfg に指定できるキーとデフォルト値 (バッチアプリケーション)

キー名称	内容	デフォルト値
add.jvm.arg	指定された値をバッチサーバ上のバッチアプリケーションに渡します。次のオプションを指定できます。 • -D<property>	なし

### 3 バッチサーバで使用するファイル

キー名称	内容	デフォルト値
add.jvm.arg	<p>次に示すプロパティは指定できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• java.endorsed.dirs</li> <li>• java.security.policy</li> <li>• java.class.path</li> <li>• java.library.path</li> </ul> <p>なお、システムプロパティを指定したい場合は、"-D"を利用しないで、usrconf.properties ファイルに指定します。</p>	なし
add.class.path	<p>設定されている値をバッチサーバ上にあるバッチアプリケーションクラスローダのクラスパスに追加します。このキーに指定できる JavaVM のオプションは 1 個だけです。複数指定する場合は、新たに add.class.path を追加します。</p> <p>なお、スペースを含むパスを指定する場合、パスをダブルクォーテーション (") で囲む必要はありません。また、ダブルクォーテーションでの指定は有効となりません。</p> <p>コンテナ拡張ライブラリ用の JAR を指定する場合はバッチサーバ用オプション定義ファイルで add.class.path キーを指定してください。</p>	なし
batch.ctm.enabled	<p>スケジューリング機能を使用するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： スケジューリング機能を使用します。</p> <p>false を指定した場合： スケジューリング機能を使用しません。</p>	false
batch.log.directory	<p>ログファイルの出力先ディレクトリを指定します。ログ出力先のパスを絶対パス、または相対パスで指定します。次の文字が指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 半角英数字</li> <li>• アンダースコア (_)</li> <li>• ハイフン (-)</li> <li>• パス区切り文字</li> </ul> <p>180 バイトを超えるパス（相対パス指定の場合、カレントディレクトリまでの絶対パスと相対パスの合計）を指定した場合は、KDJE40059-W のメッセージが出力され、デフォルト値が使用されます。デフォルト値が 180 バイトを超える場合は、ログの初期化に失敗し、異常終了します。ディレクトリにアクセス権がない場合や、ファイル名を指定した場合は、KDJE55039-W のメッセージが出力され、コマンドが終了します。</p> <p>Windows の場合、UNC 名を含むパスは指定できません。UNIX の場合、nfs マウントされたディスク上へのパスは指定できません。</p>	<Application Server インストールディレクトリ>%CC%batch%logs
batch.log.lockInterval	<p>ログファイルの排他処理に失敗したときのリトライ間隔（単位：ミリ秒）を 0～2147483647 の整数値で指定します。0 を指定した場合は即時にエラーとなります。</p> <p>バッチアプリケーションで使用するコマンドが KDJE55042-E メッセージを出力して終了する場合に使用されます。</p>	10



キー名称	内容	デフォルト値
batch.log.lockInterval	Windows の場合、batch.lockRetryCount の値と batch.log.lockInterval の値を掛けた値が 0~2147483647 の範囲になるように指定します。 Windows の場合、排他処理の待ち時間として、batch.log.lockRetryCount の値と batch.log.lockInterval の値を掛けた値が使用されます。	10
batch.log.lockRetryCount	ログファイルの排他処理に失敗したときのリトライ回数（単位：回）を 1~2147483647 の整数値で指定します。 バッチアプリケーションで使用するコマンドが KDJE55042-E メッセージを出力して終了する場合に使用されます。	1000
batch.log.maintenance.filenum	バッチアプリケーションで使用するコマンドの保存用ログファイルの面数を指定します。 1~64 の整数値で指定します。面数を変更する場合には、該当するログファイルに出力しているバッチアプリケーションで使用するコマンド (cjexecjob, cjkilljob, cjlistjob) をすべて停止し、ログファイルと mmap ディレクトリ以下のログ管理ファイルを別のディレクトリへ移動、または削除してください。	2
batch.log.maintenance.filesize	バッチアプリケーションで使用するコマンドの保守用ログファイルのファイルサイズ（単位：バイト）を指定します。 4096~16777216 の整数値で指定します。サイズを変更する場合には、該当するログファイルに出力しているバッチアプリケーションで使用するコマンドをすべて停止し、ログファイルと mmap ディレクトリ以下のログ管理ファイルを別のディレクトリへ移動、または削除してください。	1048576
batch.log.message.filenum	バッチアプリケーションで使用するコマンドのメッセージログファイルの面数を指定します。 1~64 の整数値で指定します。面数を変更する場合には、該当するログファイルに出力しているバッチアプリケーションで使用するコマンドをすべて停止し、ログファイルと mmap ディレクトリ以下のログ管理ファイルを別のディレクトリへ移動、または削除してください。	2
batch.log.message.filesize	バッチアプリケーションで使用するコマンドのメッセージログファイルのファイルサイズ（単位：バイト）を指定します。 4096~16777216 の整数値で指定します。サイズを変更する場合には、該当するログファイルに出力しているバッチアプリケーションで使用するコマンドをすべて停止し、ログファイルと mmap ディレクトリ以下のログ管理ファイルを別のディレクトリへ移動、または削除してください。	1048576
batch.log.stdout.enabled	バッチ実行コマンドの標準出力に、バッチジョブ投入コマンドが出すメッセージを出力するかを指定します。 true を指定した場合： メッセージを標準出力に出力します。 false を指定した場合： メッセージを標準出力に出力しません。	true

### 3 バッチサーバで使用するファイル

キー名称	内容	デフォルト値
batch.request.timeout	バッチ実行コマンドとバッチサーバ間の通信タイムアウト時間を0~2147483647（秒単位）で指定します。0を指定すると無限に待ち続けます。	0
batch.schedule.group.name	バッチサーバのスケジュールグループ名を英数字、およびアンダースコア「_」を使った1~63文字の文字列で指定します。	JOBGROUP
batch.vbroker.agent.address	OSAgentが使用しているIPアドレスを指定します。複数のIPアドレスが振り分けられている環境で指定します。	なし
batch.vbroker.agent.port	OSAgentに接続するためのポート番号を1~65535の整数で指定します。	14000

## 3.7 usrconf.properties (バッチアプリケーション用ユーザプロパティファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

### (2) ファイルの格納先

環境変数 CJBATCHUSRCONFDIR に usrconf.properties (バッチアプリケーション用ユーザプロパティファイル) の格納先のパスを設定するか、cjexecjob コマンド (バッチアプリケーション実行コマンド) を実行するディレクトリに usrconf.properties (バッチアプリケーション用ユーザプロパティファイル) を格納してください。usrconf.cfg (バッチアプリケーション用オプション定義ファイル) は、cjexecjob コマンド (バッチアプリケーション実行コマンド) 実行時に次の順で検索されます。

1. 環境変数 (CJBATCHUSRCONFDIR) に設定したディレクトリ
2. cjexecjob コマンド (バッチアプリケーション実行コマンド) を実行したディレクトリ

### (3) 機能

cjexecjob コマンド、および ckilljob コマンドを実行する JavaVM のシステムプロパティを指定します。

### (4) サーバ管理コマンドの予約済みキー

cjexecjob コマンド、および ckilljob コマンドでは、次に示す接頭子で始まるキーを内部的に利用します。このため、アプリケーションでこれらの接頭子で始まるキーを利用してはいけません。

- ejbserver.\*
- webserver.\*
- applclient.\*
- j2eeserver.\*

### (5) cjexecjob コマンド、および ckilljob コマンドのカスタマイズ用キー

cjexecjob コマンド、および ckilljob コマンドでは、次に示すシステムプロパティのキーに値を設定することで、バッチサーバの動作をカスタマイズできます。

キーの概要とデフォルト値を次の表に示します。キーの詳細については、「2.4 usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル)」を参照してください。なお、参照する場合は「J2EE サーバ」および「J2EE アプリケーション」を「バッチサーバ」および「バッチアプリケーション」と読み替えてください。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	概要	デフォルト値	関連情報
ejbserver.client.ctm.RequestPriority	CTM 内のキューに滞留したリクエストを引き出す時のプライオリティ (優先順位) を指定します。	4	
ejbserver.container.rebindpolicy	EJB メソッドの呼び出し時に通信障害が発生した場合の、EJB クライアント側でのコ	VB_TRANSPARENT	「機能解説 基本・開発編(EJB

### 3 バッチサーバで使用するファイル

キー名称	概要	デフォルト値	関連情報
ejbserver.container.rebindpolicy	ネクションの再接続動作とリクエストの再送動作を指定します。	VB_TRANSPARENT	コンテナ)」の「2.13 EJBのリモートインタフェースの呼び出し」
ejbserver.jndi.request.timeout	ネーミングサービスとの通信タイムアウト時間を指定します。	0	
java.naming.provider.url <sup>※1</sup>	バッチアプリケーションが利用するCORBA ネーミングサービスのホスト名称とポート番号を指定します。 なお、旧バージョンで使用されていたプロトコル (iioploc または iiopname) と互換性があります。 (指定形式) corbaname::[ホスト名称]:[ポート番号]	バッチアプリケーションが実行されるバッチサーバが利用する、CORBA ネーミングサービスと通信する値。	
ejbserver.rmi.request.timeout	クライアントとサーバ間の通信タイムアウト時間を指定します。	0	
https.cipherSuites	HttpsURLConnection で使用する推奨暗号スイートを設定します。 <sup>※2</sup>	※2	
https.protocols	HttpsURLConnection で使用するプロトコルを設定します。 <sup>※2</sup>	※2	

(凡例)

空欄：関連情報はありません。

注※1 このキーは、バッチアプリケーション用ユーザプロパティファイル特有のキーです。J2EE サーバ用ユーザプロパティファイルには存在しません。

注※2 キーの詳細については、JDK のドキュメントを参照してください。

# 4

## Smart Composer 機能で使用する ファイル

この章では、Smart Composer 機能で使用するファイルの形式、格納先、機能、指定できるキーなどについて説明します。

## 4.1 Smart Composer 機能で使用するファイルの一覧

Smart Composer 機能で使用するファイルについて説明します。使用するファイルは J2EE アプリケーションを実行するシステムとバッチアプリケーションを実行するシステムで異なります。システムごとに使用するファイルについて説明します。

### (1) J2EE アプリケーションを実行するシステムで使用するファイル

J2EE アプリケーションを実行するシステムで使用するファイルの一覧を次の表に示します。

表 4-1 J2EE アプリケーションを実行するシステムで使用するファイルの一覧

分類	ファイル名称	概要
コマンドの動作環境設定ファイル	cmxserver.properties (サーバ設定プロパティファイル)	Smart Composer 機能のコマンドの実行環境を設定します。
	.cmxrc (クライアント設定プロパティファイル)	Smart Composer 機能のコマンドの共通引数のデフォルト値を設定できます。 クライアントごとに、異なるデフォルト値を設定したい場合に使用します。
	cmxclient.properties (クライアント共通設定プロパティファイル)	Smart Composer 機能のコマンドの共通引数のデフォルト値を設定できます。 すべてのクライアントに、共通のデフォルト値を設定したい場合に使用します。
	lb.properties (負荷分散機定義プロパティファイル)	負荷分散機へのアクセスに必要な接続情報を設定します。
Web システム構築用定義ファイル	簡易構築定義ファイル	Smart Composer 機能のコマンドで構築する Web システムを定義します。
	構成変更定義ファイル	Smart Composer 機能のコマンドで構築した Web システムの構成変更内容を定義します。
	論理サーバ参照定義ファイル※	Smart Composer 機能のコマンドで構築した Web システム中のサービスユニットに追加する、論理ユーザサーバを定義します。
	スケールアウト用ホスト定義ファイル	Smart Composer 機能のコマンドで構築した、ホスト単位管理モデルの Web システムをスケールアウトする場合に、複製先の Web システムの構成内容を定義します。

注※ 論理サーバ参照定義ファイルは旧バージョンとの互換用ファイルです。07-50 以降、論理ユーザサーバを設定する場合は、簡易構築定義ファイルを使用してください。

### (2) バッチアプリケーションを実行するシステムで使用するファイル

バッチアプリケーションを実行するシステムで使用するファイルの一覧を次の表に示します。

表 4-2 バッチアプリケーションを実行するシステムで使用するファイルの一覧

分類	ファイル名称	概要
コマンドの動作環境設定 ファイル	cmxserver.properties (サーバ設定プロパティ ファイル)	Smart Composer 機能のコマンドの実行環境 を設定します。
	.cmxrc (クライアント設定プロパティファイ ル)	Smart Composer 機能のコマンドの共通引数 のデフォルト値を設定できます。 クライアントごとに、異なるデフォルト値を設 定したい場合に使用します。
	cmxclient.properties (クライアント共通設定 プロパティファイル)	Smart Composer 機能のコマンドの共通引数 のデフォルト値を設定できます。 すべてのクライアントに、共通のデフォルト値 を設定したい場合に使用します。
Web システム構築用定 義ファイル	簡易構築定義ファイル	Smart Composer 機能のコマンドで構築する Web システムを定義します。
	構成変更定義ファイル	Smart Composer 機能のコマンドで構築した Web システムの構成変更内容を定義します。
	スケールアウト用ホスト定義ファイル	Smart Composer 機能のコマンドで構築し た、ホスト単位管理モデルの Web システムを スケールアウトする場合に、複製先の Web シ ステムの構成内容を定義します。

## 4.2 cmxserver.properties (サーバ設定プロパティファイル)

### (1) 形式

Java プロパティファイル形式です。

Smart Composer 機能のサーバ設定プロパティファイルです。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/`

### (3) 機能

Smart Composer 機能のコマンドの実行環境を設定します。

### (4) 設定できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次に示します。

キー名称	内容	デフォルト
cmx.max_wait_time	共通オプション-wait を指定して実行したコマンドに有効で、すでに実行しているコマンドの完了を待つときの最大待ち時間を、1~2147483647 の整数値 (単位: 秒) で指定します。ここで設定した時間を超えても、すでに実行しているコマンドが完了しない場合は、あとから実行したコマンドはエラーリターンします。	180

### (5) 記述例

```
cmx.max_wait_time=360
```

### (6) 注意事項

- パラメタが存在しない、または誤っている場合はデフォルト値を仮定します。
- Management Server 起動中に設定ファイルを更新した場合、Management Server の再起動後に更新情報が反映されます。



## 4.3 .cmxrc (クライアント設定プロパティファイル)

### (1) 形式

Java プロパティ形式です。

### (2) ファイルの格納先

コマンドを実行する OS ユーザのホームディレクトリに格納します。

### (3) 機能

Smart Composer 機能で提供するコマンドの共通引数のデフォルト値を設定します。このファイルはクライアントごとに個別にデフォルト値を設定する場合に使用します。

次のテンプレートファイルをコピーして利用してください。

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%templates%.cmxrc`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/templates/.cmxrc`

### (4) 設定できるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
cmx.connet.t.host <sup>*1</sup>	共通引数の-m オプション省略時に仮定するホスト名、および IP アドレスを設定します。 IP アドレスは、メタキャラクタを用いた正規表現で指定できます。IP アドレスが正規表現で指定された場合、利用できるローカル IP アドレスのうちマッチする IP アドレスを採用します。 <sup>*2</sup>	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名</li> <li>• IPv4 アドレス</li> </ul>	なし	06-50
cmx.connet.userid	共通引数の-u オプション省略時に仮定するユーザ ID を設定します。 管理ユーザアカウントの省略機能が有効の場合、このキーの指定は無視されます。	Management Server の管理ユーザアカウントのユーザ ID	なし	06-50
cmx.connet.passwd	共通引数の-p オプション省略時に仮定するパスワードを設定します。 管理ユーザアカウントの省略機能が有効の場合、このキーの指定は無視されます。	Management Server の管理ユーザアカウントのパスワード	なし	06-50
cmx.wait	共通引数の-wait オプションをデフォルトにする場合は、true を、-nowait オプションをデフォルトにする場合は、false を設定します。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
cmx.verbose	共通引数の-verbose オプションをデフォルトにする場合は、true を、-noverbose オプションをデフォルトにする場合は、false を設定します。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50
cmx.websystem.name	次に示すコマンドの-s オプション省略時に、Web システム名を設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• cmx_build_system<sup>※3</sup></li> <li>• cmx_define_application<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_define_resource</li> <li>• cmx_delete_serverref<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_delete_system</li> <li>• cmx_deploy_application<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_deploy_resource</li> <li>• cmx_list_model<sup>※5</sup></li> <li>• cmx_list_status</li> <li>• cmx_resume_lb<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_start_application<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_start_resource</li> <li>• cmx_start_target</li> <li>• cmx_stop_application<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_stop_resource</li> <li>• cmx_stop_target</li> <li>• cmx_test_lb<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_undefine_application<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_undefine_resource</li> <li>• cmx_undeploy_application<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_undeploy_resource</li> </ul>	Web システム名	なし	07-50
cmx.lb <sup>※4</sup>	cmx_delete_system コマンドの-lb オプション省略時に、負荷分散機の仮想サーバに対する動作を設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• keepvs：仮想サーバを削除しません。</li> <li>• deletevs：仮想サーバを削除します。</li> </ul>	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• keepvs</li> <li>• deletevs</li> </ul>	なし	07-10
cmx.encoding	cmx_export_model コマンドの-encoding オプション省略時に仮定する文字エンコーディングを指定します。 指定できる値については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス コマンド編」の「cmx_export_model (簡易構築定義ファイルの出力)」を参照してください。	文字エンコーディング名	UTF-8	07-50

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
cmx.indent	cmx_export_model コマンドの-indent オプション省略時に仮定するインデントサイズを指定します。 指定できる値については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス コマンド編」の「cmx_export_model (簡易構築定義ファイルの出力)」を参照してください。	0~8の整数	2	07-50
cmx.myhost	cmx_export_model コマンドの-myhost オプション省略時に仮定する運用管理サーバマシンのホスト名を指定します。 指定できる値については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス コマンド編」の「cmx_export_model (簡易構築定義ファイルの出力)」を参照してください。	ホスト名	なし	07-50

## 注※1

次の場合に mserver.properties の webserver.connector.http.bind\_host に値を指定しているときは、cmx.connect.host キーにも同じ値を指定してください。

- J2EE アプリケーションを実行するシステムをホスト単位管理モデルで運用する場合
- バッチアプリケーションを実行するシステムの場合

## 注※2

運用管理ドメイン内で運用管理エージェントとの通信に使用される IP アドレスのサブネットが一つに決められている場合、指定する IP アドレスを"`192.168.0.0/24`"のように記述しておけば、前方が"`192.168.0.`"である IP アドレス ("`192.168.0.32`"や"`192.168.0.128`"など) にマッチするため、設定ファイルを修正しないで、すべてのホストに配布して利用できます。正規表現についての詳細は、Java の `java.util.regex.Pattern` クラスの仕様を確認してください。

指定した正規表現にマッチする IP アドレスが複数個検出された場合は、最も小さい値の IP アドレスを採用します。例えば、"`192.168.0.32`"と"`192.168.0.128`"が検出された場合は"`192.168.0.32`"を採用します。この場合、採用された IP アドレスが意図する IP アドレスになるとは限らないため、"`192.168.0.0/24`"のように必ず 1 個だけマッチする正規表現を記述してください。

IP アドレスを正規表現で指定する場合は、次の点に注意してください。

- `*`を指定する場合は 2 文字連続して (`**`) 指定してください。`**`は 1 文字の`*`に置き換えられます。
- コロン (`:`) を使用しないでください。コロン以降はポート番号とみなされます。

mserver.properties の webserver.connector.http.bind\_host に値を指定しているときは、同じ値を指定してください。

## 注※3

cmx\_build\_system コマンド実行時に、`-f` オプションを指定している場合は、キーの設定は無効になります。

## 注※4

バッチアプリケーションを実行するシステムでは使用できません。

## 注※5

cmx.websystem.name キーを設定している場合に、cmx\_list\_model コマンドを使用して、登録されているすべての Web システムの情報モデルを取得するときは、`-all` オプションを指定してください。

## (5) 記述例

```
cmx.connect.host=localhost:28080
cmx.connect.userid=admin
cmx.connect.passwd=p1574809
cmx.wait=true
#cmx.verbose=false
cmx.websystem.name=MyWebSystem
cmx.lb=deletevs
```

## (6) 注意事項

- このファイルには、ユーザ ID やパスワードなどを記載するため、適切にファイルのアクセス権を設定してください。
- ASCII 文字以外の文字を記述する場合は、設定ファイルの文字エンコーディングと Smart Composer 機能のコマンド実行時の OS ロケールの文字エンコーディングを合わせてください。また、日本語を使用する場合に Unicode エンコードされた文字 (Unicode-encoded character) を含めた文字列で指定しないでください。
- 各パラメタが存在しない、または誤っている場合はデフォルト値を仮定します。
- 設定値 (true, false) は、大文字、小文字の区別はしません。

## 4.4 cmxclient.properties (クライアント共通設定プロパティファイル)

### (1) 形式

Java プロパティ形式です。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/`

### (3) 機能

Smart Composer 機能で提供するコマンドの共通引数のデフォルト値を設定します。このファイルはすべてのクライアントで共通のデフォルト値を設定する場合に使用します。

### (4) 設定できるキー

指定できるキーについて次に示します。なお「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
cmx.apply_user	このファイルを適用するクライアントの OS のユーザ ID を設定します。ユーザ ID はコンマ[,]で区切って指定します。また、Windows のサービスから Smart Composer 機能のコマンドが呼び出される場合に、この定義ファイルを適用するには、Windows XP の場合は「SYSTEM」を、それ以外の場合は「<ホスト名>\$」(<ホスト名>は、Management Server が稼働するホストのホスト名)を指定してください。	OS に登録されているユーザ名	なし	06-70
cmx.connect.host <sup>*1</sup>	共通引数の -m オプション省略時に仮定するホスト名、および IP アドレスを設定します。 IP アドレスは、メタキャラクタを用いた正規表現で指定できます。IP アドレスが正規表現で指定された場合、利用できるローカル IP アドレスのうちマッチする IP アドレスを採用します。 <sup>*2</sup>	指定できる値を次に示します。 • ホスト名 • IPv4 アドレス	なし	06-50
cmx.connect.userid	共通引数の -u オプション省略時に仮定するユーザ ID を設定します。 管理ユーザアカウントの省略機能が有効の場合、このプロパティの指定は無視されます。	Management Server の管理ユーザアカウントのユーザ ID	なし	06-50
cmx.connect.password	共通引数の -p オプション省略時に仮定するパスワードを設定します。 管理ユーザアカウントの省略機能が有効の場合、このプロパティの指定は無視されます。	Management Server の管理ユーザアカウントのパスワード	なし	06-50

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
cmx.wait	共通引数の-wait オプションをデフォルトにする場合は、true を、-nowait オプションをデフォルトにする場合は、false を設定します。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50
cmx.verbose	共通引数の-verbose オプションをデフォルトにする場合は、true を、-noverbose オプションをデフォルトにする場合は、false を設定します。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50
cmx.websystem.name	次に示すコマンドの-s オプション省略時に、Web システム名を設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• cmx_build_system<sup>※3</sup></li> <li>• cmx_define_application<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_define_resource</li> <li>• cmx_delete_serverref<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_delete_system</li> <li>• cmx_deploy_application<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_deploy_resource</li> <li>• cmx_list_model<sup>※5</sup></li> <li>• cmx_list_status</li> <li>• cmx_resume_lb<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_start_application<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_start_resource</li> <li>• cmx_start_target</li> <li>• cmx_stop_application<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_stop_resource</li> <li>• cmx_stop_target</li> <li>• cmx_test_lb<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_undefine_application<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_undefine_resource</li> <li>• cmx_undeploy_application<sup>※4</sup></li> <li>• cmx_undeploy_resource</li> </ul>	Web システム名	なし	07-50
cmx.lb <sup>※4</sup>	cmx_delete_system コマンドの-lb オプション省略時に、負荷分散機の仮想サーバに対する動作を設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• keepvs：仮想サーバを削除しません。</li> <li>• deletevs：仮想サーバを削除します。</li> </ul>	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• keepvs</li> <li>• deletevs</li> </ul>	なし	07-10

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
cmx.encoding	cmx_export_model コマンドの-encoding オプション省略時に仮定する文字エンコーディングを指定します。 指定できる値については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス コマンド編」の「cmx_export_model (簡易構築定義ファイルの出力)」を参照してください。	文字エンコーディング名	UTF-8	07-50
cmx.indent	cmx_export_model コマンドの-indent オプション省略時に仮定するインデントサイズを指定します。 指定できる値については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス コマンド編」の「cmx_export_model (簡易構築定義ファイルの出力)」を参照してください。	0~8の整数	2	07-50
cmx.myhost	cmx_export_model コマンドの-myhost オプション省略時に仮定する運用管理サーバマシンのホスト名を指定します。 指定できる値については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス コマンド編」の「cmx_export_model (簡易構築定義ファイルの出力)」を参照してください。	ホスト名	なし	07-50
cmx.output.mode	コマンドの実行結果およびメッセージの出力先モードを指定します。 指定できる文字列を次に示します。 6 Version 6 互換モードにします。 Version 6 と同じコマンドの実行結果およびメッセージの出力先になります。 7 Version 7 互換モードにします。 Version 7 と同じコマンドの実行結果およびメッセージの出力先になります。 8 Version 8 モードにします。 Version 8 と同じコマンドの実行結果およびメッセージの出力先になります。	指定できる値を次に示します。 • 6 • 7 • 8	8	08-00

## 注※1

J2EE アプリケーションを実行するシステムをホスト単位管理モデルで運用する場合、またはバッチアプリケーションを実行するシステムの場合、次の点に注意してください。

mserver.properties の webserver.connector.http.bind\_host に値を指定しているときは、cmx.connect.host キーにも同じ値を指定してください。

## 注※2

運用管理ドメイン内で運用管理エージェントとの通信に使用される IP アドレスのサブネットが一つに決められている場合、指定する IP アドレスを"192.168.0.0/24"のように記述しておけば、前方が"192.168.0."である IP アドレス ("192.168.0.32"や"192.168.0.128"など) にマッチするため、設定

ファイルを修正しないで、すべてのホストに配布して利用できます。正規表現についての詳細は、Java の `java.util.regex.Pattern` クラスの仕様を確認してください。

指定した正規表現にマッチする IP アドレスが複数個検出された場合は、最も小さい値の IP アドレスを採用します。例えば、"192.168.0.32"と"192.168.0.128"が検出された場合は"192.168.0.32"を採用します。この場合、採用された IP アドレスが意図する IP アドレスになるとは限らないため、"192~~¥¥~~.168~~¥¥~~.0~~¥¥~~.1.."のように必ず 1 個だけマッチする正規表現を記述してください。

IP アドレスを正規表現で指定する場合は、次の点に注意してください。

- ¥を指定する場合は 2 文字連続して (¥¥) 指定してください。¥¥は 1 文字の¥に置き換えられます。
- コロン (:) を使用しないでください。コロン以降はポート番号とみなされます。

`mserver.properteis` の `webserver.connector.http.bind_host` に値を指定しているときは、同じ値を指定してください。

### 注※3

`cmx_build_system` コマンド実行時に、`-f` オプションを指定している場合は、キーの設定は無効になります。

### 注※4

バッチアプリケーションを実行するシステムでは使用できません。

### 注※5

`cmx.websystem.name` キーを設定している場合に、`cmx_list_model` コマンドを使用して、登録されているすべての Web システムの情報モデルを取得するときは、`-all` オプションを指定してください。

## (5) 記述例

```
cmx.apply_user=Administrator,muser1
cmx.connect.host=localhost:28080
cmx.connect.userid=admin
cmx.connect.passwd=p1574809
cmx.wait=true
#cmx.verbose=false
cmx.websystem.name=MyWebSystem
cmx.lb=deletevs
```

## (6) 注意事項

- このファイルには、ユーザ ID やパスワードなどを記載するため、適切にファイルのアクセス権を設定してください。
- ASCII 文字以外の文字を記述する場合は、設定ファイルの文字エンコーディングと Smart Composer 機能のコマンド実行時の OS ロケールの文字エンコーディングを合わせてください。また、日本語を使用する場合に Unicode エンコードされた文字 (Unicode-encoded character) を含めた文字列で指定しないでください。
- 各パラメタが存在しない、または誤っている場合はデフォルト値を仮定します。
- 設定値 (true, false) は、大文字、小文字の区別はされません。
- `cmx.apply_user` キーに指定する内容は、UNIX の場合、大文字、小文字が区別されます。Windows の場合は、大文字と小文字の区別はされません。
- `.cmxrc` ファイルと `cmxclient.properties` ファイルの両方を使用している場合は、`.cmxrc` ファイルが適用されます。`cmxclient.properties` ファイルは読み込まれません。
- `.cmxrc` ファイルを使用していないクライアントで、`cmxclient.properties` ファイルにアクセス権限のないクライアントは、`cmxclient.properties` ファイルの読み込み時にエラーが発生します。このため、



Smart Composer 機能のコマンドを使用するクライアントには、`cmx.apply_user` キーにユーザ ID を設定して、`cmxclient.properties` ファイルへのアクセス権を与えてください。

## 4.5 lb.properties (負荷分散機定義プロパティファイル)

### (1) 形式

Java プロパティ形式です。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config`

### (3) 機能

負荷分散機へのアクセスに必要な接続情報を設定します。Application Server から負荷分散機を制御する場合に使用します。

### (4) 設定できるキー

設定できるキーとデフォルト値を次に示します。なお、負荷分散機の制御方法によって、設定できるキーが異なるので注意してください。API を使用した直接接続を使用する負荷分散機で設定できるキーについては、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 セキュリティ管理機能編」の「18.2 lb.properties (負荷分散機定義プロパティファイル)」を参照してください。

キー名称	内容	デフォルト
lb.list	負荷分散機の管理 IP アドレスをドット記法 (xxx.xxx.xxx.xxx) で設定します。xxx には 0~255 の整数を指定します。なお、複数の負荷分散機を使用する場合は、コンマ「,」で区切り、複数の管理 IP アドレスを設定します。	なし
lb.connect_type.<IP アドレス>*1*2	負荷分散機への接続形態を設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Telnet を直接使用する場合 「telnet」を指定してください。</li> <li>• ssh を直接使用する場合 「ssh」を指定してください。</li> </ul> 何も指定しない場合、jpl_nc(旧 VR 互換)が指定されます。	jpl_nc
lb.enable_passwd.<IP アドレス>	負荷分散機に設定した Privileged EXEC レベルに必要なパスワードを負荷分散機ごとに設定します。 なお、このプロパティは ACOS の場合に設定します。	なし
lb.ssh.port.<IP アドレス>*1	負荷分散機の ssh サーバのポート番号を設定します。指定できる値は 1~65535 の整数です。	22
lb.ssh.user.<IP アドレス>*1	負荷分散機に ssh で接続するときのユーザ名を設定します。	なし
lb.ssh.passwd.<IP アドレス>*1	負荷分散機に ssh で接続するときのユーザのパスワードを設定します。	なし

キー名称	内容	デフォルト
lb.ssh.timeout.<IP アドレス> ※1※2	負荷分散機への ssh コマンド実行（接続処理）時のタイムアウト時間（単位：秒）を設定します。 このキーで設定した時間内に、負荷分散機への接続処理が完了しない場合は、Smart Composer 機能のコマンド（cmx_build_system など）がタイムアウトエラーで異常終了します。 なお、設定できる値は 1~2147483 の整数です。	10
lb.telnet.command_timeout.<IP アドレス>	負荷分散機へのコマンド送信時のタイムアウト時間（単位：秒）を設定します。 このキーで設定した時間内に、負荷分散機に対して発行した CLI コマンドが完了しない場合は、Smart Composer 機能のコマンド（cmx_build_system など）がタイムアウトエラーで異常終了します。 なお、設定できる値は 1~2147483 の整数です。	10
lb.telnet.login_prompt.<IP アドレス>	負荷分散機に接続するときのログイン完了後プロンプトに表示される文字列を設定します。 最後に空白を指定したい場合、” ” で囲んで指定します。	なし
lb.telnet.login_timeout.<IP アドレス>	負荷分散機に接続するときのログイン処理時のタイムアウト時間（単位：秒）を設定します。 このキーで設定した時間内に、負荷分散機への接続処理が完了しない場合は、Smart Composer 機能のコマンド（cmx_build_system など）がタイムアウトエラーで異常終了します。 なお、設定できる値は 1~2147483 の整数です。	10
lb.telnet.passwd.<IP アドレス>	負荷分散機に Telnet でログインするときのユーザのパスワードを設定します。	なし
lb.telnet.passwd_prompt.<IP アドレス>	負荷分散機に接続するときのパスワード入力プロンプトに表示される文字列を設定します。 最後に空白を指定したい場合、” ” で囲んで指定します。	なし
lb.telnet.port.<IP アドレス>	負荷分散機のポート番号を設定します。指定できる値は 1~65535 の整数です。	23
lb.telnet.user.<IP アドレス>	負荷分散機に Telnet でログインするときのユーザ名を設定します。	なし
lb.telnet.user_prompt.<IP アドレス>	負荷分散機に接続するときのユーザ名入力プロンプトに表示される文字列を設定します。 最後に空白を指定したい場合、” ” で囲んで指定します。	なし

## 注※1

lb.list に指定した負荷分散機の管理 IP アドレスを指定します。

## 注※2

指定できる値以外の値が指定された場合は、cmx\_test\_lb コマンド、cmx\_build\_system コマンド、cmx\_delete\_system コマンド、cmx\_start\_target コマンド、および cmx\_stop\_target コマンドを実行したときにエラーになるので注意してください。

## (5) 記述例

```
lb.list=192.168.1.100
lb.enable_passwd.192.168.1.100=adminpw
lb.connect_type.192.168.1.100=telnet
```

```
#lb.telnet.port.192.168.1.100=23
lb.telnet.user.192.168.1.100=user01
lb.telnet.passwd.192.168.1.100=user01pw
lb.telnet.user_prompt.192.168.1.100="AX login: "
lb.telnet.passwd_prompt.192.168.1.100="Password: "
lb.telnet.login_prompt.192.168.1.100=>
#lb.telnet.login_timeout.192.168.1.100=10
#lb.telnet.command_timeout.192.168.1.100=10
```

#### (6) 注意事項

- このファイルには、パスワードなどの情報が含まれているため、適切にファイルのアクセス権を設定してください。
- 各パラメタが存在しない、または誤っている場合はデフォルト値を仮定します。
- Management Server 起動中に設定ファイルを更新した場合、Management Server の再起動後に更新情報が反映されます。
- このファイルを更新した場合、または Management Server マシンと負荷分散機との接続構成を変更した場合は、cmx\_test\_lb コマンドを使用して、負荷分散機への接続を確認してください。cmx\_test\_lb コマンドの詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス コマンド編」の「8. Smart Composer 機能で使用するコマンド」を参照してください。負荷分散機へ接続できない場合は、cmx\_test\_lb コマンドが出力したメッセージを基に、負荷分散機の設定および簡易構築定義ファイルの負荷分散機の定義 (<load-balancer>タグの定義) の設定内容を確認してください。負荷分散機の設定および簡易構築定義ファイルの負荷分散機の定義 (<load-balancer>タグの定義) については、マニュアル「アプリケーションサーバシステム構築・運用ガイド」の「4.7.5 負荷分散機へ接続する環境を設定する」を参照してください。

## 4.6 簡易構築定義ファイル

簡易構築定義ファイルについて説明します。

### 4.6.1 概要

簡易構築定義ファイルには、Web システムの属性、負荷分散機、物理ティア、サービスユニット、およびサービスユニットを構成するホストを定義します。Web システムの属性、物理ティア、サービスユニット、およびホストは、定義ファイル内に必要な数だけ定義し、負荷分散機は Web システム内に一つ定義します。

ただし、アプリケーションサーバから負荷分散機を制御する場合（Smart Composer 機能で負荷分散機の設定、および実サーバポートの開始・閉塞をしない場合）は、負荷分散機の定義を記述する必要はありません。また、バッチアプリケーションを実行するシステムの場合、負荷分散機を使用しないため、負荷分散機の定義を記述する必要はありません。

なお、次のテンプレートファイルをコピーして利用してください。

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%templates%cmxdefcombinedmodel.xml`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/templates/cmxdefcombinedmodel.xml`

#### 参考

テンプレートファイルの文字エンコーディングは、UTF-8 です。

#### ！ 注意事項

システムを構築したあとにシステムの構成変更をする場合は、構成変更定義ファイルを使用してください。簡易構築定義ファイルの編集で、システムの構成変更はできません。

#### (1) 形式

xml 形式です。

#### (2) 格納先

任意の作業場所に格納してください。

### 4.6.2 簡易構築定義ファイルの指定内容

簡易構築定義ファイルの指定内容で説明する項目と、その項目の意味を記します。

項目名	説明
タグ名	設定するタグを示します。
出現パターン	タグが出現する回数を示します。
内容	キーに定義する内容を示します。
指定可能値	タグに指定できる値を示します。指定できる値がない場合はハイフン「-」を示します。

4 Smart Composer 機能で使用するファイル

項目名	説明
タグの省略	定義形式で示すキーが省略できるかどうかを示します。
値の省略	定義形式で示すキーの値が省略されるかどうかを示します。
デフォルト	キーに指定する内容が省略されている場合に有効になる指定値を示します。デフォルト値がない場合は「なし」を示します。
バージョン	定義できるアプリケーションサーバのバージョンを示します。

タグの省略、値の省略および内容の詳細については、4.6.3 以降の簡易構築定義ファイルの各定義の詳細を参照してください。

簡易構築定義ファイルについて、次の表に示します。

タグ名	出現パターン	内容	指定可能値	省略値	VR
<web-system>	0回以上	Web システムを定義します。 複数の Web システムを定義する場合は、<web-system>タグを複数指定します。	-	なし	07-00
├ <name>	1回	必須定義。 Web システムを識別するための名称を指定します。	英数字または、アンダースコア「_」およびハイフン「-」で指定した32文字以内の文字列を指定します。	なし	06-50
├ <display-name>	0または1回	Web システムの表示名を指定します。 指定する文字に制限はありません。	128文字以内の任意の文字列を指定します。	なし	06-50
├ <description>	0または1回	Web システムのコメントを指定します。 指定する文字に制限はありません。	1024文字以内の任意の文字列を指定します。	なし	06-50
├ <load-balancer>	0または1回	負荷分散機を定義します。	-	なし	06-50
├ <name>	0または1回	負荷分散機の名称を指定します。	英数字または、アンダースコア「_」およびハイフン「-」で指定した	なし	06-50

タグ名	出現パターン	内容	指定可能値	省略値	VR
<name>	0 または 1 回	負荷分散機の名称を指定します。	32 文字以内の文字列を指定します。	なし	06-50
<load-balancer-type>	1 回	負荷分散機の種類を指定します。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• BIG-IPv9</li> <li>• BIG-IPv10.1</li> <li>• BIG-IPv10.2</li> <li>• BIG-IPv11</li> <li>• ACOS</li> </ul>	なし	06-50
<display-name>	0 または 1 回	負荷分散機の表示名を指定します。 指定する文字に制限はありません。	128 文字以内の任意の文字列を指定します。	なし	06-50
<description>	0 または 1 回	負荷分散機のコメントを指定します。 指定する文字に制限はありません。	1024 文字以内の任意の文字列を指定します。	なし	06-50
<cookie-switching>	0 または 1 回	負荷分散機の Cookie スイッチング機能を使用する場合に指定します。	—	なし	06-51
<cookie-switching-enabled>	0 または 1 回	Cookie スイッチング機能を使用する場合に指定します。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-51
<cookie-name>	0 または 1 回	cookie の名称を英数字またはアンダースコア「_」で指定します。 ただし、次の名前は Web コンテナが使用するため、大文字・小文字の区別なく使用できません。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• JSESSIONID</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• BIG-IP の場合 64 文字以内の文字列を指定します。 なお、先頭 1 文字は大文字または小文字の英字を指定す</li> </ul>	CMX_SERVER_ID	06-51

タグ名			出現パターン	内容	指定可能値	省略値	VR
		<cookie-name>	0 または 1 回	cookie の名称を英数字またはアンダースコア「_」で指定します。 ただし、次の名前は Web コンテナが使用するため、大文字・小文字の区別なく使用できません。 • JSESSIONID	する必要があります。 • ACOS の場合 63 文字以内の文字列を指定します。	CMX_SERVER_ID	06-51
		<server-id-rule>	0 または 1 回	08-53 以降は、このタグに値を指定しないでください。 値を指定した場合、指定した値は無効になります。	—	なし	06-51
		<management-host>	1 回	負荷分散機に設定した管理 IP アドレスまたはホスト名を指定します。	指定できる文字列を次に示します。 • ホスト名 • IPv4 アドレス	なし	07-50
		<redundant-management-host>	1 回	負荷分散機を冗長化したシステムの場合に、2 台目の負荷分散機に設定した管理 IP アドレスまたはホスト名を指定します。	指定できる文字列を次に示します。 • ホスト名 • IPv4 アドレス	なし	07-50
		<virtual-server>	1 回	仮想サーバを定義します。	—	なし	06-50
		<virtual-server-name>	1 回	仮想サーバ名を指定します。 複数の Web システムで負荷分散機を共有する場合は、共有する Web システムで仮想サーバ名が重複しないように指定してください。	英数字またはアンダースコア「_」、ピリオド「.」およびハイフン「-」で指定した 31 文字以内の文字列を指定します。	なし	06-50
		<display-name>	0 または 1 回	仮想サーバの表示名を指定します。	128 文字以内の任意の文字列を指定します。	なし	06-50
		<description>	0 または 1 回	仮想サーバのコメントを指定します。	1024 文字以内の任意の文字列を指定します。	なし	06-50





タグ名	出現パターン	内容	指定可能値	省略値	VR
<logical-server-type>	1回	必須定義。 コンフィグレーションを定義する論理サーバの種類を指定します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>performance-tracer</li> <li>ctm-domain-manager</li> <li>component-transaction-monitor</li> <li>smart-agent</li> </ul>	なし	06-50
<server-no>	0または1回	物理ティア内の特定の J2EE サーバで、共通のコンフィグレーションを指定する場合には、J2EE サーバを識別するための番号を指定します。物理ティア内で番号が重複しないように指定してください。	1~<j2ee-server-count>の指定値	なし	07-10
<param>	1回以上	必須定義。 論理サーバの環境を設定するパラメータを、パラメータ名と値で定義します。	—	なし	06-50
<param-name>	1回	パラメータ名を指定します。	指定できる値については「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」の説明を参照してください。	なし	06-50
<param-value>	1回以上	パラメータの設定値を指定します。	指定できる値については「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」の説明を参照してください。	なし	06-50
<unit>	1回以上	必須定義。 サービスユニットを定義します。	—	なし	06-50



タグ名	出現パターン	内容	指定可能値	省略値	VR
<logical-server-name>	0 または 1 回	論理サーバまたはクラスタを識別するための名称を指定します。	英数字またはアンダースコア「_」、およびハイフン「-」で指定した 128 文字以内の文字列を指定します。	cmx_<Web システム名>_<サービスユニット名>_<種別>_<通番>	07-00
<display-name>	0 または 1 回	論理サーバの表示名を指定します。指定する文字に制限はありません。	128 文字以内の任意の文字列を指定します。	なし	07-00
<description>	0 または 1 回	論理サーバのコメントを指定します。指定する文字に制限はありません。	1024 文字以内の任意の文字列を指定します。	なし	07-00
<logical-server-type>	1 回	必須定義。 コンフィグレーションを定義する論理サーバの種類を指定します。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• web-server</li> <li>• j2ee-server</li> <li>• sfo-server</li> <li>• performance-tracer</li> <li>• ctm-domain-manager</li> <li>• component-transaction-monitor</li> <li>• smart-agent</li> <li>• naming-service</li> <li>• user-server</li> </ul>	なし	07-00



タグ名	出現パターン	内容	指定可能値	省略値	VR
<host-name>	1 回	ホストが複数のネットワークセグメントに接続されていて、複数個の IP アドレスを持つ場合は、次のどちらかを設定してください。  <ul style="list-style-type: none"> <li>サーバ間、または負荷分散機とサーバ間の通信に使用するネットワークの IP アドレス</li> <li>サーバ間、または負荷分散機とサーバ間の通信に使用するネットワークのホスト名</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ホスト名</li> <li>IPv4 アドレス</li> <li>@myhost</li> </ul>	なし	07-50
<display-name>	0 または 1 回	ホストの表示名を指定します。指定する文字に制限はありません。	128 文字以内の任意の文字列を指定します。	なし	06-50
<description>	0 または 1 回	ホストのコメントを 1,024 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	1024 文字以内の任意の文字列を指定します。	なし	06-50
<agent-host>	0 または 1 回	運用管理エージェントのホスト名、IP アドレスまたは @myhost を指定します。 ホストが複数のネットワークセグメントに接続されていて、複数個の IP アドレスを持つ場合は、次のどちらかを設定してください。  <ul style="list-style-type: none"> <li>Management Server とサーバ間の通信に使用するネットワークの IP アドレス</li> <li>Management Server とサーバ間の通信に使用するネットワークのホスト名</li> </ul>	指定できる文字列を次に示します。  <ul style="list-style-type: none"> <li>ホスト名</li> <li>IPv4 アドレス</li> <li>@myhost</li> </ul>	host-name で指定した値	07-50
<agent-port>	0 または 1 回	運用管理エージェントのポート番号を指定します。	1~65535 の整数を指定します。	20295	06-50

(凡例) - : 該当なし

### 4.6.3 Web システムの定義

#### (1) <web-system>

##### 内容

Web システムを定義します。複数の Web システムを定義する場合は、<web-system>タグを複数指定します。

##### 指定可能値

—

##### タグの省略

省略できません。

##### 値の省略

省略できません。

#### (2) <name>

##### 内容

必須定義。

Web システムを識別するための名称を指定します。

運用管理ドメイン内でユニークな名称を指定する必要があります。Smart Composer 機能のコマンドの-s オプションには、ここで指定した名称を指定します。

##### 指定可能値

英数字またはアンダースコア「\_」、およびハイフン「-」で指定した 32 文字以内の文字列を指定します。

##### タグの省略

省略できません。

##### 値の省略

省略できません。

#### (3) <display-name>

##### 内容

Web システムの表示名を指定します。指定する文字に制限はありません。

##### 指定可能値

128 文字以内の任意の文字列を指定します。

##### タグの省略

省略できます。

##### 値の省略

省略できます。

#### (4) <description>

##### 内容

Web システムのコメントを指定します。指定する文字に制限はありません。

**指定可能値**

1024 文字以内の任意の文字列を指定します。

**タグの省略**

省略できます。

**値の省略**

省略できます。

## 4.6.4 負荷分散機の定義

### (1) <load-balancer>

**内容**

負荷分散機を定義します。

Smart Composer 機能で負荷分散機の設定、および実サーバポートの開始・閉塞をしない場合は、負荷分散機の定義 (<load-balancer>タグから</load-balancer>タグまで) は必要ありません。なお、バッチアプリケーションを実行するシステムでは負荷分散機の定義は不要です。

**指定可能値**

—

**タグの省略**

省略できます。

**値の省略**

省略できます。

### (2) <name>

**内容**

負荷分散機の名称を 32 文字以下で指定します。

**指定可能値**

英数字またはアンダースコア「\_」、およびハイフン「-」で指定した 32 文字以内の文字列を指定します。

**タグの省略**

省略できます。

**値の省略**

省略できます。

### (3) <load-balancer-type>

**内容**

負荷分散機の種類を指定します。負荷分散機の種類を次に示します。

BIG-IPv9

BIG-IP v9 を使用する場合に指定します。

BIG-IPv10.1

BIG-IP v10.1 を使用する場合に指定します。



BIG-IPv10.2

BIG-IP v10.2 を使用する場合に指定します。

BIG-IPv11

BIG-IP v11 を使用する場合に指定します。

ACOS

ACOS を使用する場合に指定します。

Smart Composer 機能で負荷分散機の設定をする場合は、必ず指定してください。

#### 指定可能値

指定できる文字列を次に示します。

- BIG-IPv9
- BIG-IPv10.1
- BIG-IPv10.2
- BIG-IPv11
- ACOS

#### タグの省略

省略できません。

#### 値の省略

省略できません。

### (4) <display-name>

#### 内容

負荷分散機の表示名を 128 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。

#### 指定可能値

128 文字以内の任意の文字列を指定します。

#### タグの省略

省略できます。

#### 値の省略

省略できます。

### (5) <description>

#### 内容

負荷分散機のコメントを 1024 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。

#### 指定可能値

1024 文字以内の任意の文字列を指定します。

#### タグの省略

省略できます。

#### 値の省略

省略できます。

## 4.6.5 cookie スイッチングの定義

### (1) <cookie-switching>

#### 内容

負荷分散機の Cookie スイッチング機能を使用する場合に指定します。

この設定によって、一連の HTTP リクエストが一つの Web サーバまたは J2EE サーバで処理されます。

#### 指定可能値

—

#### タグの省略

省略できます。

#### 値の省略

省略できます。

### (2) <cookie-switching-enabled>

#### 内容

Cookie スイッチング機能を使用する場合に指定します。

#### 指定可能値

指定できる文字列を次に示します。

- true  
Cookie スイッチング機能を使用する場合に指定します。
- false  
Cookie スイッチング機能を使用しない場合に指定します。

#### タグの省略

省略できます。

#### 値の省略

省略できます。

### (3) <cookie-name>

#### 内容

cookie の名称を 1~64 文字の文字列で指定します。

指定できる文字は、半英数字またはアンダースコア「\_」の組み合わせです。

ただし、次の名前は Web コンテナが使用するため、大文字・小文字の区別なく使用できません。

- JSESSIONID

#### 注

<load-balancer-type>に ACOS を指定し、かつ lb.properties の lb.connect\_type.<IP アドレス>に API を指定すると、この指定は無効となります。

#### 指定可能値

- BIG-IP の場合  
英数字またはアンダースコア「\_」で指定した 64 文字以内の文字列を指定します。なお、先頭 1 文字は大文字または小文字の英字を指定する必要があります。

- ACOS の場合  
英数字またはアンダースコア「\_」で指定した 63 文字以内の文字列を指定します。

**タグの省略**

省略できます。

**値の省略**

省略できます。

**(4) <server-id-rule>****内容**

08-53 以降は、このタグに値を指定しないでください。値を指定した場合、指定した値は無効になります。

**指定可能値**

08-53 以降は、このタグに値を指定しないでください。値を指定した場合、指定した値は無効になります。

**タグの省略**

省略できます。

**値の省略**

省略できます。

**(5) <management-host>****内容**

負荷分散機に設定した管理 IP アドレスまたはホスト名を指定します。

複数の Web システムで負荷分散機を共有する場合は、共有する Web システムで同じ管理 IP アドレスまたはホスト名を指定してください。

**指定可能値**

指定できる文字列を次に示します。

- ホスト名  
管理 IP アドレスはドット記法 (xxx.xxx.xxx.xxx) で指定します。xxx には 0~255 の整数を指定します。
- IPv4 アドレス  
ホスト名に指定できる文字は、英数字またはアンダースコア「\_」、ハイフン「-」の組み合わせです。

**タグの省略**

省略できません。

**値の省略**

省略できません。

**(6) <redundant-management-host>****内容**

負荷分散機を冗長化したシステムの場合に、2 台目の負荷分散機に設定した管理 IP アドレスまたはホスト名を指定します。

複数の Web システムで負荷分散機を共有する場合は、共有する Web システムで同じ管理 IP アドレスまたはホスト名を指定してください。

なお、定義ごとに指定できるタグについては、「4.10 簡易構築定義ファイルおよび構成変更定義ファイルに指定できるタグ」を参照してください。

### 指定可能値

指定できる文字列を次に示します。

- ホスト名  
ホスト名に指定できる文字は、英数字またはアンダースコア「\_」、ハイフン「-」の組み合わせです。
- IPv4 アドレス  
管理 IP アドレスはドット記法 (xxx.xxx.xxx.xxx) で指定します。xxx には 0~255 の整数を指定します。

### タグの省略

省略できます。

### 値の省略

省略できます。

## 4.6.6 仮想サーバの定義

### (1) <virtual-server>

#### 内容

仮想サーバを定義します。

#### 指定可能値

—

#### タグの省略

省略できません。

#### 値の省略

省略できません。

### (2) <virtual-server-name>

#### 内容

仮想サーバ名を 1~31 文字で指定します。

複数の Web システムで負荷分散機を共有する場合は、共有する Web システムで仮想サーバ名が重複しないように指定してください。

#### 指定可能値

英数字またはアンダースコア「\_」、ピリオド「.」およびハイフン「-」で指定した 31 文字以内の文字列を指定します。

#### タグの省略

省略できません。

#### 値の省略

省略できません。

### (3) <display-name>

#### 内容

仮想サーバの表示名を指定します。

#### 指定可能値

128 文字以内の任意の文字列を指定します。

#### タグの省略

省略できます。

#### 値の省略

省略できます。

### (4) <description>

#### 内容

仮想サーバのコメントを指定します。

#### 指定可能値

1024 文字以内の任意の文字列を指定します。

#### タグの省略

省略できます。

#### 値の省略

省略できます。

### (5) <ip-address>

#### 内容

仮想サーバのホスト名, または IP アドレスを指定します。

複数の Web システムで負荷分散機を共有する場合は, 共有する Web システムで仮想サーバの IP アドレスが重複しないように指定してください。

#### 指定可能値

指定できる文字列を次に示します。

- ホスト名
- IPv4 アドレス

#### タグの省略

省略できません。

#### 値の省略

省略できません。

### (6) <http-port>

#### 内容

仮想サーバの http ポート番号を 1~65535 の間で指定します。

BIG-IP, ACOS の場合で, 複数の Web システムで負荷分散機を共有するときは, 共有する Web システムで仮想サーバの http ポート番号が重複しないように指定してください。

#### 指定可能値

1~65535 の整数を指定します。

#### タグの省略

省略できません。

#### 値の省略

省略できません。

## 4.6.7 物理ティアの定義

### (1) <tier>

#### 内容

必須定義。

物理ティアを定義します。

物理ティアには、combined-tier、http-tier、j2ee-tier、sfo-tier、ctm-tier、および free-tier の 6 種類があります。それぞれの物理ティアは、単独または複数を組み合わせて、Web システムを構成します。指定できる物理ティアの構成を次に示します。

- combined-tier 構成
- http-tier と j2ee-tier の構成<sup>※1</sup>
- http-tier 構成<sup>※2</sup>
- j2ee-tier 構成
- combined-tier に sfo-tier を組み合わせた構成<sup>※1</sup>
- http-tier と j2ee-tier に sfo-tier を組み合わせた構成<sup>※1</sup>
- ctm-tier 構成
- free-tier 構成<sup>※1</sup>

注※1 Smart Composer 機能で構築するシステムで使用できます。仮想化システムでは使用できません。

注※2 仮想化システムで使用できます。Smart Composer 機能で構築するシステムでは使用できません。

#### combined-tier 構成の場合

サービスユニット内の Web サーバと J2EE サーバを 1 ホストで構成し、一つの<tier>タグで定義します。

#### http-tier と j2ee-tier の構成の場合

サービスユニット内の Web サーバと J2EE サーバを別々のホストで構成し、二つの<tier>タグで定義します。

#### http-tier 構成の場合

サービスユニット内の Web サーバを 1 ホストで構成し、一つの<tier>タグで定義します。http-tier 構成を使用する場合は、仮想サーバグループ情報ファイルで関連づけられた j2ee-tier 構成の仮想サーバを用意しておく必要があります。

#### j2ee-tier 構成の場合

サービスユニット内の J2EE サーバを 1 ホストで構成し、一つの<tier>タグで定義します。j2ee-tier 構成を使用する場合は、インプロセス HTTP サーバ機能を有効に設定しておく必要があります。仮想化システムで j2ee-tier 構成を使用する場合は、仮想サーバグループ情報ファイルで関連づけられた combined-tier 構成の仮想サーバを用意しておく必要があります。

**combined-tier または http-tier と j2ee-tier に組み合わせて構成する sfo-tier の場合**

サービスユニット内のセッションフェイルオーバーサーバ (SFO サーバ) を 1 ホストで構成し、一つの<tier>タグで定義します。

**ctm-tier 構成の場合**

ctm-tier は、combined-tier, http-tier, j2ee-tier, sfo-tier を定義する Web システムとは別の Web システムで定義します。ctm-tier は、サービスユニット内の CTM 関連の論理サーバ (CTM ドメインマネージャ, CTM およびスマートエージェント) と J2EE サーバを 1 ホストで構成し、一つの<tier>タグで定義します。

また、統合ネーミングスケジューラサーバを配置する場合は、統合ネーミングスケジューラサーバ用および CTM 用の Web システムに分けて、それぞれ定義します。

統合スケジューラサーバ用の Web システムは、サービスユニット内の CTM 関連の論理サーバ (CTM ドメインマネージャ, CTM およびスマートエージェント) を 1 ホストで構成し、一つの<tier>タグで定義します。

仮想化システムで ctm-tier 構成を使用する場合は、ctm-tier 構成の管理ユニットに属する仮想サーバに加えて、combined-tier 構成の管理ユニットに属する仮想サーバを用意しておく必要があります。

**free-tier 構成の場合**

ほかのどの物理ティアの定義にも当てはまらない構成が、一つの<tier>タグで定義されます。

**指定可能値**

—

**タグの省略**

省略できません。

**値の省略**

省略できません。

**(2) <tier-type>****内容**

必須定義。

物理ティアの種類を指定します。物理ティアの種類は次のとおりです。

- combined-tier
- http-tier
- j2ee-tier
- sfo-tier
- ctm-tier
- free-tier

**指定可能値**

指定できる文字列を次に示します。

- combined-tier
- http-tier
- j2ee-tier
- sfo-tier

- ctm-tier
- free-tier

**タグの省略**

省略できません。

**値の省略**

省略できません。

**(3) <j2ee-server-count>**

**内容**

<tier-type>タグで ctm-tier を指定した場合に、1 ホストに配置する J2EE サーバの数を 0~32 の整数で指定します。

**指定可能値**

0~32 の整数で指定します。

統合ネーミングスケジューラサーバ用の Web システムの場合

0 を指定します。

CTM 用の Web システムの場合

Web システムごとに、1 ホスト内に配置する J2EE サーバの数を指定します。

なお、Web システムの構成変更時、J2EE サーバの数は変更できません。

**タグの省略**

省略できます。

**値の省略**

省略できます。

**(4) <configuration>**

**内容**

物理ティアに属するすべての論理サーバに適用するコンフィグレーションを、論理サーバの種類ごとに定義します。

例えば、Web サーバと J2EE サーバの二つのコンフィグレーションを定義する場合は、

<configuration>タグを二つ定義し、一つを Web サーバ用、もう一つを J2EE サーバ用として定義します。

**指定可能値**

—

**タグの省略**

省略できます。

**値の省略**

省略できます。

**(5) <logical-server-type>**

**内容**

必須定義。

コンフィグレーションを定義する論理サーバの種類を指定します。論理サーバの種類を次に示します。



- web-server : Web サーバ
- j2ee-server : J2EE サーバ
- sfo-server : セッションフェイルオーバーサーバ (SFO サーバ)
- performance-tracer : パフォーマンストレーサ
- ctm-domain-manager : CTM ドメインマネージャ
- component-transaction-monitor : CTM
- smart-agent : スマートエージェント

物理ティアの種類によって、コンフィグレーションが定義できる論理サーバが異なります。物理ティアの種類を次に示します。

combined-tier の場合

Web サーバ, J2EE サーバとパフォーマンストレーサ

http-tier の場合

Web サーバとパフォーマンストレーサ

j2ee-tier の場合

J2EE サーバとパフォーマンストレーサ

sfo-tier の場合

セッションフェイルオーバーサーバ (SFO サーバ) とパフォーマンストレーサ

ctm-tier の場合

Web システムごとに定義できる論理サーバが異なります。

- 統合ネーミングスケジューラサーバ用の Web システムの場合  
CTM ドメインマネージャ, CTM, スマートエージェントとパフォーマンストレーサ
- CTM 用の Web システムの場合  
CTM ドメインマネージャ, CTM, スマートエージェント, J2EE サーバとパフォーマンストレーサ

注

物理ティアの定義では、ユーザサーバ, および free-tier 構成に含まれる論理サーバのコンフィグレーションが設定できません。これらの論理サーバのコンフィグレーションはユニットの定義で設定してください。

#### 指定可能値

指定できる文字列を次に示します。

- web-server
- j2ee-server
- sfo-server
- performance-tracer
- ctm-domain-manager
- component-transaction-monitor
- smart-agent

#### タグの省略

省略できません。

値の省略

省略できません。

(6) <server-no>

内容

物理ティア内の特定の J2EE サーバで、共通のコンフィグレーションを指定する場合に、J2EE サーバを識別するための番号を指定します。

指定できる範囲は、1～<j2ee-server-count>の指定値です。物理ティア内で番号が重複しないように指定してください。

このタグは、<tier-type>タグで ctm-tier を指定して、<j2ee-server-count>タグを指定した場合にだけ指定できます。

物理ティア内のすべての J2EE サーバで、共通のコンフィグレーションを指定する場合は、このタグを指定する必要はありません。

指定可能値

1～<j2ee-server-count>の指定値

タグの省略

省略できます。

値の省略

省略できます。

(7) <param>

内容

必須定義。

論理サーバの環境を設定するパラメタを、パラメタ名と値で定義します。

1 種類のパラメタごとに<param>タグで囲んで定義します。

パラメタによっては、複数の値を設定する場合、<param-value>タグを複数指定します。

指定可能値

—

タグの省略

省略できません。

値の省略

省略できません。

(8) <param-name>

内容

パラメタ名を指定します。

指定可能値

指定可能値については、「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」の説明を参照してください。

タグの省略

省略できません。

**値の省略**

省略できません。

**(9) <param-value>****内容**

パラメタの設定値を指定します。

**指定可能値**

指定可能値については、「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」の説明を参照してください。

**タグの省略**

省略できません。

**値の省略**

省略できません。

**4.6.8 サービスユニットの定義****(1) <unit>****内容**

必須定義。

サービスユニットを定義します。

複数のサービスユニットを定義する場合は、<unit>タグを複数指定します。

**指定可能値**

—

**タグの省略**

省略できません。

**値の省略**

省略できません。

**(2) <name>****内容**

必須定義。

サービスユニットを識別するための名称を指定します。Web システム内でユニークな名称を指定する必要があります。Smart Composer 機能のコマンドの-unit オプションには、ここで指定した名称を指定します。

**指定可能値**

英数字またはアンダースコア「\_」およびハイフン「-」で指定した 32 文字以内の文字列を指定します。

**タグの省略**

省略できません。

**値の省略**

省略できません。

### (3) <display-name>

#### 内容

サービスユニットの表示名を指定します。指定する文字に制限はありません。

#### 指定可能値

128 文字以内の任意の文字列を指定します。

#### タグの省略

省略できます。

#### 値の省略

省略できます。

### (4) <description>

#### 内容

サービスユニットのコメントを指定します。指定する文字に制限はありません。

#### 指定可能値

1024 文字以内の任意の文字列を指定します。

#### タグの省略

省略できます。

#### 値の省略

省略できます。

### (5) <allocated-host>

#### 内容

必須定義。

サービスユニットを構成するホストのリファレンスを定義します。<allocated-host>タグは一つだけ指定します。free-tier 構成の Web システムでは、<allocated-host>タグを複数指定できます。

#### 指定可能値

—

#### タグの省略

省略できません。

#### 値の省略

省略できません。

### (6) <host-ref>

#### 内容

必須定義。

ホスト定義の<name>タグに指定したホスト名、構築済みの Web システムで定義されているホスト名、IP アドレス、または@myhost を指定します。

@myhost を指定していると、システム構築時に、ホストの定義の<host-name>タグの値が自動で設定されます。

なお、複数ホストがある場合、一つのサービスユニット内で同じホストを共有することはできません。

**指定可能値**

指定できる文字列を次に示します。

- ホスト名
- IPv4 アドレス
- @myhost

**タグの省略**

省略できません。

**値の省略**

省略できません。

**(7) <hosts-for>****内容**

必須定義。

<host-ref>タグで指定したホストが属する物理ティアの種類を指定します。物理ティアの種類を次に示します。

- combined-tier
- http-tier
- j2ee-tier
- sfo-tier
- ctm-tier
- free-tier

**指定可能値**

指定できる文字列を次に示します。

- combined-tier
- http-tier
- j2ee-tier
- sfo-tier
- ctm-tier
- free-tier

**タグの省略**

省略できません。

**値の省略**

省略できません。

**4.6.9 論理サーバの定義****(1) <define-server>****内容**

<hosts-for>タグで指定した物理ティアに属する論理サーバごとに、コンフィグレーションを定義します。

例えば、<hosts-for>タグが http-tier の場合は、Web サーバ用と、パフォーマンスストレージ用にそれぞれ一つずつ論理サーバを定義できます。複数の論理サーバを定義する場合は、<define-server>タグを複数指定します。

**指定可能値**

—

**タグの省略**

省略できます。

**値の省略**

省略できます。

(2) <logical-server-name>

**内容**

論理サーバまたはクラスタを識別するための名称を指定します。

**指定可能値**

英数字またはアンダースコア「\_」およびハイフン「-」で指定した 128 文字以内の文字列を指定します。

**タグの省略**

省略できます。

**値の省略**

省略できます。

(3) <display-name>

**内容**

論理サーバの表示名を指定します。指定する文字に制限はありません。

**指定可能値**

128 文字以内の任意の文字列を指定します。

**タグの省略**

省略できます。

**値の省略**

省略できます。

(4) <description>

**内容**

論理サーバのコメントを指定します。指定する文字に制限はありません。

**指定可能値**

1024 文字以内の任意の文字列を指定します。

**タグの省略**

省略できます。

**値の省略**

省略できます。

## (5) <logical-server-type>

### 内容

必須定義。

コンフィグレーションを定義する論理サーバの種類を指定します。

論理サーバの種類を次に示します。

- web-server : Web サーバ
- j2ee-server : J2EE サーバ
- sfo-server : セッションフェイルオーバーサーバ (SFO サーバ)
- performance-tracer : パフォーマンストレーサ
- ctm-domain-manager : CTM ドメインマネージャ
- component-transaction-monitor : CTM
- smart-agent : スマートエージェント
- naming-service : ネーミングサービス
- user-server : ユーザサーバ

ホストが属する物理ティアの種類によって、コンフィグレーションが定義できる論理サーバが異なります。物理ティアの種類を次に示します。

### combined-tier の場合

Web サーバ, J2EE サーバ, パフォーマンストレーサとユーザサーバ

### http-tier の場合

Web サーバ, パフォーマンストレーサとユーザサーバ

### j2ee-tier の場合

J2EE サーバ, パフォーマンストレーサとユーザサーバ

### sfo-tier の場合

セッションフェイルオーバーサーバ (SFO サーバ), パフォーマンストレーサとユーザサーバ

### ctm-tier の場合

Web システムごとに定義できる論理サーバが異なります。

- 統合ネーミングスケジューラサーバ用の Web システムの場合  
CTM ドメインマネージャ, CTM, スマートエージェント, パフォーマンストレーサとユーザサーバ
- CTM 用の Web システムの場合  
CTM ドメインマネージャ, CTM, スマートエージェント, J2EE サーバ, パフォーマンストレーサとユーザサーバ

### free-tier の場合

Web サーバ, J2EE サーバ, セッションフェイルオーバーサーバ (SFO サーバ), CTM ドメインマネージャ, CTM, スマートエージェント, ネーミングサービス, パフォーマンストレーサ, Web サーバクラスタ, J2EE サーバクラスタとユーザサーバ

### 指定可能値

指定できる文字列を次に示します。

- web-server
- j2ee-server

- sfo-server
- performance-tracer
- ctm-domain-manager
- component-transaction-monitor
- smart-agent
- naming-service
- user-server

### タグの省略

省略できません。

### 値の省略

省略できません。

## (6) <cluster-ref>

### 内容

論理サーバをクラスタのメンバにする場合に、クラスタ名を指定します。

クラスタのメンバにする論理サーバが J2EE サーバの場合は J2EE サーバクラスタ名を、Web サーバの場合は Web サーバクラスタ名を指定します。

J2EE サーバおよび Web サーバ以外の論理サーバは、クラスタのメンバとして設定できません。

free-tier 構成の場合だけに定義されます。

### 指定可能値

英数字またはアンダースコア「\_」およびハイフン「-」で指定した 128 文字以内の文字列を指定します。

### タグの省略

省略できます。

### 値の省略

省略できます。

## (7) <server-no>

### 内容

サービスユニット内の特定の J2EE サーバのコンフィグレーションを指定する場合に、J2EE サーバを識別するための番号を指定します。

1 ホスト内で番号が重複しないように指定してください。このタグは、物理ティアの定義で<j2ee-server-count>タグを指定した場合に、J2EE サーバのコンフィグレーションを指定するときは、必ず指定してください。

### 指定可能値

1 ~ <j2ee-server-count>の指定値

### タグの省略

省略できます。

### 値の省略

省略できます。



## (8) <configuration>

### 内容

論理サーバごとに適用するコンフィグレーションを定義します。

なお、物理ティアの定義で定義した環境設定値で運用する場合は、<configuration>タグの定義は不要です。

<logical-server-type>で J2EE サーバクラスタまたは Web サーバクラスタを指定していた場合は指定できません。

### 指定可能値

—

### タグの省略

省略できます。

### 値の省略

省略できます。

## 4.6.10 論理サーバのコンフィグレーション定義

### (1) <param>

#### 内容

必須定義。

論理サーバの環境を設定するパラメタを、パラメタ名と値で定義します。1 種類のパラメタごとに <param>タグで囲んで定義します。

パラメタによっては、複数の値を設定する場合、<param-value>タグを複数指定します。

#### 指定可能値

—

#### タグの省略

省略できません。

#### 値の省略

省略できません。

### (2) <param-name>

#### 内容

パラメタ名を指定します。

#### 指定可能値

指定可能値については、「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」の説明を参照してください。

#### タグの省略

省略できません。

#### 値の省略

省略できません。

### (3) <param-value>

#### 内容

パラメタの設定値を指定します。

#### 指定可能値

指定可能値については、「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」の説明を参照してください。

#### タグの省略

省略できません。

#### 値の省略

省略できません。

## 4.6.11 ホストの定義

### (1) <host>

#### 内容

ホストを定義します。

複数のホストを定義する場合は、host タグを複数指定します。ホストは複数の Web システムで共有できます。

#### 指定可能値

—

#### タグの省略

省略できます。

#### 値の省略

省略できます。

### (2) <host-name>

#### 内容

ホストを識別するための名称または IP アドレスを指定します。

IP アドレス変換できないホスト名を指定した場合、システム構築時にエラーとなります。

<host-name>タグには@myhost も指定できます。@myhost を指定すると、システム構築時に、構築先の環境の運用管理サーバマシンのホスト名に自動で置換されます。

#### 指定可能値

指定できる文字列を次に示します。

- ホスト名
- IPv4 アドレス
- @myhost

#### タグの省略

省略できません。

#### 値の省略

省略できません。

### (3) <display-name>

#### 内容

ホストの表示名を 128 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。

#### 指定可能値

128 文字以内の任意の文字列を指定します。

#### タグの省略

省略できます。

#### 値の省略

省略できます。

### (4) <description>

#### 内容

ホストのコメントを 1,024 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。

#### 指定可能値

1024 文字以内の任意の文字列を指定します。

#### タグの省略

省略できます。

#### 値の省略

省略できます。

### (5) <agent-host>

#### 内容

運用管理エージェントのホスト名、または IP アドレスを指定します。

<agent-host>タグには@myhost も指定できます。@myhost を指定していると、システム構築時に、ホストの定義の<host-name>タグの値が自動で設定されます。

#### 指定可能値

指定できる文字列を次に示します。

- ホスト名
- IPv4 アドレス
- @myhost

#### タグの省略

省略できます。

#### 値の省略

省略できます。

### (6) <agent-port>

#### 内容

運用管理エージェントのポート番号を指定します。

#### 指定可能値

1～65535 の整数を指定します。

**タグの省略**

省略できます。

**値の省略**

省略できます。

## 4.7 構成変更定義ファイル

---

### (1) 形式

XML 形式です。

### (2) ファイルの格納先

任意の作業場所に格納してください。

### (3) 機能

Smart Composer 機能のコマンドで構築した Web システムの構成を変更する場合に使用する定義ファイルです。構成変更定義ファイルには、論理サーバのパラメタ変更用とサービスユニット・ホスト追加用の二つの定義ファイルがあります。

次のテンプレートファイルをコピーして利用してください。

論理サーバのパラメタ変更用

- Windows の場合  
    <Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%templates  
    %cmxmodcombinedmodel.xml
- UNIX の場合  
    /opt/Cosminexus/manager/config/templates/cmxmodcombinedmodel.xml

注

論理サーバのパラメタ変更用の構成変更定義ファイルは、前バージョンとの互換用のファイルです。論理サーバのパラメタを変更する場合は、簡易構築定義ファイルを使用してください。

サービスユニット・ホスト追加用

- Windows の場合  
    <Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%templates  
    %cmxaddcombinedmodel.xml
- UNIX の場合  
    /opt/Cosminexus/manager/config/templates/cmxaddcombinedmodel.xml

参考

テンプレートファイルの文字エンコーディングは、UTF-8 です。

---

### (4) 設定できる要素

構成変更定義ファイルには、簡易構築定義ファイルに指定するタグの一部が指定できます。

次に、簡易構築定義ファイルとの違いを中心に説明します。

#### (a) 論理サーバのパラメタ変更用の構成変更定義ファイル

論理サーバのパラメタ変更用の構成変更定義ファイルの構造を次に示します。<model-modification>タグおよび<web-system>タグは、このままの形式で指定します。

## 論理サーバのパラメタ変更用の構成変更定義ファイルの構造

```

<model-modification xmlns="http://www.cosminexus.com/mngsvr/schema/ModelModification-2.5">
  <!-- 構成変更対象のWebシステムの定義 -->
  <web-system>
    <!-- 構成変更対象のWebシステムの属性定義 -->
    <name>Webシステム名</name>

    <!-- パラメタ変更する物理ティアの論理サーバの定義 -->
    <tier>
      <tier-type>物理ティアの種類</tier-type>
      <configuration>
        <logical-server-type>論理サーバの種類</logical-server-type>
        <param>
          <param-name>パラメタ名</param-name>
          <param-value>パラメタ値1</param-value>
          :
          <param-value>パラメタ値 n</param-value>
        </param>
        <param>
          :
        </configuration>
      </configuration>
    </tier>
    <tier>
      :
    </unit>
    <!-- パラメタ変更するサービスユニットの論理サーバの定義 -->
    <unit>
      <name>サービスユニット名</name>
      <allocated-host>
        <host-ref>サービスユニットの構成ホストのホスト名またはIPアドレス</host-ref>
        <hosts-for>構成ホストが属する物理ティアの種類</hosts-for>
        <define-server>
          <logical-server-type>論理サーバの種類</logical-server-type>
          <configuration>
            <param>
              <param-name>パラメタ名</param-name>
              <param-value>パラメタ値1</param-value>
              :
              <param-value>パラメタ値 n</param-value>
            </param>
            <param>
              :
            </configuration>
          </configuration>
        </allocated-host>
      </allocated-host>
    </unit>
  </web-system>
</model-modification>

```

各定義での簡易構築定義ファイルとの違いを次に示します。

- Web システムの属性定義
  - <name>タグの Web システム名には、構成変更対象の Web システムの名称を指定します。
- 物理ティアの定義
 

物理ティア内の論理サーバの種類ごとにコンフィグレーションを変更する場合に指定します。

  - <configuration>タグは必ず定義します。ただし、cmx\_trans\_param コマンドを使用し、抽象パラメタを展開して物理ティアのコンフィグレーションを生成する場合は省略できます。

- <param-value>タグの指定が省略できます。省略した場合、設定済みのパラメタ値をすべて削除し、デフォルトの状態に戻します。
- サービスユニットの定義  
サービスユニット内の特定の論理サーバごとにコンフィグレーションを変更する場合に指定します。
  - CTM用のWebシステムで、物理ティアの定義に<j2ee-server-count>タグを指定している場合、特定のJ2EEサーバのコンフィグレーションを変更するときは、<server-no>タグを必ず指定してください。
  - <param-value>タグの指定が省略できます。省略した場合、設定済みのパラメタ値をすべて削除し、デフォルトの状態に戻します。

定義ごとに指定できるタグについては、「4.10 簡易構築定義ファイルおよび構成変更定義ファイルに指定できるタグ」を参照してください。

#### (b) サービスユニット・ホスト追加用の構成変更定義ファイル

サービスユニット・ホスト追加用の構成変更定義ファイルの構造を次に示します。<unit-addition>タグおよび<web-system>タグは、このままの形式で指定します。

##### サービスユニット・ホスト追加用の構成変更定義ファイルの構造

```
<unit-addition xmlns="http://www.cosminexus.com/mngsvr/schema/UnitAddition-2.5">
  <!-- 構成変更対象のWebシステムの定義 -->
  <web-system>
    <!-- 構成変更対象のWebシステムの属性定義 -->
    <name>Webシステム名</name>
    <addition-mode>追加モード</addition-mode>

    <!-- 追加するサービスユニットの定義 -->
    <unit>
      <name>サービスユニット名</name>
      <display-name>サービスユニットの表示名</display-name>
      <description>サービスユニットのコメント</description>
      <allocated-host>
        <host-ref>サービスユニットの構成ホストのホスト名またはIPアドレス</host-ref>
        <hosts-for>構成ホストが属する物理ティアの種類</hosts-for>
        <define-server>
          <logical-server-name>論理サーバ名</logical-server-name>
          <display-name>論理サーバの表示名</display-name>
          <description>論理サーバのコメント</description>
          <logical-server-type>論理サーバの種類</logical-server-type>
          <configuration>
            <param>
              <param-name>パラメタ名</param-name>
              <param-value>パラメタ値1</param-value>
              :
              <param-value>パラメタ値 n</param-value>
            </param>
            <param>
              :
            </param>
          </configuration>
        </define-server>
      </allocated-host>
    </unit>
  </web-system>
  <web-system>
    :
  </web-system>

  <!-- 追加するホストの定義 -->
  <host>
    <host-name>ホスト名またはIPアドレス</host-name>
```

```
<display-name>ホストの表示名</display-name>  
<description>ホストのコメント</description>  
<agent-host>運用管理エージェントのホスト名またはIPアドレス</agent-host>  
<agent-port>運用管理エージェントのポート番号</agent-port>  
</host>  
<host>  
  ⋮  
</unit-addition >
```

各定義での簡易構築定義ファイルとの違いを次に示します。

- Web システムの属性定義
  - <name>タグの Web システム名には、構成変更対象の Web システムの名称を指定します。
  - JP1/SC/DPM を使用してスケールアウトを実施する場合は、<addition-mode>タグに「DEPLOYED」を指定してください。<addition-mode>タグは、サービスユニット・ホスト追加用の構成変更定義ファイルでだけ指定できます。
- サービスユニットの定義
  - 簡易構築定義ファイルと同じです。
- ホストの定義
  - 簡易構築定義ファイルと同じです。

定義ごとに指定できるタグについては、「4.10 簡易構築定義ファイルおよび構成変更定義ファイルに指定できるタグ」を参照してください。



## 4.8 論理サーバ参照定義ファイル

### (1) 形式

XML 形式です。

### (2) ファイルの格納先

任意の作業場所に格納してください。

### (3) 機能

Smart Composer 機能のコマンドで構築した Web システム中のサービスユニットに、ユーザ定義の論理サーバ（論理ユーザサーバ）を追加する場合に使用する定義ファイルです。論理ユーザサーバをサービスユニットに関連づけるための情報を定義します。

次のテンプレートファイルをコピーして利用してください。

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%templates%cmxaddserverref.xml`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/templates/cmxaddserverref.xml`

なお、論理サーバ参照定義ファイルは、旧バージョンとの互換用のファイルです。構築済みのシステムに論理ユーザサーバを追加する場合だけに使用します。07-50 以降は、論理ユーザサーバを設定する場合は、簡易構築定義ファイルで設定することをお勧めします。

### (4) 設定できる要素

論理サーバ参照定義ファイルには、追加する論理サーバ名、追加先の Web システムおよびサービスユニットを定義します。Web システム、サービスユニット、および論理サーバは、必要な数だけ定義します。

論理サーバ参照定義ファイルの構造を次に示します。<server-reference>タグおよび<web-system>タグは、このままの形式で指定します。

#### 論理サーバ参照定義ファイルの構造

```
<server-reference xmlns="http://www.cosminexus.com/mngsvr/schema/ServerReference-2.0">
  <!-- Webシステムの定義 -->
  <web-system>
    <!-- Webシステムの属性定義 -->
    <name>Webシステム名</name>

    <!-- サービスユニットの定義 -->
    <unit>
      <name>サービスユニット名1</name>
      <logical-server-ref>論理ユーザサーバ名1</logical-server-ref>
      :
      <logical-server-ref>論理ユーザサーバ名n</logical-server-ref>
    </unit>
    <unit>
      :
    </web-system>
  </web-system>
  :
</server-reference>
```

各タグの説明とデフォルト値を次に示します。

タグ名称	内容	デフォルト
web-system	Web システムを定義します。 複数の Web システムを定義する場合は、<web-system>タグを複数指定します。	なし
name	Web システムを識別するための名称を 32 文字以下で指定します。 ドメイン内でユニークな名称を指定する必要があります。Smart Composer 機能のコマンドの-s オプションには、ここで指定した名称を指定します。指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。	なし
unit	サービスユニットを定義します。 複数のサービスユニットを定義する場合は、<unit>タグを複数指定します。	なし
name	サービスユニットを識別するための名称を 32 文字以下で指定します。Web システム内でユニークな名称を指定する必要があります。Smart Composer 機能のコマンドの-unit オプションには、ここで指定した名称を指定します。指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。	なし
logical-server-ref	サービスユニットに追加する論理ユーザサーバの名称を 128 文字以下で指定します。 論理ユーザサーバ定義ファイルの<logical-server-name>タグで指定した名称を指定します。mngsvrutil add userserver コマンドで追加済みの論理ユーザサーバを指定してください。 複数の論理ユーザサーバを定義する場合は、<logical-server-ref>タグを複数指定します。	なし

## (5) 記述例

サービスユニット unit1 に論理ユーザサーバ usersv1 および usersv2 を、サービスユニット unit2 に論理ユーザサーバ usersv3 および usersv4 を追加する例を次に示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<server-reference xmlns="http://www.cosminexus.com/mngsvr/schema/ServerReference-2.0">
  <web-system>
    <name>MyWebSystem</name>
    <unit>
      <name>unit1</name>
      <logical-server-ref>usersv1</logical-server-ref>
      <logical-server-ref>usersv2</logical-server-ref>
    </unit>
    <unit>
      <name>unit2</name>
      <logical-server-ref>usersv3</logical-server-ref>
      <logical-server-ref>usersv4</logical-server-ref>
    </unit>
  </web-system>
</server-reference>
```

## 4.9 スケールアウト用ホスト定義ファイル

### (1) 形式

XML 形式です。

### (2) ファイルの格納先

任意の作業場所に格納してください。

### (3) 機能

Smart Composer 機能のコマンドで構築した、ホスト単位管理モデルの Web システムをスケールアウトする場合に使用する定義ファイルです。複製先のホストの、Web システムの情報を定義します。

次のテンプレートファイルをコピーして利用してください。

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%templates  
 %cmxscaleouthostdef.xml`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/templates/cmxcscaleouthostdef.xml`

#### 参考

テンプレートファイルの文字エンコーディングは、UTF-8 です。

### (4) 設定できる要素

スケールアウト用ホスト定義ファイルには、追加するホスト、および複製先の Web システムで使用する負荷分散機を定義します。

スケールアウト用ホスト定義ファイルの構造を次に示します。<host-scaleout>タグおよび<web-system>タグは、このままの形式で指定します。

#### スケールアウト用ホスト定義ファイルの構造

```
<host-scaleout xmlns="http://www.cosminexus.com/mngsvr/schema/HostScaleOut-2.5">
  <!-- 複製先のWebシステムの定義 -->
  <web-system>
    <!-- Webシステムの属性定義 -->
    <name>Webシステム名</name>
  </web-system>

  <!-- 複製先のホストの定義 -->
  <host>
    <host-name>ホスト名またはIPアドレス</host-name>
    <display-name>ホストの表示名</display-name>
    <description>ホストのコメント</description>
    <agent-host>運用管理エージェントのホスト名またはIPアドレス</agent-host>
  </host>
</host-scaleout>
```

各タグの説明とデフォルト値を次に示します。

タグ名称	内容	デフォルト
web-system	複製先の Web システムを定義します。	なし

タグ名称	内容	デフォルト
web-system	複製先の Web システムの定義を変更する場合に指定します。複数の Web システムを定義する場合は、<web-system>タグを複数指定します。	なし
name	設定を変更する複製先の Web システムの名称を指定します。	なし
host*	複製先のホストを定義します。 ホストは複数の Web システムで共有できます。	なし
host-name	運用用のホスト名または IP アドレスを指定します。ホスト名を指定する場合は、32 文字以下で指定します。指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。IP アドレスを指定する場合は、ドット記法 (xxx.xxx.xxx.xxx) で指定します。xxx には 0~255 の整数を指定します。	なし
display-name	ホストの表示名を 128 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	なし
description	ホストのコメントを 1,024 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	なし
agent-host	運用管理エージェントのホスト名、または IP アドレスを指定します。ホスト名を指定する場合は、32 文字以下で指定します。指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。IP アドレスを指定する場合は、ドット記法 (xxx.xxx.xxx.xxx) で指定します。xxx には 0~255 の整数を指定します。	<host-name>タグに指定した値

## 注※

ホストの定義を省略した場合は、複製先のホストのホスト名が<host-name>タグに仮定され、ホストが定義されません。

## (5) 記述例

複製元のホストと複製先のホストの設定項目例を次に示します。

表 4-3 複製元のホストと複製先のホストの設定項目例

設定項目	複製元のホスト	複製先のホスト
Web システム名	MyWebSystem	MyWebSystem
ホスト名	apsvA	apsvA
IP アドレス	192.168.1.20	192.168.1.21
管理 IP アドレス	192.168.100.20	192.168.100.21

ホスト apsvA を複製して作成したディスクイメージを使用してスケールアウトする例を次に示します。この例は、J2EE アプリケーションを実行するシステムをスケールアウトする場合の記述例です。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<host-scaleout xmlns="http://www.cosminexus.com/mngsvr/schema/HostScaleOut-2.1">
  <!-- 複製先のWebシステムの定義 -->
  <web-system>
    <!-- Webシステムの属性定義 -->
    <name>MyWebSystem</name>
  </web-system>
  <!-- 複製先のホストの定義 -->
  <host>
```

```
<host-name>apsvA</host-name>  
<agent-host>192.168.100.21</agent-host>  
</host>  
</host-scaleout>
```

## 4.10 簡易構築定義ファイルおよび構成変更定義ファイルに指定できるタグ

簡易構築定義ファイル、論理サーバのパラメタ変更用の構成定義変更ファイル、およびサービスユニット・ホスト追加用の構成変更定義ファイルで指定できるタグについて説明します。

J2EE アプリケーションを実行するシステムで使用するタグ、およびバッチアプリケーションを実行するシステムで使用するタグについて、システムごとに説明します。

なお、簡易構築定義ファイルの構造については「4.6 簡易構築定義ファイル」を、構成定義変更ファイルの構造については「4.7 構成変更定義ファイル」を参照してください。

### 4.10.1 J2EE アプリケーションを実行するシステムで指定できるタグ

ここでは、J2EE アプリケーションを実行するシステムで指定できるタグについて説明します。

#### (1) Web システムの属性定義

Web システムの属性として定義できる内容を次の表に示します。

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
web-system	Web システムを定義します。 複数の Web システムを定義する場合は、<web-system>タグを複数指定します。	△※1	△	△※2	なし
name	Web システムを識別するための名称を 32 文字以下で指定します。運用管理ドメイン内でユニークな名称を指定する必要があります。Smart Composer 機能のコマンドの-s オプションには、ここで指定した名称を指定します。指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。	◎	◎	◎	なし
addition-mode	追加モードを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>DEPLOYED※3 JP1/SC/DPM を使用してディスクイメージのスケールアウトをする場合に指定します。この指定によって、システム構築時の J2EE アプリケーションおよびリソースアダプタでのデプロイが不要になります。</li> <li>NORMAL 通常のスケールアウトの場合に指定します。</li> </ul>	—	—	△	NORMAL
display-name	Web システムの表示名を 128 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	△	△	—	なし
description	Web システムのコメントを 1,024 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	△	△	—	なし

(凡例)

P：論理サーバのパラメタ変更用の構成定義変更ファイルを示します。

U：サービスユニット・ホスト追加用の構成定義変更ファイルを示します。

◎：Web システムを定義する場合は、必ず指定します。

△：省略できます。

－：該当しません。

注※1

Smart Composer 機能で定義済みの Web システムを利用する場合は省略できます。

注※2

サービスユニットを追加しない場合は省略できます。

注※3

この設定を有効にする場合、Smart Composer 機能のコマンドを使用したインポートと一括開始をしておく必要があります。詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ システム構築・運用ガイド」の「4.1.24 システムを起動する (CUI 利用時)」を参照してください。

## (2) 負荷分散機の定義

負荷分散機の定義は、<load-balancer>以下のタグで定義します。定義できる内容を次の表に示します。

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
load-balancer	負荷分散機を定義します。 Smart Composer 機能で負荷分散機の設定、および実サーバポートの開始・閉塞をしない場合は、負荷分散機の定義 (<load-balancer>タグから</load-balancer>タグまで) は必要ありません。	△	－	－	なし
name	負荷分散機の名称を 32 文字以下で指定します。指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。	△	－	－	なし
load-balancer-type* <sup>1</sup>	負荷分散機の種類を次のどれかで指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• BIG-IPv9</li> <li>• BIG-IPv10.1</li> <li>• BIG-IPv10.2</li> <li>• BIG-IPv11</li> <li>• ACOS</li> </ul> Smart Composer 機能で負荷分散機の設定をする場合は、必ず指定してください。	◎	－	－	なし
display-name	負荷分散機の表示名を 128 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	△	－	－	なし
description	負荷分散機のコメントを 1,024 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	△	－	－	なし
cookie-switching	Cookie スイッチング機能を使用する場合に定義します。 この設定によって、一連の HTTP リクエストが一つの Web サーバまたは J2EE サーバで処理されます。	△* <sup>2</sup>	－	－	なし

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
cookie-switching-enabled	Cookie スイッチング機能を使用する場合は true を、使用しない場合は false を指定します。	△	—	—	false
cookie-name	cookie の名称を指定します。指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」の組み合わせです。ただし、次の名前は Web コンテナが使用するため、大文字・小文字の区別なく使用できません。 <ul style="list-style-type: none"> <li>JSESSIONID</li> </ul> BIG-IP の場合、1～64 文字の文字列で指定します。なお、先頭 1 文字は大文字または小文字の英字を指定する必要があります。 ACOS の場合、1～63 文字の文字列で指定します。	△	—	—	CMX_SERVER_ID
server-id-rule	08-53 以降は、このタグに値を指定しないでください。値を指定した場合、指定された値は無効になります。	△	—	—	なし
management-host	負荷分散機に設定した管理 IP アドレスまたはホスト名を指定します。管理 IP アドレスはドット記法 (xxx.xxx.xxx.xxx) で指定します。xxx には 0～255 の整数を指定します。ホスト名に指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。 複数の Web システムで負荷分散機を共有する場合は、共有する Web システムで同じ管理 IP アドレスまたはホスト名を指定してください。	◎	—	—	なし
redundant-management-host	負荷分散機を冗長化したシステムの場合に、2 台目の負荷分散機に設定した管理 IP アドレスまたはホスト名を指定します。管理 IP アドレスはドット記法 (xxx.xxx.xxx.xxx) で指定します。xxx には 0～255 の整数を指定します。ホスト名に指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。 複数の Web システムで負荷分散機を共有する場合は、共有する Web システムで同じ管理 IP アドレスまたはホスト名を指定してください。	△	—	—	なし
virtual-server	仮想サーバを定義します。	◎	—	—	なし
virtual-server-name	仮想サーバ名を 1～31 文字で指定します。指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」、ピリオド「.」の組み合わせです。 複数の Web システムで負荷分散機を共有する場合は、共有する Web システムで仮想サーバ名が重複しないように指定してください。	◎	—	—	なし
display-name	仮想サーバの表示名を指定します。	△	—	—	なし
description	仮想サーバのコメントを指定します。	△	—	—	なし
ip-address	仮想サーバの IP アドレスを指定します。	◎	—	—	なし



タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
ip-address	複数の Web システムで負荷分散機を共有する場合は、共有する Web システムで仮想サーバの IP アドレスが重複しないように指定してください。	◎	—	—	なし
http-port	仮想サーバの http ポート番号を 1~65535 の間で指定します。 BIG-IP v9, ACOS の場合で、複数の Web システムで負荷分散機を共有するときは、共有する Web システムで仮想サーバの http ポート番号が重複しないように指定してください。	◎	—	—	なし

(凡例)

P：論理サーバのパラメタ変更用の構成定義変更ファイルを示します。

U：サービスユニット・ホスト追加用の構成定義変更ファイルを示します。

◎：負荷分散機を定義する場合は、必ず指定します。

△：省略できます。

—：該当しません。

注※1

アプリケーションサーバのバージョンによって、サポートしている負荷分散機の種類が異なります。アプリケーションサーバのバージョンごとに、サポートしている負荷分散機を次の表に示します。

アプリケーションサーバのバージョン	サポートしている負荷分散機
09-50	BIG-IPv9, BIG-IPv10.1, BIG-IPv10.2, BIG-IPv11, ACOS
09-00, 08-70 および 08-53	BIG-IPv9, BIG-IPv10.1, BIG-IPv10.2, ACOS
08-50	BIG-IPv9, ACOS
08-00, 07-60, 07-50, 07-20, 07-10, および 07-00	Loadflowbal, BIG-IP, BIG-IPv9
06-70	Loadflowbal, BIG-IP
06-50	Loadflowbal

注※2

負荷分散機の Cookie スイッチング機能を使用しない場合は省略できます。

### (3) 物理ティアの定義

構築するシステムの構成に合わせて、物理ティアを定義します。物理ティアは<tier>以下のタグで定義します。定義できる内容を次の表に示します。

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
tier	物理ティアを定義します。 物理ティアには、combined-tier, http-tier, j2ee-tier, sfo-tier, ctm-tier, および free-tier の 6 種類	◎	△※2	—	なし

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
tier	<p>があります。それぞれの物理ティアは、単独、または複数を組み合わせて、Web システムを構成します。指定できる物理ティアの構成を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• combined-tier 構成</li> <li>• http-tier と j2ee-tier の構成</li> <li>• j2ee-tier 構成</li> <li>• combined-tier に sfo-tier を組み合わせた構成</li> <li>• http-tier と j2ee-tier に sfo-tier を組み合わせた構成</li> <li>• ctm-tier 構成</li> <li>• free-tier 構成</li> </ul> <p>combined-tier 構成の場合 サービスユニット内の Web サーバと J2EE サーバを 1 ホストで構成し、一つの&lt;tier&gt;タグで定義します。</p> <p>http-tier と j2ee-tier の構成の場合 サービスユニット内の Web サーバと J2EE サーバを別々のホストで構成し、二つの&lt;tier&gt;タグで定義します。</p> <p>j2ee-tier の構成の場合 サービスユニット内の J2EE サーバを 1 ホストで構成し、一つの&lt;tier&gt;タグで定義します。j2ee-tier 構成を使用する場合は、インプロセス HTTP サーバ機能を有効に設定しておく必要があります。</p> <p>combined-tier または http-tier と j2ee-tier に組み合わせて構成する sfo-tier の場合 サービスユニット内のセッションフェイルオーバーサーバ (SFO サーバ) を 1 ホストで構成し、一つの&lt;tier&gt;タグで定義します。</p> <p>ctm-tier 構成の場合 ctm-tier は、combined-tier、http-tier、j2ee-tier、sfo-tier を定義する Web システムとは別の Web システムで定義します。ctm-tier は、統合ネーミングスケジューラサーバ用および CTM 用の Web システムに分けて、それぞれ定義します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 統合ネーミングスケジューラサーバ用の Web システム サービスユニット内の CTM 関連の論理サーバ<sup>*1</sup> を 1 ホストで構成し、一つの&lt;tier&gt;タグで定義します。</li> <li>• CTM 用の Web システム</li> </ul>	◎	△※2	—	なし

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
tier	<p>サービスユニット内の CTM 関連の論理サーバ<sup>※1</sup>と J2EE サーバを 1 ホストで構成し、一つの&lt;tier&gt;タグで定義します。</p> <p>free-tier 構成の場合</p> <p>ほかのどの物理ティアの定義にも当てはまらない構成が、一つの&lt;tier&gt;タグで定義されます。</p>	◎	△ <sup>※2</sup>	—	なし
tier-type	<p>物理ティアの種類を次のどれかで指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• combined-tier</li> <li>• http-tier</li> <li>• j2ee-tier</li> <li>• sfo-tier</li> <li>• ctm-tier</li> <li>• free-tier</li> </ul>	◎	◎	—	なし
j2ee-server-count	<p>&lt;tier-type&gt;タグで ctm-tier を指定した場合に、1 ホストに配置する J2EE サーバの数を 0~32 の整数で指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 統合ネーミングスケジューラサーバ用の Web システムの場合 0 を指定します。</li> <li>• CTM 用の Web システムの場合 Web システムごとに、1 ホスト内に配置する J2EE サーバの数を指定します。</li> </ul> <p>なお、Web システムの構成変更時、J2EE サーバの数は変更できません。</p>	△	—	—	1
configuration	<p>物理ティアに属するすべての論理サーバに適用するコンフィグレーションを、論理サーバの種類ごとに定義します。例えば、Web サーバと J2EE サーバの二つのコンフィグレーションを定義する場合は、&lt;configuration&gt;タグを二つ定義し、一つを Web サーバ用、もう一つを J2EE サーバ用として定義します。</p>	△ <sup>※3</sup>	◎ <sup>※4</sup>	—	なし
logical-server-type	<p>コンフィグレーションを定義する論理サーバの種類を指定します。指定できる論理サーバの種類を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• web-server : Web サーバ</li> <li>• j2ee-server : J2EE サーバ</li> <li>• sfo-server : セッションフェイルオーバーサーバ (SFO サーバ)</li> <li>• performance-tracer : パフォーマンストレーサ</li> <li>• ctm-domain-manager : CTM ドメインマネージャ</li> <li>• component-transaction-monitor : CTM</li> </ul>	◎	◎	—	なし

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
logical-server-type	<ul style="list-style-type: none"> <li>smart-agent : スマートエージェント</li> </ul> 物理ティアの種類によって、コンフィグレーションが定義できる論理サーバが異なります。 combined-tier の場合 Web サーバ, J2EE サーバとパフォーマンストレーサ http-tier の場合 Web サーバとパフォーマンストレーサ j2ee-tier の場合 J2EE サーバとパフォーマンストレーサ sfo-tier の場合 セッションフェイルオーバーサーバ (SFO サーバ) とパフォーマンストレーサ ctm-tier の場合 Web システムごとに定義できる論理サーバが異なります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>統合ネーミングスケジューラサーバ用の Web システムの場合 CTM ドメインマネージャ, CTM, スマートエージェントとパフォーマンストレーサ</li> <li>CTM 用の Web システムの場合 CTM ドメインマネージャ, CTM, スマートエージェント, J2EE サーバとパフォーマンストレーサ</li> </ul>	◎	◎	—	なし
server-no	物理ティア内の特定の J2EE サーバで、共通のコンフィグレーションを指定する場合に、J2EE サーバを識別するための番号を指定します。指定できる範囲は、1~<j2ee-server-count>の指定値です。物理ティア内で番号が重複しないように指定してください。このタグは、<tier-type>タグで ctm-tier を指定して、<j2ee-server-count>タグを指定した場合にだけ指定できます。 物理ティア内のすべての J2EE サーバで、共通のコンフィグレーションを指定する場合は、このタグを指定する必要はありません。	△	△	—	なし
param <sup>*5</sup>	論理サーバの環境を設定するパラメタを、パラメタ名と値で定義します。1 種類のパラメタごとに <param>タグで囲んで定義します。	◎	◎	—	なし
param-name <sup>*5</sup>	論理サーバの環境を設定するパラメタの名称を指定します。	◎	◎	—	なし
param-value <sup>*5</sup>	<param-name>タグで指定したパラメタへの設定値を指定します。パラメタによっては、複数の値を設定する場合、<param-value>タグを複数指定します。	◎	△ <sup>*6</sup>	—	なし

(凡例)

- P：論理サーバのパラメタ変更用の構成定義変更ファイルを示します。
- U：サービスユニット・ホスト追加用の構成定義変更ファイルを示します。
- ◎：Web システムを定義する場合は、必ず指定します。
- △：省略できます。
- －：該当しません。

注

物理ティアの定義では、ユーザサーバ、および free-tier 構成に含まれる論理サーバのコンフィグレーションが設定できません。これらの論理サーバのコンフィグレーションはユニットの定義で設定してください。

注※1

CTM 関連の論理サーバには、CTM ドメインマネージャ、CTM およびスマートエージェントがあります。

注※2

物理ティアの定義を変更しない場合は省略できます。

注※3

Management Server が論理サーバ作成時に仮定する、環境設定値で運用する場合は省略できます。

注※4

cmx\_trans\_param コマンドを使用して、抽象パラメタを展開して物理ティアのコンフィグレーションを生成する場合は省略できます。

注※5

<param>タグに指定できるパラメタは論理サーバの種類によって異なります。また、定義する論理サーバはシステムの構成パターンによって異なります。「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」を参照して、定義する論理サーバを確認してください。それぞれの論理サーバに設定できるパラメタについては、使用する論理サーバの種類に応じて 4.12 以降の節を参照してください。

注※6

<param-name>タグで指定したパラメタを削除する場合は省略できます。

#### (4) サービスユニットの定義

サービスユニットは<unit>以下のタグに定義します。定義できる内容を次の表に示します。

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
unit	サービスユニットを定義します。 複数のサービスユニットを定義する場合は、<unit> タグを複数指定します。	◎	△※1	◎	なし
name	サービスユニットを識別するための名称を 32 文字 以下で指定します。Web システム内でユニークな名 称を指定する必要があります。Smart Composer 機 能のコマンドの-unit オプションには、ここで指定し た名称を指定します。指定できる文字は、英数字、アン ダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。	◎	△※2	◎	なし
display-name	サービスユニットの表示名を 128 文字以下で指定し ます。指定する文字に制限はありません。	△	△	△	なし
description	サービスユニットのコメントを 1,024 文字以下で指 定します。指定する文字に制限はありません。	△	△	△	なし

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
allocated-host	サービスユニットを構成するホストのリファレンスを定義します。<allocated-host>タグは一つだけ指定します。free-tier 構成の Web システムでは、<allocated-host>タグを複数指定できます。	◎	◎	◎	なし
host-ref	ホスト定義の<name>タグに指定したホスト名、構築済みの Web システムで定義されているホスト名、または@myhost を指定します。  @myhost を指定していると、システム構築時に、ホストの定義の<host-name>タグの値が自動で設定されます。  なお、複数ホストがある場合、一つのサービスユニット内で同じホストを共有することはできません。	◎	◎	◎	なし
hosts-for	<host-ref>タグで指定したホストが属する物理ティアの種類を、次のどれかで指定します。  <ul style="list-style-type: none"> <li>• combined-tier</li> <li>• http-tier</li> <li>• j2ee-tier</li> <li>• sfo-tier</li> <li>• ctm-tier</li> <li>• free-tier</li> </ul>	◎	◎	◎	なし
define-server	<hosts-for>タグで指定した物理ティアに属する論理サーバごとに、コンフィグレーションを定義します。例えば、<hosts-for>タグが http-tier の場合は、Web サーバ用と、パフォーマンスストレサ用にそれぞれ一つずつ論理サーバを定義できます。複数の論理サーバを定義する場合は、<define-server>タグを複数指定します。	△※3	◎	△※3	なし
logical-server-name	論理サーバまたはクラスタを識別するための名称を 128 文字以下で指定します。Smart Composer 機能のコマンドの-s オプションには、ここで指定した名称を指定します。指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。	△	—	△	cmx_<Web システム名>_<サービスユニット名>_<種別>_<通番>
display-name	論理サーバの表示名を 128 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	△	△	△	なし
description	論理サーバのコメントを 1,024 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	△	△	△	なし
logical-server-type	コンフィグレーションを定義する論理サーバの種類を指定します。指定できる論理サーバの種類を次に示します。  <ul style="list-style-type: none"> <li>• web-server : Web サーバ</li> </ul>	◎	◎	◎	なし

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
logical-server-type	<ul style="list-style-type: none"> <li>• j2ee-server : J2EE サーバ</li> <li>• sfo-server : セッションフェイルオーバーサーバ (SFO サーバ)</li> <li>• performance-tracer : パフォーマンストレーサ</li> <li>• ctm-domain-manager : CTM ドメインマネージャ</li> <li>• component-transaction-monitor : CTM</li> <li>• smart-agent : スマートエージェント</li> <li>• naming-service : ネーミングサービス</li> <li>• user-server : ユーザサーバ<sup>*6</sup></li> </ul> <p>ホストが属する物理ティアの種類によって、コンフィグレーションが定義できる論理サーバが異なります。</p> <p>combined-tier の場合 Web サーバ, J2EE サーバ, パフォーマンストレーサとユーザサーバ</p> <p>http-tier の場合 Web サーバ, パフォーマンストレーサとユーザサーバ</p> <p>j2ee-tier の場合 J2EE サーバ, パフォーマンストレーサとユーザサーバ</p> <p>sfo-tier の場合 セッションフェイルオーバーサーバ (SFO サーバ), パフォーマンストレーサとユーザサーバ</p> <p>ctm-tier の場合 Web システムごとに定義できる論理サーバが異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 統合ネーミングスケジューラサーバ用の Web システムの場合 CTM ドメインマネージャ, CTM, スマートエージェント, パフォーマンストレーサとユーザサーバ</li> <li>• CTM用の Web システムの場合 CTM ドメインマネージャ, CTM, スマートエージェント, J2EE サーバ, パフォーマンストレーサとユーザサーバ</li> </ul> <p>free-tier の場合 Web サーバ, J2EE サーバ, セッションフェイルオーバーサーバ (SFO サーバ), CTM ドメインマネージャ, CTM, スマートエージェント, ネーミングサービス, パフォーマンストレーサ, Web サーバクラスタ, J2EE サーバクラスタとユーザサーバ</p>	◎	◎	◎	なし
cluster-ref	論理サーバをクラスタのメンバにする場合に、クラスタ名を指定します。	△	×	×	なし

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
cluster-ref	クラスタのメンバにする論理サーバが J2EE サーバの場合は J2EE サーバクラスタ名を、Web サーバの場合は Web サーバクラスタ名を指定します。 J2EE サーバおよび Web サーバ以外の論理サーバは、クラスタのメンバとして設定できません。 free-tier 構成の場合だけに定義されます。	△	×	×	なし
server-no	サービスユニット内の特定の J2EE サーバのコンフィグレーションを指定する場合に、J2EE サーバを識別するための番号を指定します。指定できる範囲は、1~<j2ee-server-count>の指定値です。1 ホスト内で番号が重複しないように指定してください。 このタグは、物理ティアの定義で<j2ee-server-count>タグを指定した場合に、J2EE サーバのコンフィグレーションを指定するときは、必ず指定してください。	△	△	△	なし
configuration	論理サーバごとに適用するコンフィグレーションを定義します。 なお、物理ティアの定義で定義した環境設定値で運用する場合は、<configuration>タグの定義は不要です。 <logical-server-type>で J2EE サーバクラスタまたは Web サーバクラスタを指定していた場合は指定できません。	△	△	△	なし
param <sup>*4</sup>	論理サーバの環境を設定するパラメータを、パラメータ名と値で定義します。1 種類のパラメータごとに<param>タグで囲んで定義します。	◎	◎	◎	なし
param-name <sup>*4</sup>	論理サーバの環境を設定するパラメータの名称を指定します。指定できるパラメータ名については、「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」を参照してください。	◎	◎	◎	なし
param-value <sup>*4</sup>	<param-name>タグで指定したパラメータへの設定値を指定します。パラメータによっては、複数の値を設定する場合、<param-value>タグを複数指定します。それぞれのパラメータの設定値については、「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」を参照してください。	◎	△ <sup>*5</sup>	◎	なし

## (凡例)

- P：論理サーバのパラメータ変更用の構成定義変更ファイルを示します。
- U：サービスユニット・ホスト追加用の構成定義変更ファイルを示します。
- ◎：Web システムを定義する場合は、必ず指定します。
- △：省略できます。
- －：該当しません。

## 注

構成変更定義ファイルには、free-tier 構成に含まれる論理サーバのコンフィグレーションが設定できません。



## 注※1

サービスユニットの定義を変更しない場合は省略できます。

## 注※2

クライアント設定プロパティファイルまたはクライアント共通設定プロパティファイルに cmx.websystem.name を指定している場合は省略できます。

## 注※3

論理サーバごとにコンフィグレーションを定義しない場合は省略できます。

## 注※4

<param>タグに指定できるパラメータは論理サーバの種類によって異なります。また、定義する論理サーバはシステムの構成パターンによって異なります。「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」を参照して、定義する論理サーバを確認してください。それぞれの論理サーバに設定できるパラメータについては、使用する論理サーバの種類に応じて 4.12 以降の節を参照してください。

## 注※5

<param-name>タグで指定したパラメータを削除する場合は省略できます。

## 注※6

簡易構築定義ファイルと、サービスユニットの追加の構成定義変更ファイルに user-server を指定できます。サービスユニットの変更の構成定義変更ファイルには user-server を指定できません。

## (5) ホストの定義

使用するホストの情報は<host>以下のタグに定義します。定義できる内容を次の表に示します。

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
host	ホストを定義します。 複数のホストを定義する場合は、host タグを複数指定します。ホストは複数の Web システムで共有できます。	△※1	—	△※2	なし
host-name	ホストを識別するための名称または IP アドレスを 32 文字以下で指定します。 ホスト名に指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。管理 IP アドレスはドット記法 (xxx.xxx.xxx.xxx) で指定します。xxx には 0~255 の整数を指定します。 IP アドレス変換できないホスト名を指定した場合、システム構築時にエラーとなります。 <host-name>タグには@myhost も指定できます。 @myhost を指定すると、システム構築時に、構築先の環境の運用管理サーバマシンのホスト名に自動で置換されます。	◎	—	◎	なし
display-name	ホストの表示名を 128 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	△	—	△	なし
description	ホストのコメントを 1,024 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	△	—	△	なし
agent-host	運用管理エージェントのホスト名、または IP アドレスを指定します。ホスト名を指定する場合は、32 文字以下で指定します。指定できる文字は、英数字、ア	△	—	△	host-name で指定した 値

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
agent-host	<p>ンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。IP アドレスを指定する場合は、ドット記法 (xxx.xxx.xxx.xxx) で指定します。xxx には 0~255 の整数を指定します。</p> <p>&lt;agent-host&gt;タグには@myhost も指定できます。@myhost を指定していると、システム構築時に、ホストの定義の&lt;host-name&gt;タグの値が自動で設定されます。</p>	△	—	△	host-name で指定した 値
agent-port	運用管理エージェントのポート番号を 1~65535 の間で指定します。	△	—	△	20295

(凡例)

- P：論理サーバのパラメタ変更用の構成定義変更ファイルを示します。
- U：サービスユニット・ホスト追加用の構成定義変更ファイルを示します。
- ◎：ホストを定義する場合は、必ず指定します。
- △：省略できます。
- ：該当しません。

注

ユニットの定義の<host-ref>タグで@myhost を指定して、ホストの定義の<display-name>タグ、<description>タグ、<agent-host>タグ、または<agent-port>タグの値を省略している場合、ホストの定義は出力されません。この場合、ホストの定義の<host-name>タグの値は、Management Server が必要に応じて自動生成します。Management Server が自動作成するホスト名は、Windows の場合はコンピュータ名、UNIX の場合は、hostname コマンドで設定したホスト名です。ホストの中に論理サーバが一つも含まれなくなったとき、Management Server が、そのホストを自動で削除します。

注※1

Smart Composer 機能で定義済みのホストを利用する場合は省略できます。

注※2

ホストの定義を変更しない場合は省略できます。

## 4.10.2 バッチアプリケーションを実行するシステムで指定できるタグ

ここでは、バッチアプリケーションを実行するシステムで指定できるタグについて説明します。

### (1) Web システムの属性定義

Web システムの属性として定義できる内容を次の表に示します。

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
web-system	<p>Web システムを定義します。</p> <p>複数の Web システムを定義する場合は、&lt;web-system&gt;タグを複数指定します。</p>	△※1	△	△※2	なし
name	Web システムを識別するための名称を 32 文字以下で指定します。運用管理ドメイン内でユニークな名	◎	◎	◎	なし

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
name	称を指定する必要があります。Smart Composer 機能のコマンドの-s オプションには、ここで指定した名称を指定します。指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。	◎	◎	◎	なし
addition-mode	追加モードを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>DEPLOYED<sup>※3</sup> JPI/SC/DPM を使用してディスクイメージのスケールアウトをする場合に指定します。この指定によって、システム構築時のリソースアダプタでのデプロイが不要になります。</li> <li>NORMAL 通常のスケールアウトの場合に指定します。</li> </ul>	—	—	△	NORMAL
display-name	Web システムの表示名を 128 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	△	△	—	なし
description	Web システムのコメントを 1,024 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	△	△	—	なし

(凡例)

P：論理サーバのパラメタ変更用の構成定義変更ファイルを示します。

U：サービスユニット・ホスト追加用の構成定義変更ファイルを示します。

◎：Web システムを定義する場合は、必ず指定します。

△：省略できます。

—：該当しません。

注※1

Smart Composer 機能で定義済みの Web システムを利用する場合は省略できます。

注※2

サービスユニットを追加しない場合は省略できます。

注※3

この設定を有効にする場合、Smart Composer 機能のコマンドを使用したインポートと一括開始をしておく必要があります。詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバシステム構築・運用ガイド」を参照してください。

## (2) 物理ティアの定義

物理ティアを&lt;tier&gt;以下のタグで定義します。

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
tier	物理ティアを定義します。 バッチアプリケーションを実行するシステムでは物理ティアに j2ee-tier または ctm-tier のどちらかを指定してください。それぞれの物理ティアは、一つの <tier> タグで定義します。	◎	△ <sup>※1</sup>	—	なし

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
tier-type	物理ティアの種類を指定します。バッチアプリケーションを実行するシステムでは、j2ee-tier または ctm-tier のどちらかを指定します。	◎	◎	—	なし
configuration	物理ティアに属するすべての論理サーバに適用するコンフィグレーションを、論理サーバの種類ごとに定義します。	△※2	◎※3	—	なし
logical-server-type	<p>コンフィグレーションを定義する論理サーバの種類を指定します。バッチアプリケーションを実行するシステムではバッチサーバを論理 J2EE サーバとして定義します。タグに指定できる論理サーバの種類を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• j2ee-server : J2EE サーバ</li> <li>• performance-tracer : パフォーマンストレーサ</li> <li>• ctm-domain-manager : CTM ドメインマネージャ</li> <li>• component-transaction-monitor : CTM</li> <li>• smart-agent : スマートエージェント</li> </ul> <p>物理ティアの種類によって、コンフィグレーションが定義できる論理サーバが異なります。</p> <p>j2ee-tier の場合 J2EE サーバとパフォーマンストレーサ</p> <p>ctm-tier の場合 CTM ドメインマネージャ, CTM, スマートエージェント, J2EE サーバおよびパフォーマンストレーサ</p>	◎	◎	—	なし
param※4	論理サーバの環境を設定するパラメタを、パラメタ名と値で定義します。1 種類のパラメタごとに <param>タグで囲んで定義します。	◎	◎	—	なし
param-name※4	論理サーバの環境を設定するパラメタの名称を指定します。	◎	◎	—	なし
param-value※4	<param-name>タグで指定したパラメタへの設定値を指定します。パラメタによっては、複数の値を設定する場合、<param-value>タグを複数指定します。	◎	△※5	—	なし

(凡例)

P : 論理サーバのパラメタ変更用の構成定義変更ファイルを示します。

U : サービスユニット・ホスト追加用の構成定義変更ファイルを示します。

◎ : Web システムを定義する場合は、必ず指定します。

△ : 省略できます。

— : 該当しません。

注

物理ティアの定義では、ユーザサーバ、および free-tier 構成に含まれる論理サーバのコンフィグレーションが設定できません。これらの論理サーバのコンフィグレーションはユニットの定義で設定してください。

## 注※1

物理ティアの定義を変更しない場合は省略できます。

## 注※2

Management Server が論理サーバ作成時に仮定する、環境設定値で運用する場合は省略できます。

## 注※3

cmx\_trans\_param コマンドを使用して、抽象パラメタを展開して物理ティアのコンフィグレーションを生成する場合は省略できます。

## 注※4

<param>タグに指定できるパラメタは論理サーバの種類によって異なります。また、定義する論理サーバはシステムの構成パターンによって異なります。「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」を参照して、定義する論理サーバを確認してください。それぞれの論理サーバに設定できるパラメタについては、使用する論理サーバの種類に応じて 4.12 以降の節を参照してください。

## 注※5

<param-name>タグで指定したパラメタを削除する場合は省略できます。

### (3) サービスユニットの定義

サービスユニットは<unit>以下のタグに定義します。定義できる内容を次の表に示します。

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
unit	サービスユニットを定義します。 複数のサービスユニットを定義する場合は、<unit> タグを複数指定します。	◎	△※1	◎	なし
name	サービスユニットを識別するための名称を 32 文字 以下で指定します。Web システム内でユニークな名 称を指定する必要があります。Smart Composer 機 能のコマンドの-unit オプションには、ここで指定し た名称を指定します。指定できる文字は、英数字、アン ダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。	◎	△※2	◎	なし
display-name	サービスユニットの表示名を 128 文字以下で指定し ます。指定する文字に制限はありません。	△	△	△	なし
description	サービスユニットのコメントを 1,024 文字以下で指 定します。指定する文字に制限はありません。	△	△	△	なし
allocated-host	サービスユニットを構成するホストのリファレンス を定義します。<allocated-host>タグは一つだけ指 定します。	◎	◎	◎	なし
host-ref	ホスト定義の<name>タグに指定したホスト名、構 築済みの Web システムで定義されているホスト名、 または@myhost を指定します。  @myhost を指定していると、システム構築時に、ホ ストの定義の<host-name>タグの値が自動で設定 されます。  なお、複数ホストがある場合、一つのサービスユニッ ト内で同じホストを共有することはできません。	◎	◎	◎	なし

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
hosts-for	<host-ref>タグで指定したホストが属する物理ティアの種類を指定します。バッチアプリケーションを実行するシステムでは j2ee-tier または ctm-tier のどちらかを指定します。	◎	◎	◎	なし
define-server	<hosts-for>タグで指定した物理ティアに属する論理サーバごとに、コンフィグレーションを定義します。例えば、<hosts-for>タグが j2ee-tier の場合は、バッチサーバ用と、パフォーマンストレーサ用にそれぞれ一つずつ論理サーバを定義できます。複数の論理サーバを定義する場合は、<define-server>タグを複数指定します。	△※3	◎	△※3	なし
logical-server-name	論理サーバまたはクラスタを識別するための名称を 128 文字以下で指定します。Smart Composer 機能のコマンドの -s オプションには、ここで指定した名称を指定します。指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。	△	—	△	cmx_<Web システム名>_<サービスユニット名>_<種別>_<通番>
display-name	論理サーバの表示名を 128 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	△	△	△	なし
description	論理サーバのコメントを 1,024 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	△	△	△	なし
logical-server-type	<p>コンフィグレーションを定義する論理サーバの種類を指定します。バッチアプリケーションを実行するシステムでは、バッチサーバを論理 J2EE サーバとして定義します。タグに指定できる論理サーバの種類を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• j2ee-server : J2EE サーバ</li> <li>• performance-tracer : パフォーマンストレーサ</li> <li>• ctm-domain-manager : CTM ドメインマネージャ</li> <li>• component-transaction-monitor : CTM</li> <li>• smart-agent : スマートエージェント</li> <li>• user-server : ユーザサーバ</li> </ul> <p>ホストが属する物理ティアの種類によって、コンフィグレーションが定義できる論理サーバが異なります。</p> <p>j2ee-tier の場合 J2EE サーバ、パフォーマンストレーサおよびユーザサーバ</p> <p>ctm-tier の場合 CTM ドメインマネージャ、CTM、スマートエージェント、J2EE サーバ、パフォーマンストレーサおよびユーザサーバ</p>	◎	◎	◎	なし

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
configuration	論理サーバごとに適用するコンフィグレーションを定義します。 なお、物理ティアの定義で定義した環境設定値で運用する場合は、<configuration>タグの定義は不要です。	△	△	△	なし
param <sup>※4</sup>	論理サーバの環境を設定するパラメータを、パラメータ名と値で定義します。1 種類のパラメータごとに<param>タグで囲んで定義します。	◎	◎	◎	なし
param-name <sup>※4</sup>	論理サーバの環境を設定するパラメータの名称を指定します。指定できるパラメータ名については、「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」を参照してください。	◎	◎	◎	なし
param-value <sup>※4</sup>	<param-name>タグで指定したパラメータへの設定値を指定します。パラメータによっては、複数の値を設定する場合、<param-value>タグを複数指定します。それぞれのパラメータの設定値については、「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」を参照してください。	◎	△ <sup>※5</sup>	◎	なし

## (凡例)

P：論理サーバのパラメータ変更用の構成定義変更ファイルを示します。

U：サービスユニット・ホスト追加用の構成定義変更ファイルを示します。

◎：Web システムを定義する場合は、必ず指定します。

△：省略できます。

－：該当しません。

## 注

構成変更定義ファイルには、free-tier 構成に含まれる論理サーバのコンフィグレーションを設定できません。

## 注※1

サービスユニットの定義を変更しない場合は省略できます。

## 注※2

クライアント設定プロパティファイルまたはクライアント共通設定プロパティファイルに cmx.websystem.name を指定している場合は省略できます。

## 注※3

論理サーバごとにコンフィグレーションを定義しない場合は省略できます。

## 注※4

<param>タグに指定できるパラメータは論理サーバの種類によって異なります。また、定義する論理サーバはシステムの構成パターンによって異なります。「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」を参照して、定義する論理サーバを確認してください。それぞれの論理サーバに設定できるパラメータについては、使用する論理サーバの種類に応じて 4.12 以降の節を参照してください。

## 注※5

<param-name>タグで指定したパラメータを削除する場合は省略できます。

## (4) ホストの定義

タグ名称	内容	簡易構築 定義ファ イル	構成定義変更 ファイル		デフォルト
			P	U	
host	ホストを定義します。 複数のホストを定義する場合は、host タグを複数指定します。ホストは複数の Web システムで共有できます。	△※1	—	△※2	なし
host-name	ホストを識別するための名称または IP アドレスを 32 文字以下で指定します。 ホスト名に指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。管理 IP アドレスはドット記法 (xxx.xxx.xxx.xxx) で指定します。xxx には 0~255 の整数を指定します。 IP アドレス変換できないホスト名を指定した場合、システム構築時にエラーとなります。 <host-name>タグには@myhost も指定できます。 @myhost を指定すると、システム構築時に、構築先の環境の運用管理サーバマシンのホスト名に自動で置換されます。	◎	—	◎	なし
display-name	ホストの表示名を 128 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	△	—	△	なし
description	ホストのコメントを 1,024 文字以下で指定します。指定する文字に制限はありません。	△	—	△	なし
agent-host	運用管理エージェントのホスト名、または IP アドレスを指定します。ホスト名を指定する場合は、32 文字以下で指定します。指定できる文字は、英数字、アンダースコア「_」、ハイフン「-」の組み合わせです。IP アドレスを指定する場合は、ドット記法 (xxx.xxx.xxx.xxx) で指定します。xxx には 0~255 の整数を指定します。 <agent-host>タグには@myhost も指定できます。 @myhost を指定している場合、システム構築時に、ホストの定義の<host-name>タグの値が自動で設定されます。	△	—	△	host-name で指定した 値
agent-port	運用管理エージェントのポート番号を 1~65535 の間で指定します。	△	—	△	20295

## (凡例)

P：論理サーバのパラメタ変更用の構成定義変更ファイルを示します。

U：サービスユニット・ホスト追加用の構成定義変更ファイルを示します。

◎：ホストを定義する場合は、必ず指定します。

△：省略できます。

—：該当しません。

## 注

ユニットの定義の<host-ref>タグで@myhost を指定して、ホストの定義の<display-name>タグ、<description>タグ、<agent-host>タグ、または<agent-port>タグの値を省略している場合、ホストの定義は出力されません。



この場合、ホストの定義の<host-name>タグの値は、Management Server が必要に応じて自動生成します。Management Server が自動作成するホスト名は、Windows の場合はコンピュータ名、UNIX の場合は、hostname コマンドで設定したホスト名です。ホストの中に論理サーバが一つも含まれなくなったとき、Management Server が、そのホストを自動で削除します。

注※1

Smart Composer 機能で定義済みのホストを利用する場合は省略できます。

注※2

ホストの定義を変更しない場合は省略できます。

## 4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ

構築するシステムの構成パターンによって、定義する論理サーバの種類が異なります。ここでは、論理サーバに指定できるパラメタについて説明します。

### 4.11.1 J2EE アプリケーションを実行するシステムを構築する場合

簡易構築定義ファイルおよび構成変更定義ファイルの「物理ティアの定義」および「サービスユニットの定義」では、各論理サーバのコンフィグレーション（<configuration>タグの定義）を指定します。定義する論理サーバごとに、コンフィグレーションで指定できるパラメタが異なります。

また、それぞれの論理サーバに共通で指定できるパラメタがあります。論理サーバ共通のパラメタについては、「4.12 各論理サーバ共通で指定できるパラメタ」を参照してください。

定義する論理サーバの種類、および指定できるパラメタを表で示します。

表 4-4 定義する論理サーバの種類、および指定できるパラメタの一覧（J2EE アプリケーションの場合）

定義する論理サーバの種類	指定できるパラメタ	参照先
論理 Web サーバ	論理 Web サーバで指定できるパラメタ	4.13
論理 J2EE サーバ	J2EE サーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタ	4.14.1
	J2EE サーバ用オプション定義を設定するパラメタ	4.14.2
	J2EE サーバの JavaVM のシステムプロパティに設定できるパラメタ	4.14.3
	J2EE サーバの拡張パラメタ	4.14.4
	運用監視エージェントプロパティを設定するパラメタ	4.14.9
	Management イベント発行用プロパティを設定するパラメタ	4.14.10
	JPI 連携を設定するパラメタ	4.14.11
	SecurityManager の使用を設定するパラメタ	4.14.12
論理パフォーマンストレーサ	論理パフォーマンストレーサで指定できるパラメタ	4.15
論理 SFO サーバ（互換用機能）	論理 SFO サーバで指定できるパラメタ	4.16
論理 CTM ドメインマネージャ	論理 CTM ドメインマネージャで指定できるパラメタ	4.17
論理 CTM	論理 CTM で指定できるパラメタ	4.18
論理スマートエージェント	論理スマートエージェントで指定できるパラメタ	4.19
論理ユーザサーバ	論理ユーザサーバで指定できるパラメタ	4.20

cmx\_export\_model コマンドを使用して出力した簡易構築定義ファイルの物理ティアの種別が free-tier の場合、論理ネーミングサービスが出力されることがあります。論理ネーミングサービスで出力されるパラメタについては、「4.21 論理ネーミングサービスで指定できるパラメタ」を参照してください。

## 4.11.2 バッチアプリケーションを実行するシステムを構築する場合

バッチアプリケーションを実行するシステムでは、次の論理サーバを定義します。

- 論理 J2EE サーバ\*
- 論理パフォーマンストレーサ
- 論理 CTM ドメインマネージャ
- 論理 CTM
- 論理スマートエージェント

注※ バッチサーバは論理 J2EE サーバとして定義します。

また、定義する論理サーバごとに、コンフィグレーション (<configuration>タグの定義) で指定できるパラメタが異なります。

また、それぞれの論理サーバに共通で指定できるパラメタがあります。論理サーバ共通のパラメタについては、「4.12 各論理サーバ共通で指定できるパラメタ」を参照してください。

定義する論理サーバの種類、および指定できるパラメタを表で示します。

表 4-5 定義する論理サーバの種類、および指定できるパラメタの一覧 (バッチアプリケーションの場合)

定義する論理サーバの種類	指定できるパラメタ	参照先
バッチサーバとしての論理 J2EE サーバ	バッチサーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタ	4.14.5
	バッチサーバ用オプション定義を設定するパラメタ	4.14.6
	バッチサーバの JavaVM のシステムプロパティに設定できるパラメタ	4.14.7
	バッチサーバの拡張パラメタ	4.14.8
	運用監視エージェントプロパティを設定するパラメタ	4.14.9
	Management イベント発行用プロパティを設定するパラメタ	4.14.10
	JPI 連携を設定するパラメタ	4.14.11
	SecurityManager の使用を設定するパラメタ*	4.14.12
論理パフォーマンストレーサ	論理パフォーマンストレーサで指定できるパラメタ	4.15
論理 CTM ドメインマネージャ	論理 CTM ドメインマネージャで指定できるパラメタ	4.17
論理 CTM	論理 CTM で指定できるパラメタ	4.18
論理スマートエージェント	論理スマートエージェントで指定できるパラメタ	4.19

注※ バッチサーバの場合、このパラメタは必ず指定してください。

## 4.12 各論理サーバ共通で指定できるパラメタ

ここでは、次に示す論理サーバで共通に指定できるパラメタについて説明します。

- 論理 Web サーバ
- 論理 J2EE サーバ
- 論理パフォーマンストレーサ
- 論理 SFO サーバ
- 論理 CTM ドメインマネージャ
- 論理 CTM
- 論理スマートエージェント
- 論理ユーザサーバ
- 論理ネーミングサービス

### 4.12.1 論理サーバ共通で指定できるパラメタ

各論理サーバ共通で指定できるパラメタについて次の表に示します。

「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

表 4-6 各論理サーバ共通で指定できるパラメタ

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
additional.startcmd*1	起動コマンドに追加するオプションを指定します。	英数字、および記号 (\$%=^{}+ _@:./) を使って指定します。もしくはハイフン [-], または (¥) が 1~256 回連続する文字列を指定します。	なし	06-50 07-00
mstartup.force.watchtime	論理サーバの強制停止監視時間を秒単位で指定します。0 を指定した場合監視しません。0, 60, 300, 600, 1800 のどれかを指定します。 J2EE サーバ, SFO サーバの強制停止時にスレッドダンプを出力する場合、強制停止監視時間を、スレッドダンプの出力が終わる時間よりも短く設定すると、スレッドダンプの出力が完全に終わる前に J2EE サーバ, または SFO サーバのプロセスが終了してしまうので注意してください。	0, 60, 300, 600, 1800 のどれかを指定します。	60	07-60
mstartup.no	一括起動時のサーバの起動順序を整数で指定します。一括起動をしない場合は-1 を指定してください。	-1~999 の整数で指定します。	• パフォーマンスストレ	07-50

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
mstartup.no	一括起動時のサーバの起動順序を整数で指定します。一括起動をしない場合は-1を指定してください。	-1～999の整数で指定します。	ー サ : 0 • ス マ ー ト エ ー ジ エ ン ト : 10 • ネ ー ミ ン グ サ ー ビ ス : 20 • C T M ド メ イ ン マ ネ ジ ャ : 30 • C T M : 40 • SF O サ ー バ	07-50

4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
mstartup.no	一括起動時のサーバの起動順序を整数で指定します。一括起動をしない場合は-1を指定してください。	-1~999の整数で指定します。	: 70 • J2 EE サーバ : 80 • W eb サーバ : 90 • ユ ー ザ サーバ : 90 0	07-50
mstartup.premised.serverName*2	論理サーバの前提となる論理サーバを指定します。	英数字、アンダースコア「_」、およびハイフン「-」を使って128文字以内で指定します。	なし	07-50
mstartup.restartcnt	論理サーバの自動再起動回数を指定します。 0, 1, 5, 10, 1000のどれかを指定します。	0, 1, 5, 10, 1000のどれかを指定します。	1	06-50
mstartup.retrywait	論理サーバの自動再起動リトライ間隔を秒単位で指定します。0, 60, 300, 600, 1800のどれかを指定します。	0, 60, 300, 600, 1800のどれかを指定します。	60	06-50
mstartup.start.watchtime	論理サーバの起動監視時間を秒単位で指定します。 0, 60, 300, 600, 3600のどれかを指定します。 0を指定した場合は監視しません。	0, 60, 300, 600, 3600のどれかを指定します。	600	06-50 07-00
mstartup.watctime	論理サーバの停止監視時間を秒単位で指定します。 0, 60, 300, 600, 1800のどれかを指定します。 0を指定した場合監視しません。	0, 60, 300, 600, 1800のどれかを指定します。	60	06-50
realservername*3	実サーバ名を指定します。cmx_build_system コマンド実行後は、変更できません。	英数字で始まり、英数字およびアンダースコア「_」、ハイフン「-」で構成された128文字以内の文字列を指定します。	論理サーバ名	06-50 07-00

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
user.env.variable	<p>サーバ起動時の環境変数を指定します。*4 値を複数指定する際は、複数の&lt;param-value&gt;で指定します。</p> <p><b>【Windows の場合のデフォルト値】</b></p> <p>J2EE サーバ</p> <pre>CSCCFJ_SERVER_HOME=\${cosminexus.home}*CC Path=\${cosminexus.home}*CTM*bin;%{Path}</pre> <p>PRF</p> <pre>Path=\${cosminexus.home}*PRF*bin;%{Path}</pre> <p><b>【Unix の場合のデフォルト値】</b></p> <p>J2EE サーバ</p> <pre>CSCCFJ_SERVER_HOME=\${cosminexus.home}/CC</pre> <ul style="list-style-type: none"> <li>(AIX の場合) <pre>AIXTHREAD_COND_DEBUG=OFF AIXTHREAD_MUTEX_DEBUG=OFF AIXTHREAD_RWLOCK_DEBUG=OFF AIXTHREAD_SCOPE=S EXTSHM=ON NODISCLAIM=true PSALLOC=early LIBPATH=/opt/DABroker/lib:\${cosminexus.home}/manager/bin:%{LIBPATH}</pre> </li> <li>(HP-UX(IPF), Linux の場合) <pre>LD_LIBRARY_PATH=/opt/DABroker/lib:\${cosminexus.home}/manager/bin:%{LD_LIBRARY_PATH}</pre> </li> </ul> <p>HWS</p> <pre>PATH=\${cosminexus.home}/PRF/bin</pre> <ul style="list-style-type: none"> <li>(AIX の場合) <pre>LDR_CNTRL=MAXDATA=0x4000000 EXTSHM=ON LIBPATH=\${cosminexus.home}/PRF/lib:%{LIBPATH}</pre> </li> <li>(HP-UX(IPF), Linux の場合) <pre>LD_LIBRARY_PATH=\${cosminexus.home}/PRF/lib:%{LD_LIBRARY_PATH}</pre> </li> </ul>	任意の文字列を指定します。	なし*5	07-50

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
user.env.variable	PRF PATH=\${cosminexus.home}/PRF/bin:% {PATH} <ul style="list-style-type: none"> <li>• (AIX の場合)                EXTSHM=ON                LDR_CNTRL=MAXDATA=0x4000000                0                NODISCLAIM=true                PSALLOC=early                LIBPATH=\${cosminexus.home}/PRF/                lib:%{LIBPATH}</li> <li>• (HP-UX(IPF), Linux の場合)</li> <li>• LD_LIBRARY_PATH=\${                cosminexus.home}/PRF/lib:%                {LD_LIBRARY_PATH}</li> </ul>	任意の文字列を指定します。	なし* 5	07-50

## 注※1

論理ユーザーサーバでは指定できません。

複数の起動オプションを追加する場合には、一つの param-value タグ内に複数のオプションを空白で区切って指定します。

(例)

```
<param-name>additional.startcmd</param-name>
```

```
<param-value>-CTMClientConnectCount 128 -CTMEntryCount 256</param-value>
```

## 注※2

論理パフォーマンストレーサでは指定できません。

## 注※3

論理 Web サーバ、論理 J2EE サーバおよび論理 SFO サーバだけで指定できます。

## 注※4

値を複数指定する際は、複数の<param-value>で指定します。

(例)

```
<param-name>user.env.variable</param-name>
```

```
<param-value>AAA=1024</param-value>
```

```
<param-value>BBB=2048</param-value>
```

## 注※5

user.env.variable を指定しない場合、論理サーバにはデフォルトの環境変数が設定されます。論理サーバにデフォルトで設定されている環境変数については、マニュアル「アプリケーションサーバ システム構築・運用ガイド」の「4.1.13 論理サーバの環境変数を設定するときの確認事項」を参照してください。



## 4.13 論理 Web サーバで指定できるパラメタ

ここでは、論理 Web サーバで指定できるパラメタについて説明します。

### 4.13.1 Web サーバ用定義を設定するパラメタ

Web サーバ用定義を設定するパラメタについて、次の表に示します。

なお、「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、マニュアル「HTTP Server」のディレクティブ一覧についての説明を参照してください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

表 4-7 Web サーバ用定義を設定するパラメタ

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
SetBy	Web サーバの設定方法を指定します。 item：項目ごとに設定します。 text：httpsd.conf（HTTP Server 定義ファイル）の内容を直接設定します。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"><li>item</li><li>text</li></ul>	item	08-70
CoreDump Directory	コアをダンプするディレクトリを指定します。絶対パス、または ServerRoot ディレクティブの指定値からの相対パスが指定できます。なお、指定したディレクトリには、User、Group ディレクティブで指定したユーザ、グループからの書き込み権限を付与する必要があります。 なお、この指定値は UNIX の場合だけ有効となります。	任意の文字列を指定します。	&amp; {hws.home}/servers/HWS_<サーバ名称>	06-50
Group	サーバプロセスが動作するときのグループ名を指定します。 なお、この指定値は UNIX の場合だけ有効となります。	英数字、およびアンダースコア「_」を使って 16 文字以内で指定します。	bin	06-50 07-00
HWSKeepStartServers	サーバプロセスの稼働数を StartServers ディレクティブに指定した数だけ維持するかどうかを指定します。 On を指定した場合： StartServers ディレクティブに指定した数だけ、稼働しているサーバプロセスが維持されます。サーバプロセス数が StartServers ディレクティブ指定値より小さくなった場合、新しいプロセスが生成されます。この機能は、プロセス数に関する各ディレクティブの指定値が、次の関係にある場合に有効です。 MinSpareServers < StartServers ≤ MaxClients かつ MinSpareServers < MaxSpareServers ≤ MaxClients	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"><li>On</li><li>Off</li></ul>	Off	06-50

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
HWSKeepStartServers	<p>StartServers ディレクティブ設定値が、MinSpareServers ディレクティブ設定値より小さい場合は、MinSpareServers ディレクティブの値でサーバプロセス数が維持されます。</p> <p>Off を指定した場合： StartServers ディレクティブに指定した数の稼働しているサーバプロセスは維持されません。</p> <p>プロセス数に関連するほかのディレクティブについては、マニュアル「HTTP Server」を参照してください。</p> <p>なお、この指定値は UNIX の場合だけ有効となります。</p>	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• On</li> <li>• Off</li> </ul>	Off	06-50
HWSLogTimeVerbose	<p>エラーログとリクエストログの時刻、アクセスログのリクエスト処理に掛かった時間 (%T)、およびリクエスト処理を開始した時刻 (%t) をミリ秒まで表示するかどうかを指定します。</p> <p>On を指定した場合： 時刻および時間をミリ秒まで表示します。</p> <p>Off を指定した場合： 時刻および時間を秒まで表示します。</p> <p>なお、エラーログは ErrorLog ディレクティブで指定するエラーログが対象になります。ScriptLog ディレクティブで指定する CGI スクリプトのエラーログは対象になりません。</p>	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• On</li> <li>• Off</li> </ul>	On	07-50
KeepAliveTimeout	<p>KeepAlive 接続時の要求待ち時間を秒単位で指定します。この時間以上経過しても、クライアントから次のリクエストが来ない場合、コネクションを切断します。KeepAlive はサーバプロセスが特定のクライアントに占有されます。ある Web ページから次の Web ページへ移る場合に必要とする標準的な時間以上は、タイムアウトにしてコネクションを切断し、サーバプロセスをほかのリクエストの処理に当てるようにします。</p> <p>ディレクティブについては、マニュアル「HTTP Server」を参照してください。</p>	0~65535 の整数で指定します。	15	06-50
ServerName	<p>HTTP Server のサーバ名およびポート番号を指定します。</p> <p>サーバ名は、FQDN (完全修飾ドメイン名) または IP アドレスで指定します。</p> <p>指定内容の詳細については、マニュアル「HTTP Server」を参照してください。</p>	サーバ名およびポート番号	www.example.com	08-70
Listen	<p>リクエストを受け付ける IP アドレス、およびポート番号を指定します。Port ディレクティブと異なり、複数指定できます。バーチャルホストを定義</p>	指定できる値を次に示します。	なし	07-50

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
Listen	<p>する場合に指定します。Listen ディレクティブを指定すると、Port ディレクティブ、および BindAddress ディレクティブの指定は無視されません。</p> <p>IP アドレスには IPv6 アドレスも指定できます。IPv6 アドレスを指定する場合は、IPv6 アドレスを [ ] で囲んでください。ただし、IP アドレスを省略してポート番号だけを指定した場合は、IPv4 アドレスを使用したリクエストだけを受け付けます。このため、IPv6 アドレスを使用する場合は、必ず Listen ディレクティブに IPv6 アドレスを指定してください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>IPv4 アドレス:ポート番号</li> <li>ホスト名:ポート番号</li> <li>@myhost:ポート番号</li> </ul> <p>ホスト名は、英数字およびアンダースコア「_」、ピリオド「.」、ハイフン「-」で構成された 255 文字以内の文字列です。</p> <p>ポート番号は 1~65535 の半角数字です。</p>	なし	07-50
LogLevel	<p>エラーログに出力するエラーのレベルを指定します。指定したレベルの上位レベルのログを出力します。ただし、notice レベルのログはこの指定に関係なく出力されます。また、HTTP Server 起動時など、レベル指定の解析終了前に出力されるメッセージは、この指定に関係なく出力される場合があります。</p> <p>次にエラーレベルを上位順に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>emerg：緊急メッセージ</li> <li>alert：即時処理要求メッセージ</li> <li>crit：致命的な状態のメッセージ</li> <li>error：一般的エラーメッセージ</li> <li>warn：警告レベルメッセージ</li> <li>notice：標準的だが重要なメッセージ</li> <li>info：インフォメーションメッセージ、外部モジュールと CGI プログラム実行時のモジュールトレース※1</li> <li>debug：デバッグレベルメッセージ、内部モジュールトレース、および info 相当のモジュールトレース※1</li> </ul>	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>emerg</li> <li>alert</li> <li>crit</li> <li>error</li> <li>warn</li> <li>notice</li> <li>info</li> <li>debug</li> </ul>	info	06-50
MaxClients	<p>同時に接続できるクライアントの最大数を指定します。</p> <p>サーバを起動すると、StartServer ディレクティブで指定した数のプロセスが起動されリクエストを待ちます。多くのリクエストが同時に発生した場合、複数のプロセスでリクエストを処理することになります。リクエスト待ちの残りプロセス数が MinSpareServers ディレクティブで指定した数より少なくなると、徐々に新規プロセスを生成します。このとき、プロセス数がこのディレクティブで指定した数になるまでプロセスが生成されます。その後、リクエストの処理が終了しリクエスト待ちプロセスが増加すると、MaxSpareServers ディレクティブで指定した数までプロセスを終了させます。</p>	1~1024 の整数で指定します。	150	06-50

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
MaxClients	プロセス数に関連するほかのディレクティブについては、マニュアル「HTTP Server」を参照してください。 なお、この指定値は UNIX の場合だけ有効となります。	1～1024 の整数で指定します。	150	06-50
StartServers	Web サーバ起動時のサーバプロセス数を指定します。プロセス数に関連するほかのディレクティブについては、マニュアル「HTTP Server」を参照してください。 なお、この指定値は UNIX の場合だけ有効となります。	0～1024 の整数で指定します。	5	06-50
ThreadsPerChild	サーバとして起動するスレッド数を指定します。指定したスレッド数はサーバの最大同時接続数を示します。 ディレクティブについては、マニュアル「HTTP Server」を参照してください。 なお、この指定値は Windows の場合だけ有効となります。	1～1024 の整数で指定します。	50	06-50
User	サーバプロセスが動作するときのユーザ名を指定します。 なお、この指定値は UNIX の場合だけ有効となります。	英数字、およびアンダースコア「_」を使って 16 文字以内で指定します。	bin	06-50 07-00
DocumentRoot	コンテンツを格納するドキュメントルートディレクトリを絶対パスで指定します。 ディレクティブについては、マニュアル「HTTP Server」を参照してください。	任意の文字列を指定します。	&#amp;#106; {hws.home}/htdocs	08-00
AppendDirectives	Web サーバを項目ごとに設定する (SetBy パラメータに item を指定した) 場合に、追加するディレクティブの内容を指定します。*2 ディレクティブについては、マニュアル「HTTP Server」を参照してください。	任意の文字列を指定します。	なし	08-70
AllText	Web サーバのファイルを直接設定する (SetBy パラメータに text を指定した) 場合に、httpd.conf (HTTP Server 定義ファイル) の内容を指定します。*2 httpd.conf (HTTP Server 定義ファイル) については、マニュアル「HTTP Server」を参照してください。	任意の文字列を指定します。	なし	08-70

##### 注※1

モジュールトレースは、エラーログではなくリクエストログに出力するよう設定できます。詳細は、マニュアル「HTTP Server」を参照してください。

##### 注※2

param-value の値は CDATA セクションで指定してください。

(例)

```
<param-name>AppendDirectives</param-name>
<param-value>
```

```

<![CDATA[
  <Location /server-status>
  :
  </Location>
]]>
</param-value>

```

## 4.13.2 HTTP Server 用リダイレクタ動作定義を設定するパラメタ

HTTP Server 用リダイレクタ動作定義を設定するパラメタについて、次の表に示します。

なお、「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「9.3 mod\_jk.conf (HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイル)」を参照してください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

### 注

AllText パラメタを指定する場合、HTTP Server 用リダイレクタ動作定義を設定するパラメタの指定を有効にするには、設定ファイルの内容に次の記述を含めてください。

```
Include "Application Serverのインストールディレクトリ>/CC/web/redirector/servers/<論理Webサーバ>/mod_jk.conf"
```

表 4-8 HTTP Server 用リダイレクタ動作定義を設定するパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
JkConnectTimeout	0~3600 の整数で指定します。	30	07-00
JkGatewayHost	次のどれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>IPv4 アドレス</li> <li>ホスト名</li> </ul> なお、ホスト名には、英数字、アンダースコア「_」、ピリオド「.」、およびハイフン「-」で指定した 255 文字以内の文字列を指定してください。	なし	07-50
JkGatewayHttpsScheme	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>On</li> <li>Off</li> </ul> このパラメタについては、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(Web コンテナ)」の「4.10 Web コンテナへのゲートウェイ情報の通知」を参照してください。	Off	06-50
JkGatewayPort	1~65535 の整数で指定します。	なし	07-50
JkLogFileDir	任意の文字列を指定します。	logs	06-50
JkLogFileNum	1~64 の整数で指定します。	8	06-50 07-50

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
JkLogFileSize	4096～2147483647 の整数で指定します。	4194304	06-50 07-50
JkLogLevel	次のどれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• emerg</li> <li>• error</li> <li>• info</li> <li>• debug</li> </ul>	error	06-50
JkModulePriority	次のどれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• REALLY_FIRST (整数値の-10 に対応)</li> <li>• FIRST (整数値の 0 に対応)</li> <li>• MIDDLE (整数値の 10 に対応)</li> <li>• LAST (整数値の 20 に対応)</li> <li>• REALLY_LAST (整数値の 30 に対応)</li> <li>• -10～30 の整数</li> </ul>	FIRST	07-00
JkMount	次の形式で指定します。 <URL パターン> <ワーカ名> <ワーカ名>にはワーカの定義で worker.list に指定した名称を使用してください。ワーカの定義と worker.list については「4.13.3 ワーカ定義を設定するパラメタ」を参照してください。 注 同一の J2EE サーバを複数のワーカ名で定義しないでください。そのようなワーカを JkMount に指定した場合の動作は保証されません。	combined-tier と http-tier の場合 ※ /* [J2EE サーバ名] 注 同時に [J2EE サーバ名] が worker (タイプ: ajs13) として設定されます。	07-50
JkPrfId	英数字を 31 文字以内で指定します。 「TSC」, 「tsc」または「CTM」や「ctm」で始まる文字列を指定した場合、エラーになります。	なし free-tier 以外の場合、値は自動で設定されます。	07-50
JkRequestRetryCount	1～16 の整数で指定します。	3	07-00
JkSendTimeout	0～3600 の整数で指定します。	100	07-00
JkTraceLog	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• On</li> <li>• Off</li> </ul>	On	06-50
JkTraceLogFileDir	任意の文字列を指定します。	logs	06-50
JkTraceLogFileNum	1～64 の整数で指定します。	4	06-50

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
JkTraceLogFileNum	1～64 の整数で指定します。	4	07-50
JkTraceLogFileSize	4096～2147483647 の整数で指定します。	16777216	06-50 07-50
JkTranslateBackcompat	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• On</li> <li>• Off</li> </ul>	Off	06-50

## 注

キーを複数指定した場合、最後に指定した値が有効になります。

## 注※

なお、combined-tier と http-tier でこのパラメータを省略した場合、次のように関連するパラメータに値が設定されます。

```

<param>
<param-name>JkMount</param-name>
<param-value>*[J2EEサーバ名]</param-value>
</param>
<param>
<param-name>worker.list</param-name>
<param-value>[J2EEサーバ名]</param-value>
</param>
<param>
<param-name>worker.[J2EEサーバ名].host</param-name>
<param-value>[ホスト名]</param-value>
</param>
<param>
<param-name>worker.[J2EEサーバ名].port</param-name>
<param-value>[ポート番号]</param-value>
</param>
<param>
<param-name>worker.[J2EEサーバ名].type</param-name>
<param-value>ajp13</param-value>
</param>

```

### 4.13.3 ワーカ定義を設定するパラメータ

ワーカ定義を設定するパラメータについて、次の表に示します。

なお、「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「9.5 workers.properties (ワーカ定義ファイル)」を参照してください。「省略値」とは、パラメータの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメータが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

## 注

AllText パラメータを指定する場合、ワーカ定義を設定するパラメータの指定を有効にするには、設定ファイルの内容に次の記述を含めてください。

---

```
Include "Application Serverのインストールディレクトリ>/CC/web/redirector/servers/<論理Webサーバ>/mod_jk.conf"
```

---

## (1) ワーカ定義ファイルに指定できるキー

ワーカ、およびワーカごとの各パラメタを定義します。このキーに不正な値を設定した場合、動作は保証されません。

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
worker.list	任意の文字列を指定します。	なし	07-50
worker.<ワーカ名>.<パラメタ>	定義パラメタについては、「(2) ワーカごとの定義パラメタ」を参照してください。	なし	07-50

## (2) ワーカごとの定義パラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
worker.<ワーカ名>.<パラメタ>	任意の文字列を指定します。	なし	07-50
worker.<ワーカ名>.cachesize*	1~2147483647 の整数で指定します。	64	07-50
worker.<ワーカ名>.default_worker	ワーカ名をコンマ「,」で区切って指定します。 先頭と末尾のスペースは無視されます。	なし	07-50
worker.<ワーカ名>.delegate_error_code	400~417, 422~424, 500~505, 507, 510 を コンマ「,」で区切って指定します。	なし	07-50
worker.<ワーカ名>.host	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>IPv4 アドレス</li> <li>ホスト名</li> <li>@myhost</li> </ul>	なし	07-50
worker.<ワーカ名>.lbfactor*	0~9999999999 の整数で指定します。	1	07-50
worker.<ワーカ名>.port	1~65535 の整数で指定します。	なし	07-50
worker.<ワーカ名>.post_data	数字 (0~9) の 10 文字以内の文字列と m, M, k, K が 0~1 回連続する文字列を指定します。	なし	07-50
worker.<ワーカ名>.post_size_workers	任意の文字列を指定します。	なし	07-50
worker.<ワーカ名>.receive_timeout*	0~3600 の整数で指定します。	3600	07-50
worker.<ワーカ名>.type	次のどれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>ajp13</li> <li>lb</li> <li>post_size_lb</li> </ul>	なし	07-50

## 注

ワーカを新規に定義する場合は、次のパラメタを必ず定義してください。

JkMount については「4.13.2 HTTP Server 用リダイレクタ動作定義を設定するパラメタ」を参照してください。

- worker.list
- worker.<ワーカ名>.host



- ・ worker.<ワーカ名>.port
- ・ worker.<ワーカ名>.type
- ・ JkMount

注※

combined-tier または http-tier で構築した場合、省略値は J2EE サーバ名で定義されたワーカ名のワーカに適用されます。省略値を変更したい場合は、上記の「注」に示すワーカを定義してください。

#### 4.13.4 HTTP Server のログの出力方法を設定するパラメタ

HTTP Server のログの出力方法を設定するパラメタについて、次の表に示します。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

表 4-9 HTTP Server のログの出力方法を設定するパラメタ

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
CustomDivideFileNum	HttpsCustomMethod で「Div」を設定したときに有効になります。 分割したログファイルのファイル数を指定します。分割したファイル数がここで指定した数を超えた場合、最も古いファイルから削除されます。0 を指定した場合、ファイルは削除されません。	0～256 の整数で指定します。	8	07-50
CustomDivideTimeDifference	HttpsCustomMethod で「Div」を設定したときに有効になります。 ログファイルを分割する基準となる時間（単位：分）を、GMT に対する差として -1439～1439 の範囲で指定します。0 を指定すると、1970 年 1 月 1 日 0 時 0 分 0 秒（GMT）が基準時間となります。	-1439～1439 の整数で指定します。	540	07-50
CustomDivideTimeInterval	HttpsCustomMethod で「Div」を設定したときに有効になります。 一つのログファイルで採取する時間間隔を 1～31536000 の範囲で指定します。	1～31536000 の整数で指定します。	86400	07-50
CustomWraparoundFileNum	HttpsCustomMethod で「Wrap」を設定したときに有効になります。 出力するログファイルの最大数を 1～256 の範囲で指定します。 ログファイルのサイズが CustomWraparoundFilesize で指定したサイズを超えた場合、ログの出力先は次のログファイルに移ります。このとき、すでにこのパラメタに指定した最大数と同じ数のログファイルが作成されていた場合、「.001」という名称がついているファイルから再度使用されます。	1～256 の整数で指定します。	5	07-50
CustomWraparoundFilesize	HttpsCustomMethod で「Wrap」を設定したときに有効になります。 ログファイルの最大サイズ（単位：キロバイト）を 1～2097151 の範囲で指定します。	1～2097151 の整数で指定します。	8192	07-50

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
CustomWraparoundFile size	ログを出力するときに、ログファイルのサイズがこのパラメタで指定した最大サイズを超えた場合、ログの出力先は次のログファイルに移ります。このとき、移動先のログファイルの内容はクリアされます。	1~2097151 の整数で指定します。	8192	07-50
ErrorDivideFileNum	HttpsdErrorMethod で「Div」を設定したときに有効になります。 分割したログファイルのファイル数を 0~256 の範囲で指定します。分割したファイル数がここで指定した数を超えた場合、最も古いファイルから削除されます。0 を指定した場合、ファイルは削除されません。	0~256 の整数で指定します。	8	07-50
ErrorDivideTimeDifference	HttpsdErrorMethod で「Div」を設定したときに有効になります。 ログファイルを分割する基準となる時間（単位：分）を、GMT に対する差として -1439~1439 の範囲で指定します。0 を指定すると、1970 年 1 月 1 日 0 時 0 分 0 秒（GMT）が基準時間となります。	-1439~1439 の整数で指定します。	540	07-50
ErrorDivideTimeInterval	HttpsdErrorMethod で「Div」を設定したときに有効になります。 一つのログファイルで採取する時間間隔を 1~31536000 の範囲で指定します。	1~31536000 の整数で指定します。	86400	07-50
ErrorWraparoundFileNum	HttpsdErrorMethod で「Wrap」を設定したときに有効になります。 出力するログファイルの最大数を 1~256 の範囲で指定します。 ErrorWraparoundFilesize で指定したサイズを超えた場合、ログの出力先は次のログファイルに移ります。このとき、すでにこのパラメタに指定した最大数と同じ数のログファイルが作成されていた場合、「.001」という名称がついているファイルから再度使用されます。	1~256 の整数で指定します。	5	07-50
ErrorWraparoundFilesize	HttpsdErrorMethod で「Wrap」を設定したときに有効になります。 ログファイルの最大サイズ（単位：キロバイト）を 1~2097151 の範囲で指定します。 ログを出力するときに、ログファイルのサイズがこのパラメタで指定した最大サイズを超えた場合、ログの出力先は次のログファイルに移ります。このとき、移動先のログファイルの内容はクリアされます。	1~2097151 の整数で指定します。	8192	07-50
HttpsdCustomLogFileDir	Web サーバが出力するアクセスログの出力先ディレクトリを指定します。	任意の文字列を指定します。	logs	07-50

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
HttpsCustomLogFormat	<p>HTTP Server が提供するラベル名または任意のフォーマットを指定します。</p> <p>HTTP Server が提供するラベル名と対応するフォーマットは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• common</li> <li>• combined</li> <li>• combinedio</li> <li>• hws_std</li> <li>• hws_trace</li> </ul> <p>これ以外のフォーマットを指定する場合は、任意のフォーマットを指定してください。フォーマットで指定した内容が、httpsd.conf (HTTP Server 定義ファイル) の CustomLog ディレクティブの引数に設定されます。</p> <p>フォーマットの指定内容の詳細については、マニュアル「HTTP Server」の CustomLog ディレクティブに関する説明を参照してください。</p>	任意の文字列を 1024 文字以内で指定します。	hws_std	07-50
HttpsCustomMethod	<p>アクセスログの出力方式として、次のどれかを指定します。</p> <p>Off :</p> <p>httpsd.conf (HTTP Server 定義ファイル) の設定を変更しません。</p> <p>httpsd.conf を編集していない場合、省略値が設定されます。</p> <p>On :</p> <p>単調増加でログを出力します。</p> <p>Div :</p> <p>一定時間単位にログを分割して出力します。</p> <p>Wrap :</p> <p>ファイルサイズでログを分割してラップアラウンドに出力します。</p>	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Off</li> <li>• On</li> <li>• Div</li> <li>• Wrap</li> </ul>	Div	07-50
HttpsErrorLogFileDir	Web サーバの出力するエラーログの出力先ディレクトリを指定します。	任意の文字列を指定します。	logs	07-50
HttpsErrorMethod	<p>エラーログの出力方式として、次のどれかを指定します。</p> <p>Off :</p> <p>httpsd.conf (HTTP Server 定義ファイル) の設定を変更しません。httpsd.conf を編集していない場合、「Wrap」が設定されます。</p> <p>On :</p> <p>単調増加でログを出力します。</p> <p>Div :</p> <p>一定時間単位にログを分割して出力します。</p>	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Off</li> <li>• On</li> <li>• Div</li> <li>• Wrap</li> </ul>	Div	07-50

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
HttpsdErrorMethod	Wrap : ファイルサイズでログを分割してラップアラウンドに出力します。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Off</li> <li>• On</li> <li>• Div</li> <li>• Wrap</li> </ul>	Div	07-50
HttpsdLogFileDir	Web サーバの出力するログの出力先ディレクトリを指定します。	任意の文字列を指定します。	logs	06-50 07-50
HttpsdRequestLogFileDir	Web サーバの出力するリクエストログの出力先ディレクトリを指定します。	任意の文字列を指定します。	logs	07-50
HttpsdRequestMethod	リクエストログの出力方式として、次のどれかを指定します。 Off : httpsd.conf (HTTP Server 定義ファイル) の設定を変更しません。httpsd.conf を編集していない場合、省略値が設定されます。 On : 単調増加でログを出力します。 Div : 一定時間単位にログを分割して出力します。 Wrap : ファイルサイズでログを分割してラップアラウンドに出力します。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Off</li> <li>• On</li> <li>• Div</li> <li>• Wrap</li> </ul>	Div	07-50
HWSRequestIoFilter	HWSRequestLogLevel で「on」を設定したときに有効になります。 モジュールが実装している入出力フィルタ関数の、実行契機を示す I/O フィルタトレースを出力する場合に指定します。出力量が多いため、実運用での指定は推奨しません。 次のどちらかを指定します。 true : 出力します。 false : 出力しません。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50
HWSRequestLogLevel	リクエストログに出力するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。 on : 出力します。 none : 出力しません。	指定できる文字列を次に示します。なお、大文字と小文字は区別されません。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• on</li> <li>• none</li> </ul>	On	07-50

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
HWSRequestLogLevel	<p>また、このパラメタで「on」を設定した場合、次に示すパラメタの設定が有効になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• HWSRequestIofilter</li> <li>• HWSRequestModuleDebug</li> <li>• HWSRequestModuleInfo</li> <li>• HWSRequestRequest</li> </ul> <p>デフォルトでは、次に示すパラメタが出力されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• HWSRequestModuleInfo</li> <li>• HWSRequestRequest</li> </ul>	<p>指定できる文字列を次に示します。なお、大文字と小文字は区別されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• on</li> <li>• none</li> </ul>	On	07-50
HWSRequestModuleDebug	<p>HWSRequestLogLevel で「on」を設定したときに有効になります。</p> <p>内部モジュールに対するモジュールトレースと、外部モジュール相当のトレースを出力する場合に指定します。出力量が多いため、実運用での指定は推奨しません。</p> <p>次のどちらかを指定します。</p> <p>true :</p> <p>出力します。</p> <p>false :</p> <p>出力しません。</p>	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50
HWSRequestModuleInfo	<p>HWSRequestLogLevel で「on」を設定したときに有効になります。</p> <p>外部モジュールに対するモジュールトレースを出力する場合に指定します。</p> <p>次のどちらかを指定します。</p> <p>true :</p> <p>出力します。</p> <p>false :</p> <p>出力しません。</p>	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	07-50
HWSRequestRequest	<p>HWSRequestLogLevel で「on」を設定したときに有効になります。</p> <p>次の場合に指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• コネクション確立後とレスポンス完了後にトレースを出力したい場合</li> <li>• KeepAlive 接続の場合に、次のリクエストライン受信後もトレースを出力したい場合</li> </ul> <p>次のどちらかを指定します。</p> <p>true :</p> <p>出力します。</p> <p>false :</p> <p>出力しません。</p>	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	07-50

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
RequestDivideFileNum	<p>HttpsRequestMethod で「Div」を設定したときに有効になります。</p> <p>分割したログファイルのファイル数を 0~256 の範囲で指定します。分割したファイル数がここで指定した数を超えた場合、最も古いファイルから削除されます。0 を指定した場合、ファイルは削除されません。</p>	0~256 の整数で指定します。	8	07-50
RequestDivideTimeDifference	<p>HttpsRequestMethod で「Div」を設定したときに有効になります。</p> <p>ログファイルを分割する基準となる時間（単位：分）を、GMT に対する差として-1439~1439 の範囲で指定します。0 を指定すると、1970 年 1 月 1 日 0 時 0 分 0 秒（GMT）が基準時間となります。</p>	-1439~1439 の整数で指定します。	540	07-50
RequestDivideTimeInterval	<p>HttpsRequestMethod で「Div」を設定したときに有効になります。</p> <p>一つのログファイルで採取する時間間隔を 1~31536000 の範囲で指定します。</p>	1~31536000 の整数で指定します。	86400	07-50
RequestWraparoundFileNum	<p>HttpsRequestMethod で「Wrap」を設定したときに有効になります。</p> <p>出力するログファイルの最大数を 1~256 の範囲で指定します。</p> <p>ログファイルのサイズが RequestWraparoundFilesize で指定したサイズを超えた場合、ログの出力先は次のログファイルに移ります。このとき、すでにこのパラメタに指定した最大数と同じ数のログファイルが作成されていた場合、「.001」という名称がついているファイルから再度使用されます。</p>	1~256 の整数で指定します。	5	07-50
RequestWraparoundFilesize	<p>HttpsRequestMethod で「Wrap」を設定したときに有効になります。</p> <p>ログファイルの最大サイズ（単位：キロバイト）を 1~2097151 の範囲で指定します。</p> <p>ログを出力するときに、ログファイルのサイズがこのパラメタで指定した最大サイズを超えた場合、ログの出力先は次のログファイルに移ります。このとき、移動先のログファイルの内容はクリアされます。</p>	1~2097151 の整数で指定します。	8192	07-50

## 4.14 論理 J2EE サーバで指定できるパラメタ

ここでは、論理 J2EE サーバで指定できるパラメタについて説明します。

論理 J2EE サーバでは、J2EE サーバとバッチサーバのどちらを使用するかで指定できるパラメタが異なります。指定できるパラメタとパラメタの参照先について、サーバごとに次の表に示します。

表 4-10 使用するサーバと指定するパラメタの参照先の対応

使用するサーバ	指定するパラメタ
J2EE サーバ	J2EE サーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタ (4.14.1 参照)
	J2EE サーバ用オプション定義を設定するパラメタ (4.14.2 参照)
	J2EE サーバの JavaVM のシステムプロパティに設定できるパラメタ (4.14.3 参照)
	J2EE サーバの拡張パラメタ (4.14.4 参照)
	統合ユーザ管理の使用を設定するパラメタ (4.14.13 参照)
バッチサーバ	バッチサーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタ (4.14.5 参照)
	バッチサーバ用オプション定義を設定するパラメタ (4.14.6 参照)
	バッチサーバの JavaVM のシステムプロパティに設定できるパラメタ (4.14.7 参照)
	バッチサーバの拡張パラメタ (4.14.8 参照)
J2EE サーバとバッチサーバ	運用監視エージェントプロパティを設定するパラメタ (4.14.9 参照)
	Management イベント発行用プロパティを設定するパラメタ (4.14.10 参照)
	JP1 連携を設定するパラメタ (4.14.11 参照)
	SecurityManager の使用を設定するパラメタ (4.14.12 参照)
	JavaVM の起動パラメタで使用するファイルを設定するパラメタ (4.14.14 参照)

### 4.14.1 J2EE サーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタ

J2EE サーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタについて説明します。

「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4 usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル)」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

なお、「param-value の指定内容」が記載されているパラメタは、usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル) と指定方法が異なるパラメタです。

#### (1) cosminexus.jpa から始まるパラメタ

cosminexus.jpa から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(a) cosminexus.jpa から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-11 cosminexus.jpa から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
cosminexus.jpa.logging.level.operation.<category>	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Off</li> <li>• Information</li> <li>• Detail</li> </ul>	Off	08-00
cosminexus.jpa.exception.logging.sql	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Off</li> <li>• Information</li> <li>• Detail</li> </ul>	Off	08-00

## (2) ejbserver.application から始まるパラメタ

ejbserver.application から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(b) ejbserver.application から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-12 ejbserver.application から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.application.InitTermProcessClasses* <sup>1</sup>	任意の文字列を指定します。	なし	06-50
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.appname	次に示す文字列を使って 0~16 バイトの半角文字セットで指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 英数字</li> <li>• ピリオド 「.」</li> <li>• ドル 「\$」</li> <li>• アンダースコア 「_」</li> <li>• ストローク 「 」</li> <li>• コロン 「:」</li> <li>• アンパサンド 「&amp;」</li> <li>• 単価記号 「@」</li> <li>• シャープ 「#」</li> <li>• パーセント 「%」</li> <li>• ハイフン 「-」</li> </ul>	user_app	06-50 07-00
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.count	【CJMessageFileHandler を使用した場合】 2~16 【CJMPMessageFileHandler を使用した場合】 2~64	2	06-50 07-00
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.encoding	次に示す文字列を使って 0~1024 バイトで指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 英数字</li> <li>• プラス 「+」</li> <li>• コロン 「:」</li> </ul>	なし	06-50 07-00



param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.encoding	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ピリオド 「.」</li> <li>• アンダースコア 「_」</li> <li>• ハイフン 「-」</li> </ul>	なし	06-50 07-00
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.filter	<p>次に示す文字を使って 0~4096 バイトのクラス文字セットで指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 英数字</li> <li>• ピリオド 「.」</li> <li>• ドル 「\$」</li> <li>• アンダースコア 「_」</li> </ul>	なし	06-50 07-00
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.formatter	<p>次に示す文字を使って 0~4096 バイトのクラス文字セットで指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 英数字</li> <li>• ピリオド 「.」</li> <li>• ドル 「\$」</li> <li>• アンダースコア 「_」</li> </ul>	なし	06-50 07-00
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.level	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• OFF</li> <li>• SEVERE</li> <li>• WARNING</li> <li>• INFO</li> <li>• CONFIG</li> <li>• FINE</li> <li>• FINER</li> <li>• FINEST</li> <li>• ALL</li> </ul>	SEVERE	06-50 07-00
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.limit	<p>【CJMessageFileHandler を使用した場合】 8192~2147483647</p> <p>【CJMPMessageFileHandler を使用した場合】 8192~16777216</p>	1048576	06-50 07-00 07-50
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.msgid	<p>次に示す文字を使って 0~21 バイトの半角文字セットで指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 英数字</li> <li>• ピリオド 「.」</li> <li>• ドル 「\$」</li> <li>• アンダースコア 「_」</li> <li>• ストローク 「 」</li> <li>• コロン 「:」</li> <li>• アンパサンド 「&amp;」</li> <li>• 単価記号 「@」</li> <li>• シャープ 「#」</li> </ul>	0001	06-50 07-00

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.msgid	<ul style="list-style-type: none"> <li>パーセント [%]</li> <li>ハイフン [-]</li> </ul>	0001	06-50 07-00
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.path	任意の文字列を 1~255 バイトの範囲で指定します。	user_log	06-50
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.separator	<p>次に示す文字を使って 0~1024 バイトの半角文字セットで指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>英数字</li> <li>ピリオド [.]</li> <li>ドル [\$]</li> <li>アンダースコア [_]</li> <li>ストローク [ ]</li> <li>コロンの [:]</li> <li>アンパサンド [&amp;]</li> <li>単価記号 [@]</li> <li>シャープ [#]</li> <li>パーセント [%]</li> <li>ハイフン [-]</li> </ul>	ストローク [ ]	06-50 07-00
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.filter	<p>次に示す文字を使って 0~4096 バイトのクラス文字セットで指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>英数字</li> <li>ピリオド [.]</li> <li>ドル [\$]</li> <li>アンダースコア [_]</li> </ul>	なし	06-50 07-00
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.handlers <sup>※1</sup>	<p>英数字で始まる 1~1024 バイトのクラス文字セットで指定します。</p> <p>また、複数指定する場合はコンマ [,] で区切って指定します。</p>	なし	06-50 07-00
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.level	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>OFF</li> <li>SEVERE</li> <li>WARNING</li> <li>INFO</li> <li>CONFIG</li> <li>FINE</li> <li>FINER</li> <li>FINEST</li> <li>ALL</li> <li>null</li> </ul>	SEVERE	06-50

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.useParentHandlers	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50
ejbserver.application.userlog.loggers <sup>*1</sup>	1024 文字以内のクラスパスを指定します。 複数指定する場合は、コンマ「,」で区切ります。 クラスパスに指定できる文字を示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 英数字</li> <li>• ドル「\$」</li> <li>• アンダースコア「_」</li> <li>• ピリオド「.」</li> </ul> ただし、先頭が英数字で始まる必要があります。	なし	06-50 07-00
ejbserver.application.userlog.module.handlers. <sup>*1*2</sup>	ハンドラの名称一覧を指定します。 複数指定する場合は、コンマ「,」で区切ります。	なし	06-50 07-00

## 注※1

param-value に値を複数指定する際は、コンマ「,」で区切って指定します。

(例)

<param-value>値 1,値 2,値 3</param-value>

## 注※2

このパラメタからハンドラ名を削除する場合は、関連するパラメタ

(ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<削除するハンドラ名称>.XXX) も削除してください。

なお、このパラメタに対応するキーは「2.4(5)(b).ejbserver.application から始まるキー」にはありません。

### (3) ejbserver.client から始まるパラメタ

ejbserver.client から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(c).ejbserver.client から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-13 ejbserver.client から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.client.ctm.RequestPriority	1～8 の整数で指定します。	4	06-50 07-10

### (4) ejbserver.commonj から始まるパラメタ

ejbserver.commonj から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(d).ejbserver.commonj から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-14 ejbserver.commonj から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.commonj.WorkManager.non_daemon_work_threads	1～65535 の整数で指定します。	10	08-50

## (5) ejbserver.compiler から始まるパラメタ

ejbserver.compiler から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-15 ejbserver.compiler から始まるパラメタ

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.compiler.jvm.maxHeapSize*	J2EE アプリケーション開始時に起動される javac コマンドのヒープサイズの最大サイズを指定します。 ejbserver.compiler.jvm.minHeapSize ≤ ejbserver.compiler.jvm.maxHeapSize の関係が成り立つ値を設定してください。 このパラメタは 09-00-01 以前で有効です。09-00-02 以降は指定しても無視されます。	1~4095 の整数で指定します。	256	06-50 07-00
ejbserver.compiler.jvm.minHeapSize*	J2EE アプリケーション開始時に起動される javac コマンドのヒープサイズの初期サイズを 1~4095 の範囲 (単位:メガバイト) で指定します。 ejbserver.compiler.jvm.minHeapSize ≤ ejbserver.compiler.jvm.maxHeapSize の関係が成り立つ値を設定してください。 このパラメタは 09-00-01 以前で有効です。09-00-02 以降は指定しても無視されます。	1~4095 の整数で指定します。	32	06-50 07-00

注※

メガバイト単位で指定する場合に、文字「m」または「M」は不要です。

また、文字「k」または「K」を付けてキロバイト単位で指定することはできません。

## (6) ejbserver.connectionpool から始まるパラメタ

ejbserver.connectionpool から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(f) ejbserver.connectionpool から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-16 ejbserver.connectionpool から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.connectionpool.association.enabled	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	07-50
ejbserver.connectionpool.validation.timeout	1~2147483647 の整数で指定します。	5	08-00

## (7) ejbserver.connector から始まるパラメタ

ejbserver.connector から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(g) ejbserver.connector から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-17 ejbserver.connector から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.connector.logwriter.filename	1～16 の整数で指定します。	4	06-50 07-00
ejbserver.connector.logwriter.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	2097152	06-50 07-00

## (8) ejbserver.container から始まるパラメタ

ejbserver.container から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(h) ejbserver.container から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-18 ejbserver.container から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.container.audit_trail.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-60
ejbserver.container.passivate.scan_interval	0～2147483（単位：秒）の整数で指定します。	0	06-50
ejbserver.container.remove.scan_interval	0～153722867280912（単位：分）の整数で指定します。	5	06-50

## (9) ejbserver.ctm から始まるパラメタ

ejbserver.ctm から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(i) ejbserver.ctm から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-19 ejbserver.ctm から始まるキーパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.ctm.ActivateTimeOut	0～2147483647（単位：秒）の整数で指定します。	180	06-50 07-10
ejbserver.ctm.CTMID	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「ctm」または「CTM」で始まらない、英数字、アンダースコア「_」およびピリオド「.」で指定した 31 文字以内の文字列</li> <li>• IP アドレス</li> </ul>	ctm-tier : <使用する CTM の IP アドレスのピリオドをアンダースコア「_」に置き換えたもの><使用する CTM のポート番号>	07-50

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.ctm.CTMID	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>「ctm」または「CTM」で始まらない、英数字、アンダースコア「_」およびピリオド「.」で指定した 31 文字以内の文字列</li> <li>IP アドレス</li> </ul>	それ以外： <IP アドレス>	07-50
ejbserver.ctm.DeactivateTimeOut	0～2147483647（単位：秒）の整数で指定します。	180	06-50 07-10
ejbserver.ctm.QueueLength	1～32767 の整数で指定します。	なし	06-50 07-10
ejbserver.ctm.useGlobalJNDI	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>true</li> <li>false</li> </ul>	false	09-00

## (10) ejbserver.deploy から始まるパラメタ

ejbserver.deploy から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(j) ejbserver.deploy から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-20 ejbserver.deploy から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.deploy.annotations.load_libjars.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>true</li> <li>false</li> </ul>	true	09-50
ejbserver.deploy.annotations.load_check.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>true</li> <li>false</li> </ul>	false	08-00
ejbserver.deploy.context.check_interval	0～2147483647（単位：秒）の整数で指定します。	0	07-00
ejbserver.deploy.context.reload_scope	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>app</li> <li>jsp</li> <li>none</li> <li>web</li> </ul>	app	07-00
ejbserver.deploy.context.update_interval	0～2147483647（単位：秒）の整数で指定します。	0	07-00
ejbserver.deploy.resourcefile.scrabble.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>true</li> <li>false</li> </ul>	false	06-50

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.deploy.session.work.directory	任意の文字列を指定します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &amp;{cosminexus.home}¥CC¥server¥repository¥&amp;{server.name}</li> <li>UNIX の場合 &amp;{cosminexus.home}/C/server/repository/&amp;{server.name}</li> </ul>	07-00

### (11).ejbserver.distributedtx から始まるパラメタ

ejbserver.distributedtx から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(k).ejbserver.distributedtx から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-21.ejbserver.distributedtx から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.distributedtx.ots.recoverFailMessageCount	0~2147483647 の整数で指定します。	0	09-00
ejbserver.distributedtx.ots.status.directory1	任意の文字列を 200 文字以内で指定します。	otsstatus	06-70
ejbserver.distributedtx.ots.status.directory2	任意の文字列を 200 文字以内で指定します。	なし	06-70
ejbserver.distributedtx.recovery.port	1~65535 の整数で指定します。	20302	06-50 07-00
ejbserver.distributedtx.rollbackClientTxOnSystemException	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>true</li> </ul>	false	06-50

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.distributedtx.rollbackClientTxOnSystemException	<ul style="list-style-type: none"> <li>• false</li> </ul>	false	06-50
ejbserver.distributedtx.XATransaction.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50

## (12) ejbserver.DynamicStubLoading から始まるパラメタ

ejbserver.DynamicStubLoading から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(l) ejbserver.DynamicStubLoading から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-22 ejbserver.DynamicStubLoading から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.DynamicStubLoading.Enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50

## (13) ejbserver.ejb から始まるパラメタ

ejbserver.ejb から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(m) ejbserver.ejb から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-23 ejbserver.ejb から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.ejb.timerservice.maxCallbackThreads	1～100 の整数で指定します。	1	07-00
ejbserver.ejb.timerservice.retryCount	0～2147483646 の整数で指定します。	1	07-00
ejbserver.ejb.timerservice.retryInterval	1～604800（単位：秒）の整数で指定します。	5	07-00

## (14) ejbserver.ext から始まるパラメタ

ejbserver.ext から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(n) ejbserver.ext から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-24 ejbserver.ext から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.ext.method_observation_interval	0～86400（単位：秒）の整数で指定します。	0	06-50



## (15) ejbserver.http から始まるパラメタ

ejbserver.http から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(o) ejbserver.http から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-25 ejbserver.http から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.http.port	1～65535 の整数で指定します。	8080	07-50

## (16) ejbserver.instrumentation から始まるパラメタ

ejbserver.instrumentation から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(p) ejbserver.instrumentation から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-26 ejbserver.instrumentation から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.instrumentation.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50 07-00

## (17) ejbserver.jca から始まるパラメタ

ejbserver.jca から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(q) ejbserver.jca から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-27 ejbserver.jca から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.jca.adapter.tp1.bind_host	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• IPv4 アドレス</li> <li>• ホスト名</li> </ul>	システムによって自動的に選択された有効なローカルアドレス	08-50

## (18) ejbserver.jdbc から始まるパラメタ

ejbserver.jdbc から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 互換編」の「2.11.1(1) ejbserver.jdbc から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-28 ejbserver.jdbc から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.jdbc.propertyInfo.BUF_SIZE	1～16000 の整数で指定します。	なし	06-50
ejbserver.jdbc.propertyInfo.ENCODELANG	任意の文字列を指定します。	なし	06-50

## (19) ejbserver.jndi から始まるパラメタ

ejbserver.jndi から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(r) ejbserver.jndi から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-29 ejbserver.jndi から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.jndi.cache	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• on</li> <li>• off</li> </ul>	on	06-50
ejbserver.jndi.cache.interval	0～2147483647（単位：秒）の整数で指定します。	0	06-50
ejbserver.jndi.cache.interval.clear.option	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• refresh</li> <li>• check</li> </ul>	refresh	06-50
ejbserver.jndi.global.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	09-00
ejbserver.jndi.namingservice.group.<Specify group name>.providerurls	次の順に並ぶ文字列を指定します。 「corbaname::」「英数字 1～255 文字、または @myhost」「:」「0～65535 の数字」が 1 回以上「;」区切りで繰り返される文字列を指定します。	なし	07-50
ejbserver.jndi.namingservice.group.list	論理ネーミングサービスのグループをセミコロン「;」で区切って指定します。 論理ネーミングサービスのグループは、30 文字以内の英数字またはアンダースコア「_」で構成されます。	なし	07-50
ejbserver.jndi.request.timeout	0～86400（単位：秒）の整数で指定します。	0	06-50

## (20) ejbserver.jpa から始まるパラメタ

ejbserver.jpa から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(s) ejbserver.jpa から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-30 ejbserver.jpa から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.jpa.defaultJtaDsName	任意の文字列を指定します。	なし	08-00
ejbserver.jpa.defaultNonJtaDsName	任意の文字列を指定します。	なし	08-00
ejbserver.jpa.defaultProviderClassName	任意の文字列を指定します。	com.hitachi.software.jpa.PersistenceProvider	08-00
ejbserver.jpa.disable	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-50
ejbserver.jpa.overrideJtaDsName	任意の文字列を指定します。	なし	08-00
ejbserver.jpa.overrideNonJtaDsName	任意の文字列を指定します。	なし	08-00
ejbserver.jpa.overrideProvider	任意の文字列を指定します。	なし	08-00
ejbserver.jpa.emfprop.<property key>	任意の文字列を指定します。	なし	08-00

## (21) ejbserver.jta から始まるパラメタ

ejbserver.jta から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(t) ejbserver.jta から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-31 ejbserver.jta から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.jta.TransactionManager.defaultTimeOut	1～2147483647（単位：秒）の整数で指定します。	180	06-50

## (22) ejbserver.logger から始まるパラメタ

ejbserver.logger から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(u) ejbserver.logger から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-32 ejbserver.logger から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.logger.channels.define.ConnectionPoolWatchLogFile.filename	1～16 の整数で指定します。	2	07-50

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.logger.channels.define.ConnectionPoolWatchLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	07-50
ejbserver.logger.channels.define.ConsoleLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	07-50
ejbserver.logger.channels.define.ConsoleLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	07-50
ejbserver.logger.channels.define.DevelopmentLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	4	09-50
ejbserver.logger.channels.define.DevelopmentLogFile.filesize	4096～2147483647の整数で指定します。	1048576	09-50
ejbserver.logger.DevelopmentLogFile.level	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• OFF（出力しない）</li> <li>• SEVERE</li> <li>• WARNING</li> <li>• INFO</li> <li>• CONFIG</li> <li>• FINE</li> <li>• FINER</li> <li>• FINEST</li> <li>• ALL（すべて出力）</li> </ul>	OFF	09-50
ejbserver.logger.channels.define.EJBContainerLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	07-50
ejbserver.logger.channels.define.EJBContainerLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	07-50
ejbserver.logger.channels.define.ExceptionLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	07-50
ejbserver.logger.channels.define.ExceptionLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	07-50
ejbserver.logger.channels.define.FileDescriptorWatchLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	07-50
ejbserver.logger.channels.define.FileDescriptorWatchLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	07-50
ejbserver.logger.channels.define.HttpSessionWatchLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	07-50
ejbserver.logger.channels.define.HttpSessionWatchLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	07-50
ejbserver.logger.channels.define.JPAOperationLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	08-00

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.logger.channels.define.JPAOperationLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	08-00
ejbserver.logger.channels.define.JPAMaintenanceLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	08-00
ejbserver.logger.channels.define.JPAMaintenanceLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	08-00
ejbserver.logger.channels.define.MaintenanceLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	4	07-50
ejbserver.logger.channels.define.MaintenanceLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	16777216	07-50
ejbserver.logger.channels.define.MemoryWatchLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	07-50
ejbserver.logger.channels.define.MemoryWatchLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	07-50
ejbserver.logger.channels.define.MessageLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	07-50
ejbserver.logger.channels.define.MessageLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	07-50
ejbserver.logger.channels.define.RequestQueueWatchLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	07-50
ejbserver.logger.channels.define.RequestQueueWatchLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	07-50
ejbserver.logger.channels.define.ThreadDumpWatchLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	07-50
ejbserver.logger.channels.define.ThreadDumpWatchLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	07-50
ejbserver.logger.channels.define.ThreadWatchLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	07-50
ejbserver.logger.channels.define.ThreadWatchLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	07-50
ejbserver.logger.channels.define.UserErrLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	07-50
ejbserver.logger.channels.define.UserErrLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	07-50
ejbserver.logger.channels.define.UserOutLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	07-50
ejbserver.logger.channels.define.UserOutLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	07-50

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.logger.channels.define.WebAccessLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	16	07-50
ejbserver.logger.channels.define.WebAccessLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	4194304	07-50
ejbserver.logger.channels.define.WebContainerLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	2	07-50
ejbserver.logger.channels.define.WebContainerLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	1048576	07-50
ejbserver.logger.channels.define.WebServletLogFile.fileenum	1～16の整数で指定します。	4	07-50
ejbserver.logger.channels.define.WebServletLogFile.filesize	4096～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	4194304	07-50
ejbserver.logger.enabled.*	次に示す文字列をコンマ「,」で区切って指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Error</li> <li>• Warning</li> <li>• Information</li> <li>• Debug</li> </ul>	Error, Warning	07-50
ejbserver.logger.rotationTime	HHMMSSの形式で指定します。	なし	09-50
ejbserver.logger.rotationStyle	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• SHIFT</li> <li>• WRAP</li> </ul>	WRAP	09-50
ejbserver.logger.systemlog.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50

### (23) ejbserver.management から始まるパラメタ

ejbserver.management から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(v) ejbserver.management から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-33 ejbserver.management から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.management.JVM.stats_monitor.FullGCCCount.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	07-00
ejbserver.management.JVM.stats_monitor.FullGCCCount.interval	1～2147483647（単位：秒）の整数で指定します。	600	07-00
ejbserver.management.JVM.stats_monitor.FullGCCCount.threshold	1～2147483647の整数で指定します。	10	07-00

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.management.statistics.interval	1～86400（単位：秒）の整数で指定します。	60	07-00
ejbserver.management.stats_file.base_time	0～1439（単位：分）の整数で指定します。	0	07-00
ejbserver.management.stats_file.dir	任意の文字列を指定します。	【Windows の場合】 <製品の作業ディレクトリ>¥ejb ¥<サーバ名称>¥stats 【UNIX の場合】 <製品の作業ディレクトリ>/ejb/<サーバ名称>/stats	07-00
ejbserver.management.stats_file.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	07-00
ejbserver.management.stats_file.num	2～168 の整数で指定します。	7	07-00
ejbserver.management.stats_file.period	1～744（単位：時）の整数で指定します。	24	07-00
ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.waiting_request_count.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	09-00
ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.waiting_request_count.high_threshold	1～100（単位：%）の整数で指定します。	80	09-00
ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.waiting_request_count.low_threshold	0～99（単位：%）の整数で指定します。	0	09-00
ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.whole_waiting_request_count.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	09-00
ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.whole_waiting_request_count.high_threshold	1～100（単位：%）の整数で指定します。	80	09-00

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.management.webcontainer.stats_monitor.whole_waiting_request_count.low_threshold	0~99 (単位: %) の整数で指定します。	0	09-00

## (24) ejbserver.manager から始まるパラメタ

ejbserver.manager から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(w) ejbserver.manager から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-34 ejbserver.manager から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.conf	任意の文字列を指定します。	<Application Server のインストールディレクトリ>manager/config/manager.<実サーバ名>.properties	07-50
ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50
ejbserver.manager.agent.MEventAgent.conf	任意の文字列を指定します。	<Application Server のインストールディレクトリ>manager/config/mevent.<実サーバ名>.properties	07-50
ejbserver.manager.agent.MEventAgent.enabled	指定できる文字列を次に示します <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50 07-00

## (25) ejbserver.naming から始まるパラメタ

ejbserver.naming から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(x) ejbserver.naming から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。



表 4-35 ejbserver.naming から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.naming.host	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名</li> <li>• IPv4 アドレス</li> <li>• @myhost</li> </ul>	J2EE サーバと同じホスト	07-50
ejbserver.naming.port <sup>※1</sup>	1～65535 の整数で指定します。	900	07-50
ejbserver.naming.startupMode <sup>※2</sup>	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• manual</li> <li>• inprocess</li> </ul>	inprocess	07-50
ejbserver.naming.startupRetryCount <sup>※1</sup>	0～2147483647 の整数で指定します。	9	07-50
ejbserver.naming.startupWaitTime <sup>※1</sup>	0～2147483647 (単位: 秒) の整数で指定します。	1	07-50

注※1

ejbserver.naming.startupMode に「inprocess」以外を指定した場合、指定は無視されます。

注※2

「automatic」は指定できません。

## (26) ejbserver.rmi から始まるパラメタ

ejbserver.rmi から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(y) ejbserver.rmi から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-36 ejbserver.rmi から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.rmi.localinvocation.scope	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• none</li> <li>• app</li> <li>• all</li> </ul>	app	06-50
ejbserver.rmi.naming.host	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名</li> <li>• IPv4 アドレス</li> <li>• @myhost</li> </ul>	なし	07-50
ejbserver.rmi.naming.port	1～65535 の整数で指定します。	23152	07-00
ejbserver.rmi.passbyreference	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50
ejbserver.rmi.remote.listener.port	0～65535 の整数で指定します。	0	07-00

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.rmi.request.timeout	0～86400（単位：秒）の整数で指定します。	0	06-50 07-00

## (27) ejbserver.server から始まるパラメタ

ejbserver.server から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(z) ejbserver.server から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-37 ejbserver.server から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.server.j2ee.feature	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 1.3basic</li> <li>• 1.4</li> </ul>	1.4	06-50 07-00
ejbserver.server.prf.PRFID	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「ctm」, 「CTM」, 「tsc」, および 「TSC」 で始まらない、英数字およびアンダースコア 「_」 で指定した 31 文字以内の文字列</li> <li>• CTMDOMAIN</li> </ul>	<使用する PRF の PRF 識別子 >	07-50
ejbserver.server.threaddump.filename	1～2147483647 の整数で指定します。	256	06-50
ejbserver.server.eheap.httpsession.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	08-00
ejbserver.server.eheap.ajp13.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	08-00

## (28) ejbserver.stateful から始まるパラメタ

ejbserver.stateful から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(aa) ejbserver.stateful から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-38 ejbserver.stateful から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.stateful.passivate.switch	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50

## (29) ejbserver.stdoutlog から始まるパラメタ

ejbserver.stdoutlog から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(ab) ejbserver.stdoutlog から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-39 ejbserver.stdoutlog から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.stdoutlog.autoflush	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-00

## (30) ejbserver.watch から始まるパラメタ

ejbserver.watch から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(ac) ejbserver.watch から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-40 ejbserver.watch から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.watch.defaultRequestQueue.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50
ejbserver.watch.defaultRequestQueue.interval	1～2147483647（単位：秒）の整数で指定します。	30	06-50
ejbserver.watch.defaultRequestQueue.threshold	1～100（単位：%）の整数で指定します。	80	06-50
ejbserver.watch.defaultRequestQueue.writefile.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50
ejbserver.watch.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50
ejbserver.watch.fileDescriptor.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50
ejbserver.watch.fileDescriptor.interval	1～2147483647（単位：秒）の整数で指定します。	60	06-50
ejbserver.watch.fileDescriptor.threshold	1～2147483647 の整数で指定します。	2147483647	06-50
ejbserver.watch.fileDescriptor.writefile.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> </ul>	true	06-50

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.watch.fileDescriptor.writefile.enabled	<ul style="list-style-type: none"> <li>• false</li> </ul>	true	06-50
ejbserver.watch.memory.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50
ejbserver.watch.memory.interval	1～2147483647（単位：秒）の整数で指定します。	60	06-50
ejbserver.watch.memory.threshold	1～100（単位：%）の整数で指定します。	80	06-50
ejbserver.watch.memory.writefile.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50
ejbserver.watch.thread.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50
ejbserver.watch.thread.interval	1～2147483647（単位：秒）の整数で指定します。	60	06-50
ejbserver.watch.thread.threshold	1～2147483647の整数で指定します。	2147483647	06-50
ejbserver.watch.thread.writefile.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50
ejbserver.watch.threaddump.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50
ejbserver.watch.threaddump.interval	1～2147483647（単位：秒）の整数で指定します。	30	06-50
ejbserver.watch.threaddump.threshold	1～100（単位：%）の整数で指定します。	80	06-50
ejbserver.watch.threaddump.writefile.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50

### (31) ejbserver.webj2ee から始まるパラメタ

ejbserver.webj2ee から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(ad) ejbserver.webj2ee から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-41 ejbserver.webj2ee から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.webj2ee.connectionAutoClose.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50 07-00

## (32) https から始まるパラメタ

指定できるキーについて次の表に示します。https から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(ae) https から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
https.cipherSuites	※	※	09-50
https.protocols	※	※	09-50

注※

キーの詳細については、JDK のドキュメントを参照してください。

## (33) java から始まるパラメタ

java から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(af) java から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-42 java から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
java.naming.factory.initial	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• com.hitachi.software.ejb.jndi.InsContextFactory</li> <li>• com.hitachi.software.ejb.jndi.GroupContextFactory</li> </ul>	com.hitachi.software.ejb.jndi.InsContextFactory	06-50

## (34) vbj から始まるパラメタ

vbj から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-43 vbj から始まるパラメタ

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
vbj.java2iop.jvm.maxHeapSize*	J2EE アプリケーション開始時に起動される java2iop コマンドのヒープサイズの最大サイズを指定します。 vbj.java2iop.jvm.minHeapSize ≤ vbj.java2iop.jvm.maxHeapSize の関係が成り立つ値を設定してください。	1～4095 の整数で指定します。	128	06-50 07-00

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
vbj.java2iiop.jvm.minHeapSize*	J2EE アプリケーション開始時に起動される java2iiop コマンドのヒープサイズの初期サイズを 1~4095 の範囲（単位：メガバイト）で指定します。 vbj.java2iiop.jvm.minHeapSize ≤ vbj.java2iiop.jvm.maxHeapSize の関係が成り立つ値を設定してください。	1~4095 の整数で指定します。	16	06-50 07-00

注※

メガバイト単位で指定する場合に、文字「m」または「M」は不要です。

また、文字「k」または「K」を付けてキロバイト単位で指定することはできません。

### (35) vbroker から始まるパラメタ

vbroker から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(ah) vbroker から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-44 vbroker から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
vbroker.agent.port	1~65535 の整数で指定します。	14000	07-50
vbroker.se.iiop_tp.host	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>IPv4 アドレス</li> <li>ホスト名</li> <li>@myhost</li> </ul>	なし	07-50
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port	0~65535 の整数で指定します。	0	06-50 07-00

### (36) webserver.application から始まるパラメタ

webserver.application から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(ai) webserver.application から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-45 webserver.application から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webserver.application.lower_version	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>2.4</li> <li>2.5</li> </ul>	なし	08-50

### (37) webserver.connector から始まるパラメタ

webserver.connector から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(aj) webserver.connector から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-46 webserver.connector から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webserver.connector.ajp13.backlog	1～2147483647 の整数で指定します。	100	06-50
webserver.connector.ajp13.bind_host	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名</li> <li>• IPv4 アドレス</li> <li>• @myhost</li> </ul>	なし	07-50
webserver.connector.ajp13.max_threads	1～1024 の整数で指定します。	10	06-50
webserver.connector.ajp13.port	1～65535 の整数で指定します。	8007	06-50 07-00
webserver.connector.ajp13.receive_timeout	0～3600（単位：秒）の整数で指定します。	600	06-50 07-00
webserver.connector.ajp13.send_timeout	0～3600（単位：秒）の整数で指定します。	600	07-00
webserver.connector.http.bind_host	次のどれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名</li> <li>• IPv4 アドレス</li> <li>• @myhost</li> </ul>	なし	07-50
webserver.connector.http.permitted_hosts*	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• IPv4 アドレス</li> <li>• ホスト名</li> <li>• アスタリスク「*」</li> </ul>	なし	06-50 07-00
webserver.connector.inprocess_http.backlog	1～2147483647 の整数で指定します。	511	07-50
webserver.connector.inprocess_http.bind_host	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名</li> <li>• IPv4 アドレス</li> <li>• @myhost</li> </ul>	なし	07-50
webserver.connector.inprocess_http.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50
webserver.connector.inprocess_http.enabled_methods	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• GET</li> <li>• HEAD</li> <li>• POST</li> <li>• PUT</li> <li>• DELETE</li> </ul>	GET,HEAD,POST,PUT,DELETE,OPTIONS	07-50

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservers.connector.inprocess_https.enabled_methods	<ul style="list-style-type: none"> <li>• OPTIONS</li> <li>• TRACE</li> <li>• CONNECT</li> <li>• PATCH</li> <li>• LINK</li> <li>• UNLINK</li> <li>• アスタリスク [*]</li> </ul>	GET,HEAD,POST,PUT,DELETE,OPTIONS	07-50
webservers.connector.inprocess_https.error_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.file	ファイル名	なし	07-50
webservers.connector.inprocess_https.error_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.file.content_type	任意の文字列を指定します。	text/html	07-50
webservers.connector.inprocess_https.error_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.redirect_url	任意の文字列を指定します。	なし	07-50
webservers.connector.inprocess_https.error_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.request_url	任意の文字列を指定します。	/*	07-50
webservers.connector.inprocess_https.error_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.status	400~599 の整数で指定します。	なし	07-50
webservers.connector.inprocess_https.error_custom.list	英数字、およびアンダースコア「_」を使って 32 文字以内で指定します。また、複数指定する場合はコンマ「,」で区切って指定します。	なし	07-50
webservers.connector.inprocess_https.gateway.host	次のどれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名</li> <li>• IPv4 アドレス</li> <li>• @myhost</li> </ul>	なし	07-50
webservers.connector.inprocess_https.gateway.https_scheme	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50
webservers.connector.inprocess_https.gateway.port	1~65535 の整数で指定します。	なし	07-50
webservers.connector.inprocess_https.init_threads	1~1024 の整数で指定します。	10	07-50
webservers.connector.inprocess_https.keep_start_threads	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50



param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservice.connector.inprocess_ht tp.limit.max_headers	0～32767 の整数で指定します。	100	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.limit.max_request_body	-1～2147483647（単位：バイト）の整数で指定します。	-1	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.limit.max_request_header	7～65536（単位：バイト）の整数で指定します。	16384	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.limit.max_request_line	指定できる値（単位：バイト）を示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• -1</li> <li>• 7～8190</li> </ul>	8190	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.max_connections	1～1024 の整数で指定します。	100	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.max_execute_threads	1～1024 の整数で指定します。	10	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.max_spare_threads	1～1024 の整数で指定します。	20	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.min_spare_threads	1～1024 の整数で指定します。	5	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.permitted.hosts	次のどれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名</li> <li>• IPv4 アドレス</li> <li>• @myhost</li> <li>• アスタリスク「*」</li> </ul>	*	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.persistent_connection.max_connections	0～1024 の整数で指定します。	100	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.persistent_connection.max_requests	0～2147483647 の整数で指定します。	100	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.persistent_connection.timeout	0～3600（単位：秒）の整数で指定します。	3	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.port	1～65535 の整数で指定します。	80	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.receive_timeout	0～3600（単位：秒）の整数で指定します。	300	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.redirect.<リダイレクト定義名>.file	ファイル名を指定します。	なし	07-50
webservice.connector.inprocess_ht tp.redirect.<リダイレクト定義名>.file.content_type	任意の文字列を指定します。	text/html	07-50

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservice.connector.inprocess_html.redirect.<リダイレクト定義名>.redirect_url	任意の文字列を指定します。	なし	07-50
webservice.connector.inprocess_html.redirect.<リダイレクト定義名>.request_url	任意の文字列を指定します。	なし	07-50
webservice.connector.inprocess_html.redirect.<リダイレクト定義名>.status	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 200</li> <li>• 300</li> <li>• 301</li> <li>• 302</li> <li>• 303</li> <li>• 305</li> <li>• 307</li> </ul>	302	07-50
webservice.connector.inprocess_html.redirect.list	英数字、およびアンダースコア「_」を使って 32 文字以内で指定します。また、複数指定する場合はコンマ「,」で区切って指定します。	なし	07-50
webservice.connector.inprocess_html.rejection_threads	0~1023 の整数で指定します。	1	07-50
webservice.connector.inprocess_html.response.header.server	任意の文字列を指定します。	CosminexusComponentContainer	07-50
webservice.connector.inprocess_html.send_timeout	0~3600 (単位: 秒) の整数で指定します。	300	07-50
webservice.connector.limit.max_parameter_count	-1~2147483647 の整数で指定します。	10000	09-00
webservice.connector.limit.max_post_form_data	-1~2147483647 の整数で指定します。	2097152	08-50
webservice.connector.redirect_https.port	1~65535 の整数で指定します。	なし	06-50 07-00

## 注※

param-value に値を複数指定する際は、コンマ「,」で区切って指定します。

(例)

<param-value>値 1,値 2,値 3</param-value>

## (38) webservice.container から始まるパラメタ

webservice.container から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(ak) webservice.container から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-47 webservice.container から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservice.container.ac.logEnabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50
webservice.container.server_id.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-51
webservice.container.server_id.name	英数字またはアンダースコア「_」を使った 1~64 文字の文字列を指定します。なお、「JSESSIONID」という文字列を指定するとエラーとなります。	空文字（負荷分散機の設定で指定した <cookie-name> の値が自動的に設定されます。）	06-51 07-00 07-50
webservice.container.server_id.value	英数字、およびアンダースコア「_」を使った 1~64 文字の文字列を指定します。	ホスト名と J2EE サーバ名 / Web コンテナサーバ名（互換機能）からハッシュ関数を用いて生成する文字列	06-51 07-10 07-50
webservice.container.thread_control.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50
webservice.container.thread_control.queue_size	0~2147483647 の整数で指定します。	8192	06-50
webservice.container.jaxws.webservice.no_webxml.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• strict</li> <li>• true</li> <li>• lax</li> <li>• none</li> <li>• false</li> </ul>	none	08-00
webservice.container.jaxws.webservice.wsee.no_webxml.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• strict</li> <li>• lax</li> <li>• none</li> </ul>	lax	08-70

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservice.container.jaxws.webservice.wsee.warname	EAR ファイル内の設定用 WAR ファイルの相対パスを指定します。	CosminexusWSEE.war	08-70
webservice.container.servlet.default_mapping.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-00

### (39) webservice.context から始まるパラメタ

webservice.context から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(al) webservice.context から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-48 webservice.context から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservice.context.check_interval	0~2147483647 (単位: 秒) の整数で指定します。	なし	07-00
webservice.context.reload_delay_timeout	-2147483648~2147483647 (単位: 秒) の整数で指定します。	0	07-00
webservice.context.update.interval	0~2147483647 (単位: 秒) の整数で指定します。	なし	07-00

### (40) webservice.eadssfo から始まるキー

webservice.eadssfo から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(an) webservice.eadssfo から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservice.eadssfo.application.cache.name	任意の文字列を指定します。	EADsSFO_APP_INFO	09-50
webservice.eadssfo.check_size.mode	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• on</li> <li>• off</li> </ul>	off	09-50
webservice.eadssfo.client.retry.count	1~2147483647 の範囲の整数で指定します。	2	09-50
webservice.eadssfo.client.retry.interval	1~2147483647 (単位: ミリ秒) の範囲の整数で指定します。	2000	09-50
webservice.eadssfo.eads.client.<接続先 EADs サーバ名>.address	EADs のクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	なし*2	09-50
webservice.eadssfo.eads.client.<接続先 EADs サーバ名>.port	EADs のクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	24600	09-50

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservers.eadssfo.eads.client.node.list	EADsのクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	なし※2	09-50
webservers.eadssfo.eads.connection.buffer.size	EADsのクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	※1	09-50
webservers.eadssfo.eads.connection.retry	EADsのクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	1	09-50
webservers.eadssfo.eads.connection.timeout	EADsのクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	※1	09-50
webservers.eadssfo.eads.connectionPool.pool.size	EADsのクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	※1	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.commDump.enable	EADsのクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	※1	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.commTrace.enable	EADsのクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	true	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.commTrace.file.enum	EADsのクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	※1	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.commTrace.file.size	EADsのクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	※1	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.dir	EADsのクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	\$(ejbserver.log.directory)	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.message.console.enable	EADsのクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	※1	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.message.filename	EADsのクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	※1	09-50
webservers.eadssfo.eads.logger.message.file.size	EADsのクライアント定義の仕様に依存します。詳細については、マニュアル「Elastic Application Data store ユーザーズガイド」を参照してください。	※1	09-50
webservers.eadssfo.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	09-50

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservers.eadssfo.exclude.url_patterns	<ul style="list-style-type: none"> <li>• '/'から始まる正規化した URI</li> <li>• '*.!'から始まる拡張子</li> </ul>	*.txt;*.htm;*.html;*.jpg;*.gif;*.js	09-50
webservers.eadssfo.session.cache.name	任意の文字列を指定します。	EADsSFO_SESSIONS	09-50
webservers.eadssfo.session_read_only.url_patterns	<ul style="list-style-type: none"> <li>• '/'から始まる正規化した URI</li> <li>• '*.!'から始まる拡張子</li> </ul>	なし	09-50

注※1 EADsのクライアント定義のデフォルト値が適用されます。

注※2 省略した場合、KDJE34421-Eメッセージが出力され、EADsセッションフェイルオーバ機能を使用するWebアプリケーションの開始に失敗します。

#### (41) webservers.dbsfo から始まるパラメタ

webservers.dbsfo から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(am) webservers.dbsfo から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-49 webservers.dbsfo から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservers.dbsfo.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-00
webservers.dbsfo.exclude.uris	スラッシュ「/」から始まる文字列で、正規化した URI を指定します。	なし	08-50
webservers.dbsfo.connector.name	任意の文字列を指定します。	COSMINE XUS_SFO_ DBCONN ECTOR	08-00
webservers.dbsfo.attribute_data_size.max	128~10485760の整数で指定します。	1024	08-00
webservers.dbsfo.exclude.extensions	次に示す文字を使って、512文字以内で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 英数字</li> <li>• 括弧「( )」</li> <li>• エクスクラメーション「!」</li> <li>• パーセント「%」</li> <li>• ドル「\$」</li> <li>• アンパサンド「&amp;」</li> <li>• シングルクォート「'」</li> <li>• プラス「+」</li> <li>• ハイフン「-」</li> <li>• イコール「=」</li> </ul>	txt,html,html,jpg,gif,js	08-00

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservice.dbsfo.exclude.extensions	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 単価記号「@」</li> <li>• アンダースコア「_」</li> <li>• チルダ「~」</li> <li>• ピリオド「.」</li> <li>• コンマ「,」</li> </ul> 複数の拡張子を指定する場合、コンマ「,」で区切って指定します。	txt,html,html,jpg,gif,js	08-00
webservice.dbsfo.check_size.mode	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• on</li> <li>• off</li> </ul>	off	08-00
webservice.dbsfo.exception_type_backwardcompat	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-70
webservice.dbsfo.integrity_mode_enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-70
webservice.dbsfo.negotiation_high_level	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-70
webservice.dbsfo.session_read_only.uri	スラッシュ「/」から始まる文字列で、正規化した URI を指定します。	なし	08-70
webservice.dbsfo.thread_control_queue.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-70

#### (42) webservice.http から始まるパラメタ

webservice.http から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(ap) webservice.http から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-50 webservice.http から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservice.http.request.encoding	任意の文字列を 1024 文字以内で指定します。	なし	07-10
webservice.http.request.uri_decode_enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-50
webservice.http.response.encoding	任意の文字列を 1024 文字以内で指定します。	なし	07-10

## (43) webserver.jsp から始まるパラメタ

webserver.jsp から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(aq) webserver.jsp から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-51 webserver.jsp から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webserver.jsp.additional.import.list	任意の文字列を指定します。	なし	08-70
webserver.jsp.check_interval	0~2147483647 (単位:秒) の整数で指定します。	なし	07-00
webserver.jsp.compile.backcompat	指定できる値および文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 7</li> <li>• 1.7</li> <li>• 6</li> <li>• 1.6</li> <li>• 5</li> <li>• 1.5</li> <li>• 1.4</li> <li>• 1.3</li> <li>• 1.2</li> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50 07-00 09-60 09-70
webserver.jsp.debugging.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-00
webserver.jsp.el2_2.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	09-00
webserver.jsp.jsp_page.bom.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	08-00
webserver.jsp.keepgenerated	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50
webserver.jsp.pageEncoding	任意の文字列を 1024 文字以内で指定します。	なし	07-10
webserver.jsp.tld.mapping.java_ee_tag_library.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	08-00



param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webserver.jsp.translation.customAction.ignoreCaseAttributeName	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	08-00
webserver.jsp.translation.backcompat.customAction.declareVariable	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	07-60
webserver.jsp.translation.backcompat.tag.noCheckRtexprvalue	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	07-60
webserver.jsp.translation.backcompat.tag.rtexprvalueTerminate	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	07-60
webserver.jsp.translation.backcompat.taglib.noCheckPrefix	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	07-60
webserver.jsp.translation.backcompat.useBean.noCheckClass	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	07-60
webserver.jsp.translation.useBean.noCheckDuplicateId	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	08-00
webserver.jsp.update.interval	0~2147483647の整数で指定します。	なし	07-00

#### (44) webserver.logger から始まるパラメタ

webserver.logger から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(ar) webserver.logger から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-52 webserver.logger から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webserver.logger.access_log.<フォーマット名>	任意の文字列を 1024 文字以内で指定します。	%h %l %u %t &quot; %r&quot; %&gts %b	07-50
webserver.logger.access_log.format_list	英数字、およびアンダースコア「_」を使って 32 文字以内で指定します。また、複数指定する場合はコンマ「,」で区切って指定します。	なし	07-50
webserver.logger.access_log.inprocess_http.enabled	指定できる文字列を次に示します。 • true	true	07-50

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservice.logger.access_log.inprocess_http.enabled	<ul style="list-style-type: none"> <li>false</li> </ul>	true	07-50
webservice.logger.access_log.inprocess_http.filename	任意の文字列を 210 文字以内で指定します。	<b>【Windows の場合】</b> <製品の作業ディレクトリ>¥ejb ¥<サーバ名称>¥logs ¥http ¥cjhttp_access.inprocess_http <b>【UNIX の場合】</b> <製品の作業ディレクトリ>/ejb/<サーバ名称>/logs/http/cjhttp_access.inprocess_http	07-50
webservice.logger.access_log.inprocess_http.filenum	1～256 の整数で指定します。	16	07-50
webservice.logger.access_log.inprocess_http.filesize	4096～2147483647 の整数で指定します。	4194304	07-50
webservice.logger.access_log.inprocess_http.usage_format	英数字、およびアンダースコア「_」を使って 32 文字以内で指定します。	common	07-50

#### (45) webservice.servlet から始まるパラメタ

webservice.servlet から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(as) webservice.servlet から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-53 webservice.servlet から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservice.servlet_api.exception_getCause.backcompat	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>true</li> <li>false</li> </ul>	false	08-00
webservice.ServletContainerInitializer.jar.include.path	指定できる文字に制限はありません。 複数指定する場合は、コンマ「,」で区切ります。ディレクトリはスラッシュ「/」で区切ります。	なし	09-00

## (46) webserver.session から始まるパラメタ

webserver.session から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(au) webserver.session から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-54 webserver.session から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webserver.session.cookie_config.http_only	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	09-50
webserver.session.cookie_config.name	任意の文字列を指定します。	JSESSIONID	09-50
webserver.session.server_id.value	英数字、およびアンダースコア「_」を使って 64 文字以内で指定します。	ホスト名と J2EE サーバ名 / Web コンテナサーバ名 (互換機能) からハッシュ関数を用いて生成する文字列※	06-50 07-10 07-50
webserver.session.max.throwHttpSessionLimitExceededException	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-00
webserver.session.tracking_mode	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• COOKIE</li> <li>• URL</li> </ul>	COOKIE と URL の両方を指定	09-50

注※

free-tier 以外の場合、Management Server によって 8 けたの 16 進数が自動設定されます。

## (47) webserver.static から始まるパラメタ

webserver.static から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(av) webserver.static から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-55 webserver.static から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webserver.static_content.cache.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> <li>• forceoff</li> </ul>	false	06-70

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webserver.static_content.cache.file.size.threshold	0~2147483647 の整数で指定します。	524288	06-70
webserver.static_content.cache.size	0~2147483647 の整数で指定します。	10485760	06-70 07-00
webserver.static_content.encoding.extension	任意の文字列を指定します。	なし	07-60

#### (48) webserver.work から始まるパラメタ

webserver.work から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(aw) webserver.work から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-56 webserver.work から始まるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webserver.work.clean	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50
webserver.work.directory	任意の文字列を指定します。	【Windows の場合】 &{cosminexus.home}&CC&server&repository&{server.name}&web 【UNIX の場合】 &{cosminexus.home}/CC/server/repository/&{server.name}/web	06-50

#### (49) webserver.xml から始まるパラメタ

webserver.xml から始まるパラメタについて次の表に示します。「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4(5)(ax) webserver.xml から始まるキー」についての説明を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。

表 4-57 webserver.xml から始まるキー

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webserver.xml.validate	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50

#### 4.14.2 J2EE サーバ用オプション定義を設定するパラメタ

J2EE サーバ用オプション定義を設定するパラメタについて、次の表に示します。なお、「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.3 usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル)」を参照してください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

表 4-58 J2EE サーバ用オプション定義を設定するパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
add.jvm.arg*	指定されたオプションを使って JavaVM を起動します。 システムプロパティを指定したい場合は、"-D"を利用しないで、usrconf.properties ファイルに指定します。 複数のオプションを指定する場合、同じキー名称を使用して、次のように複数回指定してください。 (指定例) add.jvm.arg= -Xms128m add.jvm.arg= -Xmx256m なお、次のように複数のオプションを指定できません。指定をした場合、JavaVM の初期化に失敗します。 (指定例) add.jvm.arg=-Xms128m -Xmx256m add.jvm.arg で指定できる JavaVM のオプションについては、「16.5 Application Server で指定できる Java HotSpot VM のオプション」を参照してください。 なお、JavaVM 拡張オプションの詳細については、「16.1 JavaVM 拡張オプションの一覧」を参照してください。	デフォルト値については「2.3(5) J2EE サーバでの JavaVM オプションのデフォルト値」を参照してください。	07-50
ejb.public.directory	任意の文字列を指定します。	【Windows の場合】 &{cosminexus.home}¥CC ¥server¥public 【UNIX の場合】	06-50

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejb.public.directory	任意の文字列を指定します。	&#{cosminexus.home}/CC/ server/public	06-50
ejb.server.log.directory	任意の文字列を 200 文字以内で指定します。	【Windows の場合】 <製品の作業ディレクトリ>%ejb %<サーバ名称>%logs 【UNIX の場合】 <製品の作業ディレクトリ >/ejb/<サーバ名称>/logs	06-50

## 注※

値の指定形式について、次に示します。

(例)

```
<param-name>add.jvm.arg</param-name>
```

```
<param-value>-Xms256m</param-value>
```

```
<param-value>-Xmx512m</param-value>
```

:

### 4.14.3 J2EE サーバの JavaVM のシステムプロパティに設定できるパラメタ

J2EE サーバの JavaVM のシステムプロパティを設定するパラメタについて、次の表に示します。「param-value 指定値」に指定する値の詳細については、「2.4 usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル)」を参照してください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

J2EE サーバの JavaVM のシステムプロパティを設定するパラメタを指定する場合の指定形式を次に示します。

#### 指定形式

```
<param-name>パラメタ名</param-name>  
<param-value>値</param-value>
```

値を複数指定する際には、複数の<param-value>を指定します。

#### 値を複数指定する場合の指定形式

```
<param-name>パラメタ名</param-name>  
<param-value>値</param-value>  
<param-value>値</param-value>
```

表 4-59 J2EE サーバの JavaVM のシステムプロパティに設定できるパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.connectionpool.applicationAuthentication.disabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50
ejbserver.connectionpool.association.enabledDespiteUnshareableSessions	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.connectionpool.sharingOutsideTransactionScope.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50
ejbserver.container.bmp.backcompatible	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50
ejbserver.container.ejshome.sessionbean.reconnect.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50
ejbserver.container.rebindpolicy	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• VB_TRANSPARENT</li> <li>• NO_RECONNECT</li> </ul>	VB_TRANSPARENT	07-50
ejbserver.container.security.disabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50
ejbserver.ctm.CTMDomain	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「ctm」, 「CTM」, 「tsc」, および 「TSC」 で始まらない, 英数字およびアンダースコア 「_」 で指定した 31 文字以内の文字列</li> <li>• CTMDOMAIN</li> </ul>	CTMDOMAIN	07-50
ejbserver.ctm.CTMMYHost	次に示す文字を使って 1~255 文字で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 英数字</li> <li>• アンダースコア 「_」</li> <li>• ピリオド 「.」</li> <li>• ハイフン 「-」</li> </ul>	<hostname コマンドで取得されるホスト名称>	07-50
ejbserver.ctm.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	ctm-tier : true それ以外 : false	07-50
ejbserver.deploy.app.stopforcibly.disabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50
ejbserver.deploy.exclusive.lockAliveInterval	1~2147483647 (単位: 秒) の整数で指定します。	60	07-50
ejbserver.deploy.stub.generation.scope	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ejb</li> <li>• app</li> </ul>	ejb	07-50

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
ejbserver.distributedtx.recovery.completionCheckOnStopping.timeout	-1～2147483647（単位：秒）の整数で指定します。	-1	07-50
ejbserver.ejb.cmp20.cmr.use.existing_table	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50
ejbserver.jndi.cache.reference	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• on</li> <li>• off</li> </ul>	off	07-50
ejbserver.manager.agent.Agent.conf <sup>*1</sup>	任意の文字列を指定します。	<Application Serverのインストールディレクトリ>manager/config/mngagent.<実サーバ名>.properties	07-50
ejbserver.manager.agent.Agent.enabled <sup>*1</sup>	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	07-50
ejbserver.manager.jpl.event.event_server_name	任意の文字列を指定します。	localhost	07-50
ejbserver.naming.exec.args	任意の文字列を指定します。	なし	07-50
ejbserver.naming.nameroot	英数字、およびアンダースコア「_」を使った文字列を指定します。	なし	07-50
ejbserver.naming.protocol	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• corbaname</li> <li>• iioploc</li> <li>• iiopname</li> </ul>	corbaname	07-50
ejbserver.rmi.stateless.unique_id.enabled	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50
ejbserver.server.mutex.invocation.timeout	45～92233720368547758（単位：秒）の整数で指定します。	45	07-50
vbroker.agent.enableLocator <sup>*2</sup>	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50



param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
vbroker.orb.htc.comt.entryCount	100～30000000 の整数で指定します。	120000	07-50
vbroker.orb.htc.comt.fileCount	1～256 の整数で指定します。	3	07-50
vbroker.orb.htc.tracePath	任意の文字列を 1～210 バイトの範囲で指定します。	【Windows の場合】 <製品の作業ディレクトリ>¥ejb ¥<サーバ名称>¥logs ¥TPB¥logj 【UNIX の場合】 <製品の作業ディレクトリ>/ejb/<サーバ名称>/logs/TPB/logj	07-50
webserver.connector.ajp12.backlog*3	1～2147483647 の整数で指定します。	なし	07-50
webserver.connector.ajp12.max_threads*3	1～1024 の整数で指定します。	なし	07-50
webserver.connector.ajp12.port*3	1～65535 の整数で指定します。	なし	07-50
webserver.connector.inprocess_http.hostname_lookups	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	07-50
webserver.errorpage.stack_trace_enabled	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	07-50
webserver.jsp.precompile.jsp_work_dir	英数字およびアンダースコア「_」の文字列を指定します。	cosminexus_jsp_work	07-50
webserver.logger.communication_trace.inprocess_http.filenum	1～256 の整数で指定します。	16	07-50
webserver.logger.thread_trace.inprocess_http.filenum	1～256 の整数で指定します。	16	07-50
webserver.session.max_log_interval	0～2147483647 の整数で指定します。	60	07-50
webserver.session.server_id.enabled	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	true	07-50

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
webservice.sfo.negotiation.ignore_serverId	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-50
webservice.session.delete_cookie.backcompat	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-00

## 注

param-value に値を複数指定する際は、複数の<param-value>を指定します。

(例)

```
<param-name>パラメタ名</param-name>
```

```
<param-value>値</param-value>
```

```
<param-value>値</param-value>
```

## 注※1

Management Server が自動で設定するため、指定は非推奨です。

## 注※2

通常は設定不要です。

## 注※3

旧バージョンとの互換性を保つためのパラメタです。

## 参考

なお、この項の表で示すパラメタは、次の形式で指定することもできます。

## 指定形式

```
<param-name>ex.properties</param-name>
```

```
<param-value>パラメタ名=値</param-value>
```

値を複数指定する際には、複数の<param-value>を指定します。

## 値を複数指定する場合の指定形式

```
<param-name>ex.properties</param-name>
```

```
<param-value>パラメタ名=値</param-value>
```

```
<param-value>パラメタ名=値</param-value>
```

#### 4.14.4 J2EE サーバの拡張パラメタ

J2EE サーバの拡張パラメタを設定するパラメタについて、次の表に示します。なお、「param-value 指定値」に指定する値の詳細については、「2.3 usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル)」を参照してください。また、batch.service.enabled の詳細については「3.2 usrconf.cfg (バッチサーバ用オプション定義ファイル)」を参照してください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

J2EE サーバの拡張パラメタを指定する場合の指定形式を次に示します。

## 指定形式

```
<param-name>パラメタ名</param-name>
```

```
<param-value>値</param-value>
```

値を複数指定する際には、複数の<param-value>を指定します。

## 値を複数指定する場合の指定形式

```

<param-name>パラメタ名</param-name>
<param-value>値</param-value>
<param-value>値</param-value>

```

表 4-60 J2EE サーバの拡張パラメタに設定できるパラメタ

キー名称	指定可能値	省略値	VR
add.class.path	任意の文字列を指定します。	なし	07-50
add.library.path	任意の文字列を指定します。	なし	07-50
cpp.library.version	6 を指定します。09-00 以降では、設定できるのは「6」だけです。	6	07-50
ejb.server.corefilenum (UNIX 用)	0~16 の整数で指定します。	1	07-50
ejb.server.log.mode	6 または 7 を指定します。	7	07-50
ejb.server.log.stdout.filesize	4096~2147483647 (単位: バイト) の整数で指定します。	1048576	07-50
ejb.server.log.stderr.filesize	4096~2147483647 (単位: バイト) の整数で指定します。	1048576	07-50
jvm.type	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• server</li> <li>• client</li> </ul>	server	07-50
batch.service.enabled	false*	false	07-60

## 注

param-value に値を複数指定する際は、複数の<param-value>を指定します。

(例)

```

<param-name>パラメタ名</param-name>
<param-value>値</param-value>
<param-value>値</param-value>

```

## 注\*

batch.service.enabled パラメタに true を指定しないでください。なお、デフォルトでは false になっています。また、このパラメタは Web システムの初期構築時だけ指定できます。Web システムの構成変更では値を変更しないでください。

## 参考

なお、この項の表に示すパラメタは、次の形式で指定することもできます。

## 指定形式

```

<param-name>ex.param</param-name>
<param-value>パラメタ名=値</param-value>

```

値を複数指定する際には、複数の<param-value>を指定します。

## 値を複数指定する場合の指定形式

```

<param-name>ex.param</param-name>
<param-value>パラメタ名=値</param-value>
<param-value>パラメタ名=値</param-value>

```

### 4.14.5 バッチサーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタ

バッチサーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタについて説明します。

「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「3.3 usrconf.properties (バッチサーバ用ユーザプロパティファイル)」を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

#### (1) ejbserver.application から始まるパラメタ

ejbserver.application から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-61 ejbserver.application から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.application.InitTermProcessClasses <sup>※1</sup>	なし
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.appname	user_app
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.count	2
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.encoding	なし
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.filter	なし
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.formatter	なし
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.level	SEVERE
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.limit	1048576
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.msgid	0001
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.path	user_log
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.separator	
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.filter	なし
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.handlers <sup>※1</sup>	なし
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.level	SEVERE
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.useParentHandlers	true
ejbserver.application.userlog.loggers <sup>※1</sup>	なし
ejbserver.application.userlog.menu.handlers. <sup>※1</sup> <sup>※2</sup>	なし

注※1

param-value に値を複数指定する際は、コンマ「,」で区切って指定します。

(例)

<param-value>値 1,値 2,値 3</param-value>

注※2

このパラメタには、ハンドラの名称一覧を指定します。

このパラメタからハンドラ名を削除する場合は、関連するパラメタ

(ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<削除するハンドラ名称>.XXX) も削除してください。

なお、このパラメタに対応するキーは「3.3 usrconf.properties (バッチサーバ用ユーザプロパティファイル)」にはありません。

## (2) ejbserver.batch から始まるパラメタ

ejbserver.batch から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-62 ejbserver.batch から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.batch.application.exit.enabled	true
ejbserver.batch.gc.watch.threshold	0
ejbserver.batch.queue.length	50
ejbserver.batch.schedule.group.name	JOBGROUP

## (3) ejbserver.client から始まるパラメタ

ejbserver.client から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-63 ejbserver.client から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.client.ctm.RequestPriority	4

## (4) ejbserver.connectionpool から始まるパラメタ

ejbserver.connectionpool から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-64 ejbserver.connectionpool から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.connectionpool.association.enabled	false
ejbserver.connectionpool.validation.timeout	5

## (5) ejbserver.connector から始まるパラメタ

ejbserver.connector から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-65 ejbserver.connector から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.connector.logwriter.filenum	4
ejbserver.connector.logwriter.filesize	2097152

## (6) ejbserver.container から始まるパラメタ

ejbserver.connector から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-66 ejbserver.connector から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.container.audit_trail.enabled	false

**(7) ejbserver.deploy から始まるパラメタ**

ejbserver.deploy から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-67 ejbserver.deploy から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.deploy.resourcefile.scramble.enabled	false

**(8) ejbserver.ext から始まるパラメタ**

ejbserver.ext から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-68 ejbserver.ext から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.ext.method_observation.interval	0

**(9) ejbserver.http から始まるパラメタ**

ejbserver.http から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-69 ejbserver.http から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.http.port	8080

**(10) ejbserver.instrumentation から始まるパラメタ**

ejbserver.instrumentation から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-70 ejbserver.instrumentation から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.instrumentation.enabled	true

**(11) ejbserver.jndi から始まるパラメタ**

ejbserver.jndi から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-71 ejbserver.jndi から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.jndi.cache	on
ejbserver.jndi.cache.interval	0

param-name 指定値	省略値
ejbserver.jndi.cache.interval.clear.option	refresh
ejbserver.jndi.namingservice.group.<Specify group name>.providerurls	なし
ejbserver.jndi.namingservice.group.list	なし
ejbserver.jndi.request.timeout	0

## (12).ejbserver.jta から始まるパラメタ

ejbserver.jta から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-72.ejbserver.jta から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.jta.TransactionManager.defaultTimeOut	180

## (13).ejbserver.logger から始まるパラメタ

ejbserver.logger から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-73.ejbserver.logger から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.logger.channels.define.ConnectionPoolWatchLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.ConnectionPoolWatchLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.ConsoleLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.ConsoleLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.EJBContainerLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.EJBContainerLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.ExceptionLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.ExceptionLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.FileDescriptorWatchLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.FileDescriptorWatchLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.MaintenanceLogFile.filenum	4
ejbserver.logger.channels.define.MaintenanceLogFile.filesize	16777216
ejbserver.logger.channels.define.MemoryWatchLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.MemoryWatchLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.MessageLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.MessageLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.ThreaddumpWatchLogFile.filenum	2

param-name 指定値	省略値
ejbserver.logger.channels.define.ThreaddumpWatchLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.ThreadWatchLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.ThreadWatchLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.UserErrLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.UserErrLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.UserOutLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.UserOutLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.enabled.*	Error, Warning

#### (14) ejbserver.management から始まるパラメタ

ejbserver.management から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-74 ejbserver.management から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.management.JVM.stats_monitor.FullGCCCount.enabled	true
ejbserver.management.JVM.stats_monitor.FullGCCCount.interval	600
ejbserver.management.JVM.stats_monitor.FullGCCCount.threshold	10
ejbserver.management.statistics.interval	60
ejbserver.management.stats_file.base_time	0
ejbserver.management.stats_file.dir	【Windows の場合】 <製品の作業ディレクトリ>¥ejb ¥<サーバ名称>¥stats 【UNIX の場合】 <製品の作業ディレクトリ >/ejb/<サーバ名称>/stats
ejbserver.management.stats_file.enabled	true
ejbserver.management.stats_file.num	7
ejbserver.management.stats_file.period	24

#### (15) ejbserver.manager から始まるパラメタ

ejbserver.manager から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-75 ejbserver.manager から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.conf	なし
ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.enabled	false



param-name 指定値	省略値
ejbserver.manager.agent.MEventAgent.conf	なし
ejbserver.manager.agent.MEventAgent.enabled	true

### (16) ejbserver.naming から始まるパラメタ

ejbserver.naming から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-76 ejbserver.naming から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.naming.host	バッチサーバと同じホスト
ejbserver.naming.port	900
ejbserver.naming.startupRetryCount	9
ejbserver.naming.startupWaitTime	1

### (17) ejbserver.rmi から始まるパラメタ

ejbserver.rmi から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-77 ejbserver.rmi から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.rmi.naming.host	なし
ejbserver.rmi.naming.port	23152
ejbserver.rmi.remote.listener.port	0
ejbserver.rmi.request.timeout	0

### (18) ejbserver.server から始まるパラメタ

ejbserver.server から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-78 ejbserver.server から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.server.prf.PRFID	なし
ejbserver.server.threaddump.fileenum	256

### (19) ejbserver.stdoutlog から始まるパラメタ

ejbserver.stdoutlog から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-79 ejbserver.stdoutlog から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.stdoutlog.autoflush	false

## (20) ejbserver.watch から始まるパラメタ

ejbserver.watch から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-80 ejbserver.watch から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.watch.enabled	true
ejbserver.watch.fileDescriptor.enabled	true
ejbserver.watch.fileDescriptor.interval	60
ejbserver.watch.fileDescriptor.threshold	2147483647
ejbserver.watch.fileDescriptor.writefile.enabled	true
ejbserver.watch.memory.enabled	true
ejbserver.watch.memory.interval	60
ejbserver.watch.memory.threshold	80
ejbserver.watch.memory.writefile.enabled	true
ejbserver.watch.thread.enabled	true
ejbserver.watch.thread.interval	60
ejbserver.watch.thread.threshold	2147483647
ejbserver.watch.thread.writefile.enabled	true
ejbserver.watch.threaddump.enabled	true
ejbserver.watch.threaddump.interval	30
ejbserver.watch.threaddump.threshold	80
ejbserver.watch.threaddump.writefile.enabled	true

## (21) java から始まるパラメタ

java から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-81 java から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
java.naming.factory.initial	com.hitachi.software.ejb.jndi.InsContextFactory

## (22) vbroker から始まるパラメタ

vbroker から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-82 vbroker から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
vbroker.agent.port	14000

param-name 指定値	省略値
vbroker.se.iiop_tp.host	なし
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port	0

### (23) webserver.connector から始まるパラメタ

webserver.connector から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-83 webserver.connector から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
webserver.connector.ajp13.bind_host	なし
webserver.connector.ajp13.port	8007
webserver.connector.http.bind_host	なし
webserver.connector.http.permitted.hosts*	なし

注※

param-value に値を複数指定する際は、コンマ「,」で区切って指定します。

(例)

```
<param-value>値 1,値 2,値 3</param-value>
```

## 4.14.6 バッチサーバ用オプション定義を設定するパラメタ

バッチサーバ用オプション定義を設定するパラメタについて、次の表に示します。なお、「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「3.2 usrconf.cfg (バッチサーバ用オプション定義ファイル)」を参照してください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

表 4-84 バッチサーバ用オプション定義を設定するパラメタ

param-name 指定値	省略値
add.jvm.arg*	なし
ejb.public.directory	<b>【Windows の場合】</b> &{cosminexus.home}¥CC¥server¥public <b>【UNIX の場合】</b> &{cosminexus.home}/CC/server/public
ejb.server.log.directory	<b>【Windows の場合】</b> <製品の作業ディレクトリ>¥ejb¥<サーバ名称>¥logs <b>【UNIX の場合】</b> <製品の作業ディレクトリ>/ejb/<サーバ名称>/logs

注※

値の指定形式について、次に示します。

(例)

```
<param-name>add.jvm.arg</param-name>
```

```
<param-value>-Xms256m</param-value>
```

```
<param-value>-Xmx512m</param-value>
```

:

#### 4.14.7 バッチサーバの JavaVM のシステムプロパティに設定できるパラメタ

バッチサーバの JavaVM のシステムプロパティを設定するパラメタについて、次の表に示します。なお、「param-value 指定値」に指定する値の詳細については、「3.3 usrconf.properties (バッチサーバ用ユーザプロパティファイル)」を参照してください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

表 4-85 バッチサーバの JavaVM のシステムプロパティに設定できるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.connectionpool.applicationAuthentication.disabled	false
ejbserver.connectionpool.sharingOutsideTransactionScope.enabled	false
ejbserver.deploy.exclusive.lockAliveInterval	60
ejbserver.jndi.cache.reference	off
ejbserver.manager.agent.Agent.conf* <sup>1</sup>	<Application Server のインストールディレクトリ>manager/config/mngagent.<実サーバ名>.properties
ejbserver.manager.agent.Agent.enabled* <sup>1</sup>	true
ejbserver.manager.jpl.event.event_server_name	localhost
ejbserver.naming.nameroot	なし
vbroker.agent.enableLocator* <sup>2</sup>	false
vbroker.orb.htc.comt.entryCount	120000
vbroker.orb.htc.comt.fileCount	3
vbroker.orb.htc.tracePath	<b>【Windows の場合】</b> <製品の作業ディレクトリ>¥ejb¥<サーバ名称>¥logs¥TPB¥logj <b>【UNIX の場合】</b> <製品の作業ディレクトリ>/ejb/<サーバ名称>/logs/TPB/logj

注

param-value に値を複数指定する際は、複数の<param-value>を指定します。

(例)

<param-name>パラメタ名</param-name>

<param-value>値</param-value>

<param-value>値</param-value>

注※1

Management Server が自動で設定するため、指定は非推奨です。

注※2

通常は設定不要です。

## 参考

この項の表で示すパラメタは、次の形式で指定することもできます。

## 指定形式

```
<param-name>パラメタ名</param-name>
<param-value>パラメタ名=値</param-value>
```

値を複数指定する際には、複数の<param-value>を指定します。

## 値を複数指定する場合の指定形式

```
<param-name>ex.properties</param-name>
<param-value>パラメタ名=値</param-value>
<param-value>パラメタ名=値</param-value>
```

## 4.14.8 バッチサーバの拡張パラメタ

バッチサーバの拡張パラメタを設定するパラメタについて、次の表に示します。バッチサーバの場合、batch.service.enabled パラメタは必ず指定してください。パラメタの値には true を指定します。

なお、「param-value 指定値」に指定する値の詳細については、「3.2 usrconf.cfg (バッチサーバ用オプション定義ファイル)」を参照してください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

表 4-86 バッチサーバの拡張パラメタ

param-name 指定値	省略値
add.class.path	なし
add.library.path	なし
batch.service.enabled <sup>※1</sup>	false
cpp.library.version	6
ejb.server.corefilenum <sup>※2</sup>	1
ejb.server.log.mode	なし
ejb.server.log.stderr.filesize	1048576
ejb.server.log.stdout.filesize	1048576
jvm.type	server

## 注

param-value に値を複数指定する際は、複数の<param-value>を指定します。

(例)

```
<param-name>パラメタ名</param-name>
<param-value>値</param-value>
<param-value>値</param-value>
```

注<sup>※1</sup>

batch.service.enabled パラメタは必ず指定してください。設定値には true を指定します。パラメタの指定を省略すると false が設定されます。また、このパラメタは Web システムの初期構築時だけ指定できます。Web システムの構成変更では値を変更しないでください。

注※2

UNIX 用のパラメタです。

#### 参考

なお、この項の表で示すパラメタは、次の形式で指定することもできます。

##### 指定形式

```
<param-name>パラメタ名</param-name>
<param-value>パラメタ名=値</param-value>
```

値を複数指定する際には、複数の<param-value>を指定します。

##### 値を複数指定する場合の指定形式

```
<param-name>ex.properties</param-name>
<param-value>パラメタ名=値</param-value>
<param-value>パラメタ名=値</param-value>
```

## 4.14.9 運用監視エージェントプロパティを設定するパラメタ

運用監視エージェントプロパティを設定するパラメタについて次の表に示します。これらのパラメタは J2EE サーバおよびバッチサーバで指定できます。

「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「10.6 mngagent.<実サーバ名>.properties（運用監視エージェントプロパティファイル）」を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

表 4-87 運用監視エージェントプロパティを設定するパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
mngagent.connector.host	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名</li> <li>• IPv4 アドレス</li> <li>• @myhost</li> </ul> なお、ホスト名には、英数字、アンダースコア「_」、ピリオド「.」、およびハイフン「-」で指定した 255 文字以内の文字列を指定してください。	vbroker.se.iiop_tp.host に定義された値	07-50
mngagent.connector.port	1～65535 の整数で指定します。	vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.lis tener.port に定義された値	07-50
mngagent.log.filesize	4096～2147483647 の整数で指定します。	65536	06-50 07-00 07-50

## 4.14.10 Management イベント発行用プロパティを設定するパラメタ

Management イベント発行用プロパティを設定するパラメタについて次の表に示します。これらのパラメタは J2EE サーバおよびバッチサーバで指定できます。

「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「10.12 Management イベント発行用プロパティファイル」を参照してください。また、参照する場合は、キーをパラメタに読み替えてください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

表 4-88 Management イベント発行用プロパティ設定するパラメタ

param-name 指定値	指定可能値	省略値	VR
manager.mevent.message_id.list	任意の文字列を指定します。	なし	06-50
manager.mevent.retry.interval	1～86400 の整数で指定します。	10	06-50
manager.mevent.retry.limit	0～86400 の整数で指定します。	0	06-50
manager.mevent.send.max	1～1000 の整数で指定します。	10	06-50
manager.mevent.send.timeout	10～600 の整数で指定します。	90	06-50
manager.mevent.sender.bind.host	次のどれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名</li> <li>• IPv4 アドレス</li> <li>• @myhost</li> </ul> なお、ホスト名には、英数字、アンダースコア「_」、ピリオド「.」、およびハイフン「-」で指定した 255 文字以内の文字列を指定してください。	なし	07-50

#### 4.14.11 JP1 連携を設定するパラメタ

JP1 連携を設定するパラメタについて次の表に示します。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

これらのパラメタは J2EE サーバおよびバッチサーバで指定できます。

表 4-89 JP1 連携を設定するパラメタ

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
manager.jp1event.system.filtering.severity.alert	システムが発行する JP1 イベントのフィルタリングを設定する項目です。 JP1 イベント重大度「Alert」を発行するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。 true : 発行します。 false : 発行しません。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50
manager.jp1event.system.filtering.severity.critical	システムが発行する JP1 イベントのフィルタリングを設定する項目です。 JP1 イベント重大度「Critical」を発行するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
manager.jp1 event.system.filtering.severity.critical	true : 発行します。 false : 発行しません。	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	06-50
manager.jp1 event.system.filtering.severity.emergency	システムが発行する JP1 イベントのフィルタリングを設定する項目です。 JP1 イベント重大度「Emergency」を発行するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。 true : 発行します。 false : 発行しません。	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	06-50
manager.jp1 event.system.filtering.severity.error	システムが発行する JP1 イベントのフィルタリングを設定する項目です。 JP1 イベント重大度「Error」を発行するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。 true : 発行します。 false : 発行しません。	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	06-50
manager.jp1 event.system.filtering.severity.information	システムが発行する JP1 イベントのフィルタリングを設定する項目です。 JP1 イベント重大度「Information」を発行するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。 true : 発行します。 false : 発行しません。	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	06-50
manager.jp1 event.system.filtering.severity.notice	システムが発行する JP1 イベントのフィルタリングを設定する項目です。 JP1 イベント重大度「Notice」を発行するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。 true : 発行します。 false : 発行しません。	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	06-50
manager.jp1 event.system.filtering.severity.warning	システムが発行する JP1 イベントのフィルタリングを設定する項目です。 JP1 イベント重大度「Warning」を発行するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	06-50



param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
manager.jp1 event.system. filtering.severity.warnings	true : 発行します。 false : 発行しません。	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	06-50
manager.jp1 event.user.filtering.enabled	ユーザ JP1 イベントをフィルタリングするかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。 true : フィルタリングします。 false : フィルタリングしません。	指定できる文字列を次に示します。 • true • false	false	06-50
manager.jp1 event.user.filtering.filter	ユーザ JP1 イベントのフィルタを指定します。指定した文字列中の¥n は改行に変換されます。	任意の文字列を指定します。	なし	06-50
manager.jp1 event.user.mapping.level.config	ユーザ JP1 イベントのマッピングのログレベル「CONFIG」に対する JP1 イベント重大度を指定します。次のどれかを指定します。 • Emergency : 緊急 • Alert : 警戒 • Critical : 致命的 • Error : エラー • Warning : 警告 • Notice : 通知 • Information : 情報 指定しない場合、JP1 イベントは発行されません。	指定できる文字列を次に示します。 • Emergency • Alert • Critical • Error • Warning • Notice • Information	未指定	06-50
manager.jp1 event.user.mapping.level.fine	ユーザ JP1 イベントのマッピングのログレベル「FINE」に対する JP1 イベント重大度を指定します。次のどれかを指定します。 • Emergency : 緊急 • Alert : 警戒 • Critical : 致命的 • Error : エラー • Warning : 警告 • Notice : 通知 • Information : 情報 指定しない場合、JP1 イベントは発行されません。	指定できる文字列を次に示します。 • Emergency • Alert • Critical • Error • Warning • Notice • Information	未指定	06-50
manager.jp1 event.user.mapping.level.finer	ユーザ JP1 イベントのマッピングのログレベル「FINER」に対する JP1 イベント重大度を指定します。次のどれかを指定します。 • Emergency : 緊急 • Alert : 警戒	指定できる文字列を次に示します。 • Emergency • Alert • Critical	未指定	06-50

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
manager.jp1 event.user. mapping.level.finer	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Critical：致命的</li> <li>• Error：エラー</li> <li>• Warning：警告</li> <li>• Notice：通知</li> <li>• Information：情報</li> </ul> 指定しない場合、JP1 イベントは発行されません。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Error</li> <li>• Warning</li> <li>• Notice</li> <li>• Information</li> </ul>	未指定	06-50
manager.jp1 event.user. mapping.level.finest	ユーザ JP1 イベントのマッピングのログレベル「FINEST」に対する JP1 イベント重大度を指定します。次のどれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Emergency：緊急</li> <li>• Alert：警戒</li> <li>• Critical：致命的</li> <li>• Error：エラー</li> <li>• Warning：警告</li> <li>• Notice：通知</li> <li>• Information：情報</li> </ul> 指定しない場合、JP1 イベントは発行されません。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Emergency</li> <li>• Alert</li> <li>• Critical</li> <li>• Error</li> <li>• Warning</li> <li>• Notice</li> <li>• Information</li> </ul>	未指定	06-50
manager.jp1 event.user. mapping.level.info	ユーザ JP1 イベントのマッピングのログレベル「INFO」に対する JP1 イベント重大度を指定します。次のどれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Emergency：緊急</li> <li>• Alert：警戒</li> <li>• Critical：致命的</li> <li>• Error：エラー</li> <li>• Warning：警告</li> <li>• Notice：通知</li> <li>• Information：情報</li> </ul> 指定しない場合、JP1 イベントは発行されません。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Emergency</li> <li>• Alert</li> <li>• Critical</li> <li>• Error</li> <li>• Warning</li> <li>• Notice</li> <li>• Information</li> </ul>	未指定	06-50
manager.jp1 event.user. mapping.level.severe	ユーザ JP1 イベントのマッピングのログレベル「SEVERE」に対する JP1 イベント重大度を指定します。次のどれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Emergency：緊急</li> <li>• Alert：警戒</li> <li>• Critical：致命的</li> <li>• Error：エラー</li> <li>• Warning：警告</li> <li>• Notice：通知</li> <li>• Information：情報</li> </ul> 指定しない場合、JP1 イベントは発行されません。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Emergency</li> <li>• Alert</li> <li>• Critical</li> <li>• Error</li> <li>• Warning</li> <li>• Notice</li> <li>• Information</li> </ul>	未指定	06-50

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
manager.jp1 event.user. mapping.level.warning	<p>ユーザ JP1 イベントのマッピングのログレベル「WARNING」に対する JP1 イベント重大度を指定します。次のどれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Emergency：緊急</li> <li>• Alert：警戒</li> <li>• Critical：致命的</li> <li>• Error：エラー</li> <li>• Warning：警告</li> <li>• Notice：通知</li> <li>• Information：情報</li> </ul> <p>指定しない場合、JP1 イベントは発行されません。</p>	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Emergency</li> <li>• Alert</li> <li>• Critical</li> <li>• Error</li> <li>• Warning</li> <li>• Notice</li> <li>• Information</li> </ul>	未指定	06-50

#### 4.14.12 SecurityManager の使用を設定するパラメタ

SecurityManager の使用を設定するパラメタについて次の表に示します。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

このパラメタは J2EE サーバおよびバッチサーバで指定できます。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

表 4-90 SecurityManager の使用を設定するパラメタ

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR	関連情報
use.security	<p>J2EE サーバの起動オプションに SecurityManager を使用するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。</p> <p>true： 使用します。</p> <p>false： 使用しません。</p>	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50	「機能解説 セキュリティ管理機能編」の「2.2.5 不正な処理の実行を防止する」

#### 4.14.13 統合ユーザ管理の使用を設定するパラメタ

統合ユーザ管理の使用を設定するパラメタについて次の表に示します。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

なお、統合ユーザ管理の使用を設定するパラメタは、jaas.ua.enabled パラメタに true が指定された場合にだけ有効です。



param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
com.cosminexus.admin.auth.config	統合ユーザ管理のコンフィグレーションファイルを指定します。 相対パスで指定した場合は、<Application Server のインストールディレクトリ>/manager/config ディレクトリの下にコンフィグレーションファイルが適用されます。	任意の文字列を指定します。	manager /config/ ua.conf	08 -7 0
com.cosminexus.admin.auth.passwordScramble.enable	統合ユーザ管理のコンフィグレーションファイルのスクランブル化されたパスワードを複合化する機能を有効にするかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。  true : 有効にします。  false : 無効にします。	指定できる文字列を次に示します。  • true • false	false	08 -7 0
jaas.config.load_exclusively*	JAAS のコンフィグレーションファイルに指定したファイル以外で指定されたログイン構成を無視するかどうかを選択します。 次のどちらかを指定します。  true : 指定されたログイン構成を無視し、JAAS コンフィグレーションファイルの構成が有効となります。  false : 指定されたログイン構成を有効とします。	指定できる文字列を次に示します。  • true • false	true	08 -7 0

注※

このパラメタに true を指定した場合、配布先の usrconf.properties ファイルの java.security.auth.login.config パラメタの値に、次のように「\*=」が付加されます。

(例) : java.security.auth.login.config\*=<コンフィグファイル>

#### 4.14.14 JavaVM の起動パラメタで使用するファイルを設定するパラメタ

JavaVM の起動パラメタで使用するファイルを設定するパラメタについて次の表に示します。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

表 4-92 JavaVM の起動パラメタで使用するファイルを設定するパラメタ

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
AutoExplicitMemoryText	明示管理ヒープ機能の自動配置機能で使用する自動配置設定ファイルの内容を指定します。ここで指定した内容は、<Application Serverのインストールディレクトリ>/CC/server/usrconf/ejb/<実サーバ名>/auto_explicit_memory.cfg に反映されます。*	1文字以上の文字列	なし	09 -0 0

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
UserPrfText	ユーザ拡張性能解析トレースで使用するユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルの内容を指定します。ここで指定した内容は、<Application Serverのインストールディレクトリ>/CC/server/usrconf/ejb/<実サーバ名>/userprf.cfg に反映されます。※	1文字以上の文字列	なし	09-00

注※

param-value の値は CDATA セクションで指定してください。

(例)

```
<param-name>UserPrfText</param-name>
<param-value>
  <![CDATA[
    :
  ]]>
</param-value>
```

CDATA セクション内に指定する内容全体の前後の半角スペースおよび改行は無視されます。

## 4.15 論理パフォーマンストレーサで指定できるパラメータ

ここでは、論理パフォーマンストレーサで指定できるパラメータについて説明します。

論理パフォーマンストレーサで指定できるパラメータについて次の表に示します。なお、「省略値」とは、パラメータの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、パラメータが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

表 4-93 論理パフォーマンストレーサに設定できるパラメータ

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
PRFID	PRF 識別子を指定します。	「TSC」, 「tsc」または「CTM」や「ctm」で始まる文字列を指定した場合、エラーとなります。	PRF_ID	06-50 07-00
prfspool	PRF トレース出力ディレクトリを指定します。 Windows の場合、ここで指定する値は、システム環境変数 PRFSPOOL で指定された値と一致している必要があります。	任意の文字列を 256 文字以内で指定します。	& ; {cosminexus.home}/PRF/spool	06-50 07-00
PrfTraceBufferSize	パフォーマンストレーサのバッファメモリサイズを指定します。 PrfTraceFileSize ≥ PrfTraceBufferSize の関係が成り立つ値を設定してください。	512~102400 の整数で指定します。	8192	06-50
PrfTraceCount	パフォーマンストレーサのファイル面数を指定します。	4, 16, 32, 64, 128, 256 のどれかを指定します。	4	06-50
PrfTraceFileSize	パフォーマンストレーサのファイルサイズをキロバイト単位で指定します。 PrfTraceFileSize ≥ PrfTraceBufferSize の関係が成り立つ値を設定してください。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 1024</li> <li>• 4096</li> <li>• 8192</li> <li>• 16384</li> <li>• 32768</li> <li>• 65536</li> <li>• 131072</li> <li>• 262144</li> <li>• 524288</li> <li>• 1048576</li> </ul>	32768	06-50 07-00
PrfTraceLevel	パフォーマンストレーサのトレース取得レベルを指定します。次のどれかを設定してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• STANDARD : 標準</li> </ul>	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• STANDARD</li> <li>• DETAIL</li> </ul>	STANDARD	06-50 07-00

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	param-value の指定内容	指定可能値	省略値	VR
PrfTraceLevel	<ul style="list-style-type: none"> <li>DETAIL : 詳細</li> <li>任意のトレース取得レベル値 : 指定できる値については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス コマンド編」の「cprfstart (PRF デーモンの開始)」の引数-PrfTraceLevel を参照してください。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>任意のトレースレベル値</li> </ul>	STANDARD	06-50 07-00



## 4.16 論理 SFO サーバで指定できるパラメタ

ここでは、論理 SFO サーバで指定できるパラメタについて説明します。

### 4.16.1 SFO サーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタ

SFO サーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタについて説明します。

「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.4 usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル)」を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

なお、「param-value の指定内容」が記載されているパラメタは、usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル) と指定方法が異なるパラメタです。

#### (1) ejbserver.container から始まるパラメタ

ejbserver.container から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-94 ejbserver.container から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.container.remove.scan.interval	5

#### (2) ejbserver.http から始まるパラメタ

ejbserver.http から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-95 ejbserver.http から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.http.port	8080

#### (3) ejbserver.instrumentation から始まるパラメタ

ejbserver.instrumentation から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-96 ejbserver.instrumentation から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.instrumentation.enabled	true

#### (4) ejbserver.logger から始まるパラメタ

ejbserver.logger から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-97 ejbserver.logger から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.logger.channels.define.ConsoleLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.ConsoleLogFile.filesize	1048576

param-name 指定値	省略値
ejbserver.logger.channels.define.EJBContainerLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.EJBContainerLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.ExceptionLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.ExceptionLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.FileDescriptorWatchLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.FileDescriptorWatchLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.MaintenanceLogFile.filenum	4
ejbserver.logger.channels.define.MaintenanceLogFile.filesize	16777216
ejbserver.logger.channels.define.MemoryWatchLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.MemoryWatchLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.MessageLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.MessageLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.RequestQueueWatchLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.ThreaddumpWatchLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.ThreaddumpWatchLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.channels.define.ThreadWatchLogFile.filenum	2
ejbserver.logger.channels.define.ThreadWatchLogFile.filesize	1048576
ejbserver.logger.enabled.*	Error, Warning
ejbserver.logger.systemlog.enabled	true

### (5) `ejbserver.management` から始まるパラメタ

`ejbserver.management` から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-98 `ejbserver.management` から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.management.JVM.stats_monitor.FullGCCCount.enabled	true
ejbserver.management.JVM.stats_monitor.FullGCCCount.interval	600
ejbserver.management.JVM.stats_monitor.FullGCCCount.threshold	10
ejbserver.management.statistics.interval	60
ejbserver.management.stats_file.base_time	0
ejbserver.management.stats_file.dir	<b>【Windows の場合】</b> <製品の作業ディレクトリ>¥ejb ¥<サーバ名称>¥stats <b>【UNIX の場合】</b>

param-name 指定値	省略値
ejbserver.management.stats_file.dir	<製品の作業ディレクトリ>/ejb/<サーバ名称>/stats
ejbserver.management.stats_file.enabled	true
ejbserver.management.stats_file.num	7
ejbserver.management.stats_file.period	24

#### (6).ejbserver.manager から始まるパラメタ

ejbserver.manager から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-99.ejbserver.manager から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.conf	<Application Server のインストールディレクトリ>manager/config/manager.<実サーバ名>.properties
ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.enabled	false
ejbserver.manager.agent.MEventAgent.conf	<Application Server のインストールディレクトリ>manager/config/mevent.<実サーバ名>.properties
ejbserver.manager.agent.MEventAgent.enabled	false

#### (7).ejbserver.naming から始まるパラメタ

ejbserver.naming から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-100.ejbserver.naming から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.naming.port	900

#### (8).ejbserver.rmi から始まるパラメタ

ejbserver.rmi から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-101.ejbserver.rmi から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.rmi.naming.host	なし
ejbserver.rmi.naming.port	23152
ejbserver.rmi.remote.listener.port	0

#### (9).ejbserver.server から始まるパラメタ

ejbserver.server から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-102 ejbserver.server から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.server.prf.PRFID	<使用する PRF の PRF 識別子>
ejbserver.server.threaddump.filenum	256

**(10) ejbserver.watch から始まるパラメタ**

ejbserver.watch から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-103 ejbserver.watch から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.watch.defaultRequestQueue.enabled	false
ejbserver.watch.defaultRequestQueue.interval	30
ejbserver.watch.defaultRequestQueue.threshold	80
ejbserver.watch.defaultRequestQueue.writefile.enabled	false
ejbserver.watch.enabled	true
ejbserver.watch.fileDescriptor.enabled	true
ejbserver.watch.fileDescriptor.interval	60
ejbserver.watch.fileDescriptor.threshold	2147483647
ejbserver.watch.fileDescriptor.writefile.enabled	true
ejbserver.watch.memory.enabled	true
ejbserver.watch.memory.interval	60
ejbserver.watch.memory.threshold	80
ejbserver.watch.memory.writefile.enabled	true
ejbserver.watch.thread.enabled	true
ejbserver.watch.thread.interval	60
ejbserver.watch.thread.threshold	2147483647
ejbserver.watch.thread.writefile.enabled	true
ejbserver.watch.threaddump.enabled	true
ejbserver.watch.threaddump.interval	30
ejbserver.watch.threaddump.threshold	80
ejbserver.watch.threaddump.writefile.enabled	true

**(11) vbroker から始まるパラメタ**

vbroker から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-104 vbroker から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
vbroker.orb.htc.comt.entryCount	120000
vbroker.se.iiop_tp.host	なし
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port	0

## (12) webserver.connector から始まるパラメタ

webserver.connector から始まるパラメタについて次の表に示します。

表 4-105 webserver.connector から始まるパラメタ

param-name 指定値	省略値
webserver.connector.ajp13.bind_host	なし
webserver.connector.ajp13.max_threads	1
webserver.connector.ajp13.port	8007
webserver.connector.http.bind_host	なし
webserver.connector.http.permitted.hosts*	なし

注※

param-value に値を複数指定する際は、コンマ「,」で区切って指定します。

(例)

```
<param-value>値 1,値 2,値 3</param-value>
```

## 4.16.2 SFO サーバ用オプション定義を設定するパラメタ

SFO サーバ用オプション定義を設定するパラメタについて、次の表に示します。なお、「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「2.3 usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル)」を参照してください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

表 4-106 SFO サーバ用オプション定義を設定するパラメタ

param-name 指定値	省略値
add.jvm.arg*	なし

注※

値の指定形式について、次に示します。

(例)

```
<param-name>add.jvm.arg</param-name>
```

```
  <param-value>-Xms256m</param-value>
```

```
<param-value>-Xmx512m</param-value>
```

```
:
```

### 4.16.3 SFO サーバの JavaVM のシステムプロパティに設定できるパラメタ

SFO サーバの JavaVM のシステムプロパティを設定するパラメタについて説明します。

SFO サーバの JavaVM のシステムプロパティを指定する場合の指定形式を次に示します。

#### 指定形式

```
<param-name>パラメタ名</param-name>
<param-value>値</param-value>
```

値を複数指定する際には、複数の<param-value>を指定します。

#### 値を複数指定する場合の指定形式

```
<param-name>パラメタ名</param-name>
<param-value>値</param-value>
<param-value>値</param-value>
```

SFO サーバの JavaVM のシステムプロパティを設定するパラメタについて、次の表に示します。なお、「param-value 指定値」に指定する値の詳細については、「2.4 usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル)」を参照してください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

表 4-107 SFO サーバの JavaVM のシステムプロパティに設定できるパラメタ

param-name 指定値	省略値
ejbserver.ctm.enabled	false
ejbserver.manager.agent.Agent.conf*	<Application Server のインストールディレクトリ>manager/config/mngagent.<実サーバ名>.properties
ejbserver.manager.agent.Agent.enabled*	true
vbroker.orb.htc.comt.fileCount	3
vbroker.orb.htc.tracePath	<b>【Windows の場合】</b> <製品の作業ディレクトリ>%ejb*<サーバ名称>%logs%TPB%logj <b>【UNIX の場合】</b> <製品の作業ディレクトリ>/ejb/<サーバ名称>/logs/TPB/logj
webserver.sfo.negotiation.ignore_serverId	false

#### 注※

Management Server が自動で設定するため、指定は非推奨です。

#### 参考

なお、この項の表で示すパラメタは、次の形式で指定することもできます。

#### 指定形式

```
<param-name>ex.properties</param-name>
<param-value>パラメタ名=値</param-value>
```

値を複数指定する際には、複数の<param-value>を指定します。

値を複数指定する場合の指定形式

```
<param-name>ex.properties</param-name>
<param-value>パラメタ名=値</param-value>
<param-value>パラメタ名=値</param-value>
```

#### 4.16.4 SFO サーバの拡張パラメタ

SFO サーバの拡張パラメタを設定するパラメタについて説明します。

SFO サーバの拡張パラメタを指定する場合の指定形式を次に示します。

指定形式

```
<param-name>パラメタ名</param-name>
<param-value>値</param-value>
```

値を複数指定する際には、複数の<param-value>を指定します。

値を複数指定する場合の指定形式

```
<param-name>パラメタ名</param-name>
<param-value>値</param-value>
<param-value>値</param-value>
```

#### 4.16.5 運用監視エージェントプロパティを設定するパラメタ

運用監視エージェントプロパティを設定するパラメタについて次の表に示します。

「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「10.6 mngagent.<実サーバ名>.properties（運用監視エージェントプロパティファイル）」を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

表 4-108 運用監視エージェントプロパティを設定するパラメタ

param-name 指定値	省略値
mngagent.connector.host	vbroker.se.iiop_tp.host に定義された値
mngagent.connector.port	vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port に定義された値

#### 4.16.6 Management イベント発行用プロパティを設定するパラメタ

Management イベント発行用プロパティを設定するパラメタについて次の表に示します。

「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「10.12 Management イベント発行用プロパティファイル」を参照してください。また、参照する場合はキーをパラメタに読み替えてください。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

表 4-109 Management イベント発行用プロパティを設定するパラメタ

param-name 指定値	省略値
manager.mevent.message_id.list	なし
manager.mevent.retry.interval	10

param-name 指定値	省略値
manager.mevent.retry.limit	0
manager.mevent.send.max	10
manager.mevent.send.timeout	90
manager.mevent.sender.bind.host	なし

## 4.16.7 JP1 連携を設定するパラメタ

JP1 連携を設定するパラメタについて次の表に示します。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

表 4-110 JP1 連携を設定するパラメタ

param-name 指定値	param-value の指定内容	省略値
manager.jp1event.system.filtering.severity.alert	<p>システムが発行する JP1 イベントのフィルタリングを設定する項目です。</p> <p>JP1 イベント重大度「Alert」を発行するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。</p> <p>true : 発行します。</p> <p>false : 発行しません。</p>	false
manager.jp1event.system.filtering.severity.critical	<p>システムが発行する JP1 イベントのフィルタリングを設定する項目です。</p> <p>JP1 イベント重大度「Critical」を発行するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。</p> <p>true : 発行します。</p> <p>false : 発行しません。</p>	false
manager.jp1event.system.filtering.severity.emergency	<p>システムが発行する JP1 イベントのフィルタリングを設定する項目です。</p> <p>JP1 イベント重大度「Emergency」を発行するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。</p> <p>true : 発行します。</p> <p>false : 発行しません。</p>	false



param-name 指定値	param-value の指定内容	省略値
manager.jp1event.system.filtering.severity.error	<p>システムが発行する JP1 イベントのフィルタリングを設定する項目です。</p> <p>JP1 イベント重大度「Error」を発行するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。</p> <p>true : 発行します。</p> <p>false : 発行しません。</p>	false
manager.jp1event.system.filtering.severity.information	<p>システムが発行する JP1 イベントのフィルタリングを設定する項目です。</p> <p>JP1 イベント重大度「Information」を発行するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。</p> <p>true : 発行します。</p> <p>false : 発行しません。</p>	false
manager.jp1event.system.filtering.severity.notice	<p>システムが発行する JP1 イベントのフィルタリングを設定する項目です。</p> <p>JP1 イベント重大度「Notice」を発行するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。</p> <p>true : 発行します。</p> <p>false : 発行しません。</p>	false
manager.jp1event.system.filtering.severity.warning	<p>システムが発行する JP1 イベントのフィルタリングを設定する項目です。</p> <p>JP1 イベント重大度「Warning」を発行するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。</p> <p>true : 発行します。</p> <p>false : 発行しません。</p>	false

## 4.17 論理 CTM ドメインマネージャで指定できるパラメータ

ここでは、論理 CTM ドメインマネージャで指定できるパラメータについて説明します。

論理 CTM ドメインマネージャで指定できるパラメータについて次の表に示します。「省略値」とは、パラメータの指定がない場合に仮定される値です。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

表 4-111 論理 CTM ドメインマネージャに設定できるパラメータ

param-name 指定値	param-value の指定内容	省略値	関連情報
cdm.agent.port	スマートエージェントのポート番号を指定します。 このパラメータは、free-tier の場合にだけ使用します。	14000	
cdm.AliveCheckCount	CTM ドメインマネージャ間の稼働状態の監視間隔の係数を、2～255 の範囲の整数で指定します。	2	
cdm.port	CTM ドメインマネージャが CTM ドメイン構成情報を交換するために使用するポート番号を 5001～65535 の範囲の整数で指定します。 同じ CTM ドメイン名称を持つ CTM ドメインマネージャを複数のホストで開始する場合、-CTMPort オプションに同じ値を指定してください。省略した場合はサービス名ファイルが参照されます。サービス名ファイルに指定がないときは"20137"が設定されます。 CTM ドメインマネージャは一つのポート番号で tcp および udp の両方のプロトコルを使用します。そのため、CTM ドメインマネージャが使用するポート番号をほかの udp のポート番号として使用しないでください。	20137	
cdm.prf.PRFID	PRF 識別子を指定します。 PRF デーモン起動時に PRF 識別子を指定した場合に、同じ PRF 識別子を指定します。 PRF デーモン起動時に PRF 識別子を省略した場合は、指定しないでください。 PRF 識別子が一致しないと、性能解析トレースが取得できません。 このパラメータは、free-tier の場合にだけ使用します。	なし	

param-name 指定値	param-value の指定内容	省略値	関連情報
cdm.SendHost <sup>**</sup>	CTM ドメイン構成情報の配布先となる、異なるネットワークセグメントにある CTM ドメインマネージャが動作するホストの IP アドレスを指定します。このとき指定する IP アドレスは、ホストの定義の <host-name> タグで指定する IP アドレスです。 この指定によって、複数のネットワークセグメントで構成した CTM ドメインで、CTM 構成情報を配布できるようになります。	なし	
cdm.SendHostInterval	cdm.SendHost で指定したホストに対して CTM ドメイン構成情報を送信する間隔を 0~65535 の範囲の整数（単位：秒）で指定します。 なお、指定しない場合は、ブロードキャスト間隔と同じであることを示します。0 を指定した場合は送信しないことを示します。	なし	
cdm.SendInterval	CTM ドメインマネージャが CTM ドメイン構成情報をネットワークセグメント内にブロードキャストする間隔を 0~65535 の範囲の整数（単位：秒）で指定します。0 は送信しないことを表します。	60	
cdm.SubnetMask	ネットワークのサブネットマスクを指定します。	255.255.255.0	
ctmdomname	CTM ドメインマネージャが属する CTM ドメイン名称を 31 文字以内で指定します。使用できる文字は英数字、アンダースコア「_」です。「CTMDOMAIN」以外の、「CTM」または「ctm」で始まる文字列は指定しないでください。 同一ホスト内でユニークな名称にする必要があります。	CTMDOMAIN	「機能解説 拡張編」の「3.3.5 CTM ドメインと CTM ドメインマネージャ」
ctmspool	CTM 実行環境ディレクトリを指定します。ファイルセパレータには「/」を使用します。	&{cosminexus.home} /CTM/spool	

## 注※

param-value に値を複数指定する際は、コンマ「,」で区切って指定します。

(例)

<param-value>値 1,値 2,値 3</param-value>

## 4.18 論理 CTM で指定できるパラメタ

ここでは、論理 CTM で指定できるパラメタについて説明します。

論理 CTM で指定できるパラメタについて次の表に示します。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

表 4-112 論理 CTM に設定できるパラメタ

param-name 指定値	param-value の指定内容	省略値	関連情報
ctm.Agent	CTM レギュレータの ORB ゲートウェイ機能を使用するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。 バッチアプリケーションを実行するシステムの場合は、必ず「1」を指定してください。 1： 使用します。 0： 使用しません。	0	
ctm.cdm	利用する CTM ドメインマネージャの CTM ドメイン名を指定します。同一ホスト内の CTM ドメインマネージャの CTM ドメイン名を指定してください。	CTMDOMAIN	
ctm.CreatePolicy	create 要求の CTM ノード選択ポリシーを選択します。次のどちらかを指定します。 normalDispatch： スケジュールキューの負荷状況に応じて CTM デーモンを選択します。 priorDispatch： create 要求を受け付けた CTM デーモンを、優先的に選択します。ただし、その CTM デーモンに登録されているスケジュールキューが高負荷状態、および閉塞状態の場合は、ほかの CTM デーモンを選択します。	normalDispatch	「機能解説 拡張編」の「3.8 リクエストの負荷分散」
ctm.DCSendTimeOut	CTM 間通信のリクエスト転送時のタイムアウト時間を 0~2147483647 の範囲の整数（単位：秒）で指定します。 0 は設定しないことを表します。	180	
ctm.DispatchParallelCount	自 CTM 内でクライアントからの要求メッセージを J2EE サーバに振り分けるスレッドの最大値を 0~32767 の範囲の整数で指定します。	255	

param-name 指定値	param-value の指定内容	省略値	関連情報
ctm.DispatchPolicy	<p>リクエストのスケジュールポリシーを選択します。</p> <p>normalDispatch :</p> <p>スケジュールキューの負荷状況に応じてリクエストをスケジュールします。</p> <p>priorDispatch :</p> <p>リクエストを受け付けた CTM デーモンに登録されているスケジュールキューに、優先的にリクエストをスケジュールします。ただし、その CTM デーモンに登録されているスケジュールキューが高負荷状態、および閉塞状態の場合は、ほかの CTM デーモンに登録しているスケジュールキューにリクエストをスケジュールします。</p>	priorDispatch	「機能解説 拡張編」の「3.8 リクエストの負荷分散」
ctm.EjbPort	EJB クライアントが CTM デーモンの新しいコネクションを探すときに使用するポート番号を 5001～65535 の範囲の整数で指定します。指定しない場合は OS が自動的に割り当てたポート番号を使用します。	自動	
ctm.LoadCheckInterval	スケジュールキューの負荷状況を監視する時間間隔を 0 から 32767 の範囲の整数（単位：秒）で指定します。0 は一定時間間隔での負荷状況監視を行わないことを表します。	10	
ctm.LogFileCount	CTM ログファイルの面数を指定します。指定できる値は、2, 4, 8, 16, 24, 32 です。	2	
ctm.LogFileSize	CTM ログファイルの 1 ファイルの最大サイズを 1～3 の範囲の整数（単位：メガバイト）で指定します。	1	
ctm.MaxRequestCount	CTM に登録する CTM キューが、同時に登録できるリクエスト数を 1～32767 の範囲の整数で指定します。	50	
ctm.ns.port	CTM と対となるネーミングサービスのポート番号を 1～65535 の範囲の整数で指定します。	20348	
ctm.NsBindHost	<p>一つのマシンに複数の IP アドレスが割り当てられている場合に、特定の IP アドレスに割り当てられているかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。</p> <p>true :</p> <p>特定の IP アドレスに割り当てます。</p>	false	

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	param-value の指定内容	省略値	関連情報
ctm.NsBindHost	false : 特定の IP アドレスに割り当てません。	false	
ctm.port	CTM が使用するポート番号を 5001～65535 の範囲の整数で指定します。	20138	
ctm.QueueCount	CTM に登録できる CTM キュー数を 1～32767 の範囲の整数で指定します。	128	
ctm.QueueDeleteWait	異常終了した J2EE サーバが登録していた CTM キューを削除しないで保留し、J2EE サーバの再開を待つ場合の待ち時間を、0～2147483647 の範囲の整数 (単位: 秒) で指定します。	0	
ctm.QueueInterval	システム停止しきい値の処理率を求める時間間隔を 1～32767 の範囲の整数 (単位: 秒) で指定します。	なし	
ctm.QueueRate	キュー滞留監視状態へ移行する滞留率のしきい値を 0～99 の範囲の整数 (単位: %) で指定します。	なし	
ctm.QueueRegistCount	同じ CTM キューを共有できる J2EE アプリケーション数を 1～32767 の範囲の整数で指定します。	64	
ctm.RegOption	CTM レギュレータの設定ファイルを、CTM 稼働ホストの絶対パス (256 文字以内の文字列) で指定します。	なし	
ctm.RegStart	CTM 開始時に自動開始する CTM レギュレータのプロセス数を 0～32767 の範囲の整数で指定します。	1	
ctm.RequestCount	何回タイムアウトが発生したら自動閉塞するかを 1～32767 の範囲の整数で指定します。	なし	
ctm.RequestInterval	タイムアウト発生回数を求める時間間隔を 1～32767 の範囲の整数 (単位: 秒) で指定します。	なし	
ctm.ServerCacheSize	CTM ドメインの構成情報を格納するキャッシュテーブルのサイズを 1～32767 の範囲の整数 (単位: キロバイト) で指定します。	1024	
ctm.ServerConnectCount	CTM に接続する J2EE サーバの最大数を 0～32767 の範囲の整数で指定します。	64	
ctm.StatsFileCount	CTM 稼働統計情報の世代数を指定します。 指定できる値は、3, 4, 16, 32, 64, 128, 256 です。	3	

param-name 指定値	param-value の指定内容	省略値	関連情報
ctm.StatsFileSize	CTM 稼働統計情報のファイルのサイズをメガバイト単位で指定します。 指定できる値は、1, 2, 3, 4, 8, 16, 32, 64, 128, 256, 512, 1024 です。	3	
ctm.StatsInterval	CTM 稼働統計情報をファイルに出力する時間間隔を 1~1440 の範囲の整数（単位：分）で指定します。	1	
ctm.StatsUse	CTM 稼働統計情報を取得するかどうかを設定します。次のどちらかを指定します。 Y： 取得します。 N： 取得しません。	Y	
ctm.SystemDown	システムを停止するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。 1： 停止します。 0： 停止しません。	1	
ctm.SystemDownRate	システム停止へ移行する処理率のしきい値を 1~100 の範囲の整数（単位：%）で指定します。	なし	
ctm.TSCGwOption	OTM ゲートウェイの設定ファイルを、CTM 稼働ホストの絶対パス（256 文字以内の文字列）で指定します。	なし	
ctm.TSCGwStart	CTM 開始時に自動開始する OTM ゲートウェイのプロセス数を 0~32767 の範囲の整数で指定します。 0 は OTM ゲートウェイを起動しないことを表します。	0	
ctm.WatchQueue	キューの滞留監視をするかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。 true： キューの停止監視をします。 false： キューの停止監視をしません。	false	
ctm.WatchRequest	J2EE サーバへのリクエストの送信でタイムアウトが発生したときにキューを閉塞するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。 true： キューを閉塞します。	false	

#### 4 Smart Composer 機能で使用するファイル

param-name 指定値	param-value の指定内容	省略値	関連情報
ctm.WatchRequest	false : キューを閉塞しません。	false	
ctmid	CTM の識別子を 31 文字以内の文字列で指定します。使用できる文字は英数字, アンダースコア 「_」, およびピリオド 「.」 です (ピリオドは IP アドレスの場合だけ指定できます)。「CTM」または「ctm」で始まる文字列は指定しないでください。 このパラメタを指定する場合, 運用管理ドメイン内のすべての論理 CTM サーバで一意的な値を指定する必要があります。 なお, IP アドレスを指定した場合, ピリオド 「.」 は, アンダースコア 「_」 に置き換えられます。	<ホストの定義の <agent-host>タグに 指定された値 >*_<CTM のポート 番号>	

注※

<agent-host>タグにホスト名を指定している場合, IP アドレスに変換した値が指定されます。また, <agent-host>タグに IP アドレスを指定している場合, ピリオド 「.」 はアンダースコア 「\_」 に置き換えられます。



## 4.19 論理スマートエージェントで指定できるパラメタ

ここでは、論理スマートエージェントで指定できるパラメタについて説明します。

論理スマートエージェントで指定できるパラメタについて次の表に示します。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

表 4-113 論理スマートエージェントに設定できるパラメタ

param-name 指定値	param-value の指定内容	省略値
smartagent.port	スマートエージェントが監視するポート番号を 5001～65535 の範囲の整数で指定します。	14000

## 4.20 論理ユーザーサーバで指定できるパラメタ

ここでは、論理ユーザーサーバで指定できるパラメタについて説明します。

「param-name 指定値」に対応する param-value の指定内容については、「10.21 論理ユーザーサーバ定義ファイル」を参照してください。また、参照する場合は要素名をパラメタに読み替えてください。

論理ユーザーサーバで指定できるパラメタについて次の表に示します。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

表 4-114 論理ユーザーサーバに設定できるパラメタ

param-name 指定値	省略値
forceStop.arg <sup>*1</sup>	なし
getProcessID.arg <sup>*1</sup>	なし
getProcessID.timeout <sup>*2</sup>	180
group-id	なし
isAlive.arg <sup>*1</sup>	なし
isAlive.timeout <sup>*2</sup>	180
start.arg <sup>*1</sup>	なし
start-time-watch-interval	1
stop.arg <sup>*1</sup>	なし
type	direct
user-id	なし
watch-interval <sup>*3</sup>	運用管理エージェントプロパティファイルの adminagent.userserver.watch.interval キーの値 (adminagent.userserver.watch.interval キーも省略した場合は 10)
working-dir	<Application Server のインストールディレクトリ>/manager/bin

注※1

「10.21 論理ユーザーサーバ定義ファイル」の要素名<arg>についての説明を参照してください。

注※2

「10.21 論理ユーザーサーバ定義ファイル」の要素名<timeout>についての説明を参照してください。

注※3

運用管理エージェントプロパティファイルの adminagent.userserver.watch.interval キーと同時に指定した場合は、このパラメタに指定した値が有効になります。

## 4.21 論理ネーミングサービスで指定できるパラメタ

ここでは、論理ネーミングサービスで指定できるパラメタについて説明します。

論理ネーミングサービスで指定できるパラメタについて次の表に示します。なお、表中の「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。

表 4-115 論理ネーミングサービスに設定できるパラメタ

param-name 指定値	param-value の指定内容	省略値
ns.agenthost	<p>ホスト固定時に運用管理エージェントのホストで固定するかどうかを指定します。</p> <p>true :</p> <p>    特定の IP アドレスに割り当てます。</p> <p>false :</p> <p>    特定の IP アドレスに割り当てません。</p>	false
ns.agent.port	スマートエージェントのポート番号を指定します。	14000
ns.bind.host	<p>特定の IP アドレスに割り当てるかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。</p> <p>true :</p> <p>    特定の IP アドレスに割り当てます。</p> <p>false :</p> <p>    特定の IP アドレスに割り当てません。</p>	false
port	ネーミングサービスが稼働する時に使用するポート番号を指定します。	900



# 5

## サーバ管理コマンドで使用する ファイル

この章では、サーバ管理コマンドで使用するファイルの形式、格納先、機能、指定できるキーなどについて説明します。

## 5.1 サーバ管理コマンドで使用するファイルの一覧

サーバ管理コマンドで使用するファイルの一覧を、次の表に示します。

表 5-1 サーバ管理コマンドで使用するファイルの一覧

ファイル名	分類	概要	参照先
usrconf (UNIX 用)	サーバ管理コマンド用オプション定義ファイル	サーバ管理コマンドを実行する JavaVM の起動オプションを指定します。 このファイルは、UNIX 用です。	5.2
usrconf.bat (Windows 用)	サーバ管理コマンド用オプション定義ファイル	サーバ管理コマンドを実行する JavaVM の起動オプションを指定します。 このファイルは、Windows 用です。	5.3
usrconf.properties	サーバ管理コマンド用システムプロパティファイル	サーバ管理コマンドを実行する JavaVM のシステムプロパティを指定します。	5.4

## 5.2 usrconf (サーバ管理コマンド用オプション定義ファイル)

### (1) 形式

シェルスクリプトファイル形式のファイルです。

次のようにキーを指定します。

```
set <キー名称>="<値>"
```

### (2) ファイルの格納先

```
/opt/Cosminexus/CC/admin/usrconf/
```

### (3) 機能

サーバ管理コマンドを実行する JavaVM の起動オプションを指定します。なお、このファイルは、UNIX 用です。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次の表に示します。

キー名称	内容	デフォルト
USRCONF_JVM_ARGS	指定されたオプションを使って JavaVM を起動します。次の JavaVM のオプションを指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• -Xms&lt;size&gt;</li> <li>• -Xmx&lt;size&gt;</li> <li>• -Xss&lt;size&gt;</li> <li>• -Xdebug</li> <li>• -Xrun&lt;libraryName&gt;</li> <li>• -Dejbserver.log.directory</li> <li>• -XX:MetaspaceSize</li> <li>• -XX:MaxMetaspaceSize</li> </ul>	デフォルト値については「5.2(5) サーバ管理コマンドを実行する JavaVM の起動オプションのデフォルト値 (usrconf の場合)」を参照してください。
USRCONF_JVM_CLPATH	設定されている値をクラスパスに追加します。複数指定したい場合は、コロン (:) で区切ってください。	なし
USRCONF_JVM_LIBPATH	設定されている値をライブラリ検索パス環境変数に追加します。複数指定したい場合は、コロン (:) で区切ってください。	なし

### (5) サーバ管理コマンドを実行する JavaVM の起動オプションのデフォルト値 (usrconf の場合)

USRCONF\_JVM\_ARGS に指定できる JavaVM のオプションの説明を次に示します。

## 5 サーバ管理コマンドで使用するファイル

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
-Xms	Java ヒープの初期サイズを設定します。	入力は制限されません。	なし	06-00
-Xmx	<p>Java ヒープの最大サイズを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• コマンドの実行でメモリ不足が発生しコマンドが正常に実行できない場合は、このオプションを指定して、メモリ割り当てプールの最大サイズを拡張することで対応します。</li> <li>• 操作対象ファイルのファイルサイズが大きいと、サーバ管理コマンドを起動したコンソールに、「java.lang.OutOfMemoryError」メッセージが表示されることがあります。この場合は、このオプションおよび-Xms オプションを使用して、JavaVM のメモリ割り当てサイズを妥当な値に変更してください。</li> </ul> <p>記述例</p> <pre>set USRCONF_JVM_ARGS="-Xms64m -Xmx256m"</pre>	入力は制限されません。	512m <b>注意</b> アプリケーションサーバのバージョンが 08-00 より前の場合、デフォルト値はありません。	06-00
-Xss	1 スタック領域の最大サイズを設定します。	入力は制限されません。	なし	06-00
-Xdebug	デバッガが有効な状態で起動します。	入力は制限されません。	なし	06-00
-Xrun	ライブラリをロードします。	入力は制限されません。	なし	06-00
-Dejbsserver.log.directory	ログファイルの出力先のパスを指定します。ディレクトリのパスの区切り記号には、"/"を使用してください。	入力は制限されません。	なし	06-00
-XX:MetaspaceSize	Metaspace 領域の FullGC のしきい値を変更する計算に使用する値であり、しきい値の最低値となる値を指定します。	入力は制限されません。	なし	09-70
-XX:MaxMetaspaceSize	Metaspace 領域の最大サイズを指定します。	入力は制限されません。	なし	09-70

### (6) 記述例

```
#!/bin/csh -f
set USRCONF_JVM_ARGS="-Xms64m -Xmx512m"
set USRCONF_JVM_CLPATH=/usr/home/lib/mylib.jar
set USRCONF_JVM_LIBPATH=/usr/home/bin
```



## (7) 注意事項

- シェルで設定されている CLASSPATH 環境変数は、サーバ管理コマンドには無効ですが、そのほかの環境変数 (PATH など) は有効です。
- 指定する値に次の文字を使用しないでください。  
", &, |, <, >
- Management Server を使用する Eclipse プラグインを用いて操作を行う場合は、このファイルの指定は無効です。Management Server を使用する Eclipse プラグインを用いて操作を行う場合は、運用管理エージェント用オプション定義ファイル (adminagentuser.cfg) に指定してください。

## 5.3 usrconf.bat (サーバ管理コマンド用オプション定義ファイル)

### (1) 形式

Win32 のバッチファイル形式のファイルです。

次のようにキーを指定します。

```
set <キー名称>=<値>
```

### (2) ファイルの格納先

<Application Serverのインストールディレクトリ>%CC%admin%usrconf%

### (3) 機能

サーバ管理コマンドを実行する JavaVM の起動オプションを指定します。なお、このファイルは、Windows 用です。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次の表に示します。

キー名称	内容	デフォルト
USRCONF_JVM_ARGS	指定されたオプションを使って JavaVM を起動します。次の JavaVM のオプションを指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• -Xms&lt;size&gt;</li> <li>• -Xmx&lt;size&gt;</li> <li>• -Xss&lt;size&gt;</li> <li>• -Xdebug</li> <li>• -Xrun&lt;libraryName&gt;</li> <li>• -Dejbsserver.log.directory</li> <li>• -XX:MetaspaceSize</li> <li>• -XX:MaxMetaspaceSize</li> </ul>	デフォルト値については「(5) サーバ管理コマンドを実行する JavaVM の起動オプションのデフォルト値 (usrconf.bat の場合)」を参照してください。
USRCONF_JVM_CLASSPATH	設定されている値をクラスパスに追加します。複数指定したい場合は、セミコロン (;) で区切ってください。	なし
USRCONF_JVM_LIBPATH	設定されている値をライブラリ検索パス環境変数に追加します。複数指定したい場合は、セミコロン (;) で区切ってください。	なし

### (5) サーバ管理コマンドを実行する JavaVM の起動オプションのデフォルト値 (usrconf.bat の場合)

USRCONF\_JVM\_ARGS に指定できる JavaVM のオプションの説明を次に示します。

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
-Xms	Java ヒープの初期サイズを設定します。	入力には制限されません。	なし	06-00
-Xmx	Java ヒープの最大サイズを設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>コマンドの実行でメモリ不足が発生しコマンドが正常に実行できない場合は、このオプションを指定して、メモリ割り当てプールの最大サイズを拡張することで対応します。</li> <li>操作対象ファイルのファイルサイズが大きいと、サーバ管理コマンドを起動したコンソールに、<code>[java.lang.OutOfMemoryError]</code> メッセージが表示されることがあります。この場合は、このオプションおよび-Xms オプションを使用して、JavaVM のメモリ割り当てサイズを適切な値に変更してください。</li> </ul> <p>記述例</p> <pre>set USRCONF_JVM_ARGS="-Xms64m -Xmx256m"</pre>	入力には制限されません。	512m <b>注意</b> アプリケーションサーバのバージョンが 08-00 より前の場合、デフォルト値はありません。	06-00
-Xss	1 スタック領域の最大サイズを設定します。	入力には制限されません。	なし	06-00
-Xdebug	デバッガが有効な状態で起動します。	入力には制限されません。	なし	06-00
-Xrun	ライブラリをロードします。	入力には制限されません。	なし	06-00
-Dejbsrvr.log.directory	ログファイルの出力先のパスを指定します。ディレクトリのパスの区切り記号には、 <code>"¥"</code> を使用してください。	入力には制限されません。	なし	06-00
-XX:MetaspaceSize	Metaspace 領域の FullGC のしきい値を変更する計算に使用する値であり、しきい値の最低値となる値を指定します。	入力には制限されません。	なし	09-70
-XX:MaxMetaspaceSize	Metaspace 領域の最大サイズを指定します。	入力には制限されません。	なし	09-70

## (6) 記述例

```
set USRCONF_JVM_ARGS=-Xms64m -Xmx512m
set USRCONF_JVM_CLASSPATH=C:¥home¥lib¥mylib.jar
set USRCONF_JVM_LIBPATH=C:¥home¥bin
```

## (7) 注意事項

- コマンドプロンプトで設定されている CLASSPATH 環境変数は、サーバ管理コマンドには無効ですが、そのほかの環境変数 (PATH など) は有効です。
- 指定する値に次の文字を使用しないでください。  
", &, |, <, >
- Management Server を使用する Eclipse プラグインを用いて操作を行う場合は、このファイルの指定は無効です。Management Server を使用する Eclipse プラグインを用いて操作を行う場合は、運用管理エージェント用オプション定義ファイル (adminagentuser.cfg) に指定してください。

## 5.4 usrconf.properties (サーバ管理コマンド用システムプロパティファイル)

---

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 値の後ろには、空白やコメントなどの文字列は追加できません。追加した場合、不正な値と解釈されます。  
(例) <キー名称> = <値> #<コメント>
- 記載する文字は Java の仕様に従って、ISO 8859-1 文字エンコーディングを使用してください。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
<Application Server のインストールディレクトリ>%CC%admin%usrconf%
- UNIX の場合  
/opt/Cosminexus/CC/admin/usrconf/

### (3) 機能

サーバ管理コマンドを実行する JavaVM のシステムプロパティを指定します。

### (4) サーバ管理コマンドの予約済みキー

サーバ管理コマンドでは、次に示す接頭子で始まるキーを内部的に利用します。このため、アプリケーションでこれらの接頭子で始まるキーを利用してはいけません。

- ejbserver.\*
- webserver.\*
- applient.\*
- j2eeserver.\*

### (5) サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー

サーバ管理コマンドでは、次に示すシステムプロパティのキーに値を設定することで、J2EE サーバの動作をカスタマイズできます。

ここでは、キーを次の分類に分けて説明します。

- ejbserver.cui から始まるキー

- ejbserver.deploy から始まるキー
- ejbserver.logger から始まるキー
- ejbserver.naming から始まるキー
- ejbserver.rmi から始まるキー
- vbroker から始まるキー

## (a) ejbserver.cui から始まるキー

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
ejbserver.cui.checkmethod.compatible	<p>cjsetapprop または cjsetresprop コマンド実行時に引数で指定された属性ファイル中のメソッドのチェック方法を指定します。チェックの引数になるメソッドは、属性ファイルの次のタグで指定されたメソッドです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• &lt;method-permission&gt;</li> <li>• &lt;container-transaction&gt;</li> <li>• &lt;exclude-list&gt;</li> <li>• &lt;ejb-method-observation-timeout&gt;</li> <li>• &lt;ejb-transaction-timeout&gt;*</li> </ul>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 新規インストールの場合：false</li> <li>• 07-50 より前からのアップグレードの場合：true</li> </ul>	07-50
ejbserver.cui.exitcode.compatible	<p>サーバ管理コマンド実行時に排他エラーで実行できなくなった場合に、終了コード「1」を返却するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： 排他エラーの場合に終了コード「1」を返却します。</p> <p>false を指定した場合： 排他エラーの場合に終了コード「2」を返却します。 タイムアウトエラーの場合に終了コード「3」を返却します。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 新規インストールの場合：false</li> <li>• 06-00 より前からのアップデートの場合：true</li> </ul>	06-00
ejbserver.cui.logfile.compatible	<p>07-00 以降のログ出力形態にするか 06-70 以前のログ出力形態にするかを指定します。指定できる値と動作を次に示します。</p> <p>false を指定した場合： 07-00 以降のログ出力形態にします。</p> <p>true を指定した場合： 06-70 以前のログ出力形態にします。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-00

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
ejbserver.cui.logfile.compatible	<p>不正な値(すべて小文字の true または false 以外)を指定した場合は、メッセージを出力し、デフォルト値を設定します。</p> <p>Management Server を使用する Eclipse プラグインから操作した場合、この指定は無効となり、false が仮定されます。</p> <p>なお、サーバ管理コマンドのログ出力ディレクトリに必要なディスク容量は、次の式で算出できます。</p> <p>false を指定した場合： 18,624KB + TPBroker のトレース情報</p> <p>true を指定した場合： 51,655KB + TPBroker のトレース情報</p> <p>TPBroker のトレース情報を出力するために必要なディスク容量については、マニュアル「TPBroker 運用ガイド」のディスク占有量に関する説明を参照してください。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-00
ejbserver.cui.optionalname.enabled	<p>JNDI のユーザ指定名前空間管理機能を使用する場合に、サーバ管理コマンドから EJBHome オブジェクトに別名 (Optional Name) を指定するときに指定します。</p> <p>true を指定した場合： サーバ管理コマンドから別名を指定できます。</p> <p>false を指定した場合： サーバ管理コマンドから別名を指定できません。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	05-05

注※ このキーの設定値によるチェック内容は次のとおりです。

表 5-2 キーの設定値によるチェック内容一覧

属性ファイル中のメソッド指定箇所	プロパティ指定値	
	true	false
<method-permission>	○	○
<container-transaction>	×	○
<exclude-list>	○	○
<ejb-method-observation-timeout>	×	○
<ejb-transaction-timeout>	×	○

## 5 サーバ管理コマンドで使用するファイル

(凡例)

○：指定されたメソッドが Enterprise Bean 中がない場合エラーとする。

×：指定されたメソッドが Enterprise Bean 中にあるかどうかのチェックを実施しない。

### (b) ejbserver.deploy から始まるキー

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR	関連情報
ejbserver.deploy.annotations.load_check.enabled	<p>アノテーション情報取得のためのクラスロード時に例外が発生した場合に無視するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： エラーとなり処理を中断します。</p> <p>false を指定した場合： 例外ログを取得し処理を続行します。</p>	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-00	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「12.3 ロード対象のクラスとロード時に必要なクラスパス」

### (c) ejbserver.logger から始まるキー

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
ejbserver.logger.enabled.*	<p>サーバ管理コマンドが出力するログレベルを指定します。一つだけ指定した場合は、該当するログレベルのログだけが出力されます。複数指定した場合は、レベル名の文字列の間をコンマ (,) で区切ります。Error, Warning, Information, Debug のうち、一つまたは複数指定します。通常はデフォルトのまま利用してください。</p>	<p>次に示す文字列をコンマ (,) で区切って指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Error</li> <li>• Warning</li> <li>• Information</li> <li>• Debug</li> </ul>	Error, Warning	06-00

### (d) ejbserver.naming から始まるキー

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
ejbserver.naming.host	<p>サーバ管理コマンド実行時に、ネーミングサービスとして利用する CORBA ネーミングサービスが起動しているホスト名称または IP アドレスを指定します。</p> <p>ネーミングの切り替え機能を使用する場合、ホスト名称として"localhost"は使用しないでください。CORBA ネーミングサービスが起動しているホスト名称または IP アドレスを指定してください。</p> <p>CORBA ネーミングサービスを自動起動モード (ejbserver.naming.startupMode=automatic または inprocess) で使用する場</p>	<p>次のどれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IPv4 アドレス</li> <li>• ホスト名 (半角英数字または記号 (.-) で指定された 255 文字以内の文字列)</li> <li>• @myhost</li> </ul>	localhost	06-00



キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
ejbserver.naming.host	合、デフォルト値 ("localhost"), または J2EE サーバを起動させるホスト名称もしくは IP アドレスを指定してください。	次のどれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>IPv4 アドレス</li> <li>ホスト名 (半角英数字または記号 ( _ . - ) で指定された 255 文字以内の文字列)</li> <li>@myhost</li> </ul>	localhost	06-00
ejbserver.naming.port	サーバ管理コマンド実行時に、J2EE サーバがネーミングサービスとして利用する CORBA ネーミングサービスのポート番号を指定します。	1~65535 の整数で指定します。	900	06-00
ejbserver.naming.protocol	サーバ管理コマンド実行時に、ネーミングサービスとして利用する CORBA ネーミングサービスへのアクセスプロトコルを指定します。現状、corbaname だけをサポートしています。ただし、旧バージョンで使用されていたプロトコル (iioploc または iopname) でも動作できます。	入力は制限されません。	corbaname	06-00

## (e) ejbserver.rmi から始まるキー

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
ejbserver.rmi.request.timeout	サーバ管理コマンドが通信障害によって応答が返らなくなった場合の通信タイムアウト時間 (単位: 秒) を 0~86400 の整数で指定します。 0 を指定した場合はタイムアウトしません。86400 を超える値を設定した場合、警告メッセージが出力されて、デフォルト値が適用されます。 J2EE サーバ用ユーザプロパティの <code>ejbserver.deploy.exclusive.lockAliveInterval</code> キーの値よりも小さい値を指定した場合、サーバ管理コマンドでタイムアウトが発生しやすくなりますので、J2EE サーバ用ユーザプロパティの <code>ejbserver.deploy.exclusive.lockAliveInterval</code> キーの値よりも大きい値を設定することを推奨します。 なお、次のコマンドでは、アプリケーションの停止処理が <code>-t</code> オプションで指定した時間内に終了しなかった場合に、強制終了処理が終了するまでのタイムアウト時間となります。 <ul style="list-style-type: none"> <li><code>cjstopapp</code></li> </ul>	0~86400 の整数で指定します。	180 (秒)	06-00

## 5 サーバ管理コマンドで使用するファイル

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
ejbserver.rmi.request.timeout	<ul style="list-style-type: none"> <li>cjreplaceapp</li> <li>cjreloadapp</li> </ul>	0~86400 の整数で指定します。	180 (秒)	06-00

### (f) vbroker から始まるキー

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
vbroker.agent.port	サーバ管理コマンド実行時に、利用するスマートエージェントのポート番号を指定します。詳細については、マニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) プログラマーズリファレンス」を参照してください。	入力は制限されません。	14000	06-00
vbroker.orb.htc.tracePath	TPBroker のトレースファイル出力先のパスを 1~210 バイトの範囲で指定します。指定したパスのサブディレクトリとして comtrc と mdltrc をあらかじめ作成しておく必要があります。デフォルトの出力先の場合、サブディレクトリ comtrc と mdltrc はサーバ初回起動時に自動作成されます。ディレクトリのパスの区切り記号には、"/"を使用してください。 例えば、work ディレクトリとして C:¥temp¥work を設定する場合、次のように指定します。 (指定例) vbroker.orb.htc.tracePath=c:/temp/work	入力は制限されません。	<Application Server のインストールディレクトリ>¥CC¥admin¥logs¥TPB¥logj または /opt/Cosminexus/CC/admin/logs/TPB/logj	06-00
vbroker.se.iiop_tp.sc m.iiop_tp.listener.port	任意の値を指定して、J2EE サーバからの受信を受け付けるポートを固定できます。ポート番号はほかのプログラムなどと重複しないようにしてください。また、J2EE サーバ用ユーザプロパティファイルにも同じキー名称が存在しますので、そのポート番号と重複しないようにしてください。 このプロパティを設定しない場合は、TPBroker によってランダムな値が設定されます。	入力は制限されません。	0	06-50

### (6) 記述例

```
ejbserver.naming.host=localhost
ejbserver.naming.port=900
```

# 6

## JPA で使用するファイル

この章では、CJPA プロバイダで使用するファイルの形式、格納先、機能、指定できるキーなどについて説明します。

## 6.1 CJPA プロバイダで使用するファイルの一覧

---

CJPA プロバイダで使用するファイルの一覧を、次の表に示します。

表 6-1 CJPA プロバイダで使用するファイルの一覧

ファイル名	概要	参照先
persistence.xml	アプリケーションサーバの JPA 機能の永続化ユニット情報を設定するためのファイルです。	6.2
O/R マッピングファイル	O/R マッピング情報を設定するためのファイルです。	6.3

## 6.2 persistence.xml

persistence.xml の構成を次に示します。

タグ名	出現パターン	説明
<persistence>	1 回	ルートタグを表します。
└─<persistence-unit>	0 回以上	永続化ユニットの定義をします。
│ └─<description>	0 または 1 回	永続化ユニットに関する説明を記述します。
│ └─<provider>	0 または 1 回	javax.persistence.spi.PersistenceProvider の実装クラス名を指定します。
│ └─<jta-data-source>	0 または 1 回	JTA トランザクションに対応したデータソースの参照を指定します。
│ └─<non-jta-data-source>	0 または 1 回	JTA トランザクションには対応していないデータソースの参照を指定します。
│ └─<mapping-file>	0 回以上	O/R マッピングファイルを指定します。
│ └─<jar-file>	0 回以上	entity クラス, embeddable クラス, および mappedsuper クラスを含む JAR ファイル名を記述します。
│ └─<class>	0 回以上	entity クラス, embeddable クラス, および mappedsuper クラスを記述します。
│ └─<exclude-unlisted-classes>	0 または 1 回	Persistence クラスを指定します。
└─<properties>	0 または 1 回	CJPA プロバイダ独自のプロパティを定義します。
│ └─<property>	0 回以上	各種のプロパティを定義します。

それぞれのタグの詳細については、「6.2.1 persistence.xml の詳細」を参照してください。

### 6.2.1 persistence.xml の詳細

#### (1) <persistence>

永続化ユニットの定義を開始することを示すルートタグです。

<persistence>タグには、XML 名前空間を指定する xmlns 要素を設定する必要があります。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-2 &lt;persistence&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
version	persistence:versionType	必須	XML スキーマのバージョン"1.0"を指定します。

## (2) &lt;persistence-unit&gt;

永続化ユニットを定義します。指定できる属性を次の表に示します。

表 6-3 &lt;persistence-unit&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	永続化ユニットの名前を指定します。 name 属性で指定する名前は、永続化ユニットがパッケージングされる範囲内で一意な名前である必要があります。 重複した名前の永続化ユニットが定義された場合は、CJPA プロバイダでは動作は保証しません。 Java EE 環境で同名の永続化ユニットを定義した場合、コンテナ側で警告メッセージを出力します。 Java EE 環境では、name 属性に指定する値は、空文字であってはなりません。空文字を指定した場合には、コンテナ側で例外が発生します。
transaction-type	persistence:persistence-unit-transaction-type	任意	EntityManager が使用するトランザクションを指定します。 JTA JTA トランザクションを使用します。 RESOURCE_LOCAL JTA トランザクションを使用しないで、独自にトランザクションを管理します。 transaction-type 属性の値を指定しなかった場合は、デフォルトである「JTA」が適用されます。 Java EE 環境で指定できる属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「5.8.1 <persistence-unit>タグに指定する属性」を参照してください。

## (3) &lt;description&gt;

永続化ユニットに関する説明を記述します。

## (4) &lt;provider&gt;

javax.persistence.spi.PersistenceProvider の実装クラス名を指定します。

CJPA プロバイダを使用する場合、com.hitachi.software.jpa.PersistenceProvider を指定します。ほかの JPA プロバイダが存在する場合など、明示的に指定する場合に記述します。なお、値を指定しない場合は、コンテナの挙動に依存します。

## 注意事項

<provider>タグの途中で空白が入ると、要素を指定していない場合と同じ処理をします。

**(5) <jta-data-source>**

JTA トランザクションに対応したデータソースの参照を指定します。

<persistence-unit>タグの transaction-type に指定した値が JTA の場合に指定します。なお、値を指定しない場合は、コンテナの挙動に依存します。

**(6) <non-jta-data-source>**

JTA トランザクションには対応していないデータソースの参照を指定します。<persistence-unit>タグの transaction-type に指定した値が RESOURCE\_LOCAL の場合に指定します。

transaction-type に指定した値が JTA の場合、CJPA プロバイダでは<non-jta-data-source>タグに値が指定されても無視します。値を指定しない場合は、コンテナの挙動に依存します。

**(7) <mapping-file>**

O/R マッピングファイルを指定します。

指定したファイルはクラスパスで指定している場所に格納されている必要があります。O/R マッピングファイルを使用しない場合、または、orm.xml を所定の位置に配置して使用する場合は、記述する必要はありません。

指定したファイルが見つからない場合、アプリケーション開始に失敗します。

**(8) <jar-file>**

entity クラス、embeddable クラス、mappedsuper クラスを含む JAR ファイル名を記述します。JAR ファイルのパスは、永続化ユニットのルートから相対パスで指定します。

指定したファイルが見つからない場合、コンテナの挙動に依存します。

**(9) <class>**

entity クラス、embeddable クラス、および mappedsuper クラスを記述します。

指定したクラスが見つからない場合、コンテナの挙動に依存します。

なお、<class>タグに指定された値が entity クラス、embeddable クラス、および mappedsuper クラスであるかどうかのチェックは CJPA プロバイダでは実施しません。そのため、entity クラス、embeddable クラス、および mappedsuper クラス以外のクラスを指定した場合に例外は発生しないで、動作します。

**(10) <exclude-unlisted-classes>**

Persistence クラスを定義します。

指定できる値と、値を指定した場合の挙動を次に示します。

true

class 要素、jar-file 要素、および mapping-file 要素によって明示的に指定されたクラスだけ Persistence クラスとして扱います。

false

exclude-unlisted-class 要素を指定していない場合、永続化ユニットのルート以下の class ファイルに対して JPA 対象のクラスであるかどうかを検索します。

### (11) <properties>

CJPA プロバイダ独自のプロパティを定義します。この要素以下に property 要素を指定してプロパティを定義します。

### (12) <property>

各種のプロパティを定義します。

プロパティの詳細については、「6.2.2 <property>タグに指定できる CJPA プロバイダ独自のプロパティ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-4 <property>の属性

属性名	型	任意／ 必須	説明
name	xsd:string	必須	プロパティの名前。
value	xsd:string	必須	プロパティの値。

## 6.2.2 <property>タグに指定できる CJPA プロバイダ独自のプロパティ

persistence.xml の<property>タグに指定する CJPA プロバイダ独自のプロパティについて説明します。

CJPA プロバイダでは、EntityManagerFactory の createEntityManager()の引数として、指定できるプロパティはありません。なお、persistence.xml ファイルのプロパティの属性値は、数値であっても引用符(ダブルクォーテーションまたはシングルクォーテーション)で囲って指定してください。

#### ！ 注意事項

CJPA プロバイダでは、JPA 仕様で規定されている javax から始まるプロパティを<property>タグに指定できません。JPA 仕様で規定されている javax から始まるプロパティを、persistence.xml の<property>タグに指定した場合の動作は保証しません。

また、JPA 仕様で規定されている javax から始まるプロパティはシステムプロパティとして指定しないでください。JPA 仕様で規定されている javax から始まるプロパティを次に示します。

- javax.persistence.transactionType
- javax.persistence.jtaDataSource
- javax.persistence.nonJtaDataSource
- javax.persistence.provider

CJPA プロバイダ独自のプロパティについて説明します。

これらのプロパティは、persistence.xml ファイルの<property>タグに指定します。

プロパティの値に指定可能範囲外の値が設定された場合、デプロイ時に例外が発生します。また、大文字と小文字は区別されます。

CJPA プロバイダ独自のプロパティについて表で示します。



表 6-5 CJPА プロバイダ独自のプロパティ

プロパティ名	内容	指定可能値	デフォルト
cosminexus.jpa.cache.size.<ENTITY>	<p>&lt;ENTITY&gt;で指定されたエンティティのキャッシュに設定する初期化サイズを指定します。</p> <p>キャッシュのタイプが Full の場合、エンティティのキャッシュに対する初期化サイズを設定します。</p> <p>キャッシュタイプが HardWeak または SoftWeak の場合、エンティティのキャッシュの最大サイズを設定します。</p> <p>キャッシュサイズの指定は、全体で呼び出されるエンティティの最大 ID 数 (レコード数) を目安にして設定します。</p>	0~ 2147483647	1000
cosminexus.jpa.cache.size.default	<p>エンティティをキャッシュする場合のデフォルトのキャッシュサイズを設定します。</p> <p>キャッシュのタイプが Full の場合、エンティティのキャッシュに対する初期化サイズを設定します。</p> <p>キャッシュタイプが HardWeak または SoftWeak の場合、エンティティのキャッシュの最大サイズを設定します。</p> <p>キャッシュサイズの指定は、全体で呼び出されるエンティティの最大 ID 数 (レコード数) を目安にして設定します。</p>	0~ 2147483647	1000
cosminexus.jpa.cache.type.<ENTITY>	<p>&lt;ENTITY&gt;で指定されたエンティティのキャッシュのタイプを指定します。</p>	<p>指定できる文字列は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Full</li> <li>• Weak</li> <li>• HardWeak</li> <li>• SoftWeak</li> <li>• NONE</li> </ul>	SoftWeak

プロパティ名	内容	指定可能値	デフォルト
cosminexus.jpa.cache.type.default	キャッシュのデフォルトタイプを指定します。	指定できる文字列は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Full</li> <li>• Weak</li> <li>• HardWeak</li> <li>• SoftWeak</li> <li>• NONE</li> </ul>	SoftWeak
cosminexus.jpa.target-database	<p>接続するデータベースの名前を指定します。各データベース固有の処理を切り分けるために、指定値によりデータベース固有部分を実装したクラスを読み込みます。</p> <p>Auto を指定した場合は、CJPA プロバイダへの初回リクエスト時に、persistence.xml の&lt;jta-data-source&gt;または&lt;non-jta-data-source&gt;に指定したリソースの情報から、自動でデータベースを識別します。このため、データベースの名前を指定した場合に比べて若干処理時間が長くなります。</p> <p>通常は Auto を使用しないでデータベースの名前を指定することを推奨します。</p>	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Auto</li> <li>• HiRDB</li> <li>• Oracle</li> </ul>	Auto

## 6.3 O/R マッピングファイル

O/R マッピングファイルの構成を次に示します。

タグ名	出現パターン	説明
<entity-mappings>	1 回	ルートタグ。
┆ <description> ┆	0 または 1 回	説明を付加します。
┆ <persistence-unit-metadata> ┆	0 または 1 回	PersistenceUnit 全体に関する定義を指定します。
┆ ┆ <xml-mapping-metadata-complete> ┆ ┆ ┆ ┆	0 または 1 回	永続化ユニットのマッピングメタデータを抑止するかどうかを指定します。
┆ ┆ <persistence-unit-defaults> ┆ ┆	0 または 1 回	永続化ユニットのデフォルト値を指定します。
┆ ┆ ┆ <schema> ┆ ┆ ┆	0 または 1 回	スキーマを定義します。
┆ ┆ ┆ <catalog> ┆ ┆ ┆	0 または 1 回	カタログを定義します。
┆ ┆ ┆ <access> ┆ ┆ ┆	0 または 1 回	アクセスタイプを指定します。
┆ ┆ ┆ <cascade-persist> ┆ ┆ ┆	0 または 1 回	カスケード永続化オプションを追加します。
┆ ┆ ┆ <entity-listeners> ┆ ┆ ┆	0 または 1 回	永続化ユニットのデフォルトエンティティリスナを定義します。
┆ ┆ ┆ ┆ <entity-listener> ┆ ┆ ┆ ┆	0 回以上	エンティティリスナを指定します。
┆ ┆ ┆ ┆ ┆ <pre-persist> ┆ ┆ ┆ ┆ ┆	0 または 1 回	ライフサイクルコールバックメソッドを指定します。
┆ ┆ ┆ ┆ ┆ <post-persist> ┆ ┆ ┆ ┆ ┆	0 または 1 回	ライフサイクルコールバックメソッドを指定します。
┆ ┆ ┆ ┆ ┆ <pre-remove> ┆ ┆ ┆ ┆ ┆	0 または 1 回	ライフサイクルコールバックメソッドを指定します。
┆ ┆ ┆ ┆ ┆ <post-remove> ┆ ┆ ┆ ┆ ┆	0 または 1 回	ライフサイクルコールバックメソッドを指定します。
┆ ┆ ┆ ┆ ┆ <pre-update> ┆ ┆ ┆ ┆ ┆	0 または 1 回	ライフサイクルコールバックメソッドを指定します。



タグ名			出現パターン	説明
		└ <field-result>	0 回以上	ネイティブ SQL のクエリ結果をマッピングするためのフィールドを指定します。
		└ <column-result>	0 回以上	ネイティブ SQL のクエリ結果をマッピングするためのカラムを指定します。
		└ <mapped-superclass>	0 回以上	永続化ユニットのマッピングスーパークラスを定義します。
		└ <description>	0 または 1 回	永続化ユニットのマッピングスーパークラスの説明を付加します。
		└ <id-class>	0 または 1 回	マッピングスーパークラスで指定した @IdClass を上書きします。
		└ <exclude-default-listeners>	0 または 1 回	マッピングスーパークラスとそのサブクラスのデフォルトエンティティリスナを抑制するかどうかを定義します。
		└ <exclude-superclass-listeners>	0 または 1 回	マッピングスーパークラスとそのサブクラスのスーパークラスリスナを抑制するかどうかを定義します。
		└ <entity-listeners>	0 または 1 回	コールバックリスナクラスを指定します。
		└└ <entity-listener>	0 回以上	エンティティリスナを指定します。
		└└└ <pre-persist>	0 または 1 回	ライフサイクルコールバックメソッドを指定します。
		└└└ <post-persist>	0 または 1 回	
		└└└ <pre-remove>	0 または 1 回	
		└└└ <post-remove>	0 または 1 回	
		└└└ <pre-update>	0 または 1 回	
		└└└ <post-update>	0 または 1 回	
		└└└ <post-load>	0 または 1 回	

タグ名		出現パターン	説明	
		<pre-persist>	0 または 1 回	マップドスーパークラスで、対応するアノテーションによるライフサイクルコールバックメソッドを定義します。
		<post-persist>	0 または 1 回	
		<pre-remove>	0 または 1 回	
		<post-remove>	0 または 1 回	
		<pre-update>	0 または 1 回	
		<post-update>	0 または 1 回	
		<post-load>	0 または 1 回	
		<attributes>	0 または 1 回	要素自体の定義はありません。
		<id>	0 回以上※1	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
		<column>	0 または 1 回	Persistent フィールドのプロパティに、カラムのマッピングを指定します。
		<generated-value>	0 または 1 回	プライマリキー値生成戦略を指定します。
		<temporal>	0 または 1 回	DATE, TIME, TIMESTAMP 型へマッピングをするときに指定します。
		<table-generator>	0 または 1 回	テーブルジェネレータを追加します。
		<unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。
		<column-name>	1 回以上	ユニーク制約を付加するカラムの名前を指定します。
		<sequence-generator>	0 または 1 回	シーケンスジェネレータを追加します。

タグ名		出現パターン	説明	
		┆ <embedded-id>	0 または 1 回 <sup>※1</sup>	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
		┆ <attribute-override>	0 回以上	プロパティやフィールドのマッピングを上書きします。
		┆ <column>	1 回	Persistent フィールドのプロパティに、カラムのマッピングを指定します。
		┆ <basic>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
		┆ <column>	0 または 1 回	Persistent フィールドのプロパティに、カラムのマッピングを指定します。
		┆ <lob>	0 または 1 回 <sup>※2</sup>	Lob 型へマッピングをするときに指定します。
		┆ <temporal>	0 または 1 回 <sup>※2</sup>	DATE, TIME, TIMESTAMP 型へマッピングをするときに指定します。
		┆ <enumerated>	0 または 1 回 <sup>※2</sup>	列挙型へマッピングをするときに指定します。
		┆ <version>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
		┆ <column>	0 または 1 回	Persistent フィールドのプロパティに、カラムのマッピングを指定します。
		┆ <temporal>	0 または 1 回	DATE, TIME, TIMESTAMP 型へマッピングをするときに指定します。
		┆ <many-to-one>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
		┆ <join-column>	0 回以上 <sup>※3</sup>	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
		┆ <join-table>	0 または 1 回 <sup>※3</sup>	多対多や片方向の一对多で使用する結合表を指定します。

タグ名				出現パターン	説明
			┌ <join-column>	0 回以上	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			┌ <inverse-join-column>	0 回以上	被所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			└ <unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。
			└ <column-name>	1 回以上	ユニーク制約を付加するカラムの名前を指定します。
			└ <cascade>	0 または 1 回	カスケード可能な操作を指定します。
			┌ <cascade-all>	0 または 1 回	すべての操作をカスケードします。
			┌ <cascade-persist>	0 または 1 回	persist 操作をカスケードします。
			┌ <cascade-merge>	0 または 1 回	merge 操作をカスケードします。
			┌ <cascade-remove>	0 または 1 回	remove 操作をカスケードします。
			└ <cascade-refresh>	0 または 1 回	refresh 操作をカスケードします。
			┌ <one-to-many>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
			┌ <order-by>	0 または 1 回	関連をコレクションに保持する際に付ける順序を指定します。
			┌ <map-key>	0 または 1 回	Map 型の関連としてマップキーを指定します。
			┌ <join-table>	0 または 1 回 <sup>*4</sup>	多対多や片方向の一对多で使用する結合表を指定します。
			┌ <join-column>	0 回以上	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			┌ <inverse-join-column>	0 回以上	被所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			└ <unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。



タグ名				出現パターン	説明
			└ <unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。
			└ <column-name>	1 回以上	ユニーク制約を付加するカラムの名前を指定します。
			└ <join-column>	0 回以上※4	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			└ <cascade>	0 または 1 回	カスケード可能な操作を指定します。
			└ <cascade-all>	0 または 1 回	すべての操作をカスケードします。
			└ <cascade-persist>	0 または 1 回	persist 操作をカスケードします。
			└ <cascade-merge>	0 または 1 回	merge 操作をカスケードします。
			└ <cascade-remove>	0 または 1 回	remove 操作をカスケードします。
			└ <cascade-refresh>	0 または 1 回	refresh 操作をカスケードします。
			└ <one-to-one>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
			└ <primary-key-join-column>	0 回以上※5	ほかのテーブルに JOIN する外部キーとして使用される、プライマリキーカラムを指定します。
			└ <join-column>	0 回以上※5	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			└ <join-table>	0 または 1 回※5	多対多や片方向の一対多で使用する結合表を指定します。
			└ <join-column>	0 回以上	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			└ <inverse-join-column>	0 回以上	被所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			└ <unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。

タグ名				出現パターン	説明
			└ <column-name>	1 回以上	ユニーク制約を付加するカラムの名前を指定します。
			└ <cascade>	0 または 1 回	カスケード可能な操作を指定します。
			└ <cascade-all>	0 または 1 回	すべての操作をカスケードします。
			└ <cascade-persist>	0 または 1 回	persist 操作をカスケードします。
			└ <cascade-merge>	0 または 1 回	merge 操作をカスケードします。
			└ <cascade-remove>	0 または 1 回	remove 操作をカスケードします。
			└ <cascade-refresh>	0 または 1 回	refresh 操作をカスケードします。
			└ <many-to-many>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
			└ <order-by>	0 または 1 回	関連をコレクションに保持する際に付ける順序を指定します。
			└ <map-key>	0 または 1 回	Map 型の関連としてマップキーを指定します。
			└ <join-table>	0 または 1 回	多対多や片方向の一对多で使用する結合表を指定します。
			└ <join-column>	0 回以上	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			└ <inverse-join-column>	0 回以上	被所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			└ <unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。
			└ <column-name>	1 回以上	ユニーク制約を付加するカラムの名前を指定します。
			└ <cascade>	0 または 1 回	カスケード可能な操作を指定します。
			└ <cascade-all>	0 または 1 回	すべての操作をカスケードします。
			└ <cascade-persist>	0 または 1 回	persist 操作をカスケードします。

タグ名				出現パターン	説明	
				<cascade-persist>	0 または 1 回	persist 操作をカスケードします。
				<cascade-merge>	0 または 1 回	merge 操作をカスケードします。
				<cascade-remove>	0 または 1 回	remove 操作をカスケードします。
				<cascade-refresh>	0 または 1 回	refresh 操作をカスケードします。
				<embedded>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
				<attribute-override>	0 回以上	プロパティやフィールドのマッピングを上書きします。
				<column>	1 回	Persistent フィールドのプロパティに、カラムのマッピングを指定します。
				<transient>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
				<entity>	0 回以上	永続化ユニットのエンティティを定義します。
				<description>	0 または 1 回	永続化ユニットのエンティティの説明を付加します。
				<table>	0 または 1 回	Entity クラスの@Table(デフォルト値も含む)を上書きします。
				<unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。
				<column-name>	1 回以上	ユニーク制約を付加するカラムの名前を指定します。
				<secondary-table>	0 回以上	Entity クラスのすべての@SecondaryTable と@SecondaryTables (デフォルト値も含む)を上書きします。
				<primary-key-join-column>	0 回以上	Entity クラスのすべての@PrimaryKeyJoinColumn と@PrimaryKeyJoinColumns (デフォルト値も含む)を上書きします。
				<unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。

タグ名			出現パターン	説明
		└ <unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。
		└ <column-name>	1 回以上	ユニーク制約を付加するカラムの名前を指定します。
		└ <primary-key-join-column>	0 回以上	Entity クラスのすべての @PrimaryKeyJoinColumn と @PrimaryKeyJoinColumns (デフォルト値も含む) を上書きします。
		└ <id-class>	0 または 1 回	Entity クラスに指定された @IdClass を上書きします。
		└ <inheritance>	0 または 1 回	Entity クラスの @Inheritance (デフォルト値も含む) を上書きします。
		└ <discriminator-value>	0 または 1 回	Entity クラスの @DiscriminatorValue (デフォルト値も含む) を上書きします。
		└ <discriminator-column>	0 または 1 回	Entity クラスの @DiscriminatorColumn (デフォルト値も含む) を上書きします。
		└ <sequence-generator>	0 または 1 回	プライマリキーを作成するシーケンスジェネレータの設定を指定します。
		└ <table-generator>	0 または 1 回	プライマリキーを作成するジェネレータの設定を指定します。
		└ <unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。
		└ <column-name>	1 回以上	ユニーク制約を付加するカラムの名前を指定します。
		└ <named-query>	0 回以上	名前付きクエリを定義します。
		└ <query>	1 回	クエリ文字列を指定します。
		└ <hint>	0 回以上	クエリにヒントを付加します。
		└ <named-native-query>	0 回以上	名前付きネイティブクエリを定義します。
		└ <query>	1 回	クエリ文字列を指定します。

タグ名				出現パターン	説明
			<query>	1 回	クエリ文字列を指定します。
		└	<hint>	0 回以上	クエリにヒントを付加します。
		└	<sql-result-set-mapping>	0 回以上	SQL 結果のマッピングを定義します。
		└	<entity-result>	0 回以上	ネイティブ SQL のクエリ結果をマッピングするための Entity クラスを指定します。
		└	<field-result>	0 回以上	ネイティブ SQL のクエリ結果をマッピングするためのフィールドを指定します。
		└	<column-result>	0 回以上	ネイティブ SQL のクエリ結果をマッピングするためのカラムを指定します。
		└	<exclude-default-listeners>	0 または 1 回	Entity クラスとそのサブクラスのデフォルトエンティティリスナを抑制します。
		└	<exclude-superclass-listeners>	0 または 1 回	Entity クラスとそのサブクラスのスーパークラスリスナを抑制します。
		└	<entity-listeners>	0 または 1 回	Entity クラスの@EntityListeners を上書きします。
		└	<entity-listener>	0 回以上	エンティティリスナを指定します。
		└	<pre-persist>	0 または 1 回	マップドスーパークラスで、対応するアノテーションによるライフサイクルコールバックメソッドの定義を上書きします。
		└	<post-persist>	0 または 1 回	
		└	<pre-remove>	0 または 1 回	
		└	<post-remove>	0 または 1 回	
		└	<pre-update>	0 または 1 回	
		└	<post-update>	0 または 1 回	

タグ名		出現パターン	説明	
		└ <post-load>	0 または 1 回	マップドスーパークラスで、対応するアノテーションによるライフサイクルコールバックメソッドの定義を上書きします。
		<pre-persist>	0 または 1 回	Entity クラスで、対応するアノテーションによるライフサイクルコールバックメソッドの定義を上書きします。
		<post-persist>	0 または 1 回	
		<pre-remove>	0 または 1 回	
		<post-remove>	0 または 1 回	
		<pre-update>	0 または 1 回	
		<post-update>	0 または 1 回	
		<post-load>	0 または 1 回	
		<attribute-override>	0 回以上	
		└ <column>	1 回	Persistent フィールドのプロパティに、カラムのマッピングを指定します。
		<association-override>	0 回以上	Entity クラスの@AssociationOverride もしくは@AssociationOverrides で定義された値に追加されます。
		└ <join-column>	1 回以上	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
	└	<attributes>	0 または 1 回	要素自体の定義はありません。
		<id>	0 回以上※1	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

タグ名				出現パターン	説明
			└ <column>	0 または 1 回	Persistent フィールドのプロパティに、カラムのマッピングを指定します。
			└ <generated-value>	0 または 1 回	プライマリキー値生成戦略を指定します。
			└ <temporal>	0 または 1 回	DATE, TIME, TIMESTAMP 型へマッピングを行うときに指定します。
			└ <table-generator>	0 または 1 回	テーブルジェネレータを追加します。
			└ └ <unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。
			└ └ └ <column-name>	1 回以上	ユニーク制約を付加するカラムの名前を指定します。
			└ └ <sequence-generator>	0 または 1 回	プライマリキーを作成するシーケンスジェネレータの設定を指定します。
			└ <embedded-id>	0 または 1 回 <sup>*1</sup>	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
			└ └ <attribute-override>	0 回以上	Entity クラスの@AttributeOverride もしくは@AttributeOverrides で定義された値に追加されます。
			└ └ └ <column>	1 回	Persistent フィールドのプロパティに、カラムのマッピングを指定します。
			└ <basic>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
			└ <column>	0 または 1 回	Persistent フィールドのプロパティに、カラムのマッピングを指定します。
			└ <lob>	0 または 1 回 <sup>*2</sup>	Lob 型へマッピングをするときに指定します。
			└ <temporal>	0 または 1 回	DATE, TIME, TIMESTAMP 型へマッピングをするときに指定します。

タグ名			出現パターン	説明
		└ <enumerated>	0 または 1 回 <sup>※2</sup>	列挙型へマッピングをするときに指定します。
		└ <version>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
		└ <column>	0 または 1 回	Persistent フィールドのプロパティに、カラムのマッピングを指定します。
		└ <temporal>	0 または 1 回	DATE, TIME, TIMESTAMP 型へマッピングをするときに指定します。
		└ <many-to-one>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
		└ <join-column>	0 回以上 <sup>※4</sup>	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
		└ <join-table>	0 または 1 回 <sup>※4</sup>	多対多や片方向の一对多で使用する結合表を指定します。
		└ <join-column>	0 回以上	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
		└ <inverse-join-column>	0 回以上	被所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
		└ <unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。
		└ <column-name>	1 回以上	ユニーク制約を付加するカラムの名前を指定します。
		└ <cascade>	0 または 1 回	カスケード可能な操作を指定します。
		└ <cascade-all>	0 または 1 回	すべての操作をカスケードします。
		└ <cascade-persist>	0 または 1 回	persist 操作をカスケードします。
		└ <cascade-merge>	0 または 1 回	merge 操作をカスケードします。
		└ <cascade-remove>	0 または 1 回	remove 操作をカスケードします。



タグ名				出現パターン	説明
			<cascade-remove>	0 または 1 回	remove 操作をカスケードします。
			└ <cascade-refresh>	0 または 1 回	refresh 操作をカスケードします。
		└	<one-to-many>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
		└	<order-by>	0 または 1 回	関連をコレクションに保持する際に付ける順序を指定します。
		└	<map-key>	0 または 1 回	Map 型の関連としてマップキーを指定します。
		└	<join-table>	0 または 1 回 <sup>※3</sup>	多対多や片方向の一对多で使用する結合表を指定します。
			└ <join-column>	0 回以上	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			└ <inverse-join-column>	0 回以上	被所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			└ <unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。
			└└ <column-name>	1 回以上	ユニーク制約を付加するカラムの名前を指定します。
		└	<join-column>	0 回以上 <sup>※3</sup>	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
		└	<cascade>	0 または 1 回	カスケード可能な操作を指定します。
		└	<cascade-all>	0 または 1 回	すべての操作をカスケードします。
		└	<cascade-persist>	0 または 1 回	persist 操作をカスケードします。
		└	<cascade-merge>	0 または 1 回	merge 操作をカスケードします。
		└	<cascade-remove>	0 または 1 回	remove 操作をカスケードします。
		└	<cascade-refresh>	0 または 1 回	refresh 操作をカスケードします。

タグ名				出現パターン	説明
			┌ <one-to-one>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
			┌ <primary-key-join-column>	0 回以上※5	Entity クラスのすべての @PrimaryKeyJoinColumn と @PrimaryKeyJoinColumns (デフォルト値も含む) を上書きします。
			┌ <join-column>	0 回以上※5	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			┌ <join-table>	0 または 1 回※5	多対多や片方向の一对多で使用する結合表を指定します。
			┌ <join-column>	0 回以上	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			┌ <inverse-join-column>	0 回以上	被所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			┌ <unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。
			┌ <column-name>	1 回以上	ユニーク制約を付加するカラムの名前を指定します。
			┌ <cascade>	0 または 1 回	カスケード可能な操作を指定します。
			┌ <cascade-all>	0 または 1 回	すべての操作をカスケードします。
			┌ <cascade-persist>	0 または 1 回	persist 操作をカスケードします。
			┌ <cascade-merge>	0 または 1 回	merge 操作をカスケードします。
			┌ <cascade-remove>	0 または 1 回	remove 操作をカスケードします。
			┌ <cascade-refresh>	0 または 1 回	refresh 操作をカスケードします。
			┌ <many-to-many>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

タグ名				出現パターン	説明
			┌ <order-by>	0 または 1 回	関連をコレクションに保持する際に付ける順序を指定します。
			┌ <map-key>	0 または 1 回	Map 型の関連としてマップキーを指定します。
			┌ <join-table>	0 または 1 回	多対多や片方向の一対多で使用する結合表を指定します。
			┌ <join-column>	0 回以上	所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			┌ <inverse-join-column>	0 回以上	被所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。
			└ <unique-constraint>	0 回以上	DDL にユニーク制約を付加します。
			└ <column-name>	1 回以上	ユニーク制約を付加するカラムの名前を指定します。
			└ <cascade>	0 または 1 回	カスケード可能な操作を指定します。
			┌ <cascade-all>	0 または 1 回	すべての操作をカスケードします。
			┌ <cascade-persist>	0 または 1 回	persist 操作をカスケードします。
			┌ <cascade-merge>	0 または 1 回	merge 操作をカスケードします。
			┌ <cascade-remove>	0 または 1 回	remove 操作をカスケードします。
			└ <cascade-refresh>	0 または 1 回	refresh 操作をカスケードします。
			┌ <embedded>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
			└ <attribute-override>	0 回以上	Entity クラスの@AttributeOverride もしくは@AttributeOverrides で定義された値に追加されます。
			└ <column>	1 回	Persistent フィールドのプロパティに、カラムのマッピングを指定します。

タグ名		出現パターン	説明
	└ <transient>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
	└ <embeddable>	0 回以上	永続化ユニットの埋め込み可能クラスを定義します。
	└ <description>	0 または 1 回	永続化ユニットの埋め込み可能クラスの説明を付加します。
	└ <attributes>	0 または 1 回	要素自体の定義はありません。
	└ <basic>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。
	└ <column>	0 または 1 回	Persistent フィールドのプロパティに、カラムのマッピングを指定します。
	└ <lob>	0 または 1 回 <sup>※2</sup>	Lob 型へマッピングをするときに指定します。
	└ <temporal>	0 または 1 回 <sup>※2</sup>	DATE, TIME, TIMESTAMP 型へマッピングをするときに指定します。
	└ <enumerated>	0 または 1 回 <sup>※2</sup>	列挙型へマッピングを行うときに指定します。
	└ <transient>	0 回以上	フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

注※1

<id>タグおよび<embedded-id>タグのどちらか一つを指定します。

注※2

<lob>タグ, <temporal>タグ, および<enumerated>タグのどれか一つを指定します。

注※3

<join-column>タグ, および<join-table>タグのどちらか一つを指定します。

注※4

<join-table>タグ, および<join-column>タグのどちらか一つを指定します。

注※5

<primary-key-join-column>タグ, <join-column>タグ, および<join-table>タグのどれか一つを指定します。

### 6.3.1 entity-mappings 以下の要素

#### (1) <entity-mappings>

ルートタグ。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-6 &lt;entity-mappings&gt;の属性

属性名	型	任意/必須	説明
version	orm:versionType	必須	JPA のバージョンを指定します。

**(2) <package>**

package 要素は、同一マッピングファイル内の要素や属性に記載されたクラスのパッケージを指定します。package 要素は、パッケージ名付きのクラス名がクラスに指定され、package 要素に指定されたパッケージ名と異なる場合に上書きされます。

**(3) <schema>**

schema 要素は、同一マッピングファイル内に記載されたエンティティにだけ適用されます。

schema 要素は、次の要素や属性によって上書きされます。

- マッピングファイル内に記載された Entity クラスの@Table や@SecondaryTable に明確に指定された schema 要素。
- entity 要素に定義された table 要素や secondary-table 要素の schema 属性。

**(4) <catalog>**

catalog 要素は、同一マッピングファイル内に記載されたエンティティにだけ適用されます。

catalog 要素は、次の要素や属性によって上書きされます。

- マッピングファイル内に記載された Entity クラスの@Table や@SecondaryTable に明確に指定された catalog 要素。
- entity 要素に定義された table 下位要素や secondary-table 下位要素の catalog 属性。

**注意事項**

catalog 要素はデータベースによって、存在しない場合があります。CJPA プロバイダでサポートしている Oracle と HiRDB では catalog 要素は存在しません。そのため、catalog 要素を指定できません。指定した場合は、アプリケーション実行時に例外が発生します。

**(5) <access>**

access 要素は、同一マッピングファイル内に記載された、管理されたクラスで適用されます。

access 要素は、次のアノテーションや属性によって上書きされます。

- Entity クラスのアノテーションの指定位置によって決まるアクセスタイプ。
- entity 要素, mapped-superclass 要素, および embeddable 要素で定義された access 属性。

注 指定値には、PROPERTY または FIELD を指定します。エンティティクラスのフィールドに対するアクセス方法の指定については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「6.12.3 エンティティクラスのフィールドに対するアクセス方法の指定」を参照してください。

**(6) <sequence-generator>**

シーケンスジェネレータを追加します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-7 <sequence-generator>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.56 @SequenceGenerator」の name 属性を参照してください。
sequence-name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.56 @SequenceGenerator」の sequenceName 属性を参照してください。
initial-value	xsd:int	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.56 @SequenceGenerator」の initialValue 属性を参照してください。
allocation-size	xsd:int	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.56 @SequenceGenerator」の allocationSize 属性を参照してください。

## 6.3.2 persistence-unit-metadata 以下の要素

### (1) <persistence-unit-metadata>

PersistenceUnit 全体に関する定義を指定します。

### (2) <xml-mapping-metadata-complete>

xml-mapping-metadata-complete 要素を指定すると、永続化ユニットのマッピングメタデータは抑止され、クラスで指定したアノテーションは無視されます。

xml-mapping-metadata-complete 要素が指定され、XML 要素が省略されると、デフォルト値が有効になります。

#### 注意事項

アノテーションが指定されている場合、この要素を指定することによって、KDJE55532-W のメッセージが出力されることがあります。

### (3) <persistence-unit-defaults>

永続化ユニットのデフォルト値を指定します。

### (4) <schema>

schema 要素は、永続化ユニット内のすべての Entity クラス、テーブルジェネレータ、および結合表に適用されます。

schema 要素は、次の要素や属性によって上書きされます。

- entity-mappings 要素の schema 要素。

- Entity クラスの@Table や@SecondaryTable に明確に指定された schema 属性。
- entity 要素の table 要素や secondary-table 要素に指定された schema 属性。
- @TableGenerator や table-generator 要素に明確に指定された schema 要素。
- @JoinTable や join-table 要素に明確に指定された schema 要素。

## (5) <catalog>

catalog 要素は、永続化ユニット内のすべての Entity クラス、テーブルジェネレータ、結合表に適用されます。

catalog 要素は、次の要素や属性によって上書きされます。

- entity-mappings 要素の catalog 要素。
- Entity クラスの@Table や@SecondaryTable に明確に指定された catalog 属性。
- entity 要素の table 要素や secondary-table 要素に指定された catalog 属性。
- @TableGenerator や table-generator 要素に明確に指定された catalog 要素。
- @JoinTable や join-table 要素に明確に指定された catalog 要素。

### 注意事項

CJPA プロバイダでサポートしている Oracle と HiRDB では catalog は存在しません。そのため、catalog を指定できません。指定した場合、アプリケーション実行時に例外が発生します。

## (6) <access>

access 要素は、永続化ユニット内のすべての管理されたクラスで適用されます。

access 要素は、次のアノテーションや要素や属性によって上書きされます。

- Entity クラスのアノテーションの指定位置によって決まるアクセスタイプ。
- entity-mappings 要素の access 要素。
- entity 要素や mapped-superclass 要素や embeddable 要素で定義された access 属性。

### 注意事項

指定値には、PROPERTY または FIELD を指定します。エンティティクラスのフィールドに対するアクセス方法の指定については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(コンテナ 共通機能)」の「6.12.3 エンティティクラスのフィールドに対するアクセス方法の指定」を参照してください。

## (7) <cascade-persist>

cascade-persist 要素は、永続化ユニット内のすべてのリレーションシップで適用されます。

cascade-persist 要素の指定は、アノテーションか O/R マッピングファイルで指定された値に加えてすべてのリレーションシップにカスケード永続化オプションを追加します。

### 注意事項

cascade-persist 要素を指定すると、上書きや無効化することができません。

## (8) <entity-listeners>

entity-listeners 要素は、永続化ユニットのデフォルトエンティティリスナを定義します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

### 6.3.3 table-generator 以下の要素

#### (1) <table-generator>

table-generator 要素によって定義されたジェネレータは、永続化ユニットに適用されます。

定義されたジェネレータは、アノテーションで定義されたジェネレータに追加されます。アノテーションで同名のジェネレータが定義されたら、table-generator 要素で定義したジェネレータが上書きされます。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-8 <table-generator>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の name 属性を参照してください。
table	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の table 属性を参照してください。
catalog	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の catalog 属性を参照してください。
schema	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の schema 属性を参照してください。
pk-column-name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の pkColumnName 属性を参照してください。
value-column-name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の valueColumnName 属性を参照してください。
pk-column-value	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の pkColumnValue 属性を参照してください。
initial-value	xsd:int	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の initialValue 属性を参照してください。
allocation-size	xsd:int	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の allocationSize 属性を参照してください。



## 6.3.4 named-query 以下の要素

### (1) <named-query>

named-query 要素によって定義された名前付きクエリは、永続化ユニットに適用されます。

定義された名前付きクエリは、アノテーションで定義された名前付きクエリに追加されます。アノテーションで同名の名前付きクエリが定義されたら、named-query 要素で定義した名前付きクエリが上書きされます。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-9 <named-query>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.35 @NamedQuery」の name 属性を参照してください。

## 6.3.5 named-native-query 以下の要素

### (1) <named-native-query>

named-native-query 要素によって定義された名前付きネイティブクエリは、永続化ユニットに適用されます。

定義された名前付きネイティブクエリは、アノテーションで定義された名前付きネイティブクエリに追加されます。アノテーションで同名の名前付きネイティブクエリが定義されたら、O/R マッピングファイルの named-native-query 要素で定義した名前付きネイティブクエリを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-10 <named-native-query>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.33 @NamedNativeQuery」の name 属性を参照してください。
result-class	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.33 @NamedNativeQuery」の resultClass 属性を参照してください。
result-set-mapping	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.33 @NamedNativeQuery」の resultSetMapping 属性を参照してください。

## 6.3.6 sql-result-set-mapping 以下の要素

### (1) <sql-result-set-mapping>

sql-result-set-mapping 要素によって定義された SQL 結果セットマッピングは、永続化ユニットに適用されます。

定義された SQL 結果セットマッピングは、アノテーションで定義された SQL 結果セットマッピングに追加されます。アノテーションで同名の SQL 結果セットマッピングが定義されたら、O/R マッピングファイルの sql-result-set-mapping 要素で定義した SQL 結果セットマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-11 <sql-result-set-mapping>の属性

属性名	型	任意／必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.57 @SqlResultSetMapping」の name 属性を参照してください。

## 6.3.7 mapped-superclass 以下の要素

次に示す要素と属性は、要素や属性の対象であるマップドスーパークラスだけに適用されます。

### (1) <mapped-superclass>

mapped-superclass 要素は、永続化ユニットのマップドスーパークラスを定義します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-12 <mapped-superclass>の属性

属性名	型	任意／必須	説明
class	xsd:string	必須	マップドスーパークラスのクラス名
access	orm:access-type	任意	access 属性は、マップドスーパークラスのアクセスタイプを定義します。access 属性は、マップドスーパークラスに与えた persistence-unit-defaults 要素（デフォルトとして指定した要素）や entity-mappings 要素（永続化ユニット全体に有効な要素）で指定したアクセスタイプを上書きします。 <sup>*1</sup>
metadata-complete <sup>*2</sup>	xsd:boolean	任意	metadata-complete 属性が mapped-superclass 要素自身に指定されたら、マップドスーパークラスや、マップドスーパークラスのフィールドやプロパティに指定されたアノテーションは無視されます。

属性名	型	任意/ 必須	説明
metadata-complete*2	xsd:boolean	任意	metadata-complete が mapped-superclass 要素に指定され、XML 要素が省略されると、デフォルト値が有効になります。

注※1 指定値には、PROPERTY または FIELD を指定します。エンティティクラスのフィールドに対するアクセス方法の指定については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「6.12.3 エンティティクラスのフィールドに対するアクセス方法の指定」を参照してください。

注※2 アノテーションが指定されている場合、この要素を指定することによって、KDJE55532-W のメッセージが出力されることがあります。

## (2) <id-class>

id-class 要素は、マップドスーパークラスで指定した@IdClass を上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-13 <id-class>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
class	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.22 @IdClass」の value 属性を参照してください。

## (3) <exclude-default-listeners>

exclude-default-listeners 要素は、@ExcludeDefaultListeners がマップドスーパークラスに指定されたかどうかに関係なく適用されます。

exclude-default-listeners 要素は、マップドスーパークラスとそのサブクラスのデフォルトエンティティリスナを抑止します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

## (4) <exclude-superclass-listeners>

exclude-superclass-listeners 要素は、@ExcludeSuperclassListeners がマップドスーパークラスに指定されたかどうかに関係なく適用されます。

exclude-superclass-listeners 要素は、マップドスーパークラスとそのサブクラスのスーパークラスリスナを抑止します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

## (5) <entity-listeners>

entity-listeners 要素は、マップドスーパークラスの@EntityListeners を上書きします。

ほかの方法で抑止されない場合、これらのリスナはマップドスーパークラスとそのサブクラスで適用します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

## (6) <pre-persist>, <post-persist>, <pre-remove>, <post-remove>, <pre-update>, <post-update>, <post-load>

これらの要素は、マップドスーパークラスで、対応するアノテーションによるライフサイクルコールバックメソッドの定義を上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-14 <pre-persist>, <post-persist>, <pre-remove>, <post-remove>, <pre-update>, <post-update>, <post-load>の属性

属性名	型	任意／必須	説明
method-name	xsd:string	必須	対象のメソッド名。

## (7) <id>

id 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-15 <id>の属性

属性名	型	任意／必須	説明
name	xsd:string	必須	プライマリキープロパティ、もしくはフィールドであることを指定します。

## (8) <embedded-id>

embedded-id 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-16 &lt;embedded-id&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	複合プライマリキーであることを指定します。

## (9) &lt;basic&gt;

basic 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-17 &lt;basic&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	型をマッピングするメソッドおよびフィールドを指定します。
fetch	orm:fetch-type	任意	Fetch 戦略の値を指定します。 詳細はマニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.5 @Basic」の fetch 属性を参照してください。
optional	xsd:boolean	任意	フィールド（プロパティ）が null を使用するかどうかを指定します。 詳細はマニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.5 @Basic」の optional 属性を参照してください。

## (10) &lt;version&gt;

version 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-18 &lt;version&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	version プロパティもしくはフィールドであることを指定します。

## (11) &lt;many-to-one&gt;

many-to-one 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-19 <many-to-one>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	多対一リレーションシップのメソッドもしくはフィールドであることを指定します。
target-entity	xsd:string	任意	関連する Entity クラスを指定します。 詳細はマニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.29 @ManyToOne」の targetEntity 属性を参照してください。
fetch	orm:fetch-type	任意	Fetch 戦略の値を指定します。 詳細はマニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.29 @ManyToOne」の fetch 属性を参照してください。
optional	xsd:boolean	任意	すべての非プリミティブなフィールドおよびプロパティの値に null を指定するかどうかを定義します。 詳細はマニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.29 @ManyToOne」の optional 属性を参照してください。

## (12) <one-to-many>

one-to-many 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-20 <one-to-many>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	一対多リレーションシップのメソッドまたはフィールド。
target-entity	xsd:string	任意	関連する Entity クラスを指定します。詳細はマニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.36 @OneToMany」の targetEntity 属性を参照してください。
fetch	orm:fetch-type	任意	Fetch 戦略の値を指定します。 詳細はマニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.36 @OneToMany」の fetch 属性を参照してください。

属性名	型	任意／ 必須	説明
mapped-by	xsd:string	任意	被所有者側の Entity クラスの要素に付与し、所有者側の Entity クラスで関係を保持しているフィールド（プロパティ）名を指定します。  詳細はマニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.36 @OneToMany」の mappedBy 属性を参照してください。

### (13) <one-to-one>

one-to-one 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-21 <one-to-one>の属性

属性名	型	任意／ 必須	説明
name	xsd:string	必須	一対一リレーションシップのメソッドまたはフィールド。
target-entity	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.37 @OneToOne」の targetEntity 属性を参照してください。
fetch	orm:fetch-type	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.37 @OneToOne」の fetch 属性を参照してください。
optional	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.37 @OneToOne」の optional 属性を参照してください。
mapped-by	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.37 @OneToOne」の mappedBy 属性を参照してください。

### (14) <many-to-many>

many-to-many 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-22 &lt;many-to-many&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	多対多リレーションシップのメソッドまたはフィールド。
target-entity	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.28 @ManyToMany」の targetEntity 属性を参照してください。
fetch	orm:fetch-type	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.28 @ManyToMany」の fetch 属性を参照してください。
mapped-by	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.28 @ManyToMany」の mappedBy 属性を参照してください。

### (15) <embedded>

embedded 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-23 &lt;embedded&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	埋め込みオブジェクトであるプロパティまたはフィールド。

### (16) <transient>

transient 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-24 &lt;transient&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	永続的でないプロパティまたはフィールド。

## 6.3.8 entity 以下の要素

次に示す要素と属性は、下位要素や属性の対象である Entity クラスにだけ適用されます。



## (1) &lt;entity&gt;

entity 要素は、永続化ユニットのエンティティを定義します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-25 <entity>の属性

属性名	型	任意／必須	説明
name	xsd:string	任意	name 属性は、エンティティの名前を定義します。 name 属性は、@Entity の name 要素によって定義されたエンティティ名を、明確に指定されたかデフォルトかに関係なく上書きします。 Entity クラスの名前を上書きした場合の動作は保証しません。
class	xsd:string	必須	エンティティのクラス名。
access	orm:access-type	任意	access 属性は、Entity クラスのアクセスタイプを定義します。access 属性は、Entity クラスに与えた persistence-unit-defaults 要素(デフォルトとして指定した要素)や entity-mappings 要素(永続化ユニット全体に有効な要素)で指定したアクセスタイプを上書きします。*1
metadata-complete*2	xsd:boolean	任意	metadata-complete 属性が entity 要素自身に指定されたら、Entity クラスや、Entity クラスのフィールドやプロパティに指定されたアノテーションは無視されます。 metadata-complete が entity 要素に指定され、XML 要素が省略されると、デフォルト値が有効になります。

注※1 指定値には、PROPERTY または FIELD を指定します。エンティティクラスのフィールドに対するアクセス方法の指定については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「6.12.3 エンティティクラスのフィールドに対するアクセス方法の指定」を参照してください。

注※2 アノテーションが指定されている場合、この要素を指定することによって、KDJE55532-W のメッセージが出力されることがあります。

## (2) &lt;table&gt;

table 要素は、Entity クラスの@Table (デフォルト値も含む)を上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-26 &lt;table&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.59 @Table」の name 属性を参照してください。
catalog	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.59 @Table」の catalog 属性を参照してください。
schema	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.59 @Table」の schema 属性を参照してください。

### (3) <secondary-table>

secondary-table 要素は、Entity クラスのすべての@SecondaryTable と@SecondaryTables（デフォルト値も含む）を上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-27 &lt;secondary-table&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.54 @SecondaryTable」の name 属性を参照してください。
catalog	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.54 @SecondaryTable」の catalog 属性を参照してください。
schema	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.54 @SecondaryTable」の schema 属性を参照してください。

### (4) <primary-key-join-column>

primary-key-join-column 要素は、Entity クラスのすべての@PrimaryKeyJoinColumn と@PrimaryKeyJoinColumns（デフォルト値も含む）を上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-28 &lt;primary-key-join-column&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.51 @PrimaryKeyJoinColumn」の name 属性を参照してください。

属性名	型	任意／ 必須	説明
referenced-column-name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.51 @PrimaryKeyJoinColumn」の referencedColumnName 属性を参照してください。
column-definition	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.51 @PrimaryKeyJoinColumn」の columnDefinition 属性を参照してください。

### (5) <id-class>

id-class 要素は、Entity クラスに指定された@IdClass を上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-29 <id-class>の属性

属性名	型	任意／ 必須	説明
class	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.22 @IdClass」の value 属性を参照してください。

### (6) <inheritance>

inheritance 要素は、Entity クラスの@Inheritance (デフォルト値も含む) を上書きします。

inheritance 要素は、Entity クラスと、そのサブクラスで適用します (アノテーションや XML 要素で指定したサブクラスが、別の方法で上書きされなかった場合)。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-30 <inheritance>の属性

属性名	型	任意／ 必須	説明
strategy	orm:inheritance-type	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.23 @Inheritance」の strategy 属性を参照してください。

### (7) <discriminator-value>

discriminator-value 要素は、Entity クラスの@DiscriminatorValue (デフォルト値も含む) を上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

## (8) <discriminator-column>

discriminator-column 要素は、Entity クラスの@DiscriminatorColumn (デフォルト値も含む) を上書きします。

discriminator-column 要素は、Entity クラスと、そのサブクラスで適用します (アノテーションや XML 要素で指定したサブクラスが、別の方法で上書きされなかった場合)。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-31 <discriminator-column>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.8 @DiscriminatorColumn」の name 属性を参照してください。
discriminator-type	orm:discriminator-type	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.8 @DiscriminatorColumn」の discriminatorType 属性を参照してください。
column-definition	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.8 @DiscriminatorColumn」の columnDefinition 属性を参照してください。
length	xsd:int	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.8 @DiscriminatorColumn」の length 属性を参照してください。

## (9) <sequence-generator>

sequence-generator 要素によって定義されたジェネレータは、アノテーションによって定義されたジェネレータや、O/R マッピングファイルで定義されたほかのジェネレータに加えられます。アノテーションで同名のジェネレータが定義されたら、sequence-generator 要素で定義されたジェネレータで上書きします。

sequence-generator 要素によって定義されたジェネレータは、永続化ユニットに適用されます。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-32 <sequence-generator>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.56 @SequenceGenerator」の name 属性を参照してください。

属性名	型	任意/ 必須	説明
sequence-name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.56 @SequenceGenerator」の sequenceName 属性を参照してください。
initial-value	xsd:int	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.56 @SequenceGenerator」の initialValue 属性を参照してください。
allocation-size	xsd:int	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.56 @SequenceGenerator」の allocationSize 属性を参照してください。

## (10) <table-generator>

table-generator 要素によって定義されたジェネレータは、アノテーションによって定義されたジェネレータや、O/R マッピングファイルで定義されたほかのジェネレータに加えられます。アノテーションで同名のジェネレータが定義されたら、table-generator 要素で定義されたジェネレータで上書きします。

table-generator 要素によって定義されたジェネレータは、永続化ユニットに適用されます。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-33 <table-generator>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の name 属性を参照してください。
table	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の table 属性を参照してください。
catalog	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の catalog 属性を参照してください。
schema	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の schema 属性を参照してください。
pk-column-name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の pkColumnName 属性を参照してください。
value-column-name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の valueColumnName 属性を参照してください。

属性名	型	任意/ 必須	説明
pk-column-value	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の pkColumnValue 属性を参照してください。
initial-value	xsd:int	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の initialValue 属性を参照してください。
allocation-size	xsd:int	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の allocationSize 属性を参照してください。

### (11) <named-query>

named-query 要素によって定義された名前付きクエリは、アノテーションによって定義された名前付きクエリや、O/R マッピングファイルで定義されたほかの名前付きクエリに加えられます。アノテーションで同名の名前付きクエリが定義されたら、named-query 要素で定義された名前付きクエリで上書きします。

named-query 要素によって定義された名前付きクエリは、永続化ユニットに適用されます。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-34 <named-query>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.35 @NamedQuery」の name 属性を参照してください。

### (12) <named-native-query>

named-native-query 要素によって定義された名前付きネイティブクエリは、アノテーションによって定義された名前付きネイティブクエリや、O/R マッピングファイルで定義されたほかの名前付きネイティブクエリに加えられます。アノテーションで同名の名前付きネイティブクエリが定義されたら、named-native-query 要素で定義された名前付きネイティブクエリで上書きします。

named-native-query 要素によって定義された名前付きネイティブクエリは、永続化ユニットに適用されます。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-35 &lt;named-native-query&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.33 @NamedNativeQuery」の name 属性を参照してください。
result-class	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.33 @NamedNativeQuery」の resultClass 属性を参照してください。
result-set-mapping	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.33 @NamedNativeQuery」の resultSetMapping 属性を参照してください。

### (13) <sql-result-set-mapping>

sql-result-set-mapping 要素によって定義された SQL 結果のマッピングは、アノテーションによって定義された SQL 結果のマッピングや、O/R マッピングファイルで定義されたほかの SQL 結果のマッピングに加えられます。アノテーションで同名の SQL 結果のマッピングが定義されたら、sql-result-set-mapping 要素で定義された SQL 結果のマッピングで上書きします。

sql-result-set-mapping 要素によって定義された SQL 結果のマッピングは、永続化ユニットに適用されません。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-36 &lt;sql-result-set-mapping&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.57 @SqlResultSetMapping」の name 属性を参照してください。

### (14) <exclude-default-listeners>

exclude-default-listeners 要素は、@ExcludeDefaultListeners が Entity クラスに指定されたかどうかに関係なく適用されます。

exclude-default-listeners 要素は、Entity クラスとそのサブクラスのデフォルトエンティティリスナを抑制します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

### (15) <exclude-superclass-listeners>

exclude-superclass-listeners 要素は、@ExcludeSuperclassListeners が Entity クラスに指定されたかどうかに関係なく適用されます。

exclude-superclass-listeners 要素は、Entity クラスとそのサブクラスのスーパークラスリスナを押し止めます。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

## (16) <entity-listeners>

entity-listeners 要素は、Entity クラスの@EntityListeners を上書きします。

ほかの方法で押し止されない場合、これらのリスナは Entity クラスとそのサブクラスで適用します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

## (17) <pre-persist>, <post-persist>, <pre-remove>, <post-remove>, <pre-update>, <post-update>, <post-load>

これらの要素は、Entity クラスで、対応するアノテーションによるライフサイクルコールバックメソッドの定義を上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-37 <pre-persist>, <post-persist>, <pre-remove>, <post-remove>, <pre-update>, <post-update>, <post-load>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
method-name	xsd:string	必須	対象のメソッド名。

## (18) <attribute-override>

attribute-override 要素は、Entity クラスの@AttributeOverride または@AttributeOverrides で定義された値に加えられます。attribute-override 要素は、同一の属性名の AttributeOverride 要素を上書きしません。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-38 <attribute-override>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.3 @AttributeOverride」の name 属性を参照してください。



### (19) <association-override>

association-override 要素は、Entity クラスの@AssociationOverride または@AssociationOverrides で定義された値に加えられます。association-override 要素は、同一の属性名の AssociationOverride 要素を上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-39 <association-override>の属性

属性名	型	任意／必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.1 @AssociationOverride」の name 属性を参照してください。

### (20) <id>

id 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-40 <id>の属性

属性名	型	任意／必須	説明
name	xsd:string	必須	プライマリキープロパティまたはフィールド。

### (21) <embedded-id>

embedded-id 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-41 <embedded-id>の属性

属性名	型	任意／必須	説明
name	xsd:string	必須	複合プライマリキー。

### (22) <basic>

basic 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-42 <basic>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	型をマッピングするメソッドまたはフィールド。
fetch	orm:fetch-type	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.5 @Basic」の fetch 属性を参照してください。
optional	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.5 @Basic」の optional 属性を参照してください。

### (23) <version>

version 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-43 <version>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	version プロパティまたはフィールド。

### (24) <many-to-one>

many-to-one 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-44 <many-to-one>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	多対一リレーションシップのメソッドまたはフィールド。
target-entity	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.29 @ManyToOne」の targetEntity 属性を参照してください。
fetch	orm:fetch-type	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.29 @ManyToOne」の fetch 属性を参照してください。
optional	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.29 @ManyToOne」の optional 属性を参照してください。

## (25) &lt;one-to-many&gt;

one-to-many 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-45 &lt;one-to-many&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	一対多リレーションシップのメソッドまたはフィールド。
target-entity	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.36 @OneToMany」の targetEntity 属性を参照してください。
fetch	orm:fetch-type	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.36 @OneToMany」の fetch 属性を参照してください。
mapped-by	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.36 @OneToMany」の mappedBy 属性を参照してください。

## (26) &lt;one-to-one&gt;

one-to-one 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-46 &lt;one-to-one&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	一対一リレーションシップのメソッドまたはフィールド。
target-entity	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.37 @OneToOne」の targetEntity 属性を参照してください。
fetch	orm:fetch-type	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.37 @OneToOne」の fetch 属性を参照してください。
optional	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.37 @OneToOne」の optional 属性を参照してください。
mapped-by	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.37 @OneToOne」の mappedBy 属性を参照してください。

## (27) &lt;many-to-many&gt;

many-to-many 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-47 &lt;many-to-many&gt;の属性

属性名	型	任意／ 必須	説明
name	xsd:string	必須	多対多リレーションシップのメソッドまたはフィールド。
target-entity	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.28 @ManyToMany」の targetEntity 属性を参照してください。
fetch	orm:fetch-type	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.28 @ManyToMany」の fetch 属性を参照してください。
mapped-by	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.28 @ManyToMany」の mappedBy 属性を参照してください。

## (28) &lt;embedded&gt;

embedded 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-48 &lt;embedded&gt;の属性

属性名	型	任意／ 必須	説明
name	xsd:string	必須	埋め込みオブジェクトであるプロパティまたはフィールド。

## (29) &lt;transient&gt;

transient 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-49 &lt;transient&gt;の属性

属性名	型	任意／ 必須	説明
name	xsd:string	必須	永続的でないプロパティまたはフィールド。

## 6.3.9 embeddable 以下の要素

次に示す要素と属性は、要素や属性の対象である埋め込み可能クラスだけに適用されます。

### (1) <embeddable>

embeddable 要素は、永続化ユニットの埋め込み可能クラスを定義します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-50 <embeddable>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
class	xsd:string	必須	埋め込み可能クラスのクラス名。
access	orm:access-type	任意	access 属性は、埋め込み可能クラスのアクセスタイプを定義します。access 属性は、埋め込み可能クラスに与えた persistence-unit-defaults 要素（デフォルトとして指定した要素）や entity-mappings 要素（永続化ユニット全体に有効な要素）で指定したアクセスタイプを上書きします。 <sup>※1</sup>
metadata-complete <sup>※2</sup>	xsd:boolean	任意	metadata-complete 属性が embeddable 要素自身に指定されたら、埋め込み可能クラスや、埋め込み可能クラスのフィールドやプロパティに指定されたアノテーションは無視されます。 metadata-complete が embeddable 要素に指定され、XML 要素が省略されると、デフォルト値が有効になります。

注※1 指定値には、PROPERTY または FIELD を指定します。エンティティクラスのフィールドに対するアクセス方法の指定については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「6.12.3 エンティティクラスのフィールドに対するアクセス方法の指定」を参照してください。

注※2 アノテーションが指定されている場合、この要素を指定することによって、KDJJE55532-W のメッセージが出力されることがあります。

### (2) <basic>

basic 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-51 <basic>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	型をマッピングするメソッドまたはフィールド。

属性名	型	任意/ 必須	説明
fetch	orm:fetch-type	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.5 @Basic」の fetch 属性を参照してください。
optional	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.5 @Basic」の optional 属性を参照してください。

### (3) <transient>

transient 要素は、フィールドやプロパティで指定したマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-52 <transient>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	永続的でないプロパティまたはフィールド。

## 6.3.10 その他の要素

### (1) <description>

説明を付加します。

### (2) <entity-listener>

エンティティリスナを指定します。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-53 <entity-listener>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
class	xsd:string	必須	エンティティリスナのクラス名。

### (3) <pre-persist>, <post-persist>, <pre-remove>, <post-remove>, <pre-update>, <post-update>, <post-load>

ライフサイクルコールバックメソッドを指定します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-54 &lt;pre-persist&gt;, &lt;post-persist&gt;, &lt;pre-remove&gt;, &lt;post-remove&gt;, &lt;pre-update&gt;, &lt;post-update&gt;, &lt;post-load&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
method-name	xsd:string	必須	対象のメソッド名。

**(4) <unique-constraint>**

DDL にユニーク制約を付加します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

**(5) <column-name>**

ユニーク制約を付加するカラムの名前を指定します。

@UniqueConstraint の columnNames 属性と対応しています。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

**(6) <query>**

クエリ文字列を指定します。

@NamedQuery の query 属性および@NamedNativeQuery の query 属性と対応しています。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

**(7) <hint>**

クエリにヒントを付加します。

@NamedQuery の hints 属性および@NamedNativeQuery の hints 属性と対応しています。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-55 &lt;hint&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.53 @QueryHint」の name 属性を参照してください。
value	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.53 @QueryHint」の value 属性を参照してください。

## (8) <entity-result>

ネイティブ SQL のクエリ結果をマッピングするための Entity クラスを指定します。

@SqlResultSetMapping の entities 属性と対応しています。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-56 <entity-result>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
entity-class	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.15 @EntityResult」の entityClass 属性を参照してください。
discriminator-column	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.15 @EntityResult」の discriminatorColumn 属性を参照してください。

## (9) <field-result>

ネイティブ SQL のクエリ結果をマッピングするためのフィールドを指定します。

@EntityResult の fields 属性と対応しています。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-57 <field-result>の属性

型	属性名	任意/ 必須	説明
xsd:string	name	必須	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.19 @FieldResult」の name 属性を参照してください。
xsd:string	column	必須	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.19 @FieldResult」の column 属性を参照してください。

## (10) <column-result>

ネイティブ SQL のクエリ結果をマッピングするためのカラムを指定します。

@SqlResultSetMapping の columns 属性と対応しています。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。



表 6-58 &lt;column-result&gt;の属性

型	属性名	任意/ 必須	説明
xsd:string	name	必須	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.7 @ColumnResult」の name 属性を参照してください。

## (11) &lt;attributes&gt;

attributes 要素自体の機能はありません。

## (12) &lt;column&gt;

Persistent フィールドまたはプロパティに、カラムのマッピングを指定します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-59 &lt;column&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.6 @Column」の name 属性を参照してください。
unique	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.6 @Column」の unique 属性を参照してください。
nullable	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.6 @Column」の nullable 属性を参照してください。
insertable	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.6 @Column」の insertable 属性を参照してください。
updatable	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.6 @Column」の updatable 属性を参照してください。
column-definition	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.6 @Column」の columnDefinition 属性を参照してください。
table	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.6 @Column」の table 属性を参照してください。
length	xsd:int	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.6 @Column」の length 属性を参照してください。
precision	xsd:int	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.6 @Column」の precision 属性を参照してください。

属性名	型	任意/ 必須	説明
scale	xsd:int	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.6 @Column」の scale 属性を参照してください。

### (13) <generated-value>

プライマリキー値生成戦略を指定します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-60 <generated-value>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
strategy	orm:generation-type	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.20 @GeneratedValue」の strategy 属性を参照してください。
generator	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.20 @GeneratedValue」の generator 属性を参照してください。

### (14) <temporal>

DATE, TIME, TIMESTAMP 型へマッピングを行うときに指定します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

### (15) <table-generator>

テーブルジェネレータを追加します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-61 <table-generator>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の name 属性を参照してください。
table	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の table 属性を参照してください。

属性名	型	任意/ 必須	説明
catalog	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の catalog 属性を参照してください。
schema	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の schema 属性を参照してください。
pk-column-name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の pkColumnName 属性を参照してください。
value-column-name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の valueColumnName 属性を参照してください。
pk-column-value	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の pkColumnName 属性を参照してください。
initial-value	xsd:int	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の initialValue 属性を参照してください。
allocation-size	xsd:int	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.60 @TableGenerator」の allocationSize 属性を参照してください。

## (16) <attribute-override>

プロパティやフィールドのマッピングを上書きします。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-62 <attribute-override>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	必須	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.3 @AttributeOverride」の name 属性を参照してください。

## (17) <lob>

Lob 型へマッピングを行うときに指定します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

## (18) <enumerated>

列挙型へマッピングを行うときに指定します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

## (19) <join-column>

テーブルを結合するために、所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-63 <join-column>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の name 属性を参照してください。
referenced-column-name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の referencedColumnName 属性を参照してください。
unique	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の unique 属性を参照してください。
nullable	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の nullable 属性を参照してください。
insertable	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の insertable 属性を参照してください。
updatable	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の updatable 属性を参照してください。
column-definition	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の columnDefinition 属性を参照してください。
table	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の table 属性を参照してください。

## (20) <join-table>

多対多 (many-to-many) や片方向の一対多 (one-to-many) で使用する結合表を指定します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-64 <join-table>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.26 @JoinTable」の name 属性を参照してください。
catalog	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.26 @JoinTable」の catalog 属性を参照してください。
schema	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.26 @JoinTable」の schema 属性を参照してください。

## (21) <inverse-join-column>

テーブルを結合するために、被所有者側エンティティに対応する結合表の外部キーカラムを指定します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-65 <inverse-join-column>の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の name 属性を参照してください。
referenced-column-name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の referencedColumnName 属性を参照してください。
unique	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の unique 属性を参照してください。
nullable	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の nullable 属性を参照してください。
insertable	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の insertable 属性を参照してください。
updatable	xsd:boolean	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の updatable 属性を参照してください。

属性名	型	任意/ 必須	説明
column-definition	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の columnDefinition 属性を参照してください。
table	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.24 @JoinColumn」の table 属性を参照してください。

**(22) <cascade>**

カスケードできる操作を指定します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

**(23) <cascade-all>**

すべての操作をカスケードします。

**(24) <cascade-persist>**

persist 操作をカスケードします。

**(25) <cascade-merge>**

merge 操作をカスケードします。

**(26) <cascade-remove>**

remove 操作をカスケードします。

**(27) <cascade-refresh>**

refresh 操作をカスケードします。

**(28) <order-by>**

関連をコレクションに保持する際に付ける順序を指定します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

**(29) <map-key>**

Map 型の関連としてマップキーを指定します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-66 &lt;map-key&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.30 @MapKey」の name 属性を参照してください。

## (30) &lt;primary-key-join-column&gt;

ほかのテーブルに JOIN する外部キーとして使われる、プライマリキーカラムを指定します。

機能および属性の詳細については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7 javax.persistence パッケージ」を参照してください。

指定できる属性を次の表に示します。

表 6-67 &lt;primary-key-join-column&gt;の属性

属性名	型	任意/ 必須	説明
name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.51 @PrimaryKeyJoinColumn」の name 属性を参照してください。
referenced-column-name	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.51 @PrimaryKeyJoinColumn」の referencedColumnName 属性を参照してください。
column-definition	xsd:string	任意	マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス API 編」の「2.7.51 @PrimaryKeyJoinColumn」の columnDefinition 属性を参照してください。

## 6.4 クエリヒント

CJPA プロバイダでは、O/R マッピングファイルの named-query 要素の下位要素である hint 要素にクエリヒントを指定できます。なお、クエリヒントは、@NamedQuery アノテーションの引数の@Hint アノテーションにも指定できます。アノテーションに指定するクエリヒントについては、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス API 編」の「2.7.53 @QueryHint」を参照してください。

O/R マッピングファイルの named-query 要素の下位要素である hint 要素に指定できるクエリヒントを次の表に示します。

表 6-68 CJPA プロバイダで使用できるクエリヒント

キー名称	説明	指定可能値	デフォルト
cosminexus.jpa.pessimistic-lock	悲観的ロックを使用するかどうかを指定します。	NoLock 悲観的ロックを使用しません。  Lock 悲観的ロックを使用します。 対象となるテーブルがすでにロックされている場合、解放されるまで待ちます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>Oracle の場合 SELECT ... FOR UPDATE を発行します。</li> <li>HiRDB の場合 SELECT ... WITH EXCLUSIVE LOCK を発行します。</li> </ul> LockNoWait 悲観的ロックを使用します。 対象となるテーブルがすでにロックされている場合、例外が発生します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>Oracle の場合 SELECT ... FOR UPDATE NO WAIT を発行します。</li> <li>HiRDB の場合 SELECT ... WITH EXCLUSIVE LOCK NO WAIT を発行します。</li> </ul>	NoLock

注 指定できるデータ型は String です。

### ！ 注意事項

O/R マッピングファイルに指定したクエリヒントに、指定可能範囲外の値が設定された場合は、アプリケーションを開始したタイミングで例外が発生します。なお、値の大文字と小文字は区別しません。



# 7

## CJMS プロバイダで使用するファイル

この章では、CJMS プロバイダで使用するファイルの形式、格納先、機能、指定できるキーなどについて説明します。

## 7.1 CJMS プロバイダで使用するファイルの一覧

CJMS プロバイダで使用するファイルの一覧を、次の表に示します。

表 7-1 CJMS プロバイダで使用するファイルの一覧

ファイル名	分類	概要	参照先
admin.properties	管理コマンドプロパティファイル	管理コマンドのログ出力について設定します。	7.2
commonconfig.properties	CJMSP ブローカー共通プロパティファイル	すべての CJMSP ブローカーのシステムプロパティを一括設定します。	7.3
config.properties	CJMSP ブローカー個別プロパティファイル	CJMSP ブローカーのシステムプロパティを個別に設定します。	7.4

## 7.2 admin.properties (管理コマンドプロパティファイル)

---

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 指定範囲外の値を指定した場合は範囲外の値指定時の値が適用されます。値を指定しなかった場合は値未指定時の値が適用されます。これらの場合、コンソール上に警告メッセージが表示されます。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>%CC%cjmsp%var\admin%config%
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/CC/cjmsp/var/admin/config/

なお、以降、<Application Server のインストールディレクトリ>%CC%cjmsp (Windows の場合) または /opt/Cosminexus/CC/cjmsp (UNIX の場合) のことを、<CJMSP\_HOME>と表記します。

### (3) 機能

管理コマンドのログ出力について設定します。

なお、プロパティの値はログの初期化よりも前に検証されます。このファイルにプロパティとして不正な値を指定した場合、ログの内容はコンソールだけに出力され、ログファイルには出力されません。

また、次に示すプロパティを変更する場合、変更した内容は<CJMSP\_HOME>%var%admin%log ディレクトリ下 (Windows の場合) または<CJMSP\_HOME>/var/admin/log ディレクトリ下 (UNIX の場合) のすべてのログファイルを削除したときに有効になります。

- admin.logger.ExceptionLogFile.filename
- admin.logger.ExceptionLogFile.filesize
- admin.logger.MessageLogFile.filename
- admin.logger.MessageLogFile.filesize

### (4) 設定できるキー

設定できるキーについて次に示します。なお「値未指定時」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

7 CJMS プロバイダで使用するファイル

キー名称	内容	指定可能値	範囲外の値 指定時	値未指定時	VR
admin.logger.ExceptionLogFile.fileenum	作成するログファイル数の最大値を指定します。	1~16	2	2	08-50
admin.logger.ExceptionLogFile.filepath	<p>ログファイルの格納先を絶対パスで指定します。</p> <p>ファイルは自動的にcjmsadmin_errN.logという名前で作成されます。Nはログファイルの面数です。</p> <p>指定するディレクトリが存在しない場合は、CJMS プロバイダが警告メッセージを表示し、デフォルトの内容が適用されます。また、デフォルトのディレクトリが存在しない場合、CJMS プロバイダがデフォルトディレクトリを作成し、使用できるようになります。</p> <p>読み取り権限と書き込み権限があるパスを指定してください。読み取り権限だけしかないパスを指定した場合、デフォルトの内容が適用されます。また、デフォルトのパスに読み取り権限しかない場合は、操作が失敗します。</p> <p>ディレクトリ名として指定できる文字およびパスの長さについては、ご使用のOSの制限に従ってください。</p> <p>なお、パスに「¥」を指定する場合は、「¥¥」と指定して、エスケープしてください。</p>	<パス名>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windowsの場合 &lt;CJMS P_HOME&gt; ¥var ¥admin ¥log</li> <li>UNIXの場合 &lt;CJMS P_HOME&gt;/var/admin/log</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windowsの場合 &lt;CJMS P_HOME&gt; ¥var ¥admin ¥log</li> <li>UNIXの場合 &lt;CJMS P_HOME&gt;/var/admin/log</li> </ul>	08-50
admin.logger.ExceptionLogFile.filesize	ログファイルサイズの最大値をバイトで指定します。	8192~4194304	1048576	1048576	08-50
admin.logger.MessageLogFile.fileenum	作成するログファイル数の最大値を指定します。	1~16	2	2	08-50
admin.logger.MessageLogFile.filepath	<p>ログファイルの格納先を絶対パスで指定します。</p> <p>ファイルは自動的にcjmsadmin_msgN.logという名前で作成されます。Nはログファイルの面数です。</p> <p>指定するディレクトリが存在しない場合は、CJMS プロバイダが警告メッセージを表示し、デフォルトの内容が適用されます。また、デフォルトのディレクトリが存在しない場合、</p>	<パス名>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windowsの場合 &lt;CJMS P_HOME&gt; ¥var ¥admin ¥log</li> <li>UNIXの場合</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windowsの場合 &lt;CJMS P_HOME&gt; ¥var ¥admin ¥log</li> <li>UNIXの場合</li> </ul>	08-50

キー名称	内容	指定可能値	範囲外の値 指定時	値未指定時	VR
admin.logger.MessageLog File.filepath	<p>CJMS プロバイダがデフォルトディレクトリを作成し、使用できるようになります。</p> <p>読み取り権限と書き込み権限があるパスを指定してください。読み取り権限だけしかないパスを指定した場合、デフォルトの内容が適用されます。</p> <p>また、デフォルトのパスに読み取り権限しかない場合は、操作が失敗します。</p> <p>ディレクトリ名として指定できる文字およびパスの長さについては、ご使用の OS の制限に従ってください。</p> <p>なお、パスに「¥」を指定する場合は、「¥¥」と指定して、エスケープしてください。</p>	<パス名>	<CJMS P_HOME>/var/ admin/ log	<CJMS P_HOME>/var/ admin/ log	08-50
admin.logger.MessageLog File.filesize	ログファイルサイズの最大値を指定します。	8192～ 4194304	1048576	1048576	08-50
admin.logger.MessageLog File.trace.level	ログのレベルを指定します。指定したレベルに基づいて情報がログファイルに記録されます。	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ERROR</li> <li>• WARNING</li> <li>• INFO</li> </ul>	ERROR	ERROR	08-50

## 7.3 commonconfig.properties (CJMSP ブローカー 共通プロパティファイル)

---

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 指定範囲外の値を指定した場合は範囲外の値指定時の値が適用されます。値を指定しなかった場合は値未指定時の値が適用されます。これらの場合、コンソール上に警告メッセージが表示されます。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
    <Application Server のインストールディレクトリ>%CC%cjmsp%lib%props%broker%
- UNIX の場合  
    /opt/Cosminexus/CC/cjmsp/lib/props/broker/

### (3) 機能

すべての CJMSP ブローカーのプロパティを一括設定するプロパティファイルについて説明します。

CJMSP ブローカーの起動中にこのファイルの内容を変更した場合、変更した内容は CJMSP ブローカーを再起動したときに反映され、有効になります。

### (4) 設定できるキー

設定できるキーを次に示します。なお、詳細は、「7.4 config.properties (CJMSP ブローカー個別プロパティファイル)」を参照してください。

#### (a) コネクションサービス

コネクションサービスについて設定できるキーを次に示します。詳細は、「7.4(4)(a) コネクションサービス」を参照してください。

- imq.hostname キー

#### (b) 永続化サービス

永続化サービスについて設定できるキーを次に示します。詳細は、「7.4(4)(b) 永続化サービス」を参照してください。

- imq.persist.file.sync.enabled キー

**(c) 送信先自動生成の設定**

送信先自動生成について設定できるキーを次に示します。詳細は、「7.4(4)(c) 送信先自動生成の設定」を参照してください。

- `imq.autocreate.destination.maxNumMsgs` キー
- `imq.autocreate.destination.maxTotalMsgBytes` キー
- `imq.autocreate.queue.consumerFlowLimit` キー
- `imq.autocreate.topic.consumerFlowLimit` キー

**(d) モニタリングプロパティの設定**

モニタリングプロパティについて設定できるキーを次に示します。詳細は、「7.4(4)(d) モニタリングプロパティの設定」を参照してください。

- `imq.metrics.interval` キー

**(e) CJMSP ブローカーログプロパティ**

CJMSP ブローカーログプロパティについて設定できるキーを次に示します。詳細は、「7.4(4)(e) CJMSP ブローカーログプロパティ」を参照してください。

- `broker.logger.ExceptionLogFile.filenum` キー
- `broker.logger.ExceptionLogFile.filesize` キー
- `broker.logger.MessageLogFile.filenum` キー
- `broker.logger.MessageLogFile.filesize` キー
- `broker.logger.MessageLogFile.trace.level` キー

## 7.4 config.properties (CJMSP ブローカー個別プロパティファイル)

---

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 指定範囲外の値を指定した場合は範囲外の値指定時の値が適用されます。値を指定しなかった場合は値未指定時の値が適用されます。これらの場合、コンソール上に警告メッセージが表示されます。

### (2) ファイルの格納先

デフォルトの格納先を次に示します。なお、var ディレクトリの格納先は、cjmsbroker コマンドの-varhome オプションで変更できます。

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>%CC%cjmsp\*var\*instances\*< CJMSP ブローカーのインスタンス名称>\*props\*
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/CC/cjmsp/var/instances/< CJMSP ブローカーのインスタンス名称>/props/

以降、<Application Server のインストールディレクトリ>%CC%cjmsp (Windows の場合) または/opt/Cosminexus/CC/cjmsp (UNIX の場合) のことを、<CJMSP\_HOME>と表記します。

### (3) 機能

個別の CJMSP ブローカーを実行するシステムプロパティを指定します。

config.properties と commonconfig.properties とで異なる値が指定されている場合、config.properties の値が優先されます。

CJMSP ブローカーの起動中にこのファイルの内容を変更した場合、変更した内容は CJMSP ブローカーを再起動したときに反映され、有効になります。

### (4) 設定できるキー

設定できるキーについて次に示します。なお「値未指定時」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

#### (a) コネクションサービス

コネクションサービスに関するプロパティについて次に示します。



キー名称	内容	指定可能値	範囲外の値 指定時	値未指定時	VR
imq.admin.tcp.port	<p>admin サービス用のポート番号を指定します。</p> <p>ファイアウォールを使用して CJMSMP ブローカーに接続する場合は、このプロパティを使用して静的にポート番号を指定する必要があります。</p> <p>次の場合、ポートマッパーによってポート番号が動的に割り当てられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>0 を指定した場合</li> <li>ユーザが指定可能値範囲外の値 (65535 以上) を指定した場合</li> </ul> <p>-1 および 1~1024 の値を指定した場合、動作は保証されません。</p>	0, 1025~65535	0	0	08-50
imq.hostname	<p>すべてのコネクションサービス用デフォルトホスト名または IP アドレスを指定します。</p> <p>複数のサーバに CJMS プロバイダをインストールする場合、このプロパティを指定することをお勧めします。</p> <p>ホスト名に無効な文字列を指定した場合、CJMSP ブローカーを開始できません。また、localhost またはループバックアドレス (127.*.*) を指定した場合、CJMSP ブローカーへリモート接続はできません。</p> <p>なお、このプロパティに値を指定しない場合 ([imq.hostname=] までを指定した場合)、CJMSP ブローカー起動時には、ローカルホストの CJMSMP ブローカーに接続します。このとき、ホスト名は出力されません。例えば、このプロパティに値を指定しないで imq.portmapper.port に 7676 を指定した場合、CJMSP ブローカーを起動時には「[:7676]」と出力されます。</p>	—	—	<ホスト名 >	08-50
imq.jms.tcp.port	<p>jms サービス用のポート番号を指定します。</p> <p>ファイアウォールを使用して CJMSMP ブローカーに接続する場合は、このプロパティを使用</p>	0, 1025~65535	0	0	08-50

キー名称	内容	指定可能値	範囲外の値 指定時	値未指定時	VR
imq.jms.tcp.port	<p>して静的にポート番号を指定する必要があります。</p> <p>次の場合、ポートマッパーによってポート番号が動的に割り当てられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>0 を指定した場合</li> <li>ユーザが指定可能値範囲外の値 (65535 以上) を指定した場合</li> </ul> <p>-1 および 1~1024 の値を指定した場合、動作は保証されません。</p> <p>すでに使用されているポート番号を指定した場合、ブローカーの起動には成功しますが、jms サービスは使用できません。この状態で cjmsicmd list svc コマンドを実行すると、jms サービスの状態は「UNKNOWN」と表示されます。「UNKNOWN」はサービスが起動していない、または使用できない状態を示します。</p>	0, 1025~65535	0	0	08-50
imq.portmapper.port	<p>CJMSP クライアントが CJMSP ブローカーに接続するためのポートマッパーのポート番号を指定します。</p> <p>複数の CJMSP ブローカーインスタンスが同じホスト上で起動している場合、それぞれ異なるポートマッパーのポート番号を指定する必要があります。</p>	1025~65535	7676	7676	08-50

(凡例)

- : 該当なし。

## (b) 永続化サービス

永続化サービスに関するプロパティについて次に示します。

キー名称	内容	指定可能値	範囲外の値 指定時	値未指定時	VR
imq.persist.file.sync.enabled	<p>メモリ上のデータのファイルへの書き込み処理を同期と非同期のどちらで実行するかを指定します。</p> <p>true を指定した場合、書き込み処理は同期で実行されます。</p>	<p>指定できる値を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>true</li> <li>false</li> </ul>	false	false	08-50

キー名称	内容	指定可能値	範囲外の値 指定時	値未指定時	VR
imq.persist.file.sync.enabled	<p>この場合、システム障害が発生したときにデータが紛失することを防げますが、処理性能に影響があります。false を指定した場合、書き込み処理は非同期で実行されます。</p> <p>どちらを指定するかは、性能テストを実行した上で決定することをお勧めします。</p> <p>また、アプリケーションで配信モードとして「javax.jms.DeliveryMode.PERSISTENT」と指定している場合、このプロパティは true にすることをお勧めします。</p>	<p>指定できる値を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	false	08-50

## (c) 送信先自動生成の設定

送信先自動生成の設定に関するプロパティについて次に示します。

キー名称	内容	指定可能値	範囲外の値 指定時	値未指定時	VR
imq.autocreate.destination.maxNumMsgs	<p>未受信のメッセージ数の最大値を指定します。</p> <p>-1 または 0 を指定した場合、メッセージ数は無制限になります。</p>	-1 ~ 2147483647	100000	100000	08-50
imq.autocreate.destination.maxTotalMsgBytes	<p>未受信メッセージ用の総合メモリサイズの最大値をバイトで指定します。単位を指定する場合は、値の末尾に次の文字列を追加してください。単位を指定しない場合は、バイトとして扱われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• バイト：b</li> <li>• キロバイト：k</li> <li>• メガバイト：m</li> </ul> <p>-1 または 0 を指定した場合、メッセージ数は無制限になります。</p>	-1 ~ 2147483647 (単位:バイト)	10m	10m	08-50
imq.autocreate.queue.consumerFlowLimit	<p>同一バッチでキューコンシューマーに配信されるメッセージ数の最大値を指定します。</p> <p>-1 を指定した場合、メッセージ数は無制限になります。</p>	<p>指定できる値を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• -1</li> <li>• 1 ~ 214748</li> </ul>	100	100	08-50

キー名称	内容	指定可能値	範囲外の値 指定時	値未指定時	VR
imq.autocreate.queue.consumerFlowLimit	同一バッチでキューコンシューマーに配信されるメッセージ数の最大値を指定します。 -1 を指定した場合、メッセージ数は無制限になります。	3647 の 整数	100	100	08-50
imq.autocreate.topic.consumerFlowLimit	同一バッチでトピックコンシューマーに配信されるメッセージ数の最大値を指定します。 -1 を指定した場合、メッセージ数は無制限になります。	指定できる 値を次に示 します。 • -1 • 1~ 214748 3647 の 整数	1000	1000	08-50

## (d) モニタリングプロパティの設定

モニタリングの設定に関するプロパティについて次に示します。

キー名称	内容	指定可能値	範囲外の値 指定時	値未指定時	VR
imq.metrics.interval	メトリクス情報をロガーおよびコンソールに書き込む時間を秒単位で指定します。 0 を指定した場合、メトリクスを出力しません。	0~ 21474836 47	0	0	08-50

## (e) CJMSP ブローカーログプロパティ

CJMSP ブローカーログに関するプロパティについて次に示します。

キー名称	内容	指定可能値	範囲外の値 指定時	値未指定時	VR
broker.logger.ExceptionLogFile.filenum	作成するログファイル数の最大値を指定します。	1~16	2	2	08-50
broker.logger.ExceptionLogFile.filesize	ログファイルサイズの最大値を指定します。 最大値を超える場合、新しいファイルが作成され、ログファイルの内容が新しいファイルに出力されます。	8192~ 4194304	1048576	1048576	08-50
broker.logger.MessageLogFile.filenum	作成するログファイル数の最大値を指定します。	1~16	2	2	08-50
broker.logger.MessageLogFile.filesize	ログファイルサイズの最大値を指定します。	8192~ 4194304	1048576	1048576	08-50

キー名称	内容	指定可能値	範囲外の値 指定時	値未指定時	VR
broker.logger.MessageLog File.filesize	最大値を超える場合、ログファイルの内容が新しいファイルに出力されます。	8192～ 4194304	1048576	1048576	08-50
broker.logger.MessageLog File.trace.level	ログのレベルを指定します。 指定したレベルに基づいて情報がログファイルに出力されます。	指定できる 文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ERROR</li> <li>• WARNING</li> <li>• INFO</li> </ul>	ERROR	ERROR	08-50

## (f) そのほかのプロパティ

そのほかに関するプロパティについて次に示します。

キー名称	内容	指定可能値	範囲外の値 指定時	値未指定時	VR
imq.instanceconfig.version	内部処理で使用するプロパティです。設定されている内容を変更しないでください。	—	—	—	08-50

(凡例)

—：該当なし。



# 8

## CTM で使用するファイル

この章では、CTM で使用するファイルの形式、格納先、機能、指定できるキーなどについて説明します。

## 8.1 CTM で使用するファイルの一覧

CTM で使用するファイルの一覧を、次の表に示します。

表 8-1 CTM で使用するファイルの一覧

ファイル名	分類	概要	参照先
(任意) ※	CTM ユーザ環境変数定義ファイル	ctmstart コマンド (CTM デーモンの開始) を実行するときに必要な環境変数を指定します。	8.2
(任意) ※	CTM コマンドオプションファイル	ctmstart コマンド (CTM デーモンの開始) を実行するときに、CTM レギュレータを自動開始するために指定する引数 (コマンドオプション) をあらかじめファイルに指定します。	8.3

注※

使用できる文字は、Windows の場合、英数字、ピリオド (.), 円符号 (¥), コロン (:), プラス (+), またはハイフン (-) です。UNIX の場合、英数字、ピリオド (.), スラッシュ (/), プラス (+), またはハイフン (-) です。

なお、CTM を使用してリクエストのスケジューリングや負荷分散をするためには、表 8-1 に示したファイルのほかに、J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルで、CTM の使用の有無、CTM ドメイン名、CTM デーモンの CTM 識別子、CTM が使用するホスト名などを指定する必要があります。J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルの CTM のキーについては、「2.4(5)(i) `ejbserver.ctm` から始まるキー」を参照してください。



## 8.2 CTM ユーザ環境変数定義ファイル

### (1) 形式

次の形式で指定します。

<環境変数名称>=<値>

- 環境変数名称, イコール (=), および値のどれも省略できません。
- 行の先頭から最初のイコール (=) の直前までが, 環境変数名称とみなされます。
- 最初のイコール (=) の直後からその行またはファイルの終端の直前までが値とみなされます。
- シャープ (#) で始まる行はコメントとみなされます。行の途中にシャープ (#) がある場合は, シャープ (#) 以降から行の最後までがコメントとみなされます。シャープ (#) の手前の空白およびタブは無視されます。
- シャープ (#) は値には指定できません。
- 一つの定義を複数行に分けて記述する場合は, 改行の直前に継続符号 (¥) を記述します。継続符号 (¥) の直前の空白およびタブは無視されます。行の途中に継続符号 (¥) がある場合は, 継続記号 (¥) 以降から行の最後までがコメントとみなされます。このため, 継続記号 (¥) は行の最後に指定してください。
- 指定された環境変数と同一の環境変数名称がすでに存在する場合は, 指定した値で上書きされます。同一の環境変数名称がない場合は追加されます。

### (2) ファイルの格納先

格納先およびファイル名称は任意です。ファイル名には次の文字が使用できます。

- Windows の場合  
英数字, ピリオド (.), 円符号 (¥), コロン (:), プラス (+), またはハイフン (-)
- UNIX の場合  
英数字, ピリオド (.), スラッシュ (/), プラス (+), またはハイフン (-)

### (3) 機能

ctmstart コマンド (CTM デーモンの開始) を実行するときに必要な環境変数を指定します。

### (4) 指定できるキー

任意の環境変数名称を指定できます。ただし, 次の環境変数名称は指定できません。

- 先頭が"CTM"または"ctm"で始まる環境変数名称

### (5) 記述例

- Windows の場合
 

```
# コメント行
LANG=ja_JP.SJIS                # 以降コメント
C:¥Program Files¥HITACHI¥Cosminexus¥CTM¥Lib¥ctmj2sv.jar:  ¥
C:¥Program Files¥HITACHI¥Cosminexus¥java¥classes.zip      # 継続行
```
- UNIX の場合
 

```
# コメント行
LANG=ja_JP.SJIS                # 以降コメント
```

```
CLPATH=/opt/Cosminexus/CTM/Lib/ctmj2sv.jar:  ¥
/opt/java/lib/classes.zip                # 継続行
```

## (6) 注意事項

- 先頭が"CTM"または"ctm"で始まる環境変数名称は使用できません。
- 環境変数名称には、英数字またはアンダースコア ( \_ ) で構成される文字列が指定できます。
- 行の先頭から環境変数名称までは空白およびタブは記述できません。行の先頭から環境変数名称を記述する必要があります。
- 環境変数名称とイコール (=) の間、およびイコール (=) と環境変数定義の間に空白およびタブを記述できません。
- 環境変数定義ファイル中に、%AAA% (Windows の場合)、または\$AAA (UNIX の場合) の記述がある場合、これらはそのままの文字列として認識されます。環境変数 AAA としては展開されません。
- 空行 (環境変数定義もコメントもない行) を記述する場合は、空白およびタブを含めないで改行コードだけを指定してください。
- 次に示す場合は定義内容が不正とみなされます。
  - 環境変数定義内にイコール (=) がない場合
  - 行の先頭または最後にイコール (=) がある場合
  - 環境変数名称の先頭が"CTM"または"ctm"で始まる場合
  - 空白またはタブだけの行がある場合
- Windows の場合、継続符号 ( ¥ ) の扱いについては、次の点に注意して環境変数を設定してください。
  - パス名の記述に使用する「¥」と継続符号 ( ¥ ) が混同しない
  - 必要なスペースが無効にならない

設定例を次に示します。なお、設定例の<改行>は改行コードを指します。

(例 1) 環境変数 ROOT\_PATH に c:¥を設定する場合

項目	誤った例	正しい例
CTM ユーザ環境変数定義ファイルの記述	ROOT_PATH=c:¥<改行> ROOT_PORT=18000<改行>	ROOT_PATH=c:¥#<改行> ROOT_PORT=18000<改行>
設定される環境変数	ROOT_PATH=c:ROOT_PORT=18000	ROOT_PATH=c:¥ ROOT_PORT=18000

誤った例では、c:¥の¥が継続符号と解釈されています。この場合、¥の直後にコメント符号 (#) を入れることで、¥が継続の意味を持たなくなります。

(例 2) 環境変数 CTMDIR に C:¥Program Files¥Cosminexus¥CTM を設定する場合

項目	誤った例	正しい例
CTM ユーザ環境変数定義ファイルの記述	CTMDIR=C:¥Program ¥<改行> Files¥Cosminexus¥CTM<改行>	CTMDIR=C:¥Program Files¥<改行> ¥Cosminexus¥CTM<改行>
設定される環境変数	CTMDIR=C:¥ProgramFiles¥Cosminexus¥CTM	CTMDIR=C:¥Program Files¥Cosminexus¥CTM

誤った例では、「Program Files」に含まれるスペースが継続符号の直前にあるため、無効になっています。継続符号の直前がスペースにならないように記述してください。

## 8.3 CTM コマンドオプションファイル

---

### (1) 形式

次の形式で指定します。

<引数> <値>

### (2) ファイルの格納先

格納先およびファイル名称は任意です。ファイル名には次の文字が使用できます。

- Windows の場合  
英数字, ピリオド (.), 円符号 (¥), コロン (:), プラス (+), またはハイフン (-)
- UNIX の場合  
英数字, ピリオド (.), スラッシュ (/), プラス (+), またはハイフン (-)

### (3) 機能

ctmstart コマンド (CTM デーモンの開始) を実行するときに, CTM レギュレータを自動開始するために指定する引数 (コマンドオプション) をあらかじめファイルに指定しておきます。ctmstart コマンドの -CTMRegOption オプションにファイル名を指定すると, このファイルに指定した内容を基に CTM レギュレータが自動開始されます。

なお, -CTMRegStart オプションが指定されていない場合, -CTMRegOption オプションの指定およびこのファイルの指定内容は無視されます。

### (4) 指定できるキー

ctmregltd コマンドの引数を指定できます。ctmregltd コマンドについては, マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス コマンド編」の「ctmregltd (CTM レギュレータの開始)」を参照してください。なお, このファイルの指定を省略した場合, CTM レギュレータは, ctmstart コマンドに指定した引数のうち, -CTMPort と -CTMEjbPort 以外の引数をデフォルト値として引き継ぎます。

### (5) 記述例

```
-CTMClientConnectCount 64
```

### (6) 注意事項

- コマンドオプションファイルには英数字, 空白, ハイフン (-), ピリオド (.), またはスラッシュ (/) を記述できます。
- コマンドオプション以外は記述しないでください。

# 9

## Web サーバ連携で使用するファイル

この章では、Web サーバ連携で使用するファイルの形式、格納先、機能、指定できるキーなどについて説明します。

## 9.1 Web サーバ連携で使用するファイルの一覧

Web サーバ連携で使用するファイルの一覧を、次の表に示します。

表 9-1 Web サーバ連携で使用するファイルの一覧

ファイル名	分類	概要	参照先
isapi_redirect.conf	Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイル	Microsoft IIS 用リダイレクタの動作を定義します。	9.2
mod_jk.conf	HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイル	HTTP Server 用リダイレクタの動作を定義します。	9.3
uriworkermap.properties	Microsoft IIS 用マッピング定義ファイル	Microsoft IIS へのリクエストでどの URL パターンが Web コンテナに転送されるかを定義します。	9.4
workers.properties	ワーカ定義ファイル	リダイレクタの動作を定義します。	9.5

## 9.2 isapi\_redirect.conf (Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。キー名称として定義されていないパラメータを定義しても無視されます。
- 「キー名称=値」として 1023 文字までが有効となります。超えた部分は切り捨てられます。

### (2) ファイルの格納先

<Application Server のインストールディレクトリ>%CC%\*web\*redirector\*isapi\_redirect.conf

### (3) 機能

Microsoft IIS 用リダイレクタの動作パラメータを定義します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次に示します。このキーに不正な値を指定した場合、動作は保証されません。なお、複数のキーを指定した場合、最後に指定した値が有効になります。

キー名称	内容	デフォルト値
connection_sharing	ワーカ間でコネクションを共有するかどうかを指定します。 true を指定した場合： 同一ホスト、同一ポートへ接続するワーカは、ワーカ定義が異なってもコネクションを共有します。 false を指定した場合： ワーカ定義が異なるワーカ間のコネクションは共有しません。	true
connect_timeout	リクエスト送信時の Web コンテナに対するコネクション確立のタイムアウト値を 0~3600 の整数（単位：秒）で指定します。 数値以外の文字列や範囲外の数値を指定した場合は、メッセージを出力し、デフォルト値を使用します。 タイムアウト値に 0、または TCP の持つデータ送信の再送タイムより長い時間を設定した場合、TCP の持つタイムアウト値になります。その場合、不正なタイムアウト値が指定されたことを示すメッセージは出力されません。	30
filter_priority	リダイレクタを ISAPI フィルタとして登録する際の、優先順序を指定します。 指定できる文字列を次に示します。 • hight（優先順序を「高」にする）	high

9 Web サーバ連携で使用するファイル

キー名称	内容	デフォルト値
filter_priority	<ul style="list-style-type: none"> <li>• medium (優先順序を「中」にする)</li> <li>• low (優先順序を「低」にする)</li> </ul>	high
gateway_host	ゲートウェイのホスト名または IP アドレスを指定します。 Host ヘッダのないリクエストを welcome ファイルなどにリダイレクトする場合、Location ヘッダに指定する URL のホスト名部分が指定値になります。	なし
gateway_https_scheme	クライアントからのリクエストのスキームが https であり、かつ SSL アクセラレータなどを介することで Web サーバへのスキームが http となる場合に、true を指定します。 true を指定した場合、Web サーバへのリクエストのスキームが https であるとみなされます。false を指定した場合は、何も実行されません。	false
gateway_port	ゲートウェイのポート番号を指定します。Host ヘッダのないリクエストに対して、welcome ファイルなどにリダイレクトするとき、Location ヘッダに指定する URL のポート番号部分が指定値になります。このパラメタを指定した場合は、gateway_host も必ず指定してください。 gateway_host を指定してこのパラメタを省略した場合、http によるアクセスの場合は 80、https によるアクセスの場合は 443 が使用されます。	なし
log_file_dir	ログファイルの出力先ディレクトリを指定します。 相対パスで指定した場合： <p>&lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt;¥CC¥web ¥redirector 以下のディレクトリ名を指します。</p> 絶対パスで指定した場合： 記述されたディレクトリ名を指します。 なお、出力先として指定したディレクトリのアクセス権に Users グループに対する書き込み権限を設定する必要があります。アクセス権を設定していない場合、ログファイルが出力されません。 log_file_prefix と trace_log_file_prefix に同じ値を指定した場合は、このキーに trace_log_file_dir とは異なる値を指定する必要があります。同じ値が指定された場合、リダイレクタは動作しません。	logs
log_file_num	リダイレクタ用ログファイルの最大数を指定します。この数を超えると古いログファイルは上書きされます。 1~64 の整数値を指定します。	5
log_file_prefix	ログファイル名のプリフィックスです。実際のログファイル名は、このキーの指定値に<通番>.log が付けられたものになります。 log_file_dir と trace_log_file_dir に同じ値を指定した場合は、このキーに trace_log_file_prefix とは異なる値を指定する必要があります。同じ値が指定された場合、リダイレクタは動作しません。	isapi_redirect
log_file_size	リダイレクタ用ログファイルの一つ当たりのサイズをバイト単位で指定します。 4096~16777216 の整数値を指定します。	4194304
log_level	リダイレクタ用ログファイルの出力レベルを指定します。指定するログレベルを一つだけ指定します。 debug, info, error を指定できます。	error
prf_id	PRF デーモン起動時に PRF 識別子に指定した文字列を指定します。	PRF_ID



キー名称	内容	デフォルト値
receive_client_timeout	<p>クライアントから POST データを受信するときのタイムアウト時間を秒単位で指定します。</p> <p>60～3600 の整数値を 60（秒）の倍数で指定します。</p> <p>指定された値が 60 の倍数になっていない場合は、60 の倍数に切り上げた値がタイムアウト時間になります。</p>	300
request_retry_count	<p>リクエスト送信時の Web コンテナに対する接続確立、およびリクエスト送信のリトライ回数を、1～16 の整数（単位：回）で指定します。</p> <p>リトライ回数には、初回の接続確立およびリクエスト送信処理も含まれます。</p> <p>タイムアウトが発生した場合、リトライするケースは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 接続確立時にタイムアウトした場合</li> <li>• リクエストヘッダ送信時にタイムアウトした場合</li> </ul> <p>上記処理以降の、リクエストボディの送信時にタイムアウトが発生した場合は、リトライは行いません。</p> <p>リトライ回数に、範囲外の値や、整数値でない値などの異常値を設定した場合、デフォルト値が設定されます。</p>	3
send_timeout	<p>リクエスト送信のタイムアウト値を 0～3600 の整数（単位：秒）で指定します。</p> <p>数値以外の文字列や範囲外の数値を指定した場合は、メッセージを出力し、デフォルト値を使用します。</p> <p>タイムアウト値に 0、または TCP の持つデータ送信の再送タイムより長い時間を設定した場合、TCP の持つタイムアウト値になります。その場合、不正なタイムアウト値が指定されたことを示すメッセージは出力されません。</p>	100
trace_log	<p>リダイレクタの保守用トレースログを出力するかどうかを指定します。出力する場合は true を、出力しない場合は false を指定します。</p>	true
trace_log_file_dir	<p>保守用トレースログファイルの出力先ディレクトリを指定します。</p> <p>相対パスで記述した場合：</p> <p>&lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt;%CC%web %redirector 以下のディレクトリ名を指します。</p> <p>絶対パスで記述した場合：</p> <p>記述されたディレクトリ名を指します。</p> <p>なお、出力先として指定したディレクトリのアクセス権に Users グループに対する書き込み権限を設定する必要があります*。アクセス権を設定していない場合、ログファイルが出力されません。</p> <p>log_file_prefix と trace_log_file_prefix に同じ値を指定した場合は、このキーに log_file_dir とは異なる値を指定する必要があります。同じ値が指定された場合、リダイレクタは動作しません。</p>	logs
trace_log_file_num	<p>保守用トレースログファイルの最大数を指定します。この数を超えると古いログファイルは上書きされます。</p> <p>1～64 の整数値を指定します。</p>	4
trace_log_file_prefix	<p>保守用トレースログファイル名のプリフィックスを指定します。実際のログファイル名は、このキーの指定値に&lt;通番&gt;.log が付加されたものになります。</p>	iis_rd_trace

キー名称	内容	デフォルト値
trace_log_file_prefix	log_file_dir と trace_log_file_dir に同じ値を指定した場合は、このキーに log_file_prefix とは異なる値を指定する必要があります。同じ値が指定された場合、リダイレクタは動作しません。	iis_rd_trace
trace_log_file_size	保守用トレースログファイルの一つ当たりのサイズをバイト単位で指定します。 4096～16777216 の整数値を指定します。	16777216
worker_file	ワーカ定義ファイルの位置とファイル名を指定します。 相対パスで指定した場合： ＜Application Server のインストールディレクトリ＞¥CC¥web ¥redirector 以下のファイル名を指します。 絶対パスで指定した場合： 記述されたファイル名を指します。	workers.properties
worker_mount_file	マッピング定義ファイルの位置とファイル名を指定します。 相対パスで指定した場合： ＜Application Server のインストールディレクトリ＞¥CC¥web ¥redirector 以下のファイル名を指します。 絶対パスで指定した場合： 記述されたファイル名を指します。	uriworkermap.properties

注※ Microsoft IIS と連携する場合

新規インストール時には、デフォルトのログ出力先ディレクトリは存在しません。ディレクトリを作成してアクセス権を設定するか、一つ上のディレクトリ redirector へアクセス権を設定してください。

また、リダイレクタのログ出力先ディレクトリを変更し、そのパスが途中までしか存在しない場合、存在する最下層のディレクトリに対してアクセス権を設定するか、指定したパスをすべて作成し、アクセス権を設定してください。

## (5) 記述例

```
gateway_host=hostA
gateway_https_scheme=true
gateway_port=443

log_level=error
log_file_size=4194304
log_file_num=5
log_file_dir=logs
log_file_prefix=isapi_redirect
prf_id=prfid
trace_log=true
trace_log_file_size=16777216
trace_log_file_num=4
trace_log_file_dir=logs
trace_log_file_prefix=iis_rd_trace
receive_client_timeout=300
worker_file=workers.properties
worker_mount_file=uriworkermap.properties
```

## (6) 注意事項

このファイルを編集してリダイレクタのユーザ定義を変更した場合、Web サーバを再起動する必要があります。変更した定義は、Web サーバを再起動したあとに反映されます。

## 9.3 mod\_jk.conf (HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称> <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- キー名称と値は半角スペースで区切ります。また、値を複数指定する場合も半角スペースで区切ります。
- 指定する値がファイルパスでスペースを含む場合は、パス全体を" (ダブルクォーテーション) で囲む必要があります。
- コメントの記述方法、および記述できる文字の種類などの記述形式は、HTTP Server の仕様に従います。
- キー名称の大文字小文字は区別しません。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>%CC%web%redirector%mod\_jk.conf
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/CC/web/redirector/mod\_jk.conf

### (3) 機能

リダイレクタの動作を定義します。

### (4) 指定できるキー

- モジュール定義  
 Web コンテナと HTTP Server 間の通信を処理するためにライブラリを定義します。

形式

```
LoadModule jk_module <ライブラリ名>
```

ライブラリ名を絶対パスで指定します。なお、複数指定はできません。

指定例

Windows の場合

```
LoadModule jk_module "<Application Server のインストールディレクトリ>%CC%web%redirector%mod_jk.dll"
```

UNIX の場合

```
LoadModule jk_module /opt/Cosminexus/CC/web/redirector/mod_jk.so
```

注意事項

モジュール定義を指定するキーは、ほかのキーよりも前に記述する必要があります。

- マッピング定義

HTTP Server へのリクエストでどの URL パターンが Web コンテナに転送されるかを定義します。

形式

JkMount <URLパターン> <ワーカ名>

workers.properties の worker.list で指定されているワーカのどれかを記述します。URL パターンとワーカ名の組み合わせを複数記述できます。このファイルに不正な値を設定した場合、動作は保証されません。また、先頭がスラッシュ (/) から始まらない URL パターンを指定した場合、リダイレクタ起動時にエラーメッセージがログに出力され、指定した内容は無視されます。

拡張子の長さが 0 文字の拡張子指定の URL パターンを指定した場合 (URL パターンの末尾が「/\*」の場合)、メッセージ KDJE41041-W がログに出力され、指定した内容は無視されます。

JkMount キーについては、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(Web コンテナ)」の「4.4 ラウンドロビン方式によるリクエストの振り分け」、および「4.5 POST データサイズでのリクエストの振り分け」を参照してください。

- リダイレクタ定義

次に示すキーを指定できます。ただし、このキーに不正な値を指定した場合、動作は保証されません。

なお、「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	内容	デフォルト値	関連情報
JkConnectTimeout	リクエスト送信時の Web コンテナに対する接続確立のタイムアウト値を、0~3600 の整数 (単位: 秒) で指定します。 数値以外の文字列や範囲外の数値を指定した場合は、メッセージを出力し、デフォルト値を使用します。 タイムアウト値に 0、または TCP の持つデータ送信の再送タイムより長い時間を設定した場合、TCP の持つタイムアウト値になります。その場合、不正なタイムアウト値が指定されたことを示すメッセージは出力されません。	30	
JkGatewayHost	ゲートウェイのホスト名または IP アドレスを指定します。 Host ヘッダのないリクエストに対して welcome ファイルなどへリダイレクトする場合、Location ヘッダに指定する URL のホスト名部分が指定値になります。	なし	「機能解説 基本・開発編(Web コンテナ)」の「4.10 Web コンテナへのゲートウェイ情報の通知」
JkGatewayHttpsScheme	クライアントからのリクエストのスキームが https であり、かつ SSL アクセラレータなどを介すことで Web サーバへのスキームが http となる場合に、On を指定します。 On を指定した場合、Web サーバへのリクエストのスキームが https であるとみなされます。Off を指定した場合、何も実行されません。	Off	「機能解説 基本・開発編(Web コンテナ)」の「4.10 Web コンテナへのゲートウェイ情報の通知」

キー名称	内容	デフォルト値	関連情報
JkGatewayPort	<p>ゲートウェイのポート番号を指定します。Hostヘッダのないリクエストをwelcomeファイルなどにリダイレクトする場合、Locationヘッダに指定するURLのポート番号部分が指定値となります。</p> <p>このパラメータを指定した場合は、必ずJkGatewayHostも指定してください。JkGatewayHostを指定してこのパラメータを省略した場合、httpによるアクセスであれば80、httpsによるアクセスであれば443が使用されます。</p>	なし	「機能解説 基本・開発編(Webコンテナ)」の「4.10 Webコンテナへのゲートウェイ情報の通知」
JkLogFileDir	<p>ログファイルの出力先ディレクトリを指定します。Windowsの場合、相対パスまたは絶対パスで指定してください。UNIXの場合、絶対パスで指定してください。</p> <p>相対パスで指定した場合：        &lt;Application Serverのインストールディレクトリ&gt;%CC%web        %redirector以下のディレクトリ名を指します。</p> <p>絶対パスで指定した場合：        記述されたディレクトリ名を指します。</p> <p>なお、出力先として指定したディレクトリのアクセス権にHTTP Serverの実行アカウントの書き込み権限を設定する必要があります*<sup>1</sup>。アクセス権を設定していない場合、ログファイルが出力されません。</p> <p>JkLogFilePrefixとJkTraceLogFilePrefixに同じ値を指定した場合は、このキーにJkTraceLogFileDirとは異なる値を指定する必要があります。同じ値が指定された場合、リダイレクタは動作しません。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windowsの場合 logs</li> <li>UNIXの場合 /opt/Cosminexus/CC/web/redirector/logs</li> </ul>	
JkLogFileNum	<p>リダイレクタ用ログファイルの最大数を指定します。この値を超えると古いログファイルは上書きされます。次の範囲の整数値を指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Windowsの場合 1 ≤ JkLogFileNum ≤ 16</li> <li>UNIXの場合 1 ≤ JkLogFileNum ≤ 64</li> </ul>	5	

キー名称	内容	デフォルト値	関連情報
JkLogFilePrefix	<p>ログファイル名のプリフィックスです。実際のログファイル名は、指定値に&lt;通番&gt;.log が付加されたものとなります。</p> <p>JkLogFileDir と JkTraceLogFileDir に同じ値を指定した場合は、このキーに JkTraceLogFilePrefix とは異なる値を指定する必要があります。同じ値が指定された場合、リダイレクタは動作しません。</p>	hws_redirect	
JkLogFileSize	<p>リダイレクタ用ログファイルの一つ当たりのサイズ (バイト) を指定します。次の範囲の整数値を指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合 4096 ≤ JkLogFileSize ≤ 2147483647</li> <li>• UNIX の場合 4096 ≤ JkLogFileSize ≤ 16777216</li> </ul>	4194304	
JkLogLevel	<p>リダイレクタ用ログファイルの出力レベルを指定します。指定するログレベルを一つだけ指定します。debug, info, error (デフォルト値), および emerg を指定できます。なお, emerg は, Windows の場合だけ指定できる値です。</p> <p>これら以外の値を指定した場合は, error が指定されたものとして動作します。</p>	error	
JkModulePriority	<p>HTTP Server へリダイレクタ以外の外部モジュールを登録する場合に、ほかの外部モジュールに対するリダイレクタの実行順位を指定します。</p> <p>指定できる値を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• -10~30 の整数</li> <li>• REALLY_FIRST (整数値の-10 に対応)</li> <li>• FIRST (整数値の 0 に対応)</li> <li>• MIDDLE (整数値の 10 に対応)</li> <li>• LAST (整数値の 20 に対応)</li> <li>• REALLY_LAST (整数値の 30 に対応)</li> </ul> <p>実行順位は指定する値が小さい程高くなります。</p>	FIRST	
JkOptions	<p>リクエスト URL の URL デコードを行うかどうかを指定します。なお、このキーは UNIX 用です。</p>	ForwardURI CompatUnparsed	

キー名称	内容	デフォルト値	関連情報
JkOptions	<p>ForwardURISCompatUnparsed (デフォルト) : リクエスト URL の URL デコードを行いません。</p> <p>ForwardURISCompat : リクエスト URL の URL デコードを行います。</p> <p>02-00 では URL デコードを行っていたため、URL デコードによって変換される文字列を含む URL を使用する場合、02-00 と同様に URL デコードを行う必要があるときだけ ForwardURISCompat を指定してください。</p>	ForwardURISCompatUnparsed	
JkPrfId	PRF デーモン起動時に PRF 識別子に指定した文字列を指定します。	PRF_ID	
JkRequestRetryCount	<p>リクエスト送信時の Web コンテナに対するコネクション確立、およびリクエスト送信のリトライ回数を、1~16 の整数 (単位: 回) で指定します。</p> <p>リトライ回数には、初回のコネクション確立およびリクエスト送信処理も含まれます。</p> <p>タイムアウトが発生した場合、リトライするケースは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>コネクション確立時にタイムアウトした場合</li> <li>リクエストヘッダ送信時にタイムアウトした場合</li> </ul> <p>上記処理以降の、リクエストボディの送信時にタイムアウトが発生した場合は、リトライは行いません。</p> <p>リトライ回数に、範囲外の値や、整数値でない値などの異常値を設定した場合、デフォルト値が設定されます。</p>	3	
JkSendTimeout	<p>リクエスト送信のタイムアウト値を 0~3600 の整数 (単位: 秒) で指定します。数値以外の文字列や範囲外の数値を指定した場合は、メッセージを出力し、デフォルト値を使用します。</p> <p>タイムアウト値に 0、または TCP の持つデータ送信の再送タイマより長い時間を設定した場合、TCP の持つタイムアウト値になります。その場合、不正なタイムアウト値が指定されたことを示すメッセージは出力されません。</p>	100	
JkTraceLog	リダイレクタの保守用トレースログを出力するかどうかを指定します。出力	On	

キー名称	内容	デフォルト値	関連情報
JkTraceLog	<p>する場合は On (デフォルト値) を、出力しない場合は Off を指定します。</p>	On	
JkTraceLogFileDir	<p>保守用トレースログファイルの出力先ディレクトリを指定します。Windows の場合、相対パスまたは絶対パスで指定してください。UNIX の場合、絶対パスで指定してください。</p> <p>相対パスで記述した場合：                      &lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt;%CC%web                      %redirector 以下のディレクトリ名を指します。</p> <p>絶対パスで記述した場合：                      記述されたディレクトリ名を指します。</p> <p>JkLogFilePrefix と JkTraceLogFilePrefix に同じ値を指定した場合は、このキーに JkLogFileDir とは異なる値を指定する必要があります。同じ値が指定された場合、リダイレクタは動作しません。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合 logs</li> <li>• UNIX の場合 /opt/ Cosminexus/CC/web/ redirector /logs</li> </ul>	
JkTraceLogFileNum	<p>保守用トレースログファイルの最大数を整数値で指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合 1~16</li> <li>• UNIX の場合 1~64</li> </ul> <p>この数を超えると古いログファイルは上書きされます。</p>	4	
JkTraceLogFilePrefix	<p>保守用トレースログファイル名のプレフィックスを指定します。実際のログファイル名は、このキーの指定値に&lt;通番&gt;.log が付加されたものとなります。</p> <p>JkLogFileDir と JkTraceLogFileDir に同じ値を指定した場合は、このキーに JkLogFilePrefix とは異なる値を指定する必要があります。同じ値が指定された場合、リダイレクタは動作しません。</p>	hws_rd_trace	
JkTraceLogFileSize	<p>保守用トレースログファイルの一つ当たりのサイズを整数値 (単位: バイト) で指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合 4096~2147483647</li> <li>• UNIX の場合 4096~16777216</li> </ul>	16777216	



キー名称	内容	デフォルト値	関連情報
JkTranslateBackcompat	<p>05-05 以前のバージョンの互換用のキーです。</p> <p>HTTP Server へのリクエストが Web コンテナに転送させる URL パターンであった場合、リダイレクタよりあとに実行されるモジュールの translate_handler 関数が HTTP Server から呼び出されるようにするかどうかを指定します。</p> <p>On を指定した場合、リダイレクタの次に実行されるモジュールの translate_handler 関数が呼び出されます。</p> <p>Off を指定した場合、リダイレクタよりあとに実行されるモジュールの translate_handler 関数は呼び出されません。</p>	Off	
JkWorkersFile	<p>ワーカ定義ファイルのファイル名を指定します。Windows の場合、相対パスまたは絶対パスで指定してください。UNIX の場合、絶対パスで指定してください。</p> <p>相対パスで指定した場合：        &lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt;%CC%web        %redirector 以下のファイル名を指します。</p> <p>絶対パスで指定した場合：        記述されたファイル名を指します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 workers.properties</li> <li>UNIX の場合 /opt/Cosminexus/CC/web/redirector/workers.properties ※2</li> </ul>	

## 注

複数のキーを指定した場合、最後に指定した値が有効になります。

## 注※1 HTTP Server と連携する場合

新規インストール時には、デフォルトのログ出力先ディレクトリは存在しません。ディレクトリを作成してアクセス権を設定するか、一つ上のディレクトリ redirector にアクセス権を設定してください。

また、リダイレクタのログ出力先ディレクトリを変更し、そのパスが途中までしか存在しない場合、存在する最下層のディレクトリに対してアクセス権を設定するか、指定したパスをすべて作成し、アクセス権を設定してください。

## 注※2

/opt/Cosminexus/CC/web/redirector/workers.properties が存在しない場合、HTTP Server は起動しません。

## (5) 記述例

- Windows の場合

```
LoadModule jk_module "C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus\CC\web\redirector\mod_jk.dll"※
```

```
JkGatewayHost hostA
```

```
JkGatewayHttpsScheme On
JkGatewayPort 443

JkLogLevel error
JkLogFileSize 4194304
JkLogFileNum 5
JkLogFileDir logs
JkLogFilePrefix hws_redirect
JkPrfId prfid
JkTraceLog On
JkTraceLogFileSize 16777216
JkTraceLogFileNum 4
JkTraceLogFileDir logs
JkTraceLogFilePrefix hws_rd_trace
JkTranslateBackcompat Off
JkWorkersFile workers.properties

JkMount /examples/* worker1
```

注※

LoadModule の指定は、ファイル上では 1 行で記述してください。

- UNIX の場合

```
LoadModule jk_module /opt/Cosminexus/CC/web/redirector/mod_jk.so
JkWorkersFile /opt/Cosminexus/CC/web/redirector/workers.properties
```

```
JkLogLevel error
JkLogFileSize 4194304
JkLogFileNum 5
JkLogFileDir /opt/Cosminexus/CC/web/redirector/logs
JkLogFilePrefix hws_redirect
```

```
JkTraceLog On
JkTraceLogFileSize 16777216
JkTraceLogFileNum 4
JkTraceLogFileDir /opt/Cosminexus/CC/web/redirector/logs
JkTraceLogFilePrefix hws_rd_trace
```

```
JkMount /examples/* worker1
```

## (6) 注意事項

- Windows の場合、リダイレクタのユーザ定義を変更するには、Web サーバを再起動する必要があります。変更した定義は、Web サーバを再起動したあとに反映されます。
- UNIX の場合、リダイレクタのユーザ定義を変更して、変更内容を反映させるには、次の操作が必要です。

### ファイルサイズまたはファイル面数を変更する場合

1. Web サーバを停止します。
2. ログファイルおよび HNTRLlib が使用する管理ファイルを、移動または削除します。  
< HNTRLlib が使用する管理ファイル >  
メッセージログファイルの場合：<JkLogFilePrefix の設定値>.mm  
保守用トレースログファイルの場合：<JkTraceLogFilePrefix の設定値>.mm
3. Web サーバを起動します。

なお、HNTRLlib が使用する管理ファイルのデフォルトの格納場所は次のとおりです。

<Application Server のインストールディレクトリ>/CC/web/redirector/logs/mmap

### ファイルサイズまたはファイル面数を変更しない場合

Web サーバを再起動します。

## 9.4 uriworkermap.properties (Microsoft IIS 用マッピング定義ファイル)

---

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。キー名称として定義されていないパラメータを定義しても無視されます。
- 「キー名称=値」として 1023 文字までが有効となります。超えた部分は切り捨てられます。

### (2) ファイルの格納先

<Application Server のインストールディレクトリ>%CC%web\*redirector\*uriworkermap.properties

### (3) 機能

uriworkermap.properties は、Microsoft IIS へのリクエストでどの URL パターンが Web コンテナに転送されるかを定義します。

### (4) 指定できるキー

workers.properties の worker.list で指定されているワーカーのどれかを記述します。URL パターンとワーカー名の組み合わせを複数記述できます。このファイルに不正な値を設定した場合、動作は保証されません。また、先頭がスラッシュ (/) から始まらない URL パターンを指定した場合、リダイレクタ起動時にエラーメッセージがログに出力され、指定した内容は無視されます。

拡張子の長さが 0 文字の拡張子指定の URL パターンを指定した場合 (URL パターンの末尾が「/.\*」の場合)、メッセージ KDJE41041-W がログに出力され、指定した内容は無視されます。

<URLパターン> = <ワーカー名>

### (5) 記述例

```
/examples/*=worker1
```

### (6) 注意事項

リダイレクタのユーザ定義を変更した場合、Web サーバを再起動する必要があります。変更した定義は、Web サーバを再起動したあとに反映されます。

## 9.5 workers.properties (ワーカ定義ファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。キー名称として定義されていないパラメタを定義しても無視されます。
- 「キー名称=値」として 1023 文字までが有効となります。超えた部分は切り捨てられます。
- ワーカ名に使用できる文字は半角英数字、アンダースコア「\_」、およびハイフン「-」です。これら以外の文字を指定した場合の動作は保証しません。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>%CC%web%redirector%workers.properties
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/CC/web/redirector/workers.properties

### (3) 機能

ワーカを定義し、ワーカごとにパラメタを設定して、リダイレクタの動作を定義します。

### (4) 指定できるキー

ワーカ定義ファイルに指定できるキーと、ワーカごとの定義パラメタについて説明します。

#### (a) ワーカ定義ファイルに指定できるキー

ワーカ、およびワーカごとの各パラメタを定義します。このキーに不正な値を設定した場合、動作は保証されません。

キー名称	内容	デフォルト値
worker.list	ワーカ名のリストを指定します。複数ある場合は、コンマ (,) で区切ります。一つ以上のワーカ名を必ず指定する必要があります。 mod_jk.conf (HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイル)、または uriworkermap.properties (Microsoft IIS 用マッピング定義ファイル) で指定するワーカ名を指定します。	なし
worker.<ワーカ名>.<パラメタ>	ワーカごとの定義パラメタを指定します。worker.list に記述されたワーカごとに設定します。 定義パラメタについては、「(b) ワーカごとの定義パラメタ」を参照してください。	なし

## (b) ワーカーごとの定義パラメタ

定義できるパラメタ	内容	デフォルト値	関連情報
worker.<ワーカー名>.balanced_workers	負荷分散の対象となるワーカーのリストを指定します。複数ある場合は、コンマ (,) で区切ります。	なし	
worker.<ワーカー名>.cachesize	リダイレクタで再利用するワーカーとのコネクション数を、1~2147483647 の整数で指定します。なお、このパラメタは Windows 用です。 ワーカーとのコネクションは、この設定値以内の場合はリダイレクタ内に保持し、該当ワーカーへの通信に再利用され、接続先の J2EE サーバ、または Web コンテナサーバ (互換用機能) が終了するまで解放しません。リクエストの多重度が設定値を超えた場合は、設定値を超えたリクエストだけをリクエスト単位にワーカーとのコネクションの確立、解放を行います。 この値は次に示す式に従ってメモリを消費します。 (式) メモリ消費量 = (worker.<ワーカー名>.cachesizeの値) × 10KB	64	
<worker.<ワーカー名>.default_worker	デフォルトワーカーのワーカー名を指定します。POST リクエスト転送先ワーカーに指定したワーカーと同じワーカーを指定した場合、指定したワーカーには、POST データサイズによる振り分け条件を満たすリクエスト、およびデフォルトワーカーとして条件を満たすリクエストが転送されます。 なお、このパラメタに POST リクエスト転送先ワーカーに指定していないワーカーを指定し、そのワーカーに worker.<ワーカー名>.post_data が指定されている場合、worker.<ワーカー名>.post_data 定義は無視されます。 ワーカー名の前後の空白文字 (スペース、タブ、およびフォームフィード) は無視されます。 このパラメタの指定を省略した場合や空文字列を指定した場合など、転送条件を満たすワーカーが存在しないリクエストに対してエラーが返されます。	なし	
worker.<ワーカー名>.delegate_error_code	エラーページの委任機能を利用するエラーステータスコードを指定します*1。複数指定する場合はコンマ (,) で区切って指定します。	なし	
worker.<ワーカー名>.host*2	ワーカーのホスト名、または IP アドレスを指定します。	なし	
worker.<ワーカー名>.lbfactor	リクエストの負荷分散値を指定します。設定する値は 0 よりも大きくしてください。なお、値として小数値を指定することもできます。	1	

定義できるパラメタ	内容	デフォルト値	関連情報
worker.<ワーカー名>.port <sup>※2</sup>	ワーカーのポート番号を、1～65535の整数で指定します。 すでにほかのアプリケーションで使用、または確保されているポート番号は指定できません。	なし	
worker.<ワーカー名>.post_data	<ワーカー名>に指定したワーカーに転送するリクエストの Content-Length ヘッダの値の上限値に 1 を加えた値を次のように指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>1～2147483648 の整数 (単位: バイト)</li> <li>1～2097152 の整数に 「k」 または 「K」 を付加した値 (単位: キロバイト)</li> <li>1～2048 の整数に 「m」 または 「M」 を付加した値 (単位: メガバイト)</li> </ul> Content-Length ヘッダの値が指定値未満のリクエストを、<ワーカー名>に指定したワーカーに転送します。 worker.<ワーカー名>.post_size_workers パラメタに複数のワーカーを設定している場合、リクエストの Content-Length ヘッダの値が指定値未満、かつ指定値が最も小さいワーカーにリクエストは転送されます。 worker.<POST リクエスト振り分けワーカーのワーカー名>.post_size_workers パラメタで指定した、ほかのワーカーと同じ値は設定しないでください。 値の前後の空白文字 (スペース, タブ, フォームフィールド) は無視されます。	なし	
worker.<ワーカー名>.post_size_workers	POST リクエスト転送先ワーカーのワーカー名のリストを指定します。複数指定する場合は、コンマ (,) で区切って指定します。ただし、同じワーカー名は指定できません。 ワーカー名の前後の空白文字 (スペース, タブ, フォームフィールド) は無視されます。	なし	
worker.<ワーカー名>.receive_timeout	通信タイムアウト値を指定します。レスポンスデータを待つ時間を 0～3600 の整数値 (単位: 秒) で指定します。0 を指定した場合、レスポンスを受け取るまで待ち続け、通信タイムアウトにはしません。	3600	「機能解説 基本・開発編 (Web コンテナ)」の「4.6 通信タイムアウト (Web サーバ連携)」
worker.<ワーカー名>.type	ワーカーのタイプを次に示すタイプから指定します。タイプごとの設定できるパラメタについては、「(c) worker.<ワーカー名>.type ごとの定義パラメタ」を参照してください。なお、このパラメタはワーカーごとに必ず指定する必要があります。  ajp13: 外部プロセスで動作している Web コンテナへリクエストを転送するワーカーです。	なし	

定義できるパラメタ	内容	デフォルト値	関連情報
worker.<ワーカー名>.type	ajp12 : 旧バージョンとの互換性を保つためのワーカーです。ajp13 が指定されたものとして動作します。  lb : ラウンドロビンに基づく負荷分散機能を持つワーカーです。  post_size_lb : POST リクエスト振り分けワーカーです。 HTTP Server 使用時だけ指定できます。	なし	

## 注※1

指定できるコードがコメント文で記載されています。必要に応じてコメントを外してください。

## 注※2

複数のワーカーで同一の Web コンテナのホスト名およびポート番号を指定することもできます。

## (c) worker.&lt;ワーカー名&gt;.type ごとの定義パラメタ

定義できるパラメタ	ワーカーのタイプ		
	ajp13	lb	post_size_lb
worker.<ワーカー名>.balanced_workers	×	○	×
worker.<ワーカー名>.cachesize※1	△	×	×
worker.<ワーカー名>.default_worker	×	×	△
worker.<ワーカー名>.delegate_error_code	△	×	×
worker.<ワーカー名>.host	○	×	×
worker.<ワーカー名>.lbfactor	△	×	×
worker.<ワーカー名>.port	○	×	×
worker.<ワーカー名>.post_data	×/○※2	×	×
worker.<ワーカー名>.post_size_workers	×	×	○
worker.<ワーカー名>.receive_timeout	△	×	×

## (凡例)

- : 必ず指定します。
- △ : 任意に指定します。
- × : 指定できません。

## 注 1

ajp12 で指定できるパラメタは、ajp13 と同じです。

## 注 2

UNIX の場合、必ず指定する項目に値を指定しなかったとき、または指定した値が不正のとき、HTTP Server は起動しません。

## 注※1

Windows の場合だけ有効です。UNIX の場合、パラメタは無視されます。

注※2

POST リクエスト転送先ワーカでは必須です。

## (5) 記述例

```
worker.list=worker1
worker.worker1.port=8007
worker.worker1.host=localhost
worker.worker1.type=ajp13
#worker.worker1.cachesize=64
#worker.worker1.receive_timeout=3600
#worker.worker1.delegate_error_code=400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412, 413, 414
, 415, 416, 417, 422, 423, 424, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 507, 510

#-----
# Example setting for Loadbalancer.
#-----
#worker.list=loadbalancer1
#
#worker.loadbalancer1.type=lb
#worker.loadbalancer1.balanced_workers=worker1, worker2
#
#worker.worker1.port=8007
#worker.worker1.host=host1
#worker.worker1.type=ajp13
#worker.worker1.cachesize=64
#worker.worker1.lbfactor=1
#worker.worker1.receive_timeout=3600
#worker.worker1.delegate_error_code=400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412, 413, 414
, 415, 416, 417, 422, 423, 424, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 507, 510

#
#worker.worker2.port=8007
#worker.worker2.host=host2
#worker.worker2.type=ajp13
#worker.worker2.cachesize=64
#worker.worker2.lbfactor=1
#worker.worker2.receive_timeout=3600
#worker.worker2.delegate_error_code=400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412, 413, 414
, 415, 416, 417, 422, 423, 424, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 507, 510
#-----
# Example setting for post data size based worker.
#-----
#worker.list=postsizelb1#worker.postsizelb1.type=post_size_lb
#worker.postsizelb1.post_size_workers=worker1, worker2
#worker.postsizelb1.default_worker=worker1
#
#worker.worker1.port=8007
#worker.worker1.host=host1
#worker.worker1.type=ajp13
#worker.worker1.post_data=100m
#worker.worker1.receive_timeout=3600
#worker.worker1.delegate_error_code=400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412, 413, 414
, 415, 416, 417, 422, 423, 424, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 507, 510
#
#worker.worker2.port=8007
#worker.worker2.host=host2
#worker.worker2.type=ajp13
#worker.worker2.post_data=2048m
#worker.worker2.receive_timeout=3600
#worker.worker2.delegate_error_code=400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412, 413, 414
, 415, 416, 417, 422, 423, 424, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 507, 510
```

## (6) 注意事項

このファイルを編集してリダイレクタのユーザ定義を変更した場合、Web サーバを再起動する必要があります。変更した定義は、Web サーバを再起動したあとに反映されます。



# 10 Manager で使用するファイル

この章では、Manager で使用するファイルの形式、格納先、機能、指定できるキーなどについて説明します。

## 10.1 Manager で使用するファイルの一覧

Manager で使用するファイルの一覧を、次の表に示します。

表 10-1 Manager で使用するファイルの一覧

ファイル名	分類	概要	参照先
adminagent.properties	運用管理エージェントプロパティファイル	運用管理エージェント本体に関する設定をします。	10.2
AdminAgentrc	運用管理エージェント自動起動用設定ファイル	運用管理エージェントを自動起動する場合の設定をします。対象 OS は Windows と Linux だけです。	10.3
adminagentuser.cfg	運用管理エージェント用オプション定義ファイル	運用管理エージェントを実行する JavaVM の起動オプションを指定します。	10.4
adminagent.xml	運用管理エージェント設定ファイル	システム管理者の代わりに、論理サーバの起動、または設定ファイルの更新をします。	10.5
mngagent.<実サーバ名>.properties	運用監視エージェントプロパティファイル	運用監視エージェントの動作を定義します。	10.6
mserver.properties	Management Server 環境設定ファイル	Management Server の使用するポート番号を設定します。	10.7
mserver.cfg	Management Server 用オプション定義ファイル	Management Server 全体でのシステムプロパティを指定します。	10.8
mserverenv.cfg	Management Server 用環境変数定義ファイル	Management Server を操作するときの環境変数を設定します。	10.9
manager.cfg	Manager 設定ファイル	Manager 共通の設定をします。	10.10
maction.properties	Management アクション実行用プロパティファイル	Management イベントで通知されるメッセージ ID に対応する Management アクションを定義します。	10.11
任意	Management イベント発行用プロパティファイル	Management イベント発行時の動作を定義します。	10.12
任意	Management イベント発行用メッセージ ID リストファイル	Management イベントとして通知するメッセージ ID を定義します。	10.13
任意	Management Server 管理ファイル用退避対象定義ファイル	mstrexport コマンドで退避する対象ファイルを定義します。	10.14

ファイル名	分類	概要	参照先
.mngsvrutilrc	mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイル	mngsvrutil コマンドのオプションのデフォルト値を設定できます。	10.15
mngsvrutil.properties	mngsvrutil コマンドのサーバ側定義ファイル	mngsvrutil コマンドの実行環境を設定します。	10.16
mngsvrutilcl.properties	mngsvrutil コマンドのクライアント側共通定義ファイル	mngsvrutil コマンドのオプションのデフォルト値を共通定義として設定できます。	10.17
.mngsvrmonitorrc	JP1/IM 連携用モニタ起動コマンドの設定ファイル	JP1/IM 連携をする場合に、JP1/IM の画面から Management Server の運用ポータルを起動するために必要な設定をします。 このファイルは、Windows 用です。	10.18
<ul style="list-style-type: none"> <li>• mserver.jp1event.system.mapping.properties</li> <li>• manager.jp1event.system.mapping.properties</li> <li>• manager.&lt;論理サーバ名&gt;.jp1event.system.mapping.properties</li> </ul>	JP1/IM 連携用システムログメッセージマッピングファイル	アプリケーションサーバシステムで出力されるメッセージと JP1 イベントの重大度のマッピングを定義します。	10.19
setup.cfg	セットアップウィザード用設定ファイル	セットアップウィザードに関する設定をします。	10.20
任意	mngsvrutil コマンドの論理ユーザ定義サーバファイル	追加する論理ユーザサーバの内容を定義します。	10.21

## 10.2 adminagent.properties (運用管理エージェントプロパティファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

運用管理エージェントのプロパティファイルです。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/`

### (3) 機能

運用管理エージェント本体に関する設定をします。

### (4) 設定できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.adapter.allowedHosts	サーバへのアクセスを許可するホスト名または IP アドレスを指定します。 複数のアドレスを指定する場合はコンマ (,) で空白を入れずに区切ります。IP アドレスはメタキャラクタを用いた正規表現で指定できます。IP アドレスを正規表現で指定した場合、利用可能なローカル IP アドレスのうちマッチする IP アドレスが使用されます。複数の IP アドレスがマッチした場合は、マッチしたすべての IP アドレスが許可されます。 なお、IP アドレスを正規表現で指定する場合は、コンマ (,) で複数の値を指定することはできません。	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名</li> <li>• IPv4 アドレス</li> </ul>	なし	05-05
adminagent.adapter.bind_host	運用管理エージェントとの通信で使用するホスト名または IP アドレスを指定します。複数の物理ネット	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名</li> </ul>	なし	06-00

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.adapter.bind_host	<p>ワークインタフェースを持つホスト、または一つの物理ネットワークインタフェースに対して複数の論理 IP アドレスを割り当てているホストで運用管理エージェントを利用するとき、任意の IP アドレスを選択できます。</p> <p>不正な値を指定した場合は、運用管理エージェントがエラー終了します。</p> <p>IP アドレスはメタキャラクタを用いた正規表現で指定できます。IP アドレスが正規表現で指定された場合、利用可能なローカル IP アドレスのうちマッチする IP アドレスを採用します。* 1</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>IPv4 アドレス</li> </ul>	なし	06-00
adminagent.adapter.port	サーバ機能の使用するポート番号を指定します。	1~65535 の整数で指定します。	20295	05-05
adminagent.cluster.localaddress.check	<p>アプリケーションサーバの系切り替え実行時に、待機系を停止するかどうかを設定します。</p> <p>アプリケーションサーバの系切り替え実行時、待機系の論理サーバや運用管理エージェントが停止しなかった場合に、論理サーバと運用管理エージェントを停止します。</p> <p>true を指定した場合： アプリケーションサーバの系切り替え実行時に、停止しなかった待機系の論理サーバおよび運用管理エージェントを停止します。</p> <p>ローカルアドレスをチェックし、クラスタ IP アドレスが設定されていないならば論理サーバを停止して、運用管理エージェントを停止します。</p> <p>false を指定した場合： アプリケーションサーバの系切り替え実行時</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>true</li> <li>false</li> </ul>	false	07-10

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.cluster.localaddress.check	に、停止しなかった待機系の論理サーバおよび運用管理エージェントを停止しません。	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-10
adminagent.finalization.stop_servers	運用管理エージェントの終了処理で論理サーバを停止するかどうかを指定します。  true を指定した場合： 運用管理エージェントの終了処理で、論理サーバをすべて停止します。  false を指定した場合： 運用管理エージェントの終了処理で論理サーバを停止しません。	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50
adminagent.forcestop.threaddump	J2EE サーバおよび SFO サーバの強制停止時にスレッドダンプを出力するかどうかを指定します。この設定が有効な論理サーバは J2EE サーバおよび SFO サーバだけです。  true を指定した場合： スレッドダンプを出力します。この場合、cjstopsv コマンドに -fd オプションを指定して実行した場合と同じ動作で強制停止します。 ※2  false を指定した場合： スレッドダンプを出力しません。	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-50
adminagent.forcestop.threaddump.interval	J2EE サーバおよび SFO サーバの強制停止時にスレッドダンプを出力する設定にした場合に、スレッドダンプ出力の完了を確認する間隔を、1～2147483647 の整数（単位：秒）で指定します。  1～2147483647 以外が指定された場合、デフォルト値が設定されます。	1～2147483647 の整数で指定します。	1	06-50
adminagent.forcestop.threaddump.timeout	J2EE サーバ、SFO サーバの起動/停止の設定で、「強制停止監視時間」を「監視	-1～2147483647 の整数で指定します。	45	06-50

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.forcestop.thre addump.timeout	<p>しない」設定にしている場合の、スレッドダンプ出力待ち時間を-1～2147483647の整数（単位：秒）で指定します。</p> <p>-1を指定した場合、スレッドダンプの出力が終了するまで待機します。</p> <p>-1～2147483647以外を指定した場合、省略値が設定されます。</p> <p>指定した時間が経過してもスレッドダンプの出力が終了しない場合は、J2EEサーバおよびSFOサーバは強制停止します。*2</p>	-1～2147483647の整数で指定します。	45	06-50
adminagent.hws.group	<p>HTTP Serverを使用する場合に、HTTP Serverを起動するユーザが所属するグループ名を指定します。</p> <p>省略した場合は、運用管理エージェントのグループ名で起動します。</p> <p>このキーはUNIX用です。 *3</p>	グループ名	なし	08-00
adminagent.hws.owner	<p>HTTP Serverを使用する場合に、HTTP Serverを起動するユーザ名を指定します。</p> <p>省略した場合は、運用管理エージェントのユーザ名で起動します。</p> <p>なお、このキーはUNIX用です。 *3</p>	ユーザ名	なし	08-00
adminagent.hws.sys_cmd. abnormal_end.traceinfo	<p>障害検知時コマンドの実行の際にWebサーバの内部トレースを採取するかどうかを指定します。</p> <p>trueを指定した場合： 内部トレースを採取します。</p> <p>falseを指定した場合： 内部トレースを採取しません。</p>	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	07-00
adminagent.hws.watch.m ethod	adminagent.hws.watch.levelで2を指定したときのHTTP Serverの動作確認用HTTPメソッドを指	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• HEAD</li> <li>• OPTIONS</li> </ul>	HEAD*5	06-50

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.hws.watch.method	<p>定します。指定可能なメソッドは"HEAD"または"OPTIONS"のどちらかです。*4</p> <p>"HEAD"を指定した場合： adminagent.hws.watch.url で指定された URL にアクセスして応答が返ることを確認します。</p> <p>"OPTIONS"を指定した場合： Web サーバが HTTP メソッドを受け付け可能な状態であることを確認します。</p> <p>リダイレクタにマッピングする URL パターンに"/*"を指定した場合、すべての URL は J2EE サーバの Web コンテナにリダイレクトされてしまいます。したがって、リダイレクタにマッピングする URL パターンに"/*"を指定する場合は、"OPTIONS"を指定し、URL アクセスを行わないことを推奨します。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• HEAD</li> <li>• OPTIONS</li> </ul>	HEAD*5	06-50
adminagent.hws.watch.url	<p>adminagent.hws.watch.method で"HEAD"を指定したときの、HTTP Server の動作確認用 URL を指定します。指定された URL にアクセスし、レスポンスが返るかどうかで判定するため、実際にアクセスできる URL を指定してください。なお、URL は"http"で始まる絶対パス、またはルートコンテキストからの相対パスで指定します。同一のホストに複数の Web サーバを構築する場合は相対パスで指定してください。</p> <p>(指定例)</p>	URL	ルートコンテキスト (http://localhost:<ポート番号>/)	06-00



キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.hws.watch.url	<p>http://HostA:80/index.html を指定する場合</p> <p>adminagent.hws.watch.url=http://HostA:80/index.html</p> <p>http://localhost:&lt;ポート番号&gt;/index.htmlを指定する場合（複数Webサーバ対応）</p> <p>adminagent.hws.watch.url=index.html</p>	URL	ルートコンテキスト (http://localhost:<ポート番号>/)	06-00
adminagent.j2ee.process.console_event.enabled	<p>J2EE サーバのコンソール出力情報を ManagementServer を使用する Eclipse プラグインで表示するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： コンソール出力情報を ManagementServer を使用する Eclipse プラグインに出力します。</p> <p>false を指定した場合： コンソール出力情報を ManagementServer を使用する Eclipse プラグインに出力しません。</p> <p>adminagent.process.consolelog.enabled を true に設定する必要があります。 リソースを消費するため、ManagementServer を使用する Eclipse プラグインを使用しない運用では false に設定することを推奨します。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-10
adminagent.j2ee.process.console_log.enabled	<p>J2EE サーバのコンソール出力情報をコンソールログに出力するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： コンソール出力情報をコンソールログに出力します。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-10

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.j2ee.process.console_log.enabled	<p>false を指定した場合： コンソール出力情報を コンソールログに出力 しません。</p> <p>adminagent.process.consolelog.enabled を true に 設定する必要があります。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-10
adminagent.j2ee.sys_cmd.abnormal_end.javatrace	<p>障害検知時コマンドの実行 の際に J2EE サーバのスタック トレースを取得する かどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： スタックトレースを取 得します。</p> <p>false を指定した場合： スタックトレースを取 得しません。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	07-00
adminagent.j2ee.sys_cmd.abnormal_end.threaddump	<p>障害検知時コマンド実行の 際に J2EE サーバのスレ ッドダンプを収集する かどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： J2EE サーバのスレ ッドダンプを収集 します。</p> <p>false を指定した場合： J2EE サーバのスレ ッドダンプを収集 しません。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	06-50
adminagent.jp1event.event_server_name	<p>使用する JP1/Base のイ ベントサービスのイ ベントサーバ設定 ファイル (conf) に 指定した、ports キ ーのアドレスと同 じ値を指定しま す。ports キーに 複数のアドレス を指定している 場合は、指定 したアドレスの うちのどれか 一つを指定し ます。なお、 ports キーの アドレスに「0.0.0.0」 (デフォルト 値) を指定 したイ ベント サービス を使用 する 場合 は、 この キー を 省 略 す る か、 自 マ シ ン の ホ ス ト 名 ま た は localhost を 指 定 し ま す。</p>	<p>ホスト名または IPv4 ドット 記法</p>	localhost	06-70
adminagent.jp1event_enabled	<p>運用管理エージェントから JP1 イベントを発行する かどうかを指定します。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	06-70

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.jp1event_enabled	true を指定した場合： JP1 イベントを発行します。 false を指定した場合： JP1 イベントを発行しません。	次のどちらかを指定します。 • true • false	false	06-70
adminagent.log.filenum	ログファイル面数を 1～16 の整数で指定します。	1～16 の整数で指定します。	4	05-05
adminagent.log.filesize	ログファイル一つ当たりの上限サイズ (単位：バイト) を、65536～2147483647 の数値で指定します。	65536～2147483647 の整数で指定します。	65536	05-05
adminagent.log.level	ログ出力レベルを-1～1000 の整数で指定します。 • -1：出力しません。 • 0：通常運用：通常運用。 • 10：通常運用 (verbose)：通常運用に近い形態での再現待ち。 • 20：再現テスト：システム環境構築時やテストフェーズでの、デバッグレベルの情報の取得。 • 30：障害調査：原因究明困難な障害発生時、より詳細な障害情報の取得。	-1～1000 の整数で指定します。	0	05-05
adminagent.lsinfo_dir	論理サーバ情報ファイルの出力先ディレクトリを指定します。指定したディレクトリが存在しない場合は作成します。 運用管理エージェント再起動後に、停止前に管理していた論理サーバを再び管理下に置き、操作できるようにするための情報です。論理サーバの起動中に作成され、論理サーバの停止後に削除されます。	ディレクトリ名(絶対パス)	<Manager インストールディレクトリ>/spool/lsinfo	06-50
adminagent.maintenance.log.filenum	保守ログのファイル面数を 1～16 の整数で指定します。	1～16 の整数で指定します。	4	06-70
adminagent.maintenance.log.filesize	保守ログのファイル一つ当たりの上限サイズ (単位：バイト) を、65536～	65536～2147483647 の整数で指定します。	16777216	06-70

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.maintenance.log.filesize	2147483647 の整数で指定します。	65536～2147483647 の整数で指定します。	16777216	06-70
adminagent.prftrace_dir	<p>性能解析トレースファイルが一時的に出力されるディレクトリパス名を、文字列で指定します。指定したディレクトリがない場合、指定したディレクトリが作成されます。</p> <p>注意事項</p> <p>性能解析トレースファイルは次の場合、一時的に出力されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 論理サーバの異常停止によってシステム障害検知コマンドが実行される場合</li> <li>• Management Server の運用管理コマンド (mngsvrutil) のサブコマンド [collect] を指定して snapshot ログを収集する場合</li> <li>• 運用管理ポータルで snapshot ログを収集する場合</li> </ul> <p>そのため、次の算出式を基に出力先の空き容量を確保してください。 指定先に出力されるファイル容量 (最大値) = PRF トレースのサイズ (PrfTraceFileSize 指定値) × PRF トレースの面数 (PrfTraceCount 指定値)</p> <p>なお、同一ホスト上に PRF が複数存在する場合は、すべての PRF トレースファイルサイズの総和となります。</p>	ディレクトリ名(絶対パス)	<Application Server のインストールディレクトリ>/manager/tmp/	09-50
adminagent.process.consolelog.enabled	運用管理エージェントが起動したプロセスのコンソール出力情報を取得するかどうかを指定します。ただし、ManagementServer を使用する Eclipse プラグイ	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	07-00

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.process.conso lelog.enabled	<p>ンを使用する場合は true を指定する必要があります。</p> <p>true を指定した場合： コンソール出力情報を取得します。</p> <p>false を指定した場合： コンソール出力情報を取得しません。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	07-00
adminagent.process.conso lelog.event.queue_size	<p>運用管理エージェントが起動したプロセスのコンソール出力情報を、Management Server にイベント通知する際の、イベントキューのサイズを設定します。</p> <p>キューがいっぱいになった場合は、古いイベントから破棄されます。</p> <p>このプロパティは、デフォルト値が推奨のため、設定を変更しないでください。</p>	1024~2147483647 の整数で指定します。	1024	07-00
adminagent.process.conso lelog.filenum	<p>運用管理エージェントが起動したプロセスのコンソール出力情報を出力するログファイル面数を、1~16 の整数で指定します。</p> <p>sinaviagent.log.style キーでシフトモードを設定した場合は、バックアップファイルの面数になります。</p>	1~16 の整数で指定します。	4	07-00
adminagent.process.conso lelog.filesize	<p>運用管理エージェントが起動したプロセスのコンソール出力情報を出力するログファイル一つ当たりの上限サイズ（単位：バイト）を、65536~2147483647 の整数で指定します。</p>	65536~2147483647 の整数で指定します。	65536	07-00
adminagent.process.conso lelog.time	<p>運用管理エージェントが起動したプロセスのコンソール出力情報を出力するログファイルをローテーションする時刻を、000000~235959 の HHMMSS 形式で指定します。ただし、このプロパティで設定した時刻に達する前に、ログファイルのサイズが上限に達した場合、その時点でログ</p>	000000~235959 の HHMMSS 形式で指定します。	なし	09-00

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.process.conso lelog.time	ファイルをローテーション します。 指定がない場合は、ログサ イズだけでローテーションし ます。	000000~235959 の HHMMSS 形式で指定しま す。	なし	09-00
adminagent.process.conso lelog.style	運用管理エージェントが起 動したプロセスのコンソ ール出力情報を出力するログ ファイルのローテーション 方式を指定します。  SHIFT を指定した場合： シフトモードでロー テーションします。  WRAP を指定した場合： ラップアラウンドモ ードでローテーションし ます。	次のどちらかを指定します。  • SHIFT • WRAP	WRAP	09-00
adminagent.rmi.log.filenu m	運用管理エージェントが行 う RMI 処理での保守ログ のファイル面数を数値で指 定します。	1~16 の整数で指定します。	8	07-60
adminagent.rmi.log.filesiz e	運用管理エージェントが行 う RMI 処理での保守ログ のファイル一つ当たりの上 限サイズを数値で指定しま す。	65536~2147483647 の整 数で指定します。	16777216	07-60
adminagent.rmi.log.level	運用管理エージェントが行 う RMI 処理での保守ログ の出力レベルを文字列で指 定します。  < OFF > 出力しません。  < SEVERE >, < WARNING >, < INFO >, < CONFIG >, < FINE >, < FINER >, < FINEST >  SEVERE は深刻な問題 だけを出力します。こ こに示した順番でより 詳細なログが出力され るようになります。	次のどれかを指定します。  • OFF • SEVERE • WARNING • INFO • CONFIG • FINE • FINER • FINEST	FINER	07-60
adminagent.snapshotlog.li stfile.2.num_snapshots	二次資料として収集する、 論理サーバごとの snapshot ログファイル数 を、-2147483648~ 2147483647 の数値で指	-2147483648~ 2147483647 の整数で指定 します。	10	06-50

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.snapshotlog.l stfile.2.num_snapshots	定します。指定されたファイル数を超えた場合、作成時刻の古い順にログファイルは削除されます。また、0以下の値を指定した場合、ログファイルは削除されません。	-2147483648～ 2147483647の整数で指定 します。	10	06-50
adminagent.snapshotlog.l og_dir	snapshot ログの出力先ディレクトリを、文字列で指定します。指定したディレクトリがない場合は作成します。	ディレクトリ名(絶対パス)	<manager.c fgの com.cosmin exus.manag er.log.dir>/ snapshot/	06-00
adminagent.snapshotlog.n um_snapshots	一次資料として収集する、論理サーバごとのsnapshot ログファイル数を、-2147483648～2147483647の数値で指定します。指定されたファイル数を超えた場合、作成時刻の古い順にログファイルは削除されます。また、0以下の値を指定した場合、ログファイルは削除されません。	-2147483648～ 2147483647の整数で指定 します。	10	06-00
adminagent.sys_cmd.abno rmal_end.prftrace	障害検知時コマンド実行の際に性能解析トレースファイルを集めるかどうかを指定します。  trueを指定した場合： 性能解析トレースファイルを集めます。  falseを指定した場合： 性能解析トレースファイルを集めません。	次のどちらかを指定します。  • true  • false	true	06-50
adminagent.userserver.pr ocess.console_event.enabl ed	ユーザサーバのコンソール出力情報をManagementServerを使用するEclipseプラグインで表示するかどうかを指定します。  trueを指定した場合： コンソール出力情報をManagementServerを使用するEclipseプラグインに出力します。	次のどちらかを指定します。  • true  • false	false	07-10

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.userserver.process.console_event.enabled	<p>false を指定した場合： コンソール出力情報を ManagementServer を使用する Eclipse プラグインに出力しません。</p> <p>adminagent.process.consolelog.enabled を true に設定する必要があります。 リソースを消費するため、ManagementServer を使用する Eclipse プラグインを使用しない運用では false に設定することを推奨します。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-10
adminagent.userserver.process.console_log.enabled	<p>ユーザ定義サーバのコンソール出力情報をコンソールログに出力するかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： コンソール出力情報をコンソールログに出力します。</p> <p>false を指定した場合： コンソール出力情報をコンソールログに出力しません。</p> <p>adminagent.process.consolelog.enabled を true に設定する必要があります。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-10
adminagent.watch.retry_timeout.enabled	<p>論理サーバの動作確認で、タイムアウトの発生をリトライ対象とするかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： リトライ対象とします。</p> <p>false を指定した場合： リトライ対象としません。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• デフォルト：false</li> <li>• 初期値：true</li> </ul>	06-70
adminagent.<サーバ種別>*6.usr_cmd.abnormal_end	<p>障害検知時コマンドを絶対パスで指定します。ファイルセパレータは「/」を使用します。障害が発生した論理サーバの種別に応じてコマンドを変えることができます。&lt;サーバ種別&gt;*6 に指定できる値以外の値を指</p>	コマンド名(絶対パス)	なし	06-50



キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.<サーバ種別>*6.usr_cmd.abnormal_end	<p>定した場合は、無効になります。</p> <p>Windows の場合：</p> <p>障害検知時コマンドをバッチファイルで作成する場合、コマンド名の前に “%{ComSpec} /C ” を追加する必要があります。“%{ComSpec}” は、cmd.exe の絶対パスに置換されます。“%{ComSpec} /C” が指定されていない場合、コマンドが正常に動作しないことがあります。また、コマンドのパスに半角スペースを含む場合は、コマンドの絶対パスを必ずダブルクォーテーション (") で囲みます。</p> <p>(例) J2EE サーバ障害発生時に、d:/my bat/j2eeabnormalend.bat を実行する場合</p> <pre>adminagent.j2ee.usr_cmd.abnormal_end=%{ComSpec} /c "d:/my bat/j2eeabnormalend.bat"</pre> <p>UNIX の場合：</p> <p>障害検知時コマンドをシェルスクリプトで作成する場合、コマンドの前に “/bin/sh” を追加する必要があります。“/bin/sh” が指定されていない場合、コマンドが正常に動作しないことがあります。</p> <p>(例) J2EE サーバ障害発生時に、/home/user1/j2eeabnormalend.sh を実行する場合</p> <pre>adminagent.j2ee.usr_cmd.abnormal_end=/bin/sh /home/user1/j2eeabnormalend.sh</pre>	コマンド名(絶対パス)	なし	06-50

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.<サーバ種別>*6.watch.interval	<p>論理サーバの動作確認間隔 (単位: 秒) を 1~86400 の整数で指定します。</p> <p>不正な値が指定された場合は、デフォルト値が設定されます。</p> <p>なお、サーバ種別がユーザーサーバの場合、論理ユーザーサーバ定義ファイルまたは簡易構築定義ファイルで指定した watch-interval の値が有効になります。</p>	1~86400 の整数で指定します。	10	06-00
adminagent.<サーバ種別>*6.watch.level	<p>論理サーバの動作確認レベルを指定します。指定できる値は、1 または 2 です。</p> <p>1 を指定した場合： プロセスの存在確認で論理サーバの動作を確認します。</p> <p>2 を指定した場合： プロセスの存在確認および論理サーバへのアクセスで論理サーバの動作を確認します。動作を確認できる論理サーバは、ネーミングサービス、SFO サーバ、J2EE サーバおよび Web サーバです。そのほかの論理サーバに 2 を指定しても、プロセスの存在確認だけになります。</p>	1 または 2 を指定します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>ネーミングサービス、SFO サーバ、J2EE サーバおよび Web サーバの場合：2</li> <li>上記以外の論理サーバの場合：1</li> </ul>	06-00
adminagent.<サーバ種別>*6.watch.retry_count	<p>論理サーバの動作確認で、動作確認処理に失敗した場合にリトライする回数を 0~86400 の整数で指定します。リトライ回数を設定することで、一時的な動作確認の失敗を許容できます。</p> <p>リトライする間隔は、adminagent.&lt;サーバ種別&gt;.watch.interval で指定します。0 を指定した場合、動作確認処理に失敗すると、リトライしないで異常発生とみなされます。</p> <p>動作確認処理に失敗し、リトライする場合は</p>	0~86400 の整数で指定します。	1	06-70

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
adminagent.<サーバ種別>watch.retry_count	KEOS21033-W, または KEOS21034-W が運用管理エージェントのログに出力されます。 動作確認処理に失敗し, リトライしない場合, またはリトライ回数が指定回数を超えた場合は KEOS20511-E, または KEOS21035-E が運用管理エージェントのログに出力され, Management Server に異常が通知されます。	0~86400 の整数で指定します。	1	06-70
adminagent.<サーバ種別>watch.start_time	論理サーバの起動で, 起動コマンドを実行してから動作確認を開始するまでの時間 (単位: 秒) を 0~86400 の整数で指定します。 論理サーバを起動した際の論理サーバのログ (J2EEサーバの場合, cjmessage?.log の KDJE30028-I) から実際に起動に掛かる所要時間を求め, その時間から数秒短い時間をこのプロパティに指定しておくことで, 起動前に出力される不要なログ出力を減らし, 論理サーバの起動完了を Management Server に迅速に通知できます。 論理サーバの起動/停止機能で設定する起動監視時間は, このプロパティに指定した値よりも大きい値を指定する必要があります。指定した値よりも小さい値を指定した場合は起動に失敗します。	0~86400 の整数で指定します。	<サーバ種別>watch.start_time によって次のように異なります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• prf : 0</li> <li>• smartagent : 3</li> <li>• naming : 10</li> <li>• ctmdm : 0</li> <li>• ctm : 0</li> <li>• ots : 0</li> <li>• tcs : 3</li> <li>• sfo : 45</li> <li>• j2ee : 45</li> <li>• hws : 0</li> </ul>	06-70
adminagent.<サーバ種別>watch.timeout	論理サーバの動作確認でタイムアウトするまでの時間を, 1~9223372036854775 の整数 (単位: 秒) で指定します。	1~9223372036854775 の整数で指定します。	60	06-50

## 注※1

運用管理ドメイン内で運用管理エージェントとの通信に使用される IP アドレスのサブネットが一つに決められている場合, 指定する IP アドレスを "192.168.0.32" のように記述しておけば, 前方が "192.168.0." である IP アドレス ("192.168.0.32" や "192.168.0.128" など) にマッチするため, 設定

ファイルを修正しないで、すべてのホストに配布して利用できます。正規表現についての詳細は、Java の `java.util.regex.Pattern` クラスの仕様を確認してください。

ただし、"`%`"は1文字の"`%`"に置き換えられてしまうため、"`%`"を指定する場合は2文字連続して指定してください。指定した正規表現にマッチするIPアドレスが複数個検出された場合は、最も小さい値のIPアドレスを採用します。例えば、"`192.168.0.32`"と"`192.168.0.128`"が検出された場合は"`192.168.0.32`"を採用します。この場合、採用されたIPアドレスが意図するIPアドレスになるとは限らないため、"`192%.168%.0%.1.`"のように必ず1個だけマッチする正規表現を記述してください。

#### 注※2

強制停止時にスレッドダンプを出力する場合は、「強制停止監視時間」または、`adminagent.forcestop.threaddump.timeout` キーに、スレッドダンプが出力されるのに十分な時間を設定してください。スレッドダンプの出力が終わる時間よりも短い時間が設定されていると、スレッドダンプの出力内容が不完全になることがあります。また、ワトソン博士を使用している場合、「メッセージボックスによる通知」を設定しないでください。ワトソン博士の詳細は Microsoft 社のホームページなどを参照してください。

#### 注※3

このプロパティを設定する場合は次の作業をしてください。

1. 一般ユーザアカウントによる運用の設定をしてください。一般ユーザアカウントによる運用の設定については、マニュアル「HTTP Server」を参照してください。  
なお、HTTP Server のリソースの所有者・グループの変更は、`cmx_build_system` コマンドの実行後、または運用管理ポータルからのセットアップの実行後に変更してください。
2. リダイレクタのログ出力先（デフォルトでは `/opt/Cosminexus/CC/web/redirector/servers/<サーバ名>/logs`）の所有者・グループを、指定した HTTP Server を起動するユーザ・グループに変更してください。

#### 注※4

リダイレクタにマッピングする URL パターンに"`/*`"を指定した場合、すべての URL は J2EE サーバの Web コンテナにリダイレクトされてしまいます。したがって、リダイレクタにマッピングする URL パターンに"`/*`"を指定する場合は、"`OPTIONS`"を指定し、URL アクセスを行わないことを推奨します。

#### 注※5

06-50 以降のバージョンの設定ファイルには、初期値として `adminagent.hws.watch.method=OPTIONS` の行が定義されています。このため、06-50 より前のバージョンからバージョンアップした場合の動作確認用 HTTP メソッドの初期値はデフォルトの "`HEAD`" になりますが、新規にインストールした場合または 06-50 以降のバージョンからバージョンアップした場合の動作確認用 HTTP メソッドの初期値は "`OPTIONS`" になります。

#### 注※6

<サーバ種別>は、論理サーバの種別を表す、次のどれかになります。

- `smartagent` : スマートエージェント
- `j2ee` : J2EE サーバ
- `naming` : ネーミングサービスおよび論理 CTM のグローバル CORBA ネーミングサービス
- `hws` : Web サーバ (HTTP Server)
- `ctm` : CTM
- `ctmdm` : CTM ドメインマネージャ
- `prf` : パフォーマンストレーサ
- `sfo` : SFO サーバ

- userserver : ユーザーサーバ

## 10.3 AdminAgentrc (運用管理エージェント自動起動用設定ファイル)

---

### (1) 形式

bash 形式のシェルスクリプトを記述します。

### (2) ファイルの格納先

```
/opt/Cosminexus/manager/config/
```

### (3) 機能

運用管理エージェントを自動起動する場合の設定をします。

このファイルでの設定が運用管理エージェントから起動する論理サーバに引き継がれます。

### (4) 指定できるキー

bash 形式のシェルスクリプトのうち、次の設定を記述することができます。

- リソースの制御設定 (ulimit)
- ファイル作成時のパーミッション (umask)
- 環境変数

これらの設定以外を記述した場合の動作は保証しません。

### (5) 記述例

```
ulimit -c unlimited
```

### (6) 注意事項

このファイルはシェルスクリプトとして実行されますので、記載内容を変更する場合は十分な動作確認を実施してください。

## 10.4 adminagentuser.cfg (運用管理エージェント用オプション定義ファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称>=<値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 1行に 65535 バイトまで指定できます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- ASCII 文字で指定してください。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/manager/config/

### (3) 機能

運用管理エージェントを実行する JavaVM の起動オプションを指定します。

このファイルが存在し、かつ運用管理エージェントからこのファイルの読み込みができる場合に、ファイルの内容が反映されます。このファイルが存在する場合に、運用管理エージェントからこのファイルの読み込みができないときには、運用管理エージェントの起動に失敗します。

このファイルが存在しない場合は、オプションの設定は行わないで、運用管理エージェントが起動されます。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次に示します。不正なキーを指定した場合は、運用管理エージェントの起動に失敗します。

キー名称	内容	デフォルト値
add.class.path	<p>クラスパスに追加する値を指定します。</p> <p>複数の値を指定する場合、同じキー名称を使用して、クラスパスを指定してください。指定内容には、Application Server のインストールディレクトリを「\${cosminexus.home}」で指定できます。</p> <p>(指定例)</p> <p>add.class.path=C:/home/lib/mylib.jar</p>	なし
add.jvm.arg	<p>JavaVM を起動するときのオプションを指定します。</p> <p>次の JavaVM のオプションを指定できます。</p>	なし

キー名称	内容	デフォルト値
add.jvm.arg	<ul style="list-style-type: none"> <li>• -Xms&lt;size&gt;</li> <li>• -Xmx&lt;size&gt;</li> <li>• -XX:MetaspaceSize=&lt;value&gt;</li> <li>• -XX:MaxMetaspaceSize=&lt;value&gt;</li> <li>• -XX:[+ -]HitachiOutOfMemoryAbort (08-50 以降)</li> </ul> <p>複数のオプションを指定する場合、同じキー名称を使用して、次のように指定してください。</p> <p>(指定例)</p> <pre>add.jvm.arg=-Xms128m add.jvm.arg=-Xmx256m</pre> <p>JavaVM が認識できない値を指定した場合、運用管理エージェントの起動は失敗します。</p>	なし
add.library.path	<p>ライブラリ検索パスに追加する値を指定します。</p> <p>複数の値を指定する場合、同じキー名称を使用して、ライブラリ検索パスを指定してください。指定内容には、Application Server のインストールディレクトリを「\${cosminexus.home}」で指定できます。</p> <p>(指定例)</p> <pre>add.library.path=C:/home/bin</pre>	なし
add.network.drive	<p>ネットワークドライブとして割り当てるドライブの名前および割り当て先のディレクトリパスを指定します。</p> <p>(指定例)</p> <pre>X=¥¥host¥dir</pre> <p>なお、パスの最後が"¥"で終わっていると、ネットワークドライブに接続できない場合があります。</p> <p>UNIX で設定した場合、/opt/Cosminexus/manager/adminagent.err に KEOS21401-E メッセージが出力されて、終了コード 1 で運用管理エージェントが終了します。</p>	なし

## (5) 注意事項

運用管理エージェントで java.lang.OutOfMemoryError が発生した場合に、このファイルで、次のように Java ヒープの最大サイズを拡張します。

```
add.jvm.arg=-Xmx<Java ヒープの最大サイズ>
```



## 10.5 adminagent.xml (運用管理エージェント設定ファイル)

### (1) 形式

ファシリティ名 (論理サーバの種類と起動/停止の動作種別を示す) の設定のあとに、環境変数名および環境変数の値を設定します。

ファシリティ名の設定

```
<facility>
  <name>「ファシリティ名」</name>
  <class>com.cosminexus.mngsvr.adminagent.impl.CmdExecutor</class>
```

環境変数名および環境変数名の設定

上記ファシリティ名の設定のあとに、次の記述を追加します。

```
<init-param>
  <param-name>adminagent.facility.CmdExecutor.env.「環境変数名」</param-name>
  <param-value>「環境変数の値」</param-value>
</init-param>
```

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Server>のインストールディレクトリ>%manager%config¥`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/`

### (3) 機能

システム管理者の代わりに、論理サーバの起動、または設定ファイルの更新をします。

このファイルで初期設定されている環境変数の値を変更する必要がある場合、または環境変数を追加または削除する必要がある場合は、この設定ファイルを編集してください。

### (4) ファシリティ名で指定できる論理サーバ種類

ファシリティ名で指定できる論理サーバ種類と、起動/停止の動作の種別を次の表に示します。

論理サーバ種類	起動/停止種別	ファシリティ名	備考
パフォーマンストレーサ	起動	prf-start	—
	停止	prf-stop	—
スマートエージェント (Windows の場合)	起動	osagent-start	—
	停止	osagent-stop	—
スマートエージェント (UNIX の場合)	起動	osagent-start	—
ネーミングサービス	起動	naming-service-start	—
CTM ドメインマネージャ	起動	ctm-dommng-start	—
	停止	ctm-dommng-stop	—

論理サーバ種類	起動/停止種別	ファシリティ名	備考
CTM	起動	ctm-start	—
	停止	ctm-stop	—
SFO サーバ	起動	sfo-server-start	—
	停止	sfo-server-stop	—
J2EE サーバ	起動	j2ee-server-start	J2EE サーバでデータベースを利用する場合には、J2EE サーバ起動時の環境変数にデータベース固有の設定をする必要があります。
	停止	j2ee-server-stop	
WEB サーバ (Windows の場合)	起動	web-server-start	—
	停止	web-server-stop	—
WEB サーバ (UNIX の場合)	起動	web-server-start	—

(凡例) — : ありません。

## (5) 注意事項

- adminagent.xml を変更した場合は、運用管理エージェントを再起動してください。
- 各論理サーバの起動/停止時には、運用管理エージェントの起動時の環境変数を引き継ぎます。環境変数を引き継ぎたくない場合は、該当環境変数を空に設定してください。
- adminagent.xml で設定した環境変数は、該当ホストの運用管理エージェントから起動される論理サーバの種類ごとに有効になります。論理サーバのインスタンス単位に環境変数の設定はできません。

(例 1)

J2EE サーバ起動時に、環境変数 NLS\_LANG に Japanese\_japan.ja16sjis を設定する場合

```
<facility>
<name>j2ee-server-start</name>
<class>com.cosminexus.mngsvr.adminagent.impl.CmdExecutor</class>
<init-param>
<param-name>adminagent.facility.CmdExecutor.env.NLS_LANG</param-name>
<param-value>Japanese_japan.ja16sjis</param-value>
</init-param>
```

…  
…

(例 2)

運用管理エージェント起動時に設定された環境変数 AIXTHREAD\_SCOPE を引き継がない場合

```
<facility>
…
…
<init-param>
<param-name>adminagent.facility.CmdExecutor.env.AIXTHREAD_SCOPE</param-name>
```

```
<param-value></param-value>
```

```
</init-param>
```

```
...
```

```
...
```

- 「環境変数名」および「環境変数の値」に設定した値は、コマンドシェルのような環境変数の置換や演算子による処理がされません。このため、「環境変数名」および「環境変数の値」にシステム環境変数は使用できません。

## 10.6 mngagent.<実サーバ名>.properties (運用監視エージェントプロパティファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

運用監視エージェントのプロパティファイルです。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/`

### (3) 運用管理ドメインおよび運用監視エージェントの名称設定で利用できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次に示します。これらのキーに設定したドメイン名およびエージェント名は、ログファイル名のデフォルト値として使用されます。

キー名称	内容	デフォルト値
mngagent.domain_name	運用管理ドメイン名を、文字列で指定します。使用できる文字は ASCII 文字の英数字 (A~Z, a~z, 0~9), アンダースコア (_), およびハイフン (-) です。	なし
mngagent.agent_name	該当ノードの論理サーバ名を、文字列で指定します。使用できる文字は ASCII 文字の英数字 (A~Z, a~z, 0~9), アンダースコア (_), およびハイフン (-) です。	なし

### (4) ログ・トレースの設定で利用できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次に示します。

キー名称	内容	デフォルト値
mngagent.log.filename	ログファイル名を指定します。空文字列や空白文字を指定した場合、ログは出力されません。実際の出力先ファイル名は、指定したファイル名のあとに「.n.log」が付きます (n は 1~4)。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合  <code>&lt;manager.cfg の com.cosminexus.manager.log.dir&gt;            %mngagent-ドメイン名-Agent名</code></li> <li>• UNIX の場合  <code>&lt;manager.cfg の com.cosminexus.manager.log.dir&gt;/            mngagent-ドメイン名-Agent名</code></li> </ul>

キー名称	内容	デフォルト値
mngagent.log.filesize	ログファイル一つ当たりの上限サイズ (バイト) を、4096～2147483647 で指定します。範囲外の値を指定した場合は、65536 を仮定します。	65536

## (5) 通信ポートおよび IP アドレス固定による運用の設定で使用できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次に示します。

キー名称	内容	デフォルト値
mngagent.connector.port	運用監視エージェントの通信ポートを 1～65535 までの整数で固定します。ポート番号は、ほかのプログラムなどと重複しないようにしてください。このプロパティを設定しない場合は、vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port に定義された値が設定されます。	vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port に定義された値
mngagent.connector.host	任意の値を指定して、運用監視エージェントの IP アドレスを固定します。 このプロパティを設定しない場合は、vbroker.se.iiop_tp.host に定義された値が設定されます。	vbroker.se.iiop_tp.host に定義された値
vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port	任意の値を指定して、運用監視エージェントの通信ポートを固定します。ポート番号は、ほかのプログラムなどと重複しないようにしてください。このプロパティを設定しない場合は、TPBroker によってランダムな値が設定されます。 このキーは、アプリケーションサーバのバージョンが 06-00 以前の製品との互換用です。	なし
vbroker.se.iiop_tp.host	任意の値を指定して、運用監視エージェントの IP アドレスを固定します。 このキーは、アプリケーションサーバのバージョンが 06-00 以前の製品との互換用です。	なし

## (6) 注意事項

- mngagent.<実サーバ名>.properties ファイルは、次の場合に作成されます。
  - Smart Composer 機能で Web システムを構築した場合
  - 運用管理ポータルで J2EE サーバの設定情報を配布した場合
 これらの機能を使用しないで構築した J2EE サーバの運用監視を行う場合は、設定ファイル mngagent.<実サーバ名>.properties を作成し、運用監視エージェント本体に関する設定をしてください。
- ファイル名には、サーバインスタンスごとに異なるものを設定してください。
- mngagent.domain\_name, mngagent.agent\_name の値が同一の運用監視エージェントを複数同時に起動した場合、デフォルトでは同一のログファイルに出力するため、ログファイルの内容が破壊される可能性があります。同一マシン上で複数の J2EE サーバを起動する場合、mngagent.agent\_name の値が重複しないように定義してください。

## 10.7 mserver.properties (Management Server 環境設定ファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

Management Server のプロパティファイルです。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>\manager\config\`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/`

### (3) 機能

Management Server が使用するポート番号の設定や、障害検知時コマンドの動作の設定をします。Management Server を起動しないでポート番号を変更する場合は、このファイルを編集します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーとその内容、および指定を省略した場合のデフォルト値を次に示します。

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
adminagent.connector.comm.state.cache_max_time	運用管理エージェントとの通信状態をキャッシュする最大時間を、0～2147483 の数値（単位：秒）で指定します。0 未満を指定した場合はキャッシュしません。	0～2147483 の整数で指定します。	60	06-50
com.cosminexus.mngsvr.agent.read_timeout	運用監視エージェント接続時のタイムアウト時間を、1～2147483 の整数値（単位：秒）で指定します。	1～2147483 の整数で指定します。	180	07-00
com.cosminexus.mngsvr.jplevent.alert	Alert レベルのイベントを発行するかどうかを指定します。 true を指定した場合： Alert レベルのイベントを発行します。 false を指定した場合： Alert レベルのイベントを発行しません。	次のどちらかを指定します。 • true • false	false	07-00
com.cosminexus.mngsvr.jplevent.emergency	Emergency レベルのイベントを発行するかどうかを指定します。 true を指定した場合： Emergency レベルのイベントを発行します。 false を指定した場合： Emergency レベルのイベントを発行しません。	次のどちらかを指定します。 • true • false	false	07-00

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
com.cosminexus.mngsv r.jp1event.critical	Critical レベルのイベントを発行するかどうかを指定します。 true を指定した場合： Critical レベルのイベントを発行します。 false を指定した場合： Critical レベルのイベントを発行しません。	次のどちらかを指定します。 • true • false	false	07-00
com.cosminexus.mngsv r.jp1event.enabled	システム JP1 イベント発行機能を有効にするかどうかを指定します。 true を指定した場合： システム JP1 イベント発行機能を有効にします。 false を指定した場合： システム JP1 イベント発行機能を無効にします。	次のどちらかを指定します。 • true • false	false	07-00
com.cosminexus.mngsv r.jp1event.error	Error レベルのイベントを発行するかどうかを指定します。 true を指定した場合： Error レベルのイベントを発行します。 false を指定した場合： Error レベルのイベントを発行しません。	次のどちらかを指定します。 • true • false	false	07-00
com.cosminexus.mngsv r.jp1event.information	Information レベルのイベントを発行するかどうかを指定します。 true を指定した場合： Information レベルのイベントを発行します。 false を指定した場合： Information レベルのイベントを発行しません。	次のどちらかを指定します。 • true • false	false	07-00
com.cosminexus.mngsv r.jp1event.notice	Notice レベルのイベントを発行するかどうかを指定します。 true を指定した場合： Notice レベルのイベントを発行します。 false を指定した場合： Notice レベルのイベントを発行しません。	次のどちらかを指定します。 • true • false	false	07-00
com.cosminexus.mngsv r.jp1event.warning	Warning レベルのイベントを発行するかどうかを指定します。 true を指定した場合： Warning レベルのイベントを発行します。 false を指定した場合： Warning レベルのイベントを発行しません。	次のどちらかを指定します。 • true • false	false	07-00

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
com.cosminexus.mngsvr.log.display_number	mngsvr 構成機能がログの表示画面でログ情報を表示する最大表示件数を、次の数値で指定します。 20, 60, 100, 200, 400	20, 60, 100, 200, 400 のどれかを指定します。	100	07-00
com.cosminexus.mngsvr.log.level	Management Server のログの出力レベルを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>0: 通常運用。</li> <li>10: 通常運用に近い形態での再現待ち。</li> <li>20: システム環境構築時やテストフェーズでの、デバッグレベルの情報の取得。</li> <li>30: 原因究明困難な障害発生時、より詳細な障害情報の取得。</li> </ul>	0, 10, 20, 30 のどれかを指定します。	0	07-00
com.cosminexus.mngsvr.log.rotate	Management Server のログのファイル面数を次の数値で指定します。 1, 2, 4, 8, 16	1, 2, 4, 8, 16 のどれかを指定します。	4	07-00
com.cosminexus.mngsvr.log.size	Management Server のログのファイルサイズを次の数値で指定します。 4096 (4 キロバイト), 65536 (64 キロバイト), 262144 (256 キロバイト), 524288 (512 キロバイト), 1048576 (1 メガバイト), 2097152 (2 メガバイト), 4194304 (4 メガバイト), 16777216 (16 メガバイト), 67108864 (64 メガバイト)	次のどれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>4096 (4 キロバイト)</li> <li>65536 (64 キロバイト)</li> <li>262144 (256 キロバイト)</li> <li>524288 (512 キロバイト)</li> <li>1048576 (1 メガバイト)</li> <li>2097152 (2 メガバイト)</li> <li>4194304 (4 メガバイト)</li> <li>16777216 (16 メガバイト)</li> <li>67108864 (64 メガバイト)</li> </ul>	65536	07-00
com.cosminexus.mngsvr.logical_server_abnormal_stop.exit	Management Server で管理している論理サーバの稼働状況ステータスが異常停止状態 (自動再起動回数がオーバーした状態または自動再起	次のどちらかを指定します。	false	08-50



キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
com.cosminexus.mngsvr.logical_server_abnormal_stop.exit	<p>動回数の設定が0の状態)になった場合の動作を指定します。</p> <p>true を指定した場合： KEOS10038-I を出力して、Management Server を停止します。</p> <p>false を指定した場合： Management Server の処理を続行します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-50
com.cosminexus.mngsvr.maintenance.log.file_number	Management Server の保守ログファイルの面数を1~16の整数で指定します。	1~16の整数で指定します。	2	06-70
com.cosminexus.mngsvr.maintenance.log.file_size	Management Server の保守ログファイルの最大サイズ(単位:バイト)を65536~2147483647の整数で指定します。	65536~2147483647の整数で指定します。	16777216	06-70
com.cosminexus.mngsvr.management.connector.enabled	<p>Management Server リモート管理機能への外部接続を有効にするかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： Management Server リモート管理機能への外部接続を有効にします。</p> <p>false を指定した場合： Management Server リモート管理機能への外部接続を有効にしません。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-60
com.cosminexus.mngsvr.management.enabled	<p>Management Server リモート管理機能を有効にするかどうかを指定します。</p> <p>true を指定した場合： Management Server リモート管理機能を有効にします。</p> <p>false を指定した場合： Management Server リモート管理機能を有効にしません。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	07-60
com.cosminexus.mngsvr.management.host	<p>Management Server リモート管理機能への外部接続のホスト固定を行う場合に、ホスト名、またはIPアドレスを指定します。</p> <p>IPアドレスはメタキャラクタを用いた正規表現で指定できます。IPアドレスが正規表現で指定された場合、利用可能なローカルIPアドレスのうちマッチするIPアドレスが使用されます。※1</p> <p>ホストを固定する場合には、mserver.properties ファイルにjava.rmi.server.hostname キーを追加して、このキーと同じ値を指定してください。ただし、java.rmi.server.hostname には、メタキャラクタを用いた正規表現は使用できません。</p>	ホスト名またはIPv4ドット記法	なし	07-60

10 Manager で使用するファイル

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
com.cosminexus.mngsvr.management.host	webserver.connector.http.bind_host に値を指定している場合は、このプロパティにも同じ値を指定してください。	ホスト名または IPv4 ドット記法	なし	07-60
com.cosminexus.mngsvr.management.listen.port	Management Server リモート管理機能への外部接続時に作成する、クライアント接続用のポート番号を、0~65535 の整数で指定します。0 が指定された場合は空いているポート番号を自動的に割り当てます。	0~65535 の整数で指定します。	0	07-60
com.cosminexus.mngsvr.management.port	Management Server リモート管理機能への外部接続ポート番号を 1~65535 の整数で指定します。	1~65535 の整数で指定します。	28099	07-60
com.cosminexus.mngsvr.management.read_timeout	Management Server リモート管理機能への外部接続時の読み込みタイムアウト時間(単位: 秒)を、1~2147483 の整数で指定します。	1~2147483 の整数で指定します。	180	07-60
com.cosminexus.mngsvr.management_user_account.enabled	Management Server のユーザアカウントを有効にするかどうかを指定します。 true を指定した場合： Management Server のログイン認証処理を実行します。 false を指定した場合： Management Server のログイン認証処理を実行しません。運用管理ポータルでのログイン画面で管理ユーザアカウントを入力しないでログインできます。また、Manager で使用するコマンドのうち、共通引数である -u, -p の指定を省略できます。	次のどちらかを指定します。 • true • false	true	08-50
com.cosminexus.mngsvr.on_start	Management Server の開始時に論理サーバの一括起動を行うかどうかを指定します。 true を指定した場合： 論理サーバを一括起動します。 false を指定した場合： 論理サーバを一括起動しません。	次のどちらかを指定します。 • true • false	false	07-00
com.cosminexus.mngsvr.snapshot.auto_collect.enabled	障害発生時または一括再起動時に snapshot ログを収集するかどうかを指定します。 true を指定した場合： snapshot ログを収集します。 false を指定した場合： snapshot ログを収集しません。	次のどちらかを指定します。 • true • false	true	06-50
com.cosminexus.mngsvr.snapshot.collect.point	snapshot ログ収集のタイミングを指定します。 before_stop を指定した場合： 論理サーバ停止前に snapshot ログを収集します。	次のどちらかを指定します。 なお、大文字と小文字は区別されません。 • before_stop	before_stop	06-50

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
com.cosminexus.mngsvr.snapshot.collect.point	j2ee_restart を指定した場合： J2EE サーバ再起動前に snapshot ログを収集します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>j2ee_restart</li> </ul>	before_stop	06-50
com.cosminexus.mngsvr.sys_cmd.abnormal_end.enabled	システムによる障害検知時コマンド実行機能を利用するかどうかを指定します。 true を指定した場合： 障害検知時コマンド実行機能を利用します。 false を指定した場合： 障害検知時コマンド実行機能を利用しません。	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>true</li> <li>false</li> </ul>	true	06-50
com.cosminexus.mngsvr.sys_cmd.abnormal_end.timeout	次に示す処理それぞれの終了を待つ時間を、-1～2147483647 の整数値（単位：秒）で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>システム提供の障害検知時に実行したコマンド</li> <li>性能解析トレースの収集</li> </ul> 指定した時間を経過してもコマンド、または性能解析トレースの収集が終了しない場合は、実行したコマンド、または性能解析トレースの収集を無視して処理を続行します。 -1 が指定された場合は、コマンド、または性能解析トレースの収集が終了するまで待機します。 -1～2147483647 以外の値が指定された場合、デフォルト値が設定されます。	-1～2147483647 の整数で指定します。	600	06-50
com.cosminexus.mngsvr.trace	運用管理コマンド (mngsvrutil) の性能解析トレースまたは CTM の稼働統計情報の収集時、Management Server で保持する性能解析トレース、または CTM の稼働統計情報のファイルの最大数を指定します。 最大数は運用管理ドメイン、ホスト、論理サーバごとに管理されます。 1, 2, 4, 8, 16	1, 2, 4, 8, 16 のどれかを指定します。	4	07-00
com.cosminexus.mngsvr.usr_cmd.abnormal_end.enabled	ユーザ作成の障害検知時コマンド実行機能を利用するかどうかを指定します。 true を指定した場合： 障害検知時コマンド実行機能を利用します。 false を指定した場合： 障害検知時コマンド実行機能を利用しません。	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>true</li> <li>false</li> </ul>	false	06-50
com.cosminexus.mngsvr.usr_cmd.abnormal_end.timeout	ユーザ作成の障害検知時に実行したコマンドの終了を待つ時間を、-1～2147483647 の整数値（単位：秒）で指定します。 指定した時間を経過してもコマンドが終了しない場合は、実行したコマンドを無視して処理を続行します。	-1～2147483647 の整数で指定します。	60	06-50

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
com.cosminexus.mngsvr.usr_cmd.abnormal_end.timeout	0を指定した場合は、コマンドの終了を待たずに処理を続行します。 -1を指定した場合は、コマンドが終了するまで待機します。 -1～2147483647以外の値が指定された場合、デフォルト値が設定されます。	-1～ 2147483647 の整数で指定します。	60	06-50
com.cosminexus.mngsvr.vmx.enabled	Management Server を 08-50 モードの仮想サーバマネージャとして動作させるかどうかを指定します。 true を指定した場合： Management Server が 08-50 モードの仮想サーバマネージャとして動作します。なお、Management Server を使用した論理サーバの構築・運用はしないでください。 true を指定した状態で 08-50 モードの仮想サーバマネージャ以外の機能を使用した場合、動作保証の対象外となります。 false を指定した場合： Management Server が 08-50 モードの仮想サーバマネージャとして動作しません。	次のどちらかを指定します。 • true • false	false	08-50
com.cosminexus.mngsvr.vmi.enabled	Management Server を仮想サーバマネージャとして動作させるかどうかを指定します。 true を指定した場合： Management Server が仮想サーバマネージャとして動作します。なお、Management Server を使用した論理サーバの構築・運用はしないでください。true を指定した状態で仮想サーバマネージャ以外の機能を使用した場合、動作保証の対象外となります。 false を指定した場合： Management Server, または 08-50 モードの仮想サーバマネージャ (com.cosminexus.mngsvr.vmx.enabled に true が指定されている場合) として動作します。	次のどちらかを指定します。 • true • false	false	08-53
com.cosminexus.mngsvr.upload_app.enabled	運用管理ポータルから Management Server が稼働するホストへアプリケーションファイルをアップロードする機能を有効にするかどうかを指定します。 true を指定した場合： 運用管理ポータルから Management Server 稼働ホストへアプリケーションファイルをアップロードする機能を有効にします。 false を指定した場合： 運用管理ポータルから Management Server 稼働ホストへアプリケーションファ	次のどちらかを指定します。 • true • false	true	08-70

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
com.cosminexus.mngsvr.upload_app.enabled	イルをアップロードする機能を無効にします。	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	08-70
com.cosminexus.mngsvr.upload_app.directory	運用管理ポータルから Management Server が稼働するホストへアプリケーションファイルをアップロードするディレクトリを指定します。	ディレクトリ名を絶対パスで指定します。	<Application Server のインストールディレクトリ>/manager/apps	08-70
com.cosminexus.mngsvr.upload_app.maxsize	運用管理ポータルから Management Server が稼働するホストへアプリケーションファイルをアップロードできる最大サイズ (単位: バイト) を指定します。 1024 バイト (1KB) 以上のサイズを指定してください。 0 を指定した場合、アップロードできるファイルサイズを制限しません。	0~ 9223372036 854775807	314572800 (300MB)	08-70
com.cosminexus.mngsvr.snapshot.auto_collect.timeout	論理サーバの障害検知時の snapshot ログの一次送付資料と二次送付資料の収集をすべて完了するまでのタイムアウト時間 (単位: 秒) を指定します。 0 を指定した場合 タイムアウトは発生しません。 1~2147483 を指定した場合 指定された値の秒数が経過しても、snapshot ログの収集が完了しない場合、Management Server は snapshot ログ収集を中断します。	0~2147483	<ul style="list-style-type: none"> <li>• デフォルト: 0</li> <li>• 初期値: 3600</li> </ul>	08-70
ejbserver.naming.port	HCSC-Manager から Management Server を利用する場合の Management Server の内部通信ポート番号を指定します。 HCSC-Manager から利用されるときだけ有効になります。	1~65535	28900	09-00
ejbserver.server.edition.settingforce	HCSC-Manager から Management Server を利用するかどうかを指定します。 HCSC-Manager から Management Server を利用しない場合は、このキーに Smart を指定するか、このキーを省略してください。 このキーを省略した場合は、Smart が指定されたものとして解釈されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Smart を指定した場合: Management Server を HCSC-Manager から利用しません。なお、Smart を指定すると、ejbserver.naming.port キーの設定は無視されます。</li> </ul>	Smart	Smart	09-00

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
ejbserver.server.edition.settingforce	<ul style="list-style-type: none"> <li>指定なし： Management Server を HCSC-Manager から利用します。</li> </ul> 注意事項 指定なしとはキーだけを指定し、値を指定しないことです。 (指定例) ejbserver.server.edition.settingforce=	Smart	Smart	09-00
java.rmi.server.hostname	Management Server リモート管理機能への外部接続のホスト固定を行う場合に、ホスト名、または IP アドレスを指定します。 このプロパティの設定値については com.cosminexus.mngsvr.management.host を参照してください。 また、NAT (IP マスカレード) のような、グローバル IP アドレスとローカル IP アドレスの変換を行っている環境では、com.cosminexus.mngsvr.management.host を指定したかどうかに関係なく、ホスト名 (IP アドレス不可) を指定してください。この場合、com.cosminexus.mngsvr.management.host に IP アドレスを指定しているときには、その IP アドレスを示すホスト名を指定しなければなりません。	ホスト名または IPv4 ドット記法	なし	07-60
mngsvr.jp1event.event_server_name	使用する JP1/Base のイベントサービスのイベントサーバ設定ファイル (conf) に指定した、ports キーのアドレスと同じ値を指定します。 ports キーに複数のアドレスを指定している場合は、指定したアドレスのうちのどれか一つを指定します。 なお、ports キーのアドレスに「0.0.0.0」(デフォルト値) を指定したイベントサービスを使用する場合は、このキーを省略するか、自マシンのホスト名または localhost を指定します。	ホスト名または IPv4 ドット記法	localhost	06-70
mngsvr.myhost.name	論理サーバを配置するホスト名に、論理サーバを配置するホストからアクセス可能な IP アドレス、またはその IP アドレスを示すホスト名を指定します。 Management Server が稼働するホストが複数個の IP アドレスを持っていて、ホスト名が意図する IP アドレスに変換されないおそれがある場合に、このキーを指定します。 省略した場合、および空文字を指定した場合、ループバックアドレスは取得可能な自ホスト名に変換され使用されます。自ホスト名が取得できない場合は、ループバックアドレスが使用されます。 IP アドレスはメタキャラクタを用いた正規表現で指定できます。IP アドレスが正規表現で指定	ホスト名または IPv4 ドット記法	なし	06-50

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
mngsvr.myhost.name	<p>された場合、利用可能なローカル IP アドレスのうちマッチする IP アドレスが使用されます。※1</p> <p>注意事項</p> <p>webservr.connector.http.bind_host に値を指定している場合は、このプロパティにも同じ値を指定してください。</p>	ホスト名または IPv4 ドット記法	なし	06-50
webservr.connector.ajp13.port	<p>Management Server 内部通信用ポート番号を指定します。</p> <p>インストール時は 28009 が設定されます。</p> <p>指定されていない場合、Management Server の起動に失敗します。</p>	1～65535 の整数で指定します。	なし	05-00
webservr.connector.http.bind_host	<p>複数の物理ネットワークインタフェースを持つホスト、または一つの物理ネットワークインタフェースに対して複数の論理 IP アドレスを割り当てているホストで Management Server を利用するとき、任意の IP アドレスを選択できます。ただし、ループバックアドレスは指定できません。</p> <p>値を指定しなかった場合、すべてのローカルアドレスに対する接続が受け付けられます。</p> <p>IP アドレスはメタキャラクタを用いた正規表現で指定できます。IP アドレスが正規表現で指定された場合、利用可能なローカル IP アドレスのうちマッチする IP アドレスが使用されます。※1</p>	<p>次のどれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>IPv4 アドレス</li> <li>ホスト名 (半角英数字または記号 ( _ - ) で指定された 255 文字以内の文字列)</li> </ul>	なし	07-10
webservr.connector.http.permitted.hosts*2	<p>Management Server へのアクセスを許可するホストおよび運用管理エージェント稼働ホストの IP アドレスまたはホスト名を指定します。</p> <p>運用管理ポータル (Web ブラウザ)、Management Server リモート管理機能または運用管理コマンド (mngsvrutil) を使用したアクセスが対象です。また、Management Server で管理するホストの IP アドレス、またはホスト名もすべて指定しなければなりません。指定されていないホストの論理サーバを操作した場合、操作が完了しなかったりタイムアウトが発生したりします。</p> <p>なお、キーを省略した場合、アクセス制限をしません。値を省略した場合または、入力した値が不正な場合は、アクセスできるのはローカルホストだけです。</p> <p>複数指定する場合には IP アドレスまたはホスト名の間をコンマ ( , ) で区切ります。アクセス制限をしない場合はアスタリスク ( * ) だけを指定します。IP アドレスまたはホスト名の前後の半角スペースは無視されます。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>IPv4 アドレスまたはホスト名</li> <li>複数指定する場合は、コンマ ( , ) で区切って指定します。</li> <li>ホスト名は英数字または記号 ( _ - ) で指定された 255 文字以内の文字列を指定します。</li> <li>* (アスタリスク)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>デフォルト：*</li> <li>初期値：localhost</li> </ul>	06-00



キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
webservice.connector.ht tp.port	Management Server 接続 HTTP ポート番号 を指定します。 インストール時は 28080 が設定されます。 指定されていない場合、Management Server の起動に失敗します。	1~65535 の 整数で指定し ます。	なし	05-00
webservice.shutdown.po rt	Management Server 終了要求受信ポート番号 を指定します。 インストール時は 28005 が設定されます。 指定されていない場合、Management Server の起動に失敗します。	1~65535 の 整数で指定し ます。	なし	05-00
com.cosminexus.mngsvr.compat.operation_app	アプリケーション管理方法を指定します。な お、この項目は互換用の項目です。  true を指定した場合： V7 互換モード  false を指定した場合： V8 モード	指定できる文 字列を次に示 します。  • true  • false	<ul style="list-style-type: none"> <li>デフォルト ※3 : true</li> <li>初期値※ 3 : false</li> </ul>	08-00

## 注※1

運用管理ドメイン内で運用管理エージェントとの通信に使用される IP アドレスのサブネットが一つに決められている場合、指定する IP アドレスを"192.168.0.128"のように記述しておけば、前方が"192.168.0."である IP アドレス ("192.168.0.32"や"192.168.0.128"など) にマッチするため、設定ファイルを修正しないで、すべてのホストに配布して利用できます。正規表現についての詳細は、Java の java.util.regex.Pattern クラスの仕様を確認してください。

ただし、"¥"は 1 文字の"¥"に置き換えられてしまうため、"¥"を指定する場合は 2 文字連続して指定してください。指定した正規表現にマッチする IP アドレスが複数個検出された場合は、最も小さい値の IP アドレスを採用します。例えば、"192.168.0.32"と"192.168.0.128"が検出された場合は"192.168.0.32"を採用します。この場合、採用された IP アドレスが意図する IP アドレスになるとは限らないため、"192.168.0.128"のように必ず 1 個だけマッチする正規表現を記述してください。

## 注※2

キーを省略した場合は\*、キーはあるが値を省略した場合は localhost が指定されたものとして動作します。

## 注※3

V7 以前のアプリケーションサーバからアップグレードインストールした場合、com.cosminexus.mngsvr.compat.operation\_app キーが存在しないため、デフォルト (true) の V7 互換モードとなります。V8 以降のアプリケーションサーバを新規にインストールした場合、このキーには false (初期値) が設定されます。

## (5) 注意事項

Management Server 起動後は、運用管理ポータル「Cosminexus Management Server の設定」の「ネットワークの設定」からもポート番号を変更できます。ただし、mserver.properties ファイルにコメントを書いていた場合、変更時に削除されます。



## 10.8 mserver.cfg (Management Server 用オプション定義ファイル)

---

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 値の後ろには、空白やコメントなどの文字列は追加できません。追加した場合、不正な値と解釈されます。

(例) <キー名称> = <値> #<コメント>

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/`

### (3) 機能

Management Server を実行する JavaVM の起動オプションを指定します。

Management Server の稼働中に、このファイルの内容を変更しないでください。変更した場合の動作は保証されません。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーは、「2.3(4) 指定できるキー」にあるキー、および web.add.class.path キーです。web.add.class.path キーを指定した場合は、J2EE サーバ用オプション add.class.path キーとして動作します。

### (5) 注意事項

- add.class.path キーに指定されている値の中に、<cosminexus.home>タグを使用してコンテナ拡張ライブラリ用の JAR を指定しているものがあります。これは Application Server のインストール先を意味しているため、add.class.path キーの記述内容を変更する必要はありません。なお、add.class.path キーにコンテナ拡張ライブラリを追加する場合は、インストールおよびアンインストール時の動作を保証できなくなるおそれがあるので、<cosminexus.home>タグを使用しないでください。

## 10.9 mserverenv.cfg (Management Server 用環境変数定義ファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称>=<値>

指定方法

- キーと値の間のセパレータには「=」を使用します。「=」前後の空白は無視されます。
- 改行までが値になります。改行文字は OS に従います。
- 1 行の最大サイズは 65536 バイトとします。
- # で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>%manager%config%
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/manager/config/

### (3) 機能

Management Server を操作（起動、停止およびセットアップ）するときの環境変数を指定します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次に示します。

キー名称	内容	デフォルト値
add.env	環境変数を次の形式で設定します。 <環境変数名>=<環境変数値> 複数のキーを指定できます。 環境変数値には特殊変数*も指定できます。 (例) add.env=AAAHOME=C:%aaa add.env=BBBHOME=C:%bbb 環境変数 AAAHOME の値を C:%aaa に、BBBHOME の値を C:%bbb に設定します。	なし

注※

指定できる特殊変数を次に示します。

特殊変数	内容
\$(cosminexus.home)	Application Server のインストールディレクトリ

特殊変数	内容
%{XXX}	環境変数 XXX の値

## (5) 注意事項

- 次の環境変数は、Management Server を起動したときに J2EE サーバが上書きするため、設定した値は有効となりません。
  - PATH
  - 共有ライブラリ検索パス (UNIX の場合だけ)
  - CLASSPATH
  - HVI\_TRACEPATH
  - HVI\_COMTFILECOUNT
  - HVI\_COMTENTRYCOUNT
  - TPJDIR
- LANG の値をデフォルト (LANG=ja\_JP.utf8) から変更した場合、動作は保障されません。変更した場合、ログの出力で文字化けなどの問題が発生するおそれがあります。

## 10.10 manager.cfg (Manager 設定ファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称>=<値>

#### 指定方法

- キーと値の間のセパレータには「=」を使用します。「=」前後の空白は無視されます。
- 改行までが値になります。改行文字は OS に従います。
- 1 行は 1KB (1024 バイト) 未満とします。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 行頭行末の空白文字や空行は無視されます。
- 同じキーを複数指定した場合は、最後のキーの値を有効とします。
- ASCII 文字だけ使用できます。
- ファイルセパレータには「/」を使用します。
- キーや値の一部に「¥」は使用できません。
- パスセパレータは OS に従います。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <Application Serverのインストールディレクトリ>¥manager¥config¥
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/manager/config/

### (3) 機能

Management Server, 運用管理エージェント, それぞれの上で動作するコンポーネントやコマンドに共通の設定を行います。

統合ログとして Manager の統合メッセージログ, 統合トレースログ, コマンド保守ログがあります。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次に示します。

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
com.cosminexus.manager.log.dir	Manager のログ出力ディレクトリを指定します。 ファイルセパレータには「/」を使用してください。 半角英数字, アンダースコア (_), 空白 ( ), ハイフン (-) 以外の文字を含むパスを指定しないでください。	ディレクトリ名 (絶対パス)	<Application Server のインストールディレクトリ>/manager/log	07-00

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
com.cosminexus.manager.log.dir	<p>なお、指定したログ出力ディレクトリが不正な場合は、Manager は起動されません。</p>	ディレクトリ名（絶対パス）	<Application Server のインストールディレクトリ>/manager/log	07-00
com.cosminexus.manager.message.log.size	<p>統合メッセージログファイル一つ当たりの上限サイズ（バイト）を、4096～16777216 で指定します。範囲外の値を指定した場合は、262144 を仮定します。</p> <p>なお、次の操作をした後に、設定値を変更しても変更は有効になりません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Management Server の起動</li> <li>• 運用管理エージェントの起動</li> <li>• Manager が提供するコマンドの実行</li> </ul> <p>値を変更する場合は、バックアップ後に次のディレクトリを削除してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• &lt;Manager のログ出力ディレクトリ&gt;/message</li> </ul>	4096～16777216 の整数で指定します。	262144	07-00
com.cosminexus.manager.message.log.fnum	<p>統合メッセージログファイルの面数を、1～64 で指定します。sinaviagent.log.style キーでシフトモードを設定した場合は、バックアップファイルの面数になります。</p> <p>なお、次の操作をした後に、設定値を変更しても変更は有効になりません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Management Server の起動</li> <li>• 運用管理エージェントの起動</li> <li>• Manager が提供するコマンドの実行</li> </ul> <p>値を変更する場合は、バックアップ後に次のディレクトリを削除してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• &lt;Manager のログ出力ディレクトリ&gt;/message</li> </ul>	1～64 の整数で指定します。	4	07-00
com.cosminexus.manager.message.log.time	<p>Manager 統合メッセージログファイルをローテーションする時刻を、000000～235959 の HHMMSS 形式で指定します。ただし、このプロパティで設定した時刻に達する前に、ログファイルのサイズが上限に達した場合、その時点でログファイルをローテーションします。指定がない場合は、ログサイズだけでローテーションします。</p>	000000～235959 の HHMMSS 形式で指定します。	なし	09-00
com.cosminexus.manager.message.log.style	<p>Manager 統合メッセージログファイルのローテーション方式を指定します。</p> <p>SHIFT を指定した場合： シフトモードでローテーションします。</p>	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• SHIFT</li> <li>• WRAP</li> </ul>	WRAP	09-00

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
com.cosminexus.manager.messagelog.style	WRAP を指定した場合： ラップアラウンドモードでローテーションします。	次のどちらかを指定します。 • SHIFT • WRAP	WRAP	09-00
com.cosminexus.manager.tracelog.size	統合トレースログファイル一つ当たりの上限サイズ (バイト) を、4096~16777216 で指定します。範囲外の値を指定した場合は、1048576 を仮定します。 なお、次の操作をした後に、設定値を変更しても変更は有効になりません。 • Management Server の起動 • 運用管理エージェントの起動 • Manager が提供するコマンドの実行 値を変更する場合は、バックアップ後に次のディレクトリを削除してください。 • <Manager のログ出力ディレクトリ>/trace	4096~16777216 の整数で指定します。	1048576	07-00
com.cosminexus.manager.tracelog.fnum	統合トレースログファイルの面数を、1~64 で指定します。 なお、次の操作をした後に、設定値を変更しても変更は有効になりません。 • Management Server の起動 • 運用管理エージェントの起動 • Manager が提供するコマンドの実行 値を変更する場合は、バックアップ後に次のディレクトリを削除してください。 • <Manager のログ出力ディレクトリ>/trace	1~64 の整数で指定します。	4	07-00
com.cosminexus.manager.tracelog.time	統合トレースログファイルをローテーションする時刻を、HHMMSS の形式で指定します。ただし、このプロパティで設定した時刻に達する前に、ログファイルのサイズが上限に達した場合は、その時点でログファイルをローテーションします。 指定がない場合は、ログサイズだけでローテーションします。	000000~235959 の HHMMSS 形式で指定します。	なし	09-00
com.cosminexus.manager.tracelog.style	統合トレースログファイルのローテーション方式を指定します。 SHIFT を指定した場合： シフトモードでローテーションします。 WRAP を指定した場合： ラップアラウンドモードでローテーションします。	次のどちらかを指定します。 • SHIFT • WRAP	WRAP	09-00

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
com.cosminexus.manager.cmdtracelog.size	<p>コマンド保守ログファイル一つ当たりの上限サイズ (バイト) を、4096~16777216 で指定します。範囲外の値を指定した場合は、16777216 を仮定します。</p> <p>なお、次の操作をした後に、設定値を変更しても変更は有効になりません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Manager が提供するコマンドを実行</li> </ul> <p>値を変更する場合は、バックアップ後に次のディレクトリとログファイルを削除してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• &lt;Manager のログ出力ディレクトリ&gt;/maintenance/mmap</li> <li>• &lt;Manager のログ出力ディレクトリ&gt;/maintenance/mngcmd[n].log</li> </ul>	4096~16777216 の整数で指定します。	16777216	07-00
com.cosminexus.manager.cmdtracelog.fnum	<p>コマンド保守ログファイルの面数を、1~64 で指定します。</p> <p>なお、次の操作をした後に、設定値を変更しても変更は有効になりません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Manager が提供するコマンドを実行</li> </ul> <p>値を変更する場合は、バックアップ後に次のディレクトリとログファイルを削除してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• &lt;Manager のログ出力ディレクトリ&gt;/maintenance/mmap</li> <li>• &lt;Manager のログ出力ディレクトリ&gt;/maintenance/mngcmd[n].log</li> </ul>	1~64 の整数で指定します。	4	07-00
com.cosminexus.manager.log.compatible	<p>Manager のログの上位互換性を指定します。</p> <p>true を指定した場合： Manager の統合ログによって不要になったファイルを出力します。</p> <p>false を指定した場合： Manager の統合ログによって不要になったファイルを出力しません。</p>	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	true	07-00

## 10.11 maction.properties (Management アクション実行用プロパティファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

Management Server のプロパティファイルです。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>\%manager%config%`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/`

### (3) 機能

Management イベントで通知されるメッセージ ID に対応する Management アクションを定義します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーとその内容および指定を省略した場合のデフォルト値を次に示します。

キー名称	内容	分類	デフォルト値
maction.<Management アクション ID>.command	Management アクションとして実行するコマンドを絶対パスで指定します。*1	Management アクションの定義	なし
maction.<Management アクション ID>.timeout	実行するコマンドプロセスに対するタイムアウトを、0~86400 の整数 (単位: 秒) で指定します。0 を指定した場合は、タイムアウトしません。	Management アクションの定義	10
maction.<Management アクション ID>.timeout.forced_stop	タイムアウト発生時の、実行したコマンドプロセスに対する操作を指定します。 true を指定した場合: コマンドプロセスを強制終了します。 false を指定した場合: 何もしません。 強制終了する場合、コマンドプロセスが作成したサブプロセスについては保証されません。	Management アクションの定義	false
maction.<Management アクション ID>.exclusive_time	Management アクション実行開始後から、同一 Management アクション ID の Management アクションの実行を抑止する時間 (単位: 秒) を 0~86400 の整数で指定します。0 を指定した場合、抑止しません。	Management アクションの定義	0
maction.<Management アクション ID>.concurrent_max	同一 Management アクション ID の Management アクションの同時実行数の最大値を 0~1000 の整数で指定します。	Management アクションの定義	0



キー名称	内容	分類	デフォルト値
ID>.max_executable_actions	0 を指定した場合、同時実行数を制限しません。	Management アクションの定義	0
maction.message.<メッセージ ID>.mactions	Management イベントで通知するメッセージ ID に対する Management アクション ID を指定します。英数字と区切り文字としてのコンマ (,) が使用できます。*2 複数指定する場合はコンマ (,) で区切ります。 指定した Management アクションに対してコマンドが設定されていない場合、Management アクションは実行されません。	メッセージ ID と Management アクションのマッピング	なし
maction.server.<論理サーバ名>.mactions	論理サーバに対応する Management アクション ID を指定します。英数字と区切り文字としてのコンマ (,) が使用できます。*2 複数指定する場合はコンマ (,) で区切ります。 キー名称の<論理サーバ名>には、J2EE サーバ、J2EE サーバクラスタ、J2EE サーバクラスタのメンバ、および SFO サーバが指定できます。指定した Management アクションに対してコマンドが設定されていない場合、Management アクションは実行されません。	論理サーバと Management アクションのマッピング	なし
maction.tier.<Web システム名>.<物理ティア種別名>.mactions	物理ティアに対応する Management アクション ID を指定します。英数字と区切り文字としてのコンマ (,) が使用できます。*2 複数指定する場合はコンマ (,) で区切ります。 指定した Management アクションに対してコマンドが設定されていない場合、Management アクションは実行されません。	論理サーバと Management アクションのマッピング	なし
maction.unit.<Web システム名>.<サービスユニット名>.mactions	サービスユニットに対応する Management アクション ID を指定します。英数字と区切り文字としてのコンマ (,) が使用できます。*2 複数指定する場合はコンマ (,) で区切ります。 指定した Management アクションに対してコマンドが設定されていない場合、Management アクションは実行されません。	論理サーバと Management アクションのマッピング	なし
maction.mevent.receiving_info.keep_size.max	Management イベントの受信情報を保持する最大数を、0~2147483647 の整数で指定します。0 を指定した場合、Management イベント受信情報を保持しません。Management イベント受信情報を保持することで、ネットワークの高負荷や障害による Management アクションの二重実行を防止することができます。Management イベント受信情報保持数が最大数を超えた場合、保持している受信情報のうち最も古い受信情報を削除します。Management イベント受信情報は、次の場合に破棄されます。 <ul style="list-style-type: none"><li>任意の Management イベント受信時に、Management イベントの再送期限が過ぎた受信情報を破棄</li></ul>	Management イベント受信時の設定	100

キー名称	内容	分類	デフォルト値
maction.mevent.receiving_info.keep_size.max	<ul style="list-style-type: none"> <li>Management Server 停止時にすべての受信情報を破棄</li> </ul>	Management イベント受信時の設定	100

## 注※1

Management アクションとして実行するコマンドは Management Server が実行します。また、Management Server で設定された環境変数を引き継ぎます。

コマンドファイルのサンプルは、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 運用/監視/連携編」の「9.4.6 Management アクション実行コマンドの設定」を参照してください。

## 注※2

コマ (,) 前後の空白文字は無視されます。

## (5) 設定例

maction.properties ファイルの内容を次に示します。

- Windows の場合

```
# Managementアクションの定義
maction.restart.command=c%:¥tmp¥command1.bat
maction.restart.timeout=12
maction.restart.timeout.forced_stop=true
maction.restart.exclusive_time=60
maction.restart.max_executable_actions=1

# メッセージIDとManagementアクションのマッピング
maction.message.KDJE11111-E.mactions=restart
maction.message.KDJE22222-E.mactions=restart

# 論理サーバとManagementアクションのマッピング
maction.server.j2ee1.mactions=restart
maction.server.j2ee2.mactions=restart
maction.server.j2eeClstr1.mactions=restart
```

- UNIX の場合

```
# Managementアクションの定義
maction.restart.command=/tmp/command1.sh
maction.restart.timeout=12
maction.restart.timeout.forced_stop=true
maction.restart.exclusive_time=60
maction.restart.max_executable_actions=1

# メッセージIDとManagementアクションのマッピング
maction.message.KDJE11111-E.mactions=restart
maction.message.KDJE22222-E.mactions=restart

# 論理サーバとManagementアクションのマッピング
maction.server.j2ee1.mactions=restart
maction.server.j2ee2.mactions=restart
maction.server.j2eeClstr1.mactions=restart
```

## (6) 注意事項

- Management アクション指定重複時の優先

次のプロパティキーについて、指定する論理サーバ、サービスユニットおよび物理ティアには J2EE サーバ < J2EE サーバクラスタ < サービスユニット < 物理ティア という包含関係が存在します。

- maction.server.<論理サーバ名>.mactions
- maction.unit.<Web システム名>.<サービスユニット名>.mactions
- maction.tier.<Web システム名>.<物理ティア種別名>.mactions

そのため、包含関係を持つ論理サーバ（例えば、J2EE クラスタと、その J2EE クラスタの要素となる J2EE サーバ）それぞれに対して別々の Management アクションが指定された場合、次の優先順でどれか一つの Management アクションが実行されます。

1. Management イベントを発行した J2EE サーバ
2. Management イベントを発行した J2EE サーバを含む J2EE サーバクラスタ
3. Management イベントを発行した J2EE サーバを含むサービスユニット
4. Management イベントを発行した J2EE サーバを含む物理ティア

また、メッセージ ID と Management アクションのマッピング、論理サーバと Management アクションのマッピングで Management アクションの指定順序が異なる場合、メッセージ ID と Management アクションのマッピング（`maction.message.<メッセージ ID>.mactions` キー）に指定された Management アクション ID の順番を優先します。

（例）"act1"を優先する例

```
maction.message.KDJE99999-E.mactions=act1, act2
```

```
maction.server.J2EE01.mactions=act3, act2, act1
```

なお、この例では、「KDJE99999-E」がメッセージ ID、「J2EE01」が論理サーバです。

- 標準出力／標準エラー出力について

Management アクションとして実行するコマンドから出力される標準出力／標準エラー出力については Management Server では取得しません。そのため、コマンドの標準出力／標準エラー出力を取得する場合は、コマンドの中でファイルに出力する必要があります。

## 10.12 Management イベント発行用プロパティファイル

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

Management Server のプロパティファイルです。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>\%manager%config%mevent.<論理サーバ名>.properties`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/mevent.<論理サーバ名>.properties`

### (3) 機能

Management イベント送信元の論理サーバ、送信先の Management Server、通知するメッセージ ID リストファイルなどを定義します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーとその内容および指定を省略した場合のデフォルト値を次に示します。

キー名称	内容	デフォルト値
manager.mevent.send.host	送信先ホストを指定します。 Management イベントの送信先である Management Server のホスト名または IP アドレスを指定します。英数字および記号が使用できます。 指定がない場合、Management イベントを発行しません。	なし
manager.mevent.send.port	送信先ポート指定します。 Management イベントの送信先である Management Server の HTTP ポート番号を、1～65535 の整数で指定します。 指定がない、または不正である場合は Management イベントを発行しません。	なし
manager.mevent.logical_server_name	Management イベントの発行元となる論理サーバ名を指定します。英数字および記号が使用できます。 指定がない場合、Management イベントを発行しません。 存在しない論理サーバ名を指定した場合、Management イベントは無視されます。	なし
manager.mevent.send.timeout	送信タイムアウトを指定します。 Management イベントの発行時に、Management Server からの応答を待つ時間を、10～600 の整数（単位：秒）で指定します。 指定時間内に応答がない場合、Management イベント発行失敗と見なします。	90
manager.mevent.retry.limit	送信期限を指定します。 Management イベントの発行に失敗した場合の再送を繰り返す期限を、0～86400 の整数（単位：秒）で指定します。	0

キー名称	内容	デフォルト値
manager.mevent.retry.limit	Management イベントの発行は、発行に成功するか、このキーに指定された時間が過ぎるまで、manager.mevent.retry.interval キーで指定された再送間隔で繰り返します。 0 が指定された場合は、Management イベントを再送しません。	0
manager.mevent.retry.interval	Management イベントを再送する場合の再送間隔を、1~86400 の整数（単位：秒）で指定します。	10
manager.mevent.message_id.list	Management イベント発行用メッセージ ID リストファイルを絶対パスで指定します。 指定されたファイルが不正である場合は Management イベントを発行しません。 省略された場合は、デフォルトの Management イベント発行用メッセージ ID リストファイルに登録されているメッセージ ID を Management イベントとして通知します。 Management イベント発行用メッセージ ID リストファイルについては、「10.13 Management イベント発行用メッセージ ID リストファイル」を参照してください。	なし
manager.mevent.sender.max	Management イベントの同時発行最大数を、1~1000 の整数で指定します。	10
manager.mevent.sender.bind.host	Management イベント送信時に使用するローカルアドレスのホスト名または IP アドレスを指定します。英数字および記号が使用できます。 省略した場合、任意のローカル IP アドレスが割り当てられます。	なし

なお、ファイルを作成する場合は、次の Management イベント発行用プロパティファイルの雛型を参照してください。

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%templates%mevent.properties`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/templates/mevent.properties`

## (5) 注意事項

- Management イベント発行機能の設定ファイルは、J2EE サーバインスタンスごとに指定する必要があります。同時に動作する複数の J2EE サーバインスタンスの間で同じファイルを指定しないでください。
- Management イベントは、Management イベント発生順に発行されます。ただし、発行に失敗した Management イベントは、予定されている Management イベントの発行後に再発行されます。

## 10.13 Management イベント発行用メッセージ ID リストファイル

### (1) 形式

次の形式で指定します。

[<インジケータ>]<メッセージ ID>

- 1 行に一つのメッセージ ID を記述します。
- インジケータにシャープ (#) を指定した場合、その行はコメントとみなされます。
- インジケータにプラス (+) を指定、またはインジケータを省略した場合、該当メッセージ ID を Management イベントとして通知します。
- インジケータにハイフン (-) を指定した場合、該当メッセージ ID を Management イベントとして通知しません。デフォルトの Management イベント発行用メッセージ ID リストに記載されたメッセージ ID を Management イベントとして通知しない場合に使用します。
- 行頭行末の空白文字や空行は無視されます。
- 同一のメッセージ ID を複数指定した場合、後方に記述されたメッセージ ID が有効になります。
- メッセージ ID がプラス (+) またはハイフン (-) で始まる場合、インジケータは必ず指定してください。

### (2) ファイルの格納先

格納先およびファイル名称は任意です。ファイル名には次の文字が使用できます。

英数字、ピリオド (.), 円符号 (¥), コロン (:), プラス (+), またはハイフン (-)

### (3) 機能

Management イベントとして通知するメッセージ ID を定義します。

### (4) デフォルト

Management イベントとして通知するメッセージ ID のデフォルトを次に示します。

表 10-2 Management 発行用メッセージ ID (デフォルト)

機能	監視対象	メッセージ ID
リソース枯渇監視	メモリ使用状況	KDJE34500-W
	ファイルディスクリプタ数	KDJE34520-W
	スレッド数	KDJE34540-W
	スレッドダンプファイル数	KDJE34580-W KDJE34581-E
	HTTP リクエスト実行待ちキュー (Web アプリケーション単位およびデフォルトの実行待ちキュー)	KDJE34621-W
	HTTP セッション数	KDJE34640-W

機能	監視対象	メッセージID
リソース枯渇監視	コネクションプールの使用状況	KDJE34660-W KDJE34661-W
J2EE アプリケーション実行時間監視	J2EE アプリケーション実行時間	KDJE52702-W KDJE52703-W KDJE52705-W KDJE52713-E
コネクション障害検知	コネクション障害検知のタイムアウト	KDJE48602-W
	コネクション管理スレッド	KDJE48603-W
FullGC 回数の監視	FullGC 回数	KDJE53850-W
URL グループ単位の実行待ちリクエスト数の監視	URL グループ単位の実行待ちリクエスト数の上限しきい値	KDJE53860-W
	URL グループ単位の実行待ちリクエスト数の下限しきい値	KDJE53861-I
クラスタコネクションプール	コネクションプールの状態	KDJE49650-I KDJE49653-I KDJE49655-E KDJE49657-E KDJE49660-I KDJE49663-E KDJE49664-E KDJE49669-E
	コネクション管理スレッド	KDJE49671-I
Web コンテナ単位の全体実行待ちリクエスト数の監視	Web コンテナ単位の全体実行待ちリクエスト数	KDJE53862-W KDJE53863-I KDJE53864-W KDJE53865-I KDJE53866-W KDJE53867-I KDJE53868-W KDJE53869-I

## (5) サンプル

サンプルを次に示します。

KDJE34580-W と KDJE34660-W を Management イベントとして通知しない場合

```
# Monitoring of resources
# : Status of memory(Java Heap)
KDJE34500-W

# : Number of file descriptors
KDJE34520-W

# : Number of threads
KDJE34540-W
```

---

```
# : Number of thread dump files
-KDJE34580-W
KDJE34581-E

# : Number of HTTP requests in queue
KDJE34621-W

# : Number of HTTP sessions
KDJE34640-W

# : Status of connection pool
-KDJE34660-W
KDJE34661-W

# Monitoring of execution time of user program
KDJE52702-W
KDJE52703-W
KDJE52705-W
KDJE52713-E
```

---

なお、ファイルを作成する場合は、次の Management イベント発行用メッセージ ID リストファイルの雛型を参照してください。

- Windows の場合  
    <Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%templates%mevent.midlist.conf
- UNIX の場合  
    /opt/Cosminexus/manager/config/templates/mevent.midlist.conf

## (6) 注意事項

- 次のメッセージ ID は Management イベントの発行対象外です。これらのメッセージ ID を指定した場合、その指定は無視されます。
  - KDJE90001-E
  - KDJE90002-E
  - KDJE90003-E
  - KDJE90005-W
  - KDJE90006-W
  - KDJE90009-W
- 指定可能なメッセージ ID は、Management イベント発行機能と連携する J2EE サーバやバッチサーバが出力する特定のメッセージ ID だけです。それ以外のシステムメッセージ ID、J2EE アプリケーション、またはバッチアプリケーションから出力されるメッセージ ID を指定しても Management イベントは発行されません。



## 10.14 Management Server 管理ファイル用退避対象定義ファイル

### (1) 形式

次の形式で指定します。

<ファイル名>

- 絶対パスで指定します。
- シャープ (#) で始まる行はコメントとみなされます。
- ファイルセパレータはスラッシュ (/) を使用します。
- 指定されたパスにファイルが存在しない場合、該当する行を無視して処理を継続します。
- 使用できる変数は次の変数です。\$はシステムプロパティを示します。指定する値には\$を含めないでください。

`${cosminexus.home}` : Application Server のインストールディレクトリ

`${user.home}` : ユーザのホームディレクトリ

### (2) ファイルの格納先

格納先およびファイル名称は任意です。

### (3) 機能

運用管理サーバの実行系と待機系を 1:1 にして系切り替えをする場合、実行系の運用管理サーバの Management Server 管理ファイルとして収集、退避させるファイルを定義します。デフォルトで収集対象となっているファイル以外に収集したいファイルがある場合に指定します。

### (4) デフォルト

Management Server 管理ファイルとしてデフォルトで収集されるファイルの対象ディレクトリを次に示します。

種類	対象ディレクトリ
定義ファイル格納ディレクトリ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合                &lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt;/manager/config/</li> <li>• UNIX の場合                /opt/Cosminexus/manager/config/</li> </ul>
アプリケーション登録ディレクトリ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合                &lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt;/manager/containers/m/j2eeapps/mngsvr/mportal/mapps/regapps/</li> <li>• UNIX の場合                /opt/Cosminexus/manager/containers/m/j2eeapps/mngsvr/mportal/mapps/regapps/</li> </ul>
リソースアダプタ登録ディレクトリ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合                &lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt;/manager/containers/m/j2eeapps/mngsvr/mportal/mwebsystems/regras/</li> </ul>

種類	対象ディレクトリ
リソースアダプタ登録ディレクトリ	<ul style="list-style-type: none"> <li>UNIX の場合 /opt/Cosminexus/manager/containers/m/j2eeapps/mngsvr/mportal/mwebsites/regras/</li> </ul>
リポジトリ管理用構成情報定義結果格納ファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt;/manager/containers/m/j2eeapps/mngsvr/mportal/useradmin/config/data/editusersConfig.xml</li> <li>UNIX の場合 /opt/Cosminexus/manager/containers/m/j2eeapps/mngsvr/mportal/useradmin/config/data/editusersConfig.xml</li> </ul>

### (5) 記述例

- /home/confdir/message1.conf を収集する場合  
/home/confdir/message1.conf
- <Application Server のインストールディレクトリ>/manager/apps/MyApp.ear (Windows の場合), または/opt/Cosminexus/manager/apps/MyApp.ear (UNIX の場合) を収集する場合  
\${cosminexus.home}/manager/apps/MyApp.ear

## 10.15 .mngsvrutilrc (mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

### (2) ファイルの格納先

各 OS ユーザのホームディレクトリ

### (3) 機能

mngsvrutil コマンドのオプションのデフォルト値を設定できます。

### (4) 反映のタイミング

設定ファイルの変更後、次回 mngsvrutil コマンドの発行時に更新情報が反映されます。

### (5) 指定できるキー

クライアント側定義ファイルで指定できるキーとその内容および指定を省略した場合のデフォルト値を次に示します。

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
mngsvrutil.connect.host	<p>-m オプションに指定する Management Server のホスト名、およびポート番号を設定します。</p> <p>(設定例)</p> <pre>mngsvrutil.connect.host=localhost:28080</pre> <ul style="list-style-type: none"> <li>ホスト名 ドット記法での IP アドレス指定、または名前解決できるホスト名で指定します。 IP アドレスはメタキャラクタを用いた正規表現で指定できます。IP アドレスが正規表現で指定された場合、利用可能なローカル IP アドレスのうちマッチする IP アドレスが使用されます。※1</li> <li>ポート番号 Management Server の設定に従います。デフォルト値は 28080 です。</li> </ul> <p>注意事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ホスト単位管理モデルで運用する場合に、mserver.properties の webserver.connector.http.bind_host に値を指定しているときは、同じ値を指定してください。</li> </ul>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ホスト名</li> <li>IPv4 アドレス</li> </ul>	なし	06-00

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
mngsvrutil.connect.host	<ul style="list-style-type: none"> <li>IP アドレスを表す正規表現にコロン(:)を指定しないでください。コロン(:)が指定された場合、コロン以降はポート番号とみなされます。</li> </ul>	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>ホスト名</li> <li>IPv4 アドレス</li> </ul>	なし	06-00
mngsvrutil.connect.password	<p>-p オプションに指定するパスワードを設定します。なお、パスワードを設定していない場合、このキーは必要ありません。</p> <p>(設定例)</p> <pre>mngsvrutil.connect.password=admin</pre> <p>管理ユーザアカウントの省略機能が有効の場合、このプロパティの指定は無視されます。</p>	Management Server の管理ユーザアカウントのパスワード	なし	06-00
mngsvrutil.connect.userid	<p>-u オプションに指定するユーザ ID を設定します。</p> <p>(設定例)</p> <pre>mngsvrutil.connect.userid=admin</pre> <p>管理ユーザアカウントの省略機能が有効の場合、このプロパティの指定は無視されます。</p>	Management Server の管理ユーザアカウントのユーザ ID	なし	06-00
mngsvrutil.output.file	<p>-o オプションに指定する出力ファイル名を設定します。</p> <p>(設定例)</p> <p>Windows の場合</p> <pre>mngsvrutil.output.file=C:/tmp/output.txt</pre> <p>UNIX の場合</p> <pre>mngsvrutil.output.file=/tmp/output.txt</pre>	ファイル名 (絶対パス)	なし	06-00
mngsvrutil.output.format	<p>-f オプションに指定する出力形式を設定します。</p> <p>CSV 形式で出力する場合は csv、SNMP 連携形式で出力する場合は snmp を指定します。</p> <p>(設定例)</p> <pre>mngsvrutil.output.format=csv</pre>	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>csv</li> <li>snmp</li> </ul>	csv	06-00
mngsvrutil.output.suppress_header	<p>-h オプションを指定する場合は true を、指定しない場合は false を設定します。なお、大文字と小文字は区別されません。</p> <p>(設定例)</p> <pre>mngsvrutil.output.suppress_header=true</pre>	指定できる文字列を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>true</li> <li>false</li> </ul>	false	06-00
mngsvrutil.target_name <sup>※2</sup>	<p>-t オプションに指定する論理サーバ名、またはホスト名を指定します。</p> <p>(設定例)</p> <pre>mngsvrutil.target_name=myServer</pre>	次のどれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>IPv4 アドレス</li> <li>ホスト名</li> <li>論理サーバ名</li> </ul>	なし	06-00

キー名称	内容	指定可能値	デフォルト	VR
mngsvrutil.target_name <sup>※2</sup>	<p>サブコマンドの対象となるターゲット名称（論理サーバ名またはホスト名）を指定します。</p> <p>運用管理ポータル「論理サーバの構成定義」の定義に従います。</p> <p>IP アドレスはメタキャラクタを用いた正規表現で指定できます。IP アドレスが正規表現で指定された場合、利用可能なローカル IP アドレスのうちマッチする IP アドレスが使用されます。<sup>※1</sup></p> <p>注意事項</p> <p>-k オプションまたは mngsvrutil.target_kind に host を指定する場合に、mserver.properties の webserver.connector.http.bind_host に値を指定しているときは、同じ値を指定してください。</p>	<p>次のどれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IPv4 アドレス</li> <li>• ホスト名</li> <li>• 論理サーバ名</li> </ul>	なし	06-00
mngsvrutil.target_kind	<p>-k オプションに指定するターゲット種別を指定します。</p> <p>(設定例)</p> <p>mngsvrutil.target_kind=host</p>	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• logicalServer</li> <li>• host</li> </ul>	logicalServer	06-00
mngsvrutil.target_server_name <sup>※2</sup>	<p>-t オプションに指定する論理サーバ名を設定します。ただし、06-00 以降のバージョンでは、mngsvrutil.target_name を使用することを推奨します。</p> <p>mngsvrutil.target_name と同時に指定した場合は、mngsvrutil.target_name の指定が有効になります。</p> <p>(設定例)</p> <p>mngsvrutil.target_server_name=myServer</p>	英数字および記号で表記します。	なし	06-00

## 注 1

各キーが存在しない、または誤っている場合はデフォルト値を仮定します。

## 注 2

パスワードなどの情報が含まれるため、適切にファイルパーミッションを設定してください。

## 注 3

ASCII 文字以外の文字を記述する場合は、設定ファイルの文字エンコーディングと mngsvrutil コマンド実行時の OS ロケールの文字エンコーディングを合わせてください。また、日本語を使用する場合にエスケープシーケンスを含めた文字列で指定しないでください。

## 注 4

JP1/Cm2/ESA for Extension Mib Runtime, または JP1/Cm2/Extensible Agent for Extension Mib Runtime を利用して SNMP 連携をする場合、JP1/Cm2/ESA for Extension Mib Runtime, または JP1/Cm2/Extensible Agent for Extension Mib Runtime の実行ユーザのホームディレクトリ以下に設定ファイルを準備してください。

## 注※1

運用管理ドメイン内で運用管理エージェントとの通信に使用される IP アドレスのサブネットが一つに決められている場合、指定する IP アドレスを "192.168.0.1" のように記述しておけば、前方が "192.168.0." である IP アドレス ("192.168.0.32" や "192.168.0.128" など) にマッチするため、設定ファイルを修正しないで、すべてのホスト

に配布して利用できます。正規表現についての詳細は、Java の `java.util.regex.Pattern` クラスの仕様を確認してください。

ただし、"`¥`"は1文字の"`¥`"に置き換えられてしまうため、"`¥`"を指定する場合は2文字連続して指定してください。指定した正規表現にマッチするIPアドレスが複数個検出された場合は、最も小さい値のIPアドレスを採用します。例えば、"`192.168.0.32`"と"`192.168.0.128`"が検出された場合は"`192.168.0.32`"を採用します。この場合、採用されたIPアドレスが意図するIPアドレスになるとは限らないため、"`192¥¥.168¥¥.0¥¥.1..`"のように必ず1個だけマッチする正規表現を記述してください。

### 注※2

`mngsvrutil.target_name` キーと `mngsvrutil.target_server_name` キーの指定と、`mngsvrutil` コマンドの `-k` オプションおよび `-t` オプションの指定の関係については、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス コマンド編」の「`mngsvrutil` (Management Server の運用管理コマンド)」を参照してください。

## 10.16 mngsvrutil.properties (mngsvrutil コマンドのサーバ側定義ファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/`

### (3) 機能

mngsvrutil コマンドの実行環境を設定します。

### (4) 反映のタイミング

Management Server 起動中に設定ファイルを更新した場合、Management Server の再起動後に更新情報が反映されます。

### (5) 指定できるキー

サーバ側定義ファイルで指定できるキーとその内容および指定を省略した場合のデフォルト値を次に示します。

キー名称	内容	デフォルト値
mngsvrutil.auth.failed_wait	管理ユーザの認証に失敗した場合に待機する秒数を指定します (指定できる値: 0~2147483647)。 (設定例) <code>mngsvrutil.auth.failed_wait=10</code>	5
mngsvrutil.auth.log_challenged	HTTP によるアクセスがあったことをログに出力するかどうかを指定します。 <sup>*1</sup> true を指定した場合: 出力します。 false を指定した場合: 出力しません。 (設定例) <code>mngsvrutil.auth.log_challenged=false</code>	true
mngsvrutil.auth.log_denied	HTTP によるアクセスを拒否したことをログに出力するかどうかを指定します。 <sup>*</sup> true を指定した場合: 出力します。 false を指定した場合: 出力しません。	true

キー名称	内容	デフォルト値
mngsvrutil.auth.log_denied	(設定例) mngsvrutil.auth.log_denied=false	true
mngsvrutil.auth.log_failed	管理ユーザの認証に失敗したことをログに出力するかどうかを指定します。*1 true を指定した場合： 出力します。 false を指定した場合： 出力しません。 (設定例) mngsvrutil.auth.log_failed=false	true
mngsvrutil.auth.log_succeeded	管理ユーザの認証に成功したことをログに出力するかどうかを指定します。*1 true を指定した場合： 出力します。 false を指定した場合： 出力しません。 (設定例) mngsvrutil.auth.log_succeeded=false	true
mngsvrutil.compat.header_format	アプリケーション管理方法が V8 モードの場合に、list サブコマンドで出力するヘッダ形式を V7 互換モードと互換性のある形式にするかどうかを指定します。*1 true を指定した場合： V7 互換モードと互換性のある形式 (J2EE アプリケーション、リソースの登録日時、およびインポート日時を出力する) で出力します。 false を指定した場合： V7 互換モードと互換性のない形式 (J2EE アプリケーションやリソースの登録日時やインポート日時を出力しない) で出力します。 (設定例) mngsvrutil.compat.header_format=true	false
mngsvrutil.compat.monitoring_tree	アプリケーション管理方法が V8 モードの場合に、JP1/IM の監視ツリーの自動生成で取得する内容にアプリケーション情報を含めるかどうかを指定します。*1 true を指定した場合： J2EE アプリケーション情報、および J2EE サーバと J2EE アプリケーションとの関連情報を出力します。 false を指定した場合： J2EE アプリケーション情報、および J2EE サーバと J2EE アプリケーションとの関連情報を出力しません。 (設定例) mngsvrutil.compat.monitoring_tree=true	false
mngsvrutil.session.max_inactive_interval	サーバがクライアントにセッションを生成して、クライアントから最後にリクエストを受けてからセッションを無効化するまでの最大の秒数を指定します (指定できる値: -2147483648~2147483647) *2。 (設定例) mngsvrutil.session.max_inactive_interval=10	5



注 1

各キーが存在しない、または誤っている場合はデフォルト値を仮定します。

注 2

Management Server 起動中に設定ファイルを更新した場合、Management Server の再起動後に更新情報が反映されます。

注※1

設定値 (true, false) は、大文字、小文字の区別はしません。

注※2

負の値を指定した場合、セッションを無効化しません。

## 10.17 mngsvrutilcl.properties (mngsvrutil コマンドのクライアント側共通定義ファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config%`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config/`

### (3) 機能

mngsvrutil コマンドのオプションのデフォルト値を共通定義として設定できます。

また、この定義ファイルを適用するユーザを制限できます。

なお、クライアント側定義ファイル (.mngsvrutilrc) と mngsvrutilcl.properties (mngsvrutil コマンドのクライアント側共通定義ファイル) の両方が設定されている場合、クライアント側定義ファイル (.mngsvrutilrc) が適用されます。

### (4) 反映のタイミング

設定ファイルの変更後、次回 mngsvrutil コマンドの発行時に更新情報が反映されます。

### (5) 指定できるキー

クライアント側共通定義ファイルで指定できるキーとその内容および指定を省略した場合のデフォルト値を次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
mngsvrutil.apply_user	<p>mngsvrutil コマンドまたはアダプタコマンドを実行する時の OS ユーザで、クライアント側共通定義ファイルを適用するユーザを指定します。このキーで指定した OS ユーザが、mngsvrutil コマンドまたはアダプタコマンドを実行した場合だけ、これ以外に設定したキーが適用されます。</p> <p>複数のユーザを指定する場合は、コンマ (,) で区切って指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合 ドメイン名を含まないユーザ名を指定してください。ユーザ名が一致している場合、ログイン先がローカル、ドメインのどちらでも、このパラメタは有効になります。大文字と小文字は区別されません。</li> </ul>	OS に登録されているユーザ名	なし	06-70

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
mngsvrutil.apply_user	<p>また、Windows のサービスから mngsvrutil コマンドが呼び出される場合に、この定義ファイルを適用するには、Windows XP の場合は「SYSTEM」を、それ以外の場合は「&lt;ホスト名&gt;\$」（&lt;ホスト名&gt;は、Management Server が稼働するホストのホスト名）を指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>UNIX の場合 大文字と小文字は区別されます。 SNMP 連携および JPI/IM 連携（監視ツリーの自動生成や Web システムの構成情報の収集）で、この定義ファイルを適用するには、「root」を指定してください。</li> </ul> <p>(設定例)</p> <p>Windows の場合 mngsvrutil.apply_user=SYSTEM, Administrator</p> <p>UNIX の場合 mngsvrutil.apply_user=root, user01</p>	OS に登録されているユーザ名	なし	06-70
.mngsvrutilrc (mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイル) のキー	指定できるキーについては、「10.15 .mngsvrutilrc (mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイル)」を参照してください。	—	—	—

(凡例)

—：該当なし。

## (6) 注意事項

クライアント側定義ファイル (.mngsvrutilrc) が存在しない場合、無条件にクライアント側共通定義ファイル (mngsvrutilcl.properties) を読み込むため、このファイルにアクセス権限がないと Warning が発生します。

mngsvrutil コマンドおよびアダプタコマンドを実行する OS ユーザには、クライアント側共通定義ファイルへのアクセス権限を付与し、mngsvrutil.apply\_user キーでクライアント側共通定義ファイルを適用するユーザを選別することを推奨します。

## 10.18 .mngsvrmonitorrc (JP1/IM 連携用モニタ起動コマンドの設定ファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

### (2) ファイルの格納先

JP1/IM-View を操作する OS ユーザのホームディレクトリ

### (3) 機能

JP1/IM 連携をする場合に、JP1/IM の画面から Management Server の運用ポータルを起動するために必要な設定をします。なお、このファイルは、Windows 用です。

### (4) 反映のタイミング

設定ファイルの変更後、次回 mngsvrmonitor コマンド実行時に更新情報が反映されます。

### (5) 指定できるキー

モニタ起動コマンドの設定ファイルで指定できるキーとその内容および指定を省略した場合のデフォルト値を次に示します。

キー名称	内容	デフォルト値
mngsvrmonitor.browser	起動する Web ブラウザのコマンドをフルパスで指定します。空白を含むパスを指定する場合はダブルクォーテーション (") で囲んで指定してください。このキーを省略した場合は Windows のレジストリに設定されているデフォルトブラウザを起動します (デフォルトブラウザが設定されていない場合はエラーになります)。 (設定例) mngsvrmonitor.browser ="C:/Program Files/Internet Explorer/iexplore.exe"	レジストリのデフォルトブラウザ
mngsvrmonitor.connect.host	Management Server のホスト名およびポート番号を次の形式で指定します。 ホスト名[:ポート番号] (設定例) mngsvrmonitor.connect.host=h001:28080	ポート番号: 28080
mngsvrmonitor.connect.password	運用管理ポータルの「管理ユーザアカウントの設定」で設定した管理ユーザ ID に対応する管理ユーザパスワードを指定します。なお、パスワードを設定していない場合、このキーは必要ありません。 (設定例) mngsvrmonitor.connect.password=p43269 管理ユーザアカウントの省略機能が有効の場合、このプロパティの指定は無視されます。	なし
mngsvrmonitor.connect.userid	運用管理ポータルの「管理ユーザアカウントの設定」で設定した管理ユーザ ID を指定します。このキーを省略した場合は運用管理ポータルのログイン画面を表示します。 (設定例) mngsvrmonitor.connect.userid=admin	なし

キー名称	内容	デフォルト値
mngsvrmonitor.connect.userid	管理ユーザアカウントの省略機能が有効の場合、このプロパティの指定は無視されません。	なし

## 10.19 JP1/IM 連携用システムログメッセージマッピングファイル

JP1/IM 連携用システムログメッセージマッピングファイルには、次のファイルがあります。これらのファイルでは、アプリケーションサーバシステムで出力されるメッセージと JP1 イベントの重大度のマッピングを定義します。

- `mserver.jp1event.system.mapping.properties` (Management Server 用メッセージマッピングファイル)
- `manager.jp1event.system.mapping.properties` (J2EE サーバ共通用メッセージマッピングファイル)
- `manager.<論理サーバ名>.jp1event.system.mapping.properties` (J2EE サーバ個別用メッセージマッピングファイル)

なお、Web サービスおよび Web リソースに関するメッセージは、JP1/IM 連携用システムログメッセージマッピングファイルには定義できません。

### 10.19.1 `mserver.jp1event.system.mapping.properties` (Management Server 用メッセージマッピングファイル)

#### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

```
mserver.jp1event.system.mapping.severity.<メッセージID>=<JP1 イベントの重大度>
```

<メッセージ ID>

次のマニュアルに記載されているメッセージ ID を指定します。

- マニュアル「アプリケーションサーバ メッセージ(構築/運用/開発用)」

<JP1 イベントの重大度>

Information, Notice, Warning, Error, Critical, Alert, Emergency のどれかを指定します。

#### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%config`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/config`

#### (3) 機能

Management Server が出力するログメッセージを JP1 イベントに変換する際に使用するメッセージマッピングファイルです。

#### (4) 記述例

```
mserver.jp1event.system.mapping.severity.KEOS10001-E=Error
mserver.jp1event.system.mapping.severity.KEOS10010-I=Information
```

## 10.19.2 manager.jp1event.system.mapping.properties (J2EE サーバ共通用メッセージマッピングファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

```
manager.jp1event.system.mapping.severity.<メッセージID>=<JP1 イベントの重大度>
```

```
<メッセージ ID>
```

次のマニュアルに記載されているメッセージ ID を指定します。

- マニュアル「アプリケーションサーバ メッセージ(構築/運用/開発用)」

```
<JP1 イベントの重大度>
```

Information, Notice, Warning, Error, Critical, Alert, Emergency のどれかを指定します。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <Application Serverのインストールディレクトリ>¥manager¥config
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/manager/config

### (3) 機能

サーバマシン中の J2EE サーバ共通用で J2EE サーバが出力するログメッセージを JP1 イベントに変換する際に使用するメッセージマッピングファイルです。

### (4) 記述例

```
manager.jp1event.system.mapping.severity.KDJE42019-E=Error
manager.jp1event.system.mapping.severity.KDJE42040-I=Information
```

## 10.19.3 manager.<論理サーバ名>.jp1event.system.mapping.properties (J2EE サーバ個別用メッセージマッピングファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

```
manager.jp1event.system.mapping.severity.<メッセージID>=<JP1 イベントの重大度>
```

```
<メッセージ ID>
```

次のマニュアルに記載されているメッセージ ID を指定します。

- マニュアル「アプリケーションサーバ メッセージ(構築/運用/開発用)」

```
<JP1 イベントの重大度>
```

Information, Notice, Warning, Error, Critical, Alert, Emergency のどれかを指定します。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合

<Application Serverのインストールディレクトリ>¥manager¥config

- UNIX の場合  
/opt/Cosminexus/manager/config

### (3) 機能

J2EE サーバごとにマッピングルールを定義したい場合に作成します。このファイルが定義されている場合、Application Server は該当する J2EE サーバに対して個別用ファイルだけを使用し、J2EE サーバが出力するログメッセージを JP1 イベントに変換します。

### (4) 記述例

```
manager.jp1event.system.mapping.severity.KDJE42020-E=Error
manager.jp1event.system.mapping.severity.KDJE42041-I=Information
```

## 10.19.4 JP1 イベントへの変換

Management Server, J2EE サーバおよびユーザログ機能で出力するログメッセージは、メッセージマッピングファイルを使用して JP1 イベントに変換されます。

### (1) Management Server 用 JP1 イベント

Management Server 用 JP1 イベントには、次の二つの種類があります。

- Application Server で定義されている JP1 イベント
- Management Server 用メッセージマッピングファイルで指定する JP1 イベント
- Application Server で定義されている JP1 イベント

Application Server は、次のメッセージ ID を持つメッセージが出力されたときに、JP1 イベントを発行します。

表 10-3 Application Server で定義されている Management Server 用 JP1 イベント

イベント ID	発行契機	メッセージ ID
0x00012050	Management Server の起動	KEOS10101-I
0x00012051	Management Server の終了	KEOS10102-I
0x00012060	ドメインへの Web システム追加	KEOS23301-I
0x00012061	ドメインからの Web システム削除	KEOS23302-I
0x0001206A	Web システムへのユニット追加・削除や J2EE アプリケーションのデプロイ・アンデプロイなど (Web システムの変更)	KEOS23303-I
0x00012070	運用管理エージェントの起動	KEOS21100-I
0x00012071	運用管理エージェントの終了	KEOS21101-I

- Management Server 用メッセージマッピングファイルで指定する JP1 イベント

Management Server 用メッセージマッピングファイルのテンプレートファイル (mserver.jp1event.system.mapping.properties) で指定されているメッセージが JP1 イベント発行の対象となります。



テンプレートファイルの格納先は、次のとおりです。

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>%manager%config%templates
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/manager/config/templates

メッセージマッピングファイルの指定によって発行される Management Server 用 JP1 イベントを次の表に示します。

表 10-4 メッセージマッピングファイルの指定による Management Server 用 JP1 イベント

イベント ID	発行契機	マッピングで指定した JP1 イベントの重大度
0x00012000	Management Server で検出した論理サーバの Emergency レベルの障害	Emergency
0x00012001	Management Server で検出した論理サーバの Alert レベルの障害	Alert
0x00012002	Management Server で検出した論理サーバの Critical レベルの障害	Critical
0x00012003	Management Server で検出した論理サーバの Error レベルの障害	Error
0x00012004	Management Server で検出した論理サーバの Warning レベルの障害	Warning
0x00012005	Management Server で検出した論理サーバの Notice レベルの障害	Notice
0x00012006	Management Server で検出した論理サーバの Information レベルの障害	Information
0x00012020	Management Server の Emergency レベルの障害	Emergency
0x00012021	Management Server の Alert レベルの障害	Alert
0x00012022	Management Server の Critical レベルの障害	Critical
0x00012023	Management Server の Error レベルの障害	Error
0x00012024	Management Server の Warning レベルの障害	Warning
0x00012025	Management Server の Notice レベルの障害	Notice
0x00012026	Management Server の Information レベルの障害	Information

## (2) J2EE サーバ用 JP1 イベント

次のテンプレートファイルで指定されているメッセージが J2EE サーバ用 JP1 イベント発行の対象となります。

- J2EE サーバ共通メッセージマッピングファイル (manager.jp1event.system.mapping.properties)
- J2EE サーバ個別用メッセージマッピングファイル (manager.<論理サーバ名>.jp1event.system.mapping.properties)

テンプレートファイルの格納先は、次のとおりです。

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>%manager%config%templates

- UNIX の場合  
/opt/Cosminexus/manager/config/templates

メッセージマッピングファイルの指定による J2EE サーバ用 JP1 イベントを次の表に示します。

表 10-5 J2EE サーバ用 JP1 イベント

イベント ID	発行契機	マッピングで指定した JP1 イベントの重大度
0x00012080	J2EE サーバの Emergency レベルの障害	Emergency
0x00012081	J2EE サーバの Alert レベルの障害	Alert
0x00012082	J2EE サーバの Critical レベルの障害	Critical
0x00012083	J2EE サーバの Error レベルの障害	Error
0x00012084	J2EE サーバの Warning レベルの障害	Warning
0x00012085	J2EE サーバの Notice レベルの障害	Notice
0x00012086	J2EE サーバの Information レベルの障害	Information
0x00012090	J2EE サーバで検出したアプリケーションの Emergency レベルの障害	Emergency
0x00012091	J2EE サーバで検出したアプリケーションの Alert レベルの障害	Alert
0x00012092	J2EE サーバで検出したアプリケーションの Critical レベルの障害	Critical
0x00012093	J2EE サーバで検出したアプリケーションの Error レベルの障害	Error
0x00012094	J2EE サーバで検出したアプリケーションの Warning レベルの障害	Warning
0x00012095	J2EE サーバで検出したアプリケーションの Notice レベルの障害	Notice
0x00012096	J2EE サーバで検出したアプリケーションの Information レベルの障害	Information

### (3) J2EE ユーザ用 JP1 イベント

ユーザログ機能で出力するメッセージが J2EE ユーザ用 JP1 イベント発行の対象となります。ユーザログ用 JP1 イベントの設定については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 運用／監視／連携編」の「13.4.2 障害監視の設定」を参照してください。

表 10-6 J2EE ユーザ用 JP1 イベント

イベント ID	発行契機	JP1 イベントの重大度
0x000120D0	アプリケーションの Emergency レベルの障害	Emergency
0x000120D1	アプリケーションの Alert レベルの障害	Alert
0x000120D2	アプリケーションの Critical レベルの障害	Critical
0x000120D3	アプリケーションの Error レベルの障害	Error
0x000120D4	アプリケーションの Warning レベルの障害	Warning
0x000120D5	アプリケーションの Notice レベルの通知	Notice
0x000120D6	アプリケーションの Information レベルの通知	Information

## 10.20 setup.cfg (セットアップウィザード用設定ファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称>=<値>

#### 指定方法

- 行頭に「#」を記述した場合、その行はコメントと見なされ、無視されます。
- 値を指定しない場合、その行は無視されます。
- 行頭および行末の空白文字や空行は無視されます。
- キーと値の間のセパレータには「=」を使用します。「=」前後の空白は無視されます。
- 改行までが値と見なされます。
- 同じキーを複数指定した場合は、最後のキーの値を有効とします。
- 1行は64KB未満とします。
- ASCII文字だけ使用できます。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%setup%config
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/manager/setup/config

### (3) 機能

セットアップウィザードのログファイルの出力先、最大ファイルサイズ、最大ファイル面数などを指定します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーを次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
setup.log.dir	<p>ログファイルの出力先ディレクトリを指定します。ファイルセパレータには「/」を使用してください。範囲外の値を指定した場合は、デフォルト値が仮定されます。</p> <p>UNIX の場合、指定した出力先ディレクトリの上位のディレクトリが存在している必要があります。</p>	ディレクトリ名 (絶対パス)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合                &lt;Application Serverのインストールディレクトリ&gt;%manager%setup%log</li> </ul>	08-00

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
setup.log.dir	ログファイルの出力先ディレクトリを指定します。ファイルセパレータには「/」を使用してください。範囲外の値を指定した場合は、デフォルト値が仮定されます。 UNIX の場合、指定した出力先ディレクトリの上位のディレクトリが存在している必要があります。	ディレクトリ名（絶対パス）	<ul style="list-style-type: none"> <li>UNIX の場合 /opt/ Cosminexus/ manager/ setup/log</li> </ul>	08-00
setup.log.filenum	ログファイル面数を指定します。範囲外の値を指定した場合は、デフォルト値が仮定されます。	1～16 の整数で指定します。	4	08-00
setup.log.filesize	ログファイル一つ当たりの上限サイズ（単位：バイト）を指定します。範囲外の値を指定した場合は、デフォルト値が仮定されます。	4096～2147483647 の数値で指定します。	262144	08-00
setup.maintenance.log.filenum	保守ログのファイル面数を指定します。範囲外の値を指定した場合は、デフォルト値が仮定されます。	1～16 の整数で指定します。	4	08-00
setup.maintenance.log.filesize	保守ログのファイル一つ当たりの上限サイズ（単位：バイト）を指定します。範囲外の値を指定した場合は、デフォルト値が仮定されます。	4096～2147483647 の整数で指定します。	16777216	08-00

### (5) 注意事項

セットアップウィザード実行時に、setup.cfg ファイルの読み込みに失敗した場合は、メッセージ KEOS28056-E が出力され、セットアップウィザードは終了します。

## 10.21 論理ユーザサーバ定義ファイル

### (1) 形式

xml ファイル形式です。

### (2) ファイルの格納先

格納先およびファイル名称は任意です。

### (3) 機能

mngsvrutil コマンドで論理ユーザサーバを追加するときに作成します。

### (4) 定義できる内容

論理ユーザサーバ定義ファイルに記述できる内容を次の表に示します。

要素名	説明	デフォルト値
<user-server-definition>	名前空間として次のパスを指定します。http://www.cosminexus.com/mngsvr/schema/UserServerDefinition-1.1	—
<service>	サービスの定義。 必ず指定してください。	—
<type>	起動方法を直接起動にするか間接起動にするかを指定します。 direct を指定した場合： 直接起動します。 indirect を指定した場合： 間接起動します。	direct
<startup-order>	起動順序を-1~999の整数で指定します。-1を指定した場合は、指定なしとなります。	900
<start-watch-time>	起動監視時間を次の数値（単位：秒）で指定します。0を指定した場合は、監視しません。 0, 60, 300, 600, 3600	60
<stop-watch-time>	停止監視時間を次の数値（単位：秒）で指定します。0を指定した場合は、監視しません。 0, 60, 300, 600, 1800	60
<force-watch-time>	強制停止監視時間を次の数値（単位：秒）で指定します。0を指定した場合は、監視しません。 0, 60, 300, 600, 1800	60
<retry-count>	自動再起動回数を次の数値で指定します。 0, 1, 5, 10, 1000	1
<retry-interval>	自動再起動リトライ間隔を次の数値（単位：秒）で指定します。0を指定した場合は、即時リトライします。 0, 60, 300, 600, 1800	60

要素名	説明	デフォルト値
<watch-interval>	監視間隔を、1～86400 の整数（単位：秒）で指定します。 なお、運用管理エージェントプロパティファイルの adminagent.userserver.watch.interval キーと同時に指定した場合は、このタグに指定した値が有効になります。	1
<start-time-watch-interval>	起動時監視間隔を、1～86400 の整数（単位：秒）で指定します。	1
<env>	環境変数の定義。 複数指定できます。	—
name	環境変数名を指定します。 必ず指定してください。	—
value	環境変数値を指定します。 必ず指定してください。 環境変数の指定値に次の文字列「\${cosminexus.home}」が含まれている場合は、<Application Server のインストールディレクトリ>に置換されます。	—
<working-dir>	ワーキングディレクトリを絶対パスで指定します。	<Application Server のインストールディレクトリ>/manager/bin
<user-id>	コマンド実行時のユーザ ID を指定します。 この要素は、UNIX 用です。	—
<group-id>	コマンド実行時のグループ ID を指定します。 この要素は、UNIX 用です。	—
<command>	コマンドの定義 必ず指定してください。また、複数指定できます。	—
type	コマンド種別 <sup>※1</sup> を指定します。指定できる値は、次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• start：サーバ起動用コマンド</li> <li>• stop：サーバ停止用コマンド</li> <li>• forceStop：サーバ強制停止用コマンド</li> <li>• getProcessID：プロセス ID 取得用コマンド</li> <li>• isAlive：サービス監視用コマンド</li> </ul> 必ず指定してください。	—
timeout	タイムアウト時間を、1～86400 の整数（単位：秒）で指定します。 ただし、コマンド種別が getProcessID または isAlive のときだけ有効となります。	180
<arg>	コマンド引数を指定します。 <sup>※2</sup> 必ず指定してください。	—

要素名	説明	デフォルト値
<arg>	コマンドに引数および引数値を付加する場合は、<arg>タグを複数指定してください。 <arg>タグの指定例を次に示します。 <arg>コマンド</arg> <arg>引数 1</arg> <arg>引数 1 の指定値</arg> <arg>引数 2 (値の指定なし) </arg> <arg>引数 3</arg> <arg>引数 3 の指定値</arg>	—
<server>	論理ユーザーバ定義。 必ず指定してください。また、複数指定できます。	—
<logical-server-name>	論理サーバ名を 128 文字以下で指定します。使用できる文字は半角文字の英数字 (A~Z, a~z, 0~9), アンダースコア (_), およびハイフン (-) です。 必ず指定してください。	—
<display-name>	論理サーバの表示名を 128 文字以下で指定します。	—
<description>	論理サーバの説明を 1024 文字以下で指定します。	—
<host-ref>	あらかじめ定義されたホスト名を 255 文字以下で指定します。使用できる文字は半角文字の英数字 (A~Z, a~z, 0~9), アンダースコア (_), ハイフン (-) およびピリオド (.) です。 必ず指定してください。	—

## 注※1

起動種別によってコマンド種別の指定条件が異なります。起動種別によるコマンド種別の指定条件と要件を次に示します。

起動種別	コマンド種別	指定条件	要件	備考
直接起動	start	必須	サーバ起動用コマンドが監視対象となります。	—
	stop	任意	サーバ停止用コマンドの正常終了時には、監視対象プロセスが終了しています。	指定していない場合は次の動作をします。 <ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 該当プロセスに対し Ctrl-C イベントを発行します。プロセスが停止しない場合は、TerminateProcess() を実行します。</li> <li>UNIX の場合 該当プロセスに対し SIGTERM を送信します。その 1 秒後にプロセスが停止しない場合は、SIGKILL を送信します。</li> </ul>

起動種別	コマンド種別	指定条件	要件	備考
直接起動	forceStop	任意	<ul style="list-style-type: none"> <li>サーバ強制停止用コマンドの終了時には、監視対象プロセスが終了しています。</li> <li>サーバ強制停止用コマンド発行後は、サーバ起動用コマンドが実行可能状態となります。</li> </ul>	<p>指定していない場合は次の動作をします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 該当プロセスに対し Ctrl-C イベントを発行します。プロセスが停止しない場合は、TerminateProcess()を実行します。</li> <li>UNIX の場合 該当プロセスに対し SIGTERM を送信します。その 1 秒後にプロセスが停止しない場合は、SIGKILL を送信します。</li> </ul>
	getProcess ID	指定不可	—	指定した場合はエラーとなります。
	isAlive	任意	サービスが稼働中の場合は終了コードが 0、稼働中ではない場合は終了コードが 0 以外となります。	指定した場合はサービス監視を行います。
間接起動	start	必須	<ul style="list-style-type: none"> <li>プロセス起動用コマンドの正常終了時には、すべての監視対象プロセスが起動完了します。</li> <li>プロセス起動用コマンドの正常終了時には、プロセス停止用コマンドが実行可能状態となります。</li> <li>正常終了の場合は終了コードが 0、異常終了の場合は終了コードが 1 となります。</li> </ul>	—
	stop	任意	サーバ停止用コマンドの正常終了時には、監視対象プロセスが終了しています。	<p>指定していない場合は次の動作をします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 該当プロセスに対し Ctrl-C イベントを発行します。プロセスが停止しない場合は、TerminateProcess()を実行します。</li> <li>UNIX の場合 該当プロセスに対し SIGTERM を送信します。その 1 秒後にプロセスが停止しない場合は、SIGKILL を送信します。</li> </ul>
	forceStop	任意	<ul style="list-style-type: none"> <li>サーバ強制停止用コマンドの終了時には、監視対象プロセスが終了しています。</li> <li>サーバ強制停止用コマンド発行後は、サーバ起動用コマンドが実行可能状態となります。</li> </ul>	<p>指定していない場合は次の動作をします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 該当プロセスに対し Ctrl-C イベントを発行します。プロセスが停</li> </ul>



起動種別	コマンド種別	指定条件	要件	備考
間接起動	forceStop	任意	<ul style="list-style-type: none"> <li>サーバ強制停止用コマンドの終了時には、監視対象プロセスが終了しています。</li> <li>サーバ強制停止用コマンド発行後は、サーバ起動用コマンドが実行可能状態となります。</li> </ul>	止しない場合は、TerminateProcess()を実行します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>UNIX の場合 該当プロセスに対し SIGTERM を送信します。その 1 秒後にプロセスが停止しない場合は、SIGKILL を送信します。</li> </ul>
	getProcess ID	必須	<ul style="list-style-type: none"> <li>サーバ起動用コマンドで起動したプロセスのプロセス ID を 10 進表現で標準出力に出力します。</li> <li>複数のプロセスが起動される場合はすべてのプロセスのプロセス ID を出力します。</li> <li>正常終了の場合は終了コードが 0, 異常終了の場合は終了コードが 1 となります。</li> <li>出力フォーマットは次のようになります。 9 9 9 6 ¥n 1 0 0 2 3 ¥n 1 0 2 5 7 ¥n</li> </ul>	—
	isAlive	任意	サービスが稼働中の場合は終了コードが 0, 稼働中ではない場合は終了コードが 0 以外となります。	指定した場合はサービス監視を行います。

## 注※2

コマンド引数の指定値に次の文字列が含まれている場合は、対応する値に置換されます。

置換前の文字列	置換後の文字列	備考
\${cosminexus.home}	Application Server のインストールディレクトリ	—
%{XXX}	環境変数 XXX の値	環境変数 XXX が存在しない場合は空白文字列に置換されます。
\${server.name}	論理サーバ名	—

## (5) 定義例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<user-server-definition xmlns="http://www.cosminexus.com/mngsvr/schema/UserServerDefinition-1.1">
  <!-- サービス定義 -->
  <service>
    <!-- 起動種別 -->
    <type>direct</type>
    <!-- 起動順序 -->
    <startup-order>900</startup-order>
    <!-- 起動監視時間 -->
    <start-watch-time>60</start-watch-time>
    <!-- 停止監視時間 -->
    <stop-watch-time>60</stop-watch-time>
    <!-- 強制停止監視時間 -->
```

---

```

<force-watch-time>60</force-watch-time>
<!-- 自動再起動回数 -->
<retry-count>1</retry-count>
<!-- 自動再起動リトライ間隔 -->
<retry-interval>60</retry-interval>
<!-- 監視間隔 -->
<watch-interval>1</watch-interval>
<!-- 起動時監視間隔 -->
<start-time-watch-interval>1</start-time-watch-interval>
<!-- 環境変数 -->
<env name="USERSERVER_HOME" value="C:%UserServer"/>
<!-- ワーキングディレクトリ -->
<working-dir>C:%UserServer</working-dir>
<!-- ユーザID -->
<!--
<user-id>userserver</user-id>
-->
<!-- グループID -->
<!--
<group-id>userserver</group-id>
-->
<!-- サーバ起動用コマンド -->
<command type="start">
  <arg>C:%UserServer#start.exe</arg>
</command>
<!-- サーバ停止用コマンド -->
<command type="stop">
  <arg>C:%UserServer#stop.exe</arg>
</command>
<!-- サーバ強制停止用コマンド -->
<command type="forceStop">
  <arg>C:%UserServer#forceStop.exe</arg>
</command>
<!-- プロセスID取得用コマンド -->
<!--
<command type="getProcessID" timeout="180">
  <arg>C:%UserServer#getProcessID.exe</arg>
</command>
-->
<!-- サービス監視用コマンド -->
<command type="isAlive" timeout="180">
  <arg>C:%UserServer#isAlive.exe</arg>
</command>
</service>

<!-- 論理ユーザサーバ定義 -->
<server>
  <logical-server-name>UserServer01</logical-server-name>
  <display-name>論理ユーザサーバ</display-name>
  <description>これは論理ユーザサーバです</description>
  <host-ref>192.168.1.1</host-ref>
</server>
</user-server-definition>

```

---

## (6) 注意事項

- stop コマンドおよび forceStop コマンドを指定していない場合に、start コマンドに別のプロセスを起動するようなバッチファイル、またはシェルスクリプトを指定しないでください。指定すると、運用管理エージェントを再起動した場合に、バッチファイルまたはシェルスクリプトから起動したプロセスを、運用管理エージェントの停止操作または強制停止操作の延長で終了できなくなります。
- 直接起動で start コマンドに別のプロセスを起動するようなバッチファイル、またはシェルスクリプトを指定する場合は、stop コマンドおよび forceStop コマンドを指定してください。
- 間接起動で start コマンドに別のプロセスを起動するようなバッチファイル、またはシェルスクリプトを指定する場合は次のようにしてください。
  - stop コマンドおよび forceStop コマンドを指定する。
  - バッチファイルまたはシェルスクリプトから起動したプロセスのプロセス ID を取得するような getProcessID コマンドを指定する。

- 論理ユーザーサーバの起動処理で使用する isAlive コマンドは、論理ユーザーサーバの起動確認ができる状態になるまで待つのではなく、確認に失敗したらすぐに 0 以外の終了コードで終了するように設定してください。

isAlive コマンドがすぐに終了しないと、論理ユーザーサーバが起動処理中にハングアップしてしまった場合に、論理ユーザーサーバの起動監視時間オーバー検知時に論理ユーザーサーバの自動停止処理が実行されないことがあります。

また、isAlive コマンドと getProcessID コマンドは、マシン負荷の高い状態でもすぐに応答が返るように、できるだけ単純な確認方法で実装してください。



# 11 仮想化システムで使用するファイル

この章では、仮想化システムで使用するファイルの形式、格納先、機能、指定できるキーなどについて説明します。

## 11.1 仮想化システムで使用するファイルの一覧

仮想化システムで使用するファイルの一覧を次の表に示します。

表 11-1 仮想化システムで使用するファイルの一覧

ファイル名	分類	概要	参照先
<LB 接続情報の識別名 >.properties	仮想サーバマネージャ側の 負荷分散機接続設定プロパ ティファイル	仮想サーバマネージャに、負荷分散機へのア クセスに必要な接続情報を設定します。	11.2
rasetup.cfg	rasetup コマンド用設定 ファイル	rasetup コマンドの実行に関する設定をしま す。	11.3
sinaviagent.cfg	サーバ通信エージェント用 オプション定義ファイル	サーバ通信エージェント、およびサーバ通信 エージェントによって起動されるコマンドや プロセスのログファイルの情報を設定しま す。	11.4
sinaviagent.properties	サーバ通信エージェント用 プロパティファイル	サーバ通信エージェントへの接続情報を設定 します。	11.5
tier.properties	ティア別プロパティファイ ル	使用する負荷分散機の接続情報の種類や、 VirtualServer の情報など、管理ユニットに 関する情報をティアごとに設定します。	11.6
tierlb.properties	ティア側の負荷分散機接続 設定プロパティファイル	ティアに、負荷分散機へのアクセスに必要な 接続情報を設定します。	11.7
version.properties	インタフェースバージョン 定義ファイル	定義ディレクトリに登録するファイル群の フォーマットのバージョンを管理するための 情報を設定します。	11.8
vmi.properties	仮想サーバマネージャプロ パティファイル	仮想サーバマネージャの処理データ格納ディ レクトリや、サーバ通信エージェントのタイ ムアウトなどを設定します。	11.9
vmclient.properties	仮想サーバマネージャのク ライアント共通設定プロパ ティファイル	仮想化システムで使用するコマンドの、共通 引数のデフォルト値を設定します。 すべてのクライアントに、共通のデフォルト 値を設定したい場合に使用します。	11.10
.vmirc	仮想サーバマネージャのク ライアント設定プロパティ ファイル	仮想化システムで使用するコマンドの、共通 引数のデフォルト値を設定します。 クライアントごとに、異なるデフォルト値を 設定したい場合に使用します。	11.11
vmsetup.properties	管理者設定用プロパティ ファイル	Component Container 管理者のユーザと グループ、および Management Server 管理 者のユーザとグループを設定します。	11.12
<任意の名称>	仮想サーバグループ情報 ファイル	管理ユニットに仮想サーバを登録するための 情報（ティア、仮想サーバグループおよび仮 想サーバの情報）を設定します。	11.13

## 11.2 <LB 接続情報の識別名>.properties (仮想サーバマネージャ側の負荷分散機接続設定プロパティファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%vmi%config%lb%`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/vmi/config/lb/`

### (3) 機能

仮想サーバマネージャに、負荷分散機へのアクセスに必要な接続情報を設定します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーを次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。API を使用した直接接続を使用する負荷分散機で指定できるキーについては、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 セキュリティ管理機能編」の「18.3 <LB 接続情報の識別名>.properties (仮想サーバマネージャ側の負荷分散機接続設定プロパティファイル)」を参照してください。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
lb.type	負荷分散機の種類を指定します。	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• BIG-IPv9</li> <li>• BIG-IPv10.1</li> <li>• BIG-IPv10.2</li> <li>• BIG-IPv11</li> <li>• ACOS</li> </ul>	なし	08-53
lb.host	接続する負荷分散機の管理用 IP アドレスを指定します。	IPv4 ドット記法	なし	08-53
lb.protocol	負荷分散機への接続方式を指定します。 telnet : telnet プロトコルを使用して接続します。 ssh : ssh プロトコルを使用して接続します。	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• telnet</li> <li>• ssh</li> </ul>	なし	08-53

11 仮想化システムで使用するファイル

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
lb.port	負荷分散機で使用するポート番号を指定します。	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ssh 1～65535</li> <li>• telnet 1～65535</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ssh : 22</li> <li>• telnet : 23</li> </ul>	08-53
lb.user	負荷分散機に接続するときのユーザ名を指定します。	任意の文字列を指定します。	なし	08-53
lb.password	負荷分散機に接続するときのユーザのパスワードを指定します。	任意の文字列を指定します。	空文字	08-53
lb.timeout	負荷分散機へのログイン処理時、またはコマンド送信時のタイムアウト時間 (単位: 秒) を指定します。  このキーで設定した時間内に、負荷分散機へのログイン処理、または負荷分散機に対して発行した CLI コマンドが完了しない場合は、vmiunit コマンドがタイムアウトエラーで異常終了します。	1～2147483	10	08-53
lb.ACOS.privilegedexec.password	ACOS 上に設定した Privileged EXEC レベルに必要なパスワードを指定します。  このキーの指定は、負荷分散機の種類が ACOS の場合だけ有効になります。	任意の文字列を指定します。	なし	08-53



## 11.3 rasetup.cfg (rasetup コマンド用設定ファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称>=<値>

#### 指定方法

- 行頭に「#」を記述した場合、その行はコメントと見なされ、無視されます。
- 値を指定しない場合、その行は無視されます。
- 行頭および行末の空白文字や空行は無視されます。
- キーと値の間のセパレータには「=」を使用します。「=」前後の空白は無視されます。
- 改行までが値と見なされます。
- 同じキーを複数指定した場合は、最後のキーの値を有効とします。
- 1行は64KB未満とします。
- ISO 8859-1の範囲の文字だけが使用できます。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%setup%config%
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/manager/setup/config/

### (3) 機能

rasetup コマンド実行時のログファイルの出力先、最大ファイルサイズ、最大ファイル面数などを指定します。rasetup コマンドについては、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス コマンド編」の「rasetup (仮想サーバへのセットアップ・アンセットアップ)」を参照してください。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーを次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
setup.log.dir	ログファイルの出力先ディレクトリを指定します。ファイルセパレータには「/」を使用してください。 Linux の場合、指定した出力先ディレクトリの上位のディレクトリが存在している必要があります。	ディレクトリ名 (絶対パス)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合                &lt;Application Server                のインストール                ディレクトリ&gt;                %manager                %setup                %log</li> </ul>	09-00

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
setup.log.dir	ログファイルの出力先ディレクトリを指定します。ファイルセパレータには「/」を使用してください。 Linux の場合、指定した出力先ディレクトリの上位のディレクトリが存在している必要があります。	ディレクトリ名（絶対パス）	<ul style="list-style-type: none"> <li>Linux の場合</li> </ul> /opt/ Cosminexus/ manager/ setup/log	09-00
setup.log.fileenum	ログファイル面数を指定します。範囲外の値を指定した場合は、デフォルト値が仮定されます。 sinaviagent.log.style キーでシフトモードを設定した場合は、バックアップファイルの面数になります。	1～16 の整数で指定します。	4	09-00
setup.log.filesize	ログファイル一つ当たりの上限サイズ（単位：バイト）を指定します。範囲外の値を指定した場合は、デフォルト値が仮定されます。	4096～2147483647 の数値で指定します。	262144	09-00
setup.log.time	ログファイルをローテーションする時刻を 000000～235959 の HHMMSS 形式で指定します。ただし、このプロパティで設定した時刻に達する前に、ログファイルのサイズが上限に達した場合、その時点でログファイルをローテーションします。 指定が無い場合は、ログサイズだけでローションします。	000000～235959 の HHMMSS 形式で指定します。	なし	09-00
setup.log.style	ログファイルのローテーション方式を指定します。 SHIFT： シフトモードでローテーションする場合に指定します。 WRAP を指定した場合： ラップアラウンドモードでローテーションする場合に指定します。	次のどちらかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>SHIFT</li> <li>WRAP</li> </ul>	WRAP	09-00
setup.maintenance.log.fileenum	保守ログのファイル面数を指定します。範囲外の値を指定した場合は、デフォルト値が仮定されます。	1～16 の整数で指定します。	4	09-00
setup.maintenance.log.filesize	保守ログのファイル一つ当たりの上限サイズ（単位：バイト）を指定します。範囲外の値を指定した場合は、デフォルト値が仮定されます。	4096～2147483647 の整数で指定します。	16777216	09-00

## 11.4 sinaviagent.cfg (サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称>=<値>

#### 指定方法

- 行頭に「#」を記述した場合、その行はコメントと見なされ、無視されます。
- 値を指定しない場合、その行は無視されます。
- キーと値の間のセパレータには「=」を使用します。「=」前後の空白は無視されます。
- 改行までが値と見なされます。
- 1行は64KB未満とします。
- ISO 8859-1の範囲の文字だけが使用できます。

### (2) ファイルの格納先

- Windowsの場合  
 <Application Serverのインストールディレクトリ>%sinagent%config%
- UNIXの場合  
 /opt/Cosminexus/sinagent/config/

### (3) 機能

サーバ通信エージェント、およびサーバ通信エージェントによって起動されるコマンドやプロセスのログファイルの情報を設定します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーを次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
sinaviagent.log.dir* <sup>1</sup>	サーバ通信エージェントのログ出力ディレクトリを指定します。 ファイルセパレータには「/」を使用してください。 指定したログ出力ディレクトリが不正な場合は、サーバ通信エージェントが起動されません。	ディレクトリ名 (絶対パス)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windowsの場合                &lt;Application Serverのインストールディレクトリ&gt;%sinagent%log</li> <li>• UNIXの場合                /opt/Cosminexus</li> </ul>	09-00

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
sinaviagent.log.dir <sup>*1</sup>	サーバ通信エージェントのログ出力ディレクトリを指定します。 ファイルセパレータには「/」を使用してください。 指定したログ出力ディレクトリが不正な場合は、サーバ通信エージェントが起動されません。	ディレクトリ名（絶対パス）	us/ sinagent/ log	09-00
sinaviagent.spool.dir <sup>*1</sup>	サーバ通信エージェントの処理データを格納するディレクトリを指定します。 ファイルセパレータには「/」を使用してください。 指定したログ出力ディレクトリが不正な場合は、サーバ通信エージェントが起動されません。	ディレクトリ名（絶対パス）	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt; ¥sinagent ¥spool</li> <li>UNIX の場合 /opt/ Cosminexus/ sinagent/ spool</li> </ul>	09-00
sinaviagent.work.dir <sup>*2</sup>	サーバ通信エージェントによって起動されるコマンド用の作業ディレクトリを指定します。 ファイルセパレータには「/」を使用してください。 指定したログ出力ディレクトリが不正な場合は、サーバ通信エージェントが起動されません。	ディレクトリ名（絶対パス）	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt; ¥sinagent ¥work</li> <li>UNIX の場合 /opt/ Cosminexus/ sinagent/ work</li> </ul>	09-00
sinaviagent.log.filenum	サーバ通信エージェント用ログのログファイル面数を指定します。 sinaviagent.log.style キーでシフトモードを設定した場合は、バックアップファイルの面数になります。	1～16の整数で指定します。	4	09-00
sinaviagent.log.filesize	サーバ通信エージェント用ログのログファイル一つ当たりの上限サイズ（単位：バイト）を指定します。	65536～2147483647の数値で指定します。	524288	09-00

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
sinaviagent.log.level	<p>サーバ通信エージェント用ログの出力レベルを指定します。指定したレベル以下の情報がログに出力されます。</p> <p>-1： サーバ通信エージェント用ログを出力しない場合に指定します。</p> <p>0： 通常運用でサーバ通信エージェント用ログを出力する場合に指定します。</p> <p>10： 通常運用に近い形態での再現待ちのサーバ通信エージェント用ログを出力する場合に指定します。</p> <p>20： システム環境構築時やテストフェーズでの、デバッグレベルの情報の取得する場合に指定します。</p> <p>30： 原因究明困難な障害発生したときの、より詳細な障害情報の取得する場合に指定します。</p>	-1～1000の 数値で指定 します。	0	09-00
sinaviagent.log.time	<p>サーバ通信エージェント用ログのログファイルをローテーションする時刻をHHMMSS形式で指定します。ただし、このプロパティで設定した時刻に達する前に、ログファイルのサイズが上限に達した場合、その時点でログファイルをローテーションします。</p> <p>指定が無い場合は、ログサイズだけでローションします。</p>	000000～ 235959の HHMMSS形 式で指定し ます。	なし	09-00
sinaviagent.log.style	<p>サーバ通信エージェント用ログのログファイルのローテーション方式を指定します。</p> <p>SHIFT： シフトモードでローテーションする場合に指定します。</p> <p>WRAP： ラップアラウンドモードでローテーションする場合に指定します。</p>	次のどちらか を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• SHIFT</li> <li>• WRAP</li> </ul>	WRAP	09-00
sinaviagent.service.log.filenum	Windowsの場合に、サーバ通信エージェントサービス用ログのログファイル面数を指定します。	1～16の整数 で指定しま す。	4	09-00
sinaviagent.service.log.filesize	Windowsの場合に、サーバ通信エージェントサービス用ログのログファイル一つ当たりの上限サイズ（単位：バイト）を指定します。	65536～ 2147483647 の数値で指 定しま す。	65536	09-00
sinaviagent.service.log.level	Windowsの場合に、サーバ通信エージェントサービス用ログのログ出力レベルを指定しま	-1～1000の 数値で指 定しま す。	0	09-00

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
sinaviagent.service.log.level	<p>す。指定したレベル以下の情報がログに出力されます。</p> <p>-1 : サーバ通信エージェントサービス用ログを出力しない場合に指定します。</p> <p>0 : 通常運用でサーバ通信エージェントサービス用ログを出力する場合に指定します。</p> <p>10 : システム環境構築時やテストフェーズでの、デバッグレベルの情報の取得する場合に指定します。</p> <p>20 : システム環境構築時やテストフェーズでの、デバッグレベルの情報の取得する場合に指定します。</p> <p>30 : 原因究明困難な障害発生したときの、より詳細な障害情報の取得する場合に指定します。</p>	-1～1000の 数値で指定 します。	0	09-00
sinaviagent.snactl.log.file enum	snactl コマンド用ログのログファイル面数を指定します。	1～16の整数 で指定します。	4	09-00
sinaviagent.snactl.log.file esize	snactl コマンド用ログのログファイル一つ当たりの上限サイズ（単位：バイト）を指定します。	65536～ 2147483647 の数値で指定 します。	65536	09-00
sinaviagent.snactl.log.level	<p>snactl コマンド用ログの出力レベルを指定します。指定したレベル以下の情報がログに出力されます。</p> <p>-1 : snactl コマンド用ログを出力しない場合に指定します。</p> <p>0 : 通常運用で snactl コマンド用ログを出力する場合に指定します。</p> <p>10 : 通常運用に近い形態での再現待ちの snactl コマンド用ログを出力する場合に指定します。</p> <p>20 : システム環境構築時やテストフェーズでの、デバッグレベルの情報の取得する場合に指定します。</p> <p>30 : 原因究明困難な障害発生したときの、より詳細な障害情報の取得する場合に指定します。</p>	-1～1000の 数値で指定 します。	0	09-00

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
sinaviagent.maintenance.log.fileenum	サーバ通信エージェント用保守ログのファイル面数を指定します。	1～16の整数で指定します。	4	09-00
sinaviagent.maintenance.log.filesize	サーバ通信エージェント用保守ログのファイル一つ当たりの上限サイズ（単位：バイト）を指定します。	65536～2147483647の数値で指定します。	65536	09-00
sinaviagent.service.maintenance.log.fileenum	Windowsの場合に、サーバ通信エージェントサービス用保守ログのファイル面数を指定します。	1～16の整数で指定します。	4	09-00
sinaviagent.service.maintenance.log.filesize	Windowsの場合に、サーバ通信エージェントサービス用保守ログのファイル一つ当たりの上限サイズ（単位：バイト）を指定します。	65536～2147483647の数値で指定します。	65536	09-00
sinaviagent.snactl.maintenance.log.fileenum	snactl コマンド用保守ログのファイル面数を指定します。	1～16の整数で指定します。	4	09-00
sinaviagent.snactl.maintenance.log.filesize	snactl コマンド用保守ログのファイル一つ当たりの上限サイズ（単位：バイト）を指定します。	65536～2147483647の数値で指定します。	65536	09-00
sinaviagent.process.consolelog.enabled	サーバ通信エージェントが起動したプロセスのコンソール出力情報を取得するかどうかを設定します。 true : コンソール出力情報を取得する場合に指定します。 false : コンソール出力情報を取得しない場合に指定します。	次のどちらかを指定します。 • true • false	true	09-00
sinaviagent.process.consolelog.fileenum	サーバ通信エージェントが起動したプロセスのコンソール出力情報を出力するログファイル面数を指定します。 sinaviagent.process.consolelog.style キーでシフトモードを指定した場合は、バックアップファイルの面数になります。	1～16の整数で指定します。	4	09-00
sinaviagent.process.consolelog.filesize	サーバ通信エージェントが起動したプロセスのコンソール出力情報を出力するログファイル一つ当たりの上限サイズ（単位：バイト）を指定します。	65536～2147483647の数値で指定します。	65536	09-00
sinaviagent.process.consolelog.time	サーバ通信エージェントが起動したプロセスのコンソール出力情報を出力するログファイルをローテーションする時刻を指定します。 指定が無い場合は、ログサイズによるローションをします	000000～235959のHHMMSS形式で指定します。	なし	09-00

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
sinaviagent.process.consolelog.style	<p>サーバ通信エージェントが起動したプロセスのコンソール出力情報を出力するログファイルのローテーション方式を指定します。</p> <p>SHIFT： シフトモードでローテーションする場合に指定します。</p> <p>WRAP を指定した場合： ラップアラウンドモードでローテーションする場合に指定します。</p>	<p>次のどちらかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• SHIFT</li> <li>• WRAP</li> </ul>	WRAP	09-00

注※1 キーの変更はサーバ通信エージェントが停止しているときに実行してください。

注※2 キーの変更は、環境の構築・変更・削除、または構築対象サーバ情報の取得などを実行していないとき、かつ、サーバ通信エージェントが停止しているときに実行してください。また、このキーの指定を変更した場合で、かつ、変更前のコマンド用作業ディレクトリの下にディレクトリやファイルがあるときは、サーバ通信エージェントを起動する前に、変更前のコマンド用作業ディレクトリの下にあるディレクトリやファイルを、そのままの形式で、変更後のコマンド用作業ディレクトリに移動した後、サーバ通信エージェントを起動してください。



## 11.5 sinaviagent.properties (サーバ通信エージェント用プロパティファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%sinagent%config%`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/sinagent/config/`

### (3) 機能

サーバ通信エージェントへの接続情報を設定します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーを次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値または動作です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
sinaviagent.port	サーバ通信エージェントで使用するポート番号を指定します。	1~65535	20580	08-00
sinaviagent.bind_host	サーバ通信エージェントで使用する IP アドレス、または解決できるローカルホスト名称を指定します※1。 値を指定しなかった場合、ローカルのすべての IP アドレスに対する接続が受け付けられます。IP アドレスはメタキャラクタを用いた正規表現で指定できます。IP アドレスが正規表現で指定された場合、ローカルの利用可能な IP アドレスのうちマッチする IP アドレスを採用します※2。 不正な値を指定した場合は、サーバ通信エージェントはエラー終了します。	ホスト名または IPv4 ドット記法	なし	08-00
sinaviagent.permitted_hosts	サーバ通信エージェントへのアクセスを許可するホスト名または IP アドレスを指定します。複数のアドレスを指定する場合はコンマ (,) で空白を入れずに区切ります。 IP アドレスはメタキャラクタを用いた正規表現で指定できます。IP アドレスを正規表現で指定した場合、IP アドレスのうちマッチする IP アドレスが使用されます。複数の IP アドレスがマッチした場合は、マッチしたすべての IP アドレスが許可されます。	ホスト名または IPv4 ドット記法	なし	08-00

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
sinaviagent.permitted.hosts	なお、IP アドレスを正規表現で指定する場合は、コンマ (,) で複数の値を指定することはできません。 値を指定しなかった場合、サーバ通信エージェントはエラー終了します。	ホスト名または IPv4 ドット記法	なし	08-00

注※1 複数の物理ネットワークインタフェースを持つホスト、または一つの物理ネットワークインタフェースに対して複数の論理 IP アドレスを割り当てているホストでサーバ通信エージェントを利用するとき、特定の物理ネットワークインタフェースに対する接続だけを受け付けるよう制限したい場合に、接続を受け付ける IP アドレスまたはそのホスト名を指定します。

注※2 サーバ通信エージェントとの通信に使用される IP アドレスのサブネットが一つに決められている場合、指定する IP アドレスを "192.168.0.1-192.168.0.255" のように記述しておけば、前方が "192.168.0." である IP アドレス ("192.168.0.32" や "192.168.0.128" など) にマッチするため、設定ファイルを修正しないで、すべてのホストに配布して利用できます。正規表現についての詳細は、Java の `java.util.regex.Pattern` クラスの仕様を確認してください。ただし、"`168`" は 1 文字の "`8`" に置き換えられてしまうため、"`168`" を指定する場合は 2 文字連続して指定してください。指定した正規表現にマッチする IP アドレスが複数個検出された場合は、最も小さい値の IP アドレスを採用します。例えば、"192.168.0.32" と "192.168.0.128" が検出された場合は "192.168.0.32" を採用します。この場合、採用された IP アドレスが意図する IP アドレスになるとは限らないため、"192.168.0.1-255" のように必ず 1 個だけマッチする正規表現を記述してください。

## 11.6 tier.properties (ティア別プロパティファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<定義ディレクトリ>%<ティア別定義ディレクトリ>%vmi%`
- UNIX の場合  
`<定義ディレクトリ>/<ティア別定義ディレクトリ>/vmi/`

次のテンプレートファイルをコピーして利用してください。

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%vmi%templates%tier.properties`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/vmi/templates/tier.properties`

### (3) 機能

使用する負荷分散機の接続情報の種類や、VirtualServer の情報、仮想サーバの起動順序や OS 種別など、管理ユニットに関する情報をティアごとに設定します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーを次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
lb.use	<p>使用する負荷分散機の接続情報を指定します。</p> <p>&lt;LB 接続情報の識別名&gt;：            仮想サーバマネージャ側の接続情報 (&lt;LB 接続情報の識別名&gt;.properties) を使用する場合に指定します。</p> <p>:unit:：            管理ユニットに登録するティア別定義ディレクトリにある接続情報 (tierlb.properties) を使用する場合に指定します。</p> <p>値を設定していない、またはキーを指定していない場合、負荷分散機連携機能は有効になりません。</p>	<p>指定できる値を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• &lt;LB 接続情報の識別名&gt;                (先頭 1 文字は英字から始まる、英数字、アンダースコア「_」、ピリオド「.」、またはハイフン「-」で指定した 31 文字以内の文字列)</li> </ul>	空文字	08-53

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
lb.use	<p>使用する負荷分散機の接続情報を指定します。</p> <p>&lt;LB 接続情報の識別名&gt; :</p> <p>仮想サーバマネージャ側の接続情報 (&lt;LB 接続情報の識別名&gt;.properties) を使用する場合に指定します。</p> <p>:unit: :</p> <p>管理ユニットに登録するティア別定義ディレクトリにある接続情報 (tierlb.properties) を使用する場合に指定します。</p> <p>値を設定していない、またはキーを指定していない場合、負荷分散機連携機能は有効になりません。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• :unit:</li> </ul>	空文字	08-53
lb.virtualserver.name	<p>VirtualServer 名を指定します。</p> <p>負荷分散機連携機能を使用する場合に指定してください。</p>	<p>先頭 1 文字は英字から始まる、英数字、アンダースコア「_」、ピリオド「.」、またはハイフン「-」で指定した 31 文字以内の文字列</p>	管理ユニット名	08-53
lb.virtualserver.host	<p>VirtualServer のホスト名、または IP アドレスを指定します。</p> <p>負荷分散機連携機能を使用する場合に指定してください。</p>	<p>ホスト名または IPv4 ドット記法</p>	なし	08-53
lb.virtualserver.port	<p>VirtualServer のポート番号を指定します。</p> <p>負荷分散機連携機能を使用する場合に指定してください。</p>	1~65535	なし	08-53
lb.persistence.method	<p>cookie パーシステンスを維持する場合、「cookie-insert」を指定します。</p> <p>次の場合は、パーシステンスを維持しません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 値を設定していない。</li> <li>• キーを指定していない。</li> </ul>	cookie-insert	空文字	08-53
lb.persistence.cookie-insert.cookie-name	<p>負荷分散機が設定する cookie の名称を指定します。</p> <p>このキーの指定は、「lb.persistence.method=cookie-insert」が指定されている場合に有効になります。</p> <p>また、&lt; LB 接続情報の識別名&gt;.properties または tierlb.properties で、次に示す値が両方とも指定されている場合、このキーの指定は無効になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• lb.type=ACOS</li> <li>• lb.protocol=API</li> </ul>	<p>先頭 1 文字は英字から始まる、英数字、アンダースコア「_」で指定した 63 文字以内の文字列</p>	VML_COOKIE_NAME	08-53

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
tier.startup.no	<p>複数のティアを管理する管理ユニットを一括起動、または一括停止する場合に、ティアに割り当てられている仮想サーバを起動または停止する順序を指定します。</p> <p>一括起動時には番号の小さい順に、一括停止時には番号の大きい順に処理が実行されます。なお、同じ番号の場合は同時に処理が実行されません。</p> <p>管理ユニットを一括起動または一括停止しない場合は、-1を指定してください。</p>	-1～999	<ul style="list-style-type: none"> <li>combined-tier の場合：70</li> <li>ctm-tier の場合：40</li> <li>http-tier の場合：80</li> <li>j2ee-tier の場合：60</li> </ul>	09-50
tier.target.os	<p>ティアに割り当てられている仮想サーバの OS 種別（ゲスト OS）を指定します。</p> <p>windows：</p> <p>Windows の OS で仮想サーバを構築する場合に指定します。</p> <p>linux：</p> <p>Linux の OS で仮想サーバを構築場合に指定します。</p> <p>このキーで指定した OS 種別と、vmiunit コマンドのサブコマンド update を実行する仮想サーバの OS 種別が異なる場合、コマンドはエラーとなり、仮想サーバに定義情報は反映されません。</p>	<p>指定できる値を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>windows</li> <li>linux</li> </ul>	なし	09-00

## 11.7 tierlb.properties (ティア側の負荷分散機接続設定プロパティファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<定義ディレクトリ>%<ティア別定義ディレクトリ>%vmi%`
- UNIX の場合  
`<定義ディレクトリ>/<ティア別定義ディレクトリ>/vmi/`

次のテンプレートファイルをコピーして利用してください。

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%vmi%templates%tierlb.properties`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/vmi/templates/tierlb.properties`

### (3) 機能

負荷分散機へのアクセスに必要な接続情報をティアに設定します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーを次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値または動作です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。APIを使用した直接接続を使用する負荷分散機で指定できるキーについては、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 セキュリティ管理機能編」の「18.4 tierlb.properties (ティア側の負荷分散機接続設定プロパティファイル)」を参照してください。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
lb.type	負荷分散機の種類を指定します。	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• BIG-IPv9</li> <li>• BIG-IPv10.1</li> <li>• BIG-IPv10.2</li> <li>• BIG-IPv11</li> <li>• ACOS</li> </ul>	なし	08-53
lb.host	接続する負荷分散機の管理用 IP アドレスを指定します。	IPv4 ドット記法	なし	08-53

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
lb.protocol	負荷分散機への接続方式を指定します。 telnet : telnet プロトコルを使用して接続します。 ssh : ssh プロトコルを使用して接続します。	指定できる値を次に示します。 • telnet • ssh	なし	08-53
lb.port	負荷分散機で使用するポート番号を指定します。	指定できる値を次に示します。 • ssh 1~65535 • telnet 1~65535	• ssh : 22 • telnet : 23	08-53
lb.user	負荷分散機に接続するときのユーザ名を指定します。	任意の文字列を指定します。	なし	08-53
lb.password	負荷分散機に接続するときのユーザのパスワードを指定します。	任意の文字列を指定します。	空文字	08-53
lb.timeout	負荷分散機へのログイン処理時、またはコマンド送信時のタイムアウト時間（単位：秒）を指定します。 このキーで設定した時間内に、負荷分散機へのログイン処理、または負荷分散機に対して発行した CLI コマンドが完了しない場合は、vmiunit コマンドがタイムアウトエラーで異常終了します。	1~2147483	10	08-53
lb.ACOS.privilegedexec.password	ACOS 上に設定した Privileged EXEC レベルに必要なパスワードを指定します。 このキーの指定は、負荷分散機の種類が ACOS の場合だけ有効になります。	任意の文字列を指定します。	なし	08-53

## 11.8 version.properties (インタフェースバージョン定義ファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称>=<値>

#### 指定方法

- 行頭に「#」を記述した場合、その行はコメントと見なされ、無視されます。
- 値を指定しない場合、その行は無視されます。
- 行頭および行末の空白文字や空行は無視されます。
- キーと値の間のセパレータには「=」を使用します。「=」前後の空白は無視されます。
- 改行までが値と見なされます。
- 同じキーを複数指定した場合は、最後のキーの値を有効とします。
- ISO 8859-1 の範囲の文字だけが使用できます。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <定義ディレクトリ>¥<ティア別定義ディレクトリ>¥config¥Cosminexus
- UNIX の場合  
 <定義ディレクトリ>/<ティア別定義ディレクトリ>/config/Cosminexus

次のテンプレートファイルをコピーして利用してください。

- Windows の場合  
 <Application Serverのインストールディレクトリ>¥manager¥vmi¥templates¥version.properties
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/manager/vmi/templates/version.properties

### (3) 機能

定義ディレクトリに登録するファイル群のフォーマットのバージョンを管理するための情報を設定します。意図しないバージョンのアプリケーションサーバが、仮想サーバ上に構築されることを防ぎます。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーを次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
vm.interface.version	定義ディレクトリに配置する定義ファイル群の構成や、定義ファイル内の情報の形式に対応するバージョン情報です。	090000 の固定値を指定します。	なし	09-00



キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
vm.target.edition	仮想サーバに構築するアプリケーションサーバのエディションです。値は「standard」で固定です。	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"><li>• standard</li></ul>	なし	09-00

## 11.9 vmi.properties (仮想サーバマネージャプロパティファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%vmi%config%`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/vmi/config/`

次のテンプレートファイルをコピーして利用してください。

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%vmi%templates%vmi.properties`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/vmi/templates/vmi.properties`

### (3) 機能

仮想サーバマネージャの処理データ格納ディレクトリや、サーバ通信エージェントのタイムアウトなどを設定します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーを次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
vmi.spool.dir	仮想サーバマネージャの処理データ格納ディレクトリを絶対パスで指定します。 ファイルセパレータにはスラッシュ (/) を使用します。 環境を構築済みの状態でこのキーを変更した場合は、仮想サーバマネージャ再起動時に、管理ユニットの情報 (定義ディレクトリ、仮想サーバの情報も含まれます)、およびアカウントの情報などの仮想サーバに登録した情報がすべて削除されます。 このキーを変更する際に既存の情報を継続して使用する場合は、変更前のディレクトリパス以下に存在するすべてのディレクトリおよびファイルを変更先のディレクトリパスの下にコピーしてください。	ディレクトリ名 (絶対パス)	<Application Server のインストールディレクトリ>/manager/vmi/spool	08-53
vmi.serverconnectionagent.connect.timeout	仮想サーバマネージャと仮想サーバ上のサーバ通信エージェントとの接続で、タイムアウトが	0~3600	2	08-53

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
vmi.serverconnectionagent.connect.timeout	発生するまでの時間（単位：秒）を指定します。0を指定するとタイムアウトしません。	0～3600	2	08-53
vmi.serverconnectionagent.socket.timeout	仮想サーバマネージャと仮想サーバ上のサーバ通信エージェントとの間の情報の送受信で、タイムアウトが発生するまでの時間（単位：秒）を指定します。0を指定するとタイムアウトしません。	0～3600	2	08-53
vmi.serverconnectionagent.exec.timeout	仮想サーバ上のサーバ通信エージェントでコマンドを実行する場合に、コマンドの実行で、タイムアウトが発生するまでの時間（単位：秒）を指定します。0を指定するとタイムアウトしません。	0～3600	1800	08-53
vmi.jp1.base.auth.enabled	<p>JP1/Baseと連携してユーザのアカウントを管理するための機能（JP1 ユーザ認証連携機能）を有効にするかどうかを指定します。</p> <p>true :</p> <p>JP1 ユーザ認証連携機能を有効にします。仮想サーバマネージャ管理者アカウント、およびシステム構築者アカウントは、JP1/Base（認証サーバ）によって管理されます。</p> <p>false :</p> <p>JP1 ユーザ認証連携機能を無効にします。仮想サーバマネージャ管理者アカウント、およびシステム構築者アカウントは、仮想サーバマネージャによって管理されます。</p>	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• true</li> <li>• false</li> </ul>	false	08-70

## (5) 注意事項

仮想サーバマネージャを起動した状態でパラメタを変更した場合は、仮想サーバマネージャを再起動する必要があります。

## 11.10 vmiclient.properties (仮想サーバマネージャのクライアント共通設定プロパティファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%vmi%config%`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/vmi/config/`

次のテンプレートファイルをコピーして利用してください。

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%vmi%templates%vmiclient.properties`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/vmi/templates/vmiclient.properties`

### (3) 機能

仮想サーバマネージャで提供するコマンドの共通引数のデフォルト値を設定します。すべてのクライアントに、共通のデフォルト値を設定したい場合に使用します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーを次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
vmi.apply_user	このファイルを適用するクライアントの OS のユーザ ID を指定します。ユーザ ID はコマンド「,」で区切って指定します。 また、Windows のサービスから Smart Composer 機能のコマンドが呼び出される場合に、このプロパティファイルを適用するには、Windows XP のときは「SYSTEM」を、それ以外のときは「<ホスト名>\$」（<ホスト名>は、Management Server が稼働するホストのホスト名）を指定してください。	OS に登録されているユーザ名	なし	08-53
vmi.connect.m	共通引数の-m オプション省略時に仮定するホスト名とポート番号を指定します。 ポート番号は省略できます。	指定できる値を次に示します。 • ホスト名 [: ポート番号]	なし	08-53

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
vmi.connect.m	共通引数の-m オプション省略時に仮定するホスト名とポート番号を指定します。 ポート番号は省略できます。	<ul style="list-style-type: none"> <li>IPv4 ドット記法[:ポート番号]</li> </ul>	なし	08-53
vmi.connect.u	共通引数の-u オプション省略時に仮定するユーザ ID を指定します。	ユーザアカウントのユーザ ID	なし	08-53
vmi.connect.p	共通引数の-p オプション省略時に仮定するパスワードを指定します。	ユーザアカウントのパスワード	なし	08-53
vmi.connect.wait	共通引数の-wait オプション省略時に仮定する実行待ち時間（単位：秒）を指定します。	0～2147483647	なし	08-53

## 11.11 .vmirc (仮想サーバマネージャのクライアント設定プロパティファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

### (2) ファイルの格納先

コマンドを実行する OS ユーザのホームディレクトリに格納します。

次のテンプレートファイルをコピーして利用してください。

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%vmi%templates%.vmirc`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/vmi/templates/.vmirc`

### (3) 機能

仮想サーバマネージャで提供するコマンドの共通引数のデフォルト値を設定します。クライアントごとに、異なるデフォルト値を設定したい場合に使用します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーを次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
vmi.connect.m	共通引数の-m オプション省略時に仮定するホスト名とポート番号を指定します。 ポート番号は省略できます。	指定できる値を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名 [: ポート番号]</li> <li>• IPv4 ドット記法[: ポート番号]</li> </ul>	なし	08-53
vmi.connect.u	共通引数の-u オプション省略時に仮定するユーザ ID を指定します。	ユーザアカウントのユーザ ID	なし	08-53
vmi.connect.p	共通引数の-p オプション省略時に仮定するパスワードを指定します。	ユーザアカウントのパスワード	なし	08-53
vmi.connect.wait	共通引数の-wait オプション省略時に仮定する実行待ち時間 (単位: 秒) を指定します。	0~ 2147483647	なし	08-53

## 11.12 vmsetup.properties (管理者設定用プロパティファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称>=<値>

#### 指定方法

- 行頭に「#」を記述した場合、その行はコメントと見なされ、無視されます。
- 値を指定しない場合、その行は無視されます。
- 行頭および行末の空白文字や空行は無視されます。
- キーと値の間のセパレータには「=」を使用します。「=」前後の空白は無視されます。
- 改行までが値と見なされます。
- 同じキーを複数指定した場合は、最後のキーの値を有効とします。
- ISO 8859-1 の範囲の文字だけが使用できます。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <定義ディレクトリ>%<ティア別定義ディレクトリ>%config\Cosminexus
- UNIX の場合  
 <定義ディレクトリ>/<ティア別定義ディレクトリ>/config/Cosminexus

次のテンプレートファイルをコピーして利用してください。

- Windows の場合  
 <Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%vmi%templates%vmsetup.properties
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/manager/vmi/templates/vmsetup.properties

### (3) 機能

Component Container 管理者のユーザとグループ、および Management Server 管理者のユーザ (Management Server の管理ユーザアカウント) とグループを設定します。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーを次に示します。なお「省略値」とは、キーの指定がない場合に仮定される値です。「VR」とは、キーが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
setup.mng.administrator.userid	Management Server の管理ユーザアカウントのユーザ ID を指定します。	半角英数字, 「!」, 「#」, 「\$」, 「&」, 「'」, 「(」, 「)」, 「*」, 「+」,	admin	09-00

キー名称	内容	指定可能値	省略値	VR
setup.mng.administrator.userid	Management Server の管理ユーザアカウントのユーザ ID を指定します。	[,], [-], [.] [/], [:], [;] [<], [=] [>], [?] [@], [ ], [ ] [_], [ ], [ { ] [   ], [ } ], [ ^ ]	admin	09-00
setup.mng.administrator.password	Management Server の管理ユーザアカウントのパスワードを指定します。	半角英数字, [!], [#], [\$], [&], ['], [( ], [ ) ], [*], [+], [,], [-], [.] [/], [:], [;] [<], [=], [>], [?], [@], [ ], [ ] [_], [ ], [ { ] [   ], [ } ], [ ^ ]	なし	09-00
setup.CC.user	Component Container 管理者として設定するユーザを設定します。	1 文字以上の文字列を指定します。	root	09-00
setup.CC.group	Component Container 管理者として設定するユーザが所属するグループを設定します。	1 文字以上の文字列を指定します。	Linux :root	09-00
setup.manager.group	Management Server 管理者として設定するユーザが所属するグループを設定します。	1 文字以上の文字列を指定します。	Linux :root	09-00



## 11.13 仮想サーバグループ情報ファイル

### (1) 形式

xml 形式です。

### (2) ファイルの格納先

任意の作業場所に格納してください。

次のテンプレートファイルをコピーして利用してください。

- Windows の場合  
`<Application Serverのインストールディレクトリ>%manager%vmi%templates%virtualserver-info.xml`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/manager/vmi/templates/virtualserver-info.xml`

### (3) 機能

管理ユニットに仮想サーバを格納する場合に使用する定義ファイルです。仮想サーバグループ情報ファイルには、仮想サーバグループの名称や、仮想サーバの IP アドレス、仮想サーバを割り当てるティアなどの情報を定義します。

### (4) ファイルの指定内容

仮想サーバグループ情報ファイルの指定内容の説明で使用する項目の意味を次に示します。

項目名	説明
タグ名	設定するタグを示します。
属性名	設定する属性を示します。
出現パターン	タグまたは属性が出現する回数を示します。
内容	タグまたは属性に定義する内容を示します。
指定可能値	タグまたは属性に指定できる値を示します。
省略値	タグまたは属性に指定する内容が省略されている場合に有効になる指定値を示します。デフォルト値がない場合は「なし」を示します。
VR	定義できるアプリケーションサーバのバージョンを示します。

仮想サーバグループ情報ファイルでは、XML 宣言と xmlns 属性を次のように設定します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<virtualserver-info xmlns="http://www.cosminexus.com/mngsvr/schema/VirtualServerInfo-1.0">
```

仮想サーバグループ情報ファイルの構成および指定内容を次の表に示します。

タグ名	属性名	出現パターン	内容	指定可能値	省略値	VR	
virtualserver-info	—	1 回	仮想サーバ情報を定義します。	—	なし	09-00	
L	group	—	1 回以上	仮想サーバグループを定義します。	—	なし	09-00
		name	1 回	仮想サーバグループの名称を指定します。	先頭 1 文字は英字から始まる、英数字、アンダースコア「_」またはハイフン「-」で指定した 31 文字以内の文字列	なし	09-00
L	virtualserver	—	1 回以上	仮想サーバグループに割り当てる仮想サーバを定義します。	—	なし	09-00
		tier	1 回	仮想サーバを割り当てるティア（ティア識別子）を指定します。 仮想サーバを登録する管理ユニットに取り込んだ、ティア別定義ディレクトリのディレクトリ名を指定します。	先頭 1 文字は英字から始まる、英数字、アンダースコア「_」またはハイフン「-」で指定した 31 文字以内の文字列	なし	09-00
		ip	1 回	仮想サーバ識別子を指定します。管理 LAN に接続されている NIC の IP アドレスを指定します。	IPv4 ドット記法	なし	09-00
		serviceip	0 または 1 回	仮想サーバの業務用 IP アドレスを指定します。業務 LAN に接続されている NIC の IP アドレスを指定します。 負荷分散機連携機能を有効にする場合で、業務 LAN と管理 LAN が分かれているときに指定してください。	IPv4 ドット記法	ip 属性に指定した IP アドレス	09-00
		port	0 または 1 回	仮想サーバのサーバ通信エージェントのポート番号を指定します。	1～65535 の数値で指定します。	20580	09-00

(凡例) —：該当なし

# 12 ログの運用で使用するファイル

この章では、ログの運用で使用するファイルの形式、格納先、使用できる変数などについて説明します。

## 12.1 ログの運用で使用するファイルの一覧

ログの運用で使用するファイルの一覧を、次の表に示します。

表 12-1 ログの運用で使用するファイルの一覧

ファイル名	分類	概要	参照先
(任意)	snapshot ログ収集対象定義ファイル	snapshot ログとして収集する、一次送付資料、二次送付資料、および定義送付資料の対象ファイルを定義します。	12.2

## 12.2 snapshot ログ収集対象定義ファイル

snapshot ログは、システム保守に必要な情報およびアプリケーション保守に必要な情報を収集します。

snapshot ログ収集対象定義ファイルでは、snapshot ログとして収集する、一次送付資料、二次送付資料、および定義送付資料の対象ファイルを設定します。このファイルを編集することで、snapshot ログ収集対象のパスを変更することができます。

### (1) 形式

次の形式で指定します。

- 収集対象のパスはフルパスで指定します。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- ファイルセパレータは「/」を使用します。
- ファイルセパレータで分類されたパス要素に対して、正規表現<sup>※</sup>が使用できます。
- 不正な正規表現<sup>※</sup>を含む場合、その指定は無視されます。
- 指定したパスにファイルが存在しない場合、その指定は無視されます。

注※

正規表現については、`java.util.regex.Pattern` の定義を参照してください。

### (2) 格納先およびファイル名

インストール時のデフォルト設定ファイルを編集する場合

次のファイルを編集してください。

- Windows の場合
  - <Application Server のインストールディレクトリ>%manager%config%snapshotlog.conf
  - <Application Server のインストールディレクトリ>%manager%config%snapshotlog.2.conf
  - <Application Server のインストールディレクトリ>%manager%config%snapshotlog.param.conf
- UNIX の場合
  - /opt/Cosminexus/manager/config/snapshotlog.conf
  - /opt/Cosminexus/manager/config/snapshotlog.2.conf
  - /opt/Cosminexus/manager/config/snapshotlog.param.conf

snapshotlog.conf には、一次送付資料として収集する対象を設定します。

snapshotlog.2.conf には、二次送付資料として収集する対象を設定します。

snapshotlog.param.conf には、定義送付資料として収集する対象を設定します。

snapshot ログの収集対象ファイルについては、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 保守／移行編」の「2.3.3 snapshot ログの収集」を参照してください。

任意のファイルを指定する場合

格納先およびファイル名は任意です。

次の場所にあるテンプレートをコピーして使用してください。

- Windows の場合
  - <Application Server のインストールディレクトリ>%manager%config%templates%

- UNIX の場合  
/opt/Cosminexus/manager/config/templates/

### (3) 使用できる変数

パスを指定する場合、次の変数が使用できます。

表 12-2 snapshot ログ収集対象定義ファイルで使用できる変数

変数	内容
<code>\${cosminexus.home}</code>	Application Server のインストールディレクトリ
<code>\${user.home}</code>	ユーザのホームディレクトリ
<code>\${hws.home}</code>	HTTP Server のインストールディレクトリ
<code>\${com.cosminexus.manager.log.dir}</code>	Manager のログ出力ディレクトリ
<code>&amp;{prfspool}</code>	論理サーバの環境設定で、パフォーマンストレーサの [設定] タブを選択し、[パフォーマンストレーサの設定] のスプールディレクトリで設定された値
<code>&amp;{ctmspool}</code>	論理サーバの環境設定で、CTM ドメインマネージャの [基本設定] タブを選択し、[CTM ドメインマネージャの基本設定] のスプールディレクトリで設定された値
<code>&amp;{ejb.public.directory}</code>	論理サーバの環境設定で、J2EE サーバの [コンテナ]-[J2EE] タブを選択し、[J2EE コンテナの設定] の作業ディレクトリの定義で設定された値
<code>&amp;{webserver.work.directory}</code>	論理サーバの環境設定で、J2EE サーバの [コンテナ]-[Web] タブを選択し、JSP 用一時ディレクトリで設定された値
<code>&amp;{ejb.server.log.directory}</code>	論理サーバの環境設定で、J2EE サーバの [サービス]-[ログ] タブを選択し、ログ出力ディレクトリで設定された値
<code>&amp;{webserver.logger.access_log.inprocess_http.filename}</code>	論理サーバの環境設定で、J2EE サーバの [サービス]-[トランザクション] タブを選択し、[アクセスログの設定] の出力ファイル名で設定された値
<code>&amp;{ejbserver.distributedtx.ots.status.directory1}</code>	論理サーバの環境設定で、J2EE サーバの [HTTP サーバ]-[ログ] タブを選択し、インプロセス OTS のステータスファイル格納先で設定された値
<code>&amp;{ejbserver.distributedtx.ots.status.directory2}</code>	論理サーバの環境設定で、J2EE サーバの [HTTP サーバ]-[ログ] タブを選択し、インプロセス OTS のステータスファイル格納先 (予備) で設定された値
<code>&amp;{core.dump.directory}</code>	論理サーバの環境設定で、Web サーバの [設定] タブを選択し、[Web サーバの基本的な設定] のコアダンプ出力先ディレクトリで設定された値
<code>&amp;{hws.logfile.dir}</code>	論理サーバの環境設定で、Web サーバの [設定] タブを選択し、[Web サーバの出力するログの設定] のログ出力先ディレクトリで設定された値

変数	内容
&{jdklogfiledir}	論理サーバの環境設定で、Webサーバの[リダイレクタ]タブを選択し、ログ出力先ディレクトリで設定された値
&{jdktracelogfiledir}	論理サーバの環境設定で、Webサーバの[リダイレクタ]タブを選択し、保守用のトレースログのログ出力先ディレクトリで設定された値
&{ctm.RegOption}	CTM レギュレータの設定ファイル
&{ctm.TSCGwOption}	OTM ゲートウェイの設定ファイル
\$(adminagent.prftrace_dir)	一時 PRF トレースファイルの出力先ディレクトリ

注

- \$はシステムプロパティ、&は Management Server の内部変数を表します。
- 値に"\$"を含む変数は使用できません。
- snapshot ログ収集コマンドを使って収集する場合は、&を使用した Management Server の内部変数は使用できません。ただし、「&{ejb.public.directory}」は snapshot ログ収集コマンドでも使用できます。

#### (4) 記述例

/home/logdir/message1.log を収集する場合

```
/home/logdir/message1¥*.log
```

/opt/Cosminexus/manager/log ディレクトリ直下のファイルをすべて収集する場合

```
${cosminexus.home}/manager/log/.+¥*
```

J2EE サーバの JavaVM のスレッドダンプを収集する場合（作業ディレクトリ=/home/workdir, J2EE サーバ名=Server1）

```
/home/workdir/ejb/Server1/javacore.+¥*.txt
```

注※

"¥"は"."（ピリオド）の打ち消し文字です。

"."（ピリオド）は、任意の文字を表します。

"+"は、1 回以上を表します。





# 13 監査ログの設定で使用するファイル

この章では、監査ログの設定で使用するファイルの形式、格納先、機能、指定できるキーなどについて説明します。

## 13.1 監査ログの設定で使用するファイルの一覧

---

監査ログの設定で使用するファイルの一覧を、次の表に示します。

表 13-1 監査ログの設定で使用するファイルの一覧

ファイル名	分類	概要	参照先
(任意)	監査ログ定義ファイル	監査ログに関する設定をします。	13.2

## 13.2 監査ログ定義ファイル

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

#### 指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。また、行頭や行末の空白は無視されません。
- 同じ<キー名称>を複数指定した場合、最後に指定した<キー名称>の<値>が有効になります。
- 値の後ろには、コメントなどの文字列は追加できません。追加した場合、不正な値と解釈されます。  
(誤りの例) <キー名称> = <値> #<コメント>
- 記載する文字は Java の仕様に従って、ISO 8859-1 文字エンコーディングを使用してください。
- <キー名称>や<値>には、「¥」を使用しないでください。また、<値>に指定するディレクトリの区切り文字は「/」を使用してください。

### (2) 機能

監査ログ定義ファイルでは、監査ログ出力時のログファイルの設定、監査ログの有効無効の設定、出力を抑制するメッセージの指定など監査ログに関する設定をします。

### (3) 格納先およびファイル名

#### インストール時のデフォルト設定ファイルを編集する場合

次のファイルを編集してください。

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>%common¥conf¥auditlog.properties
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/common/conf/auditlog.properties

#### 任意のファイルを指定する場合

格納先名は任意です。

環境変数 COSMINEXUS\_AUDITLOG\_CONF に、監査ログ定義ファイルをフルパスで指定してください。

例

```
COSMINEXUS_AUDITLOG_CONF=D:/auditlog/auditlog.properties
```

### (4) 設定できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次に示します。このキーに不正な値を指定した場合、動作は保証されません。

### 13 監査ログの設定で使用するファイル

キー名称	内容	デフォルト値
auditlog.enabled	監査ログを出力するかどうかを指定します。 true を指定した場合： 監査ログを出力します。 false を指定した場合： 監査ログを出力しません。	false
auditlog.user	監査ログファイルの所有者（ユーザ）を指定します。	<auditsetup コマンドを実行したユーザ>
auditlog.group	監査ログファイルの所有者（グループ）を指定します。	<auditsetup コマンドを実行したユーザのプライマリグループ>
auditlog.mode	監査ログファイルのアクセス権限を、777 までの 3 けたの数値で指定します*1。 UNIX の場合だけ指定します。	666
auditlog.filtered.message.list	出力抑止対象のメッセージ ID をコンマ (,) で区切って指定します。512 個まで指定できます。	なし
auditlog.filesize	監査ログファイルの 1 面当たりのファイルサイズ（単位：バイト）を、4096～33554432 で指定します。	1048576
auditlog.filenum	監査ログファイルの面数を、2～32 で指定します。	4
auditlog.directory	監査ログファイルの出力ディレクトリの絶対パスを指定します。	Windows の場合 <Application Server のインストールディレクトリ> %auditlog UNIX の場合 /opt/Cosminexus/ auditlog これらのディレクトリが存在しない場合は、新規に作成されま す*2。
auditlog.raslog.message.filesize	監査ログのメッセージログを出力するファイルの 1 面当たりのファイルサイズ（単位：バイト）を、4096～16777216 で指定します。	1048576
auditlog.raslog.message.filenum	監査ログのメッセージログを出力するファイルの面数を、2～64 で指定します。	4
auditlog.raslog.message.directory	監査ログのメッセージログを出力するファイルの出力ディレクトリを絶対パスで指定します。	監査ログファイルの出力ディレクトリ（auditlog.directory）の値
auditlog.raslog.exception.filesize	監査ログの例外情報を出力するファイルの 1 面当たりのファイルサイズ（単位：バイト）を、4096～16777216 で指定します。	1048576
auditlog.raslog.exception.filenum	監査ログの例外情報を出力するファイルの面数を、2～64 で指定します。	8

キー名称	内容	デフォルト値
auditlog.raslog.exception.directory	監査ログの例外情報を出力するファイルの出力ディレクトリを絶対パスで指定します。	監査ログファイルの出力ディレクトリ (auditlog.directory) の値

注※1 指定値は chmod コマンドで指定する数値モードに従います。ただし、実際に設定される値は、umask に影響されます。例えば、umask=0222 の場合、auditlog.mode に 777 を指定しても、755 が設定されます。

注※2 指定したディレクトリが存在しない場合、新規に作成されるディレクトリの所有者およびアクセス権は次のように設定されます。

- Windows の場合  
ディレクトリの所有者やアクセス権限には、上位ディレクトリの設定が引き継がれます。
- UNIX の場合  
ディレクトリの所有者は監査ログを出力したユーザとそのプライマリグループになります。アクセス権限に 777 が設定されます。

## (5) 監査ログのアクセス権限の設定

Windows と UNIX で、監査ログ定義ファイルの指定値と監査ログの所有者およびアクセス権限の対応が異なります。

- Windows の場合  
監査ログ定義ファイルの指定値と監査ログファイルの所有者およびアクセス権限の対応を、次の表に示します。

表 13-2 監査ログ定義ファイルの指定値と監査ログファイルの所有者およびアクセス権限の対応 (Windows の場合)

監査ログ定義ファイル		監査ログファイル	
auditlog.user	auditlog.group	所有者	アクセス権限*
—	—	上位ディレクトリの設定を引き継ぐ	Everyone:RW Administrators:F SYSTEM:F
<ユーザ名>	—		<ユーザ名>:RW Administrators:F SYSTEM:F
—	<グループ名>		<グループ名>:RW Administrators:F SYSTEM:F
<ユーザ名>	<グループ名>		<ユーザ名>:RW <グループ名>:RW Administrators:F SYSTEM:F

(凡例) — : 指定しない。

注※

Windows のアクセス権限を、次の形式で記述します。

<ユーザ名またはグループ名>:<許可する権限>

<許可する権限>は次のとおりです。

F：フルコントロール

RW：読み取りと書き込みを許可

• UNIX の場合

監査ログ定義ファイルの指定値と監査ログファイルの所有者およびアクセス権限の対応を、次の表に示します。

表 13-3 監査ログ定義ファイルの指定値と監査ログファイルの所有者およびアクセス権限の対応 (UNIX の場合)

監査ログ定義ファイル			監査ログファイル		
auditlog.user	auditlog.group	auditlog.mode <sup>※1</sup>	所有者 (ユーザ)	所有者 (グループ)	アクセス権限 <sup>※2</sup>
—	—	—	root <sup>※3</sup>	root のプライマリグループ <sup>※3</sup>	666 <sup>※3</sup>
—	—	777	root <sup>※3</sup>	root のプライマリグループ <sup>※3</sup>	777
<ユーザ名>	—	—	<ユーザ名>	<ユーザ名>のプライマリグループ <sup>※3</sup>	666 <sup>※3</sup>
—	<グループ名>	777	root <sup>※3</sup>	<グループ名>	777
<ユーザ名>	<グループ名>	777	<ユーザ名>	<グループ名>	777

(凡例) —：指定しない。

注※1

「auditlog.mode」に指定する値を、「777」として説明しています。

注※2

実際に設定される値は umask によるマスクが実行されます。例えば、umask=0222 が設定されている場合、auditlog.mode=777 と指定しても、755 が設定されます。

注※3

デフォルト値です。

参考

auditsetup コマンドを使用しないで、監査ログファイルを出力した場合、出力ディレクトリおよびファイルのアクセス権限は、次のように設定されます。

- Windows の場合  
ディレクトリおよびファイルの所有者やアクセス権限には、上位ディレクトリの設定が引き継がれます。
- UNIX の場合  
ディレクトリおよびファイルの所有者やアクセス権限は、次のように設定されます。

表 13-4 ディレクトリおよびファイルの所有者とアクセス権限 (UNIX の場合)

ディレクトリ/ファイル	ログ種別	所有者	アクセス権限
出力ディレクトリ	監査ログ	実行ユーザおよびそのプライマリグループ	777 <sup>*</sup>
	メッセージログ		777

ディレクトリ/ファイル	ログ種別	所有者	アクセス権限
出力ディレクトリ	例外情報	実行ユーザおよびそのプライマリグループ	777
出力ファイル	監査ログ		666*
	メッセージログ		666
	例外情報		666

注※ umask によるマスクが実行されます。

(例) umask=0022 が設定されている場合、777 と指定しても、755 が設定されます。ただし、サーバ管理コマンドを実行したことによって監査ログファイルが作成されたときは、umask の値として 0 が使用されます。

## (6) 記述例

監査ログ定義ファイル (auditlog.properties) の記述内容を次に示します。

```
auditlog.enabled=true
#auditlog.user=
#auditlog.group=
#auditlog.mode=666
auditlog.filtered.message.list=KDJExxxxx-E, KDJEyyyyy-I
auditlog.directory=D:/auditlog/logs
#auditlog.filesize=1048576
#auditlog.filenum=4
#auditlog.raslog.message.directory=${auditlog.directory}
#auditlog.raslog.message.filesize=1048576
#auditlog.raslog.message.filenum=4
#auditlog.raslog.exception.directory=${auditlog.directory}
#auditlog.raslog.exception.filesize=1048576
#auditlog.raslog.exception.filenum=8
```

## (7) 注意事項

監査ログ定義ファイルは監査ログを出力するすべてのプロセスから参照されるため、次の注意が必要です。

- 監査ログ出力中に監査ログ定義ファイルの格納場所や記述内容を変更しないでください。また、変更した場合には監査ログを出力するすべてのプロセスを停止したあとで、監査ログ出力機能を再セットアップしてください。
- 監査ログ定義ファイルを参照するすべてのプロセスに対して、読み込み権限を付与してください。付与していない場合、そのプロセスは監査ログ定義ファイルの読み込みに失敗して、監査ログを出力できません。
- 製品のインストール単位に一つだけ監査ログ定義ファイルを設定してください。
- 監査ログ出力ライブラリで、COSMINEXUS\_AUDITLOG\_CONF 環境変数を指定しないで、かつ、監査ログ定義ファイルが存在しない場合、標準エラー出力およびメッセージログおよび例外情報には、監査ログ定義ファイル読み込み失敗のメッセージは出力されません。





# 14 Java アプリケーションで使用する ファイル

この章では、Java アプリケーションで使用するファイルの形式、格納先、機能、指定できるキーなどについて説明します。

## 14.1 Java アプリケーションで使用するファイルの一覧

Java アプリケーションで使用するファイルの一覧を次の表に示します。

表 14-1 Java アプリケーションで使用するファイルの一覧

ファイル名	分類	概要	参照先
usrconf.cfg	Java アプリケーション用オプション定義ファイル	Java アプリケーションを実行する JavaVM の起動オプションを指定します。 Java アプリケーションを cjclstartap コマンドで開始する場合に使用します。	14.2
usrconf.properties	Java アプリケーション用ユーザプロパティファイル	Java アプリケーションを実行する JavaVM のシステムプロパティを指定します。 Java アプリケーションを cjclstartap コマンドで開始する場合に使用します。	14.3
(任意) ※	Java アプリケーションに指定するシステムプロパティ	Java アプリケーションを実行する JavaVM のシステムプロパティを指定します。 vbj コマンドで Java アプリケーションを開始する場合に、コマンドの引数としてバッチファイルまたはシェルスクリプトに指定します。	14.4
(任意)	Java アプリケーションのユーザログ用プロパティ設定ファイル	Java アプリケーションのユーザログで使用します。 vbj コマンドで Java アプリケーションを開始する場合に使用します。	14.5

### 注※

Java アプリケーションの開始に使用するコマンド (vbj コマンド) ごとに、必要なシステムプロパティを指定します。システムプロパティの指定は、Java アプリケーションからの Enterprise Bean 呼び出しの場合に必要です。

Java アプリケーションを開始するには、次のどれかのコマンドを使用します。

- **cjclstartap コマンド**

通常使用するコマンドです。コマンドの格納場所を次に示します。

- Windows の場合  
`<Application Server のインストールディレクトリ>%CC%\client%\bin%\cjclstartap`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/CC/client/bin/cjclstartap`

- **vbj コマンド**

すでにこのコマンドを使用しているユーザ向けの互換用コマンドです。コマンドの格納場所を次に示します。

- Windows の場合  
`<Application Server のインストールディレクトリ>%TPB%\bin%\vbj`
- UNIX の場合  
`/opt/Cosminexus/TPB/bin/vbj`

## 14.2 usrconf.cfg (Java アプリケーション用オプション定義ファイル)

### (1) 形式

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

#### 指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 値の後ろには、空白やコメントなどの文字列は追加できません。追加した場合、不正な値と解釈されます。

(例) <キー名称> = <値> #<コメント>

- 値にスペースを含むパスを指定する場合、パスをダブルクォーテーション (") で囲む必要はありません。
- 実行時の文字エンコーディングと異なる文字エンコーディングでは記述できません。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
 <ユーザ定義ファイル格納ディレクトリ>\*\usrconf.cfg
- UNIX の場合  
 <ユーザ定義ファイル格納ディレクトリ>\*/usrconf.cfg

#### 注※

ユーザ定義ファイル格納先環境変数 (CJCLUSRCONFDIR) で指定したディレクトリです。ユーザ定義ファイル格納先環境変数が設定されていない場合、カレントディレクトリが参照されます。EJB クライアントアプリケーションの実行に必要な環境変数の設定については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「3.3.4 EJB クライアントアプリケーションの実行に必要な環境変数の設定」を参照してください。

### (3) 機能

cjclstartap コマンドを使用する場合に、Java アプリケーションを実行する JavaVM の起動オプションを指定します。

Java アプリケーションを実行中に、このファイルの内容を変更した場合、変更した内容は、次回 Java アプリケーションを起動したときに反映されます。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーとデフォルト値を次に示します。このキーに不正な値を指定した場合は、動作は保証されません。

ポイント

ここでは、次の内容について説明します。

- Java アプリケーション用 usrconf.cfg ファイルで指定できるキーの概要**

指定できるキーのうち、J2EE サーバ用 usrconf.cfg ファイルと共通のキーについては、ここでは詳細を説明しません。

共通のキーの詳細については、「2.3 usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル)」を参照してください。参照する場合には、「J2EE サーバ」を「Java アプリケーション」と読み替えてください。

なお、J2EE サーバ用のキーと指定内容が異なる場合には、ここでキーの詳細について説明します。
- J2EE サーバ用のキーとの差異 (J2EE サーバ用 usrconf.cfg ファイルのキーと指定内容が異なる場合)**

Java アプリケーション用のキーと J2EE サーバ用のキーの指定内容が異なる場合には、キーの詳細について説明します。差異の有無は「差異」列に表記します。

表 14-2 usrconf.cfg に指定できるキーとデフォルト値 (Java アプリケーション)

キー名称	差異	内容	デフォルト値
add.jvm.arg	なし	指定されたオプションを使って JavaVM を起動します。 add.jvm.arg で指定できる JavaVM のオプションについては、「16.1 JavaVM 拡張オプションの一覧」および「16.5 Application Server で指定できる Java HotSpot VM のオプション」を参照してください。	デフォルト値については「14.2(6) Java アプリケーション用オプション定義ファイルに指定する JavaVM オプションのデフォルト値」を参照してください。
add.class.path	あり	Java アプリケーションの実行に必要なクラスパスを指定します。 EJB アプリケーションごとの実行に必要なクラスパス (stubs.jar, <数字>.jar, <ユーザクラス>.jar) を指定します。 なお、スペースを含むパスを指定する場合、パスをダブルクォーテーション (") で囲む必要はありません。また、ダブルクォーテーションでの指定は有効となりません。	—
add.library.path*	なし	JNI 用の共有ライブラリを指定します。	—
cpp.library.version	なし	プロセス内で使用する libstdc++ライブラリのバージョンを指定します。なお、このキーは、Linux 用です。 指定できる文字列を次に示します。 6 : libstdc++.so.6 ライブラリを使用します。Red Hat Enterprise Linux 以外のプラットフォームで設定しても無効です。 09-00 以降では、設定できるのは「6」だけです。	6
ejb.client.directory.shareable	独自	同じカレントディレクトリまたは、同じログ出力先ディレクトリを使用する複数の cjclstartap コマンドを同時に起動するかどうかを指定します。  true を指定した場合： 同時に起動します。	true

キー名称	差異	内容	デフォルト値
ejb.client.directory.shareable	独自	false を指定した場合： 同時に起動しません。	true
ejb.client.ejb.log	独自	<p>ejb.client.log.directory キーに指定したディレクトリの下、Java アプリケーションが出力するメッセージのログ出力先のディレクトリ名を、1~16 バイトで指定します。</p> <p>指定できる文字は、半角英数字、アンダースコア (_), およびハイフン (-) です。</p> <p>16 バイトを超える文字列を指定した場合、KDJE40051-W のメッセージが出力されます。</p> <p>ディレクトリにアクセス権がない場合や、ファイル名を指定した場合は、KDJE40052-E のメッセージが出力され、Java アプリケーションが終了します。</p> <p>ユーザプロパティファイル (usrconf.properties) に ejbserver.client.ejb.log を指定した場合、次のログファイルの出力先はユーザプロパティファイルの指定が優先されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>稼働ログ</li> <li>障害発生時の例外情報</li> <li>保守情報</li> </ul>	system
ejb.client.log.appid	独自	<p>Java アプリケーションが出力するメッセージのログ出力先のサブディレクトリ名を 1~16 バイトで指定します。</p> <p>指定できる文字は、半角英数字、アンダースコア (_), およびハイフン (-) です。</p> <p>16 バイトを超える文字列を指定した場合、KDJE40051-W のメッセージが出力されます。</p> <p>ディレクトリにアクセス権がない場合や、ファイル名を指定した場合は、KDJE40052-E のメッセージが出力され、Java アプリケーションが終了します。</p> <p>ユーザプロパティファイル (usrconf.properties) に ejbserver.client.log.appid を指定した場合、次のログファイルの出力先はユーザプロパティファイルの指定が優先されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>稼働ログ</li> <li>障害発生時の例外情報</li> <li>保守情報</li> </ul>	ejbcl
ejb.client.log.directory	独自	<p>Java アプリケーションのログ出力先のパスを 1~180 バイトの範囲で指定します。</p> <p>パスは絶対パスまたはカレントディレクトリからの相対パスで指定します。</p> <p>指定できる文字は、半角英数字、アンダースコア (_), ハイフン (-) およびパス区切り文字です。</p> <p>180 バイトを超えるパス (相対パスを指定したときは、カレントディレクトリまでの絶対パスと相対パスの合計) を指定した場合、KDJE40059-W のメッセージが出力され、デフォルト値が使用されます。デフォルト値が 180 バイトを超える場合は、ログの初期化に失敗し、異常終了します。</p> <p>Windows の場合、UNC 名を含むパスは指定できません。UNIX の場合、nfs マウントされたディスク上へのパスは指定できません。</p>	カレントディレクトリ/logs

キー名称	差異	内容	デフォルト値
ejb.client.log.directory	独自	ディレクトリにアクセス権がない場合や、ファイル名を指定した場合は、KDJE40052-E のメッセージが出力され、Java アプリケーションが終了します。 ユーザプロパティファイル (usrconf.properties) に ejbserver.client.log.directory を指定した場合、次のログファイルの出力先はユーザプロパティファイルの指定が優先されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>稼働ログ</li> <li>ログ稼働ログ</li> <li>障害発生時の例外情報</li> <li>保守情報</li> </ul>	カレントディレクトリ/logs
ejb.client.log.stdout.enabled	独自	標準出力へメッセージを出力するかどうかを指定します。 true : 標準出力へ出力します。 false : 標準出力へ出力しません。 標準出力へのメッセージ出力を制御できるログは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>稼働ログ</li> <li>cjclstartap コマンドログ</li> <li>起動プロセス標準出力情報</li> </ul>	true
jvm.type	独自	使用する JavaVM のタイプを設定します。指定できる値は次のどちらかです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>client Java HotSpot Client VM が使用されます。</li> <li>server Java HotSpot Server VM が使用されます。</li> </ul> 指定値に誤りがあった場合は、" client", " server" の順で JavaVM を検索します。なお、このとき KDJE40020-W メッセージが出力されます。	client

(凡例)

あり：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルのキーと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルのキーに差異があります。詳細については、「内容」の列を参照してください。

なし：

Java アプリケーション用 usrconf.cfg ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.cfg ファイルで共通のキー、またはデフォルト値です。キーの詳細については、「2.3 usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル)」を参照してください。

独自：

Java アプリケーション用 usrconf.cfg ファイル固有のキーです。キーの詳細については、「内容」の列を参照してください。

ー：

Java アプリケーション用 usrconf.cfg ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.cfg ファイルで共通のデフォルト値です。デフォルト値の詳細については、「2.3 usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル)」を参照してください。

注※

cjclstartap コマンドの実行時に add.library.path と OS の環境変数 (LIBPATH など) が両方設定されていた場合、add.library.path の設定が優先されます。

## (5) 記述例

```
# EJB client application classpath
# RMI-IIOP Stubs jar file
add.class.path=<Javaアプリケーション格納パス>¥stubs.jar

# RMI-IIOP interface jar file
add.class.path=<Javaアプリケーション格納パス>¥1.jar

# User class
add.class.path=<Javaアプリケーション格納パス>¥<Javaアプリケーションjar>
#add.class.path=<User classpath>

# java vm options
add.jvm.arg=-Xms256m
add.jvm.arg=-Xmx512m
```

## (6) Java アプリケーション用オプション定義ファイルに指定する JavaVM オプションのデフォルト値

Java アプリケーション用オプション定義ファイルに指定する JavaVM オプションのデフォルト値を示します。

- -XX:HitachiJavaLog:<ejb.client.log.directory>¥<ejb.client.ejb.log>¥<ejb.client.log.appid>
- -XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace
- -XX:-HitachiThreadDumpToStdout
- -XX:+HitachiOutOfMemoryAbort
- -XX:+HitachiJavaClassLibTrace
- -XX:+HitachiLocalsInStackTrace
- -XX:HitachiJavaClassLibTraceLineSize=1024
- -XX:+HitachiLocalsSimpleFormat
- -XX:+HitachiTrueTypeInLocals
- -XX:+HitachiLocalsInStackTrace
- -XX:+HitachiVerboseGC
- -XX:+HitachiVerboseGCPrintCause
- -XX:+HitachiOutputMilliTime

## (7) 注意事項

- OS のロケールと異なる文字エンコーディングで記述しないでください。また、OS のロケールに UTF-8 を使用する場合、BOM 付き UTF-8 では記述しないでください。
- usrconf.properties と usrconf.cfg の add.jvm.arg の -D に同じキーが指定されている場合は、usrconf.properties の値が優先されます。
- add.class.path キーに指定されている値の中に、<cosminexus.home>タグを使用してコンテナ拡張ライブラリ用の JAR を指定しているものがあります。これは Application Server のインストール先を意味しているため、add.class.path キーの記述内容を変更する必要はありません。なお、add.class.path キーにコンテナ拡張ライブラリを追加する場合は、インストールおよびアンインストール

ル時の動作を保証できなくなるおそれがあるので、<cosminexus.home>タグを使用しないでください。

- 次に示すプロパティは"-D"で指定できません。

java.endorsed.dirs

java.security.policy

java.class.path

java.library.path



## 14.3 usrconf.properties (Java アプリケーション用 ユーザプロパティファイル)

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 値の後ろには、空白やコメントなどの文字列は追加できません。追加した場合、不正な値と解釈されます。

(例) <キー名称> = <値> #<コメント>

- 記載する文字は Java の仕様に従って、ISO 8859-1 文字エンコーディングを使用してください。
- Java の仕様に従わない形式の場合、Java アプリケーションの起動に失敗することがあります。  
(例) 不正な Unicode エスケープシーケンスを含む場合 ("¥u"に続く文字列が適切な Unicode 16 進数の値ではない)。

### (2) ファイルの格納先

- Windows の場合  
<ユーザ定義ファイル格納ディレクトリ<sup>※</sup>>%usrconf.properties
- UNIX の場合  
<ユーザ定義ファイル格納ディレクトリ<sup>※</sup>>/usrconf.properties

注※

ユーザ定義ファイル格納先環境変数 (CJCLUSRCONFDIR) で指定したディレクトリです。ユーザ定義ファイル格納先環境変数が設定されていない場合、カレントディレクトリが参照されます。EJB クライアントアプリケーションの実行に必要な環境変数の設定については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「3.3.4 EJB クライアントアプリケーションの実行に必要な環境変数の設定」を参照してください。

### (3) 機能

cjclstartup コマンドを使用する場合に、Java アプリケーションを実行する JavaVM のシステムプロパティを指定します。

usrconf.properties と usrconf.cfg の add.jvm.arg の-D に同じキーが指定されている場合は、usrconf.properties の値が優先されます。

Java アプリケーションを実行中に、このファイルの内容を変更した場合、変更した内容は、次回 Java アプリケーションを起動したときに反映されます。

#### (4) Java アプリケーションのカスタマイズ用キー

Java アプリケーションの開始コマンドでは、次に示すシステムプロパティのキーに値を設定することで、Java アプリケーションの動作をカスタマイズできます。

ここでは、キーを次の分類に分けて説明します。

- ejbserver.application から始まるキー
- ejbserver.client から始まるキー
- ejbserver.container から始まるキー
- ejbserver.distributedtx から始まるキー
- ejbserver.jndi から始まるキー
- ejbserver.jta から始まるキー
- ejbserver.logger から始まるキー
- ejbserver.rmi から始まるキー
- ejbserver.security から始まるキー
- ejbserver.server から始まるキー
- ejbserver.stdoutlog から始まるキー
- https から始まるキー
- java から始まるキー
- org から始まるキー
- vbroker から始まるキー

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルで指定できるキーを次の表に示します。

#### ! 注意事項

ここでは、次の内容について説明します。

- **Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルで指定できるキーの概要**  
 指定できるキーのうち、J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルと共通のキーについては、ここでは詳細を説明しません。  
 共通のキーの詳細については、「2.4 `usrconf.properties` (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル)」を参照してください。Java アプリケーションの場合には、「J2EE サーバ」を「Java アプリケーション」と読み替えてください。  
 なお、J2EE サーバ用のキーと指定内容が異なる場合には、ここでキーの詳細についても説明します。
- **J2EE サーバ用のキーとの差異 (J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルのキーと指定内容が異なる場合)**  
 Java アプリケーション用のキーと J2EE サーバ用のキーの指定内容が異なる場合には、キーの詳細について説明します。差異に関する記述が特にない場合には、J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルのキーと同じ内容を指定してください。差異の有無は「差異」列に表記します。
- **Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイル独自のキーの詳細**  
 Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイル独自のキーについては、ここでキーの詳細を説明します。

## (a) ejbserver.application から始まるキー

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルで指定できる ejbserver.application から始まるキーを次に示します。J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルと共通のキーの詳細については、「2.4(5)(b) ejbserver.application から始まるキー」を参照してください。

キー名称	差異	内容	デフォルト値
ejbserver.application.us erlog.CJLogHandler.< ハンドラ名称 >※1.appname	なし	AppName のフィールドに出力するデフォルトのアプリケーション名を指定します。	—
ejbserver.application.us erlog.CJLogHandler.< ハンドラ名称 >※1.autoFlush.enabled	独自	メッセージ出力後に flush をするかどうかを指定します。 true を指定した場合： メッセージごとに flush をします。 false を指定した場合： flush をしません。 CJMPMessageFileHandler を使用しない場合、指定は不要です。 また、アプリケーションプログラムで明示的に java.util.logging.Handler.flush() を呼び出している場合には、true を指定しないでください。	false
ejbserver.application.us erlog.CJLogHandler.< ハンドラ名称>※1.count	なし	ログファイルの面数を指定します。	—
ejbserver.application.us erlog.CJLogHandler.< ハンドラ名称 >※1.encoding	なし	出力する文字列のエンコーディングを指定します。	—
ejbserver.application.us erlog.CJLogHandler.< ハンドラ名称>※1.filter	なし	使用するフィルタを、パッケージ名を含むフルネームで指定します。	—
ejbserver.application.us erlog.CJLogHandler.< ハンドラ名称 >※1.formatter	なし	使用するフォーマッタを、パッケージ名を含むフルネームで指定します。	—
ejbserver.application.us erlog.CJLogHandler.< ハンドラ名称>※1.level	なし	ログの取得レベルの上限を指定します。	—
ejbserver.application.us erlog.CJLogHandler.< ハンドラ名称>※1.limit	なし	ログファイルの容量を指定します。	—
ejbserver.application.us erlog.CJLogHandler.< ハンドラ名称>※1.msgid	なし	MsgID のフィールドに出力するデフォルトのメッセージ ID を指定します。	—

キー名称	差異	内容	デフォルト値
ejbserver.application.us erlog.CJLogHandler.< ハンドラ名称>*1.path	あり	<p>ログファイル名のプリフィックスを 1~255 バイトの範囲で指定します。パスは、相対パスで指定します。なお、パス名の終端に、半角数値を指定しないでください。</p> <p>ここで指定したプリフィックスに"xx (1~16 の整数) .log"が付加された値が、トレース情報ファイルの名称になります。</p> <p>パスに指定された半角英文字の大文字と小文字は区別されません。また、パス値の長さは、次の A+B+C 値の合計が値の範囲に収まるよう指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• A (Windows の場合) : &lt;ログ出力先ルート (ejbserver.client.log.directory の値)&gt;*user* (デフォルトは &lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt;*CC *client*logs*user*)</li> <li>• A (UNIX の場合) : &lt;ログ出力先ルート (ejbserver.client.log.directory の値)&gt;/user/ (デフォルトは /opt/Cosminexus/CC/client/logs/user/)</li> <li>• B : ユーザの指定したプリフィックスの長さ</li> <li>• C : "xx.log" の 6 文字</li> </ul> <p>このほか、パスを指定するときには次の点に注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Properties ファイルには native の 2 バイトコードなどは使用できないため、native2ascii などを利用して Unicode の文字列を取得して指定してください。</li> <li>• 絶対パスで指定しないでください。また、相対パスの ".. *" (UNIX の場合, "../") は使用しないでください。</li> <li>• パスに日本語文字などを含む場合は、その文字を処理できるロケール設定がされている環境下で JavaVM が動作している必要があります。</li> </ul> <p>パスをほかのハンドラと同一に設定することはできません。そのような設定にした場合、そのハンドラは作成されません。</p>	—
ejbserver.application.us erlog.CJLogHandler.< ハンドラ名称 >*1.separator	なし	CJSimpleFormatter を利用して、1 文でメッセージを出力するためのセパレータを指定します。	—
ejbserver.application.us erlog.loggers	なし	使用するロガーの名称を宣言します。	—
ejbserver.application.us erlog.Logger.<ロガー名 称>*2.filter	なし	ロガーで使用するフィルタを、パッケージ名を含むフルネームで指定します。	—
ejbserver.application.us erlog.Logger.<ロガー名 称>*2.handlers	なし	指定のロガー名称に対して、ハンドラクラスを指定します。	—
ejbserver.application.us erlog.Logger.<ロガー名 称>*2.level	なし	ロガーのログ出力レベルを指定します。	—
ejbserver.application.us erlog.Logger.<ロガー名	なし	ログレコードを受け取ったロガーから、親ロガーの接続しているハンドラへログレコードを伝播させるかどうかを指定します。	—

キー名称	差異	内容	デフォルト値
称 >※2.useParentHandlers	なし	ログレコードを受け取ったロガーから、親ロガーの接続しているハンドラへログレコードを伝播させるかどうかを指定します。	—

(凡例)

あり：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルのキーと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルのキーに差異があります。詳細については、「内容」の列を参照してください。

なし：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のキーです。キーの詳細については、「2.4(5)(b) ejbserver.application から始まるキー」を参照してください。

独自：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイル固有のキーです。キーの詳細については、「内容」の列を参照してください。

—：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のデフォルト値です。デフォルト値の詳細については、「2.4(5)(b) ejbserver.application から始まるキー」を参照してください。

注※1

ハンドラ名称はプロパティの値を区別するために使用します。半角英数字で始まる 1~1024 バイトのクラス文字セットで指定してください。"default"を指定した場合は、すべての CJLogHandler が共通のデフォルト値として認識するプロパティを示します。

注※2

ロガー名称は、Logger.getLogger(<ロガー名称>) でロガーのインスタンスを取得するときに指定する".付きの名称で、あらかじめ、ejbserver.application.userlog.loggers プロパティで宣言する必要があります。ロガー名称については、java.util.logging.Logger の仕様に従ってください。

半角英数字で始まる 1~1024 バイトのクラス文字セットで指定してください。"default"を指定した場合は、すべての CJLogHandler が共通のデフォルト値として認識するプロパティを示します。

なお、ロガー名称で識別されるプロパティは、ユーザログ機能のロガークラスの初期化で使用されます。

ロガー名称の最後を.handlers で終了させた場合、ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.handlers のプロパティ指定時に紛らわしくなるため、ロガー名称は".handlers"で終了させないことを推奨します。

#### (b) ejbserver.client から始まるキー

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルで指定できる ejbserver.client から始まるキーを次に示します。J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルと共通のキーの詳細については、「2.4(5)(c) ejbserver.client から始まるキー」を参照してください。

なお、Client を使用する場合は、格納ディレクトリの「<Application Server のインストールディレクトリ>¥CC」を、「<Application Server のインストールディレクトリ>¥CCL」と読み替えてください。

キー名称	差異	内容	デフォルト値
ejbserver.client.ctm.RequestPriority	なし	CTM 内のキューに滞留したリクエストを引き出す時のプライオリティ（優先順位）を指定します。	—
ejbserver.client.ejb.log	独自	ejbserver.client.log.directory キーに指定したディレクトリの下 Java アプリケーションが出力するメッセージのログ出力先のディレクトリ名を 1~16 バイトの範囲で指定します。指定できる文字は、半角英数字、アンダースコア (_), およびハイフン (-) だけです。ディレクトリのパス区切り文字には、スラッシュ (/) を使用し	なし

キー名称	差異	内容	デフォルト値
ejbserver.client.ejb.log	独自	<p>てください。複数の Java アプリケーションを使用する場合は、EJB アプリケーションごとに、ログ出力先を指定してください。</p> <p>アクセス権がないディレクトリまたはファイル名を指定した場合は、KDJE51003-E のメッセージが標準出力と cjlogger.log ファイルに出力され、Java アプリケーションが終了します。</p> <p>このキーでは出力先を変更できないログがあります。ログの出力先を変更するには、Java アプリケーション用オプション定義ファイル (usrconf.cfg) の <code>ejb.client.ejb.log</code> キーを指定してください。</p>	なし
ejbserver.client.log.appid	独自	<p>Java アプリケーションのログ出力先のサブディレクトリ名を 1~16 バイトで指定します。</p> <p>指定できる文字は、半角英数字、アンダースコア (<code>_</code>)、およびハイフン (<code>-</code>) だけです。このキーを指定した場合は、毎回同じサブディレクトリが使用されるため、サブディレクトリの削除はされません。一つの Java アプリケーションを複数起動しない場合に使用すると、専用のサブディレクトリでログファイルを管理できます。複数同時に起動する場合、このキーは指定しないでください。</p> <p>16 バイトを超える文字列を指定した場合は、KDJE51002-W のメッセージが cjlogger.log ファイルに出力され、通常値が使用されます。</p> <p>このキーでは出力先を変更できないログがあります。ログの出力先を変更するには、Java アプリケーション用オプション定義ファイル (usrconf.cfg) の <code>ejb.client.log.appid</code> キーを指定してください。</p>	なし
ejbserver.client.log.directory	独自	<p>Java アプリケーションのログ出力先の絶対パスを 1~200 バイトで指定します。</p> <p>指定できる文字は、半角英数字、アンダースコア (<code>_</code>)、ハイフン (<code>-</code>)、およびスペース (<code> </code>) だけです。なお、スペースを指定できるのは Windows の場合だけです。空白文字※を含むディレクトリを指定する場合は、パス名を引用符で囲んでください。例えば、<code>C:\logs\ejb client</code> を設定する場合は、次のように指定します。</p> <pre>ejbserver.client.log.directory="C:\logs\ejb client"</pre> <p>200 バイトを超えるパスを指定した場合は KDJE51001-W のメッセージ、指定がない場合は KDJE51002-W のメッセージが cjlogger.log ファイルに出力され、通常値が使用されます。</p> <p>ディレクトリにアクセス権がない場合や、ファイル名を指定した場合は、KDJE51003-E のメッセージが標準出力と cjlogger.log ファイルに出力され、Java アプリケーションが終了します。</p> <p>通常値を使用する場合で、Developer's Kit for Java 以外の Java を使用して Java アプリケーションを起動した場合は、KDJE51004-W のメッセージが cjlogger.log ファイルに出力され、Java アプリケーション実行ディレクトリが使用されます。</p> <p>Windows の場合、UNC 名を含むパスは指定できません。UNIX の場合、<code>nfs</code> マウントされたディスク上へのパスは指定できません。</p> <p>このキーでは出力先を変更できないログがあります。ログの出力先を変更するには、Java アプリケーション用オプション定義ファイル (usrconf.cfg) の <code>ejb.client.log.directory</code> キーを指定してください。</p>	なし
ejbserver.client.log.lockInterval	独自	<p>ログファイルの排他処理に失敗したときのリトライ間隔 (単位: ミリ秒) を 0~2147483647 の整数値で指定します。範囲外の値や整数値以外を指定した場合は、KDJE51002-W のメッセージが</p>	10

キー名称	差異	内容	デフォルト値
ejbserver.client.log.lockInterval	独自	cjlogger.log ファイルに出力されて、デフォルト値が使用されます。サブディレクトリ共有モードで動作する Java アプリケーションが cjlogger.log ファイルに KDJE90002-E メッセージを出力して終了する場合に使用します。	10
ejbserver.client.log.lockRetryCount	独自	ログファイルの排他処理に失敗したときのリトライ回数 (単位: 回) を 0~2147483647 の整数値で指定します。範囲外の値や整数値以外を指定した場合は、KDJE51002-W のメッセージを cjlogger.log ファイルに出力して、デフォルト値を使用します。サブディレクトリ共有モードで動作する Java アプリケーションが cjlogger.log ファイルに KDJE90002-E メッセージを出力して終了する場合に使用します。	1000
ejbserver.client.transaction.clientName	独自	トランザクションサービスが使用するクライアント名を 1~128 文字の文字列で指定します。使用できる文字は、半角英数字 (0~9, A~Z, a~z)、アンダースコア (_) またはハイフン (-) です。ここに設定するクライアント名は、Java アプリケーションのプロセスごとに別の名前を設定する必要があります。また、同一マシン上で動作する J2EE サーバ名とは別の名前にする必要があります。	なし
ejbserver.client.transaction.enabled	独自	Java アプリケーションでトランザクションを使用するかどうかを指定します。 true を指定した場合： トランザクションを使用できます。 false を指定した場合： トランザクションを使用できません。	false

(凡例)

なし：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のキーです。キーの詳細については、「2.4(5)(c).ejbserver.client から始まるキー」を参照してください。

独自：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイル固有のキーです。キーの詳細については、「内容」の列を参照してください。

—：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のデフォルト値です。デフォルト値の詳細については、「2.4(5)(c).ejbserver.client から始まるキー」を参照してください。

注※

空白文字とは、半角スペース、タブ、LF (0x0a)、CR (0x0d) または FF (0x0c) のことを指します。

### (c).ejbserver.container から始まるキー

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルで指定できる.ejbserver.container から始まるキーを次に示します。J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルと共通のキーの詳細については、「2.4(5)(h).ejbserver.container から始まるキー」を参照してください。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。



キー名称	差異	内容	デフォルト値	関連情報
ejbserver.container.rebindpolicy	なし	EJB メソッドの呼び出し時に通信障害が発生した場合の、EJB クライアント側での接続の再接続動作とリクエストの再送動作を指定します。	—	「機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「2.13 EJB のリモートインタフェースの呼び出し」

(凡例)

なし：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のキーです。キーの詳細については、「2.4(5)(h).ejbserver.container から始まるキー」を参照してください。

—：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のデフォルト値です。デフォルト値の詳細については、「2.4(5)(h).ejbserver.container から始まるキー」を参照してください。

(d).ejbserver.distributedtx から始まるキー

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルで指定できる.ejbserver.distributedtx から始まるキーを次に示します。J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルと共通のキーの詳細については、「2.4(5)(k).ejbserver.distributedtx から始まるキー」を参照してください。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

キー名称	差異	内容	デフォルト値	関連情報
ejbserver.distributedtx.ots.status.directory1	あり	<p>インプロセストランザクションサービスのステータスファイル、および保守資料としてのステータスファイルのバックアップを格納するディレクトリを指定します。パス区切り文字は"/"を使用してください。</p> <p>アプリケーションサーバで相対パスを指定した場合、次のディレクトリからのパスとなります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows の場合 &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;%ejb*&lt;サーバ名称&gt;</li> <li>• UNIX の場合 &lt;製品の作業ディレクトリ&gt;/ejb/&lt;サーバ名称&gt;</li> </ul> <p>Java アプリケーションで相対パスを指定した場合、Java アプリケーションの実行ディレクトリからのパスとなります。</p> <p>同一マシン内で稼働するほかの J2EE サーバや、ほかの Java アプリケーションプロセスと重ならないように、別のディレクトリを指定する必要があります。</p>	なし	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「3.4 トランザクション管理」



キー名称	差異	内容	デフォルト値	関連情報
ejbserver.distributedtx. ots.status.directory2	なし	インプロセストランザクションサービスのステータスファイルを二重化する場合、予備ステータスファイルおよび保守資料としての予備ステータスファイルのバックアップを格納するディレクトリを指定します。	—	「機能解説 基本・開発編(コンテナ共通機能)」の「3.4 トランザクション管理」
ejbserver.distributedtx. recovery.port	あり	トランザクションリカバリで使用する固定ポート番号を 1~65535 の整数値で指定します。無効な値を指定した場合や指定したポートがすでに使用されていた場合には、初期化処理がエラーとなります。	なし	

(凡例)

あり：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルのキーと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルのキーに差異があります。詳細については、「内容」の列を参照してください。

なし：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のキーです。キーの詳細については、「2.4(5)(k).ejbserver.distributedtx から始まるキー」を参照してください。

—：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のデフォルト値です。デフォルト値の詳細については、「2.4(5)(k).ejbserver.distributedtx から始まるキー」を参照してください。

空欄：

関連情報はありません。

#### (e).ejbserver.jndi から始まるキー

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルで指定できる.ejbserver.jndi から始まるキーを次に示します。J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルと共通のキーの詳細については、「2.4(5)(r).ejbserver.jndi から始まるキー」を参照してください。

キー名称	差異	内容	デフォルト値
ejbserver.jndi.cache	あり	分散オブジェクトのキャッシングをするかどうかを指定します。 キャッシングをする場合： onを指定します。 キャッシングをしない場合： offを指定します。 また、javax.rmi.CORBA.PortableRemoteObjectClass キーに com.hitachi.software.ejb.rmi.PortableRemoteObject を、 javax.rmi.CORBA.UtilClass キーに com.hitachi.software.ejb.rmi.Util を指定する必要があります。	off
ejbserver.jndi.cache.int erval	あり	分散オブジェクトのキャッシングをする場合、キャッシュをクリアする間隔(単位:秒)を 0~2147483647 の整数値で指定します。ただし、1~2147483647 以外の値を指定した場合、クリアしません。また、javax.rmi.CORBA.PortableRemoteObjectClass キーに com.hitachi.software.ejb.rmi.PortableRemoteObject を、	—

キー名称	差異	内容	デフォルト値
ejbserver.jndi.cache.interval	あり	javax.rmi.CORBA.UtilClass キーに com.hitachi.software.ejb.rmi.Util を指定する必要があります。ネーミングサービスの障害検知機能を使用している場合は、短い値 (60 秒) を指定することを推奨します。	—
ejbserver.jndi.cache.interval.clear.option	なし	インターバル経過後のネーミングでのキャッシュ領域に対する動作を決定します。	—
ejbserver.jndi.namingservice.group.list	なし	ラウンドロビン検索をする場合に、検索対象になる論理ネーミングサービスのグループを定義します。	—
ejbserver.jndi.namingservice.group.<Specify group name>.providerurls	なし	各グループに属するネーミングサービスのルート位置を指定します。	—
ejbserver.jndi.request.timeout	なし	ネーミングサービスとの通信タイムアウト時間を指定します。	—

(凡例)

あり：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルのキーと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルのキーに差異があります。詳細については、「内容」の列を参照してください。

なし：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のキーです。キーの詳細については、「2.4(5)(r) ejbserver.jndi から始まるキー」を参照してください。

—：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のデフォルト値です。デフォルト値の詳細については、「2.4(5)(r) ejbserver.jndi から始まるキー」を参照してください。

#### (f) ejbserver.jta から始まるキー

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルで指定できる ejbserver.jta から始まるキーを次に示します。

キー名称	差異	内容	デフォルト値
ejbserver.jta.TransactionManager.defaultTimeOut	あり	Java アプリケーションで開始されるトランザクションのトランザクションタイムアウトのデフォルト値 (単位：秒) を次の範囲で指定します。 1~2147483647	—

(凡例)

あり：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルのキーと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルのキーに差異があります。詳細については、「内容」の列を参照してください。

—：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のデフォルト値です。デフォルト値の詳細については、「2.4(5)(t) ejbserver.jta から始まるキー」を参照してください。

## (g) ejbserver.logger から始まるキー

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルで指定できる ejbserver.logger から始まるキーを次に示します。

キー名称	差異	内容	デフォルト値
ejbserver.logger.channels.define.<チャンネル名>* .filenum	あり	Java アプリケーションのログファイルの面数を指定します。 1~64 の整数値で指定します。 面数を変更する場合は、該当するログファイルに出力しているプロセスをすべて停止し、ログファイルと mmap ディレクトリ以下のログ管理ファイルを別のディレクトリへ移動、または削除してください。	2
ejbserver.logger.channels.define.<チャンネル名>* .filesize	あり	4096~16777216 の整数値で指定します。 サイズを変更する場合は、該当するログファイルに出力しているプロセスをすべて停止し、ログファイルと mmap ディレクトリ以下のログ管理ファイルを別のディレクトリへ移動、または削除してください。	1048576
ejbserver.logger.enabled.*	あり	ログレベルを指定します。Error, Warning, Information, Debug のうち、一つまたは複数指定します。 一つだけ指定した場合は、該当するログレベルのログだけが出力されます。複数指定する場合は、レベル名の文字列の間をコンマ (,) で区切ります。 なお、シェルスクリプトを使用してシステムプロパティを設定する場合、このキーは指定できません。	Error

(凡例)

あり：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルのキーと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルのキーに差異があります。詳細については、「内容」の列を参照してください。

注※

チャンネル名称として次に示す名称を設定できます。

ClientMessageLogFile, ClientExceptionLogFile, ClientMaintenanceLogFile, EJBContainerLogFile, UserOutLogFile, UserErrLogFile

資料の取得については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 保守/移行編」の「2.3 資料の取得」を参照してください。

## (h) ejbserver.rmi から始まるキー

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルで指定できる ejbserver.rmi から始まるキーを次に示します。J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルと共通のキーの詳細については、「2.4(5)(y) ejbserver.rmi から始まるキー」を参照してください。

キー名称	差異	内容	デフォルト値
ejbserver.rmi.request.timeout	なし	クライアントとサーバ間の通信タイムアウト時間 (単位: 秒) を指定します。	—

(凡例)

なし：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のキーです。キーの詳細については、「2.4(5)(y) ejbserver.rmi から始まるキー」を参照してください。

— :

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルと J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルで共通のデフォルト値です。デフォルト値の詳細については、「2.4(5)(y) `ejbserver.rmi` から始まるキー」を参照してください。

(i) `ejbserver.security` から始まるキー

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルで指定できる `ejbserver.security` から始まるキーを次に示します。

キー名称	差異	内容	デフォルト値
<code>ejbserver.security.service.url</code>	独自	セキュリティ認証処理をする J2EE サーバが接続されている CORBA ネーミングサービスを指定します。 <code>java.naming.provider.url</code> で指定されたネーミングサービス以外のネーミングサービスに接続している J2EE サーバで認証処理をする場合に指定します。なお、接続する J2EE サーバ名は、 <code>ejbserver.serverName</code> キーに指定しておく必要があります。 <code>corbaname</code> 形式で指定してください。省略した場合は、 <code>java.naming.provider.url</code> で指定されたネーミングサービスが使用されます。 (指定形式) <code>corbaname::&lt;ネーミングサービスのホスト名&gt;:&lt;ネーミングサービスのポート番号&gt;</code>	なし

(凡例)

独自 :

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイル固有のキーです。キーの詳細については、「内容」の列を参照してください。

(j) `ejbserver.server` から始まるキー

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルで指定できる `ejbserver.server` から始まるキーを次に示します。J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルと共通のキーの詳細については、「2.4(5)(z) `ejbserver.server` から始まるキー」を参照してください。

キー名称	差異	内容	デフォルト値
<code>ejbserver.serverName</code>	独自	Java アプリケーションが接続する J2EE サーバのサーバ名称を指定します。	なし
<code>ejbserver.server.prf.PRfid</code>	なし	PRF 識別子を指定します。	—

(凡例)

なし :

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルと J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルで共通のキーです。キーの詳細については、「2.4(5)(z) `ejbserver.server` から始まるキー」を参照してください。

独自 :

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイル固有のキーです。キーの詳細については、「内容」の列を参照してください。

— :

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルと J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルで共通のデフォルト値です。デフォルト値の詳細については、「2.4(5)(z) `ejbserver.server` から始まるキー」を参照してください。

#### (k) `ejbserver.stdoutlog` から始まるキー

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルで指定できる `ejbserver.stdoutlog` から始まるキーを次に示します。J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルと共通のキーの詳細については、「2.4(5)(ab) `ejbserver.stdoutlog` から始まるキー」を参照してください。

キー名称	差異	内容	デフォルト値
<code>ejbserver.stdoutlog.autoflush</code>	なし	ユーザ出力ログおよびユーザエラーログの自動フラッシュ機能を有効にするかどうかを指定します。	—

(凡例)

なし :

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルと J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルで共通のキーです。キーの詳細については、「2.4(5)(ab) `ejbserver.stdoutlog` から始まるキー」を参照してください。

— :

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルと J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルで共通のデフォルト値です。デフォルト値の詳細については、「2.4(5)(ab) `ejbserver.stdoutlog` から始まるキー」を参照してください。

#### (l) `https` から始まるキー

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルで指定できる `https` から始まるキーを次に示します。J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルと共通のキーの詳細については、「2.4(5)(ae) `https` から始まるキー」を参照してください。

キー名称	差異	内容	デフォルト値
<code>https.cipherSuites</code>	なし	<code>HttpsURLConnection</code> で使用する推奨暗号スイートを設定します。	—
<code>https.protocols</code>	なし	<code>HttpsURLConnection</code> で使用するプロトコルを設定します。	—

(凡例)

なし :

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルと J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルで共通のキーです。キーの詳細については、「2.4(5)(ae) `https` から始まるキー」を参照してください。

— :

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルと J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルで共通のデフォルト値です。デフォルト値の詳細については、「2.4(5)(ae) `https` から始まるキー」を参照してください。

#### (m) `java` から始まるキー

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルで指定できる `java` から始まるキーを次に示します。J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルと共通のキーの詳細については、「2.4(5)(af) `java` から始まるキー」を参照してください。

キー名称	差異	内容	デフォルト値
java.naming.factory.initial	あり	JNDI の InitialContext がデレゲートするコンテキストの実装クラスのファクトリクラスを指定します。各設定値での動作を次に示します。  com.hitachi.software.ejb.jndi.InsContextFactory : JNDI ラウンドロビン検索機能を使用しないで、通常の検索機能を使用する場合に指定するコンテキストです。  com.hitachi.software.ejb.jndi.GroupContextFactory : J2EE サーバ内アプリケーション (EJB) の実行時に、JNDI ラウンドロビン検索機能を使用する場合に指定するコンテキストです。  なお、旧バージョンで使用されていた値 (com.hitachi.software.ejb.jndi.spi.cosnaming.CNCtxFactory) と互換性があります。	—
java.naming.provider.url	独自	Java アプリケーションが利用する CORBA ネーミングサービスのホスト名称とポート番号を指定します。この CORBA ネーミングサービスは、該当する Java アプリケーションから呼び出す J2EE サーバが利用しているものです。  なお、旧バージョンで使用されていたプロトコル (iioploc または iiopname) と互換性があります。 (指定形式) corbaname::[ホスト名称]:[ポート番号]	corbaname::localhost:900
javax.xml.datatype.DatatypeFactory	独自	javax.xml.datatype.DatatypeFactory の実装クラス名を指定します。	com.cosminexus.jaxp.impl.parsers.jaxp.datatype.DatatypeFactoryImpl
javax.xml.parsers.DocumentBuilderFactory	独自	javax.xml.parsers.DocumentBuilderFactory の実装クラス名を指定します。	com.cosminexus.jaxp.impl.parsers.jaxp.DocumentBuilderFactoryImpl
javax.xml.parsers.SAXParserFactory	独自	javax.xml.parsers.SAXParserFactory の実装クラス名を指定します。	com.cosminexus.jaxp.impl.parsers.jaxp.SAXParserFactoryImpl
javax.xml.transform.TransformerFactory	独自	javax.xml.transform.TransformerFactory の実装クラス名を指定します。	com.cosminexus.jaxp.impl.transform.processor.TransformerFactoryImpl
javax.xml.xpath.XPathFactory<*:http*://	独自	javax.xml.xpath.XPathFactory の実装クラス名を指定します。	com.cosminexus.jaxp.impl.xpath.jaxp.X

キー名称	差異	内容	デフォルト値
java.sun.com/jaxp/ xpath/dom	独自	javax.xml.xpath.XPathFactory の実装クラス名を指定します。	PathFactoryImpl
javax.xml.validation.SchemaFactory*:http*:// www.w3.org/2001/ XMLSchema	独自	javax.xml.validation.SchemaFactory の実装クラス名を指定します。	com.cosminexus.jaxp.impl.parsers.jaxp.validation.XMLSchemaFactory

(凡例)

あり：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルのキーと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルのキーに差異があります。詳細については、「内容」の列を参照してください。

独自：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイル固有のキーです。キーの詳細については、「内容」の列を参照してください。

－：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のデフォルト値です。デフォルト値の詳細については、「2.4(5)(af) java から始まるキー」を参照してください。

#### (n) org から始まるキー

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルで指定できる org から始まるキーを次に示します。

キー名称	差異	内容	デフォルト値
org.w3c.dom.DOMImplementationSourceList	独自	org.w3c.dom.DOMImplementationSourceList の実装クラス名を指定します。	com.cosminexus.jaxp.impl.parsers.dom.DOMXSIImplementationSourceImpl
org.xml.sax.driver	独自	org.xml.sax.driver の実装クラス名を指定します。	com.cosminexus.jaxp.impl.parsers.parsers.SAXParser
org.xml.sax.parser	独自	org.xml.sax.parser の実装クラス名を指定します。	org.xml.sax.helpers.XMLReaderAdapter

(凡例)

独自：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイル固有のキーです。キーの詳細については、「内容」の列を参照してください。

## (o) vbroker から始まるキー

Java アプリケーション用 `usrconf.properties` ファイルで指定できる vbroker から始まるキーを次に示します。J2EE サーバ用 `usrconf.properties` ファイルと共通のキーの詳細については、「2.4(5)(ah) vbroker から始まるキー」を参照してください。

キー名称	差異	内容	デフォルト値
<code>vbroker.agent.enableLocator</code>	あり	Java アプリケーションが J2EE サーバを呼び出すだけの場合は、 <code>false</code> を指定します。J2EE サーバの通信処理を実現している TPBroker のネーミングサービスには、CORBA ネーミングサービスとスマートエージェントがあります。Java アプリケーションと J2EE サーバ間の通信は、ネーミングサービスとして CORBA ネーミングサービスだけを利用します。この場合、J2EE サーバ、Java アプリケーション間に CORBA ネーミングサービスだけを開始する必要があり、該当キーは <code>false</code> を指定します。 一方、Java アプリケーションが J2EE サーバを呼び出すことに加え、スマートエージェントを利用し TPBroker のサーバアプリケーションを呼び出す場合は、CORBA ネーミングサービス、およびスマートエージェントを開始する必要があり、該当キーに <code>true</code> を指定します。	<code>true</code>
<code>vbroker.ce.iiop.ccm.htc.readerPerConnection</code>	なし	リモートインタフェースとして定義された EJB メソッドの呼び出しでタイムアウトが発生した場合に、コネクションのクローズを抑制するかどうかを設定します。  <code>true</code> を指定した場合 タイムアウト発生時のコネクションのクローズを抑制します。 <code>false</code> を指定した場合 タイムアウト発生時のコネクションのクローズを抑制しません。	<code>false</code>
<code>vbroker.orb.htc.comt.entryCount</code>	あり	TPBroker 通信トレースファイル 1 個当たりのエントリ数の上限値を指定します。	20000
<code>vbroker.orb.htc.comt.fileCount</code>	なし	TPBroker 通信トレースファイルの個数の上限値を指定します。	15
<code>vbroker.orb.htc.mtr.trace</code>	あり	モジュールトレースを取得するかどうかを設定します。 <code>true</code> を指定した場合： モジュールトレースを取得します。 <code>false</code> を指定した場合： モジュールトレースを取得しません。	<code>true</code>
<code>vbroker.orb.htc.tracePath</code>	あり	TPBroker のトレースファイル出力先のパスを 1~210 バイトの範囲で指定します。指定するパスは、Java アプリケーションごとにユニークにしてください。指定したパスのサブディレクトリとして <code>comtrc</code> と <code>mdltrc</code> をあらかじめ作成しておく必要があります。デフォルトの出力先の場合、サブディレクトリ <code>comtrc</code> と <code>mdltrc</code> は Java アプリケーション初回起動時に自動作成されます。 ディレクトリのパスの区切り記号には、"/"を使用してください。例えば、 <code>work</code> ディレクトリとして <code>/temp/work</code> を設定する場合、次のように指定します。 <code>vbroker.orb.htc.tracePath=/temp/work</code>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合 &lt;ejbserver.client.ejb.log directory の値&gt; ¥TPB*logi</li> <li>UNIX の場合 &lt;ejbserver.client.ejb</li> </ul>



キー名称	差異	内容	デフォルト値
vbroker.orb.htc.tracePath	あり	TPBroker のトレースファイル出力先のパスを 1~210 バイトの範囲で指定します。指定するパスは、Java アプリケーションごとにユニークにしてください。指定したパスのサブディレクトリとして comtrc と mdltrc をあらかじめ作成しておく必要があります。デフォルトの出力先の場合、サブディレクトリ comtrc と mdltrc は Java アプリケーション初回起動時に自動作成されます。 ディレクトリのパスの区切り記号には、"/"を使用してください。例えば、work ディレクトリとして/temp/work を設定する場合、次のように指定します。 vbroker.orb.htc.tracePath=/temp/work	b.log.directory の値 >/TPB/ logj

(凡例)

あり：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルのキーと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルのキーに差異があります。詳細については、「内容」の列を参照してください。

なし：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のキーです。キーの詳細については、「2.4(5)(ah) vbroker から始まるキー」を参照してください。

—：

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルと J2EE サーバ用 usrconf.properties ファイルで共通のデフォルト値です。デフォルト値の詳細については、「2.4(5)(ah) vbroker から始まるキー」を参照してください。

## (5) 記述例

```
java.naming.provider.url=corbaname::localhost:900
ejbserver.serverName=MyServer
```

## 14.4 Java アプリケーションに指定するシステムプロパティ

### (1) 形式

Win32 のバッチファイル形式 (Windows の場合), またはシェルスクリプトファイル形式 (UNIX の場合) のファイルに指定します。

### (2) 機能

vbj コマンドを使用する場合に, Java アプリケーションを実行する JavaVM のシステムプロパティを指定します。

また, `java.lang.System.setProperty()` で定義する場合は, 該当機能を最初に使う前までにプロパティの定義が必要になります。

Java アプリケーションを実行中に, このファイルの内容を変更した場合, 変更した内容は, 次回 Java アプリケーションを起動したときに反映されます。

### (3) 指定できるキー

vbj コマンドで指定できるキーを次の表に示します。

「関連情報」とは, 指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

表 14-3 Java アプリケーションに指定するシステムプロパティ

分類	キー名称	種別	指定可否	関連情報
共通のキー	<code>ejbserver.client.ctm.RequestPriority</code>	選択 可変	○	
	<code>ejbserver.client.ejb.log</code>	選択 可変	○	
	<code>ejbserver.client.log.appid</code>	選択 可変	○	
	<code>ejbserver.client.log.directory</code>	選択 可変	○	
	<code>ejbserver.client.log.lockInterval</code>	選択 可変	○	
	<code>ejbserver.client.log.lockRetryCount</code>	選択 可変	○	
	<code>ejbserver.container.rebindpolicy</code>	選択 可変	○	「機能解説 基本・開発編 (EJB コンテナ)」の「2.13 EJB のリモートイ

分類	キー名称	種別	指定可否	関連情報
共通のキー	ejbserver.container.rebindpolicy	選択 可変	○	ンタフェース の呼び出し
	ejbserver.jndi.cache	選択 可変	○	
	ejbserver.jndi.cache.interval	選択 可変	○	
	ejbserver.jndi.cache.interval.clear.option	選択 可変	○	
	ejbserver.jndi.namingservice.group.list	選択 可変	○	
	ejbserver.jndi.namingservice.group.<Specify group name>.providerurls	選択 可変	○	
	ejbserver.jndi.request.timeout	選択 可変	○	
	ejbserver.logger.channels.define.<チャンネル名 >*.filenum	選択 可変	○	
	ejbserver.logger.channels.define.<チャンネル名 >*.filesize	選択 可変	○	
	ejbserver.logger.enabled.*	選択 可変	○	
	ejbserver.rmi.request.timeout	選択 可変	○	
	ejbserver.security.service.url	選択 可変	○	
	ejbserver.serverName	可変	○	
	ejbserver.server.prf.PRIFID	選択 可変	○	
	java.naming.factory.initial	可変	○	
	java.naming.provider.url	可変	○	
	vbroker.agent.enableLocator	選択 可変	○	
	vbroker.orb.htc.comt.entryCount	選択 可変	○	
	vbroker.orb.htc.comt.fileCount	選択 可変	○	
	vbroker.orb.htc.tracePath	選択 可変	○	

分類	キー名称	種別	指定可否	関連情報
独自のキー	ejbserver.jndi.log.message.verbosemode	選択 可変	○	
	ejbserver.server.prf.processName	選択 可変	○	
	java.endorsed.dirs	可変	×	
	java.naming.factory.object	固定	○	
	java.naming.factory.state	固定	○	
	javax.rmi.CORBA.UtilClass	固定	○	
	javax.rmi.CORBA.StubClass	固定	×	
	javax.rmi.CORBA.PortableRemoteObjectClass	固定	○	
	org.omg.PortableInterceptor.ORBInitializerClass.com.hitachi.software.ejb.security.std.interceptor.SecurityClientInterceptorInit	固定	○	
	java.security.policy	固定	○	
	org.omg.CORBA.ORBClass	固定	×	
	org.omg.CORBA.ORBSingletonClass	固定	×	

## (凡例)

- ：コマンドにキーを指定する必要があります。
- ×
- ×：コマンドにキーを指定する必要はありません。
- 空欄：関連情報ははありません。

## 種別

固定の場合、該当するキーに対する値は固定で、必ず指定する必要があります。可変の場合、システムの実行環境に従って値を指定する必要があります。選択可変の場合は、システムの実行環境に従って値を指定するか、または指定を省略します。

## 注※

チャンネル名称として次に示す名称を設定できます。  
ClientMessageLogFile, ClientExceptionLogFile, ClientMaintenanceLogFile  
資料の取得については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 保守／移行編」の「2.3 資料の取得」を参照してください。

## (a) 共通のキー

Java アプリケーション用 usrconf.properties ファイルのキーと共通のシステムプロパティのキーです。

共通のキーの詳細については、「14.3 usrconf.properties (Java アプリケーション用ユーザプロパティファイル)」を参照してください。また、必要に応じて、「2.4 usrconf.properties (J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル)」も参照してください。

## (b) 独自のキー

システムプロパティ独自のキーです。

独自のキーの詳細を次に示します。

**ejbserver.jndi.log.message.verbosemode**

種別：選択可変

値：on または off

通常値：off

内容：

標準出力にメッセージログ出力を指定します。

**ejbserver.server.prf.processName**

種別：選択可変

値：任意のクライアント識別子

通常値：EJBClient

内容：

性能解析トレースファイルの編集結果で、プロセス名称として表示させたい名前を指定します。null を指定した場合またはこのキーを指定しない場合、通常値が使用されます。

**java.endorsed.dirs**

種別：可変

値：ディレクトリパス

通常値：&lt;Application Server のインストールディレクトリ&gt;%TPB%lib%endorsed (Windows の場合)、または/opt/Cosminexus/TPB/lib/endorsed (UNIX の場合)

内容：

Endorsed Standards Override Mechanism を使って置き換えるクラスがあるディレクトリパスを指定します。

**java.naming.factory.object**

種別：固定

値：com.hitachi.software.ejb.jndi.InsNamingFactory

内容：

JNDI の SPI である ObjectFactory の実装クラスを指定します。

ObjectFactory はオブジェクト検索時にオブジェクト変換をします。

なお、旧バージョンで使用されていた値

(com.hitachi.software.ejb.jndi.nameserver.spi.cos.wrappers.vbj.WrapperObjectFactory) と互換性があります。

**java.naming.factory.state**

種別：固定

値：com.hitachi.software.ejb.jndi.InsNamingFactory

内容：

JNDI の SPI である StateFactory の実装クラスを指定します。

StateFactory はオブジェクト登録時のオブジェクト変換をします。

なお、旧バージョンで使用されていた値

(com.hitachi.software.ejb.jndi.nameserver.spi.cos.wrappers.vbj.WrapperStateFactory) と互換性があります。

**javax.rmi.CORBA.UtilClass**

種別：固定

値：com.hitachi.software.ejb.rmi.Util

内容：

javax.rmi.CORBA.Util の実装クラス名を指定します。

なお、旧バージョンで使用されていた値 (com.inprise.vbroker.rmi.CORBA.UtilImpl) と互換性があります。

#### javax.rmi.CORBA.StubClass

種別：固定

値：com.inprise.vbroker.rmi.CORBA.StubImpl

内容：

javax.rmi.CORBA.Stub の実装クラス名を指定します。

#### javax.rmi.CORBA.PortableRemoteObjectClass

種別：固定

値：com.hitachi.software.ejb.rmi.PortableRemoteObject

内容：

javax.rmi.PortableRemoteObject の実装クラス名を指定します。

なお、旧バージョンで使用されていた値

(com.inprise.vbroker.rmi.CORBA.PortableRemoteObjectImpl) と互換性があります。

#### org.omg.PortableInterceptor.ORBInitializerClass.com.hitachi.software.ejb.security.std.interceptor.SecurityClientInterceptorInit

種別：固定

値：1

内容：

セキュリティ機能用のクライアント側インターセプタの初期化クラスを指定します。

Java アプリケーションが EJB のセキュリティインタフェースを利用し、J2EE サーバにログインをして EJB を呼び出す場合だけ指定します。

#### java.security.policy

種別：固定

値：<セキュリティポリシーファイルへの絶対パス>

内容：

<Application Server のインストールディレクトリ>%CC%client%cli.policy (Windows の場合), または/opt/Cosminexus/CC/client/cli.policy (UNIX の場合) をクライアント側の任意のディレクトリにコピーし、そのファイル名を絶対パスで指定します。ファイルの内容は変更しないでください。

#### org.omg.CORBA.ORBClass

種別：固定

値：com.inprise.vbroker.orb.ORB

内容：

ORB の実装クラス名を指定します。

#### org.omg.CORBA.ORBSingletonClass

種別：固定

値：com.inprise.vbroker.orb.ORBSingleton

内容：

ORB のシングルトン用の実装クラス名を指定します。

#### (4) 記述例

システムプロパティの記述例を OS ごとに示します。

##### (a) Windows の場合

Java アプリケーションを開始する bat ファイルの記述例を次に示します。これは vbj コマンドを使って Java アプリケーションを開始する場合の例です。なお、CLASS\_PATH に指定する JAR ファイルのクラスパスについては、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 基本・開発編(EJB コンテナ)」の「3.7.4 EJB クライアントアプリケーションのクラスパスへの JAR ファイルの設定」を参照してください。

環境変数については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス コマンド編」の「付録 H システムの環境変数」を参照してください。

```
setlocal

rem --- set environment ---
set COSMI_HOME=C:\Program Files\Hitachi\Cosminexus
set SERVERNAME=MyServer
set PRF_HOME=%COSMI_HOME%\PRF
set TPB_HOME=%COSMI_HOME%\TPB
set JAVA_HOME=%COSMI_HOME%\jdk
set VBJ="%TPB_HOME%\bin\vbj"
set VBROKER_ADM=%TPB_HOME%\adm
set PATH=%PRF_HOME%\bin;%TPB_HOME%\bin;%JAVA_HOME%\bin;%PATH%

rem --- set class path ---
set CLASS_PATH=%COSMI_HOME%\TPB\lib\vbjorb.jar
set CLASS_PATH=%CLASS_PATH%;%COSMI_HOME%\TPB\lib\vbsec.jar
set CLASS_PATH=%CLASS_PATH%;%COSMI_HOME%\PRF\lib\cprf.jar
set CLASS_PATH=%CLASS_PATH%;%ProgramFiles%\Hitachi\HNTRLib2\classes\hntrlibmj.jar
set CLASS_PATH=%CLASS_PATH%;%COSMI_HOME%\CC\lib\hitj2ee.jar
set CLASS_PATH=%CLASS_PATH%;%COSMI_HOME%\CC\client\lib\HiEJBClientStatic.jar
set CLASS_PATH=%CLASS_PATH%;stubs.jar
set CLASS_PATH=%CLASS_PATH%;1.jar"

rem --- set properties ---
set PROPS=-Djavax.rmi.CORBA.UtilClass=com.hitachi.software.ejb.rmi.Util
set PROPS=%PROPS% -
Djavax.rmi.CORBA.PortableRemoteObjectClass=com.hitachi.software.ejb.rmi.PortableRemoteObject
set PROPS=%PROPS% -Djava.naming.factory.initial=com.hitachi.software.ejb.jndi.InsContextFactory
set PROPS=%PROPS% -Djava.naming.factory.object=com.hitachi.software.ejb.jndi.InsNamingFactory
set PROPS=%PROPS% -Djava.naming.factory.state=com.hitachi.software.ejb.jndi.InsNamingFactory
set PROPS=%PROPS% -Djava.naming.provider.url=corbaname::localhost:900
set PROPS=%PROPS% -Dejbserver.jndi.cache=on
set PROPS=%PROPS% -Dejbserver.jndi.cache.interval=0
set PROPS=%PROPS% -Dejbserver.jndi.cache.interval.clear.option=refresh
set PROPS=%PROPS% -Dejbserver.jndi.request.timeout=0
set PROPS=%PROPS% -Dejbserver.rmi.request.timeout=0
set PROPS=%PROPS% -Dejbserver.serverName=%SERVERNAME%
set PROPS=%PROPS% -Dvbroker.agent.enableLocator=false
set PROPS=%PROPS% -
Dorg.omg.PortableInterceptor.ORBInitializerClass=com.hitachi.software.ejb.security.std.interceptor.SecurityClientInterceptorInit=1
set PROPS=%PROPS% "-Djava.security.policy=%COSMI_HOME%\CC\client\cli.policy"
set PROPS=%PROPS% -Dejbserver.server.prf.processName=EJBClient
set PROPS=%PROPS% "-Dejbserver.client.log.directory=%COSMI_HOME%\CC\client\logs"
set PROPS=%PROPS% -Dejbserver.logger.enabled.*=Error

rem --- execute client ---
%VBJ% -VBJclasspath %CLASS_PATH% %PROPS% ConverterClient

endlocal
```

## (b) UNIX の場合

Java アプリケーションを開始するシェルスクリプトの記述例を次に示します。これは vbj コマンドを使って Java アプリケーションを開始する場合の例です。

なお、CLASS\_PATH に指定する環境変数については、マニュアル「アプリケーションサーバ リファレンス コマンド編」の「付録 H システムの環境変数」を参照してください。

```
#!/bin/csh -f

# --- environment ---
set COSMI_HOME=/opt/Cosminexus
set SERVERNAME="MyServer"
set PRF_HOME="${COSMI_HOME}/PRF"
set TPB_HOME="${COSMI_HOME}/TPB"
set JAVA_HOME="${COSMI_HOME}/jdk"
set VBJ="${TPB_HOME}/bin/vbj"
setenv PSALLOC early
setenv NODISCLAIM true
setenv AIXTHREAD SCOPE S
setenv AIXTHREAD MUTEX DEBUG OFF
setenv AIXTHREAD RWLOCK DEBUG OFF
setenv AIXTHREAD COND DEBUG OFF
setenv EXTSHM ON
setenv LDR_CNTRL MAXDATA=0x40000000
setenv VBROKER_ADM "${TPB_HOME}/adm"
setenv PATH "${JAVA_HOME}/bin:${PATH}"
set LPATH="${TPB_HOME}/lib:${PRF_HOME}/lib"
if ($?LIBPATH) then
    setenv LIBPATH "${LPATH}:${LIBPATH}"
else
    setenv LIBPATH "${LPATH}"
endif

# --- class path ---
set CLASS_PATH="${COSMI_HOME}/TPB/lib/vbjorb.jar"
set CLASS_PATH="${CLASS_PATH}:${COSMI_HOME}/TPB/lib/vbsec.jar"
set CLASS_PATH="${CLASS_PATH}:${COSMI_HOME}/PRF/lib/cprf.jar"
set CLASS_PATH="${CLASS_PATH}:/opt/hitachi/HNTRLib2/classes/hntrlbmj.jar"
set CLASS_PATH="${CLASS_PATH}:${COSMI_HOME}/CC/lib/hitj2ee.jar"
set CLASS_PATH="${CLASS_PATH}:${COSMI_HOME}/CC/client/lib/HiEJBClientStatic.jar"
set CLASS_PATH="${CLASS_PATH}:stubs.jar"
set CLASS_PATH="${CLASS_PATH}:i.jar"

# --- properties ---
set PROPS="-Djavax.rmi.CORBA.UtilClass=com.hitachi.software.ejb.rmi.Util"
set PROPS="${PROPS} -Djavax.rmi.CORBA.PortableRemoteObjectClass=com.hitachi.software.ejb.rmi.PortableRemoteObject"
set PROPS="${PROPS} -Djava.naming.factory.initial=com.hitachi.software.ejb.jndi.InsContextFactory"
set PROPS="${PROPS} -Djava.naming.factory.object=com.hitachi.software.ejb.jndi.InsNamingFactory"
set PROPS="${PROPS} -Djava.naming.factory.state=com.hitachi.software.ejb.jndi.InsNamingFactory"
set PROPS="${PROPS} -Djava.naming.provider.url=corbaname::localhost:900"
set PROPS="${PROPS} -Dejbserver.jndi.cache=on"
set PROPS="${PROPS} -Dejbserver.jndi.cache.interval=0"
set PROPS="${PROPS} -Dejbserver.jndi.cache.interval.clear.option=refresh"
set PROPS="${PROPS} -Dejbserver.jndi.request.timeout=0"
set PROPS="${PROPS} -Dejbserver.rmi.request.timeout=0"
set PROPS="${PROPS} -Dejbserver.serverName=${SERVERNAME}"
set PROPS="${PROPS} -Dvbroker.agent.enableLocator=false"
set PROPS="${PROPS} -Dorg.omg.PortableInterceptor.ORBInitializerClass=com.hitachi.software.ejb.security.std.interceptor.SecurityClientInterceptorInit=1"
set PROPS="${PROPS} -Djava.security.policy=${COSMI_HOME}/CC/client/cli.policy"
set PROPS="${PROPS} -Dejbserver.server.prf.processName=EJBClient"
set PROPS="${PROPS} -Dejbserver.client.log.directory=${COSMI_HOME}/CC/client/logs"

# --- execute client ---
${VBJ} -VBJclasspath ${CLASS_PATH} ${PROPS} ConverterClient
```



- 下線が引かれている部分は、AIX の固有の記述です。
- *斜体の部分は*、OS ごとに変数名が異なります。次のとおり置き換えて使用してください。

AIX の場合：LIBPATH

HP-UX, または Linux の場合：LD\_LIBRARY\_PATH

## 14.5 Java アプリケーションのユーザログ用プロパティ設定ファイル

### (1) 形式

J2SE のプロパティファイル形式です。

次のようにキーを指定します。

<キー名称> = <値>

指定方法

- 改行までが値になります。
- #で始まる行はコメントとみなされます。
- 値が存在しない行を定義した場合、その行は無視されます。
- 値の後ろには、空白やコメントなどの文字列は追加できません。追加した場合、不正な値と解釈されます。

(例) <キー名称> = <値> #<コメント>

### (2) 機能

vbj コマンドを使用する場合に、Java アプリケーションのユーザログ用のシステムプロパティを設定します。

ここで設定したプロパティは、Java アプリケーションで読み込み、システムプロパティに設定する必要があります。Java アプリケーションでのユーザログ出力の実装については、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 拡張編」の「9.11 EJB クライアントアプリケーションのユーザログ出力の実装と設定 (vbj コマンドを使用する場合)」を参照してください。

### (3) ファイル名

格納先およびファイル名称は任意です。

### (4) 指定できるキー

指定できるキーを次の表に示します。なお、キーの詳細については、「14.3(4)(a) ejbserver.application から始まるキー」を参照してください。また、必要に応じて、「2.4(5)(b) ejbserver.application から始まるキー」も参照してください。

表 14-4 Java アプリケーションのユーザログ用プロパティ設定ファイルで指定できるキー

キー名称	内容
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.appName	AppName のフィールドに出力するデフォルトのアプリケーション名を指定します。
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.autoFlush.enabled	メッセージ出力後に flush をするかどうかを指定します。
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.count	ログファイルの面数を指定します。

キー名称	内容
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.encoding	出力する文字列のエンコーディングを指定します。
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.filter	使用するフィルタを、パッケージ名を含むフルネームで指定します。
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.formatter	使用するフォーマッタを、パッケージ名を含むフルネームで指定します。
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.level	ログの取得レベルの上限を指定します。
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.limit	ログファイルの容量を指定します。
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.msgid	MsgID のフィールドに出力するデフォルトのメッセージ ID を指定します。
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.path	ログファイル名のプリフィックスを指定します。
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.separator	CJSimpleFormatter を利用して、1 文でメッセージを出力するためのセパレータを指定します。
ejbserver.application.userlog.loggers	使用するロガーの名称を宣言します。
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.filter	ロガーで使用するフィルタを、パッケージ名を含むフルネームで指定します。
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.handlers	指定のロガー名称に対して、ハンドラクラスを指定します。
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.level	ロガーの出力レベルを指定します。
ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.useParentHandlers	ログレコードを受け取ったロガーから、親ロガーの接続しているハンドラへログレコードを伝播させるかどうかを指定します。

## (5) サンプル

次の場所に格納されています。

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>%CC%\examples\userlog\sample.properties
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/CC/examples/userlog/sample.properties

サンプルを次に示します。

```
# user-log handler function
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.conf1.appname=my_app1
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.conf1.path=application1/logfileA
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.conf1.limit=10485760
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.conf1.count=2
ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.conf1.level=SEVERE

# user-log logger function
ejbserver.application.userlog.Logger.com.example.userlogger1.handlers=com.hitachi.software.ejb.application.userlog.CJMPMessageFileHandler;conf1
```

---

```
ejbserver.application.userlog.Logger.com.example.userlogger1.useParentHandlers=true  
ejbserver.application.userlog.Logger.com.example.userlogger1.level=INFO  
ejbserver.application.userlog.loggers=com.example.userlogger1
```

---

# 15 Web アプリケーションで使用する ファイル

この章では、Web アプリケーションで使用するコンパイル対象外リストファイル、実行結果リストファイルについて説明します。

## 15.1 Web アプリケーションで使用するファイルの一覧

Web アプリケーションで使用するファイルの一覧使用するファイルの一覧を、次の表に示します。

表 15-1 Web アプリケーションで使用するファイルの一覧使用するファイルの一覧

ファイル名	分類	概要	参照先
(任意) ※	コンパイル対象外リストファイル	コマンドによる JSP 事前コンパイルの対象外とする JSP ファイルを定義します。	15.2
(任意) ※	実行結果リストファイル	コンパイル結果を収集するためのファイルです。	15.3

注※

使用できる文字は、半角の英数字、ピリオド (.), アンダースコア (\_) です。

## 15.2 コンパイル対象外リストファイル

---

### (1) 形式

次のように対象外リストファイルを指定します。

```
# コメント
<コンパイルの対象外とするJSPファイルパス 1>
<コンパイルの対象外とするJSPファイルパス 2>
...
```

指定方法

- #で始まる行はコメントとみなされます。
- コンパイルの対象外とする JSP ファイルのパスを 1 行に一つ、記述します。

### (2) 格納先およびファイル名

格納先およびファイル名は任意です。ファイル名には次の文字が使用できます。

英数字、アンダースコア ( \_ ), またはピリオド ( . )

### (3) 機能

コマンドによる JSP 事前コンパイル実行時、コンパイルの対象外とする JSP ファイルパスを設定します。

コンパイル対象外リストファイルを cjjspc コマンドの `-excludelist` オプションに指定することで、コンパイル対象外リストファイルに記述された JSP ファイルをコンパイルの対象外にできます。cjjspc コマンドについては、マニュアル「アプリケーションサーバリファレンス コマンド編」の「cjjspc (JSP の事前コンパイル)」を参照してください。

### (4) 記述例

- JSP ファイルを単体で指定する場合

```
/jsp/title.jsp
/jsp/pieces/pageA.jsp
```
- ディレクトリに含まれるすべてのファイルを指定する場合

```
/jsp/pieces/*
```
- コンパイル対象外とするファイルの拡張子を指定する場合

```
/jsp/pieces/*.jsp
```
- コメントを書く場合

```
# JSP Fragment
/jsp/pieces/pageA.jsp
```

## 15.3 実行結果リストファイル

---

### (1) 形式

実行結果リストファイルの出力形式を次に示します。

```
# Excluded JSP files.
<コンパイル対象外JSPファイルの一覧>
# Compiled JSP files.
<コンパイルに成功したJSPファイル>
# <コンパイルに失敗したJSPファイル>
...
```

### (2) 格納先およびファイル名

格納先およびファイル名は任意です。ファイル名には次の文字が使用できます。

英数字, アンダースコア (\_), またはピリオド (.)

### (3) 機能

コマンドによる JSP 事前コンパイル実行時, cjjspc コマンドに -resultlist オプションを指定することで, コンパイル対象外 JSP ファイルのファイルパスの一覧, コンパイルに成功した JSP ファイル, およびコンパイルに失敗した JSP ファイルのファイルパスの一覧を実行結果リストファイルに出力できます。

実行結果リストファイルには, 次の順番でコンパイル結果が出力されます。

1. コンパイル対象外の JSP ファイルパスの一覧
2. コンパイルに成功, または失敗した JSP ファイルパス

コンパイルに失敗した JSP ファイルのファイルパスは, コメントとして出力されます。

### (4) 出力例

```
# Excluded JSP files.
/jsp/title.jsp
/jsp/pieces/*.jsp
# Compiled JSP files.
/jsp/confirm.jsp
#/jsp/discorrecr.jsp
#/jsp/fail.jsp
/jsp/index.jsp
/jsp/order.jsp
#/jsp/uncomfortable.jsp
```



# 16 JavaVM 起動オプション

この章では、JavaVM 起動オプションについて説明します。

Application Server では JavaVM 起動オプションとして、Java HotSpot VM のオプションのほか、JavaVM 拡張オプションを指定できます。

ここでは、JavaVM 拡張オプションの詳細について説明します。また、Application Server で指定できる Java HotSpot VM のオプション、およびデフォルト値についても説明します。

## 16.1 JavaVM 拡張オプションの一覧

JavaVM 拡張オプションの一覧を、次の表に示します。

### ！ 注意事項

#### 指定できるオプションについて

アプリケーションサーバに指定できるオプションは、java コマンドに対してオプション指定なしで起動した場合に表示されるオプションと、java コマンドに対して-X か-XX か-XX:+Hitachi オプションを指定したときに表示されるオプションだけです。それ以外のオプションを指定した場合、動作は保証しません。

これらのオプションは、オプション定義ファイルで指定できます。「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

「関連情報」とは、指定したキーに関する情報の参照先です。マニュアル名称の「アプリケーションサーバ」を省略しています。

表 16-1 JavaVM 拡張オプションの一覧

分類	オプション名称	概要	VR	関連情報
一覧表示オプション	-XX:+Hitachi	JavaVM 拡張オプションの一覧を表示します。	Solaris 版： 06-50 その他： 05-02	
拡張スレッドダンプ機能オプション	-XX:[+ -]HitachiThreadDump	拡張スレッドダンプ情報を出力するかどうかを指定します。	Windows 版： 05-05 Solaris 版： 06-50 その他： 05-00	
	-XX:[+ -]HitachiThreadDumpToStdout	標準出力にスレッドダンプを出力するかどうかを指定します。	HP-UX /PA 版： 06-70 Windows/IPF 版： 06-70 その他： 06-50	
	-XX:[+ -]HitachiThreadDumpWithHashcode	スレッド情報にハッシュコードを出力するかどうかを指定します。	07-00	
	-XX:[+ -]HitachiThreadDumpWithCpuTime	スレッド情報にユーザ CPU 時間とカーネル CPU 時間を出力するかどうかを指定します。	07-00	

分類	オプション名称	概要	VR	関連情報
拡張スレッドダンプ 機能オプション	-XX: [+ -]HitachiThreadDumpWithCpuTime	HP-UX の場合、この機能は使用できません。オプションを指定しても無視されます。	07-00	
	-XX: [+ -]HitachiThreadDumpWithBlockCount	スレッド情報に処理をブロックした回数と待ち状態になった回数を出力するかどうかを指定します。	07-00	
JavaVM ログファイル オプション	-XX:HitachiJavaLog <sup>*1</sup>	ログファイル名のプリフィックスを指定します。	Solaris 版： 06-50 その他： 05-02	
	-XX:HitachiJavaLogFileSize <sup>*1</sup>	1 ファイルの最大ファイルサイズを指定します。	Solaris 版： 06-50 その他： 05-02	
	-XX: [+ -]HitachiJavaLogNoMoreOutput <sup>*1</sup>	ログファイル作成時に、入出力エラーが発生した場合の動作について指定します。	Solaris 版： 06-50 その他： 05-02	
	-XX:HitachiJavaLogNumberOfFile <sup>*1</sup>	作成するログファイルの最大ファイル数を指定します。	Solaris 版： 06-50 その他： 05-02	
	-XX: [+ -]JavaLogAsynchronous	ログファイルの非同期出力機能を有効にします。	09-60	
詳細時間出力オプション	-XX:[+ -]HitachiOutputMilliTime	ミリ秒までの時間を出力するかどうかを指定します。	Solaris 版： 06-50 HP-UX /PA 版： 06-70 その他： 06-00	
拡張 verbosegc 機能 オプション	-XX:[+ -]HitachiVerboseGC <sup>*2</sup>	GC が発生した時の拡張 verbosegc 情報を出力するかどうかを指定します。	Solaris 版： 06-50 その他： 05-02	

分類	オプション名称	概要	VR	関連情報
拡張 verbosegc 機能 オプション	-XX:[+ -]HitachiCommaVerboseGC	拡張 verbosegc 情報を CSV 形式で出力するかどうかを指定します。	Solaris 版： 06-50 その他： 05-02	
	-XX:HitachiVerboseGCIntervalTime	拡張 verbosegc 情報を出力する時間の間隔を指定します。	Solaris 版： 06-50 その他： 05-02	
	-XX: [+ -]HitachiVerboseGCPrintCause	GC の要因内容を出力するかどうかを指定します。	Solaris 版： 06-50 その他： 05-02	
	-XX:[+ -]HitachiVerboseGCPrintDate	拡張 verbosegc 情報に日付を出力するかどうかを指定します。	Solaris 版： 06-50 その他： 05-02	
	-XX:[+ -]HitachiVerboseGCCpuTime	GC のプロセッサ時間を出力するかどうかを指定します。  HP-UX の場合、この機能は使用できません。オプションを指定しても無視されます。	07-00	
	-XX: [+ -]HitachiVerboseGCPrintTenuring Distribution	GC 発生時に JavaVM ログファイルへ Survivor 領域のオブジェクトの年齢分布を出力します。	08-00	
	-XX: [+ -]HitachiVerboseGCPrintJVMInternalMemory	JavaVM 内部で管理しているヒープ情報を JavaVM ログファイルへ出力するかどうかを指定します。	08-53	
	-XX: [+ -]HitachiVerboseGCPrintThreadCount	Java スレッドの数を監視するために、Java スレッドの数を JavaVM ログファイルに出力するかどうかを指定します。	Linux (x86/ AMD64 & Intel EM64T) 版： 08-53 Windows x86: 08-53	

分類	オプション名称	概要	VR	関連情報
拡張 verbosegc 機能 オプション	-XX: [+ -]HitachiVerboseGCPrintThreadC ount	Java スレッドの数を監視するために、Java スレッドの数を JavaVM ログファイルに出力するかどうかを指定します。	Windows x64: 08-53 Windows x86 (JDK 6 ベースの 場合): 08-70	
	-XX: [+ -]HitachiVerboseGCPrintDeleteOn Exit	java.io.File.deleteOnExit()を呼び出したことによって JavaVM が確保した累積のヒープサイズとメソッドの呼び出し回数を JavaVM ログファイルに出力するかどうかを指定します。	Linux (x86/ AMD64 & Intel EM64T) 版: 08-53 Windows x86: 08-53 Windows x64: 08-53 Windows x86 (JDK 6 ベースの 場合): 08-70	
コードキャッシュ領域 情報出力機能オプション	-XX:[+ -]PrintCodeCacheInfo	コードキャッシュ領域の使用量を出力するかどうか、また、使用量がしきい値に達したことを知らせるメッセージを出力するかどうかを指定します。	09-50	「機能解説 保守/移行編」の [5.7.3 コードキャッシュ領域に関するログの内容]
	-XX:CodeCacheInfoPrintRatio	コードキャッシュ領域の使用量がしきい値に達したことを知らせるメッセージを出力する契機となる、コードキャッシュ領域の使用率を指定します。	09-50	
	-XX: [+ -]PrintCodeCacheFullMessage	Java メソッドが JIT コンパイルの対象になった場合、コードキャッシュ領域が枯渇していたときにメッセージを出力するかどうかを指定します。	09-50	「機能解説 保守/移行編」の [5.7.3 コードキャッシュ領域に関するログの内容]

分類	オプション名称	概要	VR	関連情報
OutOfMemoryError 発生時の拡張機能オ プション	-XX: [+ -]HitachiOutOfMemoryCause*2	OutOfMemoryError 発 生時の発生要因種別を出 力するかどうかを指定し ます。	Solaris 版： 06-50 その他： 05-02	
	-XX: [+ -]HitachiOutOfMemoryStackTrace *2	OutOfMemoryError 発 生時のスタックトレース を出力するかどうかを指 定します。	Solaris 版： 06-50 その他： 05-02	
	- XX:HitachiOutOfMemoryStackTraceL ineSize	OutOfMemoryError 発 生時に出力するスタック トレースの1行の文字 数を指定します。	Solaris 版： 06-50 その他： 05-02	
	-XX:[+ -]HitachiOutOfMemorySize*2	OutOfMemoryError 発 生時に要求したメモリの サイズを出力します。	HP-UX /PA 版： 06-70 Windo ws/IPF 版： 06-70 その他： 06-50	
	-XX:[+ -]HitachiOutOfMemoryAbort	OutOfMemoryError 発 生時、メッセージとメモ リダンプを出力して強制 終了するかどうかを指定 します。	HP-UX /PA 版： 06-70 Windo ws/IPF 版： 06-70 その他： 06-50	
	-XX: [+ -]HitachiOutOfMemoryAbortThre adDump	OutOfMemoryError 発 生時にスレッドダンプを 出力かどうかを指定しま す。	HP-UX /PA 版： 06-70 Windo ws/IPF 版： 06-70 その他： 06-50	

分類	オプション名称	概要	VR	関連情報
OutOfMemoryError 発生時の拡張機能オ プション	-XX: [+ -]HitachiOutOfMemoryAbortThre adDumpWithJHeapProf	-XX: +HitachiOutOfMemor yAbortThreadDump で出力するスレッドダ ンプログファイルにクラス 別統計情報を出力しま す。	08-00	
	-XX: [+ -]HitachiOutOfMemoryHandling	OutOfMemory ハンド リング機能を有効にする かどうかを指定します。	08-53	
	- XX:HitachiOutOfMemoryHandlingMa xThrowCount	OutOfMemory ハンド リング機能を有効にした 場合の, Java ヒープ不足 または Metaspace, Compressed Class Space 不足が原因の OutOfMemory 発生回 数合計値の 1 時間当 たりの上限値を指定しま す。	08-53	
クラスライブラリト レース機能オプショ ン	-XX:[+ -]HitachiJavaClassLibTrace <sup>※2</sup>	クラスライブラリのス タックトレースを出力す るかどうかを指定しま す。	HP-UX /PA 版: 06-70 Windo ws/IPF 版: 06-70 その他: 06-50	
	- XX:HitachiJavaClassLibTraceLineSize	クラスライブラリのス タックトレースの 1 行 の文字数を指定します。	HP-UX /PA 版: 06-70 Windo ws/IPF 版: 06-70 その他: 06-50	
ローカル変数情報出 力機能オプション	-XX:[+ -]HitachiLocalsInThrowable	例外発生時のスタックト レースに, ローカル変数 情報を出力するかどうか を指定します。	HP-UX /PA 版: 06-70 Windo ws/IPF 版: 06-70	

分類	オプション名称	概要	VR	関連情報
ローカル変数情報出力機能オプション	-XX:[+ -]HitachiLocalsInThrowable	例外発生時のスタックトレースに、ローカル変数情報を出力するかどうかを指定します。	その他： 06-50	
	-XX:[+ -]HitachiLocalsInStackTrace	スレッドダンプ出力時のスタックトレースに、ローカル変数情報を出力するかどうかを指定します。	HP-UX /PA 版： 06-70 Windows/IPF 版： 06-70 その他： 06-50	「機能解説 保守/移行編」の「5.10 JavaVM スタックトレース情報」
	-XX:[+ -]HitachiLocalsSimpleFormat	ローカル変数情報出力を、簡易フォーマットにするかどうかを指定します。	HP-UX /PA 版： 06-70 Windows/IPF 版： 06-70 その他： 06-50	「機能解説 保守/移行編」の「5.10 JavaVM スタックトレース情報」
	-XX:[+ -]HitachiTrueTypeInLocals	ローカル変数情報出力時に、ローカル変数オブジェクトの実際の型名を文字列として出力するかどうかを指定します。	HP-UX /PA 版： 06-70 Windows/IPF 版： 06-70 その他： 06-50	「機能解説 保守/移行編」の「5.10 JavaVM スタックトレース情報」
	-XX:HitachiCallToString	ローカル変数情報出力時に、ローカル変数オブジェクトの変数値を文字列として出力するかどうかを指定します。	HP-UX /PA 版： 06-70 Windows/IPF 版： 06-70 その他： 06-50	「機能解説 保守/移行編」の「5.10 JavaVM スタックトレース情報」
システムリソース解除オプション	-XX:[+ -]HitachiFullCore	システムリソース RLIMIT_CORE の設定を変更するかどうかを指定します。	Solaris 版： 06-50	



分類	オプション名称	概要	VR	関連情報
システムリソース解除オプション	-XX:[+ -]HitachiFullCore	このオプションは UNIX 用です。	その他： 05-02	
スワップ領域の予約オプション	-XX:[+ -]HitachiReserveSwapSpace	JavaVM の実行に必要なとなる最大のスワップ領域を、JavaVM の起動時に予約するかどうかを指定します。 このオプションは HP-UX 用です。	HP-UX /PA 版： 06-70 HP-UX /IPF 版： 06-00	
明示管理ヒープで指定するオプション	-XX:[+ -]HitachiUseExplicitMemory	明示管理ヒープ機能の有効、無効を指定します。	08-00	「機能解説 拡張編」の「8. 明示管理ヒープ機能を使用した FullGC の抑止」
	-XX:HitachiExplicitHeapMaxSize	Explicit ヒープ全体の最大サイズを指定します。	08-00	
	-XX:HitachiExplicitMemoryLogLevel	明示管理ヒープ機能のイベントログのレベルを指定します。	08-00	
	-XX:HitachiExplicitMemoryJavaLog	本機能によるログを出力するファイル名（パス名を含むことが可能）またはディレクトリ名を指定します。	08-00	
	-XX:HitachiExplicitMemoryJavaLogFileSize	1 ファイルの最大ファイルサイズをバイト単位で設定します。	08-00	
	-XX:HitachiExplicitMemoryJavaLogNumberOfFile	作成する最大ファイル数を指定します。最大ファイル数を超えた場合は、再度最初に作成したファイルへ出力（ラップアラウンド）します。	08-00	
	-XX:[+ -]HitachiExplicitMemoryMoveToTenuredFirst	Explicit メモリブロックの解放処理でのオブジェクトの移動先を指定します。	08-50	「機能解説 拡張編」の「8. 明示管理ヒープ機能を使用した FullGC の抑止」
	-XX:[+ -]HitachiExplicitMemoryAutoReclaim	明示管理ヒープ機能の自動解放機能を有効にするかどうか指定します。	08-50	「機能解説 拡張編」の「8.7 自動解放機能が有効な場合の Explicit メモ

分類	オプション名称	概要	VR	関連情報
明示管理ヒープで指定するオプション	-XX: [+ -]HitachiExplicitMemoryAutoReclaim	明示管理ヒープ機能の自動解放機能を有効にするかどうか指定します。	08-50	リブロックの解放]
明示管理ヒープ機能バージョン互換オプション	-XX: [+ -]HitachiExplicitMemoryCompatibleToV8	Explicit メモリブロックを確保する方法を、08-00 と同様にするかどうか指定します。	08-50	
明示管理ヒープ自動配置設定ファイルオプション	-XX:[+ -]HitachiAutoExplicitMemory	Explicit メモリブロックの自動配置機能を有効にするかどうか指定します。	08-50	「機能解説 拡張編」の「8.13.2 自動配置設定ファイルを使った明示管理ヒープ機能の使用」
	-XX:HitachiAutoExplicitMemoryFile	Explicit メモリブロックの自動配置機能で利用する自動配置設定ファイルのパスを指定します。	08-50	「機能解説 拡張編」の「8.13.2 自動配置設定ファイルを使った明示管理ヒープ機能の使用」
明示管理ヒープ機能の Explicit メモリブロックへのオブジェクト移動制御オプション	-XX:ExplicitMemoryFullGCPolicy	FullGC 発生時に、参照関係に基づくオブジェクトの Java ヒープから Explicit メモリブロックへの移動を制御するかどうかを指定します。	09-50	「機能解説 拡張編」の「8. 明示管理ヒープ機能を使用した FullGC の抑止」
明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能で指定するオプション	-XX: [+ -]ExplicitMemoryUseExcludeClass	明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能を有効にするかどうかを指定します。	09-50	
	- XX:ExplicitMemoryExcludeClassListFile	明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能で利用する、明示管理ヒープ機能適用除外設定ファイルのパスを指定します。	09-50	
	- XX:ExplicitMemoryNotExcludeClassListFile	明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能で利用する、明示管理ヒープ機能適用除外無効設定ファイルのパスを指定します。	09-50	
HTTP セッションで利用する Explicit	-XX: [+ -]HitachiExplicitMemoryAutoReclaim	HTTP セッションで利用する Explicit ヒープの省メモリ化機能を有効	08-70	「機能解説 拡張編」の「8. 明示管理ヒープ

分類	オプション名称	概要	VR	関連情報
ヒープの省メモリ化オプション	-XX: [+ -]HitachiExplicitMemoryAutoRefr eclaim	にするかどうかを指定します。	08-70	「機能を使用した FullGC の抑止」
リソースの上限値指定オプション	- XX:HitachiJITCompileMaxMemorySize	JIT コンパイル時に確保するメモリの上限値を指定します。	08-53	
	-XX:HitachiThreadLimit	スレッド数の上限値を指定します。	08-53	
JIT コンパイラ稼働継続機能オプション	-XX:[+ -]JITCompilerContinuation	JIT コンパイラ稼働継続機能を有効にするかどうかを指定します。	09-50	
圧縮オブジェクトポインタ機能で使用する Java オプション	-XX:[+ -]UseCompressedOops	圧縮オブジェクトポインタ機能の有効または無効の設定	09-60	「機能解説 保守/移行編」の「9.18 圧縮オブジェクトポインタ機能」

(凡例)

空欄：関連情報はありません。

注※1

JavaVM ログファイルについての設定です。

注※2

次のオプションを指定した場合、JavaVM ログファイルが出力されます。

-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace

-XX:+HitachiOutOfMemoryCause

-XX:+HitachiOutOfMemorySize

-XX:+HitachiVerboseGC

-XX:+HitachiJavaClassLibTrace

ポイント

JavaVM 拡張オプションのデフォルト値は、サーバごとに参照先が異なります。サーバ、およびアプリケーションごとの JavaVM 拡張オプションのデフォルト値の参照先を次の表に示します。

表 16-2 サーバ、およびアプリケーションごとの JavaVM 拡張オプションのデフォルト値の参照先

使用するサーバおよびアプリケーション	参照先
J2EE サーバ	2.3 usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル)
バッチサーバ	3.2 usrconf.cfg (バッチサーバ用オプション定義ファイル)
Web コンテナサーバ (互換機能)	マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 互換編」の「3.11.2 usrconf.cfg (Web コンテナサーバ用オプション定義ファイル)」
cjclstartap コマンドで起動する Java アプリケーション	14.2 usrconf.cfg (Java アプリケーション用オプション定義ファイル)
そのほかの Java アプリケーション	16.4 Application Server で指定できる Java HotSpot VM のオプションのデフォルト値

なお、JavaVM 拡張オプションを簡易構築定義ファイルに指定する場合は、「param-name 指定値」に add.jvm.arg を指定した場合に指定できる「param-value の指定内容」に JavaVM 拡張オプションを指定してください。

---

## 16.2 JavaVM 拡張オプションの詳細

---

JavaVM 拡張オプションの詳細について説明します。

なお、本文中では、次の Java プログラムを例として使用しています。

### Java プログラム例 1

---

```
class Example1 {
    public static void main(String[] args) {
        Example1 e1 = new Example1();
        Object obj = new Object();
        e1.method(1, '0', obj); // 5行目
    }

    void method(int l1, char l2, Object l3) {
        float l4 = 4.0f;
        boolean l5 = true;
        double l6 = Double.MAX_VALUE; // double型の最大値
        Object[] l7 = new Object[10];

        try {
            <例外発生!> // 15行目
        } catch (Exception e) {
            e.printStackTrace();
        }
    }
}
```

---

### Java プログラム例 2

---

```
class Example2 {
    public static void main(String[] args) {
        Example2 e2 = new Example2();
        e2.method(); // 4行目
    }

    synchronized void method() {
        int l1 = 1;
        float l2 = 2.0f;
        String l3 = "local 3";
        Character l4 = new Character('X');
        Object l5 = new Thread();
        Object[] l6 = new Thread[10];

        <ここでスレッドダンプ出力!> // 15行目
    }
}
```

---

### Java プログラム例 3

---

```
class Example3 {
    public static void main(String[] args) {
        Example3 e3 = new Example3();
        e3.method(); // 4行目
    }

    void method() {
        String l1 = "local 1";
        StringBuffer l2 = new StringBuffer(l1);
        l2.append(" + local 2");
        Boolean l3 = new Boolean(false);
        Character l4 = new Character('X');
        Long l5 = new Long(Long.MIN_VALUE); // long型の最小値
        Object l6 = new Thread();
        Object[] l7 = new Thread[10];

        try {
            <例外発生!> // 18行目
        } catch (Exception e) {
            e.printStackTrace();
        }
    }

    public String toString() {
        return "I am an Example3 instance.";
    }
}
```

---

---

```
}
}
```

---

## -XX:+Hitachi (一覧表示オプション)

---

### 形式

-XX:+Hitachi

### 説明

JavaVM 拡張オプションを一覧表示します。

このオプションは、Java プログラムを実行しません。また、J2EE サーバの起動オプションに指定した場合、J2EE サーバは起動されません。

## -XX:[+|-]HitachiThreadDump (拡張スレッドダンプ情報出力オプション)

---

### 形式

-XX:+HitachiThreadDump

-Xrs オプションが指定されていない場合、スレッドダンプ出力時に拡張スレッドダンプ情報を出力します。

-XX:-HitachiThreadDump

スレッドダンプ出力時に標準のスレッドダンプ情報を出力します。

### 説明

拡張スレッドダンプ情報を出力するかどうかを指定します。

スレッドダンプは、標準出力、および次に示すファイルに出力されます。

### デフォルト値

- -XX:+HitachiThreadDump

### スレッドダンプ出力先

デフォルトでは、JavaVM 実行時のカレントディレクトリです。環境変数 JAVACOREDIR を指定することで、出力先を変更することができます。

### スレッドダンプ出力ファイル名

javacore<プロセス番号>.<YYMMDDhhmmss>\*.txt

注※

YY : 年 (西暦で下2けた) , MM : 月 (2けた) , DD : 日 (2けた)

hh : 時間 (24時間表記) , mm : 分 (2けた) , ss : 秒 (2けた)

スレッドダンプ情報の構成を、次に示します。

表 16-3 スレッドダンプ情報の構成

出力情報	内容
ヘッダ	スレッドダンプを開始した日付および時刻、JavaVM バージョン情報、起動コマンドラインを出力します。
システム設定	次の情報を出力します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• JDK の実行環境のインストールディレクトリ</li> <li>• JDK を構成するライブラリのインストールディレクトリ</li> <li>• システムクラスパス</li> <li>• Java コマンドオプション</li> </ul>
動作環境	次の情報を出力します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名</li> <li>• OS バージョン</li> <li>• CPU 情報</li> <li>• リソース情報（UNIX の場合だけ）</li> </ul>
メモリ情報	Windows の場合、次の情報を出力します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• メモリ使用状況</li> <li>• 物理メモリ使用状況</li> <li>• 仮想メモリ使用状況</li> <li>• ページング使用量</li> </ul>
Java ヒープ情報	Java ヒープの各世代のメモリ使用状況を出力します。
JavaVM 内部メモリマップ情報	JavaVM 自身の確保しているメモリの領域情報を出力します。
JavaVM 内部メモリサイズ情報	JavaVM 自身の確保しているメモリのサイズ情報を出力します。
アプリケーション情報	次の情報を出力します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• シグナルハンドラ</li> <li>• 環境変数</li> <li>• カレントディレクトリ情報</li> </ul>
ライブラリ情報	ローディングされているライブラリの情報を出力します。
スレッド情報 <スレッド 1> : <スレッド n>	スレッドごとにスレッド情報を出力します。現存する全スレッドのスタックトレースを出力します。
Java モニタダンプ※	Java モニタオブジェクトの一覧を表示します。スレッド間の排他待ちの状況を確認できます。
JNI グローバル参照情報	JavaVM が保持している JNI のグローバル参照の数を出力します。JNI グローバル参照は、次の場合に作成されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• JavaVM が自身の起動や実行のために必要な場合。</li> <li>• JNI がサポートする NewGlobalRef 関数を発行した場合。</li> </ul>

出力情報	内容
Explicit ヒープ情報	Explicit ヒープ情報では、Explicit ヒープ全体での利用状況を表示します。 Explicit ヒープ利用の有無にかかわらず、-XX: +HitachiUseExplicitMemory が有効の場合は必ず出力されます。
Explicit メモリブロック情報	Explicit メモリブロック情報では、次の情報を出力します。ただし、Explicit メモリブロックが 1 つも存在しない場合は何も出力されません。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Explicit メモリブロックごとの利用状況</li> <li>• オブジェクト統計情報 (eheapprof コマンド実行時に出力)</li> <li>• オブジェクト解放率情報 (-freeratio オプションを指定した eheapprof コマンド実行時に出力)</li> </ul>
フッタ	スレッドダンプを終了した日付および時刻を表示します。

注※ UNIX の場合、notify 待ちの一覧が表示されない場合があります。

## 出力形式

### ヘッダ

EEE MMM dd hh:mm:ss yyyy※

Full thread dump Java HotSpot(TM) <VM type> (25.20-b23-CDK0970-<ビルド日> mixed mode)  
<起動コマンドライン>  
...

### 注※

EEE は曜日、MMM は月、dd は日を表します。また、hh は時間、mm は分、ss は秒、yyyy は年 (西暦) を表します。

<VM type> は Client VM, Server VM または 64-Bit Server VM のどれかを表します。

### システム設定

#### System Properties

-----  
Java Home Dir : <JDK実行環境インストールディレクトリ>  
Java DLL Dir : <JDKを構成するライブラリのインストールディレクトリ>  
Sys Classpath : <システムクラスパス>  
User Args :  
<Javaコマンドオプション1>  
<Javaコマンドオプション2>  
...

### 動作環境 (Windows の場合)

#### Operating Environment

-----  
Host : <ホスト名>:<IPアドレス>  
OS : <OSバージョン>  
CPU : <CPU種別>, <利用可能CPU数/システム全体のCPU数>

### 動作環境 (UNIX の場合)

#### Operating Environment

-----  
Host : <ホスト名>:<IPアドレス>  
OS : <OSバージョン>  
CPU : <CPU種別>, <利用可能CPU数/システム全体のCPU数>

#### Resource Limits -

RLIMIT\_CPU : <プロセスで使用可能な秒数>  
RLIMIT\_FSIZE : <最大ファイルサイズ(単位: バイト)>  
RLIMIT\_DATA : <malloc可能なサイズ(単位: バイト)>  
RLIMIT\_STACK : <スタックの最大サイズ(単位: バイト)>  
RLIMIT\_CORE : <coreの最大サイズ(単位: バイト)>



---

```
RLIMIT_RSS      :<プロセスの常駐サイズ(単位:バイト)>
RLIMIT_AS      :<プロセストータルの利用可能メモリ(単位:バイト)>
RLIMIT_NOFILE  :<最大のファイルディスクリプタ値>
```

---

### メモリ情報 (Windows の場合)

---

#### Memory Status

```
Memory in use  :<メモリ使用状況(単位:パーセント)>
Physical memory :<物理メモリ使用量>※ free
Virtual memory  :<仮想メモリ使用量>※ free
Paging file     :<ページング使用量>※ free
```

---

#### 注※

<利用可能サイズ>/<総サイズ> の形式で表示されます (単位:バイト)。

### Java ヒープ情報 (SerialGC を使用している場合)

---

#### Heap Status

```
def new generation max<最大の容量>, total<現在の容量>, used<使用中メモリ> (<最大の容量に対する使用率>%
used/max, <現在の容量に対する使用率>% used/total)
    [<領域先頭アドレス>, <コミット済み領域の末尾アドレス>, <予約済み領域の末尾アドレス>]
eden space <現在の容量>, <使用率>% used [<領域先頭アドレス>, <使用中領域の先頭アドレス>, <予約済み領域の末尾
アドレス>]
from space <現在の容量>, <使用率>% used [<領域先頭アドレス>, <使用中領域の先頭アドレス>, <予約済み領域の末
尾アドレス>]
to space <現在の容量>, <使用率>% used [<領域先頭アドレス>, <使用中領域の先頭アドレス>, <予約済み領域の末
尾アドレス>]
tenured generation max<最大の容量>, total<現在の容量>, used<使用中メモリ> (<最大の容量に対する使用率>%
used/max, <現在の容量に対する使用率>% used/total)
    [<領域先頭アドレス>, <コミット済み領域の末尾アドレス>, <予約済み領域の末尾アドレス>]
the space <現在の容量>, <使用率>% used [<領域先頭アドレス>, <使用中領域の先頭アドレス>, <次の空きブロックの
先頭アドレス>, <予約済み領域の末尾アドレス>]
Metaspace max<最大の容量>, capacity<コミット済みの領域からフリー領域を除いたメモリサイズ>, committed<コ
ミット済みのメモリサイズ>, reserved<予約済みのメモリサイズ>, used<使用中メモリ> (<最大の容量に対する使用率>%
used/max, <現在の容量に対する使用率>% used/total)
    class space max<最大の容量>, capacity<コミット済みの領域からフリー領域を除いたメモリサイズ>, committed<
コミット済みのメモリサイズ>, reserved<予約済みのメモリサイズ>, used<使用中メモリ> (<最大の容量に対する使用率>%
used/max, <現在の容量に対する使用率>% used/total)
    [<領域先頭アドレス>, <使用中領域の先頭アドレス>, <コミット済み領域の末尾アドレス>, <予約
済み領域の末尾アドレス>]
```

---

#### 注

容量およびメモリサイズの単位はキロバイトです。

### Java ヒープ情報 (G1GC を使用している場合)

---

#### Heap Status

```
garbage-first heap total<現在の容量>, used<使用中のメモリ> [<領域先頭アドレス>, <コミット済みの末尾アドレス>,
<予約済み領域のアドレス>]
region size<1リージョンのサイズ>, <New領域の使用リージョン数> young (<New領域の使用メモリ>), <Survivor領
域の使用リージョン数> survivors (<Survivor領域の使用メモリ>)
Metaspace max<最大の容量>, capacity<コミット済みの領域からフリー領域を除いたメモリサイズ>, committed<
コミット済みのメモリサイズ>, reserved<予約済みのメモリサイズ>, used<使用中メモリ> (<最大の容量に対する使用率>%
used/max, <現在の容量に対する使用率>% used/committed)
class space max<最大の容量>, capacity<コミット済みの領域からフリー領域を除いたメモリサイズ>, committed<
コミット済みのメモリサイズ>, reserved<予約済みのメモリサイズ>, used<使用中メモリ> (<最大の容量に対する使用率>%
used/max, <現在の容量に対する使用率>% used/committed)
    [<領域先頭アドレス>, <使用中領域の先頭アドレス>, <コミット済み領域の末尾アドレス>, <予約済み領
域の末尾アドレス>]
```

---

### JavaVM 内部メモリマップ情報

---

#### JVM Internal Memory Map

```
<メモリ確保関数>:address = <開始アドレス> - <終了アドレス> (size:<サイズ>)
```

---

#### 注

<メモリ確保関数>: mmap()かmalloc()のどちらかが出力されます。

<開始アドレス>: メモリ領域の開始アドレスが 16 進で出力されます。

<終了アドレス>: メモリ領域の終了アドレスが 16 進で出力されます。

<サイズ>: 確保しているメモリ領域のサイズが出力されます (単位: バイト)。

### JavaVM 内部メモリサイズ情報

---

#### JVM Internal Memory Status

```
Heap Size      :<確保しているメモリサイズ>※
Alloc Size     :<使用中のメモリサイズ>※
Free Size      :<未使用のメモリサイズ>※
```

---

注※

単位: バイト

### アプリケーション情報 (Windows の場合)

---

#### Application Environment

##### Signal Handlers -

```
SIGINT        :<シグナルハンドラ情報>
SIGILL        :<シグナルハンドラ情報>
...
SIGBREAK     :<シグナルハンドラ情報>
SIGABRT      :<シグナルハンドラ情報>
```

##### Environment Variables -

<環境変数>=<値>

##### Cueevent Directory -

C:%Program Files%Hitachi%Cosminexus%CC%...

---

### アプリケーション環境 (UNIX の場合)

---

#### Application Environment

##### Signal Handlers -※1

```
SIGHUP       :<シグナルハンドラ情報>
SIGINT       :<シグナルハンドラ情報>
...
SIGSOUND     :<シグナルハンドラ情報>
SIGSAK       :<シグナルハンドラ情報>
```

##### Signal Handlers -

シグナル種別: [シグナルハンドラアドレス], sa\_mask[0]=シグナルマスク, sa\_flags=特殊フラグ

##### Environment Variables -※2

<環境変数>=<値>

##### Current Directory -

/opt/Cosminexus/CC/server/...

---

注※1

次の情報が表示されます。

- ・シグナルハンドラがインストールされている場合は、そのアドレス。
- ・SIG\_DFL である場合は、default。
- ・SIG\_IGN である場合は、ignored。

注※2

次の情報が表示されます。

- ・シグナル種別には、/usr/include/sys/signal.h に定義されているシグナル名。
- ・シグナルハンドラアドレスには、シグナルハンドラのアドレスが 16 進数で出力されます。ライブラリ名+オフセットという形式で表示されることもあります。
- ・シグナルマスクには、sigaction() で取り出せる構造の sa\_mask フィールド値が 16 進数で出力されます。

- ・特殊フラグには、sigaction()で取り出せる構造の sa\_flags フィールド値が 16 進数で出力されます。

### ライブラリ情報 (Windows, Linux の場合)

---

```
Loaded Libraries
-----
Dynamic Libraries :
<開始アドレス>-<終了アドレス> <コマンド>
<開始アドレス>-<終了アドレス> <ライブラリ>
...
```

---

### ライブラリ情報 (AIX の場合)

---

```
Loaded Libraries
-----
<コマンド>
  text      :<開始アドレス>-<終了アドレス> (サイズ)
  data      :<開始アドレス>-<終了アドレス> (サイズ)
<ライブラリ>
  text      :<開始アドレス>-<終了アドレス> (サイズ)
  data      :<開始アドレス>-<終了アドレス> (サイズ)
...
```

---

### スレッド情報

---

```
"<スレッド名>" <daemon> prio=<優先度> jid=<ハッシュ値> tid=<スレッドID> nid=<nativeID> <status> [開始アドレ
ス... 終了アドレス]
  java.lang.Thread.State: <スレッドの現在のステータス>※
  stack=[<スタック開始アドレス>..<YellowPageアドレス>..<RedPageアドレス>..<スタック終了アドレス>]
  [user cpu time=<ユーザー時間>ms, kernel cpu time=<カーネル時間>ms] [blocked count=<ブロック回数>, waited
count=<待機回数>]
  at <クラス名>.<メソッド名>(<メソッド情報>)
...
```

---

注※ <スレッドの現在のステータス>の情報は、JDK 6 がベースの場合で、バージョンが 08-10 以降のときにだけ出力されます。

出力内容を説明します。

#### <スレッド名>

Thread クラスのコンストラクタに指定されたスレッド名称が出力されます。

- <daemon> : デーモンスレッドである場合に、"daemon"と出力されます。
- <優先度> : Thread#setPriority で設定された優先度が出力されます。
- <ハッシュ値> : System.identityHashCode()を呼び出して得られる値と同一の値が 8 けたの 16 進数で出力されます。
- <スレッド ID> : スレッドオブジェクトのメモリ上のアドレス。
- <nativeID> : OS レベルのスレッド ID。
- <status> : スレッドの状態。  
   runnable : 実行中または実行可能なスレッド  
   in Object.wait(), waiting for monitor entry または waiting on condition : モニタロック待ちのスレッド  
   sleeping : 中断状態のスレッド
- <開始アドレス> : Java フレームの最高位スタックアドレスが 16 進数で出力されます。
- <終了アドレス> : JavaLock のある最高位スタックアドレスが 16 進数で出力されます。
- <ユーザー時間> : スレッド開始からのユーザー時間がミリ秒単位で出力されます。
- <カーネル時間> : スレッド開始からのカーネル時間がミリ秒単位で出力されます。
- <ブロック回数> : スレッド開始から、処理がブロックされた回数が出力されます。

- <待機回数>: スレッド開始から、処理が待ち状態になった回数が出力されます。

#### <スレッドの現在のステータス>

スレッドの現在のステータスを表すメッセージが出力されます。メッセージの内容は java.lang.Thread.State 列挙型に対応します。

#### <スタック開始アドレス>

スタック開始アドレスが 16 進数で出力されます。

#### <YellowPage アドレス>

スタック Yellow ガードページ先頭アドレスが 16 進数で出力されます。

#### <RedPage アドレス>

スタック Red ガードページ先頭アドレスが 16 進数で出力されます。

#### <スタック終了アドレス>

スタック終了アドレスが 16 進数で出力されます。

#### <クラス名>

クラス名が出力されます。

#### <メソッド名>

メソッド名が出力されます。

#### <メソッド情報>

次のメソッド情報が出力されます。

- Native Method  
ネイティブメソッドの場合に出力されます。
- ファイル名: 行番号  
Java メソッドで行番号付きでコンパイルされている場合に出力されます。
- Unknown Source  
Java メソッドで行番号なしでコンパイルされている場合に出力されます。

### Java モニタダンプ

---

#### Java monitor

<ロックオブジェクト>@<ハッシュコード> <オーナー情報>  
<待機状態>:<待機スレッド数>  
<待機スレッド情報>

---

出力内容を説明します。

#### <ロックオブジェクト>

ロック対象オブジェクトのクラス名が出力されます。

#### <ハッシュコード>

Object.hashCode で得られるハッシュコードが出力されます。

#### <オーナー情報>

- owner "<スレッド名>"<スレッド ID>  
オーナーがある場合に出力されます。
- no owner  
オーナーがない場合に出力されます。

## &lt;待機状態&gt;

- ... waiting to enter  
メソッド実行待ちの場合に出力されます。
- ... waiting to be notified  
通知待ちの場合に出力されます。

## &lt;待機スレッド数&gt;

スレッド数が出力されます。

## &lt;待機スレッド情報&gt;

「<スレッド名> <スレッド ID>」の形式で出力されます。

## JNI グローバル参照数の情報

## JNI Information

-----  
JNI global references: <JNIグローバル参照数>

出力内容を説明します。

## &lt;JNI グローバル参照数&gt;

JavaVM が保持しているグローバル参照の数が出力されます。

## 注

JNI グローバル参照は JavaVM の内部でも再利用されるため、JNI がサポートする DeleteGlobalRef 関数を発行して JNI グローバル参照を削除しても、数値は減少しません。また、NewGlobalRef 関数を発行して JNI グローバル参照を新規作成しても、JavaVM が再利用した JNI グローバル参照を割り当てた場合は数値は増加しません。

## Explicit ヒープ情報および Explicit メモリブロック情報

## Explicit Heap Status

-----  
max <EH\_MAX>, total <EH\_TOTAL>, used <EH\_USED>, garbage <EH\_GARB> (<EH\_PER1> used/max, <EH\_PER2> ¥ used/total, <EH\_PER3> garbage/used), <EM\_NUMS> spaces exist

Explicit Memories(<EM\_MGR\_PTR>)

"<EM\_NAME>" eid=<EID>(<EM\_PTR>)/<EM\_TYPE>, total <EM\_TOTAL>, used <EM\_USED>, garbage <EM\_GARB> ¥ (<EM\_PER1> used/total, <EM\_PER2> garbage/used, <FL\_BLOCKS> blocks) <EM\_STAT>

deployed objects

Size	Instances	FreeRatio	Class
<ISIZE>	<INUM>	<FRATIO>	<CNAME>
<AISIZE>	<AINUM>	total	

...

注意事項を次に示します。

- Explicit ヒープ情報と Explicit メモリブロック情報の間には、空行が 1 行あります。
- Explicit メモリブロック情報の出力順序（どの Explicit メモリブロックから出力するか）は未定義とします。
- "<EM\_NAME>"の前には、半角 2 文字分の空白があります。
- deployed objects の前には、半角 4 文字分の空白があります。
- <ISIZE>は、 \_\_\_\_\_ Size\_の"e"に行末をそろえて記載しています。
- <INUM>は、 \_\_Instances の最後"s"に行末をそろえて記載しています。
- <FRATIO>は、 \_\_FreeRatio\_の"o"に行末をそろえて記載しています。
- <CNAME>は、 \_\_Class\_\_\_\_\_ の最初から二つ目の"\_"に行末をそろえて記載しています。
- memory map の前には、半角 4 文字分の空白があります。
- 最後の行には空行が 1 行あります。したがって、Explicit メモリブロックごとの出力の間には空行が 1 行あります。

## フッタ

---

 Full thread dump completed.   EEE MMM dd hh:mm:ss yyyy※
 

---

## 注※

EEE は曜日, MMM は月, dd は日を表します。また, hh は時間, mm は分, ss は秒, yyyy は年 (西暦) を表します。

拡張スレッドダンプ情報との比較を, 次に示します。

表 16-4 標準スレッドダンプと拡張スレッドダンプの出力情報の比較

出力情報	標準スレッドダンプ	拡張スレッドダンプ
ヘッダ	×	○
システム設定	×	○
動作環境	×	○
メモリ情報 (Windows の場合だけ)	×	○
Java ヒープ情報	×	○
JavaVM 内部メモリマップ情報	×	○
JavaVM 内部メモリサイズ情報	×	○
アプリケーション環境	×	○
ライブラリ情報	×	○
スレッド情報	○	○*1
Java モニタダンプ	×	○
JNI グローバル参照数の情報	○	○
Explicit ヒープ情報	×	○
Explicit メモリブロック情報	×	○
フッタ	×	○
スレッドダンプ出力先	標準出力	標準出力*2 JavaVM ログファイル

## (凡例)

- : 出力されます。
- ×: 出力されません。

## 注※1

スタックの開始および終了のアドレス情報などが出力されます。

## 注※2

-XX:+HitachiThreadDumpToStdout オプションが指定された場合に出力されます。

## 注意事項

- 環境変数 JAVACOREDİR で指定したディレクトリへの出力に失敗した場合, カレントディレクトリに出力されます。

- カレントディレクトリへの出力に失敗した場合、標準エラー出力に出力されます。なお、この場合、スレッドダンプは標準出力に出力されません。
- 次に示すオプションの[+|-]指定が「-」の場合、スレッド情報の一部が出力されないご注意ください。

オプション名称	出力されない情報
-XX:[+ -]HitachiThreadDumpWithHashCode	<ハッシュ値>
-XX:[+ -]HitachiThreadDumpWithCpuTime	<ユーザー時間>, <カーネル時間>
-XX:[+ -]HitachiThreadDumpWithBlockCount	<ブロック回数>, <待機回数>

## -XX:[+|-]HitachiThreadDumpToStdout (拡張スレッドダンプ標準出力抑止オプション)

### 形式

-XX:+HitachiThreadDumpToStdout

拡張スレッドダンプを標準出力およびスレッドダンプ出力ファイルに出力します。

-XX:-HitachiThreadDumpToStdout

拡張スレッドダンプを標準出力に出力しません。スレッドダンプ出力ファイルだけに出力します。

### 説明

拡張スレッドダンプを標準出力へ出力するかどうかを指定します。

このオプションの指定にかかわらず、次のメッセージは出力されます。また、拡張スレッドダンプはJavaVM ログファイルへ出力されます。

Writing Java core to <ファイル名 (フルパス)>... OK

### デフォルト値

- -XX:+HitachiThreadDumpToStdout

### 前提オプション

- -XX:+HitachiThreadDump

## -XX:[+|-]HitachiThreadDumpWithHashCode (拡張スレッドダンプハッシュコード出力オプション)

### 形式

-XX:+HitachiThreadDumpWithHashCode

拡張スレッドダンプのスレッド情報にハッシュコードを出力します。

-XX:-HitachiThreadDumpWithHashCode

拡張スレッドダンプのスレッド情報にハッシュコードを出力しません。

### 説明

拡張スレッドダンプのスレッド情報にハッシュコードを出力するかどうかを指定します。

なお、ハッシュコードは、Java プログラムを実行しているスレッドに対して出力されます。JavaVM の内部動作用スレッドに対しては出力されません。

#### デフォルト値

- `-XX:+HitachiThreadDumpWithHashCode`

#### 前提オプション

- `-XX:+HitachiThreadDump`

## `-XX:[+|-]HitachiThreadDumpWithCpuTime` (拡張スレッドダンプ CPU 利用時間出力オプション)

---

### 形式

`-XX:+HitachiThreadDumpWithCpuTime`

拡張スレッドダンプのスレッド情報に、スレッド開始からのユーザー CPU 時間とカーネル CPU 時間を出力します。

`-XX:-HitachiThreadDumpWithCpuTime`

拡張スレッドダンプのスレッド情報に、スレッド開始からのユーザー CPU 時間とカーネル CPU 時間を出力しません。

### 説明

拡張スレッドダンプのスレッド情報に、ユーザー CPU 時間とカーネル CPU 時間を出力するかどうかを指定します。

なお、ユーザー CPU 時間とカーネル CPU 時間は、Java プログラムを実行しているスレッドに対して出力されます。JavaVM の内部動作用スレッドに対しては出力されません。

HP-UX の場合、この機能は使用できません。オプションを指定しても無視されます。

#### デフォルト値

- `-XX:+HitachiThreadDumpWithCpuTime`

#### 前提オプション

- `-XX:+HitachiThreadDump`

## `-XX:[+|-]HitachiThreadDumpWithBlockCount` (拡張スレッドダンプ ブロック回数出力オプション)

---

### 形式

`-XX:+HitachiThreadDumpWithBlockCount`

拡張スレッドダンプのスレッド情報に、スレッドが処理をブロックした回数と待ち状態になった回数を出力します。

`-XX:-HitachiThreadDumpWithBlockCount`

拡張スレッドダンプのスレッド情報に、スレッドが処理をブロックした回数と待ち状態になった回数を出力しません。



## 説明

拡張スレッドダンプのスレッド情報に、スレッドが処理をブロックした回数と待ち状態になった回数を出力するかどうかを指定します。

なお、ハッシュコードは、Java プログラムを実行しているスレッドに対して出力されます。JavaVM の内部動作スレッドに対しては出力されません。

### デフォルト値

- `-XX:+HitachiThreadDumpWithBlockCount`

### 前提オプション

- `-XX:+HitachiThreadDump`

## -XX:HitachiJavaLog (ログファイル名のプリフィックス指定オプション)

### 形式

`-XX:HitachiJavaLog:<文字列>`

### 説明

JavaVM ログファイルのプリフィックスおよびログファイルの出力先ディレクトリを指定します。

### デフォルト値

- `-XX:HitachiJavaLog:javalog`

### 前提オプション

次のどれかを指定します。

- `-XX:+HitachiVerboseGC`
- `-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace`
- `-XX:+HitachiOutOfMemoryCause`
- `-XX:+HitachiOutOfMemorySize`
- `-XX:+HitachiJavaClassLibTrace`
- `-XX:+JITCompilerContinuation`

### 引数

#### <文字列>

プリフィックスおよびパスを指定します。次の 3 種類の指定ができます。

#### プリフィックスを指定する場合

ログファイル名は、<文字列>??log (??は 01~99 の通し番号) で生成されます。例えば、<文字列>に"Samp"を指定すると、ログファイル名は Samp01.log になります。このオプションを指定しない場合、<文字列>には、"javalog"が設定されます。また、ログファイルはカレントディレクトリに出力されます。

#### パスを指定する場合

<文字列>にディレクトリを指定した場合、そのディレクトリにファイルが作成されます。ログファイル名は、<文字列>javalog??log (??は 01~99 の通し番号) で生成されます。

**パスとプリフィックスを同時に指定する場合**

<文字列>にディレクトリとプリフィックスを指定した場合、そのディレクトリにファイルが作成されます。ログファイル名は、<文字列>?.log (??は 01~99 の通し番号) で生成されます。例えば、<文字列>に"d:\*temp\*Samp"を指定すると、d:\*temp ディレクトリに、Samp01.log が生成されます。

**-XX:HitachiJavaLogFileSize (最大ログファイルサイズ指定オプション)****形式**

-XX:HitachiJavaLogFileSize=<整数値>

**説明**

ログファイルの単純増加を防ぐため、1 ファイルの最大ファイルサイズを指定します。最大ファイルサイズを超えた場合は、そのファイルへの出力は行いません。オプションの指定がない場合は、デフォルトで 256 キロバイトが設定されます。

**デフォルト値**

- -XX:HitachiJavaLogFileSize=256k

**前提オプション**

次のどれかを指定します。

- -XX:+HitachiVerboseGC
- -XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace
- -XX:+HitachiOutOfMemoryCause
- -XX:+HitachiOutOfMemorySize
- -XX:+HitachiJavaClassLibTrace
- -XX:+JITCompilerContinuation

**引数**

<整数値>

1024~2147483647 の範囲で整数値 (単位: バイト) を指定します。範囲外の値が指定された場合は 1024 が設定されます。負の値を指定した場合はエラーとなります。

**-XX:[+|-]HitachiJavaLogNoMoreOutput (ログファイル入出力エラー発生時指定オプション)****形式**

-XX:+HitachiJavaLogNoMoreOutput

ログファイル出力時にファイル入出力エラーが発生した場合、次のメッセージを標準エラー出力に出力し、ログ情報の出力を停止します。

---

```
Java logfile output failed. (errno=<エラーとなった入出力関数名>:<エラー番号>)
```

---

**-XX:-HitachiJavaLogNoMoreOutput**

ログファイル出力時にファイル入出力エラーが発生した場合、次のメッセージを標準エラー出力に出力し、ログ情報の出力先を標準エラー出力に変更して出力を続けます。

---

```
Java logfile output failed. (errno=<エラーとなった入出力関数名>:<エラー番号>) Changing output to stderr
```

---

**説明**

ログファイル作成時に入出力エラーが発生した場合に、ログ情報の出力方法について指定します。なお、どちらを指定した場合も、JavaVM の処理は継続されます。

**デフォルト値**

- -XX:+HitachiJavaLogNoMoreOutput

**前提オプション**

次のどれかを指定します。

- -XX:+HitachiVerboseGC
- -XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace
- -XX:+HitachiOutOfMemoryCause
- -XX:+HitachiOutOfMemorySize
- -XX:+HitachiJavaClassLibTrace
- -XX:HitachiExplicitMemoryLogLevel:none以外
- -XX:+JITCompilerContinuation

## **-XX:HitachiJavaLogNumberOfFile (最大ログファイル数指定オプション)**

---

**形式**

-XX:HitachiJavaLogNumberOfFile=<整数値>

**説明**

ログファイルの単純増加を防ぐため、作成する最大ファイル数を指定します。最大ファイル数を超えた場合は、再度最初に作成したファイルへ出力を開始します。オプションの指定がない場合は、デフォルトで4が設定されます。

**デフォルト値**

- -XX:HitachiJavaLogNumberOfFile=4

**前提オプション**

次のどれかを指定します。

- -XX:+HitachiVerboseGC
- -XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace
- -XX:+HitachiOutOfMemoryCause
- -XX:+HitachiOutOfMemorySize
- -XX:+HitachiJavaClassLibTrace

## 引数

### <整数値>

1～99 の範囲で指定します。100 以上の値が指定された場合は 99 が、0 以下の値が指定された場合は 1 が設定されます。負の値を指定した場合はエラーとなります。

## **-XX:[+|-]JavaLogAsynchronous**

---

### 形式

**-XX:+JavaLogAsynchronous**

ログファイルの非同期出力機能を有効にします。

**-XX:-JavaLogAsynchronous**

ログファイルの非同期出力機能を無効にします。

### 説明

ログファイルの非同期出力機能の有効、無効を指定します。

ログファイルの非同期出力機能使用時、**-XX:HitachiOutOfMemoryStackTraceLineSize** オプション、または **-XX:HitachiJavaClassLibTraceLineSize** オプションに、4096 より大きな値を指定した場合は、出力するスタックトレース 1 行の文字数に 4096 バイトが指定されたものとして動作します。

指定したバイト数が確保できない場合は警告メッセージが出力され、スタックトレースは出力されません。また、1 行の文字数が指定した文字数を超えた場合、「at」以降の文字列の前半部分を削除して、指定された文字数分出力します。

### デフォルト値

- **-XX:-JavaLogAsynchronous**

## **-XX:[+|-]HitachiOutputMilliTime (詳細時間出力オプション)**

---

### 形式

**-XX:+HitachiOutputMilliTime**

JavaVM ログファイルに出力する日時に、ミリ秒まで出力します。

**-XX:-HitachiOutputMilliTime**

JavaVM ログファイルに出力する日時に、秒まで出力します。

### 説明

ミリ秒までの時間を出力するかどうかを指定します。

### デフォルト値

- **-XX:-HitachiOutputMilliTime**

### 前提オプション

次のどれかを指定します。

- **-XX:+HitachiVerboseGC**
- **-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace**

- `-XX:+HitachiOutOfMemoryCause`
- `-XX:+HitachiOutOfMemorySize`
- `-XX:+HitachiJavaClassLibTrace`
- `-XX:HitachiExplicitMemoryLogLevel:none` 以外
- `-XX:+JITCompilerContinuation`

## 出力例

- 拡張 `verbosegc` 情報の出力

---

```
[VGC]<Wed Mar 17 00:45:55.068 2004>(Skip Full:0, Copy:0)[Full GC 149K->149K(1984K), 0.0786038 secs]
[DefNew::Eden: 264K->0K(512K)][DefNew::Survivor: 0K->63K(64K)][Tenured: 85K->149K(1408K)][Metaspace:
3634K(4492K, 4492K)->3634K(4492K, 4492K)][class space: 356K(388K, 388K)->356K(388K, 388K)]
```

---

- `OutOfMemoryError` 発生時の出力

---

```
[OOM][Thread: 0x00957820]<Wed Mar 17 00:47:00.662 2004>[java.lang.OutOfMemoryError:(C Heap):340]
```

---

- クラスライブラリトレースの出力

---

```
[CLT][Thread: 0x00286348]<Wed Mar 17 00:47:00.662 2004>
[CLT][Thread: 0x00286348] at java.lang.Shutdown.halt0(Native Method)
[CLT][Thread: 0x00286348] at java.lang.Shutdown.halt(Shutdown.java:145)
```

---

- JIT コンパイラ稼働継続機能 (JIT コンパイル失敗情報)

---

```
[JCC][Thread: 0x05432c00]<Thu Nov 15 17:10:40.347 2012>[Method: chosa_cmp.func(Ljava/lang/String;)V][Fail: 3]
[JITCT: 1]
```

---

## `-XX:[+|-]HitachiVerboseGC` (拡張 `verbosegc` 情報出力オプション)

### 形式

`-XX:+HitachiVerboseGC`

GCが発生した場合、拡張 `verbosegc` 情報を JavaVM ログファイルに出力します。

GCの内部領域である Eden, Survivor, Tenured, Metaspace 種別の情報を拡張 `verbosegc` 情報として出力します。

`-XX:-HitachiVerboseGC`

GCが発生した場合、拡張 `verbosegc` 情報を JavaVM ログファイルに出力しません。

### 説明

GCが発生した時の拡張 `verbosegc` 情報を出力するかどうかを指定します。

### デフォルト値

- `-XX:-HitachiVerboseGC`

### 出力形式 (SerialGC を使用している場合)

---

```
[id] <date> (Skip Full:full_count, Copy:copy_count) [gc_kind gc_info, gc_time secs][Eden: eden_info][Survivor:
survivor_info][Tenured: tenured_info][Metaspace: metaspace_info][class space: class_space_info]
[cause:cause_info] [User: user_cpu secs] [Sys: system_cpu secs][IM: jvm_alloc_size, mmap_total_size,
```

---

---

```
malloc_total_size][TC: thread_count][DOE: doe_alloc_size, called_count][CCI: cc_used_sizeK, cc_max_sizeK, cc_infoK]
```

---

出力内容を次に説明します。

#### id

VGC (JavaVM ログファイル識別子)。

#### date

GC 開始日時。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintDate オプションが指定された場合、出力されません。

#### full\_count

full GC 情報出力をスキップした回数。

-XX:HitachiVerboseGCIntervalTime オプションが指定された場合に出力されます。

#### copy\_count

copy GC 情報出力をスキップした回数。

-XX:HitachiVerboseGCIntervalTime オプションが指定された場合に出力されます。

#### gc\_kind

GC 種別。"FullGC", "GC"が出力されます。

#### gc\_info

GC 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域長> -> <GC後の領域長> (<領域サイズ>)

#### gc\_time

GC 経過時間。

#### Eden

エデンの種別。"DefNew::Eden"または"ParNew::Eden"が出力されます。

#### eden\_info

Eden 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域長> -> <GC後の領域長> (<領域サイズ>)

#### Survivor

Survivor の種別。"DefNew:: Survivor"または"ParNew::Survivor"が出力されます。

#### survivor\_info

Survivor 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域長> -> <GC後の領域長> (<領域サイズ>)

#### Tenured

Tenured の種別。"Tenured"が出力されます。

#### tenured\_info

Tenured 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域長> -> <GC後の領域長> (<領域サイズ>)

#### metaspace\_info

Metaspace 領域の情報。次の形式で出力されます。

<GC前の使用サイズ>(<GC前のcapacityサイズ>, <GC前のcommitサイズ>) -> <GC後の使用サイズ>(<GC後のcapacityサイズ>, <GC後のcommitサイズ>)

**class\_space\_info**

Compressed Class Space の情報。次の形式で出力されます。

<GC前の使用サイズ>( <GC前のcapacityサイズ>, <GC前のcommitサイズ> ) -> <GC後の使用サイズ>( <GC後のcapacityサイズ>, <GC後のcommitサイズ> )

-XX:-UseCompressedOops オプションが指定された場合、出力されません。

**cause\_info**

GC 要因内容。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintCause オプションが指定された場合、出力されません。

**user\_cpu**

GC スレッドがユーザーモードで費やした CPU 時間。単位は秒です。

CPU 時間取得に失敗した場合、[User: unknown]のように、"unknown"と表示されます。

-XX:-HitachiVerboseGCCpuTime オプションが指定された場合、出力されません。

**system\_cpu**

GC スレッドがカーネルモードで費やした CPU 時間。単位は秒です。

CPU 時間取得に失敗した場合、[Sys: unknown]のように、"unknown"と表示されます。

-XX:-HitachiVerboseGCCpuTime オプションが指定された場合、出力されません。

**jvm\_alloc\_size**

JavaVM 内部で管理している領域のうち、現在使用中の領域のサイズ (mmap\_total\_size と malloc\_total\_size の合計サイズのうち、現在使用中の領域のサイズ)。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintJVMSInternalMemory オプションが指定された場合、出力されません。

**mmap\_total\_size**

JavaVM 内部で管理している領域のうち、mmap (Windows の場合は VirtualAlloc) で割り当てた C ヒープの総サイズ。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintJVMSInternalMemory オプションが指定された場合、出力されません。

**malloc\_total\_size**

JavaVM 内部で管理している領域のうち、malloc で割り当てた C ヒープの総サイズ。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintJVMSInternalMemory オプションが指定された場合、出力されません。

**thread\_count**

Java スレッドの数。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintThreadCount オプションが指定された場合、出力されません。

**doe\_alloc\_size**

java.io.File.deleteOnExit()を呼び出して確保した累積のヒープサイズ。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit オプションが指定された場合、出力されません。

**called\_count**

java.io.File.deleteOnExit()の呼び出し回数。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit オプションが指定された場合、出力されません。

**cc\_used\_size**

GC 発生時のコードキャッシュ領域の使用サイズ。単位はキロバイトです。

-XX:-PrintCodeCacheInfo オプションが指定された場合、出力されません。

**cc\_max\_size**

コードキャッシュ領域の最大サイズ。単位はキロバイトです。

-XX:-PrintCodeCacheInfo オプションが指定された場合、出力されません。

#### cc\_info

保守情報。

-XX:-PrintCodeCacheInfo オプションが指定された場合、出力されません。

### 出力形式 (G1GC を使用している場合)

- VG1 ログ

---

```
[id]<date>[gc_kind gc_info, gc_time secs][Status: gc_status][G1GC:Eden: eden_info][G1GC:Survivor:
survivor_info][G1GC:Tenured: tenured_info][G1GC:Humongous: humongous_info][G1GC:Free: free_info][Metaspace:
metaspace_info][class space: class_space_info][cause:cause_info][RegionSize: region_size][Target: target_time
secs][Predicted: predicted_time secs][TargetTenured: target_size][Reclaimable: reclaimable_info][User: user_cpu
secs] [Sys: system_cpu secs][IM: jvm_alloc_size, mmap_total_size, malloc_total_size][TC: thread_count][DOE:
doe_alloc_size, called_count][CCI: cc_used_sizeK, cc_max_sizeK, cc_infoK]
```

---

出力内容を次に説明します。

#### id

VG1 (JavaVM ログファイル識別子)。

#### date

GC 開始日時。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintDate オプションが指定された場合、出力されません。

#### gc\_kind

GC 種別。“Full GC” , “Mixed GC” , “Young GC” , “Young GC(initial-mark)” , “CM Remark” , “CM Cleanup” のどれかが出力されます。

#### gc\_info

GC 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域サイズ>/<GC前の領域サイズ(リージョン換算)>( <GC前の領域サイズ> ) -> <GC後の領域サイズ>/<GC前の領域サイズ(リージョン換算)>( <GC後の領域サイズ> )

リージョン換算とは領域サイズを 1 リージョンのサイズで切り上げ、1 リージョンのサイズの倍数で表した値です。

#### gc\_time

GC 経過時間。

#### gc\_status

GC の状態。“-” , “to exhausted” が出力されます。

#### eden\_info

Eden 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域サイズ(リージョン換算)>( <GC前の最大領域サイズ(リージョン換算)> ) -> <GC後の領域サイズ(リージョン換算)>( <GC後の最大領域サイズ(リージョン換算)> )

リージョン換算とは領域サイズを 1 リージョンのサイズで切り上げ、1 リージョンのサイズの倍数で表した値です。

#### survivor\_info

Survivor 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域サイズ(リージョン換算)> -> <GC後の領域サイズ(リージョン換算)>



リージョン換算とは領域サイズを 1 リージョンのサイズで切り上げ、1 リージョンのサイズの倍数で表した値です。

#### tenured\_info

Tenured 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域サイズ(リージョン換算)> -> <GC後の領域サイズ(リージョン換算)>

リージョン換算とは領域サイズを 1 リージョンのサイズで切り上げ、1 リージョンのサイズの倍数で表した値です。

#### humongous\_info

Humongous 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域サイズ(リージョン換算)> -> <GC後の領域サイズ(リージョン換算)>

リージョン換算とは領域サイズを 1 リージョンのサイズで切り上げ、1 リージョンのサイズの倍数で表した値です。

#### free\_info

Free 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域サイズ(リージョン換算)> -> <GC後の領域サイズ(リージョン換算)>

リージョン換算とは領域サイズを 1 リージョンのサイズで切り上げ、1 リージョンのサイズの倍数で表した値です。

#### metaspace\_info

Metaspace 領域の情報。次の形式で出力されます。

<GC前の使用サイズ>( <GC前のcapacityサイズ>, <GC前のcommitサイズ> ) -> <GC後の使用サイズ>( <GC後のcapacityサイズ>, <GC後のcommitサイズ> )

#### class\_space\_info

Compressed Class Space の情報。次の形式で出力されます。

<GC前の使用サイズ>( <GC前のcapacityサイズ>, <GC前のcommitサイズ> ) -> <GC後の使用サイズ>( <GC後のcapacityサイズ>, <GC後のcommitサイズ> )

-XX:-UseCompressedOops オプションが指定された場合、出力されません。

#### cause\_info

GC 要因内容。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintCause オプションが指定された場合、出力されません。

#### region\_size

1 リージョンのサイズです。

単位はキロバイトです。

#### target\_time

GC によるアプリケーション停止時間の目標時間です。

単位は秒です。

#### predicted\_time

JavaVM が予測した GC によるアプリケーション停止時間です。

単位は秒です。

なお、GC 種別が” Full GC ”, ” CM Remark ”, ” CM Cleanup ” のときは予測をしないため、0 が出力されます。

#### target\_size

Mixed GC で GC 対象となった Tenured 領域のサイズです。

単位はキロバイト。

なお、GC 種別が” Mixed GC” 以外のときは、0 が出力されます。

#### reclaimable\_info

MixedGC で回収される Tenured 領域の予測回収サイズ情報。次の形式で出力されます。

<予測回収サイズ> (<予測回収率>)

なお、予測回収サイズ情報は CM 終了直後の Young GC または Mixed GC だけ出力されます。それ以外の場合、予測を行わないため、0 が出力されます。

#### user\_cpu

GC スレッドがユーザーモードで費やした CPU 時間。単位は秒です。

CPU 時間取得に失敗した場合、[User: unknown]のように、"unknown"と表示されます。

-XX:-HitachiVerboseGCCpuTime オプションが指定された場合、出力されません。

#### system\_cpu

GC スレッドがカーネルモードで費やした CPU 時間。単位は秒です。

CPU 時間取得に失敗した場合、[Sys: unknown]のように、"unknown"と表示されます。

-XX:-HitachiVerboseGCCpuTime オプションが指定された場合、出力されません。

#### jvm\_alloc\_size

JavaVM 内部で管理している領域のうち、現在使用中の領域のサイズ (mmap\_total\_size と malloc\_total\_size の合計サイズのうち、現在使用中の領域のサイズ)。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintJVMSInternalMemory オプションが指定された場合、出力されません。

#### mmap\_total\_size

JavaVM 内部で管理している領域のうち、mmap (Windows の場合は VirtualAlloc) で割り当てた C ヒープの総サイズ。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintJVMSInternalMemory オプションが指定された場合、出力されません。

#### malloc\_total\_size

JavaVM 内部で管理している領域のうち、malloc で割り当てた C ヒープの総サイズ。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintJVMSInternalMemory オプションが指定された場合、出力されません。

#### thread\_count

Java スレッドの数。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintThreadCount オプションが指定された場合、出力されません。

#### doe\_alloc\_size

java.io.File.deleteOnExit()を呼び出して確保した累積のヒープサイズ。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit オプションが指定された場合、出力されません。

#### called\_count

java.io.File.deleteOnExit()の呼び出し回数。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit オプションが指定された場合、出力されません。

#### cc\_used\_size

GC 発生時のコードキャッシュ領域の使用サイズ。単位はキロバイトです。

-XX:-PrintCodeCacheInfo オプションが指定された場合、出力されません。

#### cc\_max\_size

コードキャッシュ領域の最大サイズ。単位はキロバイトです。

-XX:-PrintCodeCacheInfo オプションが指定された場合、出力されません。

**cc\_info**

保守情報。

-XX:-PrintCodeCacheInfo オプションが指定された場合、出力されません。

- VCM

---

```
[id]<date>[cm_event][User: user_cpu secs][Sys: sys_cpu secs]
```

---

**id**

VCM (JavaVM ログファイル識別子)。

**date**

CM 開始日時。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintDate オプションが指定された場合、出力されません。

**cm\_event**

CM 種別。"Concurrent Root Region Scan Start", "Concurrent Root Region Scan End", "Concurrent Mark Start", "Concurrent Mark End", "Concurrent Mark Stop", "Concurrent Cleanup Start", "Concurrent Cleanup End"のどれかが出力されます。

**user\_cpu**

全 CM スレッドがユーザーモードで費やした CPU 時間。単位は秒です。

-XX:-HitachiVerboseGCCpuTime 指定時は出力されません。

CPU 時間取得に失敗した場合、[User: unknown]のように、"unknown"と表示されます。

CM の状態が Start の場合、0 が出力されます。

**sys\_cpu**

全 CM スレッドがカーネルモードで費やした CPU 時間。単位は秒です。

-XX:-HitachiVerboseGCCpuTime 指定時は出力されません。

CPU 時間取得に失敗した場合、[Sys: unknown]のように、"unknown"と表示されます。

CM の状態が Start の場合、0 が出力されます。

**出力例**

SerialGC を使用している場合

- -XX:-HitachiVerboseGCIntervalTime オプションが指定されている場合

---

```
[VG1]<Wed Mar 17 00:42:30 2004>(Skip Full:0, Copy:0)[Full GC 149K->149K(1984K), 0.0786038 secs][DefNew::Eden: 264K->0K(512K)][DefNew::Survivor: 0K->63K(64K)][Tenured: 85K->149K(1408K)][Metaspace: 3634K(4492K, 4492K)->3634K(4492K, 4492K)][class space: 356K(388K, 388K)->356K(388K, 388K)][cause:System.gc][User: 0.0156250 secs][Sys: 0.0312500 secs][IM: 729K, 928K, 0K][TC: 509][DOE: 16K, 170][CCI: 2301K, 49152K, 2304K]
```

---

G1GC を使用している場合

- VG1 ログ

---

```
[VG1]<Thu Oct 02 10:38:56.193 2014>[Full GC 753K/2048K(8192K)->678K/1024K(8192K), 0.0097901 secs][Status:-][G1GC::Eden: 1024K(2048K)->0K(2048K)][G1GC::Survivor: 0K->0K][G1GC::Tenured: 1024K->1024K][G1GC::Humongous: 0K->0K][G1GC::Free: 6144K->7168K][Metaspace: 3634K(4492K, 4492K)->3634K(4492K, 4492K)][class space: 356K(388K, 388K)->356K(388K, 388K)][cause:System.gc][RegionSize: 1024K][Target: 0.2000000 secs][Predicted: 0.0000000 secs][TargetTenured: 0K][Reclaimable: 0K(0.00%)] [User: 0.0000000 secs][Sys: 0.0000000 secs][IM: 20459K, 21920K, 0K][TC: 35][DOE: 0K, 0][CCI: 1172K, 245760K, 2496K]
```

---

- VCM ログ

---

```
[VCM]<Wed Jul 24 11:45:20 2013>[Concurrent Root Region Scan Start][User: 0.0000000 secs][Sys: 0.0000000 secs]
[VCM]<Wed Jul 24 11:45:20 2013>[Concurrent Root Region Scan End][User: 0.0126134 secs][Sys: 0.0146961 secs]
[VCM]<Wed Jul 24 11:45:20 2013>[Concurrent Mark Start][User: 0.0000000 secs][Sys: 0.0000000 secs]
[VCM]<Wed Jul 24 11:45:34 2013>[Concurrent Mark End][User: 0.0156250 secs][Sys: 0.2495800 secs]
```

---

## -XX:[+|-]HitachiCommaVerboseGC (CSV 出力オプション)

---

### 形式

-XX:+HitachiCommaVerboseGC

拡張 verbosegc 情報の出力を、CSV ファイルで取得できるようにコンマ形式で出力します。

拡張 verbosegc 情報に出力される括弧 (丸括弧(), 角括弧[], 山括弧<>) およびコロン (:) をすべて削除し、コンマ (,) で区切った数値または文字列を出力します。

-XX:-HitachiCommaVerboseGC

拡張 verbosegc 情報を通常形式で出力します。

### 説明

拡張 verbosegc 情報を CSV 形式で出力するかどうかを指定します。

### デフォルト値

- -XX:-HitachiCommaVerboseGC

### 前提オプション

- -XX:+HitachiVerboseGC

### 出力形式 (SerialGC を使用している場合)

-XX:-HitachiVerboseGCIntervalTime オプションが指定されている場合の出力内容を次に説明します。

---

```
id, date, full_count, copy_count, inc_count, gc_kind, gc_info, gc_time, eden_info, survivor_info, tenured_info,
metaspace_info, classspace_info, cause_info, user_cpu, system_cpu, jvm_alloc_size, mmap_total_size,
malloc_total_size, thread_count, doe_alloc_size, called_count, cc_used_size, cc_max_size, cc_info
```

---

#### id

JavaVM ログファイル識別子。

#### date

GC 開始日時。-XX:-HitachiVerboseGCPrintDate オプションが指定された場合、出力されません。

#### full\_count

full GC 情報出力をスキップした回数。

-XX:HitachiVerboseGCIntervalTime オプションが指定された場合に出力されます。

#### copy\_count

copy GC 情報出力をスキップした回数。

-XX:HitachiVerboseGCIntervalTime オプションが指定された場合に出力されます。

#### inc\_count

0 を表示。

-XX:HitachiVerboseGCIntervalTime オプションが指定された場合に出力されます。

#### gc\_kind

GC 種別。"FullGC"または"GC"が出力されます。

#### gc\_info

GC 情報。次の形式で出力されます。単位はキロバイトです。

<GC前の領域長>, <GC後の領域長>, <領域サイズ>

#### gc\_time

GC 経過時間。単位は秒です。

#### eden\_info

Eden 情報。次の形式で出力されます。単位はキロバイトです。

<GC前の領域長>, <GC後の領域長>, <領域サイズ>

#### survivor\_info

Survivor 情報。次の形式で出力されます。単位はキロバイトです。

<GC前の領域長>, <GC後の領域長>, <領域サイズ>

#### tenured\_info

Tenured 情報。次の形式で出力されます。単位はキロバイトです。

<GC前の領域長>, <GC後の領域長>, <領域サイズ>

#### metaspace\_info

Metaspace 領域の情報。次の形式で出力されます。単位はキロバイトです。

<GC前の使用サイズ>, <GC前のcapacityサイズ>, <GC前のcommitサイズ> <GC後の使用サイズ>, <GC後のcapacityサイズ>, <GC後のcommitサイズ>

#### classspace\_info

Compressed Class Space 情報。次の形式で出力されます。単位はキロバイトです。

<GC前の使用サイズ>, <GC前のcapacityサイズ>, <GC前のcommitサイズ> <GC後の使用サイズ>, <GC後のcapacityサイズ>, <GC後のcommitサイズ>

#### cause\_info

GC 要因番号。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintCause オプションが指定された場合、出力されません。

なお、GC 要因番号については、「-XX:[+|-]HitachiVerboseGCPrintCause (GC 要因内容出力オプション)」を参照してください。

#### user\_cpu

GC スレッドがユーザーモードで費やした CPU 時間。単位は秒です。

CPU 時間の取得に失敗した場合は"unknown"と表示されます。

-XX:-HitachiVerboseGCCpuTime オプションが指定された場合、出力されません。

#### system\_cpu

GC スレッドがカーネルモードで費やした CPU 時間。単位は秒です。

CPU 時間の取得に失敗した場合は"unknown"と表示されます。

-XX:-HitachiVerboseGCCpuTime オプションが指定された場合、出力されません。

#### jvm\_alloc\_size

JavaVM 内部で管理している領域のうち、現在使用中の領域のサイズ (mmap\_total\_size と malloc\_total\_size の合計サイズのうち、現在使用中の領域のサイズ)。単位はキロバイトです。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintJVMInternalMemory オプションが指定された場合、出力されません。

**mmap\_total\_size**

JavaVM 内部で管理している領域のうち、mmap (Windows の場合は VirtualAlloc) で割り当てた C ヒープの総サイズ。単位はキロバイトです。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintJVMInternalMemory オプションが指定された場合、出力されません。

**malloc\_total\_size**

JavaVM 内部で管理している領域のうち、malloc で割り当てた C ヒープ総サイズ。単位はキロバイトです。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintJVMInternalMemory オプションが指定された場合、出力されません。

**thread\_count**

Java スレッドの数。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintThreadCount オプションが指定された場合、出力されません。

**doe\_alloc\_size**

java.io.File.deleteOnExit() を呼び出して確保した累積のヒープサイズ。単位はキロバイトです。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit オプションが指定された場合、出力されません。

**called\_count**

java.io.File.deleteOnExit() の呼び出し回数。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit が指定された場合、出力されません。

**cc\_used\_size**

GC 発生時のコードキャッシュ領域の使用サイズ。単位はキロバイトです。

-XX:-PrintCodeCacheInfo オプションが指定された場合、出力されません。

**cc\_max\_size**

コードキャッシュ領域の最大サイズ。単位はキロバイトです。

-XX:-PrintCodeCacheInfo オプションが指定された場合、出力されません。

**cc\_info**

保守情報。

-XX:-PrintCodeCacheInfo オプションが指定された場合、出力されません。

-XX:+HitachiVerboseGCPrintTenuringDistribution オプションが指定されている場合の出力内容を次に説明します。

---

*id, date, size, value, max\_value, total\_age1, total\_age2, total\_age3*

---

出力内容については、「-XX:[+|-]HitachiVerboseGCPrintTenuringDistribution (Survivor 領域の年齢分布出力オプション)」を参照してください。

**出力形式 (G1GC を使用している場合)**

- VGI ログ

---

*id, date, gc\_kind, gc\_info, gc\_time, gc\_status, eden\_info, survivor\_info, tenured\_info, humongous\_info, free\_info, metaspace\_info, classspace\_info, cause\_info, region\_size, target\_time, predicted\_time, target\_size, reclaimable\_info, user\_cpu, system\_cpu, jvm\_alloc\_size, mmap\_total\_size, malloc\_total\_size, thread\_count, doe\_alloc\_size, called\_count, cc\_used\_size, cc\_max\_size, cc\_info*

---

**id**

JavaVM ログファイル識別子。

**date**

GC 開始日時。-XX:-HitachiVerboseGCPrintDate オプションが指定された場合、出力されません。

**gc\_kind**

GC 種別。"Full GC", "Mixed GC", "Young GC", "Young GC(initial-mark)", "CM Remark", "CM Cleanup" のどれかが出力されます。

**gc\_info**

GC 情報。次の形式で出力されます。単位はキロバイトです。

<GC前の領域サイズ>, <GC前の領域サイズ(リージョン換算)>, <GC前の領域サイズ>, <GC後の領域サイズ>, <GC前の領域サイズ(リージョン換算)>, <GC後の領域サイズ>

リージョン換算とは領域サイズを 1 リージョンのサイズで切り上げ、1 リージョンのサイズの倍数で表した値です。

**gc\_time**

GC 経過時間。

**gc\_status**

GC の状態。"-", "to exhausted" が出力されます。

**eden\_info**

Eden 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域サイズ(リージョン換算)>, <GC前の最大領域サイズ(リージョン換算)>, <GC後の領域サイズ(リージョン換算)>, <GC後の最大領域サイズ(リージョン換算)>

リージョン換算とは領域サイズを 1 リージョンのサイズで切り上げ、1 リージョンのサイズの倍数で表した値です。

**survivor\_info**

Survivor 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域サイズ(リージョン換算)>, <GC後の領域サイズ(リージョン換算)>

リージョン換算とは領域サイズを 1 リージョンのサイズで切り上げ、1 リージョンのサイズの倍数で表した値です。

**tenured\_info**

Tenured 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域サイズ(リージョン換算)>, <GC後の領域サイズ(リージョン換算)>

リージョン換算とは領域サイズを 1 リージョンのサイズで切り上げ、1 リージョンのサイズの倍数で表した値です。

**humongous\_info**

Humongous 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域サイズ(リージョン換算)>, <GC後の領域サイズ(リージョン換算)>

リージョン換算とは領域サイズを 1 リージョンのサイズで切り上げ、1 リージョンのサイズの倍数で表した値です。

**free\_info**

Free 情報。次の形式で出力されます。

<GC前の領域サイズ(リージョン換算)>, <GC後の領域サイズ(リージョン換算)>

リージョン換算とは領域サイズを 1 リージョンのサイズで切り上げ、1 リージョンのサイズの倍数で表した値です。

**metaspace\_info**

Metaspace 領域の情報。次の形式で出力されます。単位はキロバイトです。

<GC前の使用サイズ>, <GC前のcapacityサイズ>, <GC前のcommitサイズ><GC後の使用サイズ>, <GC後のcapacityサイズ>, <GC後のcommitサイズ>

#### classspace\_info

Compressed Class Space 情報。次の形式で出力されます。単位はキロバイトです。

<GC前の使用サイズ>, <GC前のcapacityサイズ>, <GC前のcommitサイズ><GC後の使用サイズ>, <GC後のcapacityサイズ>, <GC後のcommitサイズ>

#### cause\_info

GC 要因番号。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintCause オプションが指定された場合、出力されません。

なお、GC 要因番号については、「-XX:[+|-]HitachiVerboseGCPrintCause (GC 要因内容出力オプション)」を参照してください。

#### region\_size

1 リージョンのサイズです。

単位はキロバイトです。

#### target\_time

GC によるアプリケーション停止時間の目標時間です。

単位は秒です。

#### predicted\_time

JavaVM が予測した GC によるアプリケーション停止時間です。

単位は秒です。

なお、GC 種別が” Full GC ” , ” CM Remark ” , “CM Cleanup” のときは予測をしないため、0 が出力されます。

#### target\_size

Mixed GC で GC 対象となった Tenured 領域のサイズです。

単位はキロバイト。

なお、GC 種別が” Mixed GC ” 以外のときは、0 が出力されます。

#### reclaimable\_info

MixedGC で回収される Tenured 領域の予測回収サイズ情報。次の形式で出力されます。

<予測回収サイズ> (<予測回収率>)

なお、予測回収サイズ情報は CM 終了直後の Young GC または Mixed GC だけ出力されます。それ以外の場合、予測を行わないため、0 が出力されます。

#### user\_cpu

GC スレッドがユーザーモードで費やした CPU 時間。単位は秒です。

CPU 時間の取得に失敗した場合は"unknown"と表示されます。

-XX:-HitachiVerboseGCCpuTime オプションが指定された場合、出力されません。

#### system\_cpu

GC スレッドがカーネルモードで費やした CPU 時間。単位は秒です。

CPU 時間の取得に失敗した場合は"unknown"と表示されます。

-XX:-HitachiVerboseGCCpuTime オプションが指定された場合、出力されません。

#### jvm\_alloc\_size

JavaVM 内部で管理している領域のうち、現在使用中の領域のサイズ (mmap\_total\_size と malloc\_total\_size の合計サイズのうち、現在使用中の領域のサイズ)。単位はキロバイトです。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintJVMInternalMemory オプションが指定された場合、出力されません。



**mmap\_total\_size**

JavaVM 内部で管理している領域のうち、mmap (Windows の場合は VirtualAlloc) で割り当てた C ヒープの総サイズ。単位はキロバイトです。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintJVMInternalMemory オプションが指定された場合、出力されません。

**malloc\_total\_size**

JavaVM 内部で管理している領域のうち、malloc で割り当てた C ヒープ総サイズ。単位はキロバイトです。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintJVMInternalMemory オプションが指定された場合、出力されません。

**thread\_count**

Java スレッドの数。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintThreadCount オプションが指定された場合、出力されません。

**doe\_alloc\_size**

java.io.File.deleteOnExit() を呼び出して確保した累積のヒープサイズ。単位はキロバイトです。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit オプションが指定された場合、出力されません。

**called\_count**

java.io.File.deleteOnExit() の呼び出し回数。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit が指定された場合、出力されません。

**cc\_used\_size**

GC 発生時のコードキャッシュ領域の使用サイズ。単位はキロバイトです。

-XX:-PrintCodeCacheInfo オプションが指定された場合、出力されません。

**cc\_max\_size**

コードキャッシュ領域の最大サイズ。単位はキロバイトです。

-XX:-PrintCodeCacheInfo オプションが指定された場合、出力されません。

**cc\_info**

保守情報。

-XX:-PrintCodeCacheInfo オプションが指定された場合、出力されません。

-XX:+HitachiVerboseGCPrintTenuringDistribution オプションが指定されている場合の出力内容を次に説明します。

---

*id, date, size, value, max\_value, total\_age1, total\_age2, total\_agen*

---

出力内容については、「-XX:[+|-]HitachiVerboseGCPrintTenuringDistribution (Survivor 領域の年齢分布出力オプション)」を参照してください。

- VCM ログ

---

*id, date, cm\_event, user\_cpu, sys\_spu*

---

**id**

VCM (JavaVM ログファイル識別子)。

**date**

CM 開始日時。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintDate オプションが指定された場合、出力されません。

### cm\_event

CM 種別。"Concurrent Root Region Scan Start", "Concurrent Root Region Scan End", "Concurrent Mark Start", "Concurrent Mark End", "Concurrent Mark Stop", "Concurrent Cleanup Start", "Concurrent Cleanup End"のどれかが出力されます。

### user\_cpu

全 CM スレッドがユーザーモードで費やした CPU 時間。単位は秒です。

-XX:-HitachiVerboseGCCpuTime 指定時は出力されません。

CPU 時間取得に失敗した場合, "unknown"と表示されます。

CM の状態が Start の場合, 0 が出力されます。

### sys\_cpu

全 CM スレッドがカーネルモードで費やした CPU 時間。単位は秒です。

-XX:-HitachiVerboseGCCpuTime 指定時は出力されません。

CPU 時間取得に失敗した場合, "unknown"と表示されます。

CM の状態が Start の場合, 0 が出力されます。

## 出力例

SerialGC を使用している場合

- -XX:HitachiVerboseGCIntervalTime オプションが指定されている場合

---

```
VG, Fri Jan 23 21:37:50 2004, 11, 41, 0, GC, 16886, 16886, 65088, 0.0559806,
4094, 0, 4096, 447, 447, 448, 12345, 16439, 60544, 1116, 1116, 4096, 0, 0.0312500,
0.0156250, 729, 928, 0, 509, 2167, 2054, 2301, 49152, 2304
VG, Fri Jan 23 21:37:55 2004, 6, 24, 0, Full GC, 65082, 65082, 65088, 0.4294532,
4094, 4094, 4096, 447, 447, 448, 60541, 60541, 60544, 1116, 1116, 4096, 0, 0.0156250,
0.0312500, 729, 928, 0, 509, 16, 170, 2301, 49152, 2304
...
```

---

- -XX:+HitachiVerboseGCPrintTenuringDistribution オプションが指定されている場合

---

```
PTD, Wed May 28 11:45:23 2008, 5467547, 30, 31, 1357527, 1539661
```

---

G1GC を使用している場合

- VG1 ログ

---

```
VG1, Thu Oct 02 10:38:54.920 2014, Full GC, 753, 2048, 8192, 678, 1024, 8192, 0.0064767, -,
1024, 2048, 0, 2048, 0, 0, 1024, 1024, 0, 0, 6144, 7168, 3634, 3634, 4492, 3634, 3634, 4492, 356, 356, 388, 356, 356, 388, 1, 1024, 0.200
0000, 0.0000000, 0, 0, 0.00, 0.0000000, 0.0000000, 20459, 21920, 0, 35, 0, 0, 1171, 245760, 2496
```

---

- VCM ログ

---

```
VCM, Fri Jul 26 21:35:50 2013, Concurrent Mark Start, 0.0000000, 0.0000000
VCM, Fri Jul 26 21:35:50 2013, Concurrent Mark End, 0.0124532, 0.0245698
```

---

## -XX:HitachiVerboseGCIntervalTime (拡張 verbosegc 情報出力間隔指定オプション)

### 形式

-XX:HitachiVerboseGCIntervalTime=<整数値>

## 説明

拡張 verbosegc 情報を出力する時間（秒）の間隔を指定します。

### オプションを指定した場合

拡張 verbosegc 情報を GC ごとに出力するのではなく、指定された時間を超えた次の GC を出力します。このとき、前回の出力から今回の出力までの間に発生した、次に示す GC の回数も出力します。これらは必ず出力されます。

表 16-5 回数を出力する GC の一覧

文字列	意味
Full	FullGC をスキップした回数
Copy	CopyGC をスキップした回数

### オプションを指定しない場合

0 秒がデフォルトで設定され、GC 発生ごとに拡張 verbosegc 情報を出力します。

#### デフォルト値

- `-XX:HitachiVerboseGCIntervalTime=0`

#### 前提オプション

- `-XX:+HitachiVerboseGC`

## 引数

### <整数値>

0～2147483647 の範囲の整数値（単位：秒）を指定します。範囲外の値が指定された場合は 0 が設定されます。負の値を指定した場合はエラーとなります。

## `-XX:[+|-]HitachiVerboseGCPrintCause`（GC 要因内容出力オプション）

### 形式

`-XX:+HitachiVerboseGCPrintCause`

GC の要因内容を、拡張 verbosegc 情報の行末に出力します。

`-XX:-HitachiVerboseGCPrintCause`

拡張 verbosegc 情報を通常形式で出力します。

## 説明

GC の要因内容を出力するかどうかを指定します。

### デフォルト値

- `-XX:+HitachiVerboseGCPrintCause`

#### 前提オプション

- `-XX:+HitachiVerboseGC`

-XX:+HitachiCommaVerboseGC オプションが指定されている場合は、次に示す要因番号が出力されま  
す。

表 16-6 GC 要因一覧

要因 番号	要因内容	説明	SerialGC 使用 時の要因	G1GC 使用時の 要因
0	ObjAllocFail	オブジェクトの割り付け失敗によって GC が発生しました。	○	○
1	System.gc	java.lang.System.gc メソッド呼び出しに よって GC が発生しました。	○	○
3	DelayedGC	JNI や JVMTI によって保留されていた GC が起動されました。	○	○
4	JavaGC Command	JavaGC コマンドによって GC が発生しま した。	○	○
6	JHeapProf Command	jheapprof コマンドによって GC が発生し ました。	○	—
8	EMReclaimFail	Explicit メモリの明示解放による Java ヒー プへのオブジェクト移動が発生して Java ヒープがあふれました。	○	—
9	EMMigrateFail	Explicit メモリの自動解放による Java ヒー プへのオブジェクト移動が発生して Java ヒープがあふれました。	○	—
10	JVMTIForceGC	JVMTI 関数 ForceGarbageCollection()に よって GC が発生しました。	○	○
11	PromotionFail	CopyGC の昇格失敗によって GC が発生 しました。	○	—
12	EMJavaGC Command	javagc コマンドによる Explicit メモリブ ロックの解放によって GC が発生しまし た。	○	○
13	EHeapProf Command	eheapprof コマンドによって GC が発生し ました。	○	○
14	G1HumAllocFail	G1GC 使用時に Humongous 用の領域確 保のために GC が発生しました。	—	○
15	G1EvacuationPause	G1GC 使用時に Evacuation が発生しまし た。	—	○
16	Concurrent Marking	GC は発生していないが、アプリケーション を停止して実行する CM 処理をログに出力 する場合。	—	○
17	EvacuationFail	G1GC 使用時に Evacuation 失敗による GC が発生しました。	—	○
18	MetaspaceAllocFail	Metaspace の領域確保失敗で GC が発生 しました。	○	○

要因番号	要因内容	説明	SerialGC 使用時の要因	G1GC 使用時の要因
19	LastMetaspaceGC	Metaspace の OutOfMemory を出す前に 行う最後の GC が発生しました。	○	○

## 出力例

```
[VGC]<Wed Mar 17 00:42:30 2004>(Skip Full:0, Copy:0)[Full GC 149K->149K(1984K), 0.0786038 secs][DefNew::Eden:
264K->0K(512K)][DefNew::Survivor: 0K->63K(64K)][Tenured: 85K->149K(1408K)][Metaspace: 3634K(4492K, 4492K)-
>3634K(4492K, 4492K)][class space: 356K(388K, 388K)->356K(388K, 388K)][cause:System.gc]
```

## -XX:[+|-]HitachiVerboseGCPrintDate (拡張 verbosegc 情報日付出力オプション)

### 形式

-XX:+HitachiVerboseGCPrintDate

拡張 verbosegc 情報の各出力行の先頭に GC 開始日時を出力します。

-XX:-HitachiVerboseGCPrintDate

拡張 verbosegc 情報の各出力行の先頭に GC 開始日時を出力しません。

### 説明

拡張 verbosegc 情報に GC 開始日時を出力するかどうかを指定します。

### デフォルト値

- -XX:+HitachiVerboseGCPrintDate

### 前提オプション

- -XX:+HitachiVerboseGC

## -XX:[+|-]HitachiVerboseGCCpuTime (拡張 verbosegc 情報 CPU 利用時間出力オプション)

### 形式

-XX:+HitachiVerboseGCCpuTime

拡張 verbosegc 情報に、GC の開始から終了までで、GC 実行スレッドのユーザーモードおよびカーネルモードに費やされたプロセッサ時間を出力します。

-XX:-HitachiVerboseGCCpuTime

拡張 verbosegc 情報に、GC の開始から終了までで、GC 実行スレッドのユーザーモードおよびカーネルモードに費やされたプロセッサ時間を出力しません。

### 説明

拡張 verbosegc 情報に CPU 利用時間を出力するかどうかを指定します。

HP-UX の場合、この機能は使用できません。オプションを指定しても無視されます。

### デフォルト値

- `-XX:+HitachiVerboseGCCpuTime`

### 前提オプション

- `-XX:+HitachiVerboseGC`

### 出力例

---

```
[VGC]<Thu Oct 02 10:38:53.658 2014>(Skip Full:1, Copy:0)[Full GC 770K->682K(8064K), 0.0050003 secs]
[DefNew::Eden: 88K->0K(2304K)][DefNew::Survivor: 0K->0K(256K)][Tenured: 681K->682K(5504K)] [Metaspace:
3634K(4492K, 4492K)->3634K(4492K, 4492K)][class space: 356K(388K, 388K)->356K(388K, 388K)] [cause:System.gc]
[User: 0.0000000 secs][Sys: 0.0000000 secs]
```

---

## -XX:[+|-]HitachiVerboseGCPrintTenuringDistribution (Survivor 領域の年齢分布出力オプション)

### 形式

`-XX:+HitachiVerboseGCPrintTenuringDistribution`

`-XX:+PrintTenuringDistribution` 指定時に出力される Survivor 領域の年齢分布を JavaVM ログファイルへ出力します。

`-XX:-HitachiVerboseGCPrintTenuringDistribution`

`-XX:+PrintTenuringDistribution` 指定時に出力される Survivor 領域の年齢分布を JavaVM ログファイルへ出力しません。

### 説明

`-XX:+PrintTenuringDistribution` 指定時に出力される Survivor 領域の年齢分布を JavaVM ログファイルへ出力するかどうかを指定します。

### デフォルト値

- `-XX:-HitachiVerboseGCPrintTenuringDistribution`

### 前提オプション

- `-XX:+HitachiVerboseGC`

### 関連オプション

- `-XX:+PrintTenuringDistribution`
- `-XX:+HitachiVerboseGCPrintDate`
- `-XX:+HitachiCommaVerboseGC`

### 出力形式

---

```
[id]<date>[Desired survivor:size bytes][New threshold:value][MaxTenuringThreshold: max_value][age1:total_age1][age2:total_age2]...[agen:total_agen]
```

---

出力内容を次に説明します。

**id**

PTD (JavaVM ログファイル識別子)。

**date**

GC 開始日時。

**size**

GC 後の Survivor 領域内オブジェクト目標サイズ。

**value**

次の CopyGC で Tenured 領域に昇格する Java オブジェクトの年齢のしきい値。

この値は、`-XX:MaxTenuringThreshold=<value>` オプションと、Survivor 領域のメモリサイズ、および、`-XX:TargetSurvivorRatio=<value>` オプションに設定した値を基に、CopyGC ごとに動的に設定されます。

value 値以上の年齢の Java オブジェクトが、次の CopyGC で Tenured 領域に昇格します。

**max\_value**

CopyGC で Tenured 領域に昇格する Java オブジェクトの年齢のしきい値 (value 値) の最大値 (MaxTenuringThreshold オプションの指定値)。

value 値は、CopyGC ごとに動的に設定されますが、max\_value 値を超えることはありません。

また、年齢が max\_value 値以上の Java オブジェクトは、次の CopyGC で、必ず、Tenured 領域に昇格します。

**total\_age1**

1 歳のオブジェクトのバイト数の合計。

**total\_age2**

1 歳から 2 歳までのオブジェクトのバイト数の合計。

**total\_agen**

1 歳から n 歳までのオブジェクトのバイト数の合計。

n が max\_value に近ければ寿命の長いオブジェクトが存在するということになります。

**出力例**


---

```
[PTD]<Wed Jan 28 17:47:10 2009>[Desired survivor:32768 bytes][New threshold:30][MaxTenuringThreshold:30]
[age1:6872][age2:9632][age3:25632]
```

---

## **-XX:[+|-]HitachiVerboseGCPrintJVMInternalMemory (C ヒープ情報出力オプション)**

---

**形式**

`-XX:+HitachiVerboseGCPrintJVMInternalMemory`

JavaVM 内部で管理しているヒープ情報を JavaVM ログファイルへ出力します。

`-XX:-HitachiVerboseGCPrintJVMInternalMemory`

JavaVM 内部で管理しているヒープ情報を JavaVM ログファイルへ出力しません。

**説明**

JavaVM 内部で管理しているヒープ情報を JavaVM ログファイルに出力するかどうかを指定します。

C ヒープ領域のうち、次の 2 種類の方法で取得したヒープ領域は、JavaVM 内部で管理する方式で管理されています。

- mmap で取得した C ヒープ領域
- malloc で取得した C ヒープ領域

-XX:+HitachiVerboseGCPrintJVMInternalMemory オプションを有効にした場合、mmap で取得した C ヒープの総サイズ (mmap\_total\_size) と、malloc で取得した C ヒープの総サイズ (malloc\_total\_size) を出力できます。また、これらの割り当て済みの領域のうち、使用中の領域のサイズの合計値 (jvm\_alloc\_size) も出力できます。

#### デフォルト値

- -XX:+HitachiVerboseGCPrintJVMInternalMemory

#### 前提オプション

- -XX:+HitachiVerboseGC

#### 出力形式

---

```
[id] <date> (Skip Full:full_count, Copy:copy_count, Inc:inc count) [gc_kind gc_info, gc_time secs][Eden: eden_info][Survivor: survivor_info][Tenured: tenured_info] [Metaspace: metaspace_info][class space: class_space_info][cause:cause_info] [User: user_cpu secs][Sys: system_cpu secs][IM: jvm_alloc_size, mmap_total_size, malloc_total_size][TC: thread_count][DOE: doe_alloc_size, called_count]
```

---

出力内容を次に示します。なお、ここでは、このオプションによって出力される項目について説明します。ここで説明している以外の項目については、「-XX:[+|-]HitachiVerboseGC (拡張 verbosegc 情報出力オプション)」の出力形式の説明を参照してください。

#### jvm\_alloc\_size

JavaVM 内部で管理している領域のうち、現在使用中の領域のサイズ (mmap\_total\_size と malloc\_total\_size の合計サイズのうち、現在使用中の領域のサイズ)。

#### mmap\_total\_size

JavaVM 内部で管理している領域のうち、mmap (Windows の場合は VirtualAlloc) で割り当てた C ヒープの総サイズ。

#### malloc\_total\_size

JavaVM 内部で管理している領域のうち、malloc で割り当てた C ヒープの総サイズ。

#### 出力例

---

```
[VGC]<Wed Jan 27 13:03:36 2010>(Skip Full:0, Copy:0)[GC 489K->152K(3520K), 0.0156080 secs][DefNew::Eden: 489K->0K(2048K)][DefNew::Survivor: 0K->63K(64K)][Tenured: 0K->88K(1408K)][Metaspace: 3634K(4492K, 4492K)->3634K(4492K, 4492K)][class space: 356K(388K, 388K)->356K(388K, 388K)] [cause:ObjAllocFail][IM: 729K, 928K, 0K] [TC: 509][DOE: 16K, 170]
```

---

## -XX:[+|-]HitachiVerboseGCPrintThreadCount (スレッド数の出力オプション)

---

### 形式

-XX:+HitachiVerboseGCPrintThreadCount

Java スレッドの数を出力します。



`-XX:-HitachiVerboseGCPrintThreadCount`

Java スレッドの数を出力しません。

## 説明

Java スレッドの数を監視するために、Java スレッドの数を JavaVM ログファイルに出力するかどうかを指定します。

スレッドは、スタックに使用するためのメモリを C ヒープとして個々に確保します。このため、スレッド数が多くなると、C ヒープの確保量もスレッド数に比例して多くなります。`-XX:`

`+HitachiVerboseGCPrintThreadCount` オプションを指定することで、Java スレッドの数を監視できるようになり、C ヒープの確保量の把握ができるようになります。

## デフォルト値

- `-XX:+HitachiVerboseGCPrintThreadCount`

## 前提オプション

- `-XX:+HitachiVerboseGC`

## 出力形式

---

```
[id] <date> (Skip Full:full_count, Copy:copy_count, Inc:inc_count) [gc_kind gc_info, gc_time secs][Eden: eden_info][Survivor: survivor_info][Tenured: tenured_info][Metaspace: metaspace_info][class space: class_space_info][cause:cause_info] [User: user_cpu secs][Sys: system_cpu secs][IM: jvm_alloc_size, mmap_total_size, malloc_total_size][TC: thread_count][DOE: doe_alloc_size, called_count]
```

---

出力内容を次に示します。なお、ここでは、このオプションによって出力される項目について説明します。ここで説明している以外の項目については、「`-XX:[+|-]HitachiVerboseGC` (拡張 verbosegc 情報出力オプション)」の出力形式の説明を参照してください。

## thread\_count

Java スレッドの数。

## 出力例

---

```
[VGC]<Wed Jan 27 13:03:36 2010>(Skip Full:0, Copy:0)[GC 489K->152K(3520K), 0.0156080 secs][DefNew::Eden: 489K->0K(2048K)][DefNew::Survivor: 0K->63K(64K)][Tenured: 0K->88K(1408K)][Metaspace: 3634K(4492K, 4492K)->3634K(4492K, 4492K)][class space: 356K(388K, 388K)->356K(388K, 388K)][cause:ObjAllocFail][IM: 729K, 928K, 0K][TC: 509]
```

---

## `-XX:[+|-]HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit` (`java.io.File.deleteOnExit()`が使用するヒープサイズの出力オプション)

---

### 形式

`-XX:+HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit`

`java.io.File.deleteOnExit()`を呼び出して確保した累積のヒープサイズと、メソッドの呼び出し回数を出力します。

`-XX:-HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit`

`java.io.File.deleteOnExit()`を呼び出して確保した累積のヒープサイズと、メソッドの呼び出し回数を出力しません。

## 説明

java.io.File.deleteOnExit()を呼び出したことによって JavaVM が確保した累積のヒープサイズとメソッドの呼び出し回数を、JavaVM ログファイルに出力するかどうかを指定します。

java.io.File.deleteOnExit()は、呼び出すたびに指定されたファイルのパス情報をヒープに確保しますが、確保した領域はプロセスの終了まで解放しないため、メモリの圧迫につながるおそれがあります。-XX:+HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit オプションを指定すると、JavaVM が java.io.File.deleteOnExit()を呼び出して確保したヒープサイズをログに出力して監視できるようになります。また、java.io.File.deleteOnExit()の呼び出し状況を把握するための補助的な情報として、メソッドの呼び出し回数も同時に出力できます。

出力した情報は、障害発生時、java.io.File.deleteOnExit()の呼び出しによって確保されたヒープサイズを把握してメモリ不足の原因を調査するために役立てられます。また、運用開始前の開発やテスト段階で、java.io.File.deleteOnExit()の呼び出しによって確保したヒープサイズの増加の推移を確認して、運用時にメモリを圧迫する予兆がないかを事前確認するためにも利用できます。

なお、エラーが発生した場合は、エラーメッセージが出力されます。

### デフォルト値

- -XX:+HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit

### 前提オプション

- -XX:+HitachiVerboseGC

## 出力形式

JavaVM ログファイルの出力形式を次に示します。

---

```
[id] <date> (Skip Full:full_count, Copy:copy_count, Inc:inc_count) [gc_kind gc_info, gc_time secs][Eden: eden_info][Survivor: survivor_info][Tenured: tenured_info] [Metaspace: metaspace_info][class space: class_space_info][cause:cause_info] [User: user_cpu secs][Sys: system_cpu secs][IM: jvm_alloc_size, mmap_total_size, malloc_total_size][TC: thread_count][DOE: doe_alloc_size, called_count]
```

---

出力内容を次に示します。なお、ここでは、このオプションによって出力される項目について説明します。ここで説明している以外の項目については、「-XX:[+|-]HitachiVerboseGC (拡張 verbosegc 情報出力オプション)」の出力形式の説明を参照してください。

### doe\_alloc\_size

java.io.File.deleteOnExit()を呼び出して確保した累積のヒープサイズ。

### called\_count

java.io.File.deleteOnExit()の呼び出し回数。

エラーが発生した場合のエラーメッセージの出力形式を次に示します。

---

```
[DOE]<date>Error occurred during processing of java.io.File.deleteOnExit's heap size output function. (<保守情報>)  
[DOE]java.io.File.deleteOnExit's heap size output function stopped.
```

---

エラーメッセージの出力内容を次に示します。

### DOE

java.io.File.deleteOnExit()のヒープサイズ出力機能でエラーが発生したことを示す識別子。

## date

エラーが発生した日時。

## 出力例

- JavaVM ログファイルの出力例を次に示します。

---

```
[VGC]<Wed Jan 27 13:03:36 2010>(Skip Full:0, Copy:0)[GC 489K->152K(3520K), 0.0156080 secs][DefNew::Eden: 489K->0K(2048K)][DefNew::Survivor: 0K->63K(64K)][Tenured: 0K->88K(1408K)][Metaspace: 3634K(4492K, 4492K)->3634K(4492K, 4492K)][class space: 356K(388K, 388K)->356K(388K, 388K)][cause:ObjAllocFail][IM: 729K, 928K, 0K][TC: 509][DOE: 16K, 170]
```

---

- エラーメッセージの出力例を次に示します。

---

```
[DOE]<Wed Jan 27 13:03:36 2010> Error occurred during processing of java.io.File.deleteOnExit's heap size output function. (FindClass:java.lang.String)
[DOE]java.io.File.deleteOnExit's heap size output function stopped.
```

---

## 注意事項

- 次の場合は、`java.io.File.deleteOnExit()`を呼び出しても累積のヒープサイズ、メソッドの呼び出し回数がカウントされません。
  - `java.io.File.deleteOnExit()`を呼び出した場合に `SecurityException` 例外が発生したとき（この例外はセキュリティマネージャの `SecurityManager.checkDelete()`がファイルへの削除アクセスを許可しない場合に発生します。この場合、メソッドの入り口で例外が挙がり、ヒープは確保されません）。
  - アプリケーションサーバのバッチアプリケーション実行基盤で作成されたアプリケーションから呼び出した場合。
  - 同一のパス名文字列で作成した `File` インスタンスを使用して `java.io.File.deleteOnExit()`を呼び出したとき。
- この機能が出力するヒープサイズを確認する際には、次の点に注意してください。
  - `java.io.File.deleteOnExit()`が確保するヒープの種類は Java ヒープです。
  - ヒープサイズはキロバイト単位で出力され、1 キロバイト未満は切り捨てられます。`java.io.File.deleteOnExit()`の1回の呼び出しで確保するヒープサイズは、ファイルパスの長さに応じて数十バイトから100バイト程度であるため、呼び出しごとにヒープサイズの出力結果が増加しないことがあります。この場合、メソッドの呼び出し回数からメソッドの実行を確認できます。

## -XX:[+|-]PrintCodeCacheInfo (コードキャッシュ領域情報出力オプション)

### 形式

#### -XX:+PrintCodeCacheInfo

コードキャッシュ領域の使用量を出力します。

また、コードキャッシュ領域の使用量がしきい値に達したことを知らせるメッセージを出力します。

#### -XX:-PrintCodeCacheInfo

コードキャッシュ領域の使用量を出力しません。

また、コードキャッシュ領域の使用量がしきい値に達したことを知らせるメッセージを出力しません。

## 説明

コードキャッシュ領域の使用量を出力するかどうか、また、使用量がしきい値に達したことを知らせるメッセージを JavaVM ログファイルに出力するかどうかを指定します。

コードキャッシュ領域については、マニュアル「アプリケーションサーバシステム設計ガイド」の「7.2.6 SerialGC 使用時の JavaVM で使用するメモリ空間の構成と JavaVM オプション」を参照してください。

このオプションを有効にすると、GC 発生時、コードキャッシュ領域の使用量が拡張 verbosegc 情報に出力されます。また、コードキャッシュ領域の使用量がしきい値に達したとき、メッセージが出力されます。

しきい値は「コードキャッシュ領域の最大サイズ×-XX:CodeCacheInfoPrintRatio オプションの値÷100」です。

-XX:-HitachiVerboseGC オプションを指定している場合でも、javagc コマンドの-v オプションや-s オプションによって出力する拡張 verbosegc 情報には、コードキャッシュ領域の使用量が出力されます。

### デフォルト値

- -XX:+PrintCodeCacheInfo

### 前提オプション

- -XX:+HitachiVerboseGC

### 関連オプション

- -XX:+HitachiCommaVerboseGC
- -XX:CodeCacheInfoPrintRatio

## 出力形式

コードキャッシュ領域の使用量の出力形式を次に示します。

---

```
[id] <date> (Skip Full:full_count, Copy:copy_count, Inc:inc_count) [gc_kind gc_info, gc_time secs][Eden: eden_info][Survivor: survivor_info][Tenured: tenured_info] [Metaspace: metaspace_info][class space: class_space_info][cause:cause_info] [User: user_cpu secs][Sys: system_cpu secs][IM: jvm_alloc_size, mmap_total_size, malloc_total_size][TC: thread_count][DOE: doe_alloc_size, called_count][CCI: cc_used_sizeK, cc_max_sizeK, cc_infoK]
```

---

出力内容を次に示します。なお、ここでは、このオプションによって出力される項目について説明します。ここで説明している以外の項目については、「-XX:[+|-]HitachiVerboseGC (拡張 verbosegc 情報出力オプション)」の出力形式の説明を参照してください。

### cc\_used\_size

GC 発生時のコードキャッシュ領域の使用サイズ。単位はキロバイトです。

### cc\_max\_size

コードキャッシュ領域の最大サイズ。単位はキロバイトです。

### cc\_info

保守情報。

コードキャッシュ領域の使用量がしきい値に達したことを知らせるメッセージの出力形式を次に示します。

---

```
[cc_id]<cc_date>CodeCache usage has exceeded the threshold.[cc_used_sizeK, cc_max_sizeK, cc_infoK]
```

---

メッセージの出力内容を次に示します。

cc\_id

CCI (JavaVM ログファイル識別子)。

cc\_date

JIT コンパイルを実行した日時。

cc\_used\_size

JIT コンパイル後のコードキャッシュ領域の使用サイズ。単位はキロバイトです。

cc\_max\_size

コードキャッシュ領域の最大サイズ。単位はキロバイトです。

cc\_info

保守情報。

## 出力例

- コードキャッシュ領域の使用量の出力例を次に示します。

---

```
[VGC]<Wed Mar 17 00:42:30 2004>(Skip Full:0, Copy:0)[Full GC 149K->149K(1984K), 0.0786038 secs][DefNew::Eden:
264K->0K(512K)][DefNew::Survivor: 0K->63K(64K)][Tenured: 85K->149K(1408K)][Metaspace: 3634K(4492K, 4492K)-
>3634K(4492K, 4492K)][class space: 356K(388K, 388K)->356K(388K, 388K)][cause:System.gc][User: 0.0156250 secs]
[Sys: 0.0312500 secs][IM: 729K, 928K, 0K][TC: 509][DOE: 16K, 170][CCI: 2301K, 49152K, 2304K]
```

---

- コードキャッシュ領域の使用量がしきい値に達したことを知らせるメッセージの出力例を次に示します。

---

```
[CCI]<Wed Dec 26 14:27:53 2012>CodeCache usage has exceeded the threshold.[39358K, 49152K, 39360K]
```

---

## 注意事項

- コードキャッシュ領域の使用量がしきい値に達した状態で推移している場合、Java メソッドが JIT コンパイルされてもメッセージは出力されません。  
一方、コードキャッシュ領域の使用量がしきい値未満まで下がったあと、Java メソッドが JIT コンパイルされたことによって再びコードキャッシュ領域の使用量がしきい値に達した場合には、メッセージが出力されます。
- システムが使用するコードキャッシュ領域は 32 ビット版で最大 500 キロバイト、64 ビット版で最大 2 メガバイトです。そのため、システムのコードキャッシュ領域の使用量によっては、コードキャッシュ領域を最大サイズまで使用していない場合でも、コードキャッシュ領域が枯渇することがあります。  
また、コードキャッシュ領域の使用量のしきい値に大きな値を指定している場合、メッセージを出力する前にコードキャッシュ領域が枯渇する場合があります。コードキャッシュ領域が枯渇する前にメッセージを出力したいときは、「コードキャッシュ領域の最大サイズ-しきい値」の値が 4 メガバイト以上になるように、「-XX:CodeCacheInfoPrintRatio (コードキャッシュ領域使用率指定オプション)」の値を指定してください。

## -XX:CodeCacheInfoPrintRatio (コードキャッシュ領域使用率指定オプション)

---

### 形式

-XX:CodeCacheInfoPrintRatio=<整数値>

## 説明

コードキャッシュ領域の使用量がしきい値に達したことを知らせるメッセージを出力する契機となる、コードキャッシュ領域の使用率を指定します。

ここで指定した使用率を基に、次の計算式でしきい値が計算されます。

コードキャッシュ領域の最大サイズ×-XX:CodeCacheInfoPrintRatioオプションの値÷100

コードキャッシュ領域については、マニュアル「アプリケーションサーバ システム設計ガイド」の「7.2.6 SerialGC 使用時の JavaVM で使用するメモリ空間の構成と JavaVM オプション」を参照してください。

### デフォルト値

- -XX:CodeCacheInfoPrintRatio=80

### 前提オプション

- -XX:+PrintCodeCacheInfo

## 引数

<整数値>

0~100 の範囲で整数値（単位：%）を指定します。範囲外の値が指定された場合は 80 が設定されます。

## -XX:[+|-]PrintCodeCacheFullMessage（コードキャッシュ領域枯渇メッセージ出力オプション）

---

### 形式

-XX:+PrintCodeCacheFullMessage

Java メソッドが JIT コンパイルの対象になった場合、コードキャッシュ領域が枯渇していたときにメッセージを出力します。メッセージは一度だけ出力されます。

-XX:-PrintCodeCacheFullMessage

Java メソッドが JIT コンパイルの対象になった場合、コードキャッシュ領域が枯渇してもメッセージを出力しません。

## 説明

Java メソッドが JIT コンパイルの対象になった場合、コードキャッシュ領域が枯渇していたときに、メッセージを JavaVM ログファイルに出力するかどうかを指定します。

コードキャッシュ領域については、マニュアル「アプリケーションサーバ システム設計ガイド」の「7.2.6 SerialGC 使用時の JavaVM で使用するメモリ空間の構成と JavaVM オプション」を参照してください。

### デフォルト値

- -XX:+PrintCodeCacheFullMessage

### 前提オプション

- -XX:+HitachiVerboseGC

## 出力形式

メッセージの出力形式を次に示します。

---

```
[cc_id]<cc_date>CodeCache is full. Compiler has been disabled.[cc_used_sizeK, cc_max_sizeK, cc_infoK]
```

---

メッセージの出力内容を次に示します。

### cc\_id

CCI (JavaVM ログファイル識別子)。

### cc\_date

Java メソッドが JIT コンパイルの対象になった日時。

### cc\_used\_size

Java メソッドが JIT コンパイルの対象になったときのコードキャッシュ領域の使用サイズ。単位はキロバイトです。

### cc\_max\_size

コードキャッシュ領域の最大サイズ。単位はキロバイトです。

### cc\_info

保守情報。

## 出力例

メッセージの出力例を次に示します。

---

```
[CGI]<Wed Dec 26 14:38:29 2012>CodeCache is full. Compiler has been disabled.[49151K, 49152K, 49152K]
```

---

## 注意事項

システムが使用するコードキャッシュ領域は 32 ビット版で最大 500 キロバイト、64 ビット版で最大 2 メガバイトです。そのため、システムのコードキャッシュ領域の使用量によっては、コードキャッシュ領域を最大サイズまで使用していない場合でも、コードキャッシュ領域が枯渇することがあります。

## -XX:[+|-]HitachiOutOfMemoryCause (例外発生要因種別出力オプション)

---

### 形式

-XX:+HitachiOutOfMemoryCause

OutOfMemoryError 発生時に、例外発生要因種別を JavaVM ログファイルに出力します。-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace オプションが指定されている場合は、このオプションも設定されます。

出力される要因種別を次に示します。

スレッド数の上限値設定機能(HitachiThreadLimit オプション)を指定していて、作成したスレッド数が指定した上限値を超えた結果、OutOfMemoryError をスローする場合。

表 16-7 例外発生要因種別一覧

項番	要因メッセージ	説明
1	C Heap	C ヒープ確保時の例外
2	Java Heap	Java ヒープ確保時の例外
3	Meta Space	Metaspace 領域確保時の例外
4	Compressed Class Space	Compressed Class Space 確保時の例外
5	Unknown	上記例外を特定できない場合
6	Thread Limit	スレッド数の上限値設定機能 (-XX:HitachiThreadLimit オプション) を指定した場合に、作成したスレッド数が指定した上限値を超えたときの例外

**-XX:-HitachiOutOfMemoryCause**

OutOfMemoryError 発生時に、例外発生要因種別を JavaVM ログファイルに出力しません。

**説明**

OutOfMemoryError 発生時の発生要因種別を出力するかどうかを指定します。

**デフォルト値**

- -XX:-HitachiOutOfMemoryCause

**出力例**

```
[00M][Thread: 0x00062fd0]<Tue Dec 2 16:42:39 2003>[java.lang.OutOfMemoryError :(C Heap) : unable to create
thread : 340 threads exist]
```

**-XX:[+|-]HitachiOutOfMemoryStackTrace (スタックトレース出力オプション)****形式****-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace**

OutOfMemoryError 発生時に、例外情報とスタックトレースを JavaVM ログファイルに出力します。スタックトレースは 1 スタックごとにバッファに格納し、コード変換した後に出力します。スタックトレースの出力は、OutOfMemoryError がスローされるたびに行われるため、OutOfMemoryError をキャッチして再スローした場合には複数回出力されます。なお、スレッド作成時に OutOfMemoryError となった場合は、スタックトレースは出力されません。

**-XX:-HitachiOutOfMemoryStackTrace**

OutOfMemoryError 発生時に、スタックトレースを JavaVM ログファイルに出力しません。

**説明**

OutOfMemoryError 発生時に、例外情報とスタックトレースを JavaVM ログファイルに出力するかどうかを指定します。

**デフォルト値**

- -XX:-HitachiOutOfMemoryStackTrace



## 出力形式

---

```
[id] [Thread:thread_id]<date>[java.lang.OutOfMemoryError : requested size bytes (cause) : reason : thread_count threads exist]
```

```
[id] [Thread:thread_id] stack_trace
```

---

出力内容を次に説明します。

**id**

OOM (JavaVM ログファイル識別子)。

**thread\_id**

スレッド ID (スレッドダンプに出力されている tid)。

**date**

OutOfMemory 例外発生日時。

**size**

確保しようとしたメモリのサイズ (単位: バイト) が出力されます。-XX:-HitachiOutOfMemorySize オプションが指定されている場合、出力されません。

なお、次の場合は要求したメモリサイズが取り出せません。これらの場合は、サイズとして「unknown」が出力されます。

- Java のメモリ確保機能を使用しないで、明示的に OutOfMemoryError をスローした場合  
標準クラスライブラリによってスローされるものも含まれます。例えば、「throw new OutOfMemoryError();」などの処理によってスローされた場合、メモリサイズは出力できません。
- クラスロード時の verifier によって OutOfMemoryError が発生した場合

**cause**

例外発生要因種別。ただし、-XX:-HitachiOutOfMemoryCause オプションが指定されている場合は出力されません。例外発生要因種別については、「-XX:[+|-]HitachiOutOfMemoryCause (例外発生要因種別出力オプション)」を参照してください。

**reason**

例外発生理由。スレッドの作成に失敗した場合に出力されます。

**thread\_count**

OutOfMemoryError 発生時のスレッド数。作成に失敗したスレッド数も含まれます。

**stack\_trace**

スタックトレース

## 出力例

---

```
[OOM][Thread: 0x00062fd0] <Wed Mar 17 00:41:17 2004>[java.lang.OutOfMemoryError :requested 400000 bytes.(C Heap): unable to create thread : 1500 threads exist]
```

```
[OOM][Thread: 0x00062fd0] at java.lang.Thread.start(Native Method)
```

```
[OOM][Thread: 0x00062fd0] at sub1.<init>(Thread0012.java:22)
```

```
[OOM][Thread: 0x00062fd0] at Thread0012.test01(Thread0012.java:73)
```

```
[OOM][Thread: 0x00062fd0] at Thread0012.main(Thread0012.java:57)
```

---

## 注意事項

JavaVM 自身で作成するスレッドが、メモリ不足によってスレッドの作成に失敗した場合は、例外情報だけが出力されます。スタックトレースは出力されません。

## -XX:HitachiOutOfMemoryStackTraceLineSize (スタックトレース行サイズ指定オプション)

---

### 形式

-XX:HitachiOutOfMemoryStackTraceLineSize=<整数値>

### 説明

OutOfMemoryError 発生時に、出力するスタックトレース 1 行の文字数をバイト数で指定します。オプションの指定がない場合は、1024 バイトがデフォルトで設定されます。指定したバイト数が確保できない場合は警告メッセージが出力され、スタックトレースは出力されません。また、1 行の文字数が指定した文字数を超えた場合、「at」以降の文字列の前半部分を削除して、指定された文字数分出力します。

### デフォルト値

- -XX:HitachiOutOfMemoryStackTraceLineSize=1024

### 前提オプション

- -XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace

### 引数

<整数値>

1024~2147483647 の範囲で整数値 (単位: バイト) を指定します。範囲外の値が指定された場合は 1024 が設定されます。負の値を指定した場合はエラーとなります。

### 注意事項

非同期ログ出力 (-XX:+JavaLogAsynchronous) が有効な場合、-XX:HitachiOutOfMemoryStackTraceLineSize に 4096 より大きな値を指定しても、4096 が設定されず。

## -XX:[+|-]HitachiOutOfMemorySize (メモリサイズ出力オプション)

---

### 形式

-XX:+HitachiOutOfMemorySize

OutOfMemoryError 発生時に、要求したメモリサイズをバイト単位で出力します。

-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace オプションが指定されている場合は、このオプションも設定されます。

-XX:-HitachiOutOfMemorySize

OutOfMemoryError 発生時に、要求したメモリサイズを出力しません。

### 説明

OutOfMemoryError 発生時に要求したメモリのサイズを出力します。

## デフォルト値

- `-XX:-HitachiOutOfMemorySize`

## 出力例

---

```
[OOM][Thread: 0x00062fd0]<Tue Dec 2 16:42:39 2003>[java.lang.OutOfMemoryError : requested 1024 bytes. (Java Heap) : 20 threads exist]
```

---

## 注意事項

次の場合、要求したメモリサイズが取り出せません。

- Java のメモリ確保機能を使用しなくて、明示的に `OutOfMemoryError` をスローした (J2SE クラスライブラリがスローするものを含みます) 場合。  
例:`throw new OutOfMemoryError();`
- クラスロード時の verifier が `OutOfMemoryError` を発生させた場合。

---

```
[OOM][Thread: 0x00062fd0]<Tue Dec 2 16:42:39 2003>[java.lang.OutOfMemoryError : requested size unknown. (Unknown) : 10 threads exist]
```

---

## `-XX:[+|-]HitachiOutOfMemoryAbort` (強制終了オプション)

---

### 形式

`-XX:+HitachiOutOfMemoryAbort`

`OutOfMemoryError` 発生時にメモリダンプを出力して、強制終了します。

`-XX:-HitachiOutOfMemoryAbort`

`OutOfMemoryError` 発生時に強制終了しません。

### 説明

次の原因で `OutOfMemoryError` が発生した場合、標準出力にメッセージを、カレントディレクトリにメモリダンプまたは core ダンプを出力して強制終了します。

- Java ヒープ不足の場合
- Metaspace 領域不足の場合
- Compressed Class Space 不足の場合
- J2SE クラスライブラリ中での C ヒープ不足の場合

なお、JavaVM 処理中に C ヒープ不足となった場合には、このオプションの指定にかかわらず、強制停止します。

### 強制終了時の終了コード

強制終了した場合の JavaVM の終了コードを次に示します。

Windows の場合

- Windows XP の場合  
メモリダンプの出力に成功したとき：`-2147483645`  
メモリダンプの出力に失敗したとき：`1`

- Windows Server 2012, Windows Server 2008, Windows 8, Windows 7, Windows Vista の場合

1

UNIX の場合

6

なお、UNIX のシェル(sh や csh など)上で実行したとき、終了コードは 0x80 が加算されて 0x86 となります。

デフォルト値

- `-XX:-HitachiOutOfMemoryAbort`

## 出力例

---

```
java.lang.OutOfMemoryError occurred.
```

```
JavaVM aborted because of specified -XX:+HitachiOutOfMemoryAbort options.
```

---

## 注意事項

- `-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace` オプションが指定されている場合は、JavaVM ログファイルにスタックトレースを出力したあとに終了します。
- このオプションが指定されている場合、`java.io.File.deleteOnExit` メソッドや `java.lang.Runtime.addShutdownHook` メソッドで登録している、JavaVM 終了時の処理は実行されないで強制終了します。

## -XX:[+|-]HitachiOutOfMemoryAbortThreadDump (スレッドダンプ出力オプション)

---

### 形式

`-XX:+HitachiOutOfMemoryAbortThreadDump`

OutOfMemoryError 発生時にスレッドダンプを出力します。

`-XX:+HitachiOutOfMemoryAbort` オプションが指定されている場合に、このオプションは指定できません。

`-XX:-HitachiOutOfMemoryAbortThreadDump`

OutOfMemoryError 発生時にスレッドダンプを出力しません。

### 説明

OutOfMemoryError 発生時にスレッドダンプを出力します。ただし、J2SE クラスライブラリで C ヒープ不足の場合は、スレッドダンプの出力による再度の C ヒープ不足発生を避けるため、スレッドダンプは出力しません。

スレッドダンプの出力先は環境変数 `JAVACOREDIR`、または `-XX:+HitachiThreadDumpToStdout` オプションで指定します。

デフォルト値

- `-XX:+HitachiOutOfMemoryAbortThreadDump`

## 前提オプション

- `-XX:+HitachiOutOfMemoryAbort`
- `-XX:+HitachiThreadDump`

## `-XX:[+|-]HitachiOutOfMemoryAbortThreadDumpWithJHeapProf` (クラス別統計情報出力オプション)

---

## 形式

`-XX:+HitachiOutOfMemoryAbortThreadDumpWithJHeapProf`

`-XX:+HitachiOutOfMemoryAbortThreadDump` で出力するスレッドダンプログファイルにクラス別統計情報を出力します。

`-XX:-HitachiOutOfMemoryAbortThreadDumpWithJHeapProf`

`-XX:+HitachiOutOfMemoryAbortThreadDump` で出力するスレッドダンプログファイルにクラス別統計情報を出力しません。

## 説明

`-XX:+HitachiOutOfMemoryAbortThreadDump` で出力するスレッドダンプログファイルにクラス別統計情報を出力するかどうかを指定します。

## デフォルト値

`-XX:-HitachiOutOfMemoryAbortThreadDumpWithJHeapProf`

## 前提オプション

- `-XX:+HitachiOutOfMemoryAbort`
- `-XX:+HitachiOutOfMemoryAbortThreadDump`
- `-XX:+HitachiThreadDump`

## 注意事項

`-XX:+HitachiOutOfMemoryAbortThreadDumpWithJHeapProf` オプションは `OutOfMemory` 発生時に出力されるスレッドダンプに、クラス別統計情報を出力するためのオプションです。G1GC を使用した場合、クラス別統計機能が使用できないため、このオプションも使用できません。G1GC 使用時にこのオプションを指定した場合、スレッドダンプは出力されますが、クラス別統計情報は出力されません。

## `-XX:[+|-]HitachiOutOfMemoryHandling` (`OutOfMemory` ハンドリングオプション)

---

## 形式

`-XX:+HitachiOutOfMemoryHandling`

`OutOfMemory` ハンドリング機能を有効にします。

`-XX:-HitachiOutOfMemoryHandling`

`OutOfMemory` ハンドリング機能を無効にします。

## 説明

OutOfMemory ハンドリング機能を有効にするかどうかを指定します。このオプションは、J2EE サーバを J2EE サーバモードで実行した場合にだけ有効です。

OutOfMemory ハンドリング機能は、OutOfMemory 発生時強制終了機能 (-XX:+HitachiOutOfMemoryAbort) と組み合わせて使用します。OutOfMemory 発生時強制終了機能が無効 (-XX:-HitachiOutOfMemoryAbort) になっている場合、OutOfMemory ハンドリング機能は無効になります。

OutOfMemory ハンドリング機能を有効にした場合、OutOfMemory 発生時に OutOfMemoryError スロー条件が判定されます。具体的には、次に示す処理を実行中に Java ヒープ不足や Metaspace 領域、Compressed Class Space 不足が原因の OutOfMemory が発生した場合に、J2EE サーバの実行を継続するかどうか判定されます。

- Web コンテナ上の Web アプリケーション (Servlet/JSP) が実行中のリクエスト処理
- EJB クライアントアプリケーションから呼び出された Enterprise Bean が実行中の処理
- Message-driven Bean が実行中の処理
- Timer Service から呼び出された Enterprise Bean が実行中の処理

判定の結果、J2EE サーバの実行が継続される場合は、`java.lang.OutOfMemoryError` がスローされて、OutOfMemory が発生したリクエスト処理だけが中止されます。

JavaVM は、判定結果によって次のように動作します。ただし、Web アプリケーションで `java.lang.OutOfMemoryError` をキャッチしている場合は、その処理に従います。

- **OutOfMemoryError スロー条件を満たしている場合**  
`java.lang.OutOfMemoryError` をスローして、OutOfMemory が発生したリクエスト処理だけを中止します。
- **OutOfMemoryError スロー条件を満たしていない場合**  
 OutOfMemory 発生時強制終了機能によって、JavaVM を強制終了します。

OutOfMemoryError スロー条件を次に示します。なお、OutOfMemoryError スロー条件に合致しない場合、OutOfMemory 発生時強制終了機能によって、JavaVM は強制終了します。

### OutOfMemoryError スロー条件

OutOfMemory が発生した場合に、次に示す条件すべてに該当するとき、JavaVM は OutOfMemoryError スロー条件を満たしているものと判定して、異常終了しないで `java.lang.OutOfMemoryError` をスローします。

- Java ヒープ不足、または Metaspace 領域、Compressed Class Space 不足が原因の OutOfMemory である。
- Web コンテナ上の Web アプリケーション (Servlet/JSP) が実行中のリクエスト処理、EJB クライアントアプリケーションから呼び出された Enterprise Bean が実行中の処理、Message-driven Bean が実行中の処理、または Timer Service から呼び出された Enterprise Bean が実行中の処理で発生した OutOfMemory である。
- OutOfMemoryError スロー除外条件に該当しない。

### OutOfMemoryError スロー除外条件

今回の OutOfMemory が発生した時刻から過去 1 時間以内の Java ヒープ不足が原因の OutOfMemory の発生回数と Metaspace 領域、Compressed Class Space 不足が原因の

OutOfMemory の発生回数の合計値（今回の OutOfMemory を含む）が、 -  
XX:HitachiOutOfMemoryHandlingMaxThrowCount オプション値に指定した値よりも大きい。

OutOfMemory 発生時強制終了機能と OutOfMemory ハンドリング機能の OutOfMemory 発生要因ごとの動作を次の表に示します。OutOfMemory ハンドリング機能が有効かどうかは、OutOfMemory の発生原因が Java ヒープ不足または Metaspace 領域、Compressed Class Space 不足の場合の動作に影響します。

表 16-8 OutOfMemory 発生時強制終了機能と OutOfMemory ハンドリング機能の OutOfMemory 発生要因ごとの動作

OutOfMemory 発生要因	OutOfMemory 発生時強制終了機能の対象となるかどうか (OutOfMemory 発生時の動作※1)	OutOfMemory ハンドリング機能の対象となるかどうか (OutOfMemory 発生時の動作)
Java ヒープ不足	対象になります (JavaVM は強制終了します)。	対象になります (判定結果に従って動作します※2)。
Metaspace 領域不足	対象になります (JavaVM は強制終了します)。	対象になります (判定結果に従って動作します※2)。
Compressed Class Space 不足	対象になります (JavaVM は強制終了します)。	対象になります (判定結果に従って動作します※2)。
C ヒープ不足	対象になります (JavaVM は強制終了します)。	対象になりません (JavaVM は強制終了します※3)。
Unkown	対象になりません (java.lang.OutOfMemoryError がスローされます)。	対象になりません (java.lang.OutOfMemoryError がスローされます)。
Thread Limit	対象になりません (java.lang.OutOfMemoryError がスローされます)。	対象になりません (java.lang.OutOfMemoryError がスローされます)。

注※1 OutOfMemory ハンドリング機能は無効 (-XX:-HitachiOutOfMemoryHandling) の場合の動作です。

注※2 OutOfMemoryError スロー条件を満たしている場合、java.lang.OutOfMemoryError がスローされます。OutOfMemoryError スロー条件を満たしていない場合、OutOfMemory 発生時強制終了機能の処理に移行して、JavaVM は強制終了します。

注※3 OutOfMemory 発生時強制終了機能によって、JavaVM は強制終了します。

また、OutOfMemory ハンドリング機能が有効な場合、Java ヒープ不足、および Metaspace 領域、Compressed Class Space 不足が原因の OutOfMemory 発生時に OutOfMemory の発生頻度に関する情報が JavaVM ログファイルに出力されます。

#### デフォルト値

- -XX:-HitachiOutOfMemoryHandling

#### 前提オプション

- -XX:+HitachiOutOfMemoryAbort

#### 出力形式

---

```
[id][Thread: thread_id]<date>[Handling: oom_count(max_oom_count)]
```

---

出力内容を次に説明します。

**id**

OMH (Java VM ログファイル識別子)。

**thread\_id**

スレッド ID (スレッドダンプに出力されている tid)。

**date**

OutOfMemory をハンドリングした日時。

**oom\_count**

今回の OutOfMemory が発生した時刻から過去 1 時間以内の、Java ヒープ不足が原因の OutOfMemory の発生回数と Metaspace 領域、Compressed Class Space 不足が原因の OutOfMemory の発生回数の合計値 (今回の OutOfMemory を含む)。

ただし、今回の OutOfMemory も含めて、1 時間以内の発生回数の合計値が 3601 を超えた場合でも、出力項目の最大値は 3601 になります。

**max\_oom\_count**

-XX:HitachiOutOfMemoryHandlingMaxThrowCount オプションに指定した値。

## 出力例

---

```
[OMH][Thread: 0x00927f48]<Tue Aug 24 19:02:19 2010>[Handling: 1(60)]
```

---

## 注意事項

- OutOfMemory ハンドリング機能は、OutOfMemory の根本原因を解決したり、OutOfMemory 発生による J2EE サーバの終了を確実に回避したりする機能ではありません。また、OutOfMemory 発生後に J2EE サーバの実行を継続できることを確実に保証する機能でもありません。この機能は、ユーザープログラム処理の問題による突発的な OutOfMemory が発生した場合に、J2EE サーバの終了を一時的に防ぐための機能です。

java.lang.OutOfMemoryError は、OutOfMemory ハンドリング機能の設定に関係なく、ヒープが枯渇している場合に発生します。java.lang.OutOfMemoryError が発生した場合には、J2EE サーバをできるだけ速やかに再起動して回復すること、そのあとで OutOfMemory の根本原因を解決することを推奨します。

なお、java.lang.OutOfMemoryError をスローすることによって、リソースのリークやロックなどが発生し、J2EE サーバに予期しない動作が発生するおそれがあります。このため、この機能を有効にしている場合に OutOfMemory が発生したときには、適切なタイミングで J2EE サーバを再起動する運用にしてください。また、J2EE サーバに予期しない動作が発生することを避けたい場合は、この機能を無効にしてください。この場合、突発的な OutOfMemory が発生したときには、J2EE サーバは終了します。

この機能を有効にした場合に、予期しない動作になってしまったときは、J2EE サーバを再起動してください。また、その後の運用ではこの機能を無効にしてください。

- OutOfMemory ハンドリング機能が有効な場合、OutOfMemory 発生時強制終了機能が有効 (-XX:+HitachiOutOfMemoryAbort) でも、jsp や Servlet での処理中に OutOfMemory が発生したときは、強制終了しないで Java SE の仕様どおりに java.lang.OutOfMemoryError がスローされます。そのため、例えば、finally 節を使用して適切にリソースを解放していないようなときには、リソースの解放漏れなどが発生することがあります。このような問題を避けて、従来どおり強制終了させたい場合は、OutOfMemory ハンドリング機能を無効にしてください。



## -XX:HitachiOutOfMemoryHandlingMaxThrowCount (最大発生回数の設定オプション)

---

### 形式

-XX:HitachiOutOfMemoryHandlingMaxThrowCount=<整数値>

### 説明

OutOfMemory ハンドリング機能を有効にした場合の、Java ヒープ不足または Metaspace 領域、Compressed Class Space 不足が原因の OutOfMemory 発生回数合計値の 1 時間当たりの上限値を指定します。

このオプションで指定した値は、OutOfMemoryError スロー除外条件の判定で使用されます。

Java ヒープ不足または Metaspace 領域、Compressed Class Space 不足が原因の OutOfMemory が発生した場合、次のように処理が実行されます。

- 今回の OutOfMemory が発生した時刻から過去 1 時間以内の Java ヒープ不足が原因の OutOfMemory の発生回数と Metaspace 領域、Compressed Class Space 不足が原因の OutOfMemory の発生回数の合計値（今回の OutOfMemory を含む）が、このオプションに指定した上限値よりも大きい場合、OutOfMemoryError はスローされません。OutOfMemory 発生時強制終了機能（-XX:+HitachiOutOfMemoryAbort）の処理に移行して、JavaVM は強制終了します。
- このオプションの値として 0 を指定した場合は、OutOfMemory が発生したときに必ず OutOfMemory 発生時強制終了機能の処理に移行して、JavaVM は強制終了します。
- このオプションの値として 3600 を指定した場合は、OutOfMemoryError スロー除外条件の判定が実行されません。この場合、OutOfMemory が発生したときに OutOfMemoryError スロー除外条件以外の OutOfMemoryError スロー条件を満たしている場合、必ず `java.lang.OutOfMemoryError` がスローされます。

### デフォルト値

- -XX:HitachiOutOfMemoryHandlingMaxThrowCount=60

### 前提オプション

- -XX:+HitachiOutOfMemoryHandling

### 引数

<整数値>

Java ヒープ不足または Metaspace 領域、Compressed Class Space 不足が原因の OutOfMemory 発生回数合計値の 1 時間当たりの上限値を指定します。

32 ビット版の JavaVM の場合：

0~3600 (3601~ $2^{31}-1$  の場合は 3600 として扱います)。

64 ビット版の JavaVM の場合：

0~3600 (3601~ $2^{63}-1$  の場合は 3600 として扱います)。

### 注意事項

自然数以外の値が指定された場合は、定義していないオプションを指定した場合と同様の動作になります。

## -XX:[+|-]HitachiJavaClassLibTrace (クラスライブラリのスタックトレース出力オプション)

---

### 形式

-XX:+HitachiJavaClassLibTrace

クラスライブラリのスタックトレースを出力します。

-XX:-HitachiJavaClassLibTrace

クラスライブラリのスタックトレースを出力しません。

### 説明

次に示すシステム全体に影響を与えるメソッドが使用された場合、これらの API のスタックトレースを、JavaVM ログファイルへ出力します。

- java.lang.System.gc
- java.lang.System.exit
- java.lang.System.runFinalizersOnExit
- java.lang.Runtime.exit
- java.lang.Runtime.halt
- java.lang.Runtime.runFinalizersOnExit

### デフォルト値

- -XX:-HitachiJavaClassLibTrace

### 出力形式

---

```
[id] [Thread:thread_id]<date>
[id] [Thread:thread_id] stack_trace
```

---

出力内容を次に説明します。

id :

CLT (Java VM ログファイル識別子)。

thread\_id :

スレッド ID (スレッドダンプに出力されている tid)。

date :

クラスライブラリ使用日時。

stack\_trace :

スタックトレース。

### 出力例 1

---

```
[CLT][Thread: 0x00062fd0]<Mon Sep 27 12:10:03 2004>
[CLT][Thread: 0x00062fd0] at at java.lang.Shutdown.halt0(Native Method)
[CLT][Thread: 0x00062fd0] at java.lang.Shutdown.halt(Shutdown.java:145)
[CLT][Thread: 0x00062fd0] - locked <0x100101a0> (a java.lang.Shutdown$Lock)
[CLT][Thread: 0x00062fd0] at java.lang.Shutdown.exit(Shutdown.java:222)
[CLT][Thread: 0x00062fd0] - locked <0x1413c0a0> (a java.lang.Class)
[CLT][Thread: 0x00062fd0] at java.lang.Terminator$1.handle(Terminator.java:35)
```

---

---

```
[CLT][Thread: 0x00062fd0] at sun.misc.Signal$1.run(Signal.java:195)
[CLT][Thread: 0x00062fd0] at java.lang.Thread.run(Thread.java:534)
```

---

## 出力例 2

---

```
[CLT][Thread: 0x009c4000]<Tue Oct 09 15:36:18 2012>
[CLT][Thread: 0x009c4000] at java.lang.Runtime.outputJavaClassLibTrace(Native Method)
[CLT][Thread: 0x009c4000] at java.lang.Runtime.runFinalizersOnExit(Runtime.java:378)
[CLT][Thread: 0x009c4000] at java.lang.System.runFinalizersOnExit(System.java:978)
[CLT][Thread: 0x009c4000] at Program.main(Program.java:8)
```

---

## -XX:HitachiJavaClassLibTraceLineSize (クラスライブラリのスタックトレース行サイズ指定オプション)

---

### 形式

-XX:HitachiJavaClassLibTraceLineSize=<整数値>

### 説明

-XX:+HitachiJavaClassLibTrace オプションを指定した場合に出力される、クラスライブラリのスタックトレースの 1 行の文字数をバイト数で指定します。

### デフォルト値

- -XX:HitachiJavaClassLibTraceLineSize=1024

### 前提オプション

- -XX:+HitachiJavaClassLibTrace

### 引数

<整数値>

1024~2147483647 の範囲で整数値（単位：バイト）を指定します。範囲外の値が指定された場合は 1024 が設定されます。

### 出力例

---

```
[CLT][Thread: 0x00286c58]<Thu Oct 21 14:56:24 2004>
[CLT][Thread: 0x00286c58] at java.lang.Runtime.gc(Native Method)
[CLT][Thread: 0x00286c58] at java.lang.System.gc(System.java:737)
[CLT][Thread: 0x00286c58] at mple.func 012345678~省略~xyz(Sample.java:9)
[CLT][Thread: 0x00286c58] at Sample.main(Sample.java:5)
```

---

1 行の文字数が指定したバイト数を超える場合、「at」以降の文字列の前半部分が削除されます。出力例の場合、4 行目の Sample の前半が削除されて mple となります。

## -XX:[+|-]HitachiLocalsInThrowable (例外発生時のローカル変数情報収集オプション)

---

### 形式

-XX:+HitachiLocalsInThrowable

スタックトレース中のメソッドのローカル変数情報を出力します。

ただし、java.lang.StackOverflowError 発生時には、このオプションは無視されます。

-XX:-HitachiLocalsInThrowable

スタックトレース中のメソッドのローカル変数情報を出力しません。

## 説明

java.lang.Throwable.fillInStackTrace メソッド実行時に、スタックトレース中のメソッドのローカル変数情報を収集します。

## デフォルト値

- -XX:-HitachiLocalsInThrowable

## 出力形式

---

```
locals:
name: <name>
type: <type>
value: <value>
...
```

---

出力内容を次に示します。

- 1 行目に「locals:」という見出しが出力されます。
- 2 行目以降は、収集可能であった各ローカル変数について、次の情報が 1 行ずつ出力されます。
  1. 変数名
  2. 型名（基本型名、クラス名または配列型名）
  3. 変数値を表現する文字列

なお、各ローカル変数の出力内容は、空行で区切られています。

<name> :

ローカル変数名。

メソッドに渡される引数の場合は、変数名に続いて[arg\*\*\*] (\*\*\*)は引数番号) が表示されます。

<type> :

ローカル変数の型名（基本型名、クラス名または配列型名）。

<value> :

ローカル変数の値を表現する文字列。

- 基本型 :
  - 値をそのまま文字列化したもの
- クラスまたは配列型 :
  - 変数値が null の場合 : (null)
  - それ以外の場合 : <オブジェクトの存在するアドレス>

値表現の最大文字列長は 64 です。これを超える場合は 64 文字目までを出力した後、「...」という文字列が出力されます。クラスまたは配列型の場合、次の追加オプションを指定することでより詳細な表現が追加できます。

- -XX:+HitachiLocalsSimpleFormat
- -XX:+HitachiTrueTypeInLocals
- -XX:HitachiCallToString

## 出力例

Java プログラム例 1 を使用した出力例を、次に示します。

すべてのローカル変数情報が出力される場合

---

```

at Example1.method(Example1.java:15)
  locals:
    name: this
    type: Example1
    value: <0x922f42d0>

    name: l1 [arg1]
    type: int
    value: 1

    name: l2 [arg2]
    type: char
    value: 'Q'

    name: l3 [arg3]
    type: java.lang.Object
    value: <0xaf112f08>

    name: l4
    type: float
    value: 4.000000

    name: l5
    type: boolean
    value: true

    name: l6
    type: double
    value: 1.79769E+308

    name: l7
    type: java.lang.Object[]
    value: <0x922f42d8>

at Example1.main(Example1.java:5)
  locals:
...

```

---

ローカル変数情報が存在しない場合

- -g オプションまたは-g:vars オプションを付加しないで class ファイルを生成した場合
- -g オプションまたは-g:vars オプションを付加して生成した class ファイルの、native メソッドの場合

---

```

at Example1.method(Example1.java:15)
  locals:
    name: this
    type: Example1
    value: <0x922f42d0>

    name: [arg1]
    type: int
    value: 1

    name: [arg2]
    type: char
    value: 'Q'

    name: [arg3]
    type: java.lang.Object
    value: <0xaf112f08>

at Example1.main(Example1.java:5)
  locals:
...

```

---

## 注意事項

- ローカル変数情報を完全に収集するためには、javac で class ファイルを生成する際に、-g オプションまたは-g:vars オプションを付加して class ファイル内にローカル変数情報を埋め込んでおく必要があります。-g オプションまたは-g:vars オプションを付加しないで作成された class ファイルについては、収集可能な範囲でローカル変数情報が出力されます。
- g オプションまたは-g:vars オプションを付加して生成された class ファイルでも、native メソッドの場合はローカル変数情報が存在しません。
- JIT コンパイラがメソッドを JIT コンパイルする際、最適化の一環として、不要と判断したローカル変数を除去することがあります。

(例) `int not_used = 12345` といった宣言および初期化以降未使用のローカル変数

この場合、例外発生時点のローカル変数情報には、次の値が出力されます。

型名	出力情報
boolean 型	false
char 型	'\0'
byte 型 short 型 int 型 long 型 float 型 double 型	0
クラス型 配列型	(null)

- 制御構造が複雑で行数が多いメソッドのローカル変数情報を出力する場合、解析に時間が掛かるため、例外発生時の例外オブジェクト生成処理に時間が掛かることがあります。
- `java.lang.Thread` クラスの `getStackTrace` メソッドを使用して取得した、カレントスレッドのスタックトレースにローカル変数情報を出力するためには、例外発生時のスタックトレースにローカル変数情報を出力する、例外発生時のローカル変数情報収集オプション (`-XX:+HitachiLocalsInThrowable`) が必要になります。

## -XX:[+|-]HitachiLocalsInStackTrace (スレッドダンプ出力時のローカル変数出力オプション)

### 形式

`-XX:+HitachiLocalsInStackTrace`

スレッドダンプ出力時のスタックトレースに、ローカル変数情報を出力します。

`-XX:-HitachiLocalsInStackTrace`

スレッドダンプ出力時のスタックトレースに、ローカル変数情報を出力しません。

## 説明

スレッドダンプ出力時のスタックトレースに、各メソッドのローカル変数情報を追加して出力します。ローカル変数情報の出力内容については、「-XX:[+|-]HitachiLocalsInThrowable (例外発生時のローカル変数情報収集オプション)」を参照してください。

## デフォルト値

- -XX:-HitachiLocalsInStackTrace

## 出力例

Java プログラム例 2 を使用した出力例を、次に示します。

- -XX:+HitachiLocalsSimpleFormat オプションおよび-XX:+HitachiTrueTypeInLocals オプションが指定されている場合

---

```
"main" prio=1 tid=0xb6e88d20 nid=0xb7492080 runnable [bffff000..bffff474]
  at Example2.method(Example2.java:15)
  - locked <0xab040550> (a Example2)
  locals:
    (Example2) this = <0xab040550> (Example2)
    (int) l1 = 1
    (float) l2 = 2.000000
    (java.lang.String) l3 = <0xaf112cc0> (java.lang.String)
    (java.lang.Character) l4 = <0xab040698> (java.lang.Character)
    (java.lang.Object) l5 = <0xab0407c8> (java.lang.Thread)
    (java.lang.Object[]) l6 = <0xab0408b8> (java.lang.Thread[])
  at Example2.main(Example2.java:4)
  locals:
    (java.lang.String[]) args [arg1] = <0xab040540> (java.lang.String[])
    (Example2) e2 = <0xab040550> (Example2)
```

---

## 注意事項

- ローカル変数情報を完全に収集するためには、javac で class ファイルを生成する際に、-g オプションまたは-g:vars オプションを付加して class ファイル内にローカル変数情報を埋め込んでおく必要があります。-g オプションまたは-g:vars オプションを付加しないで作成された class ファイルについては、収集可能な範囲でローカル変数情報が出力されます。
- 一般にスタックトレース情報の収集を行うスレッドと収集対象のスレッドは一致しません。このため、情報収集を行うためには、対象スレッドを停止させる必要があります、toString メソッドを呼び出すことはできません。このため、-XX:HitachiCallToString オプションの指定は無効になります。
- 制御構造が複雑で行数が多いメソッドのローカル変数情報を出力する場合、解析に時間が掛かるため、拡張スレッドダンプの出力やスレッドスタックトレースの取得に時間が掛かることがあります。

## -XX:[+|-]HitachiLocalsSimpleFormat (ローカル変数情報の出力フォーマット変更オプション)

---

### 形式

-XX:+HitachiLocalsSimpleFormat

ローカル変数情報出力を、簡易フォーマットで出力します。

-XX:-HitachiLocalsSimpleFormat

ローカル変数情報出力を、通常フォーマットで出力します。

## 説明

ローカル変数情報の出力フォーマットを、1 変数 1 行で出力する簡易出力フォーマットに変更します。

### デフォルト値

- `-XX:-HitachiLocalsSimpleFormat`

### 前提オプション

- `-XX:+HitachiLocalsInThrowable`
- `-XX:+HitachiLocalsInStackTrace`

## 出力形式

---

```
locals:
  (type) name = value
  (type) name = value
...
```

---

type, name および value の出力内容については、「`-XX:[+|-]HitachiLocalsInThrowable` (例外発生時のローカル変数情報収集オプション)」を参照してください。

## 出力例

Java プログラム例 1 を使用した出力例を、次に示します。

---

```
at Example1.method(Example1.java:15)
  locals:
    (Example1) this = <0x922f42d0>
    (int) l1 [arg1] = 1
    (char) l2 [arg2] = 'Q'
    (java.lang.Object) l3 [arg3] = <0xaf112f08>
    (float) l4 = 4.000000
    (boolean) l5 = true
    (double) l6 = 1.79769E+308
    (java.lang.Object[]) l7 = <0x922f42d8>
at Example1.main(Example1.java:5)
  locals:
...
```

---

## `-XX:[+|-]HitachiTrueTypeInLocals` (ローカル変数情報の実型名出力オプション)

### 形式

`-XX:+HitachiTrueTypeInLocals`

ローカル変数情報に、実際のオブジェクト型名を出力します。

`-XX:-HitachiTrueTypeInLocals`

ローカル変数情報に、実際のオブジェクト型名を出力しません。

### 説明

ローカル変数情報収集時に、クラスまたは配列型のローカル変数について、実際に代入されているオブジェクトの型名を出力します。変数値を表現する文字列の後ろの丸括弧内に表示されます。

なお、ローカル変数に格納されているクラスまたは配列型のオブジェクトが JavaVM 内部のオブジェクトの場合は、"internal type"と出力されます。



### デフォルト値

- -XX:-HitachiTrueTypeInLocals

### 前提オプション

- -XX:+HitachiLocalsInThrowable
- -XX:+HitachiLocalsInStackTrace

### 出力例

Java プログラム例 3 を使用した出力例を、次に示します。

- -XX:+HitachiLocalsSimpleFormat オプションおよび-XX:HitachiCallToString=full が指定されている場合

---

```

at Example3.method(Example3.java:18)
  locals:
    (Example3) this = <0xaa07db58> "I am an Example3 instance." (Example3)
    (java.lang.String) l1 = <0xae173a28> "local 1" (java.lang.String)
    (java.lang.StringBuffer) l2 = <0xaa07dca0> "local 1 + local 2" (java.lang.StringBuffer)
    (java.lang.Boolean) l3 = <0xaa07de18> "false" (java.lang.Boolean)
    (java.lang.Character) l4 = <0xaa07df68> "X" (java.lang.Character)
    (java.lang.Long) l5 = <0xaa07e078> "-9223372036854775808" (java.lang.Long)
    (java.lang.Object) l6 = <0xaa07e1a8> "Thread[Thread-0,5,main]" (java.lang.Thread)
    (java.lang.Object[]) l7 = <0xaa07e298> "[Ljava.lang.Thread;@26e431" (java.lang.Thread[])
at Example3.main(Example3.java:4)
  locals:
...

```

---

## -XX:HitachiCallToString (ローカル変数情報出力オプション)

### 形式

-XX:HitachiCallToString=<適用範囲>

### 説明

<適用範囲>に該当するクラスのローカル変数オブジェクトに対して取得した String オブジェクトの文字列を、変数値を表現する文字列として出力します。

なお、ローカル変数に格納されているオブジェクトがない場合、または JavaVM 内部のオブジェクトの場合は、出力されません。

### デフォルト値

- -XX:HitachiCallToString=minimal

### 前提オプション

- -XX:+HitachiLocalsInThrowable

### 引数

<適用範囲>

minimal または full を指定します。

minimal :

java.lang パッケージ内の次に示すクラスが対象になります。

- String

- StringBuffer
- Boolean
- Byte
- Character
- Short
- Integer
- Long
- Float
- Double

なお、空文字 ("") を指定した場合も、minimal と同じです。

full :

すべてのクラスおよび配列型が対象になります。

## 出力例

Java プログラム例 3 を使用した出力例（簡易出力フォーマット）を、次に示します。

-XX:HitachiCallToString=minimalの場合

---

```
at Example3.method(Example3.java:18)
  locals:
    (Example3) this = <0xaa07db58>
    (java.lang.String) l1 = <0xae173a28> "local 1"
    (java.lang.StringBuffer) l2 = <0xaa07dca0> "local 1 + local 2"
    (java.lang.Boolean) l3 = <0xaa07de18> "false"
    (java.lang.Character) l4 = <0xaa07df68> "x"
    (java.lang.Long) l5 = <0xaa07e078> "-9223372036854775808"
    (java.lang.Object) l6 = <0xaa07e1a8>
    (java.lang.Object[]) l7 = <0xaa07e298>
at Example3.main(Example3.java:4)
  locals:
...

```

---

-XX:HitachiCallToString=fullの場合

---

```
at Example3.method(Example3.java:18)
  locals:
    (Example3) this = <0xaa07db58> "I am an Example3 instance."
    (java.lang.String) l1 = <0xae173a28> "local 1"
    (java.lang.StringBuffer) l2 = <0xaa07dca0> "local 1 + local 2"
    (java.lang.Boolean) l3 = <0xaa07de18> "false"
    (java.lang.Character) l4 = <0xaa07df68> "x"
    (java.lang.Long) l5 = <0xaa07e078> "-9223372036854775808"
    (java.lang.Object) l6 = <0xaa07e1a8> "Thread[Thread-0,5,main]"
    (java.lang.Object[]) l7 = <0xaa07e298> "[Ljava.lang.Thread;@26e431"
at Example3.main(Example3.java:4)
  locals:
...

```

---

## 注意事項

- ローカル変数情報を完全に収集するためには、javac で class ファイルを生成する際に、-g オプションまたは-g:vars オプションを付加して class ファイル内にローカル変数情報を埋め込んでおく必要があります。-g オプションまたは-g:vars オプションを付加しないで作成された class ファイルについては、収集可能な範囲でローカル変数情報が出力されます。

- このオプションを指定して、AWT または Swing を利用した Java のプログラムを実行する場合、<適用範囲>には「minimal」（デフォルト）を指定してください。<適用範囲>に「full」を指定すると、プログラムが正しく動作しません。
- ユーザプログラムでの例外発生時の原因調査時に限り、<適用範囲>に「full」を指定してください。この機能は、例外オブジェクト生成時、ローカル変数オブジェクトの toString() メソッドを呼び出す仕様です。toString() メソッドの呼び出しにより、原因調査に有用な情報が得られる反面、本来とは異なるタイミングで toString() メソッドを呼び出すことで、製品やユーザプログラムが正しく動作しない場合があるためです。

## -XX:[+|-]HitachiFullCore (システムリソース解除オプション)

---

このオプションは、UNIX 用です。

### 形式

-XX:+HitachiFullCore

システムリソース RLIMIT\_CORE を強制的に最大値に引き上げて、障害発生時にユーザーリミットを無視して core ファイルを作成します。

-XX:-HitachiFullCore

システムリソース RLIMIT\_CORE は変更しません。

### 説明

システムリソース RLIMIT\_CORE の設定を変更するかどうかを指定します。

### デフォルト値

- -XX:-HitachiFullCore

## -XX:[+|-]HitachiReserveSwapSpace (スワップ領域の予約オプション)

---

このオプションは、HP-UX 用です。

### 形式

-XX:+HitachiReserveSwapSpace

JavaVM の実行に必要なとなる最大のスワップ領域をすべて予約します。

-XX:-HitachiReserveSwapSpace

JavaVM の実行に必要なとなる最大のスワップ領域を予約しません。

### 説明

JavaVM の実行に必要なとなる最大のスワップ領域を、JavaVM 起動時に、OS に対して予約するかどうかを指定します。

なお、必要となる最大のスワップ領域のサイズは、次の式で算出できます。

---


$$(-Xmx\text{指定値})^{\ast 1} + (-XX:\text{MaxMetaspaceSize}\text{指定値})^{\ast 1} + (\text{JIT コンパイルしたコードを格納する領域})^{\ast 2}$$


---

注※1

-Xmx および MaxMetaspaceSize のデフォルト値は次のようになっています。

- ・-Xmx : 64MB
- ・MaxMetaspaceSize : 64MB

注※2

HP-UX (IPF) の場合 : 128MB

#### デフォルト値

- -XX:-HitachiReserveSwapSpace

#### 注意事項

- JavaVM によって予約されたスワップ領域を、ほかのプロセスから利用（予約）できません。JavaVM がその領域を使用していなくても同様に利用できません。このため、JavaVM の実行中にスワップ領域の確保に失敗して JavaVM が停止することはありません。
- スワップ領域を予約できなかった場合は、標準出力に次のメッセージが出力され、終了します。

```
Error occurred during initialization of VM
Could not reserve enough space for object heap
```

- このオプションの指定値によって、JavaVM が異常終了した場合に生成される core のサイズが変わることはありません。
- HP-UX の場合、このオプションを指定していないと、Java の使用するディスク上のスワップ領域は、JavaVM 起動時に確保されません。この場合、スワップ領域は実行中に必要に応じて確保されるため、スワップ領域が不足すると実行が中断されることがあります。このため、システム管理マネージャなどで、-Xmx オプションの指定値以上のスワップ領域をディスク上に確保しておくことをお勧めします。また、このオプションを指定していると、Java の使用するディスク上のスワップ領域は、JavaVM 起動時にすべて確保されます。この場合、Java プログラム実行中にスワップ領域が不足することはありません。ただし、-Xmx オプションに必要なない大きな値を指定すると、スワップ領域が確保できなくて次のような現象が発生するため、注意してください。
  - JavaVM の起動に失敗する
  - ほかのプロセスがスワップ領域を確保できなくなる

JavaVM 起動時に確保されるスワップ領域のサイズは、次の見積もり式で算出できます。

スワップ領域のサイズ = -Xmx オプション値 + -XX:MaxMetaspaceSize オプション値 + 128MB

## -XX:[+|-]HitachiUseExplicitMemory (明示管理ヒープ機能オプション)

#### 形式

-XX:+HitachiUseExplicitMemory

明示管理ヒープ機能を有効にします。

-XX:-HitachiUseExplicitMemory

明示管理ヒープ機能を無効にします。

#### 説明

明示管理ヒープ機能の有効、無効を指定します。なお、明示管理ヒープ機能を有効にする場合は、-Xms と -Xmx の指定値が同じであることを推奨します。

#### デフォルト値

- -XX:-HitachiUseExplicitMemory

**関連オプション**

- -Xms
- -Xmx

**注意事項**

-XX:+UseParNewGC オプションを指定している場合、このオプションは指定できません。-XX:+UseParNewGC オプションと同時に指定した場合、メッセージが標準出力に出力されて、JavaVM がリターンコード 1 で終了します。

## -XX:HitachiExplicitHeapMaxSize (Explicit メモリブロックの最大サイズ指定オプション)

---

**形式**

-XX:HitachiExplicitHeapMaxSize=<適用範囲>

**説明**

Explicit ヒープ全体の最大サイズを指定します。

**デフォルト値**

- -XX:HitachiExplicitHeapMaxSize=64m

**前提オプション**

- -XX:+HitachiUseExplicitMemory

**引数**

<適用範囲>

【32bit 版】

1 ~ 2<sup>31</sup>-1 (2147483647)

【64bit 版】

1 ~ 2<sup>63</sup>-1 (9223372036854775807)

**注意事項**

- 適用範囲はバイト単位で指定します。
- 設定した値が有効な値の範囲に含まれていない場合、次のメッセージを標準出力に出力して JavaVM をリターンコード 1 で終了します。

---

```
Invalid maximum explicit heap size: -XX:HitachiExplicitHeapMaxSize=[指定した値]Could not create the Java
virtual machine.
```

---

## -XX:HitachiExplicitMemoryLogLevel (明示管理ヒープ機能のログ出力レベル指定オプション)

---

### 形式

-XX:HitachiExplicitMemoryLogLevel:<適用範囲>

### 説明

明示管理ヒープ機能のイベントログのレベルを指定します。

### デフォルト値

- -XX:HitachiExplicitMemoryLogLevel:none

### 前提オプション

- -XX:+HitachiUseExplicitMemory

### 引数

#### <適用範囲>

none

明示管理ヒープ機能のイベントログを出力しません。

normal

通常運用での指定を想定しています。Explicit ヒープの状態を定期的 (GC ごと) に出力します。また、Explicit ヒープの状態が大きく変化するイベント時に出力します。

verbose

normal の内容に加え、Explicit ヒープの状態が変化するイベント時に出力します。ログ量が normal よりも多くなります。

debug

verbose の内容に加え、一部のイベント発生時の詳細な情報を出力します。ログ量が大量になるため、パフォーマンスが著しく低下します。

### 注意事項

none, normal, verbose, debug 以外の値が指定された場合、次のメッセージを標準出力に出力して JavaVM をリターンコード 1 で終了します。

---

```
Invalid explicit heap log level: -XX:HitachiExplicitMemoryLogLevel:<適用範囲>Could not create the Java virtual machine. (log levels: none normal verbose debug)
```

---

## -XX:HitachiExplicitMemoryJavaLog (明示管理ヒープ機能のログファイル出力先指定オプション)

---

### 形式

-XX:HitachiExplicitMemoryJavaLog:<文字列>

## 説明

明示管理ヒープ機能のログファイルのプリフィックスおよびログファイルの出力先ディレクトリを指定します。

### デフォルト値

- `-XX:HitachiExplicitMemoryJavaLog:ehjavalog`

### 関連オプション

- `-XX:HitachiJavaLog`

## 引数

### <文字列>

プリフィックスおよびパスを指定します。次の3種類の指定ができます。

#### プリフィックスを指定する場合

ログファイル名は、<文字列>??log (?? は 01 ~ 99 の通し番号) で生成されます。例えば、<文字列> に "Samp" を指定すると、ログファイル名は Samp01.log になります。このオプションを指定しない場合、<文字列>には、"ehjavalog"が設定されます。また、ログファイルはカレントディレクトリに出力されます。

#### パスを指定する場合

<文字列>にディレクトリを指定した場合、そのディレクトリにファイルが作成されます。ログファイル名は、<文字列>ehjavalog??log (?? は 01 ~ 99 の通し番号) で生成されます。

#### パスとプリフィックスを同時に指定する場合

<文字列> にディレクトリとプリフィックスを指定した場合、そのディレクトリにファイルが作成されます。ログファイル名は、<文字列>??log (?? は 01 ~ 99 の通し番号) で生成されます。例えば、<文字列> に "d:\*temp\*Samp" を指定すると、d:\*temp ディレクトリに、Samp01.log が生成されます。

## **-XX:HitachiExplicitMemoryJavaLogFileSize (明示管理ヒープ機能の最大ログファイルサイズ指定オプション)**

---

### 形式

`-XX:HitachiExplicitMemoryJavaLogFileSize=<整数値>`

### 説明

1 ファイルの最大ファイルサイズをバイト単位で設定します。オプションの指定がない場合は、デフォルトで 256 キロバイトが設定されます。

### デフォルト値

- `-XX:HitachiExplicitMemoryJavaLogFileSize=256k`

### 関連オプション

- `-XX:HitachiJavaLogFileSize`

## 引数

### <整数値>

1024~2147483647 の範囲で整数値（単位：バイト）指定します。  
範囲外の値が指定された場合は 1024 が設定されます。

## 注意事項

自然数以外の値が指定された場合は、定義していないオプションを指定した場合と同様の動作になります。

## **-XX:HitachiExplicitMemoryJavaLogNumberOfFile**（明示管理ヒープ機能の最大ログファイル数指定オプション）

---

## 形式

`-XX:HitachiExplicitMemoryJavaLogNumberOfFile=<整数値>`

## 説明

作成する最大ファイル数を指定します。最大ファイル数を超えた場合は、再度最初に作成したファイルへ出力（ラップアラウンド）します。

## デフォルト値

- `-XX:HitachiExplicitMemoryJavaLogNumberOfFile=4`

## 関連オプション

- `-XX:HitachiJavaLogNumberOfFile`

## 引数

### <整数値>

1~99 の範囲で指定します。  
ただし、100 以上の値が指定された場合は 99、0 が指定された場合は 1 となります。

## 注意事項

自然数以外の値が指定された場合は、定義していないオプションを指定した場合と同様の動作になります。

## **-XX:[+|-]HitachiExplicitMemoryMoveToTenuredFirst**（明示管理ヒープ機能の明示解放機能オプション）

---

## 形式

`-XX:+HitachiExplicitMemoryMoveToTenuredFirst`

Explicit メモリブロックの解放処理でのオブジェクトの移動先が、Tenured 領域になります。

`-XX:-HitachiExplicitMemoryMoveToTenuredFirst`

Explicit メモリブロックの解放処理でのオブジェクトの移動先が、New 領域になります。

## 説明

Explicit メモリブロックの解放処理でのオブジェクトの移動先を指定します。



### デフォルト値

- `-XX:+HitachiExplicitMemoryMoveToTenuredFirst`

### 前提オプション

- `-XX:HitachiUseExplicitMemory`

### 注意事項

このオプションが有効になっている場合、解放処理が実行されるときに被参照のオブジェクトは、Tenured 領域へ移動します。

参照元のオブジェクトが一時的に短命なオブジェクトの場合、このオプションを無効とし、Explicit メモリブロック内の被参照のオブジェクトを New 領域に移動することで、次回の CopyGC の際に参照元オブジェクトと同時に回収できます。そうすることにより、このオプションが無効となっている場合に、Tenured 領域の利用済みサイズが上昇することを防げます。

ただし、次の点に注意が必要です。

- CopyGC 頻度の増加  
Explicit メモリブロック解放時に、被参照のオブジェクトを New 領域に移動するため、移動したオブジェクトが New 領域を消費します。その結果、次回の CopyGC までの間隔が短くなり、スループットの低下や、オブジェクトの加齢速度が上昇するおそれがあります。
- Tenured 領域に移動するオブジェクトが New 領域と明示管理ヒープ領域間で循環  
複数の Explicit メモリブロック内のオブジェクトから参照されるオブジェクト（例えばアプリケーション共通のデータ定義）が存在する場合、そのオブジェクトは長寿命オブジェクトとなります。そのため、このオプションが有効な場合に、オブジェクトが Explicit メモリブロックへ移動したあと、その Explicit メモリブロックの解放処理が実行される際に Tenured 領域へ移動し、オブジェクトの寿命（アプリケーションの終了時など）まで Tenured 領域に存在し続けることとなります。  
一方、このオプションが有効な場合に、Explicit メモリブロックの解放処理が実行される際に New 領域へ移動し、その後しきい値までの CopyGC が実行されると、別の Explicit メモリブロックへ移動します。この繰り返しにより、オブジェクトが New 領域と明示管理ヒープ領域を循環し、CopyGC や Explicit メモリブロックの解放処理のオーバーヘッドが増大するおそれがあります。

## -XX:[+|-]HitachiExplicitMemoryAutoReclaim (明示管理ヒープ機能の自動解放機能オプション)

---

### 形式

`-XX:+HitachiExplicitMemoryAutoReclaim`

明示管理ヒープ機能の自動解放機能を有効にします。

`-XX:-HitachiExplicitMemoryAutoReclaim`

明示管理ヒープ機能の自動解放機能を無効にします。

### 説明

明示管理ヒープ機能の自動解放機能を利用するかどうか指定します。

### デフォルト値

- `-XX:+HitachiExplicitMemoryAutoReclaim`

**前提オプション**

- `-XX:-HitachiExplicitMemoryCompatibleToV8`

**関連オプション**

- `-XX:+HitachiAutoExplicitMemory`

## **-XX:[+|-]HitachiExplicitMemoryCompatibleToV8 (明示管理ヒープ機能のバージョン互換設定オプション)**

---

**形式**

`-XX:+HitachiExplicitMemoryCompatibleToV8`

08-00 と同様の方法で Explicit メモリブロックを確保します。

`-XX:-HitachiExplicitMemoryCompatibleToV8`

08-00 と異なる方法で Explicit メモリブロックを確保します。

**説明**

Explicit メモリブロックを確保する方法を, 08-00 と同様にするかどうか指定します。08-50 以降の新機能を利用しないで, 08-00 で動作するアプリケーションをそのまま 08-50 で動作させる場合, このオプションを有効にします。

なお, このオプションを利用する場合, 明示管理ヒープの自動解放機能は無効になります。

**デフォルト値**

- `-XX:-HitachiExplicitMemoryCompatibleToV8`

**前提オプション**

- `-XX:+HitachiUseExplicitMemory`

**関連オプション**

- `-XX:+HitachiExplicitMemoryAutoReclaim`
- `-XX:+HitachiAutoExplicitMemory`

## **-XX:[+|-]HitachiAutoExplicitMemory (明示管理ヒープ機能の自動配置機能オプション)**

---

**形式**

`-XX:+HitachiAutoExplicitMemory`

明示管理ヒープ機能の自動配置機能を有効にします。

`-XX:-HitachiAutoExplicitMemory`

明示管理ヒープ機能の自動配置機能を無効にします。

**説明**

Explicit メモリブロックの自動配置機能の有効, 無効を指定します。有効にした場合, 32-bit 版, 64-bit 版に関係なく, JavaVM 起動時にあらかじめ必要とする Explicit メモリブロックを確保するようになります。

す。ただし、起動時にメモリ空間に連続領域が確保できない環境の場合、JavaVM が起動できないため、注意が必要です。

なお、このオプションを有効にした場合、Explicit メモリブロックの最小サイズは 16 キロバイトになります。無効に指定した場合、Explicit メモリブロックの最小サイズは 64 キロバイトになります。

#### デフォルト値

- `-XX:-HitachiAutoExplicitMemory`

#### 前提オプション

- `-XX:+HitachiUseExplicitMemory`
- `-XX:+HitachiExplicitMemoryAutoReclaim`
- `-XX:-HitachiExplicitMemoryCompatibleToV8`

#### 関連オプション

- `-XX:HitachiAutoExplicitMemoryFile`

## `-XX:HitachiAutoExplicitMemoryFile` (明示管理ヒープ機能の自動配置機能ファイルパス指定オプション)

---

### 形式

`-XX:HitachiAutoExplicitMemoryFile:<文字列>`

### 説明

Explicit メモリブロックの自動配置機能で利用する自動配置設定ファイルのパスを指定します。

### デフォルト値

- `-XX:HitachiAutoExplicitMemoryFile:<空文字>`

### 前提オプション

- `-XX:+HitachiAutoExplicitMemory`

### 引数

<文字列>

JavaVM プロセスのカレントディレクトリからの相対パス、および絶対パスを指定します。パスはディレクトリ名を含めて指定できます。

なお、指定できる自動配置設定ファイルは一つだけです。

1 文字以上の文字列を指定した場合

明示管理ヒープ自動配置設定のデフォルト設定およびこのオプションで指定したファイルの設定が有効になります。

## -XX:ExplicitMemoryFullGCPolicy (明示管理ヒープ機能の Explicit メモリブロックへのオブジェクト移動制御オプション)

---

### 形式

-XX:ExplicitMemoryFullGCPolicy=<数値>

### 説明

FullGC 発生時に、参照関係に基づくオブジェクトの Java ヒープから Explicit メモリブロックへの移動を制御するかどうかを指定します。このオプションを使用すると、FullGC 発生時に Explicit ヒープへ移動していたオブジェクトを、Tenured 領域へ移動できます。

### デフォルト値

- -XX:ExplicitMemoryFullGCPolicy=0

### 前提オプション

- -XX:+HitachiUseExplicitMemory

### 関連オプション

- -XX:+HitachiAutoExplicitMemory
- -XX:+ExplicitMemoryUseExcludeClass

### 引数

<数値>

0 または 1 を指定します。範囲外の値が指定された場合は 0 が設定されます。

0 を指定すると、FullGC 発生時、Explicit メモリブロック内にあるオブジェクトから参照されている Java ヒープ内のオブジェクトは、Explicit メモリブロックへ移動します。

1 を指定すると、FullGC 発生時、Explicit メモリブロック内にあるオブジェクトから参照されている Java ヒープ内のオブジェクトは、Explicit メモリブロックへ移動しません。New 領域にあるオブジェクトは Tenured 領域へ移動します。

## -XX:[+|-]ExplicitMemoryUseExcludeClass (明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能オプション)

---

### 形式

-XX:+ExplicitMemoryUseExcludeClass

明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能を有効にします。

-XX:-ExplicitMemoryUseExcludeClass

明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能を無効にします。

### 説明

明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能の有効、無効を指定します。明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能を有効にすると、次のファイルに記述されているクラスには、明示管理ヒープ機能が適用されません。このため、ファイルに記述されているクラスのオブジェクトは、Explicit ヒープではなく、Tenured 領域に移動します。

Windows の場合

- <JDK インストールディレクトリ>%jre%lib%explicitmemory%sysexmemexcludeclass.cfg
- <JDK インストールディレクトリ>%usrconf%exmemexcludeclass.cfg

UNIX の場合

- /opt/Cosminexus/jdk/jre/lib/explicitmemory/sysexmemexcludeclass.cfg
- /opt/Cosminexus/jdk/usrconf/exmemexcludeclass.cfg

デフォルト値

- -XX:-ExplicitMemoryUseExcludeClass

前提オプション

- -XX:+HitachiUseExplicitMemory

関連オプション

- -XX:+HitachiAutoExplicitMemory
- -XX:ExplicitMemoryFullGCPolicy
- -XX:ExplicitMemoryExcludeClassListFile
- -XX:ExplicitMemoryNotExcludeClassListFile

注意事項

- 明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能を有効にすると、Explicit メモリブロックへのオブジェクト移動制御機能も有効になります。
- JavaVM 内のクラス (java.lang, java.util など) は、明示管理ヒープ機能適用除外クラスとして指定できません。

## -XX:ExplicitMemoryExcludeClassListFile (明示管理ヒープ機能適用除外設定ファイルパス指定オプション)

---

形式

-XX:ExplicitMemoryExcludeClassListFile:<文字列>

説明

明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能で利用する、明示管理ヒープ機能適用除外設定ファイルのファイルパスを指定します。このファイルに記述されているクラスには、明示管理ヒープ機能が適用されません。

JavaVM 起動時に、このオプションに指定したファイルパスのファイルを明示管理ヒープ機能適用除外設定ファイルとして読み込みます。なお、このオプションを省略、または空文字を指定した場合は、デフォルトのファイルパスのファイルを明示管理ヒープ機能適用除外設定ファイルとして読み込みます。

デフォルト値

- -XX:ExplicitMemoryExcludeClassListFile:<空文字>

Windows の場合

<JDK インストールディレクトリ>%usrconf%exmemexcludeclass.cfg

UNIX の場合

/opt/Cosminexus/jdk/usrconf/exmemexcludeclass.cfg

#### 前提オプション

- -XX:+HitachiUseExplicitMemory
- -XX:+ExplicitMemoryUseExcludeClass

#### 関連オプション

- -XX:ExplicitMemoryFullGCPolicy
- -XX:+HitachiAutoExplicitMemory
- -XX:ExplicitMemoryNotExcludeClassListFile

## 引数

<文字列>

JavaVM プロセスのカレントディレクトリからの相対パス、または絶対パスを指定します。パスはディレクトリ名を含めて指定できます。

なお、指定できる明示管理ヒープ機能適用除外設定ファイルは一つだけです。また、ファイルの文字エンコーディングには、ASCII コードを使用してください。

## 注意事項

- 指定されたファイルがオープンできない、または読み込めない場合は、明示管理ヒープ機能のイベントログにワーニングメッセージを出力し、デフォルトパスにある設定ファイルを読み込みます。デフォルトパスにあるファイルをオープンできない、または読み込めない場合は、明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能は有効になりません。
- 指定されたファイルの記述フォーマットに誤りがある場合は、明示管理ヒープ機能のイベントログにワーニングメッセージを出力して、次の行から構文解析処理を継続します。
- 明示管理ヒープ機能適用除外設定ファイルと、明示管理ヒープ機能適用除外無効設定ファイルの両方に、同じのクラス名が記述されていた場合は、明示管理ヒープ機能適用除外無効設定ファイルの指定が優先されます。この場合、そのクラスに対する明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能は、無効になります。

## **-XX:ExplicitMemoryNotExcludeClassListFile (明示管理ヒープ機能適用除外無効設定ファイルパス指定オプション)**

---

### 形式

-XX:ExplicitMemoryNotExcludeClassListFile:<文字列>

### 説明

明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能で利用する、明示管理ヒープ機能適用除外無効設定ファイルのファイルパスを指定します。明示管理ヒープ機能適用除外設定ファイルに記述されていても、このファイルに記述されているクラスには、明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能が適用されません。

JavaVM 起動時に、このオプションに指定したファイルパスのファイルを明示管理ヒープ機能適用除外無効設定ファイルとして読み込みます。なお、このオプションを省略、または空文字を指定した場合は、デフォルトのファイルパスのファイルを明示管理ヒープ機能適用除外無効設定ファイルとして読み込みます。

### デフォルト値

- `-XX:ExplicitMemoryNotExcludeClassListFile:<空文字>`

Windows の場合

`<JDK インストールディレクトリ>%usrconf%exmemnotexcludeclass.cfg`

UNIX の場合

`/opt/Cosminexus/jdk/usrconf/exmemnotexcludeclass.cfg`

### 前提オプション

- `-XX:+HitachiUseExplicitMemory`
- `-XX:+ExplicitMemoryUseExcludeClass`

### 関連オプション

- `-XX:ExplicitMemoryFullGCPolicy`
- `-XX:HitachiAutoExplicitMemory`
- `-XX:ExplicitMemoryExcludeClassListFile`

### 引数

<文字列>

JavaVM プロセスのカレントディレクトリからの相対パス、および絶対パスを指定します。パスはディレクトリ名を含めて指定できます。

なお、指定できる明示管理ヒープ機能適用除外設定ファイルは一つだけです。また、ファイルの文字エンコーディングには、ASCII コードを使用してください。

### 注意事項

- 指定されたファイルがオープンできない、または読み込めない場合は、明示管理ヒープ機能のイベントログにワーニングメッセージを出力し、デフォルトパスにある設定ファイルを読み込みます。デフォルトパスにあるファイルをオープンできない、または読み込めない場合は、明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能は無効になりません。
- 指定されたファイルの記述フォーマットに誤りがある場合は、明示管理ヒープ機能のイベントログにワーニングメッセージを出力して、次の行から構文解析処理を継続します。
- 明示管理ヒープ機能適用除外設定ファイルと、明示管理ヒープ機能適用除外無効設定ファイルの両方に、同じのクラス名が記述されていた場合は、明示管理ヒープ機能適用除外無効設定ファイルの指定が優先されます。この場合、そのクラスに対する明示管理ヒープ機能適用除外クラス指定機能は、無効になります。

## **-XX:[+|-]HitachiExplicitMemoryAutoRefReclaim (HTTP セッションで利用する Explicit ヒープの省メモリ化オプション)**

---

### 形式

`-XX:+HitachiExplicitMemoryAutoRefReclaim`

HTTP セッションで利用する Explicit ヒープの省メモリ化機能を有効にします。

`-XX:-HitachiExplicitMemoryAutoRefReclaim`

HTTP セッションで利用する Explicit ヒープの省メモリ化機能を無効にします。

## 説明

HTTP セッションで利用する Explicit ヒープの省メモリ化機能の有効、無効を指定します。

無効にした場合は、アプリケーションサーバが作成した Explicit メモリブロックの自動解放の自動予約をしません。

有効にした場合は、自動配置設定ファイルで作成された Explicit メモリブロックに加えて、HTTP セッションオブジェクトを配置するためにアプリケーションサーバが作成した Explicit メモリブロックに対して自動解放の自動予約をします。これによって、必要な Explicit ヒープサイズを減少させることができます。

ただし、有効にした場合、稼働情報の出力内容に注意が必要です。詳細は、マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 拡張編」の「8.11 HTTP セッションで利用する Explicit ヒープのメモリ使用量の削減」を参照してください。

### デフォルト値

- `-XX:-HitachiExplicitMemoryAutoRefReclaim`

### 前提オプション

- `-XX:+HitachiExplicitMemoryAutoReclaim`

## `-XX:HitachiJITCompileMaxMemorySize` (JIT コンパイル時の確保メモリ上限値指定オプション)

---

### 形式

`-XX:HitachiJITCompileMaxMemorySize=<整数値>`

### 説明

JIT コンパイル時に確保する C ヒープのメモリサイズの上限值を指定します。JIT コンパイルによって確保する C ヒープのメモリが指定値を超えた場合、JavaVM ログファイルにログを出力するとともに、以降の JIT コンパイルを抑制します。JIT コンパイル処理の対象となっていた Java メソッドは、以降、インタプリタでだけ実行されるようになります。なお、JIT コンパイルが抑制された場合でも、JavaVM は強制終了しないで、処理を続行します。

0 を指定した場合、JIT コンパイル時に確保するメモリは上限値で制限されません。

なお、JIT コンパイルは JavaVM の内部スレッド (JIT コンパイラスレッド) で実行されます。JIT コンパイラスレッドは二つあるため、このオプションで指定した上限値を 2 で割った値が、一つの JIT コンパイラスレッドに対する上限値となります。

また、このオプションで上限値を設定した場合も、実際に使用できる C ヒープがそれよりも少ないときには、上限値に達する前に C ヒープ不足が発生することがあります。この場合、JavaVM は強制終了します。

### デフォルト値

- `-XX:HitachiJITCompileMaxMemorySize=0`

### 前提オプション

- `-server`



## 引数

### <整数値>

JIT コンパイル時に確保するメモリの上限値を指定します。単位はバイトです。単位文字として、「k」（キロ）、「m」（メガ）、「g」（ギガ）も指定できます。指定できる範囲は次のとおりです。範囲外の値を指定した場合は、0 が指定されます。

32 ビット版の JavaVM の場合：

$0 \sim 2^{32}-1$  (4294967295)

64 ビット版の JavaVM の場合：

$0 \sim 2^{64}-1$  (18446744073709551615)

0 を指定した場合は、JIT コンパイル時に確保するメモリは上限値で制限されません。JIT コンパイル中に C ヒープ不足が発生した場合、JavaVM は強制終了します。

## 出力形式

---

```
[id][Thread: thread_id]<date>["thread_name" exceeded max memory size.]
[current_sizeK->new_sizeK/limit_size_per_threadK/limit_sizeK]
[compile_target][byte_code_size]
```

---

出力内容を次に説明します。

### id

JMS (JavaVM ログファイル識別子)。

### thread\_id

JIT コンパイルを抑制した JIT コンパイラスレッドのスレッド ID。

### date

JIT コンパイルを抑制した日時。

-XX:+HitachiOutputMilliTime オプションが指定された場合、ミリ秒単位で出力されます。

### thread\_name

JIT コンパイルを抑制した JIT コンパイラスレッドのスレッド名。

### current\_size

JIT コンパイルを抑制した JIT コンパイラスレッドの、現在のメモリ確保サイズ (単位：キロバイト)。

### new\_size

JIT コンパイルを抑制した JIT コンパイラスレッドの、現在のメモリ確保サイズと追加で確保しようとしたサイズの合計値 (単位：キロバイト)。

### limit\_size\_per\_thread

一つの JIT コンパイラスレッドの上限値 (単位：キロバイト)。

### limit\_size

JIT コンパイラスレッド全体の上限値 (単位：キロバイト)。

### compile\_target

JIT コンパイル処理の対象となっていた Java メソッド。

### byte\_code\_size

JIT コンパイル処理の対象となっていた Java メソッドのバイトコードのサイズ (単位：バイト)。

## 出力例

オプションとして「-XX:HitachiJITCompileMaxMemorySize=536870912」を指定して、一つの JIT コンパイラスレッドに対して 262145 キロバイトの C ヒープを確保した場合に、上限値に達したときの出力例を示します。

---

```
[JMS][Thread: 0x03bf1150]<Wed Feb 24 14:33:58 2010>["CompilerThread0" exceeded max memory size.][262143K-
>262145K/262144K/524288K][test1.func][213]
```

---

## 注意事項

- JIT コンパイル時に確保するメモリが、このオプションで指定した上限値を超えて、JIT コンパイルが抑制されると、アプリケーションのスループットが低下します。
- 自然数以外の値が指定された場合は、定義していないオプションを指定した場合と同様の動作になります。

## -XX:[+|-]JITCompilerContinuation (JIT コンパイラ稼働継続機能オプション)

---

### 形式

-XX:+JITCompilerContinuation

JIT コンパイラ稼働継続機能を有効にします。

-XX:-JITCompilerContinuation

JIT コンパイラ稼働継続機能を無効にします。

### 説明

JIT コンパイラ稼働継続機能を有効にするかどうかを指定します。

JIT コンパイルがアプリケーションを構成するメソッドの論理矛盾で失敗しても、アプリケーションを正常に継続できるようにするためには、この機能を有効にすることをお勧めします。

JIT コンパイラ稼働継続機能を有効にした場合、JIT コンパイルがアプリケーションを構成するメソッドの論理矛盾で失敗しても、JavaVM は JavaVM ログファイルにこの機能のログを出力して、処理を続行します。この場合、JIT コンパイルに失敗したメソッドでは、以降のコンパイルはインタプリタ方式で実行されるようになります。アプリケーションを構成しているメソッドのうち、JIT コンパイルに失敗したメソッド以外のメソッドは JIT コンパイルで実行されるため、アプリケーションは正常に継続されます。ただし、JIT コンパイルが 6 回以上失敗すると、JavaVM はエラーレポートファイル、およびメモリダンプまたは core ダンプを出力して、強制終了します。

JIT コンパイラ稼働継続機能を無効にした場合、JIT コンパイルがアプリケーションを構成するメソッドの論理矛盾で失敗すると、JavaVM はエラーレポートファイル、およびメモリダンプまたは core ダンプを出力して、強制終了します。

### デフォルト値

- -XX:+JITCompilerContinuation

### 前提オプション

- -server
- -XX:+HitachiVerboseGC

## 出力形式

---

[id]

---

注 [id]以降には JIT コンパイラ稼働継続機能のログが出力されます。

出力内容を次に説明します。

id :

JCC (Java VM ログファイル識別子)。

## 出力例

---

```
[JCC][Thread: 0x05432c00]<Thu Nov 15 17:10:40 2012>[Method: jit_sample.func()V][Fail: 3][JITCT: 1]
[JCC][Thread: 0x05432c00][PC: 0x083aff9a][Lib: D:\work\jdk\jre\bin\server\jvm.dll+0x3aff9a][VM: Java
HotSpot(TM) Server VM (20.8-b03-CDK0950-20121115 mixed mode windows-x86 )]
[JCC][Thread: 0x05432c00][EAX=0x00000000, EBX=0x00618128, ECX=0x00000000, EDX=0x05485340]
[JCC][Thread: 0x05432c00][ESP=0x0566d3c0, EBP=0x0566d3c4, ESI=0x00618278, EDI=0x00000000]
[JCC][Thread: 0x05432c00][EIP=0x083aff9a, EFLAGS=0x00010202]
[JCC][Thread: 0x05432c00][sinfo: read 0x00000000]
[JCC][Thread: 0x05432c00][Unlock: MethodCompileQueue_lock]
[JCC][Thread: 0x05432c00][NewJITCT: 0x05438800][JITCT: 2]
[JCC][Thread: 0x05432c00][Free: "ResourceArea" 524288 bytes.]
[JCC][Thread: 0x05432c00][stop]
[JCC][Fail: 1][date: Thu Nov 15 10:10:40 2012][Method: jit_sample.func1(Ljava/lang/String;)V][PC: 0x083ff00a]
[Lib: D:\work\jdk\jre\bin\server\jvm.dll+0x3ff00a]
[JCC][Fail: 2][date: Thu Nov 15 11:11:16 2012][Method: jit_sample.func2()V][PC: 0x083afe3a][Lib: D:\work\jdk\
jre\bin\server\jvm.dll+0x3afe3a]
```

---

## -XX:[+|-]UseCompressedOops (圧縮オブジェクトポインター機能で使用する Java オプション)

---

### 形式

-XX:+UseCompressedOops

圧縮オブジェクトポインター機能を有効にします。

-XX:-UseCompressedOops

圧縮オブジェクトポインター機能を無効にします。

### 説明

圧縮オブジェクトポインター機能の有効、無効を指定します。圧縮オブジェクトポインター機能は、Java オブジェクトのサイズを圧縮して管理することで、JavaVM 実行時の Java ヒープ領域、および Explicit ヒープ領域の使用サイズを削減します。

なお、Explicit ヒープ領域は、明示管理ヒープ機能が有効な場合にだけ該当します。この機能を有効にするには、次の条件を満たしていることが前提となります。

- 64 ビット版の JavaVM を使用していること
- Java ヒープ領域、Metaspace 領域、および Explicit ヒープ領域の指定サイズの合計値が 32 ギガバイト未満であること

JavaVM 起動時、Java ヒープ領域、Metaspace 領域、および Explicit ヒープ領域の指定サイズの合計値が、32 ギガバイト以上の場合、JavaVM は次のメッセージを標準出力に出力し、圧縮オブジェクトポインター機能を無効とします。

```
Java HotSpot(TM) 64-Bit Server VM warning: Max heap size too large for Compressed Oops
```

## デフォルト値

- `-XX:-UseCompressedOops`

## -XX:HitachiThreadLimit (スレッド数の上限値指定オプション)

---

## 形式

`-XX:HitachiThreadLimit=<整数値>`

## 説明

スレッド数の上限値を指定します。スレッド数の上限値が指定値を超えた場合に、`OutOfMemoryError` 例外がスローされます。ただし、JavaVM が起動する前に上限値を超えた場合、例外はスローされません。また、スレッド数には、アプリケーションが JNI などを使用して JavaVM の管理外の範囲で作成したスレッド数は含まれません。0 を指定した場合、上限値は設定されません。

なお、`-XX:+HitachiOutOfMemoryAbort` オプションと同時に指定した場合、このオプションの機能によって `OutOfMemoryError` 例外がスローされた場合、JavaVM の強制終了は実行されません。

また、`-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace` オプションと同時に指定した場合、例外メッセージが JavaVM ログファイルに出力されます。

## デフォルト値

- `-XX:HitachiThreadLimit=0`

## 引数

<整数値>

スレッド数の上限値を 0~2147483647 の範囲で整数値 (単位: スレッド数) を指定します。範囲外の値が指定された場合は 0 が設定されます。負の値を指定した場合はエラーとなります。

## 出力形式

---

```
Could not create "name" thread. Threadlimit Exceeded. num threads exist.
```

---

このメッセージは、`java.lang.Throwable.getMessage()` で取得できます。また、メッセージ全体が半角 128 文字以上になった場合は、メッセージの末尾が省略されます。

## name

作成に失敗したスレッド名。

## num

現時点でのスレッド数。

`-XX:+HitachiOutOfMemoryStackTrace` オプションが指定されている場合、JavaVM ログファイルに例外情報とスタックトレースを出力できます。例外発生要因種別は、"Thread Limit" となります。例外発生要因種別については、`[-XX:[+|-]HitachiOutOfMemoryCause` (例外発生要因種別出力オプション)] を参照してください。

## 出力例

---

```
Could not create "Thread-1" thread. Threadlimit Exceeded. 9 threads exist.
```

---

この例は、main スレッドによって `java.lang.Thread.start` が呼び出され、この機能によって例外をスローした場合に、`java.lang.Throwable.getMessage()` でメッセージを取り出したメッセージの例です。

### 注意事項

上限値に小さな値を設定すると、起動前に例外をスローします。J2EE サーバが使用するスレッド数より小さな値を設定しないでください。

J2EE サーバが使用するスレッド数については、マニュアル「アプリケーションサーバ システム設計ガイド」の「5. 使用するリソースの見積もり (J2EE アプリケーション実行基盤)」または「6. 使用するリソースの見積もり (バッチアプリケーション実行基盤)」を参照してください。

## 16.3 JavaVM で使用するプロパティ

JavaVM で使用するプロパティの一覧を、次の表に示します。

表 16-9 JavaVM で使用するプロパティの一覧

分類	オプション名称	概要	VR	関連情報
JavaVM で使用するプロパティ	jvm.userprf.Enable	ユーザ拡張性能解析トレースを有効にするかどうかを指定します。	09-00	
	jvm.userprf.ExtendedSetting	ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルの記述形式に、次の方式を有効にするかどうかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>パッケージ名とクラス名を指定する方式</li> <li>パッケージ名だけを指定する方式</li> </ul>	09-50	「機能解説 保守／移行編」の「7. 性能解析トレースを使用した性能解析」
	jvm.userprf.File	ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルのファイルパスを指定します。	09-00	
	jvm.userprf.Limit	ユーザ拡張性能解析トレースの対象となるメソッド数の上限値を指定します。	09-00	
	jvm.userprf.Trace	ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルで指定したクラスファイルの書き換えの成功ログを出力するかどうかを指定します。	09-00	
	jvm.userprf.LineNumber	メソッドの最後に実行した行の行番号をトレース情報に出力するかどうかを指定します。	09-00	
	jvm.userprf.ThrowableName	例外またはエラーのクラス名をトレース情報に出力するかどうかを指定します。	09-00	
	jvm.userprf.ThrowableNameEditMethod	例外またはエラーのクラス名が文字数制限 32 文字を超えた場合の名前の編集方法を指定します。	09-00	
	jvm.userprf.LogLevel	ユーザ拡張性能解析トレースのトレース出力レベルを指定します。	09-00	
	JP.co.Hitachi.soft.jvm.autofinalizer	ファイナライズ滞留解消機能の有効または無効を設定します。	09-60	「機能解説 保守／移行編」の「9.16 ファイナライズ滞留解消機能」

### jvm.userprf.Enable

#### 形式

```
jvm.userprf.Enable={true | false}
```

## 説明

ユーザ拡張性能解析トレースを有効にするかどうかを指定します。

### デフォルト値

```
jvm.userprf.Enable=false
```

### 前提プロパティ

なし。

## 引数

true

ユーザ拡張性能解析トレースを有効にします。

false

ユーザ拡張性能解析トレースを無効にします。

true, false 以外を指定した場合、デフォルト値となります。

## 注意事項

このプロパティに true を指定した場合、ユーザ拡張性能解析トレースは自動的にユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルを読み込みます。事前にユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルを設定してください。ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルのファイル名の指定については、jvm.userprf.File プロパティを参照してください。

## 指定例

プロパティの指定例を次に示します。

---

```
add.jvm.arg= -Djvm.userprf.Enable=true
```

---

## jvm.userprf.ExtendedSetting

---

### 形式

```
jvm.userprf.ExtendedSetting={true | false}
```

### 説明

ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルの記述形式に、次の方式を有効にするかどうかを指定します。

- パッケージ名とクラス名を指定する方式
- パッケージ名だけを指定する方式

### デフォルト値

```
jvm.userprf.ExtendedSetting=false
```

### 前提プロパティ

```
jvm.userprf.Enable=true
```

## 引数

true

ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルに、次の方式で記述できます。

- パッケージ名とクラス名を指定する方式
- パッケージ名だけを指定する方式

false

ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルに、次の方式は記述できません。

- パッケージ名とクラス名を指定する方式
- パッケージ名だけを指定する方式

true, false 以外を指定した場合、デフォルト値となります。

## 注意事項

このプロパティに false を指定して、true で有効になる方式でユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルに記述した場合、ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルのフォーマットエラーになります。

## 指定例

プロパティの指定例を次に示します。

---

```
add.jvm.arg= -Djvm.userprf.ExtendedSetting=true
```

---

## jvm.userprf.File

---

### 形式

jvm.userprf.File=<文字列>

### 説明

ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルのファイルパスを指定します。

ユーザ拡張性能トレースは、このプロパティに指定したファイルパスのファイルをユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルとして読み込みます。なお、このプロパティを指定していない場合、デフォルトのファイルパスのファイルをユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルとして読み込みます。

### ポイント

---

ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルに記述されたメソッドがユーザ拡張性能解析トレースのトレース対象となります。

---

### デフォルト値

Windows の場合

<JDKインストールディレクトリ>%usrconf%userprf.cfg

UNIX の場合

/opt/Cosminexus/jdk/usrconf/userprf.cfg



### 前提プロパティ

```
jvm.userprf.Enable=true
```

## 引数

### <文字列>

ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルのファイルパスを指定します。

ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルのファイルパスは次のように指定します。

- 指定できるファイルパスは一つだけです。
- カレントディレクトリからの相対パスおよび絶対パスがパス文字列として有効です。カレントディレクトリの例を次に示します。

(例) cjstartsv で実行した場合のデフォルトのカレントディレクトリ

- Windows の場合  
 <Application Server のインストールディレクトリ>%CC%server%public%ejb%<サーバ名称>
- UNIX の場合  
 /opt/Cosminexus/CC/server/public/ejb/<サーバ名称>

## 注意事項

- ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルを読み込むときの文字エンコーディングは、JDK の動作プラットフォームのデフォルトエンコーディングです。文字エンコーディングがデフォルトエンコーディング以外の場合、デフォルトエンコーディングで記述されているものとして処理されます。
- サーバごとにユーザ拡張性能解析トレースを異なる設定にする場合は、サーバごとにユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルを用意して、このプロパティでサーバごとのファイルパスを指定してください。
- 指定されたファイルパスのファイルが読み込めない場合や読み込んだ設定が有効でない場合、ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルの読み込み時のログが JavaVM ログファイルに出力されます。

## 指定例

プロパティの指定例を次に示します。

---

```
add.jvm.arg= -Djvm.userprf.File=/test/setting.txt
```

---

## jvm.userprf.Limit

---

### 形式

```
jvm.userprf.Limit=<整数値>
```

### 説明

ユーザ拡張性能解析トレースの対象となるメソッド数の上限値を指定します。

### デフォルト値

```
2147483647
```

### 前提プロパティ

```
jvm.userprf.Enable=true
```

## 引数

### <整数値>

0~2147483647 までの整数値で指定します。それ以外を指定した場合はデフォルト値となります。

## 注意事項

ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルで指定したメソッドのうち、このプロパティで指定した値のメソッド数までがトレースの対象になります。指定したメソッドがこのプロパティで指定した値をはじめて超えたとき、ログメッセージが JavaVM ログファイルに出力されます。

## 指定例

プロパティの指定例を次に示します。

---

```
add.jvm.arg= -Djvm.userprf.Limit=100
```

---

## jvm.userprf.Trace

---

### 形式

```
jvm.userprf.Trace={true | false}
```

### 説明

ユーザ拡張性能解析トレース設定ファイルで指定したクラスファイルの書き換えの成功ログを出力するかどうかを指定します。

### デフォルト値

```
jvm.userprf.Trace=false
```

### 前提プロパティ

```
jvm.userprf.Enable=true
```

## 引数

true

ユーザ拡張性能解析トレースの対象クラスの書き換えの成功ログを出力します。

false

ユーザ拡張性能解析トレースの対象クラスの書き換えの成功ログを出力しません。

true, false 以外を指定した場合、デフォルト値となります。

## 注意事項

ユーザ拡張性能解析トレースの対象クラスの書き換えに失敗した場合は、このプロパティの指定に関係なく、ログメッセージが JavaVM ログファイルに出力されます。

## 指定例

プロパティの指定例を次に示します。

---

```
add.jvm.arg= -Djvm.userprf.Trace=true
```

---

## jvm.userprf.LineNumber

---

### 形式

```
jvm.userprf.LineNumber={true | false}
```

### 説明

メソッドが正常に終了した場合、メソッドの最後に実行した行の行番号をトレース情報に出力するかどうかを指定します。

### デフォルト値

```
jvm.userprf.LineNumber=false
```

### 前提プロパティ

```
jvm.userprf.Enable=true
```

### 引数

true

トレース情報のオペレーション情報 (OPR) に、メソッドの最後に実行した行の行番号を出力します。

false

メソッドの最後に実行した行の行番号をトレース情報に出力しません。

true, false 以外を指定した場合、デフォルト値となります。

### 注意事項

Javac コマンドの-g オプションで行番号のデバッグ情報を生成しない場合は、このプロパティに true を指定しても行番号は出力されません。

### 指定例

プロパティの指定例を次に示します。

---

```
add.jvm.arg= -Djvm.userprf.LineNumber=true
```

---

## jvm.userprf.ThrowableName

---

### 形式

```
jvm.userprf.ThrowableName={true | false}
```

### 説明

メソッドが異常終了した場合、例外またはエラーのクラス名をトレース情報のオペレーション情報 (OPR) に出力するかどうかを指定します。

### デフォルト値

```
jvm.userprf.ThrowableName=false
```

### 前提プロパティ

```
jvm.userprf.Enable=true
```

### 引数

true

例外またはエラーのクラス名をトレース情報に出力します。

false

例外またはエラーのクラス名をトレース情報に出力しません。

true, false 以外を指定した場合、デフォルト値となります。

### 注意事項

このプロパティに true を指定した場合、jvm.userprf.ThrowableNameEditMethod プロパティに指定した編集方法でクラス名が出力されます。

### 指定例

プロパティの指定例を次に示します。

---

```
add.jvm.arg= -Djvm.userprf.ThrowableName=true
```

---

## jvm.userprf.ThrowableNameEditMethod

---

### 形式

```
jvm.userprf.ThrowableNameEditMethod={FRONT_CUT | BACK_CUT | CENTER_CUT}
```

### 説明

例外またはエラーのクラス名が 32 文字を超える場合のクラス名の編集方法を指定します。例外またはエラーのクラス名が 32 文字以内であれば、このプロパティの指定に関係なく、すべての文字がトレース情報に出力されます。

### デフォルト値

```
jvm.userprf.ThrowableNameEditMethod=FRONT_CUT
```

### 前提プロパティ

- jvm.userprf.Enable=true
- jvm.userprf.ThrowableName=true

### 引数

#### <文字列>

例外またはエラーのクラス名が 32 文字を超える場合のクラス名の編集方法を次の文字列で指定します。

FRONT\_CUT

例外またはエラーのクラス名の後方 32 文字が出力されます。なお、文字の先頭には省略を示す「\*」が付与されます。

### BACK\_CUT

例外またはエラーのクラス名の前方 32 文字が出力されます。なお、文字の末尾には省略を示す「\*」が付与されます。

### CENTER\_CUT

例外またはエラーのクラス名の前方 16 文字と後方 16 文字が出力されます。なお、文字の前方 16 文字と後方 16 文字の間に、省略を示す「\*」が付与されます。

上記以外の文字列を指定した場合、デフォルト値となります。

## 指定例

パッケージ名が「com.sample」、クラス名が「Class0123456789012345678901234567890」の例外で終了するとき、例外のクラス名または完全修飾クラス名の前方 32 文字をトレース情報のオペレーション情報 (OPR) に出力する場合の指定例を次に示します。

---

```
add.jvm.arg=-Djvm.userprf.ThrowableNameEditMethod=BACK_CUT
```

---

jvm.userprf.LogLevel プロパティの指定によって、トレース情報のオペレーション情報 (OPR) には次のよう出力されます。jvm.userprf.LogLevel プロパティについては、「jvm.userprf.LogLevel」を参照してください。

class を指定した場合

```
Class012345678901234567890123456*
```

package または method または signature を指定した場合

```
com.sample.Class0123456789012345*
```

## jvm.userprf.LogLevel

### 形式

```
jvm.userprf.LogLevel={class | package | method | signature}
```

### 説明

ユーザ拡張性能解析トレースの出力レベルを指定します。

### デフォルト値

```
jvm.userprf.LogLevel=class
```

### 前提プロパティ

```
jvm.userprf.Enable=true
```

### 引数

#### <文字列>

ユーザ拡張性能解析トレースのトレース情報のオプション情報 (OPT) に出力する、トレース対象のメソッド名の出力レベルを次の文字列で指定します。

class

クラス名

package

完全修飾クラス名

method

完全修飾クラス名+メソッド名

signature

完全修飾クラス名+メソッド名+メソッドの引数の型

上記以外の文字列を指定した場合、デフォルト値となります。

なお、`jvm.userprf.ThrowableName` プロパティに `true` を指定している場合、このプロパティの指定によってメソッドの異常出口で、次のようにオペレーション情報 (OPR) が出力されます。

- `class` を指定した場合：例外またはエラーのクラス名
- `package` または `method` または `signature` を指定した場合：例外またはエラーの完全修飾クラス名

### 指定例

パッケージ名「`com.sample`」、クラス名「`ClassA`」、およびメソッド名「`methodA`」のトレース情報を、完全修飾クラス名+メソッド名でトレース情報のオプション情報 (OPT) に出力する場合の指定例を次に示します。

---

```
add.jvm.arg= -Djvm.userprf.LogLevel=method
```

---

トレース情報には次のよう出力されます。

```
com.sample.ClassA.methodA
```

---

## JP.co.Hitachi.soft.jvm.autofinalizer

---

### 形式

```
JP.co.Hitachi.soft.jvm.autofinalizer={true|false}
```

### 説明

ファイナライズ滞留解消機能の有効、無効を指定します。

`true`、`false` 以外の値が設定された場合、デフォルト値になります。

### デフォルト値

```
JP.co.Hitachi.soft.jvm.autofinalizer=true
```

### 出力例

- ファイナライズ処理の滞留を検知して、ファイナライズ処理監視スレッドを新たに生成する場合

---

```
# FinalizerWatcherThread: Create: create secondary finalizer thread.
[queue length = 128] <Mon May 26 18:00:36 JST 2008>
```

---

- 生成したファイナライズ処理監視スレッドが終了した場合

---

```
# FinalizerWatcherThread: Finish: secondary finalizer thread is finished.
<Mon May 26 20:12:26 JST 2008>
```

---

## 16.4 Application Server で指定できる Java HotSpot VM のオプションのデフォルト値

Java HotSpot VM のオプションのデフォルト値を示します。デフォルト値は、OS ごとに異なります。

### ポイント

ここで説明するデフォルト値は、Java アプリケーションの場合に有効になります。Java アプリケーション以外の場合は、この表で示したデフォルト値ではなく、各オプション定義ファイルの `add.jvm.arg` キーのデフォルト値が有効になるキーがあります。各オプション定義ファイルのデフォルト値については、「2.3 `usrconf.cfg` (J2EE サーバ用オプション定義ファイル)」または「3.2 `usrconf.cfg` (バッチサーバ用オプション定義ファイル)」を参照してください。

Java HotSpot VM のオプションのデフォルト値を OS ごとに次に示します。Application Server で指定できる Java HotSpot VM のオプションについては、「16.5 Application Server で指定できる Java HotSpot VM のオプション」を参照してください。

表 16-10 Java HotSpot VM のオプションのデフォルト値

項番	オプション名	使用する OS と JavaVM の種類				
		Windows x86		Windows x64	Linux (AMD64 & Intel EM64T)	AIX
		[client] ※1	[server] ※1	[server]	[server]	[server]
1	<code>-Xmx&lt;size&gt;※2</code>	64M	64M	83M	83M	83M
2	<code>-Xms&lt;size&gt;※2</code>	5120k	5120k	7.8M	7.8M	7.8M
3	<code>-XX:MaxMetaspaceSize=&lt;size&gt;※2</code>	2 <sup>32</sup> -1	2 <sup>32</sup> -1	2 <sup>64</sup> -1	2 <sup>64</sup> -1	2 <sup>64</sup> -1
4	<code>-XX:MetaspaceSize=&lt;size&gt;※2</code>	12M	16M	16M	16M	16M
5	<code>-XX:CompressedClassSpaceSize=&lt;size&gt;※2</code>	1G	1G	1G	1G	1G
6	<code>-Xmn&lt;size&gt;</code>	※4	※4	※4	※4	※4
7	<code>-Xss&lt;size&gt;</code>	256k	256k	1M	1M	1M
8	<code>-XX:NewRatio=&lt;value&gt;※2</code>	12	8	2	2	2
9	<code>-XX:SurvivorRatio=&lt;value&gt;※3</code>	8	8	8	32	8

項番	オプション名	使用する OS と JavaVM の種類				
		Windows x86		Windows x64	Linux (AMD64 & Intel EM64T)	AIX
		[client] ※1	[server] ※1	[server]	[server]	[server]
10	-XX:TargetSurvivorRatio=<value>	50	50	50	50	50
11	-XX:MaxTenuringThreshold=<value>	14	14	14	14	14
12	-XX:ReservedCodeCacheSize=<size>	32M	48M	48M	48M	48M

(凡例)

[client] : Java HotSpot Client VM が使用されることを示します。

[server] : Java HotSpot Server VM が使用されることを示します。

注

<size>の単位はバイトです。

注※1

オプション定義ファイル (usrconf.cfg) の jvm.type キーの指定値によって、使用する JavaVM を選択できます。

注※2

J2EE サーバの場合、J2EE サーバ用オプション定義ファイル (usrconf.cfg) の add.jvm.arg キーのデフォルト値が有効になります。add.jvm.arg キーで定義されていないオプションのデフォルト値はこの表で示した値となります。

注※3

アプリケーションサーバのバージョンが 08-00 以降の場合、J2EE サーバモードで実行した J2EE サーバでは、JavaVM のデフォルト値は上書きされます。上書き後のデフォルト値は-XX:SurvivorRatio=8 となります。これは、すべてのプラットフォームに共通です。

注※4

Java ヒープと-XX:NewRatio によって決まります。



## 16.5 Application Server で指定できる Java HotSpot VM のオプション

ここでは、add.jvm.arg に指定できる Java HotSpot VM のオプション、およびオプションを指定する際の注意事項について説明します。

add.jvm.arg に指定できる Java HotSpot VM のオプションについて次の表に示します。なお、「VR」とは、パラメタが導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

表 16-11 add.jvm.arg を指定した場合に指定できる Java HotSpot VM のオプション

オプション名	内容	指定可能値	VR
-D<property>	JavaVM のシステムプロパティを指定します。	入力は制限されません。	05-00
-agentlib:<libname>[=<options>]	ネイティブエージェントライブラリ<libname>をロードします。	入力は制限されません。	08-00
-verbose:<情報種別>	<p>&lt;情報種別&gt;に指定した情報を出力します。&lt;情報種別&gt;に指定できる値を示します。</p> <p>class :</p> <p>クラスがロードされるたびにクラスに関する情報を出力します。</p> <p>gc :</p> <p>GC イベントが発生するたびに報告します。</p> <p>jni :</p> <p>ネイティブメソッドの使用およびそのほかの Java Native Interface (JNI) アクティビティに関する情報を報告します。</p>	<p>指定できる文字列を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• class</li> <li>• gc</li> <li>• jni</li> </ul>	05-00
-Xloggc:<ファイル>	-verbose:gc と同様に GC イベントが発生するたびに報告しますが、そのデータを<ファイル>に記録します。-verbose:gc を指定したときに報告される情報のほかに、報告される各イベントの先頭に、最初の GC イベントからの経過時間 (秒単位) が付け加えられます。	入力は制限されません。	05-00
-Xms<size>	Java ヒープの初期サイズを設定します。	<p>自然数の値を次に示す単位を使って指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• キロ [k]</li> <li>• メガ [m]</li> <li>• ギガ [g]</li> <li>• テラ [t]</li> </ul> <p>なお、大文字・小文字は区別されません。</p>	05-00
-Xmx<size>	Java ヒープの最大サイズを設定します。	<p>自然数の値を次に示す単位を使って指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• キロ [k]</li> </ul>	05-00

オプション名	内容	指定可能値	VR
-Xmx<size>	Java ヒープの最大サイズを設定します。	<ul style="list-style-type: none"> <li>• メガ [m]</li> <li>• ギガ [g]</li> <li>• テラ [t]</li> </ul> なお、大文字・小文字は区別されません。	05-00
-Xmn<size>	New 領域の初期値および最大値を設定します。	自然数の値を次に示す単位を使って指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• キロ [k]</li> <li>• メガ [m]</li> <li>• ギガ [g]</li> <li>• テラ [t]</li> </ul> なお、大文字・小文字は区別されません。	05-00
-Xss<size>	1 スタック領域の最大サイズを設定します。	自然数の値を次に示す単位を使って指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• キロ [k]</li> <li>• メガ [m]</li> <li>• ギガ [g]</li> <li>• テラ [t]</li> </ul> なお、大文字・小文字は区別されません。	05-00
-Xprof	このオプションを指定した場合、実行中のプログラムのプロファイルを生成し、プロファイリングデータを標準出力に出力します。このオプションは、プログラム開発用のユーティリティとして提供されています。本番稼働システムでの使用を目的としたものではありません。	—	05-00
-Xrunhprof[:<suboption>=<value>,...]	CPU、ヒープ、またはモニタのプロファイリングを有効にします。-Xrunhprof の後ろにコロン「:」を指定して「<suboption>=<value>」を記述します。「<suboption>=<value>」はコンマ「,」で区切って複数指定できます。 サブオプションとそのデフォルト値のリストを取得するには、コマンド java-Xrunhprof:help を実行します。	任意の文字列を指定します。 <suboption>には「=」および「,」は指定できません。 また、<value>には「,」は指定できません。	05-00
-Xrun<libraryName>	JVMPI, JVMDI などのエージェントを含むライブラリと、起動時に渡されるオプションの文字列を指定します。	入力は制限されません。	05-00
-Xdebug	指定した場合、JVMDI のサポートを有効にして開始します。JVMDI は推奨されていません。また、J2SE 5.0 でのデバッグには使用されません。した	—	05-00

オプション名	内容	指定可能値	VR
-Xdebug	がって、J2SE 5.0 でのデバッグには、このオプションは必要ありません。	—	05-00
- XX:NewRatio=<value>	New 領域に対する Tenured 領域の割合を指定します。 <value>が 2 の場合は、New 領域と Tenured 領域の割合が、1:2 になります。 [New 領域の使用サイズ ≥ Tenured 領域の空き領域サイズ] になると FullGC が発生します。このオプションに 1 を設定すると、FullGC が多発するので注意してください。	自然数の値を指定します。	05-00
- XX:MetaspaceSize=<size>	Metaspace 領域の初期サイズを指定します。	自然数の値を次に示す単位を使って指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• キロ [k]</li> <li>• メガ [m]</li> <li>• ギガ [g]</li> <li>• テラ [t]</li> </ul> なお、大文字・小文字は区別されません。	09-70
- XX:MaxMetaspaceSize=<size>	Metaspace 領域の最大サイズを指定します。	自然数の値を次に示す単位を使って指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• キロ [k]</li> <li>• メガ [m]</li> <li>• ギガ [g]</li> <li>• テラ [t]</li> </ul> なお、大文字・小文字は区別されません。	09-70
- XX:CompressedClassSpaceSize	Compressed Class Space の最大サイズを指定します。	自然数の値を次に示す単位を使って指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• キロ [k]</li> <li>• メガ [m]</li> <li>• ギガ [g]</li> </ul> なお、大文字・小文字は区別されません。	09-70
- XX:SurvivorRatio=<value>	New::Survivor 領域の From 空間と To 空間に対する New::Eden 領域の割合を指定します。 <value>に 8 を設定した場合は、New::Eden 領域、From 空間、To 空間の割合が、8:1:1 になります。	自然数の値を指定します。	05-00
-XX: [+ -]PrintTenuringDistribution	-XX:+PrintTenuringDistribution CopyGC 実行時に、Survivor 領域のオブジェクトの年齢分布を出力します。	指定できる文字を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• プラス [+]</li> </ul>	05-00

オプション名	内容	指定可能値	VR
-XX: [+ -]PrintTenuringDis tribution	-XX:-PrintTenuringDistribution CopyGC 実行時に、Survivor 領域のオブジェク トの年齢分布を出力しません。	• マイナス [-]	05-00
- XX:TargetSurvivorRa tio=<value>	GC 実行後の New::Survivor 領域内で Java オブ ジェクトが占める割合の目標値 (0~100 (単位: %)) を指定します。	自然数の値を指定しま す。	05-00
- XX:MaxTenuringThre shold=<value>	CopyGC 実行時に、From 空間と To 空間で Java オブジェクトを入れ替える回数のしきい値を指定し ます。指定した回数を超えて入れ替え対象になった Java オブジェクトは、Tenured 領域に移動されま す。 このオプションの有効範囲は、0~デフォルト値で す。範囲外の値を指定した場合、しきい値を超えた 場合に Tenured 領域へ移動する機能は無効になり ます。	自然数の値を指定しま す。	05-00
-Xrunhndlwrap	JDK のバージョンが 5 以下の環境で Windows を ログオフしたとき、JavaVM の実行を継続するかど うか設定します。 -XX:+EagerXrunInit を指定した場合、このオプ ションの指定は無効になります。また、- agentlib:hndlwrap2 を設定した場合、このオプションは設定しないでく ださい。 このオプションは、ほかの JVMTI 版プログラムと 同時に使用できません。 コマンドプロンプト上でこのオプションを使用した Java を実行している状態でログオフすると、「プロ グラムが反応しない」旨のエラーポップアップが表 示され、ログオフできません。	—	05-01
-agentlib:hndlwrap2	JDK のバージョンが 6 の環境で Windows をログ オフしたとき、JavaVM の実行を継続するかどうか 設定します。 -Xrunhndlwrap を設定した場合、このオプション は設定しないでください。 このオプションは、ほかの JVMTI プログラムと同 時に使用できません。 コマンドプロンプト上でこのオプションを使用した Java を実行している状態でログオフすると、「プロ グラムが反応しない」旨のエラーポップアップが表 示され、ログオフできません。	—	08-50
-XX: [+ -]UseSerialGC*	-XX:+UseSerialGC SerialGC を実行します。 -XX:-UseSerialGC SerialGC を実行しません。	指定できる文字を次に 示します。 • プラス [+] • マイナス [-]	08-70
-XX:[+ -]UseG1GC	-XX:+UseG1GC G1GC を実行します。	指定できる文字を次に 示します。	09-60

オプション名	内容	指定可能値	VR
-XX:[+ -]UseG1GC	<p>-XX:-UseG1GC G1GC を実行しません。</p> <p>-XX:+HitachiUseExplicitMemory オプションとは同時に指定できません。指定した場合、メッセージが標準出力に出力され、JavaVM がリターンコード 1 で終了します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• プラス 「+」</li> <li>• マイナス 「-」</li> </ul>	09-60
-XX:ParallelGCThreads	<p>G1GC の Evacuation を並列実行するスレッドの数を指定します。-XX:+UseG1GC を指定したときに有効になります。なお、このオプションは、デフォルト値で使用することを推奨します。変更する場合は、実際に JavaVM を動作させて測定した値を基に、最適な値を算出してから変更してください。JavaVM 起動時に、このオプションに指定した数の Evacuation 処理用のスレッドが作成され、処理が実行されます。</p> <p>このオプションの指定を省略した場合のデフォルト値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 実行環境の論理 CPU 数が 8 以下の場合、CPU 数になります。</li> <li>• 実行環境の論理 CPU 数が 9 以上の場合、「<math>8 + (\text{CPU 数} - 8) \times (5 \div 8)</math>」(小数点以下は切り捨て) の値になります。</li> </ul> <p>例えば、4CPU の場合は、「ParallelGCThreads = 4」でデフォルト値は 4 になります。また、72CPU の場合は、「ParallelGCThreads = <math>8 + (72 - 8) \times (5 \div 8) = 48</math>」で 48 になります。</p> <p>このオプションに 0 を指定した場合は、デフォルト値が使用されます。</p> <p>指定時には、次の点に注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• このオプションの値を大きくすると、Evacuation 用のスレッド数が増え、Evacuation に割り当てられるリソースが増加します。そのため、値を大きくするとスループットが低下する可能性があります。このオプションの値を変更した場合、性能の要件を満たしているか確認をしてください。</li> <li>• 実行環境で作成できるスレッド数を超える値を指定した場合は、JavaVM 起動時に Evacuation 処理用のスレッドの作成に失敗するため、JavaVM を起動できません。</li> </ul>	自然数の値を指定します。	08-70
-XX:ConcGCThreads	<p>G1GC の Concurrent Marking の処理を並列実行するスレッドの数を指定します。</p> <p>-XX:+UseG1GC を指定したときに有効になります。なお、このオプションは、デフォルト値で使用することを推奨します。変更する場合は、実際に JavaVM を動作させて測定した値を基に、最適な値を算出してから変更してください。</p>	自然数の値を指定します。	09-60

オプション名	内容	指定可能値	VR
-XX:ConcGCThreads	<p>JavaVM 起動時に、このオプションに指定した数の Concurrent Marking 処理用のスレッドが作成され、処理が実行されます。</p> <p>このオプションの指定を省略した場合のデフォルト値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <math>\text{Max}(\text{ParallelGCThreads} + 2) / 4, 1)</math></li> </ul> <p>Max(A,B)は A と B のうち、大きい値を取ることを意味します。また、ParallelGCThreads は -XX:ParallelGCThreads の値を意味します。</p> <p>このオプションに 0 を指定した場合はデフォルト値が使用されます。</p> <p>指定時には次の点に注意して下さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 実行環境で作成できるスレッド数を超える値を指定した場合は、JavaVM 起動時に Concurrent Marking 処理用のスレッドの作成に失敗するため、JavaVM を起動できません。</li> <li>• Concurrent Marking 処理用スレッドのスレッド数は Evacuation 処理用のスレッド数を超えて作成することはできません。Evacuation 処理用のスレッド数を超えて指定した場合、メッセージが標準出力に出力され JavaVM の起動に失敗します。</li> </ul>	自然数の値を指定します。	09-60
-XX:MaxGCPauseMillis	<p>G1GC の GC によるアプリケーション停止時間の目標時間を [ms] の単位で指定できます。</p> <p>-XX:+UseG1GC を指定したときに有効になります。</p> <p>このオプションに 0 を指定した場合は、メッセージが標準出力に出力され JavaVM の起動に失敗します。</p> <p>このオプションに 100 以下の値を指定する場合、ログファイルの非同期出力機能 (-XX:+JavaLogAsynchronous) を使用することを推奨します。</p>	自然数の値を指定します。	09-60

(凡例)

- : 該当なし

注※

-XX:[+|-]UseSerialGC オプションと-XX:[+|-]UseG1GC オプションの指定の組み合わせごとに実行される処理を次に示します。

表 16-12 -XX:[+|-]UseSerialGC オプションと-XX:[+|-]UseG1GC オプションの指定の組み合わせごとの処理

-XX:[+ -]UseSerialGC オプションの指定	-XX:[+ -]UseG1GC オプションの指定	実行される処理
指定なし	指定なし	SerialGC を実行
-XX:+UseSerialGC	-XX:+UseG1GC	プロセスの起動に失敗
-XX:+UseSerialGC	-XX:-UseG1GC	SerialGC を実行 (デフォルトと同様)

-XX:[+ -]UseSerialGC オプションの指定	-XX:[+ -]UseG1GC オプションの指定	実行される処理
-XX:-UseSerialGC	-XX:-UseG1GC	SerialGC を実行 (デフォルトと同様)
-XX:-UseSerialGC	-XX:+UseG1GC	G1GC を実行

### ! 注意事項

- デバッグまたはプロファイリング用オプションについて  
JavaVM オプションの-Xprof や-Xdebug, JVMTI エージェントの hprof や jdwp (-agentlib:<libname>などで指定) は, プログラムの開発用ユーティリティとして提供されているものです。システムの運用では指定しないようにしてください。
- GC の指定について  
アプリケーションサーバの GC は, SerialGC (UseSerialGC) と G1GC (UseG1GC) を選択できます。この二つの GC を同時に指定しないようにしてください。同時に指定した場合は, Java プロセスが起動できません。

### ポイント

Java HotSpot VM のオプションのデフォルト値は, サーバごとに参照先が異なります。サーバ, およびアプリケーションごとの Java HotSpot VM のオプションのデフォルト値の参照先を次の表に示します。

表 16-13 サーバ, およびアプリケーションごとの Java HotSpot VM のオプションのデフォルト値の参照先

使用するサーバおよびアプリケーション	参照先
J2EE サーバ	2.3 usrconf.cfg (J2EE サーバ用オプション定義ファイル)
バッチサーバ	3.2 usrconf.cfg (バッチサーバ用オプション定義ファイル)
Web コンテナサーバ (互換機能)	マニュアル「アプリケーションサーバ 機能解説 互換編」の「3.11.2 usrconf.cfg (Web コンテナサーバ用オプション定義ファイル)」
cjclstartap コマンドで起動する Java アプリケーション	14.2 usrconf.cfg (Java アプリケーション用オプション定義ファイル)
そのほかの Java アプリケーション	16.4 Application Server で指定できる Java HotSpot VM のオプションのデフォルト値

なお, Java HotSpot VM のオプションを簡易構築定義ファイルに指定する場合は, 「param-name 指定値」に add.jvm.arg を指定した場合に指定できる 「param-value の指定内容」に Java HotSpot VM のオプションを指定してください。

## 16.6 JavaVM で使用する環境変数の一覧

JavaVM で使用する環境変数の一覧を、次の表に示します。

「VR」とは、環境変数が導入・変更されたアプリケーションサーバのバージョンです。

表 16-14 JavaVM で使用する環境変数の一覧

分類	環境変数	説明	VR
JavaVM で使用する環境変数	JAVACOREDIR	スレッドダンプファイルの出力先ディレクトリを指定します。	Windows の場合 05-05 Solaris の場合 06-50 上記以外の OS の場合 05-00



## 16.7 JavaVM で使用する環境変数の詳細

---

JavaVM で使用する環境変数の詳細について説明します。

### JAVACOREDIR

---

#### 形式

Windows の場合 (バッチファイル)

```
set JAVACOREDIR=<スレッドダンプファイルの出力先ディレクトリ>
```

UNIX の場合 (C シェル)

```
setenv JAVACOREDIR <スレッドダンプファイルの出力先ディレクトリ>
```

#### 説明

スレッドダンプファイルを出力する場合の、出力先ディレクトリを指定します。

#### デフォルト値

デフォルトでは JAVACOREDIR は未設定です。

#### スレッドダンプ出力先

デフォルトでは、スレッドダンプファイルはカレントディレクトリに出力されます。

カレントディレクトリを次に示します。

Windows の場合

```
<作業ディレクトリ>%ejb%<サーバ名称>
```

UNIX の場合

```
<作業ディレクトリ>/ejb/<サーバ名称>
```

#### 前提オプション

```
-XX:+HitachiThreadDump
```

#### 指定例

Windows の場合 (バッチファイル)

スレッドダンプを C:%home%user%threaddump に出力します。

---

```
set JAVACOREDIR=C:%home%user%threaddump
```

---

UNIX の場合 (C シェル)

スレッドダンプを/home/user/threaddump に出力します。

---

```
setenv JAVACOREDIR /home/user/threaddump
```

---

#### 注意事項

- JAVACOREDIR で指定したディレクトリへのスレッドダンプファイルの出力に失敗した場合は、カレントディレクトリにスレッドダンプファイルを出力します。
- カレントディレクトリへの出力も失敗した場合は、標準エラー出力だけにスレッドダンプを出力します。この場合は、標準出力にはスレッドダンプは出力されません。



# 付録

## 付録 A 拡張 MIB オブジェクト定義ファイル

拡張 MIB オブジェクト定義ファイルは、Management Server が出力する稼働性能などの情報を、MIB オブジェクトとして出力するための定義ファイルです。MIB オブジェクトは、SNMP Manager 製品と連携する場合に使用します。

### 付録 A.1 拡張 MIB オブジェクト定義ファイルのテーブル

拡張 MIB オブジェクト定義ファイルのテーブルについて説明します。

各テーブルの OID を次に示します。

.iso(1).org(3).dod(6).internet(1).private(4).enterprises(1).hitachi(116).systemExMib(5).cosminexusMibs(33).manager(1)

#### (1) j2eeContainerTable

j2eeContainerTable を次の表に示します。

表 A-1 j2eeContainerTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
j2eeContainerTable (1)	j2eeContainerEntry (1)	j2eeContainerIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	なし
		j2eeContainerFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>"	
		j2eeContainerServerName (3)	DisplayString	RO	—	J2EE サーバのサーバ名	
		j2eeContainerNamingServiceHost (4)	DisplayString	RO	—	J2EE サーバの接続する ネーミングサービスのホスト名	
		j2eeContainerNamingServicePort (5)	INTEGER	RO	—	J2EE サーバの接続する ネーミングサービスのポート番号	
		j2eeContainerStartTime (6)	INTEGER	RO	秒	J2EE サーバの起動時刻*	

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

注※

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

## (2) jvmTable

jvmTable を次の表に示します。

表 A-2 jvmTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
jvmTable (2)	jvmEntry (1)	jvmIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	なし
		jvmFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>"	
		jvmName (3)	DisplayString	RO	—	JavaVM の実装名	
		jvmVersion (4)	DisplayString	RO	—	JavaVM の実装バージョン	
		jvmCurrentFreeMemory (5)	Gauge	RO	KB	JavaVM の空きメモリ所要量 (現在値)	
		jvmFreeMemoryHighWaterMark (6)	Gauge	RO	KB	JavaVM の空きメモリ所要量 (最大値)	
		jvmFreeMemoryLowWaterMark (7)	Gauge	RO	KB	JavaVM の空きメモリ所要量 (最小値)	
		jvmFreeMemoryAverage (8)	Gauge	RO	KB	JavaVM の空きメモリ所要量 (平均値※1)	
		jvmFreeMemoryPeak (9)	Gauge	RO	KB	JavaVM の空きメモリ所要量 (ピーク値※2)	
		jvmCurrentTotalMemory (10)	Gauge	RO	KB	JavaVM の総メモリ所要量(使用メモリ所要量と空きメモリ所要量の総和)の現在値	
jvmTotalMemoryHighWaterMark (11)	Gauge	RO	KB	JavaVM の総メモリ所要量(使用メモリ所要量と空きメモリ所要量の総和)の最大値			

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
jvmTable (2)	jvmEntry (1)	jvmTotalMemoryLowWaterMark (12)	Gauge	RO	KB	JavaVM の総メモリ所要量(使用メモリ所要量と空きメモリ所要量の総和)の最小値	なし
		jvmTotalMemoryAverage (13)	Gauge	RO	KB	JavaVM の総メモリ所要量(使用メモリ所要量と空きメモリ所要量の総和)の平均値*1	
		jvmTotalMemoryPeak (14)	Gauge	RO	KB	JavaVM の総メモリ所要量(使用メモリ所要量と空きメモリ所要量の総和)のピーク値*2	
		jvmMaxMemory (15)	INTEGER	RO	KB	JavaVM の使用する最大メモリ所要量 指定されていない場合は, $(2^{63}-1)/2^{10}$	
		jvmStatisticsStartedTime (16)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻*3	
		jvmSamplingTime (17)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間*4	

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

- : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

値の取得要求時点でのピーク値

このピーク値は、記録されてからサンプリング時間の有効期間を持つ最大値のことを示します。

注※3

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※4

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト(10 秒)に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

### (3) transactionTable

transactionTable を次の表に示します。

表 A-3 transactionTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
transactionTable (3)	transactionEntry (1)	transactionIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	トランザクションの開始
		transactionFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>"	
		transactionDefaultTransactionTimeout (3)	INTEGER	RO	秒	トランザクションタイムアウトのデフォルト値	
		transactionActiveTransactionCount (4)	Gauge	RO	—	アクティブトランザクション数 (現在値)	
		transactionAverageTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	トランザクション時間 (平均値※1)	
		transactionStatisticsStartTime (6)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	
		transactionSamplingTime (7)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト(10秒)に設定されて、統計が開始されます。10以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

#### (4) httpServerTable

httpServerTable を次の表に示します。

表 A-4 httpServerTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
httpServerTable (4)	httpServerEntry (1)	httpServerIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	なし
		httpServerFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>"	
		httpServerPortNumber (3)	INTEGER	RO	—	管理用サーバのポート番号	
		httpServerActiveThreadCountHighWaterMark (4)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (最大値)	
		httpServerActiveThreadCountLowWaterMark (5)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (最小値)	
		httpServerActiveThreadCountAverage (6)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (平均値※1)	
		httpServerActiveThreadCountPeak (7)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (ピーク値※2)	
		httpServerStatisticsStartedTime (8)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※3	
		httpServerSamplingTime (9)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※4	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

値の取得要求時点でのピーク値

このピーク値は、記録されてからサンプリング時間の有効期間を持つ最大値のことを示します。

注※3

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数



注※4

## サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (5) httpServerConnectorTable

httpServerConnectorTable を次の表に示します。

表 A-5 httpServerConnectorTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
httpServerConnectorTable (5)	httpServerConnectorEntry (1)	httpServerConnectorIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	Web サーバ連携機能の使用
		httpServerConnectorFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>"	
		httpServerConnectorPortNumber (3)	INTEGER	RO	—	Web サーバとの通信に使用するポート	
		httpServerConnectorBackLogUpperBound (4)	INTEGER	RO	—	Web サーバとの通信ソケットのバックログ	
		httpServerConnectorConnectionCount (5)	Gauge	RO	—	Web サーバと Web コンテナとの接続数 (現在値)	
		httpServerConnectorConnectionCountHighWaterMark (6)	Gauge	RO	—	Web サーバと Web コンテナとの接続数 (最大値)	
		httpServerConnectorConnectionCountLowWaterMark (7)	Gauge	RO	—	Web サーバと Web コンテナとの接続数 (最小値)	
		httpServerConnectorActiveThreadCountUpperBound (8)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (上限値)	
		httpServerConnectorActiveThreadCount (9)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (最大値)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
httpServerConnectorTable (5)	httpServerConnectorEntry (1)	untHighWaterMark (9)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (最大値)	Web サーバ連携機能の使用
		httpServerConnectorActiveThreadCountLowWaterMark (10)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (最小値)	
		httpServerConnectorActiveThreadCountAverage (11)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (平均値※1)	
		httpServerConnectorActiveThreadCountPeak (12)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (ピーク値※2)	
		httpServerConnectorWaitingRequestCountHighWaterMark (13)	Gauge	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数 (最大値)	
		httpServerConnectorWaitingRequestCountLowWaterMark (14)	Gauge	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数 (最小値)	
		httpServerConnectorWaitingRequestCountAverage (15)	Gauge	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数 (平均値※1)	
		httpServerConnectorWaitingRequestCountPeak (16)	Gauge	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数 (ピーク値※2)	
		httpServerConnectorStatisticsStartTime (17)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※3	
		httpServerConnectorSamplingTime (18)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※4	

テーブル名称 (OID)	エン트리名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
httpServerConnectorTable (5)	httpServerConnectorEntry (1)	httpServerConnectorActiveThreadCount (19)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数	Web サーバ連携機能の使用
		httpServerConnectorWaitingRequestCount (20)	Gauge	RO	—	実行を待たされているリクエスト数	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

値の取得要求時点でのピーク値

このピーク値は、記録されてからサンプリング時間の有効期間を持つ最大値のことを示します。

注※3

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※4

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (6) dataSourceTable

dataSourceTable を次の表に示します。

表 A-6 dataSourceTable

テーブル名称 (OID)	エン트리名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
dataSourceTable (6)	dataSourceEntry (1)	dataSourceIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	データソースのインポート
		dataSourceFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<データソース名>"	
		dataSourceName (3)	DisplayString	RO	—	データソース名	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
dataSourceTable (6)	dataSourceEntry (1)	dataSourceAuthenticationType (4)	INTEGER	RO	—	認証タイプ 0:アプリケーションごとの認証 1:コンテナごとの認証	データソースのインポート
		dataSourceLoginTimeout (5)	INTEGER	RO	秒	ログインタイムアウト値	
		dataSourceUserID (6)	DisplayString	RO	—	ユーザ ID	
		dataSourcePoolUpperBound (7)	INTEGER	RO	—	コネクションプール数 (上限値)	
		dataSourcePoolLowerBound (8)	INTEGER	RO	—	コネクションプール数 (下限値)	
		dataSourceCurrentPoolSize (9)	Gauge	RO	—	コネクションプール数 (現在値)	
		dataSourceActiveConnectionCount (10)	Gauge	RO	—	使用中のコネクション数 (現在値)	
		dataSourceFreeConnectionCount (11)	Gauge	RO	—	未使用のコネクション数 (現在値)	

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

## (7) j2eeApplicationTable

j2eeApplicationTable を次の表に示します。

表 A-7 j2eeApplicationTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
j2eeApplicationTable (7)	j2eeApplicationEntry (1)	j2eeApplicationIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	J2EE アプリケーション (EAR) の開始

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
j2eeApplicationTable (7)	j2eeApplicationEntry (1)	j2eeApplicationFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>"※	J2EE アプリケーション (EAR) の開始
		j2eeApplicationName (3)	DisplayString	RO	—	J2EE アプリケーション名	
		j2eeApplicationDeployedTime (4)	INTEGER	RO	秒	デプロイされた時刻	

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

注※

アプリケーションがテストモードで開始されている場合

"&lt;論理サーバ名&gt;:&lt;J2EE アプリケーション名&gt;\_TEST"となります。

## (8).ejbApplicationTable

.ejbApplicationTable を次の表に示します。

表 A-8 .ejbApplicationTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
ejbApplicationTable (8)	ejbApplicationEntry (1)	ejbApplicationIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	EJB アプリケーション (EJB-JAR) の開始
		ejbApplicationFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>"	
		ejbApplicationName (3)	DisplayString	RO	—	EJB アプリケーション名 (EJB-JAR 名)	

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

## (9) statelessSessionBeanTable

statelessSessionBeanTable を次の表に示します。

表 A-9 statelessSessionBeanTable

テーブル名 称 (OID)	エントリ名 称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBeanTable (9)	statelessSessionBeanEntry (1)	statelessSessionBeanIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	Stateless Session Bean の使用
		statelessSessionBeanFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>"	
		statelessSessionBeanName (3)	DisplayString	RO	—	Enterprise Bean 名	
		statelessSessionBeanHomeInterfaceName (4)	DisplayString	RO	—	RemoteHome インタフェースクラス名*1	
		statelessSessionBeanRemoteInterfaceName (5)	DisplayString	RO	—	RemoteComponent インタフェースクラス名*1	
		statelessSessionBeanLocalHomeInterfaceName (6)	DisplayString	RO	—	LocalHome インタフェースクラス名 (EJB2.0 対応)*2	
		statelessSessionBeanLocalComponentInterfaceName (7)	DisplayString	RO	—	LocalComponent インタフェースクラス名 (EJB2.0 対応)*2	
		statelessSessionBeanEjbClassName (8)	DisplayString	RO	—	EJB クラス名	
		statelessSessionBeanPoolUpperBound (9)	INTEGER	RO	—	インスタンスプール数 (上限値)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBeanTable (9)	statelessSessionBeanEntry (1)	statelessSessionBeanPoolLowerBound (10)	INTEGER	RO	—	インスタンスプール数 (下限値)	Stateless Session Bean の使用
		statelessSessionBeanCurrentPoolSize (11)	Gauge	RO	—	インスタンスプール数 (現在値)	
		statelessSessionBeanWaitingSessionCount (12)	Gauge	RO	—	接続待ちセッション数 (現在値)	
		statelessSessionBeanActiveSessionBeanCount (13)	Gauge	RO	—	使用中の Stateless Session Bean 数(現在値)	
		statelessSessionBeanFreeSessionBeanCount (14)	Gauge	RO	—	未使用の Stateless Session Bean 数(現在値)	
		statelessSessionBeanFreeSessionTransactionType (15)	DisplayString	RO	—	トランザクションタイプ "CMT"または"BMT"	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

注※1

Local インタフェースだけの場合は, "" (空文字) を表示します。

注※2

Remote インタフェースだけの場合は, "" (空文字) を表示します。

## (10) statelessSessionBeanHomeTable

statelessSessionBeanHomeTable を次の表に示します。

表 A-10 statelessSessionBeanHomeTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSession	statelessSession	statelessSessionBeanHomeIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	Stateless Session Bean

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
BeanHome Table (10)	BeanHome Entry (1)	statelessSessionBeanHomeFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>"	Remote Home Interface の使用
		statelessSessionBeanHomeName (3)	DisplayString	RO	—	RemoteHome インタフェースクラス名	
		statelessSessionBeanHomeResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間(最大値)	
		statelessSessionBeanHomeResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間(最小値)	
		statelessSessionBeanHomeResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間(平均値※1)	
		statelessSessionBeanHomeStatisticsStartedTime (7)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	
		statelessSessionBeanHomeSamplingTime (8)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法



0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (11) statelessSessionBeanRemoteTable

statelessSessionBeanRemoteTable を次の表に示します。

表 A-11 statelessSessionBeanRemoteTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBeanRemoteTable (11)	statelessSessionBeanRemoteEntry (1)	statelessSessionBeanRemoteIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	StatelessSessionBeanRemoteComponent Interface の使用
		statelessSessionBeanRemoteFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>"	
		statelessSessionBeanRemoteName (3)	DisplayString	RO	—	RemoteComponent インタフェースクラス名	
		statelessSessionBeanRemoteResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		statelessSessionBeanRemoteResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		statelessSessionBeanRemoteResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値 <sup>*1</sup> )	
		statelessSessionBeanRemoteResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	Remote インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最大値)	
		statelessSessionBeanRemoteResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	Remote インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最小値)	



テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanTable (12)	statefulSessionBeanEntry (1)	statefulSessionBeanFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	リケーション名 >:<Enterprise Bean 名>"	Stateful Session Bean の使用
		statefulSessionBeanName (3)	DisplayString	RO	—	Enterprise Bean 名	
		statefulSessionBeanHomeInterfaceName (4)	DisplayString	RO	—	RemoteHome インタフェースクラス名※1	
		statefulSessionBeanRemoteInterfaceName (5)	DisplayString	RO	—	RemoteComponent インタフェースクラス名※1	
		statefulSessionBeanLocalHomeInterfaceName (6)	DisplayString	RO	—	LocalHome インタフェースクラス名※2	
		statefulSessionBeanLocalComponentInterfaceName (7)	DisplayString	RO	—	LocalComponent インタフェースクラス名※2	
		statefulSessionBeanEjbClassName (8)	DisplayString	RO	—	EJB クラス名	
		statefulSessionBeanSessionUpperBound (9)	INTEGER	RO	—	同時接続数 (上限値)	
		statefulSessionBeanActiveSessionUpperBound (10)	INTEGER	RO	—	同時実行数 (上限値)	
		statefulSessionBeanPassivateTimeout (11)	INTEGER	RO	秒	非活性セッションのタイムアウト値	
		statefulSessionBeanActiveTimeout (12)	INTEGER	RO	秒	実行中セッションのタイムアウト値	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanTable (12)	statefulSessionBeanEntry (1)	statefulSessionBeanCurrentSessionCount (13)	Gauge	RO	—	接続セッション数 (現在値)	Stateful Session Bean の使用
		statefulSessionBeanWaitingSessionCount (14)	Gauge	RO	—	接続待ちセッション数 (現在値)	
		statefulSessionBeanActiveSessionCount (15)	Gauge	RO	—	実行中セッション数 (現在値)	
		statefulSessionBeanPassiveSessionCount (16)	Gauge	RO	—	非活性セッション数 (現在値)	
		statefulSessionBeanTransactionType (17)	DisplayString	RO	—	トランザクションタイプ "CMT"または"BMT"	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

注※1

Local インタフェースだけの場合は, "" (空文字) を表示します。

注※2

Remote インタフェースだけの場合は, "" (空文字) を表示します。

### (13) statefulSessionBeanHomeTable

statefulSessionBeanHomeTable を次の表に示します。

表 A-13 statefulSessionBeanHomeTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanHomeTable (13)	statefulSessionBeanHomeEntry (1)	statefulSessionBeanHomeIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	Stateful Session Bean Remote Home Interface の使用
		statefulSessionBeanHomeFullyQualifiedNames (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケー	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanHomeTable (13)	statefulSessionBeanHomeEntry (1)	statefulSessionBeanHomeFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	シヨン名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>"	Stateful Session Bean Remote Home Interface の使用
		statefulSessionBeanHomeName (3)	DisplayString	RO	—	RemoteHome インタフェースクラス名	
		statefulSessionBeanHomeResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		statefulSessionBeanHomeResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		statefulSessionBeanHomeResponseAverageTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値※1)	
		statefulSessionBeanHomeResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する EJB メソッド実行時間 (最大値)	
		statefulSessionBeanHomeResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する EJB メソッド実行時間 (最小値)	
		statefulSessionBeanHomeResponseEjbAverageTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する EJB メソッド実行時間 (平均値※1)	
		statefulSessionBeanHomeStatisticsStartedTime (10)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	
		statefulSessionBeanHomeSamplingTime (11)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only  
 RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (14) statefulSessionBeanRemoteTable

statefulSessionBeanRemoteTable を次の表に示します。

表 A-14 statefulSessionBeanRemoteTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanRemoteTable (14)	statefulSessionBeanRemoteEntry (1)	statefulSessionBeanRemoteIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	Stateful Session Bean Remote Component Interface の使用
		statefulSessionBeanRemoteFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>"	
		statefulSessionBeanRemoteName (3)	DisplayString	RO	—	RemoteComponent インタフェースクラス名	
		statefulSessionBeanRemoteResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		statefulSessionBeanRemoteResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		statefulSessionBeanRemoteResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値*1)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanRemoteTable (14)	statefulSessionBeanRemoteEntry (1)	statefulSessionBeanRemoteResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対する EJB メソッド実行時間 (最大値)	Stateful Session Bean Remote Component Interface の使用
		statefulSessionBeanRemoteResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対する EJB メソッド実行時間 (最小値)	
		statefulSessionBeanRemoteResponseEjbAveTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対する EJB メソッド実行時間 (平均値※1)	
		statefulSessionBeanRemoteStatisticsStartedTime (10)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	
		statefulSessionBeanRemoteSamplingTime (11)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

- : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

**サンプリング時間の設定方法**

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

**(15) entityBeanTable**

entityBeanTable を次の表に示します。

表 A-15 entityBeanTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
entityBeanTable (15)	entityBeanEntry (1)	entityBeanIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	Entity Bean の使用
		entityBeanFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>"	
		entityBeanName (3)	DisplayString	RO	—	Enterprise Bean 名	
		entityBeanHomeInterfaceName (4)	DisplayString	RO	—	RemoteHome インタフェースクラス名※1	
		entityBeanRemoteInterfaceName (5)	DisplayString	RO	—	RemoteComponent インタフェースクラス名※1	
		entityBeanLocalHomeInterfaceName (6)	DisplayString	RO	—	LocalHome インタフェースクラス名※2	
		entityBeanLocalComponentInterfaceName (7)	DisplayString	RO	—	LocalComponent インタフェースクラス名※2	
		entityBeanEjbClassName (8)	DisplayString	RO	—	EJB クラス名	
		entityBeanPersistenceType (9)	DisplayString	RO	—	永続化タイプ CMP または BMP	
		entityBeanCacheOption (10)	DisplayString	RO	—	キャッシュモデル A : Full Cache B : Cache C : No Cache	
		entityBeanSessionUpperBound (11)	INTEGER	RO	—	同時接続数 (上限値)	



テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
entityBeanTable (15)	entityBeanEntry (1)	entityBeanPoolUpperBound (12)	INTEGER	RO	—	インスタンスプール数 (上限値)	Entity Bean の使用
		entityBeanPoolLowerBound (13)	INTEGER	RO	—	インスタンスプール数 (下限値)	
		entityBeanCurrentPoolSize (14)	Gauge	RO	—	インスタンスプール数 (現在値)	
		entityBeanSessionTimeout (15)	INTEGER	RO	—	接続タイムアウト値	
		entityBeanCurrentSessionCount (16)	Gauge	RO	—	接続セッション数 (現在値)	
		entityBeanWaitingSessionCount (17)	Gauge	RO	—	接続待ちセッション数 (現在値)	
		entityBeanActiveEntityBeanCount (18)	Gauge	RO	—	使用中の Entity Bean 数 (現在値)	
		entityBeanFreeEntityBeanCount (19)	Gauge	RO	—	未使用の Entity Bean 数 (現在値)	

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

注※1

Local インタフェースだけの場合は, "" (空文字) を表示します。

注※2

Remote インタフェースだけの場合は, "" (空文字) を表示します。

## (16) entityBeanHomeTable

entityBeanHomeTable を次の表に示します。

表 A-16 entityBeanHomeTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
entityBeanHomeTable (16)	entityBeanHomeEntry (1)	entityBeanHomeIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	Entity Bean Remote Home Interface の使用
		entityBeanHomeFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>"	
		entityBeanHomeName (3)	DisplayString	RO	—	RemoteHome インタフェースクラス名	
		entityBeanHomeResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		entityBeanHomeResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		entityBeanHomeResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値※1)	
		entityBeanHomeResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する EJB メソッド実行時間 (最大値)	
		entityBeanHomeResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する EJB メソッド実行時間 (最小値)	
		entityBeanHomeResponseEjbAveTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteHome インタフェースに対する EJB メソッド実行時間 (平均値※1)	
		entityBeanHomeStatisticsStartedTime (10)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
entityBeanHomeTable (16)	entityBeanHomeEntry (1)	entityBeanHomeSamplingTime (11)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	Entity Bean Remote Home Interface の使用

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

- : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (17) entityBeanRemoteTable

entityBeanRemoteTable を次の表に示します。

表 A-17 entityBeanRemoteTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
entityBeanRemoteTable (17)	entityBeanRemoteEntry (1)	entityBeanRemoteIndex (1)	INTEGER	RO	-	シーケンス番号[1, ...]	Entity Bean Remote Component Interface の使用
		entityBeanRemoteFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	-	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>"	
		entityBeanRemoteName (3)	DisplayString	RO	-	RemoteComponent インタフェースクラス名	
		entityBeanRemoteResponseMaxTime	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対す	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
entityBeanRemoteTable (17)	entityBeanRemoteEntry (1)	(4)	Gauge	RO	ミリ秒	る呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	Entity Bean Remote Component Interface の使用
		entityBeanRemoteResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		entityBeanRemoteResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値*1)	
		entityBeanRemoteResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対する EJB メソッド実行時間 (最大値)	
		entityBeanRemoteResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対する EJB メソッド実行時間 (最小値)	
		entityBeanRemoteResponseEjbAveTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	RemoteComponent インタフェースに対する EJB メソッド実行時間 (平均値*1)	
		entityBeanRemoteStatisticsStartedTime (10)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻*2	
		entityBeanRemoteSamplingTime (11)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間*3	

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

- : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (18) webApplicationTable

webApplicationTable を次の表に示します。

表 A-18 webApplicationTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
webApplicationTable (18)	webApplicationEntry (1)	webApplicationIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	Web アプリケーション (WAR) の使用
		webApplicationFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<コンテキストルート>"	
		webApplicationContextRoot (3)	DisplayString	RO	—	コンテキストルート	
		webApplicationActiveSessionCount (4)	Gauge	RO	—	使用中のセッション数 (現在値)	
		webApplicationTotalJSPServiceCount (5)	Counter	RO	—	JSP の実行回数 (累積値)	
		webApplicationTotalJSPServiceFailedCount (6)	Counter	RO	—	JSP の実行失敗回数 (累積値)	
		webApplicationTotalJSPServiceMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	JSP の実行時間 (最大値)	
		webApplicationTotalJSPServiceMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	JSP の実行時間 (最小値)	
		webApplicationTotalJSPServiceAveTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	JSP の実行時間 (平均値※1)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
webApplicationTable (18)	webApplicationEntry (1)	webApplicationTotalJSPServicePeak (10)	Gauge	RO	ミリ秒	JSP の実行時間 (ピーク値※2)	Web アプリケーション (WAR) の使用
		webApplicationTotalJSPServiceOutputDataSizeMax (11)	Gauge	RO	KB	JSP の出力データサイズ (最大値)	
		webApplicationTotalJSPServiceOutputDataSizeMin (12)	Gauge	RO	KB	JSP の出力データサイズ (最小値)	
		webApplicationTotalJSPServiceOutputDataSizeAve (13)	Gauge	RO	KB	JSP の出力データサイズ (平均値※1)	
		webApplicationTotalJSPServiceOutputDataSizePeak (14)	Gauge	RO	KB	JSP の出力データサイズ (ピーク値※2)	
		webApplicationTotalStaticFileServiceCount (15)	Counter	RO	—	静的コンテンツのアクセス回数 (累積値)	
		webApplicationTotalStaticFileServiceFailedCount (16)	Counter	RO	—	静的コンテンツのアクセス失敗回数 (累積値)	
		webApplicationTotalStaticFileServiceMaxTime (17)	Gauge	RO	ミリ秒	静的コンテンツの取得処理時間 (最大値)	
		webApplicationTotalStaticFileServiceMinTime (18)	Gauge	RO	ミリ秒	静的コンテンツの取得処理時間 (最小値)	
		webApplicationTotalStaticFileServiceAveTime (19)	Gauge	RO	ミリ秒	静的コンテンツの取得処理時間 (平均値※1)	
webApplicationTotalStaticFileServicePeak (20)	Gauge	RO	ミリ秒	静的コンテンツの取得処理時間 (ピーク値※2)			

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
webApplicationTable (18)	webApplicationEntry (1)	(20)	Gauge	RO	ミリ秒	静的コンテンツの取得処理時間 (ピーク値※2)	Web アプリケーション (WAR) の使用
		webApplicationTotalStaticFileServiceOutputDataSizeMax (21)	Gauge	RO	KB	静的コンテンツの出力データサイズ (最大値)	
		webApplicationTotalStaticFileServiceOutputDataSizeMin (22)	Gauge	RO	KB	静的コンテンツの出力データサイズ (最小値)	
		webApplicationTotalStaticFileServiceOutputDataSizeAverage (23)	Gauge	RO	KB	静的コンテンツの出力データサイズ (平均値※1)	
		webApplicationTotalStaticFileServiceOutputDataSizePeak (24)	Gauge	RO	KB	静的コンテンツの出力データサイズ (ピーク値※2)	
		webApplicationStatisticsStartedTime (25)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※3	
		webApplicationSamplingTime (26)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※4	
		webApplicationExclusiveThreadCountUpperBound (27)	INTEGER	RO	—	占有スレッド数	<ul style="list-style-type: none"> <li>Web アプリケーション (WAR) の使用</li> <li>同時実行スレッド数制御機能の使用</li> </ul>
		webApplicationActiveThreadCountUpperBound (28)	INTEGER	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (上限値)	
		webApplicationCurrentThreadCountUpperBound (29)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (現在上限値※5)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
webApplicationTable (18)	webApplicationEntry (1)	webApplicationActiveThreadCount (30)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (現在値)	<ul style="list-style-type: none"> <li>Webアプリケーション (WAR) の使用</li> <li>同時実行スレッド数制御機能の使用</li> </ul>
		webApplicationActiveThreadCountHighWaterMark (31)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (最大値)	
		webApplicationActiveThreadCountLowWaterMark (32)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (最小値)	
		webApplicationActiveThreadCountAverage (33)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (平均値※ <sup>1</sup> )	
		webApplicationActiveThreadCountPeak (34)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数 (ピーク値※ <sup>2</sup> )	
		webApplicationWaitingRequestCountUpperBound (35)	INTEGER	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数 (上限値)	
		webApplicationWaitingRequestCount (36)	Gauge	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数 (現在値)	
		webApplicationWaitingRequestCountHighWaterMark (37)	Gauge	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数 (最大値)	
		webApplicationWaitingRequestCountLowWaterMark (38)	Gauge	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数 (最小値)	
		webApplicationWaitingRequestCountAverage (39)	Gauge	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数 (平均値※ <sup>1</sup> )	



テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
webApplicationTable (18)	webApplicationEntry (1)	webApplicationWaitingRequestCountPeak (40)	Gauge	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数（ピーク値※2）	<ul style="list-style-type: none"> <li>Web アプリケーション (WAR) の使用</li> <li>同時実行スレッド数制御機能の使用</li> </ul>
		webApplicationOverflowRequestCount (41)	Counter	RO	—	URL グループ単位および Web アプリケーション単位の実行待ちリクエストの上限値の設定によって、エラーを返したリクエスト数（累積値）	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

値の取得要求時点でのピーク値

このピーク値は、記録されてからサンプリング時間の有効期間を持つ最大値のことを示します。

注※3

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※4

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

注※5

現在の同時実行できるスレッド数の上限

## (19) servletTable

servletTable を次の表に示します。

表 A-19 servletTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
servletTable (19)	servletEntry (1)	servletIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	サブレットの使用
		servletFullyQualifiedName	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
servletTable (19)	servletEntry (1)	(2)	DisplayString	RO	—	"<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<コンテキストルート>:<Servlet クラス名>"	サーブレットの使用
		servletName (3)	DisplayString	RO	—	web.xml に記述されたサーブレット名 設定されていない場合は、空文字	
		servletServletClassName (4)	DisplayString	RO	—	Servlet クラス名	
		servletServiceCount (5)	Counter	RO	—	サーブレットの実行回数 (累積値)	
		servletServiceFailedCount (6)	Counter	RO	—	サーブレットの実行失敗回数 (累積値)	
		servletServiceMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	サーブレットの実行時間 (最大値)	
		servletServiceMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	サーブレットの実行時間 (最小値)	
		servletServiceAverageTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	サーブレットの実行時間 (平均値※1)	
		servletServicePeak (10)	Gauge	RO	ミリ秒	サーブレットの実行時間 (ピーク値※2)	
		servletServiceOutputDataSizeMax (11)	Gauge	RO	KB	サーブレットの出力データサイズ (最大値)	
		servletServiceOutputDataSizeMin (12)	Gauge	RO	KB	サーブレットの出力データサイズ (最小値)	
		servletServiceOutputDataSizeAverage (13)	Gauge	RO	KB	サーブレットの出力データサイズ (平均値※1)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
servletTable (19)	servletEntry (1)	servletServiceOutputDataSizePeak (14)	Gauge	RO	KB	サーブレットの出力データサイズ (ピーク値※2)	サーブレットの使用
		servletStatisticsStartTime (15)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※3	
		servletSamplingTime (16)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※4	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

値の取得要求時点でのピーク値

このピーク値は、記録されてからサンプリング時間の有効期間を持つ最大値のことを示します。

注※3

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※4

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (20) requestUrlTable

requestUrlTable を次の表に示します。

表 A-20 requestUrlTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
requestUrlTable (20)	requestUrlEntry (1)	requestUrlIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	requestUrl の統計開始、 かつ該当 Web アプリ ケーション への URL ア クセス
		requestUrlFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に 識別する完全修飾名 "<論理サーバ名 >:<J2EE アプリケー ション名>:<コンテキ	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
requestUrl Table (20)	requestUrl Entry (1)	requestUrlFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	ストルート>:<リクエスト URL>"	requestUrl の統計開始、 かつ該当 Web アプリ ケーション への URL ア クセス
		requestUrl (3)	DisplayString	RO	—	リクエスト URL	
		requestUrlServiceCount (4)	Counter	RO	—	リクエスト実行回数 (累積値)	
		requestUrlServiceFailedCount (5)	Counter	RO	—	リクエスト失敗回数 (累積値)	
		requestUrlServiceMaxTime (6)	Gauge	RO	ミリ 秒	リクエスト実行時間 (最大値)	
		requestUrlServiceMinTime (7)	Gauge	RO	ミリ 秒	リクエスト実行時間 (最小値)	
		requestUrlServiceAveTime (8)	Gauge	RO	ミリ 秒	リクエスト実行時間 (平均値*1)	
		requestUrlServicePeak (9)	Gauge	RO	ミリ 秒	リクエスト実行時間 (ピーク値*2)	
		requestUrlServiceOutputDataSizeMax (10)	Gauge	RO	KB	リクエスト出力データ サイズ (最大値)	
		requestUrlServiceOutputDataSizeMin (11)	Gauge	RO	KB	リクエスト出力データ サイズ (最小値)	
		requestUrlServiceOutputDataSizeAve (12)	Gauge	RO	KB	リクエスト出力データ サイズ (平均値*1)	
		requestUrlServiceOutputDataSizePeak (13)	Gauge	RO	KB	リクエスト出力データ サイズ (ピーク値*2)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
requestUrlTable (20)	requestUrlEntry (1)	requestUrlStatisticsStartedTime (14)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※3	requestUrlの統計開始、かつ該当WebアプリケーションへのURLアクセス
		requestUrlSamplingTime (15)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※4	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

- : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

値の取得要求時点でのピーク値

このピーク値は、記録されてからサンプリング時間の有効期間を持つ最大値のことを示します。

注※3

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※4

サンプリング時間の設定方法

0以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト(10秒)に設定されて、統計が開始されます。10以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (21) dataSourceFullJTATable

dataSourceFullJTATable を次の表に示します。

表 A-21 dataSourceFullJTATable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
dataSourceFullJTATable (21)	dataSourceFullJTAEEntry (1)	dataSourceFullJTATableIndex (1)	INTEGER	RO	-	シーケンス番号[1, ...]	データソース(XA)のインポート
		dataSourceFullJTATableFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	-	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<データソース名>"	
		dataSourceFullJTATableName (3)	DisplayString	RO	-	データソース名	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
dataSourceFullJTATable (21)	dataSourceFullJTAEEntry (1)	dataSourceFullJTALoginTimeout (4)	INTEGER	RO	秒	ログインタイムアウト値	データソース (XA) のインポート
		dataSourceFullJTAAUserID (5)	DisplayString	RO	—	ユーザ ID	
		dataSourceFullJTAPoolUpperBound (6)	INTEGER	RO	—	コネクションプールの数 (上限値)	
		dataSourceFullJTAPoolLowerBound (7)	INTEGER	RO	—	コネクションプールの数 (下限値)	
		dataSourceFullJTACurrentPoolSize (8)	Gauge	RO	—	コネクションプールの数 (現在値)	
		dataSourceFullJTAActiveConnectionCount (9)	Gauge	RO	—	使用中のコネクション数 (現在値)	
		dataSourceFullJTAFreeConnectionCount (10)	Gauge	RO	—	未使用のコネクション数 (現在値)	
		dataSourceFullJTAGetConnectionMaxTime (11)	Gauge	RO	ミリ秒	getConnection メソッドの実行時間 (最大値)	
		dataSourceFullJTAGetConnectionMinTime (12)	Gauge	RO	ミリ秒	getConnection メソッドの実行時間 (最小値)	
		dataSourceFullJTAGetConnectionAverageTime (13)	Gauge	RO	ミリ秒	getConnection メソッドの実行時間 (平均値※1)	
		dataSourceFullJTACreateConnectionMaxTime (14)	Gauge	RO	ミリ秒	getXAConnection メソッド実行時間 (最大値)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
dataSourceFullJTATable (21)	dataSourceFullJTAEEntry (1)	dataSourceFullJTACreateConnectionMinTime (15)	Gauge	RO	ミリ秒	getXAConnection メソッド実行時間 (最小値)	データソース (XA) のインポート
		dataSourceFullJTACreateConnectionAveTime (16)	Gauge	RO	ミリ秒	getXAConnection メソッド実行時間 (平均値*1)	
		dataSourceFullJTAGetConnectionFailedCount (17)	Counter	RO	—	getConnection メソッドの失敗回数	
		dataSourceFullJTAConnectionErrorCount (18)	Counter	RO	—	Connection で FATAL エラーが発生した回数 ConnectionEventListener の connectionErrorOccurred メソッドが呼ばれた回数	
		dataSourceFullJTASTatisticsStartTime (19)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻*2	
		dataSourceFullJTASamplingTime (20)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間*3	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

**サンプリング時間の設定方法**

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (22) resourceAdapterTable

resourceAdapterTable を次の表に示します。

表 A-22 resourceAdapterTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
resourceAdapterTable (22)	resourceAdapterEntry (1)	resourceAdapterIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	リソースアダプタの使用
		resourceAdapterFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<リソースアダプタ名>": コンテナ "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<リソースアダプタ名>": アプリケーション"	
		resourceAdapterName (3)	DisplayString	RO	—	リソースアダプタ名	
		resourceAdapterVendorName (4)	DisplayString	RO	—	リソースアダプタ提供ベンダ名	
		resourceAdapterSpecVersion (5)	DisplayString	RO	—	リソースアダプタが準拠する JCA 使用のバージョン	
		resourceAdapterEISType (6)	DisplayString	RO	—	リソースアダプタの接続先 EIS のタイプ	
		resourceAdapterVersion (7)	DisplayString	RO	—	リソースアダプタのバージョン	
		resourceAdapterConnectionFactoryInterfaceName (8)	DisplayString	RO	—	ConnectionFactory のインタフェースクラス名	
		resourceAdapterConnectionFactoryImplName (9)	DisplayString	RO	—	ConnectionFactory の実装クラス名	



テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
resourceAdapterTable (22)	resourceAdapterEntry (1)	resourceAdapterManagedConnectionFactoryImplName (10)	DisplayString	RO	—	ManagedConnectionFactory の実装クラス名	リソースアダプタの使用
		resourceAdapterConnectionInterfaceName (11)	DisplayString	RO	—	Connection のインタフェースクラス名	
		resourceAdapterConnectionImplName (12)	DisplayString	RO	—	Connection の実装クラス名	
		resourceAdapterTransactionSupport (13)	DisplayString	RO	—	トランザクションのサポートモデル <b>NoTransaction</b> : トランザクションなし <b>LocalTransaction</b> : ローカルトランザクション <b>XATransaction</b> : XA トランザクション	
		resourceAdapterConfigProperties (14)	DisplayString	RO	—	ConfigurationProperty 情報* <sup>1</sup>	
		resourceAdapterManagedConnectionFactoryCreateCount (15)	Counter	RO	—	ManagedConnectionFactory の createManagedConnection メソッドの実行回数* <sup>2</sup>	
		resourceAdapterConnectionCreateCount (16)	Counter	RO	—	ManagedConnection の getConnection メソッドの実行回数* <sup>2</sup>	
		resourceAdapterManagedConnectionFactoryCleanupCount (17)	Counter	RO	—	ManagedConnection の cleanup メソッドの実行回数* <sup>2</sup>	
		resourceAdapterManagedConnectionFactoryDestroyCount (18)	Counter	RO	—	ManagedConnection の destroy メソッドの実行回数* <sup>2</sup>	
		resourceAdapterUserId (19)	DisplayString	RO	—	ユーザ ID	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
resourceAdapterTable (22)	resourceAdapterEntry (1)	resourceAdapterPoolUpperBound (20)	INTEGER	RO	—	コネクションプールの数*2 (上限値)	リソースアダプタの使用
		resourceAdapterPoolLowerBound (21)	INTEGER	RO	—	コネクションプールの数*2 (下限値)	
		resourceAdapterCurrentPoolSize (22)	Gauge	RO	—	コネクションプールの数*2 (現在値)	
		resourceAdapterActiveConnectionCount (23)	Gauge	RO	—	使用中のコネクション数*2 (現在値)	
		resourceAdapterFreeConnectionCount (24)	Gauge	RO	—	未使用のコネクション数*2 (現在値)	
		resourceAdapterGetConnectionMaxTime (25)	Gauge	RO	ミリ秒	ConnectionManagerのallocateConnectionメソッド実行時間*3, *4 (最大値)	
		resourceAdapterGetConnectionMinTime (26)	Gauge	RO	ミリ秒	ConnectionManagerのallocateConnectionメソッド実行時間*3, *4 (最小値)	
		resourceAdapterGetConnectionAvgTime (27)	Gauge	RO	ミリ秒	ConnectionManagerのallocateConnectionメソッド実行時間*2, *5 (平均値*6)	
		resourceAdapterCreateConnectionMaxTime (28)	Gauge	RO	ミリ秒	ManagedConnectionFactoryのcreateManagedConnectionメソッド実行時間*3 (最大値)	
		resourceAdapterCreateConnectionMinTime (29)	Gauge	RO	ミリ秒	ManagedConnectionFactoryのcreateManagedConnectionメソッド実行時間*3 (最小値)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
resourceAdapterTable (22)	resourceAdapterEntry (1)	resourceAdapterCreateConnectionAverageTime (30)	Gauge	RO	ミリ秒	ManagedConnectionFactory の createManagedConnection メソッド実行時間※2 (平均値※6)	リソースアダプタの使用
		resourceAdapterGetConnectionFailedCount (31)	Counter	RO	—	allocateConnection メソッドの失敗回数※2,※5	
		resourceAdapterConnectionErrorCount (32)	Counter	RO	—	ManagedConnection で FATAL エラーが発生した回数 ConnectionEventListener の connectionErrorOccurred メソッドが呼ばれた回数※2	
		resourceAdapterStatisticsStartTime (33)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※7	
		resourceAdapterSamplingTime (34)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※8	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

出力形式は、<プロパティ名>=<プロパティ値>:<プロパティ名>=<プロパティ値>:・・・とします。プロパティ名、またはプロパティ値に"=", ":", "¥"が含まれる場合は、"¥=", "¥:", "¥¥"として表示します。

(例) プロパティ名・・・"abc" プロパティ値・・・"ab:bc=ef¥gh"の場合

abc=ab¥:bc¥=ef¥gh

注※2

ルートリソースアダプタでは 0 が表示されます。

注※3

メンバリソースアダプタでは Not Available が表示されます。

注※4

ルートリソースアダプタでは Not Available が表示されます。

注※5

メンバリソースアダプタでは 0 が表示されます。

注※6

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※7

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※8

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (23) statelessSessionBeanLocalHomeTable

statelessSessionBeanLocalHomeTable を次の表に示します。

表 A-23 statelessSessionBeanLocalHomeTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBeanLocalHomeTable (23)	statelessSessionBeanLocalHomeEntry (1)	statelessSessionBeanLocalHomeIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	Stateless Session Bean Local Home Interface の使用
		statelessSessionBeanLocalHomeFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>"	
		statelessSessionBeanLocalHomeName (3)	DisplayString	RO	—	LocalHome インタフェースクラス名	
		statelessSessionBeanLocalHomeResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		statelessSessionBeanLocalHomeResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		statelessSessionBeanLocalHomeResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値※1)	
		statelessSessionBeanLocalHomeStatisticsStartedTime (7)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBeanLocalHomeTable (23)	statelessSessionBeanLocalHomeEntry (1)	statelessSessionBeanLocalHomeSamplingTime (8)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	Stateless Session Bean Local Home Interface の使用

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

- : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (24) statelessSessionBeanLocalComponentTable

statelessSessionBeanLocalComponentTable を次の表に示します。

表 A-24 statelessSessionBeanLocalComponentTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBeanLocalComponentTable (24)	statelessSessionBeanLocalComponentTable (1)	statelessSessionBeanLocalComponentIndex (1)	INTEGER	RO	-	シーケンス番号[1, ...]	Stateless Session Bean Local Component Interface の使用
		statelessSessionBeanLocalComponentFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	-	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>"	
		statelessSessionBeanLocalComponent	DisplayString	RO	-	LocalComponent インタフェースクラス名	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBeanComponentTable (24)	statelessSessionBeanComponentTable (1)	tFullyQualifiedName (3)	DisplayString	RO	—	LocalComponent インタフェースクラス名	StatelessSessionBeanLocalComponentInterface の使用
		statelessSessionBeanComponentResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		statelessSessionBeanComponentResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		statelessSessionBeanComponentResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値※1)	
		statelessSessionBeanComponentResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最大値)	
		statelessSessionBeanComponentResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最小値)	
		statelessSessionBeanComponentResponseEjbAveTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (平均値※1)	
		statelessSessionBeanComponentStatisticsStartedTime (10)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	
		statelessSessionBeanComponentSamplingTime (11)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only  
RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (25) statefulSessionBeanLocalHomeTable

statefulSessionBeanLocalHomeTable を次の表に示します。

表 A-25 statefulSessionBeanLocalHomeTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanLocalHomeTable (25)	statefulSessionBeanLocalHomeEntry (1)	statefulSessionBeanLocalHomeIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	Stateful Session Bean Local Home Interface の使用
		statefulSessionBeanLocalHomeFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>"	
		statefulSessionBeanLocalHomeName (3)	DisplayString	RO	—	LocalHome インタフェースクラス名	
		statefulSessionBeanLocalHomeResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		statefulSessionBeanLocalHomeResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		statefulSessionBeanLocalHomeResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値*1)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanLocalHomeTable (25)	statefulSessionBeanLocalHomeEntry (1)	statefulSessionBeanLocalHomeResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最大値)	StatefulSessionBeanLocalHomeInterface の使用
		statefulSessionBeanLocalHomeResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最小値)	
		statefulSessionBeanLocalHomeResponseEjbAveTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (平均値*1)	
		statefulSessionBeanLocalHomeStatisticsStartTime (10)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻*2	
		statefulSessionBeanLocalHomeSamplingTime (11)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間*3	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

- : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (26) statefulSessionBeanLocalComponentTable

statefulSessionBeanLocalComponentTable を次の表に示します。



表 A-26 statefulSessionBeanLocalComponentTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanLocalComponentTable (26)	statefulSessionBeanLocalComponentEntry (1)	statefulSessionBeanLocalComponentIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	Stateful Session Bean Local Component Interface の使用
		statefulSessionBeanLocalComponentFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>"	
		statefulSessionBeanLocalComponentName (3)	DisplayString	RO	—	LocalComponent インタフェースクラス名	
		statefulSessionBeanLocalComponentResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		statefulSessionBeanLocalComponentResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		statefulSessionBeanLocalComponentResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値※1)	
		statefulSessionBeanLocalComponentResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最大値)	
		statefulSessionBeanLocalComponentResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最小値)	
		statefulSessionBeanLocalComponentResponseEjbAveTime	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanLocalComponentTable (26)	statefulSessionBeanLocalComponentEntry (1)	(9)	Gauge	RO	ミリ秒	EJB メソッドの実行時間 (平均値※1)	Stateful Session Bean Local Component Interface の使用
		statefulSessionBeanLocalComponentStatisticsStartTime (10)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	
		statefulSessionBeanLocalComponentSamplingTime (11)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (27) entityBeanLocalHomeTable

entityBeanLocalHomeTable を次の表に示します。

表 A-27 entityBeanLocalHomeTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
entityBeanLocalHomeTable (27)	entityBeanLocalHomeEntry (1)	entityBeanLocalHomeIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	Entity Bean Local Home Interface の使用
		entityBeanLocalHomeFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名"	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
entityBeanLocalHomeTable (27)	entityBeanLocalHomeEntry (1)	entityBeanLocalHomeFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	>:<Enterprise Bean 名>"	Entity Bean Local Home Interface の使用
		entityBeanLocalHomeName (3)	DisplayString	RO	—	LocalHome インタフェースクラス名	
		entityBeanLocalHomeResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		entityBeanLocalHomeResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		entityBeanLocalHomeResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値※1)	
		entityBeanLocalHomeResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最大値)	
		entityBeanLocalHomeResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最小値)	
		entityBeanLocalHomeResponseEjbAveTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (平均値※1)	
		entityBeanLocalHomeStatisticsStartedTime (10)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	
		entityBeanLocalHomeSamplingTime (11)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (28) entityBeanLocalComponentTable

entityBeanLocalComponentTable を次の表に示します。

表 A-28 entityBeanLocalComponentTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
entityBeanLocalComponentTable (28)	entityBeanLocalComponentEntry (1)	entityBeanLocalComponentIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	Entity Bean Local Component Interface の使用
		entityBeanLocalComponentFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>"	
		entityBeanLocalComponentName (3)	DisplayString	RO	—	LocalComponent インタフェースクラス名	
		entityBeanLocalComponentResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		entityBeanLocalComponentResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		entityBeanLocalComponentResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値※1)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
entityBeanLocalComponentTable (28)	entityBeanLocalComponentEntry (1)	entityBeanLocalComponentResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最大値)	Entity Bean Local Component Interface の使用
		entityBeanLocalComponentResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最小値)	
		entityBeanLocalComponentResponseEjbAveTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (平均値※1)	
		entityBeanLocalComponentStatisticsStartedTime (10)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	
		entityBeanLocalComponentSamplingTime (11)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

- : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (29) messageDrivenBeanTable

messageDrivenBeanTable を次の表に示します。

表 A-29 messageDrivenBeanTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
messageDrivenBeanTable (29)	messageDrivenBeanEntry (1)	messageDrivenBeanIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	Message-driven Bean の使用
		messageDrivenBeanFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>"	
		messageDrivenBeanName (3)	DisplayString	RO	—	Enterprise Bean 名	
		messageDrivenBeanEjbClassName (4)	DisplayString	RO	—	EJB クラス名	
		messageDrivenBeanTransactionType (5)	DisplayString	RO	—	トランザクションタイプ CMT または BMT	
		messageDrivenBeanDestinationType (6)	DisplayString	RO	—	デスティネーションタイプ <b>Queue</b> : Point-To-Point モデルのデスティネーション <b>Topic</b> : Publish-Subscribe モデルのデスティネーション	
		messageDrivenBeanPoolUpperBound (7)	INTEGER	RO	—	インスタンスプールの数 (上限値)	
		messageDrivenBeanCurrentPoolSize (8)	Gauge	RO	—	インスタンスプールの数 (現在値)	
		messageDrivenBeanCurrentSessionCount (9)	Gauge	RO	—	接続セッション数 (現在値)	
		messageDrivenBeanResponseEjbMaxTime	Gauge	RO	ミリ秒	EJB メソッドの実行時間 (最大値)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
messageDrivenBeanTable (29)	messageDrivenBeanEntry (1)	(10)	Gauge	RO	ミリ秒	EJB メソッドの実行時間 (最大値)	Message-driven Bean の使用
		messageDrivenBeanResponseEjbMinTime (11)	Gauge	RO	ミリ秒	EJB メソッドの実行時間 (最小値)	
		messageDrivenBeanResponseEjbAveTime (12)	Gauge	RO	ミリ秒	EJB メソッドの実行時間 (平均値※1)	
		messageDrivenBeanStatisticsStartedTime (10)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	
		messageDrivenBeanSamplingTime (11)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

- : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

### (30) queueTable

queueTable を次の表に示します。

表 A-30 queueTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
queueTable (30)	queueEntry (1)	queueIndex (1)	INTEGER	RO	-	シーケンス番号[1, ...]	なし

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
queueTable (30)	queueEntry (1)	queueFullyQualified Name (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<キュー名>"	なし
		queueName (3)	DisplayString	RO	—	キュー名	
		queueStatus (4)	DisplayString	RO	—	状態 scheduling : スケジューリング可能状態 preparing : 準備中 stopping : キュー終了処理中 closing[in] : キュー入り口閉塞中 closing[out] : キュー出口閉塞中	
		queueSharedApplication Count (5)	INTEGER	RO	—	キューを共有しているアプリケーション数	
		queueStayedRequest Count (6)	Gauge	RO	—	キューに滞留しているリクエスト数	
		queueStayedRequest Max (7)	Gauge	RO	—	キューに滞留した最大リクエスト数	
		queueLength (8)	INTEGER	RO	—	同時に登録できるリクエスト数	
		queueLookupName (9)	DisplayString	RO	—	キューが管理している登録名情報	
		queueInterfaceName (10)	DisplayString	RO	—	キューが管理しているインタフェース情報	
		queueParallelCount (11)	INTEGER	RO	—	キューが管理している同時実行数	
		queueTotalThread Count (12)	INTEGER	RO	—	キューが管理している現在の総常駐スレッド数	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別



- : 該当しない。  
RO : Read-Only

(31) statelessSessionBeanHomeMethodTable

statelessSessionBeanHomeMethodTable を次の表に示します。

表 A-31 statelessSessionBeanHomeMethodTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBeanHomeMethodTable (31)	statelessSessionBeanHomeMethodEntry (1)	statelessSessionBeanHomeMethodIndex (1)	INTEGER	RO	-	シーケンス番号[1, ...]	Stateless Session Bean Remote Home Interface Method の使用
		statelessSessionBeanHomeMethodFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	-	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>:<Home インタフェースクラス名>:<メソッド名>"	
		statelessSessionBeanHomeMethodName (3)	DisplayString	RO	-	メソッド名	
		statelessSessionBeanHomeMethodResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	Home インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		statelessSessionBeanHomeMethodResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	Home インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		statelessSessionBeanHomeMethodResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	Home インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値 ※1)	
		statelessSessionBeanHomeMethodResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	Home インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最大値)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBeanHomeMethodTable (31)	statelessSessionBeanHomeMethodEntry (1)	statelessSessionBeanHomeMethodResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	Home インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最小値)	Stateless Session Bean Remote Home Interface Method の使用
		statelessSessionBeanHomeMethodResponseEjbAveTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	Home インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (平均値 ※1)	
		statelessSessionBeanHomeMethodCallCount (10)	Counter	RO	—	メソッドの実行回数	
		statelessSessionBeanHomeMethodStatisticsStartedTime (11)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	
		statelessSessionBeanHomeMethodSamplingTime (12)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

### (32) statelessSessionBeanRemoteMethodTable

statelessSessionBeanRemoteMethodTable を次の表に示します。

表 A-32 statelessSessionBeanRemoteMethodTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBeanRemoteMethodTable (32)	statelessSessionBeanRemoteMethodEntry (1)	statelessSessionBeanRemoteMethodIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	Stateless Session Bean Remote Component Interface Method の使用
		statelessSessionBeanRemoteMethodFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>:<Remote インタフェースクラス名>:<メソッド名>"	
		statelessSessionBeanRemoteMethodName (3)	DisplayString	RO	—	メソッド名	
		statelessSessionBeanRemoteMethodResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	Remote インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		statelessSessionBeanRemoteMethodResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	Remote インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		statelessSessionBeanRemoteMethodResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	Remote インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値*1)	
		statelessSessionBeanRemoteMethodResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	Remote インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最大値)	
		statelessSessionBeanRemoteMethodResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	Remote インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最小値)	
		statelessSessionBeanRemoteMethod	Gauge	RO	ミリ秒	Remote インタフェースに対する EJB メ	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBeanRemoteMethodTable (32)	statelessSessionBeanRemoteMethodEntry (1)	ResponseEjbAverageTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	ソッドの実行時間 (平均値※1)	Stateless Session Bean Remote Component Interface Method の使用
		statelessSessionBeanRemoteMethodCallCount (10)	Counter	RO	—	メソッドの実行回数	
		statelessSessionBeanRemoteMethodStatisticsStartTime (11)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	
		statelessSessionBeanRemoteMethodSamplingTime (12)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

### (33) statelessSessionBeanLocalHomeMethodTable

statelessSessionBeanLocalHomeMethodTable を次の表に示します。

表 A-33 statelessSessionBeanLocalHomeMethodTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBean	statelessSessionBean	statelessSessionBeanLocalHomeMethodIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	Stateless Session Bean Local Home Interface

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
LocalHomeMethodTable (33)	LocalHomeMethodEntry (1)	statelessSessionBeanLocalHomeMethodFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>:<LocalHome インタフェースクラス名>:<メソッド名>"	Method の使用
		statelessSessionBeanLocalHomeMethodName (3)	DisplayString	RO	—	メソッド名	
		statelessSessionBeanLocalHomeMethodResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		statelessSessionBeanLocalHomeMethodResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		statelessSessionBeanLocalHomeMethodResponseAvgTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値※1)	
		statelessSessionBeanLocalHomeMethodResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最大値)	
		statelessSessionBeanLocalHomeMethodResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最小値)	
		statelessSessionBeanLocalHomeMethodResponseEjbAvgTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (平均値※1)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
		statelessSessionBeanLocalComponentMethodCallCount (10)	Counter	RO	—	メソッドの実行回数	
		statelessSessionBeanLocalComponentMethodStatisticsStartTime (11)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	
		statelessSessionBeanLocalComponentMethodSamplingTime (12)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

### (34) statelessSessionBeanLocalComponentMethodTable

statelessSessionBeanLocalComponentMethodTable を次の表に示します。

表 A-34 statelessSessionBeanLocalComponentMethodTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBeanLocalComponentMethodTable (34)	statelessSessionBeanLocalComponentMethodEntry (1)	statelessSessionBeanLocalComponentMethodIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	Stateless Session Bean Local Component Interface Method の使用
		statelessSessionBeanLocalComponentMethodFullyQualifiedName	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBeanLocalComponentMethodTable (34)	statelessSessionBeanLocalComponentMethodEntry (1)	(2)	DisplayString	RO	—	"<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>:<LocalComponent インタフェースクラス名>:<メソッド名>"	Stateless Session Bean Local Component Interface Method の使用
		statelessSessionBeanLocalComponentMethodName (3)	DisplayString	RO	—	メソッド名	
		statelessSessionBeanLocalComponentMethodResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		statelessSessionBeanLocalComponentMethodResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		statelessSessionBeanLocalComponentMethodResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値※1)	
		statelessSessionBeanLocalComponentMethodResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最大値)	
		statelessSessionBeanLocalComponentMethodResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最小値)	
		statelessSessionBeanLocalComponentMethodResponseEjbAveTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (平均値※1)	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statelessSessionBeanLocalComponentMethodTable (34)	statelessSessionBeanLocalComponentMethodEntry (1)	statelessSessionBeanLocalComponentMethodCallCount (10)	Counter	RO	—	メソッドの実行回数	Stateless Session Bean Local Component Interface Method の使用
		statelessSessionBeanLocalComponentMethodStatisticsStartTime (11)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	
		statelessSessionBeanLocalComponentMethodSamplingTime (12)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

### (35) statefulSessionBeanHomeMethodTable

statefulSessionBeanHomeMethodTable を次の表に示します。

表 A-35 statefulSessionBeanHomeMethodTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanHomeMethodTable (35)	statefulSessionBeanHomeMethodEntry (1)	statefulSessionBeanHomeMethodIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	Stateful Session Bean Remote Home Interface Method の使用
		statefulSessionBeanHomeMethodFullyQualifiedName	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名	



テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanHomeMethodTable (35)	statefulSessionBeanHomeMethodEntry (1)	(2)	DisplayString	RO	—	"<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>:<Home インタフェースクラス名>:<メソッド名>"	Stateful Session Bean Remote Home Interface Method の使用
		statefulSessionBeanHomeMethodName (3)	DisplayString	RO	—	メソッド名	
		statefulSessionBeanHomeMethodResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	Home インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間(最大値)	
		statefulSessionBeanHomeMethodResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	Home インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間(最小値)	
		statefulSessionBeanHomeMethodResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	Home インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間(平均値※1)	
		statefulSessionBeanHomeMethodResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	Home インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間(最大値)	
		statefulSessionBeanHomeMethodResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	Home インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間(最小値)	
		statefulSessionBeanHomeMethodResponseEjbAveTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	Home インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間(平均値※1)	
		statefulSessionBeanHomeMethodCallCount (10)	Counter	RO	—	メソッドの実行回数	
		statefulSessionBeanHomeMethodStatisticsStartedTime	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBean HomeMethodTable (35)	statefulSessionBean HomeMethodEntry (1)	(11)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻 <sup>※2</sup>	Stateful Session Bean Remote Interface Method の使用
		statefulSessionBeanHomeMethodSamplingTime (12)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間 <sup>※3</sup>	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

- : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

### (36) statefulSessionBeanRemoteMethodTable

statefulSessionBeanRemoteMethodTable を次の表に示します。

表 A-36 statefulSessionBeanRemoteMethodTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBean RemoteMethodTable (36)	statefulSessionBean RemoteMethodEntry (1)	statefulSessionBeanRemoteMethodIndex (1)	INTEGER	RO	-	シーケンス番号[1, ...]	Stateful Session Bean Remote Component Interface Method の使用
		statefulSessionBeanRemoteMethodFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	-	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>:<Remote インタフェースクラス名>:<メソッド名>"	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanRemoteMethodTable (36)	statefulSessionBeanRemoteMethodEntry (1)	statefulSessionBeanRemoteMethodName (3)	DisplayString	RO	—	メソッド名	Stateful Session Bean Remote Component Interface Method の使用
		statefulSessionBeanRemoteMethodResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	Remote インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		statefulSessionBeanRemoteMethodResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	Remote インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		statefulSessionBeanRemoteMethodResponseAveTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	Remote インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値*1)	
		statefulSessionBeanRemoteMethodResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	Remote インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最大値)	
		statefulSessionBeanRemoteMethodResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	Remote インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最小値)	
		statefulSessionBeanRemoteMethodResponseEjbAveTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	Remote インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (平均値*1)	
		statefulSessionBeanRemoteMethodCallCount (10)	Counter	RO	—	メソッドの実行回数	
		statefulSessionBeanRemoteMethodStatisticsStartTime (11)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻*2	
		statefulSessionBeanRemoteMethodSamplingTime	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間*3	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanRemoteMethodTable (36)	statefulSessionBeanRemoteMethodEntry (1)	(12)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間 <sup>※3</sup>	Stateful Session Bean Remote Component Interface Method の使用

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

### (37) statefulSessionBeanLocalHomeMethodTable

statefulSessionBeanLocalHomeMethodTable を次の表に示します。

表 A-37 statefulSessionBeanLocalHomeMethodTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanLocalHomeMethodTable (37)	statefulSessionBeanLocalHomeMethodEntry (1)	statefulSessionBeanLocalHomeMethodIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	Stateful Session Bean Local Home Interface Method の使用
		statefulSessionBeanLocalHomeMethodFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>:<LocalHome インタフェースクラス名>:<メソッド名>"	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanLocalHomeMethodTable (37)	statefulSessionBeanLocalHomeMethodEntry (1)	statefulSessionBeanLocalHomeMethodName (3)	DisplayString	RO	—	メソッド名	Stateful Session Bean Local Home Interface Method の使用
		statefulSessionBeanLocalHomeMethodResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		statefulSessionBeanLocalHomeMethodResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		statefulSessionBeanLocalHomeMethodResponseAverageTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値* <sup>1</sup> )	
		statefulSessionBeanLocalHomeMethodResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最大値)	
		statefulSessionBeanLocalHomeMethodResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最小値)	
		statefulSessionBeanLocalHomeMethodResponseEjbAverageTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalHome インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (平均値* <sup>1</sup> )	
		statefulSessionBeanLocalHomeMethodCallCount (10)	Counter	RO	—	メソッドの実行回数	
		statefulSessionBeanLocalHomeMethodStatisticsStartTime (11)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻* <sup>2</sup>	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanLocalHomeMethodTable (37)	statefulSessionBeanLocalHomeMethodEntry (1)	statefulSessionBeanLocalHomeMethodSamplingTime (12)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	Stateful Session Bean Local Home Interface Method の使用

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

### (38) statefulSessionBeanLocalComponentMethodTable

statefulSessionBeanLocalComponentMethodTable を次の表に示します。

表 A-38 statefulSessionBeanLocalComponentMethodTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanLocalComponentMethodTable (38)	statefulSessionBeanLocalComponentMethodEntry (1)	statefulSessionBeanLocalComponentMethodIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, ...]	Stateful Session Bean Local Component Interface Method の使用
		statefulSessionBeanLocalComponentMethodFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名 "<論理サーバ名>:<J2EE アプリケーション名>:<EJB アプリケーション名>:<Enterprise Bean 名>:<LocalComponent インタフェース	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanLocalComponentMethodTable (38)	statefulSessionBeanLocalComponentMethodEntry (1)	statefulSessionBeanLocalComponentMethodFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	クラス名>:<メソッド名>"	Stateful Session Bean Local Component Interface Method の使用
		statefulSessionBeanLocalComponentMethodName (3)	DisplayString	RO	—	メソッド名	
		statefulSessionBeanLocalComponentMethodResponseMaxTime (4)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最大値)	
		statefulSessionBeanLocalComponentMethodResponseMinTime (5)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (最小値)	
		statefulSessionBeanLocalComponentMethodResponseAverageTime (6)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する呼び出しのレスポンス時間 (平均値※1)	
		statefulSessionBeanLocalComponentMethodResponseEjbMaxTime (7)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最大値)	
		statefulSessionBeanLocalComponentMethodResponseEjbMinTime (8)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (最小値)	
		statefulSessionBeanLocalComponentMethodResponseEjbAverageTime (9)	Gauge	RO	ミリ秒	LocalComponent インタフェースに対する EJB メソッドの実行時間 (平均値※1)	
		statefulSessionBeanLocalComponentMethodCallCount (10)	Counter	RO	—	メソッドの実行回数	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
statefulSessionBeanLocalComponentMethodTable (38)	statefulSessionBeanLocalComponentMethodEntry (1)	statefulSessionBeanLocalComponentMethodStatisticsStartedTime (11)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※2	Stateful Session Bean Local Component Interface Method の使用
		statefulSessionBeanLocalComponentMethodSamplingTime (12)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※3	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

- : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※3

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

### (39) webContainerTable

webContainerTable を次の表に示します。

表 A-39 webContainerTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
webContainerTable (39)	webContainerEntry (1)	webContainerIndex (1)	INTEGER	RO	-	シーケンス番号[1, ...]	なし
		webContainerFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	-	インスタンスを一意に識別する完全修飾名<論理サーバ名>	
		webContainerServerName (3)	DisplayString	RO	-	Web コンテナのサーバ名	



テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
webContainerTable (39)	webContainerEntry (1)	webContainerStartedTime (4)	INTEGER	RO	秒	Web コンテナの起動時刻※1	なし
		webContainerStatisticsStartedTime (5)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※1	
		webContainerSamplingTime (6)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※2	
		webContainerActiveThreadCountUpperBound (7)	INTEGER	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数の上限値	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Web アプリケーション (WAR) の使用</li> <li>• 同時実行スレッド数制御機能の使用</li> <li>• 同時実行スレッド数を設定していない Web アプリケーションが存在</li> </ul>
		webContainerCurrentThreadCountUpperBound (8)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数の現在上限値※3	
		webContainerActiveThreadCount (9)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数の現在値	
		webContainerActiveThreadCountHighWaterMark (10)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数の最大値	
		webContainerActiveThreadCountLowWaterMark (11)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数の最小値	
		webContainerActiveThreadCountAverage (12)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数の平均値※4	
		webContainerActiveThreadCountPeak (13)	Gauge	RO	—	リクエスト処理中のスレッド数のピーク値※5	
		webContainerWaitingRequestCountUpperBound (14)	INTEGER	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数の上限値	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
webContainerTable (39)	webContainerEntry (1)	webContainerWaitingRequestCount (15)	Gauge	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数の現在値	<ul style="list-style-type: none"> <li>Web アプリケーション (WAR) の使用</li> <li>同時実行スレッド数制御機能の使用</li> <li>同時実行スレッド数を設定していない Web アプリケーションが存在</li> </ul>
		webContainerWaitingRequestCountHighWaterMark (16)	Gauge	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数の最大値	
		webContainerWaitingRequestCountLowWaterMark (17)	Gauge	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数の最小値	
		webContainerWaitingRequestCountAverage (18)	Gauge	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数の平均値* 4	
		webContainerWaitingRequestCountPeak (19)	Gauge	RO	—	稼働スレッド数の上限値の設定によって、実行を待たされているリクエスト数のピーク値 *5	
		webContainerOverflowRequestCount (20)	Counter	RO	—	デフォルトの実行待ちリクエストの上限値の設定によって、エラーを返したリクエスト数の累積値	

(凡例)

R/W : Read-Only/Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※2

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

注※3

現在の同時実行可能なスレッド数の上限

注※4

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※5

値の取得要求時点でのピーク値（記録されてからサンプリング時間の有効期間を持つ最大値）

(40) inprocHttpSvrTable

inprocHttpSvrTable を次の表に示します。

表 A-40 inprocHttpSvrTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
inprocHttpSvrTable (40)	inprocHttpSvrEntry (1)	inprocHttpSvrIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	インプロセス HTTP サーバの使用
		inprocHttpSvrFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名"<論理サーバ名>"	
		inprocHttpSvrPortNumber (3)	INTEGER	RO	—	インプロセス HTTP サーバのポート番号	
		inprocHttpSvrBackLogUpperBound (4)	INTEGER	RO	—	通信ソケットのバックログ	
		inprocHttpSvrThreadCount (5)	Gauge	RO	—	リクエスト処理用のスレッド数合計の現在値	
		inprocHttpSvrThreadCountUpperBound (6)	INTEGER	RO	—	リクエスト処理用のスレッド数合計の上限值	
		inprocHttpSvrThreadCountLowerBound (7)	INTEGER	RO	—	リクエスト処理用のスレッド数合計の下限值	
		inprocHttpSvrThreadCountHighWaterMark (8)	Gauge	RO	—	リクエスト処理用のスレッド数合計の最大値	
		inprocHttpSvrThreadCountLowWaterMark (9)	Gauge	RO	—	リクエスト処理用のスレッド数合計の最小値	
		inprocHttpSvrThreadCountAverage (10)	Gauge	RO	—	リクエスト処理用のスレッド数合計の平均値※1	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
inprocHttpSvrTable (40)	inprocHttpSvrEntry (1)	inprocHttpSvrThreadCountPeak (11)	Gauge	RO	—	リクエスト処理用のスレッド数合計のピーク値※2	インプロセス HTTP サーバの使用
		inprocHttpSvrActiveThreadCount (12)	Gauge	RO	—	稼働中スレッド数の現在値	
		inprocHttpSvrActiveThreadCountUpperBound (13)	INTEGER	RO	—	稼働中スレッド数の上限値	
		inprocHttpSvrActiveThreadCountHighWaterMark (14)	Gauge	RO	—	稼働中スレッド数の最大値	<ul style="list-style-type: none"> <li>インプロセス HTTP サーバの使用</li> <li>同時実行スレッド数制御機能の不使用</li> </ul>
		inprocHttpSvrActiveThreadCountLowWaterMark (15)	Gauge	RO	—	稼働中スレッド数の最小値	
		inprocHttpSvrActiveThreadCountAverage (16)	Gauge	RO	—	稼働中スレッドの平均値※1	
		inprocHttpSvrActiveThreadCountPeak (17)	Gauge	RO	—	稼働中スレッドのピーク値※2	
		inprocHttpSvrPoolingThreadCount (18)	Gauge	RO	—	プーリングスレッド数の現在値	
		inprocHttpSvrPoolingThreadCountUpperBound (19)	INTEGER	RO	—	プーリングスレッド数の上限値	
		inprocHttpSvrPoolingThreadCountLowerBound (20)	INTEGER	RO	—	プーリングスレッド数の下限値	
		inprocHttpSvrPoolingThreadCountHighWaterMark (21)	Gauge	RO	—	プーリングスレッド数の最大値	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
inprocHttpSvrTable (40)	inprocHttpSvrEntry (1)	inprocHttpSvrPoolingThreadCountLowWaterMark (22)	Gauge	RO	—	プーリングスレッド数の最小値	インプロセス HTTP サーバの使用
		inprocHttpSvrPoolingThreadCountAverage (23)	Gauge	RO	—	プーリングスレッド数の平均値※1	
		inprocHttpSvrPoolingThreadCountPeak (24)	Gauge	RO	—	プーリングスレッド数のピーク値※2	
		inprocHttpSvrConnectionCount(25)	Gauge	RO	—	接続数数の現在値	
		inprocHttpSvrConnectionCountUpperBound (26)	INTEGER	RO	—	接続数値の上限値	
		inprocHttpSvrConnectionCountHighWaterMark (27)	Gauge	RO	—	接続数数の最大値	
		inprocHttpSvrConnectionCountLowWaterMark (28)	Gauge	RO	—	接続数数の最小値	
		inprocHttpSvrConnectionCountAverage (29)	Gauge	RO	—	接続数数の平均値※1	
		inprocHttpSvrConnectionCountPeak (30)	Gauge	RO	—	接続数数のピーク値※2	
		inprocHttpSvrPersistentConnectionCount (31)	Gauge	RO	—	Persistent 接続数数の現在値	
		inprocHttpSvrPersistentConnectionCountUpperBound (32)	INTEGER	RO	—	Persistent 接続数数の上限値	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
inprocHttpSvrTable (40)	inprocHttpSvrEntry (1)	inprocHttpSvrPersistentConnectionCountHighWaterMark (33)	Gauge	RO	—	Persistent コネクション数の最大値	インプロセス HTTP サーバの使用
		inprocHttpSvrPersistentConnectionCountLowWaterMark (34)	Gauge	RO	—	Persistent コネクション数の最小値	
		inprocHttpSvrPersistentConnectionCountAverage (35)	Gauge	RO	—	Persistent コネクション数の平均値※1	
		inprocHttpSvrPersistentConnectionCountPeak (36)	Gauge	RO	—	Persistent コネクション数のピーク値※2	
		inprocHttpSvrPersistentConnectionProcessedRequestCountUpperBound (37)	INTEGER	RO	—	Persistent コネクションが切断されるまでに処理したリクエスト数の上限値	
		inprocHttpSvrPersistentConnectionProcessedRequestCountMax (38)	Gauge	RO	—	Persistent コネクションが切断されるまでに処理したリクエスト数の最大値	
		inprocHttpSvrPersistentConnectionProcessedRequestCountMin (39)	Gauge	RO	—	Persistent コネクションが切断されるまでに処理したリクエスト数の最小値	
		inprocHttpSvrPersistentConnectionProcessedRequestCountAve (40)	Gauge	RO	—	Persistent コネクションが切断されるまでに処理したリクエスト数の平均値※1	
		inprocHttpSvrPersistentConnectionProcessedRequestCountPeak (41)	Gauge	RO	—	Persistent コネクションが切断されるまでに処理したリクエスト数のピーク値※2	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
inprocHttpSvrTable (40)	inprocHttpSvrEntry (1)	inprocHttpSvrPersistentConnectionRequestWaitingTimeUpperBound (42)	INTEGER	RO	ミリ秒	Persistent コネクションで TCP コネクションを持続した状態でのリクエスト待ち時間の上限値	インプロセス HTTP サーバの使用
		inprocHttpSvrPersistentConnectionRequestWaitingTimeMaxTime (43)	Gauge	RO	ミリ秒	Persistent コネクションで TCP コネクションを持続した状態でのリクエスト待ち時間の最大値	
		inprocHttpSvrPersistentConnectionRequestWaitingTimeMinTime (44)	Gauge	RO	ミリ秒	Persistent コネクションで TCP コネクションを持続した状態でのリクエスト待ち時間の最小値	
		inprocHttpSvrPersistentConnectionRequestWaitingTimeAveTime (45)	Gauge	RO	ミリ秒	Persistent コネクションで TCP コネクションを持続した状態でのリクエスト待ち時間の平均値※1	
		inprocHttpSvrPersistentConnectionRequestWaitingTimePeak (46)	Gauge	RO	ミリ秒	Persistent コネクションで TCP コネクションを持続した状態でのリクエスト待ち時間のピーク値※2	
		inprocHttpSvrWaitingRequestCount (47)	Gauge	RO	—	同時実行スレッド数を超え、Web コンテナ単位の実行待ちとなったリクエスト数の現在値	
		inprocHttpSvrWaitingRequestCountHighWaterMark (48)	Gauge	RO	—	同時実行スレッド数を超え、Web コンテナ単位の実行待ちとなったリクエスト数の最大値	
		inprocHttpSvrWaitingRequestCountLowWaterMark (49)	Gauge	RO	—	同時実行スレッド数を超え、Web コンテナ単位の実行待ちとなったリクエスト数の最小値	

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
inprocHttpSvrTable (40)	inprocHttpSvrEntry (1)	inprocHttpSvrWaitingRequestCountAverage (50)	Gauge	RO	—	同時実行スレッド数を超え、Web コンテナ単位の実行待ちとなったリクエスト数の平均値※1	<ul style="list-style-type: none"> <li>インプロセス HTTP サーバの使用</li> <li>同時実行スレッド数制御機能の不使用</li> </ul>
		inprocHttpSvrWaitingRequestCountPeak (51)	Gauge	RO	—	同時実行スレッド数を超え、Web コンテナ単位の実行待ちとなったリクエスト数のピーク値※2	
		inprocHttpSvrRejectionRequestCount (52)	Counter	RO	—	同時接続数制御機能によってアクセスを拒否されたリクエスト数の累積値	インプロセス HTTP サーバの使用
		inprocHttpSvrStatisticsStartTime (53)	INTEGER	RO	秒	統計開始時刻※3	
		inprocHttpSvrSamplingTime (54)	INTEGER	RW	秒	統計のサンプリング時間※4	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

RW : Read-Write

注※1

値の取得要求時刻から過去サンプリング時間の平均値

注※2

値の取得要求時点でのピーク値 (記録されてからサンプリング時間の有効期間を持つ最大値)

注※3

00:00 Jan. 1, 1970 UTC からの経過秒数

注※4

サンプリング時間の設定方法

0 以下の値が指定された場合は、統計が停止されます。1~9 の値を指定した場合は、サンプリング時間がデフォルト (10 秒) に設定されて、統計が開始されます。10 以上の値を指定した場合は、指定した値をサンプリング時間として、統計が開始されます。

## (41) queueAppTable

queueAppTable を次の表に示します。



表 A-41 queueAppTable

テーブル名称 (OID)	エントリ名称 (OID)	メトリック名称 (OID)	TYPE	R/W	単位	説明	前提条件
queueAppTable (41)	queueAppEntry (1)	queueAppIndex (1)	INTEGER	RO	—	シーケンス番号[1, …]	なし
		queueAppFullyQualifiedName (2)	DisplayString	RO	—	インスタンスを一意に識別する完全修飾名"<論理CTMサーバ名>:<キュー名>:<論理J2EEサーバ名>"	
		queueAppQueueName (3)	DisplayString	RO	—	キュー名	
		queueAppJ2EENAME (4)	DisplayString	RO	—	J2EE 実サーバ名	
		queueAppStartParallelCount (5)	INTEGER	RO	—	J2EE アプリケーション開始時の同時実行数	
		queueAppResidentThreadCount (6)	INTEGER	RO	—	J2EE アプリケーションに対する現在の常駐スレッド数	

(凡例)

R/W : Read-Only / Read-Write 種別

— : 該当しない。

RO : Read-Only

## 付録 B Web アプリケーション用 DD (web.xml)

### 付録 B.1 拡張子と MIME タイプの対応づけ

web.xml に mime-mapping タグで指定する拡張子と MIME タイプの対応づけのデフォルト値を表 B-1 に示します。

表 B-1 拡張子と MIME タイプの対応づけ

拡張子	MIME タイプ
abs	audio/x-mpeg
ai	application/postscript
aif	audio/x-aiff
aifc	audio/x-aiff
aiff	audio/x-aiff
aim	application/x-aim
art	image/x-jg
asf	video/x-ms-asf
asx	video/x-ms-asf
au	audio/basic
avi	video/x-msvideo
avx	video/x-rad-screenplay
bcpio	application/x-bcpio
bin	application/octet-stream
bmp	image/bmp
body	text/html
cdf	application/x-cdf
cer	application/x-x509-ca-cert
class	application/java
cpio	application/x-cpio
csh	application/x-csh
css	text/css
dib	image/bmp
doc	application/msword
dtd	text/plain
dv	video/x-dv

拡張子	MIME タイプ
dvi	application/x-dvi
eps	application/postscript
etx	text/x-setext
exe	application/octet-stream
gif	image/gif
gtar	application/x-gtar
gz	application/x-gzip
hdf	application/x-hdf
hqx	application/mac-binhex40
htc	text/x-component
htm	text/html
html	text/html
ief	image/ief
jad	text/vnd.sun.j2me.app-descriptor
jar	application/octet-stream
java	text/plain
jnlp	application/x-java-jnlp-file
jpe	image/jpeg
jpeg	image/jpeg
jpg	image/jpeg
js	text/javascript
kar	audio/x-midi
latex	application/x-latex
m3u	audio/x-mpegurl
mac	image/x-macpaint
man	application/x-troff-man
me	application/x-troff-me
mid	audio/x-midi
midi	audio/x-midi
mif	application/x-mif
mov	video/quicktime

拡張子	MIME タイプ
movie	video/x-sgi-movie
mp1	audio/x-mpeg
mp2	audio/x-mpeg
mp3	audio/x-mpeg
mpa	audio/x-mpeg
mpe	video/mpeg
mpeg	video/mpeg
mpega	audio/x-mpeg
mpg	video/mpeg
mpv2	video/mpeg2
ms	application/x-wais-source
nc	application/x-netcdf
oda	application/oda
pbm	image/x-portable-bitmap
pct	image/pict
pdf	application/pdf
pgm	image/x-portable-graymap
pic	image/pict
pict	image/pict
pls	audio/x-scpls
png	image/png
pnm	image/x-portable-anymap
pnt	image/x-macpaint
ppm	image/x-portable-pixmap
ps	application/postscript
psd	image/x-photoshop
qt	video/quicktime
qti	image/x-quicktime
qtif	image/x-quicktime
ras	image/x-cmu-raster
rgb	image/x-rgb

拡張子	MIME タイプ
rm	application/vnd.rn-realmedia
roff	application/x-troff
rtf	application/rtf
rtx	text/richtext
sh	application/x-sh
shar	application/x-shar
smf	audio/x-midi
snd	audio/basic
src	application/x-wais-source
sv4cpio	application/x-sv4cpio
sv4crc	application/x-sv4crc
swf	application/x-shockwave-flash
t	application/x-troff
tar	application/x-tar
tcl	application/x-tcl
tex	application/x-tex
texi	application/x-texinfo
texinfo	application/x-texinfo
tif	image/tiff
tiff	image/tiff
tr	application/x-troff
tsv	text/tab-separated-values
txt	text/plain
ulw	audio/basic
ustar	application/x-ustar
xbm	image/x-xbitmap
xpm	image/x-xpixmap
xwd	image/x-xwindowdump
wav	audio/x-wav
wbmp	image/vnd.wap.wbmp
wml	text/vnd.wap.wml

拡張子	MIME タイプ
wmlc	application/vnd.wap.wmlc
wmls	text/vnd.wap.wmlscript
wmlscriptc	application/vnd.wap.wmlscriptc
wrl	x-world/x-vrml
Z	application/x-compress
z	application/x-compress
zip	application/zip

## 付録 C 論理サーバのコンフィグレーションに指定できるパラメタ (互換用)

ここでは、論理サーバのコンフィグレーションに指定できるパラメタのうち、互換用のパラメタについて説明します。

互換用のパラメタがあるのは、次のパラメタです。

- 各論理サーバ共通で指定できるパラメタ
- 論理 Web サーバで指定できるパラメタ
- 論理 J2EE サーバで指定できるパラメタ
- 論理 SFO サーバで指定できるパラメタ

### ポイント

ここで説明するパラメタは互換用です。新しく定義する項目については、推奨のパラメタを使用することをお勧めします。推奨のパラメタについては、「4.11 システムの構成パターンと定義する論理サーバ」を参照してください。なお、推奨のパラメタと互換用のパラメタを両方指定した場合、推奨のパラメタが有効になります。

### 付録 C.1 各論理サーバ共通で指定できるパラメタ (互換用)

ここでは、次に示す論理サーバで共通に指定できるパラメタについて説明します。

- 論理 Web サーバ
- 論理 J2EE サーバ
- 論理パフォーマンスストレージャ
- 論理 SFO サーバ
- 論理 CTM ドメインマネージャ
- 論理 CTM
- 論理スマートエージェント

各論理サーバに共通で指定できる互換用のパラメタについて、次の表に示します。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「推奨の param-name 指定値」とは、互換用のパラメタに対応する、推奨のパラメタです。

表 C-1 各論理サーバ共通で指定できるパラメタ (互換用)

param-name 指定値	param-value 指定値	省略値	推奨の param-name 指定値
user.env.variable.m	サーバ起動時の環境変数の名称および値を、「変数名=値」の形式で指定します。*	なし	user.env.variable

注※

値を複数指定する際は、複数の<param-value>で指定します。

また、パラメタを有効にする場合は、文字列の先頭に'.'を付加して指定します。無効にしたい場合は、文字列の先頭に'#'を付加して指定します。

(例)

```
<param-name>user.env.variable.m</param-name>
```

```
<param-value>.AAA=XXX</param-value>
<param-value>#BBB=XXX</param-value>
```

## 付録 C.2 論理 Web サーバで指定できるパラメタ (互換用)

論理 Web サーバに共通で指定できる互換用のパラメタについて、次の表に示します。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「推奨の param-name 指定値」とは、互換用のパラメタに対応する、推奨のパラメタです。

表 C-2 論理 Web サーバで指定できるパラメタ (互換用)

param-name 指定値	param-value 指定値	省略値	推奨の param-name 指定値
JkGatewayHost.value	ゲートウェイのホスト名を 255 文字以内で指定します。	なし	JkGatewayHost
JkGatewayPort.value	ゲートウェイのポート番号を 1~65535 の範囲で指定します。	なし	JkGatewayPort
Listen.host.value	一つのマシンに複数のアドレスが割り当てられている場合に、Web サーバを特定のアドレスに割り当てるかどうかを指定します。 true：割り当てます。 false：割り当てません。	false	Listen
Port	Web ブラウザからの要求を受け付けるサーバのポート番号を 1~65535 の範囲で指定します。	80	Listen
urlmap.m	リダイレクタが J2EE サーバにリクエストを振り分ける際の振り分け対象 URL のパターンを指定します。* urlmap.m には、mod_jk.conf ファイルの JkMount キーで指定した URL を指定できます。	/* (すべてのリクエストが対象)	JkMount
worker.cachesize	リダイレクタで再利用するワーカのコネクション数を 1~2147483647 の範囲で指定します。	64	worker.<ワーカ名>.cachesize
worker.receive_timeout	リダイレクタで再利用するワーカのコネクションの通信タイムアウト値を 0~3600 の範囲 (単位：秒) で指定します。	3600	worker.<ワーカ名>.receive_timeout

### 注※

値を複数指定する際は、複数の<param-value>で指定します。

また、パラメタを有効にする場合は、文字列の先頭に'.'を付加して指定します。無効にしたい場合は、文字列の先頭に'#'を付加して指定します。

(例)

```
<param-name>urlmap.m</param-name>
<param-value>.ssss</param-value>
<param-value>#rrrr</param-value>
```



### 付録 C.3 論理 J2EE サーバで指定できるパラメタ (互換用)

論理 J2EE サーバに共通で指定できる互換用のパラメタについて、次の表に示します。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「推奨の param-name 指定値」とは、互換用のパラメタに対応する、推奨のパラメタです。

表 C-3 論理 J2EE サーバで指定できるパラメタ (互換用) (よく使うキー)

param-name 指定値	内容	指定可能値	省略値	VR
mngagent.vbroker.se.iiop_tp.host.value	J2EE コンテナの運用監視エージェントのホストを固定するかどうかを指定します。次のどちらかを指定します。 true : 固定します。 false : 固定しません。	次のどれかを指定します。 • true • false	false	06-50 07-00
mngagent.vbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port.value	J2EE コンテナの運用監視エージェントのポート番号を 0~65535 の範囲で指定します。0 は「自動」を表します。	0~65535 の整数で指定します。	0	06-50 07-00

表 C-4 論理 J2EE サーバで指定できるパラメタ (互換用)

param-name 指定値	param-value 指定値	省略値	推奨の param-name 指定値
add.jvm.arg.m	拡張起動パラメタを設定します。JavaVM を起動するときに指定できる JavaVM のオプションを指定します。*1	なし	add.jvm.arg
ejbserver.manager.jp1event.enabled	JP1 イベント発行機能を有効にするかどうかを指定します。 true : 有効にします。 false : 無効にします。	false	ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.enabled
ejbserver.rmi.naming.host.value	マルチホームドホスト環境で、J2EE サーバが使用する RMI レジストリや MBean サーバのホストを指定します。 true : 「運用管理ドメインの構成定義」で定義したホストのネットワーク参照ができるホスト名または IP アドレスが設定されます。 false : ホスト名または IP アドレスを設定しません。 etc : ループバックアドレス (localhost) を設定します。	false	ejbserver.rmi.naming.host

param-name 指定値	param-value 指定値	省略値	推奨の param-name 指定値
ex.param.m	J2EE サーバの拡張パラメタを J2EE サーバで使用する任意のオプション※1 で指定します。	なし	ex.param
ex.properties.m	JavaVM のシステムプロパティを指定します。 ※1	なし	ex.properties
http	管理用サーバ (簡易 Web サーバ) のポート番号を 1~65535 の範囲で指定します。	8080	ejbserver.http.port
inprocess.ns.port	インプロセスのネーミングサービス用のポート番号を 1~65535 の範囲で指定します。	900	ejbserver.naming.startupMode, ejbserver.naming.host, ejbserver.naming.port
inprocess.ns.retryCount	インプロセスのネーミングサービス起動完了待ちリトライ回数を 0~2147483647 の範囲で指定します。	9	ejbserver.naming.startupRetryCount
inprocess.ns.waitTime	インプロセスのネーミングサービス起動完了待ち時間を 0~2147483647 の範囲 (単位: 秒) で指定します。	1	ejbserver.naming.startupWaitTime
jndi.rr.ns.list	ラウンドロビン検索のグループ名称とそのメンバを指定します。グループ名=メンバ名 1[;メンバ名 2]※2  注意 メンバ名には CTM, J2EE サーバ, ネーミングサービスの論理サーバ名を指定します。	なし	ejbserver.jndi.naming.service.group.list
jvm.ms.size	JavaVM のメモリ使用量の初期サイズを 0~9999999999 の範囲 (単位: メガバイト) で指定します。  jvm.ms.size ≤ jvm.mx.size の関係が成り立つ値を設定してください。	256	add.jvm.arg
jvm.mx.size	JavaVM のメモリ使用量の最大サイズを 0~9999999999 の範囲 (単位: メガバイト) で指定します。  jvm.ms.size ≤ jvm.mx.size の関係が成り立つ値を設定してください。	512	add.jvm.arg
LogFile.Console.filenum	コンソールログのファイル面数を指定します。指定できる値は, 1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.ConsoleLogFile.filenum
LogFile.Console.filesize	コンソールログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は, 4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.ConsoleLogFile.filesize

param-name 指定値	param-value 指定値	省略値	推奨の param-name 指定値
LogFile.EJBContainer.filenum	EJB コンテナ保守ログのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.EJBContainerLogFile.filenum
LogFile.EJBContainer.filesize	EJB コンテナ保守ログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.EJBContainerLogFile.filesize
LogFile.Exception.filenum	例外ログのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.ExceptionLogFile.filenum
LogFile.Exception.filesize	例外ログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.ExceptionLogFile.filesize
LogFile.Maintenance.filenum	保守ログのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	4	ejbserver.logger.channels.define.MaintenanceLogFile.filenum
LogFile.Maintenance.filesize	保守ログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	16777216	ejbserver.logger.channels.define.MaintenanceLogFile.filesize
LogFile.Message.filenum	メッセージログのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.MessageLogFile.filenum
LogFile.Message.filesize	メッセージログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.MessageLogFile.filesize
LogFile.UserErr.filenum	ユーザエラーログのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.UserErrLogFile.filenum
LogFile.UserErr.filesize	ユーザエラーログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.UserErrLogFile.filesize
LogFile.UserOut.filenum	ユーザ出力ログのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.UserOutLogFile.filenum

param-name 指定値	param-value 指定値	省略値	推奨の param-name 指定値
LogFile.UserOut.filesize	ユーザ出力ログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.UserOutLogFile.filesize
LogFile.WebAccess.filenum	Web コンテナトレースログのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	16	ejbserver.logger.channels.define.WebAccessLogFile.filenum
LogFile.WebAccess.filesize	Web コンテナトレースログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	4194304	ejbserver.logger.channels.define.WebAccessLogFile.filesize
LogFile.WebContainer.filenum	Web コンテナ保守ログのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.WebContainerLogFile.filenum
LogFile.WebContainer.filesize	Web コンテナ保守ログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.WebContainerLogFile.filesize
LogFile.WebServlet.filenum	Web サーブレットログのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	4	ejbserver.logger.channels.define.WebServletLogFile.filenum
LogFile.WebServlet.filesize	Web サーブレットログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	4194304	ejbserver.logger.channels.define.WebServletLogFile.filesize
loglevel	ログの出力レベルを指定します。 Error : 通常運用 Error,Warning : 通常運用 (verbose) Error,Warning,Information : テスト時 Error,Warning,Information,Debug : 障害調査	Error	ejbserver.logger.enabled.*
manager.mevent.sender.bind.host.value	Management イベント発行機能のローカルアドレスを固定するかどうかを指定します。 true : 固定します。 false : 固定しません。	false	manager.mevent.sender.bind.host
mngagent.connector.host.value	J2EE コンテナの運用監視エージェントのホストを固定するかどうかを指定します。 true : 固定します。 false : 固定しません。	false	mngagent.connector.host

param-name 指定値	param-value 指定値	省略値	推奨の param-name 指定値
mngagent.connector.port.value	J2EE コンテナの運用監視エージェントのポート番号を 0~65535 の範囲で指定します。 0 は「自動」を表します。	0 (自動)	mngagent.connector.port
mngagent.vbroker.se.iiop_tp.host.value	J2EE コンテナの運用監視エージェントのホストを固定するかどうかを指定します。 true : 固定します。 false : 固定しません。	false	mngagent.connector.host
mngagent.vbroker.se.iiop_tp.p.scm.iiop_tp.listener.port.value	J2EE コンテナの運用監視エージェントのポート番号を 0~65535 の範囲で指定します。 0 は「自動」を表します。	0 (自動)	mngagent.connector.port
vbroker.se.iiop_tp.host.value	EJB コンテナでのホストを固定するかどうかを指定します。 true : 固定します。 false : 固定しません。 etc : ループバックアドレス (localhost) に対して接続を受け付けます。	false	vbroker.se.iiop_tp.host
WatchFile.ConnectionPool.filenum	コネクションプールの監視結果出力ファイルのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.ConnectionPoolWatchLogFile.filenum
WatchFile.ConnectionPool.filesize	コネクションプールの監視結果出力ファイルのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.ConnectionPoolWatchLogFile.filesize
WatchFile.FileDescriptor.filenum	ファイルディスクリプタ数の監視結果出力ファイルのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.FileDescriptorWatchLogFile.filenum
WatchFile.FileDescriptor.filesize	ファイルディスクリプタ数の監視結果出力ファイルのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.FileDescriptorWatchLogFile.filesize
WatchFile.HttpSession.filenum	HTTP セッション数の監視結果出力ファイルのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.HttpSessionWatchLogFile.filenum
WatchFile.HttpSession.filesize	HTTP セッション数の監視結果出力ファイルのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.HttpSessionWatchLogFile.filesize

param-name 指定値	param-value 指定値	省略値	推奨の param-name 指定値
WatchFile.Memory.fileenum	メモリの監視結果出力ファイルのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.MemoryWatchLogFile.fileenum
WatchFile.Memory.filesize	メモリの監視結果出力ファイルのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.MemoryWatchLogFile.filesize
WatchFile.RequestQueue.fileenum	Web コンテナ単位, Web アプリケーション単位およびデフォルトの HTTP リクエスト実行待ちキューの監視結果出力ファイルのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.RequestQueueWatchLogFile.fileenum
WatchFile.RequestQueue.filesize	Web コンテナ単位, Web アプリケーション単位およびデフォルトの HTTP リクエスト実行待ちキューの監視結果出力ファイルのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.RequestQueueWatchLogFile.filesize
WatchFile.Thread.fileenum	スレッド数の監視結果出力ファイルのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.ThreadWatchLogFile.fileenum
WatchFile.Thread.filesize	スレッド数の監視結果出力ファイルのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.ThreadWatchLogFile.filesize
WatchFile.Threaddump.fileenum	スレッドダンプファイル数の監視結果出力ファイルのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.ThreaddumpWatchLogFile.fileenum
WatchFile.Threaddump.filesize	スレッドダンプファイル数の監視結果出力ファイルのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.ThreaddumpWatchLogFile.filesize
webserver.connector.ajp13.bind_host.value	Web コンテナの Web サーバとの接続設定でホストを固定するかどうかを指定します。 true : 固定します。 false : 固定しません。 etc : ループバックアドレス (localhost) に対して接続を受け付けます。	false	webserver.connector.ajp13.bind_host

param-name 指定値	param-value 指定値	省略値	推奨の param-name 指定値
webservice.connector.http.bind_host.value	Web コンテナの管理用サーバ (簡易 Web サーバ) の設定でホストを固定するかどうかを指定します。 true : 固定します。 false : 固定しません。	false	webservice.connector.http.bind_host
webservice.sfo.sfo_server.<SFO フィルタのサーバ定義名>.serverName	SFO フィルタのサーバ定義名に関連づける SFO サーバ名を 128 文字以下で指定します。	なし	webservice.sfo.sfo_server.<SFO フィルタのサーバ定義名>.naming

## 注※1

値を複数指定する際は、複数の<param-value>で指定します。

また、パラメタを有効にする場合は、文字列の先頭に ' : ' を付加して指定します。無効にしたい場合は、文字列の先頭に ' # ' を付加して指定します。

(例)

```
<param-name>ex.param.m</param-name>
<param-value>.ssss</param-value>
<param-value>#rrrr</param-value>
```

## 注※2

param-value に値を複数指定する際は、コンマ (,) で区切って指定します。

(例) <param-value>値 1,値 2,値 3</param-value>

## 付録 C.4 論理 SFO サーバで指定できるパラメタ (互換用)

論理 SFO サーバに共通で指定できる互換用のパラメタについて、次の表に示します。「省略値」とは、パラメタの指定がない場合に仮定される値です。「推奨の param-name 指定値」とは、互換用のパラメタに対応する、推奨のパラメタです。

表 C-5 論理 SFO サーバで指定できるパラメタ (互換用)

param-name 指定値	param-value 指定値	省略値	推奨の param-name 指定値
add.jvm.arg.m	拡張起動パラメタを設定します。 JavaVM を起動するときに指定できる JavaVM のオプションを指定します。*	なし	add.jvm.arg
ejbserver.rmi.naming.host.value	マルチホームドホスト環境で、SFO サーバが使用する RMI レジストリや MBean サーバのホストを指定します。 true : 「運用管理ドメインの構成定義」で定義したホストのネットワーク参照ができるホスト名または IP アドレスが設定されます。 false : ホスト名または IP アドレスを設定しません。 etc : ループバックアドレス (localhost) を設定します。	false	ejbserver.rmi.naming.host
ex.param.m	SFO サーバの拡張パラメタを SFO サーバで使用する任意のオプション*で指定します。	なし	ex.param

param-name 指定値	param-value 指定値	省略値	推奨の param-name 指定値
ex.properties.m	JavaVM のシステムプロパティを指定します。 ※	なし	ex.properties
http	管理用サーバ (簡易 Web サーバ) のポート番号を 1~65535 の範囲で指定します。	8080	ejbserver.http.port
inprocess.ns.port	インプロセスのネーミングサービス用のポート番号を 1~65535 の範囲で指定します。	900	ejbserver.naming.port
jvm.ms.size	JavaVM のメモリ使用量の初期サイズを 0~9999999999 の範囲 (単位: メガバイト) で指定します。 jvm.ms.size ≤ jvm.mx.size の関係が成り立つ値を設定してください。	128	add.jvm.arg
jvm.mx.size	JavaVM のメモリ使用量の最大サイズを 0~9999999999 の範囲 (単位: メガバイト) で指定します。 jvm.ms.size ≤ jvm.mx.size の関係が成り立つ値を設定してください。	128	add.jvm.arg
LogFile.Console.filenum	コンソールログのファイル面数を指定します。 指定できる値は, 1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.ConsoleLogFile.filenum
LogFile.Console.filesize	コンソールログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は, 4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.ConsoleLogFile.filesize
LogFile.EJBContainer.filenum	EJB コンテナ保守ログのファイル面数を指定します。 指定できる値は, 1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.EJBContainerLogFile.filenum
LogFile.EJBContainer.filesize	EJB コンテナ保守ログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は, 4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.EJBContainerLogFile.filesize
LogFile.Exception.filenum	例外ログのファイル面数を指定します。 指定できる値は, 1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.ExceptionLogFile.filenum
LogFile.Exception.filesize	例外ログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は, 4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.ExceptionLogFile.filesize
LogFile.Maintenance.filenum	保守ログのファイル面数を指定します。 指定できる値は, 1, 2, 4, 8, 16 です。	4	ejbserver.logger.channels.define.MaintenanceLogFile.filenum



param-name 指定値	param-value 指定値	省略値	推奨の param-name 指定値
LogFile.Maintenance.filesize	保守ログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	16777216	ejbserver.logger.channels.define.MaintenanceLogFile.filesize
LogFile.Message.filenum	メッセージログのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.MessageLogFile.filenum
LogFile.Message.filesize	メッセージログのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.MessageLogFile.filesize
loglevel	ログの出力レベルを指定します。 Error：通常運用 Error,Warning：通常運用 (verbose) Error,Warning,Information：テスト時 Error,Warning,Information,Debug：障害調査	Error	ejbserver.logger.enabled.*
manager.mevent.sender.bind.host.value	Management イベント発行機能のローカルアドレスを固定するかどうかを指定します。 true：固定します。 false：固定しません。	false	manager.mevent.sender.bind.host
mngagent.connector.host.value	J2EE コンテナの運用監視エージェントのホストを固定するかどうかを指定します。 true：固定します。 false：固定しません。	false	mngagent.connector.host
mngagent.connector.port.value	J2EE コンテナの運用監視エージェントのポート番号を 0~65535 の範囲で指定します。 0 は「自動」を表します。	0 (自動)	mngagent.connector.port
vbroker.se.iiop_tp.host.value	EJB コンテナでのホストを固定するかどうかを指定します。 true：固定します。 false：固定しません。 etc：ループバックアドレス (localhost) に対して接続を受け付けます。	false	vbroker.se.iiop_tp.host
WatchFile.FileDescriptor.filenum	ファイルディスクリプタ数の監視結果出力ファイルのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.FileDescriptorWatchLogFile.filenum
WatchFile.FileDescriptor.filesize	ファイルディスクリプタ数の監視結果出力ファイルのファイルサイズをバイト単位で指定します。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.FileDescriptor

param-name 指定値	param-value 指定値	省略値	推奨の param-name 指定値
WatchFile.FileDescriptor.filesize	指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ptorWatchLogFile.filesize
WatchFile.Memory.fileenum	メモリの監視結果出力ファイルのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.MemoryWatchLogFile.fileenum
WatchFile.Memory.filesize	メモリの監視結果出力ファイルのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.MemoryWatchLogFile.filesize
WatchFile.Thread.fileenum	スレッド数の監視結果出力ファイルのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.ThreadWatchLogFile.fileenum
WatchFile.Thread.filesize	スレッド数の監視結果出力ファイルのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.ThreadWatchLogFile.filesize
WatchFile.Threaddump.fileenum	スレッドダンプファイル数の監視結果出力ファイルのファイル面数を指定します。 指定できる値は、1, 2, 4, 8, 16 です。	2	ejbserver.logger.channels.define.ThreaddumpWatchLogFile.fileenum
WatchFile.Threaddump.filesize	スレッドダンプファイル数の監視結果出力ファイルのファイルサイズをバイト単位で指定します。 指定できる値は、4096, 65536, 262144, 524288, 1048576, 2097152, 4194304, 16777216, 67108864 です。	1048576	ejbserver.logger.channels.define.ThreaddumpWatchLogFile.filesize
webserver.connector.ajp13.bind_host.value	Web コンテナの Web サーバとの接続設定でホストを固定するかどうかを指定します。 true : 固定します。 false : 固定しません。 etc : ループバックアドレス (localhost) に対して接続を受け付けます。	false	webserver.connector.ajp13.bind_host
webserver.connector.http.bind_host.value	Web コンテナの管理用サーバ (簡易 Web サーバ) の設定でホストを固定するかどうかを指定します。 true : 固定します。 false : 固定しません。	false	webserver.connector.http.bind_host

## 注※

値を複数指定する際は、複数の<param-value>で指定します。

また、パラメタを有効にする場合は、文字列の先頭に'.'を付加して指定します。無効にしたい場合は、文字列の先頭に'#'を付加して指定します。

(例)

```
<param-name>ex.param.m</param-name>
```

```
<param-value>.ssss</param-value>
```

```
<param-value>#rrrr</param-value>
```



# 索引

## 記号

- .cmxrc 171
- .mngsvrmonitorrc 534
- .mngsvrutilrc (mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイル) のキー 533
- .vmirc 576
- <LB 接続情報の識別名>.properties 553
- XX:[+|-]ExplicitMemoryUseExcludeClass 718
- XX:[+|-]HitachiAutoExplicitMemory 716
- XX:[+|-]HitachiCommaVerboseGC 670
- XX:[+|-]HitachiExplicitMemoryAutoReclaim 715
- XX:[+|-]HitachiExplicitMemoryAutoRefReclaim 721
- XX:[+|-]HitachiExplicitMemoryCompatibleToV8 716
- XX:
  - [+|-]HitachiExplicitMemoryMoveToTenuredFirst 714
- XX:[+|-]HitachiFullCore 709
- XX:[+|-]HitachiJavaClassLibTrace 700
- XX:[+|-]HitachiJavaLogNoMoreOutput 660
- XX:[+|-]HitachiLocalsInStackTrace 704
- XX:[+|-]HitachiLocalsInThrowable 701
- XX:[+|-]HitachiLocalsSimpleFormat 705
- XX:[+|-]HitachiOutOfMemoryAbort 693
- XX:
  - [+|-]HitachiOutOfMemoryAbortThreadDump 694
- XX:
  - [+|-]HitachiOutOfMemoryAbortThreadDumpWithJHeapProf 695
- XX:[+|-]HitachiOutOfMemoryCause 689
- XX:[+|-]HitachiOutOfMemoryHandling 695
- XX:[+|-]HitachiOutOfMemorySize 692
- XX:[+|-]HitachiOutOfMemoryStackTrace 690
- XX:[+|-]HitachiOutputMilliTime 662
- XX:[+|-]HitachiReserveSwapSpace 709
- XX:[+|-]HitachiThreadDump 648
- XX:[+|-]HitachiThreadDumpToStdout 657
- XX:[+|-]HitachiThreadDumpWithBlockCount 658
- XX:[+|-]HitachiThreadDumpWithCpuTime 658
- XX:[+|-]HitachiThreadDumpWithHashCode 657
- XX:[+|-]HitachiTrueTypeInLocals 706
- XX:[+|-]HitachiUseExplicitMemory 710
- XX:[+|-]HitachiVerboseGC 663
- XX:[+|-]HitachiVerboseGCCpuTime 679
- XX:[+|-]HitachiVerboseGCPrintCause 677
- XX:[+|-]HitachiVerboseGCPrintDate 679
- XX:[+|-]HitachiVerboseGCPrintDeleteOnExit 683
- XX:
  - [+|-]HitachiVerboseGCPrintJVMInternalMemory 681
- XX:
  - [+|-]HitachiVerboseGCPrintTenuringDistribution 680
- XX:[+|-]HitachiVerboseGCPrintThreadCount 682
- XX:[+|-]JavaLogAsynchronous 662
- XX:[+|-]JITCompilerContinuation 724
- XX:[+|-]PrintCodeCacheFullMessage 688
- XX:[+|-]PrintCodeCacheInfo 685
- XX:[+|-]UseCompressedOops 725
- XX:+Hitachi 648
- XX:CodeCacheInfoPrintRatio 687
- XX:ExplicitMemoryExcludeClassListFile 719
- XX:ExplicitMemoryFullGCPolicy 718
- XX:ExplicitMemoryNotExcludeClassListFile 720
- XX:HitachiAutoExplicitMemoryFile 717
- XX:HitachiCallToString 707
- XX:HitachiExplicitHeapMaxSize 711
- XX:HitachiExplicitMemoryJavaLog 712
- XX:HitachiExplicitMemoryJavaLogFileSize 713
- - XX:HitachiExplicitMemoryJavaLogNumberOfFile 714
- XX:HitachiExplicitMemoryLogLevel 712
- XX:HitachiJavaClassLibTraceLineSize 701
- XX:HitachiJavaLog 659
- XX:HitachiJavaLogFileSize 660
- XX:HitachiJavaLogNumberOfFile 661
- XX:HitachiJITCompileMaxMemorySize 722
- - XX:HitachiOutOfMemoryHandlingMaxThrowCount 699
- XX:HitachiOutOfMemoryStackTraceLineSize 692
- XX:HitachiThreadLimit 726
- XX:HitachiVerboseGCIntervalTime 676

## A

- add.class.path [J2EE サーバ用オプション] 14, 309  
 add.class.path [Java アプリケーション用のキー] 598  
 add.class.path [運用管理エージェント用オプション定義ファイルのキー] 489  
 add.class.path [バッチアプリケーション用のキー] 162  
 add.class.path [バッチサーバ用のキー] 138  
 add.env [Management Server 用環境変数定義ファイルのキー] 508  
 add.jvm.arg [J2EE サーバ用オプション] 13, 303  
 add.jvm.arg [Java アプリケーション用のキー] 598  
 add.jvm.arg [運用管理エージェント用オプション定義ファイルのキー] 489  
 add.jvm.arg [バッチアプリケーション用のキー] 161  
 add.jvm.arg [バッチサーバ用のキー] 138  
 add.library.path [J2EE サーバ用オプション] 14, 309  
 add.library.path [Java アプリケーション用のキー] 598  
 add.library.path [運用管理エージェント用オプション定義ファイルのキー] 490  
 add.library.path [バッチサーバ用のキー] 138  
 add.network.drive [運用管理エージェント用オプション定義ファイルのキー] 490  
 additional.startcmd 246  
 admin.logger.ExceptionLogFile.filename [管理コマンドプロパティファイルのキー] 430  
 admin.logger.ExceptionLogFile.filepath [管理コマンドプロパティファイルのキー] 430  
 admin.logger.ExceptionLogFile.filesize [管理コマンドプロパティファイルのキー] 430  
 admin.logger.MessageLogFile.filename [管理コマンドプロパティファイルのキー] 430  
 admin.logger.MessageLogFile.filepath [管理コマンドプロパティファイルのキー] 430  
 admin.logger.MessageLogFile.filesize [管理コマンドプロパティファイルのキー] 431  
 admin.logger.MessageLogFile.trace.level [管理コマンドプロパティファイルのキー] 431  
 adminagent.<サーバ種別>  
 >.usr\_cmd.abnormal\_end [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 482  
 adminagent.<サーバ種別>.watch.interval [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 484  
 adminagent.<サーバ種別>.watch.level [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 484  
 adminagent.<サーバ種別>.watch.retry\_count [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 484  
 adminagent.<サーバ種別>.watch.start\_time [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 485  
 adminagent.<サーバ種別>.watch.timeout [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 485  
 adminagent.adapter.allowedHosts [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 470  
 adminagent.adapter.bind\_host [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 470  
 adminagent.adapter.port [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 471  
 adminagent.cluster.localaddress.check [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 471  
 adminagent.connector.comm.state.cache\_max\_time [Management Server 環境設定ファイルのキー] 496  
 adminagent.finalization.stop\_servers [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 472  
 adminagent.forcestop.threaddump.interval [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 472  
 adminagent.forcestop.threaddump.timeout [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 472  
 adminagent.forcestop.threaddump [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 472  
 adminagent.hws.group [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 473  
 adminagent.hws.owner [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 473  
 adminagent.hws.sys\_cmd.abnormal\_end.traceinfo [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 473  
 adminagent.hws.watch.method [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 473  
 adminagent.hws.watch.url [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 474  
 adminagent.j2ee.process.console\_event.enabled [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 475  
 adminagent.j2ee.process.console\_log.enabled [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 475  
 adminagent.j2ee.sys\_cmd.abnormal\_end.javatrack [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 476  
 adminagent.j2ee.sys\_cmd.abnormal\_end.threaddump [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 476

- adminagent.jp1event\_enabled [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 476
- adminagent.jp1event.event\_server\_name [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 476
- adminagent.log.fileenum [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 477
- adminagent.log.filesize [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 477
- adminagent.log.level [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 477
- adminagent.lsinfo\_dir [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 477
- adminagent.maintenance.log.fileenum [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 477
- adminagent.maintenance.log.filesize [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 477
- adminagent.prfttrace\_dir [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 478
- adminagent.process.consolelog.enabled [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 478
- adminagent.process.consolelog.event.queue\_size [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 479
- adminagent.process.consolelog.fileenum [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 479
- adminagent.process.consolelog.filesize [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 479
- adminagent.process.consolelog.style [運用管理エージェントのプロパティファイルのキー] 480
- adminagent.process.consolelog.time [運用管理エージェントのプロパティファイルのキー] 479
- adminagent.properties 470
- adminagent.rmi.log.fileenum [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 480
- adminagent.rmi.log.filesize [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 480
- adminagent.rmi.log.level [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 480
- adminagent.snapshotlog.listfile.2.num\_snapshots [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 480
- adminagent.snapshotlog.log\_dir [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 481
- adminagent.snapshotlog.num\_snapshots [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 481
- adminagent.sys\_cmd.abnormal\_end.prfttrace [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 481
- adminagent.userserver.process.console\_event.enabled [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 481
- adminagent.userserver.process.console\_log.enabled [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 482
- adminagent.watch.retry\_timeout.enabled [運用管理エージェントプロパティファイルのキー] 482
- adminagent.xml 491
- AdminAgentrc 488
- adminagentuser.cfg 489
- AllText 254
- AppendDirectives 254

---

**B**

- batch.ctm.enabled [バッチアプリケーション用のキー] 162
- batch.log.directory [バッチアプリケーション用のキー] 162
- batch.log.lockInterval [バッチアプリケーション用のキー] 162
- batch.log.lockRetryCount [バッチアプリケーション用のキー] 163
- batch.log.maintenance.fileenum [バッチアプリケーション用のキー] 163
- batch.log.maintenance.filesize [バッチアプリケーション用のキー] 163
- batch.log.message.fileenum [バッチアプリケーション用のキー] 163
- batch.log.message.filesize [バッチアプリケーション用のキー] 163
- batch.log.stdout.enabled [バッチアプリケーション用のキー] 163
- batch.request.timeout [バッチアプリケーション用のキー] 164
- batch.schedule.group.name [バッチアプリケーション用のキー] 164
- batch.service.enabled [J2EE サーバ用オプション] 309
- batch.service.enabled [バッチサーバ用のキー] 138
- batch.vbroker.agent.addr [バッチアプリケーション用のキー] 164
- batch.vbroker.agent.port [バッチアプリケーション用のキー] 164
- broker.logger.ExceptionLogFile.fileenum [CJMSP ブローカー共通プロパティファイルのキー] 433
- broker.logger.ExceptionLogFile.fileenum [CJMSP ブローカー個別プロパティファイルのキー] 438



broker.logger.ExceptionLogFile.filesize [CJMSP ブローカー共通プロパティファイルのキー] 433  
 broker.logger.ExceptionLogFile.filesize [CJMSP ブローカー個別プロパティファイルのキー] 438  
 broker.logger.MessageLogFile.filenum [CJMSP ブローカー共通プロパティファイルのキー] 433  
 broker.logger.MessageLogFile.filenum [CJMSP ブローカー個別プロパティファイルのキー] 438  
 broker.logger.MessageLogFile.filesize [CJMSP ブローカー共通プロパティファイルのキー] 433  
 broker.logger.MessageLogFile.filesize [CJMSP ブローカー個別プロパティファイルのキー] 438  
 broker.logger.MessageLogFile.trace.level [CJMSP ブローカー共通プロパティファイルのキー] 433  
 broker.logger.MessageLogFile.trace.level [CJMSP ブローカー個別プロパティファイルのキー] 439

## C

CJMSP ブローカー個別プロパティファイル 434  
 CJMS プロバイダで使用するファイル 427  
 CJPA プロバイダ独自のプロパティ 371  
 cmxclient.properties 175  
 cmxserver.properties 170  
 com.cosminexus.manager.cmdtracelog.fnum [Manager 設定ファイルのキー] 513  
 com.cosminexus.manager.cmdtracelog.size [Manager 設定ファイルのキー] 513  
 com.cosminexus.manager.log.compatible [Manager 設定ファイルのキー] 513  
 com.cosminexus.manager.log.dir [Manager 設定ファイルのキー] 510  
 com.cosminexus.manager.messagelog.fnum [Manager 設定ファイルのキー] 511  
 com.cosminexus.manager.messagelog.size [Manager 設定ファイルのキー] 511  
 com.cosminexus.manager.messagelog.style [Manager 設定ファイルのキー] 511  
 com.cosminexus.manager.messagelog.time [Manager 設定ファイルのキー] 511  
 com.cosminexus.manager.tracelog.fnum [Manager 設定ファイルのキー] 512  
 com.cosminexus.manager.tracelog.size [Manager 設定ファイルのキー] 512  
 com.cosminexus.manager.tracelog.style [Manager 設定ファイルのキー] 512  
 com.cosminexus.manager.tracelog.time [Manager 設定ファイルのキー] 512  
 com.cosminexus.mngsvr.agent.read\_timeout [Management Server 環境設定ファイルのキー] 496  
 com.cosminexus.mngsvr.compat.operation\_app [Management Server 環境設定ファイルのキー] 506  
 com.cosminexus.mngsvr.jp1event.alert [Management Server 環境設定ファイルのキー] 496  
 com.cosminexus.mngsvr.jp1event.critical [Management Server 環境設定ファイルのキー] 497  
 com.cosminexus.mngsvr.jp1event.emergency [Management Server 環境設定ファイルのキー] 496  
 com.cosminexus.mngsvr.jp1event.enabled [Management Server 環境設定ファイルのキー] 497  
 com.cosminexus.mngsvr.jp1event.error [Management Server 環境設定ファイルのキー] 497  
 com.cosminexus.mngsvr.jp1event.information [Management Server 環境設定ファイルのキー] 497  
 com.cosminexus.mngsvr.jp1event.notice [Management Server 環境設定ファイルのキー] 497  
 com.cosminexus.mngsvr.jp1event.warning [Management Server 環境設定ファイルのキー] 497  
 com.cosminexus.mngsvr.log.display\_number [Management Server 環境設定ファイルのキー] 498  
 com.cosminexus.mngsvr.log.level [Management Server 環境設定ファイルのキー] 498  
 com.cosminexus.mngsvr.log.rotate [Management Server 環境設定ファイルのキー] 498  
 com.cosminexus.mngsvr.log.size [Management Server 環境設定ファイルのキー] 498  
 com.cosminexus.mngsvr.logical\_server\_abnormal\_stop.exit [Management Server 環境設定ファイルのキー] 498  
 com.cosminexus.mngsvr.maintenance.log.filenum [Management Server 環境設定ファイルのキー] 499  
 com.cosminexus.mngsvr.maintenance.log.filesize [Management Server 環境設定ファイルのキー] 499



- com.cosminexus.mngsvr.management\_user\_account.enabled [Management Server 環境設定ファイルのキー] 500
  - com.cosminexus.mngsvr.management.connector.enabled [Management Server 環境設定ファイルのキー] 499
  - com.cosminexus.mngsvr.management.enabled [Management Server 環境設定ファイルのキー] 499
  - com.cosminexus.mngsvr.management.host [Management Server 環境設定ファイルのキー] 499
  - com.cosminexus.mngsvr.management.listen.port [Management Server 環境設定ファイルのキー] 500
  - com.cosminexus.mngsvr.management.port [Management Server 環境設定ファイルのキー] 500
  - com.cosminexus.mngsvr.management.read\_timeout [Management Server 環境設定ファイルのキー] 500
  - com.cosminexus.mngsvr.on\_start [Management Server 環境設定ファイルのキー] 500
  - com.cosminexus.mngsvr.snapshot.auto\_collect.enabled [Management Server 環境設定ファイルのキー] 500
  - com.cosminexus.mngsvr.snapshot.auto\_collect.timeout [Management Server 環境設定ファイルのキー] 503
  - com.cosminexus.mngsvr.snapshot.collect.point [Management Server 環境設定ファイルのキー] 500
  - com.cosminexus.mngsvr.sys\_cmd.abnormal\_end.enabled [Management Server 環境設定ファイルのキー] 501
  - com.cosminexus.mngsvr.sys\_cmd.abnormal\_end.timeout [Management Server 環境設定ファイルのキー] 501
  - com.cosminexus.mngsvr.trace [Management Server 環境設定ファイルのキー] 501
  - com.cosminexus.mngsvr.upload\_app.directory [Management Server 環境設定ファイルのキー] 503
  - com.cosminexus.mngsvr.upload\_app.enabled [Management Server 環境設定ファイルのキー] 502
  - com.cosminexus.mngsvr.upload\_app.maxsize [Management Server 環境設定ファイルのキー] 503
  - com.cosminexus.mngsvr.usr\_cmd.abnormal\_end.enabled [Management Server 環境設定ファイルのキー] 501
  - com.cosminexus.mngsvr.usr\_cmd.abnormal\_end.timeout [Management Server 環境設定ファイルのキー] 501
  - com.cosminexus.mngsvr.vmi.enabled [Management Server 環境設定ファイルのキー] 502
  - com.cosminexus.mngsvr.vmx.enabled [Management Server 環境設定ファイルのキー] 502
  - config.properties 434
  - connect\_timeout [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 449
  - connection\_sharing [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 449
  - CoreDumpDirectory 251
  - cosminexus.jpa.cache.size.<ENTITY> 371
  - cosminexus.jpa.cache.size.default 371
  - cosminexus.jpa.cache.type.<ENTITY> 371
  - cosminexus.jpa.cache.type.default 372
  - cosminexus.jpa.exception.logging.sql [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 25
  - cosminexus.jpa.logging.level.operation.<category> [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 25
  - cosminexus.jpa.pessimistic-lock 426
  - cosminexus.jpa.target-database 372
  - cpp.library.version [J2EE サーバ用オプション] 14, 309
  - cpp.library.version [Java アプリケーション用のキー] 598
  - cpp.library.version [バッチサーバ用のキー] 138
  - criticalList.cfg 132, 158
  - CTM コマンドオプションファイル 446
  - CTM で使用するファイル 441
  - CTM ユーザ環境変数定義ファイル 443
  - CustomDivideFileNum 259
  - CustomDivideTimeDifference 259
  - CustomDivideTimeInterval 259
  - CustomWraparoundFileNum 259
  - CustomWraparoundFilesize 259
- ## D
- 
- dataSourceFullJTAtable 783
  - dataSourceTable 757
  - DocumentRoot 254

## E

- ejb.client.directory.shareable [Java アプリケーション用のキー] 598  
 ejb.client.ejb.log [Java アプリケーション用のキー] 599  
 ejb.client.log.appid [Java アプリケーション用のキー] 599  
 ejb.client.log.directory [Java アプリケーション用のキー] 599  
 ejb.client.log.stdout.enabled [Java アプリケーション用のキー] 600  
 ejb.public.directory [J2EE サーバ用オプション] 14, 303  
 ejb.public.directory [バッチサーバ用のキー] 138  
 ejb.server.corefilenum [J2EE サーバ用オプション] 15, 309  
 ejb.server.corefilenum [バッチサーバ用のキー] 138  
 ejb.server.log.directory [J2EE サーバ用オプション] 16, 304  
 ejb.server.log.directory [バッチサーバ用のキー] 138  
 ejb.server.log.mode [J2EE サーバ用オプション] 16, 309  
 ejb.server.log.mode [バッチサーバ用のキー] 139  
 ejb.server.log.stderr.filesize [J2EE サーバ用オプション] 16, 309  
 ejb.server.log.stderr.filesize [バッチサーバ用のキー] 139  
 ejb.server.log.stdout.filesize [J2EE サーバ用オプション] 16, 309  
 ejb.server.log.stdout.filesize [バッチサーバ用のキー] 139  
 ejbApplicationTable 759  
 ejbserver.application.InitTermProcessClasses [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 26  
 ejbserver.application.InitTermProcessClasses [バッチサーバ用のキー] 143  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.appName [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 26  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.appName [Java アプリケーション] 605  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.appName [バッチサーバ用のキー] 143  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.autoFlush.enabled [Java アプリケーション] 605  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.count [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 26  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.count [Java アプリケーション] 605  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.count [バッチサーバ用のキー] 143  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.encoding [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 27  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.encoding [Java アプリケーション] 605  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.encoding [バッチサーバ用のキー] 143  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.filter [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 27  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.filter [Java アプリケーション] 605  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.filter [バッチサーバ用のキー] 143  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.formatter [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 27  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.formatter [Java アプリケーション] 605  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.formatter [バッチサーバ用のキー] 143  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.level [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 28  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.level [Java アプリケーション] 605  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.level [バッチサーバ用のキー] 143  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.limit [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 28  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.limit [Java アプリケーション] 605  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.limit [バッチサーバ用のキー] 143  
 ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.msgid [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 29

- ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.msgid [Java アプリケーション] 605
- ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.msgid [バッチサーバ用のキー] 143
- ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.path [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 29
- ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.path [Java アプリケーション] 606
- ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.path [バッチサーバ用のキー] 143
- ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.separator [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 30
- ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.separator [Java アプリケーション] 606
- ejbserver.application.userlog.CJLogHandler.<ハンドラ名称>.separator [バッチサーバ用のキー] 143
- ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.filter [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 30
- ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.filter [Java アプリケーション] 606
- ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.filter [バッチサーバ用のキー] 143
- ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.handlers [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 30
- ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.handlers [Java アプリケーション] 606
- ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.handlers [バッチサーバ用のキー] 144
- ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.level [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 31
- ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.level [Java アプリケーション] 606
- ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.level [バッチサーバ用のキー] 144
- ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.useParentHandlers [Java アプリケーション] 606
- ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.useParentHandlers [バッチサーバ用のキー] 144
- ejbserver.application.userlog.Logger.<ロガー名称>.useParentHandler [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 31
- ejbserver.application.userlog.loggers [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 30
- ejbserver.application.userlog.loggers [Java アプリケーション] 606
- ejbserver.application.userlog.loggers [バッチサーバ用のキー] 143
- ejbserver.batch.application.exit.enabled [バッチサーバ用のキー] 144
- ejbserver.batch.gc.watch.threshold [バッチサーバ用のキー] 144
- ejbserver.batch.queue.length [バッチサーバ用のキー] 144
- ejbserver.batch.schedule.group.name [バッチサーバ用のキー] 144
- ejbserver.client.ctm.RequestPriority [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 33
- ejbserver.client.ctm.RequestPriority [Java アプリケーション] 607
- ejbserver.client.ctm.RequestPriority [バッチアプリケーション用のキー] 165
- ejbserver.client.ctm.RequestPriority [バッチサーバ用のキー] 144
- ejbserver.client.ejb.log [Java アプリケーション] 607
- ejbserver.client.log.appid [Java アプリケーション] 608
- ejbserver.client.log.directory [Java アプリケーション] 608
- ejbserver.client.log.lockInterval [Java アプリケーション] 608
- ejbserver.client.log.lockRetryCount [Java アプリケーション] 609
- ejbserver.client.transaction.clientName [Java アプリケーション] 609
- ejbserver.client.transaction.enabled [Java アプリケーション] 609
- ejbserver.commonj.WorkManager.non\_daemon\_work\_threads [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 33
- ejbserver.compiler.jvm.maxHeapSize 270
- ejbserver.compiler.jvm.maxHeapSize [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 33
- ejbserver.compiler.jvm.minHeapSize 270
- ejbserver.compiler.jvm.minHeapSize [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 33
- ejbserver.connectionpool.applicationAuthentication.disabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 34, 304
- ejbserver.connectionpool.applicationAuthentication.disabled [バッチサーバ用のキー] 145

- ejbserver.connectionpool.association.enabledDespiteUnshareableSetting [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 34, 304
- ejbserver.connectionpool.association.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 34
- ejbserver.connectionpool.association.enabled [バッチサーバ用のキー] 145
- ejbserver.connectionpool.sharingOutsideTransactionScope.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 35, 305
- ejbserver.connectionpool.sharingOutsideTransactionScope.enabled [バッチサーバ用のキー] 145
- ejbserver.connectionpool.validation.timeout [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 36
- ejbserver.connectionpool.validation.timeout [バッチサーバ用のキー] 145
- ejbserver.connector.logwriter.fileenum [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 36
- ejbserver.connector.logwriter.fileenum [バッチサーバ用のキー] 145
- ejbserver.connector.logwriter.filesize [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 36
- ejbserver.connector.logwriter.filesize [バッチサーバ用のキー] 145
- ejbserver.connector.statementpool.clear.backcompat [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 36
- ejbserver.container.audit\_trail.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 37
- ejbserver.container.audit\_trail.enabled [バッチサーバ用のキー] 145
- ejbserver.container.bmp.backcompatible [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 37, 305
- ejbserver.container.ejbhome.sessionbean.reconnect.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 37, 305
- ejbserver.container.passivate.scan.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 37
- ejbserver.container.rebindpolicy [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 38, 305
- ejbserver.container.rebindpolicy [Java アプリケーション] 610
- ejbserver.container.rebindpolicy [バッチアプリケーション用のキー] 165
- ejbserver.container.remove.scan.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 38
- ejbserver.container.security.disabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 38, 305
- ejbserver.ctm.ActivateTimeOut [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 39
- ejbserver.ctm.ActivateTimeOut [バッチサーバ用のキー] 145
- ejbserver.ctm.CTMDomain [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 39, 305
- ejbserver.ctm.CTMDomain [バッチサーバ用のキー] 146
- ejbserver.ctm.CTMID [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 39
- ejbserver.ctm.CTMID [バッチサーバ用のキー] 146
- ejbserver.ctm.CTMMyHost [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 39, 305
- ejbserver.ctm.CTMMyHost [バッチサーバ用のキー] 146
- ejbserver.ctm.DeactivateTimeOut [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 40
- ejbserver.ctm.DeactivateTimeOut [バッチサーバ用のキー] 146
- ejbserver.ctm.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 40, 305
- ejbserver.ctm.enabled [バッチサーバ用のキー] 146
- ejbserver.ctm.QueueLength [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 41
- ejbserver.ctm.useGlobalJNDI [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 41
- ejbserver.cui.checkmethod.compatible [サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー] 360
- ejbserver.cui.exitcode.compatible [サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー] 360
- ejbserver.cui.logfile.compatible [サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー] 360
- ejbserver.cui.optionalname.enabled [サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー] 361
- ejbserver.deploy.annotations.load\_check.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 42
- ejbserver.deploy.annotations.load\_check.enabled [サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー] 362
- ejbserver.deploy.annotations.load\_libjars.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 41
- ejbserver.deploy.app.stopforcibly.disabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 42, 305
- ejbserver.deploy.context.check\_interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 43
- ejbserver.deploy.context.reload\_scope [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 43
- ejbserver.deploy.context.update.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 43
- ejbserver.deploy.exclusive.lockAliveInterval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 43, 305

- ejbserver.deploy.exclusive.lockAliveInterval [バッチサーバ用のキー] 146
- ejbserver.deploy.resourcefile.scramble.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 44
- ejbserver.deploy.resourcefile.scramble.enabled [バッチサーバ用のキー] 146
- ejbserver.deploy.session.work.directory [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 44
- ejbserver.deploy.stub.generation.scope [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 45, 305
- ejbserver.distributedtx.ots.recoverFailMessageCount [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 45
- ejbserver.distributedtx.ots.status.directory1 [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 46
- ejbserver.distributedtx.ots.status.directory1 [Java アプリケーション] 610
- ejbserver.distributedtx.ots.status.directory2 [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 46
- ejbserver.distributedtx.ots.status.directory2 [Java アプリケーション] 611
- ejbserver.distributedtx.recovery.completionCheckOnStopping.timeout [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 47, 306
- ejbserver.distributedtx.recovery.port [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 47
- ejbserver.distributedtx.recovery.port [Java アプリケーション] 611
- ejbserver.distributedtx.rollbackClientTxOnSystemException [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 48
- ejbserver.distributedtx.XATransaction.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 48
- ejbserver.DynamicStubLoading.Enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 49
- ejbserver.ejb.cmp20.cmr.use.existing\_table [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 49, 306
- ejbserver.ejb.timerservice.maxCallbackThreads [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 49
- ejbserver.ejb.timerservice.retryCount [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 49
- ejbserver.ejb.timerservice.retryInterval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 50
- ejbserver.ext.method\_observation.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 50
- ejbserver.ext.method\_observation.interval [バッチサーバ用のキー] 147
- ejbserver.http.port [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 50
- ejbserver.http.port [バッチサーバ用のキー] 147
- ejbserver.instrumentation.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 51
- ejbserver.instrumentation.enabled [バッチサーバ用のキー] 147
- ejbserver.jca.adapter.tp1.bind\_host [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 51
- ejbserver.jndi.cache.interval.clear.option [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 52
- ejbserver.jndi.cache.interval.clear.option [Java アプリケーション] 612
- ejbserver.jndi.cache.interval.clear.option [バッチサーバ用のキー] 147
- ejbserver.jndi.cache.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 52
- ejbserver.jndi.cache.interval [Java アプリケーション] 611
- ejbserver.jndi.cache.interval [バッチサーバ用のキー] 147
- ejbserver.jndi.cache.reference [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 52, 306
- ejbserver.jndi.cache.reference [バッチサーバ用のキー] 147
- ejbserver.jndi.cache [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 51
- ejbserver.jndi.cache [Java アプリケーション] 611
- ejbserver.jndi.cache [バッチサーバ用のキー] 147
- ejbserver.jndi.global.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 52
- ejbserver.jndi.log.message.verbosemode 623
- ejbserver.jndi.namingservice.group.<Specify group name>.providerurls [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 52
- ejbserver.jndi.namingservice.group.<Specify group name>.providerurls [Java アプリケーション] 612
- ejbserver.jndi.namingservice.group.<Specify group name>.providerurls [バッチサーバ用のキー] 147
- ejbserver.jndi.namingservice.group.list [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 53
- ejbserver.jndi.namingservice.group.list [Java アプリケーション] 612
- ejbserver.jndi.namingservice.group.list [バッチサーバ用のキー] 147
- ejbserver.jndi.request.timeout [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 53
- ejbserver.jndi.request.timeout [Java アプリケーション] 612

- ejbserver.jndi.request.timeout [バッチアプリケーション用のキー] 166
- ejbserver.jndi.request.timeout [バッチサーバ用のキー] 147
- ejbserver.jpa.defaultJtaDsName [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 53
- ejbserver.jpa.defaultNonJtaDsName [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 53
- ejbserver.jpa.defaultProviderClassName [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 53
- ejbserver.jpa.disable [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 53
- ejbserver.jpa.emfprop.<property key> [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 54
- ejbserver.jpa.overrideJtaDsName [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 54
- ejbserver.jpa.overrideNonJtaDsName [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 54
- ejbserver.jpa.overrideProvider [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 54
- ejbserver.jta.TransactionManager.defaultTimeout [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 54
- ejbserver.jta.TransactionManager.defaultTimeout [Java アプリケーション] 612
- ejbserver.jta.TransactionManager.defaultTimeout [バッチサーバ用のキー] 148
- ejbserver.logger.channels.define.<チャンネル名>.filenum [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 55
- ejbserver.logger.channels.define.<チャンネル名>.filenum [Java アプリケーション] 613
- ejbserver.logger.channels.define.<チャンネル名>.filenum [バッチサーバ用のキー] 148
- ejbserver.logger.channels.define.<チャンネル名>.filesize [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 56
- ejbserver.logger.channels.define.<チャンネル名>.filesize [Java アプリケーション] 613
- ejbserver.logger.channels.define.<チャンネル名>.filesize [バッチサーバ用のキー] 148
- ejbserver.logger.channels.define.DevelopmentLogFile.filenum [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 55
- ejbserver.logger.channels.define.DevelopmentLogFile.filesize [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 55
- ejbserver.logger.DevelopmentLogFile.level [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 55
- ejbserver.logger.enabled.\* [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 56
- ejbserver.logger.enabled.\* [Java アプリケーション] 613
- ejbserver.logger.enabled.\* [サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー] 362
- ejbserver.logger.enabled.\* [バッチサーバ用のキー] 148
- ejbserver.logger.rotationStyle [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 57
- ejbserver.logger.rotationStyle [バッチサーバ用のキー] 148
- ejbserver.logger.rotationTime [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 57
- ejbserver.logger.systemlog.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 57
- ejbserver.management.JVM.stats\_monitor.FullGCCount.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 58
- ejbserver.management.JVM.stats\_monitor.FullGCCount.enabled [バッチサーバ用のキー] 149
- ejbserver.management.JVM.stats\_monitor.FullGCCount.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 58
- ejbserver.management.JVM.stats\_monitor.FullGCCount.interval [バッチサーバ用のキー] 149
- ejbserver.management.JVM.stats\_monitor.FullGCCount.threshold [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 58
- ejbserver.management.JVM.stats\_monitor.FullGCCount.threshold [バッチサーバ用のキー] 149
- ejbserver.management.statistics.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 58
- ejbserver.management.statistics.interval [バッチサーバ用のキー] 149
- ejbserver.management.stats\_file.base\_time [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 58
- ejbserver.management.stats\_file.base\_time [バッチサーバ用のキー] 149
- ejbserver.management.stats\_file.dir [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 58
- ejbserver.management.stats\_file.dir [バッチサーバ用のキー] 149
- ejbserver.management.stats\_file.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 59
- ejbserver.management.stats\_file.enabled [バッチサーバ用のキー] 149
- ejbserver.management.stats\_file.num [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 59
- ejbserver.management.stats\_file.num [バッチサーバ用のキー] 149

- ejbserver.management.stats\_file.period [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 59
- ejbserver.management.stats\_file.period [バッチサーバ用のキー] 149
- ejbserver.management.webcontainer.stats\_monitor.waiting\_request\_count.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 60
- ejbserver.management.webcontainer.stats\_monitor.waiting\_request\_count.high\_threshold [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 60
- ejbserver.management.webcontainer.stats\_monitor.waiting\_request\_count.low\_threshold [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 60
- ejbserver.management.webcontainer.stats\_monitor.whole\_waiting\_request\_count.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 59
- ejbserver.management.webcontainer.stats\_monitor.whole\_waiting\_request\_count.high\_threshold [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 59
- ejbserver.management.webcontainer.stats\_monitor.whole\_waiting\_request\_count.low\_threshold [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 60
- ejbserver.manager.agent.Agent.conf [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 61, 306
- ejbserver.manager.agent.Agent.conf [バッチサーバ用のキー] 149
- ejbserver.manager.agent.Agent.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 61, 306
- ejbserver.manager.agent.Agent.enabled [バッチサーバ用のキー] 149
- ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.conf [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 61
- ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.conf [バッチサーバ用のキー] 150
- ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 61
- ejbserver.manager.agent.JP1EventAgent.enabled [バッチサーバ用のキー] 150
- ejbserver.manager.agent.MEventAgent.conf [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 61
- ejbserver.manager.agent.MEventAgent.conf [バッチサーバ用のキー] 150
- ejbserver.manager.agent.MEventAgent.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 61
- ejbserver.manager.agent.MEventAgent.enabled [バッチサーバ用のキー] 150
- ejbserver.manager.jp1event.event\_server\_name [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 61, 306
- ejbserver.naming.exec.args [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 62, 306
- ejbserver.naming.host [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 62
- ejbserver.naming.host [サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー] 362
- ejbserver.naming.host [バッチサーバ用のキー] 150
- ejbserver.naming.nameroot [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 63, 306
- ejbserver.naming.nameroot [バッチサーバ用のキー] 150
- ejbserver.naming.port [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 63
- ejbserver.naming.port [サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー] 363
- ejbserver.naming.port [バッチサーバ用のキー] 150
- ejbserver.naming.protocol [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 63, 306
- ejbserver.naming.protocol [サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー] 363
- ejbserver.naming.startupMode [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 63
- ejbserver.naming.startupRetryCount [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 64
- ejbserver.naming.startupRetryCount [バッチサーバ用のキー] 150
- ejbserver.naming.startupWaitTime [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 64
- ejbserver.naming.startupWaitTime [バッチサーバ用のキー] 150
- ejbserver.rmi.localinvocation.scope [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 65
- ejbserver.rmi.logger.filenum [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 65
- ejbserver.rmi.logger.filesize [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 66
- ejbserver.rmi.naming.host [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 66
- ejbserver.rmi.naming.host [バッチサーバ用のキー] 150
- ejbserver.rmi.naming.port [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 66
- ejbserver.rmi.naming.port [バッチサーバ用のキー] 150
- ejbserver.rmi.passbyreference [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 66
- ejbserver.rmi.remote.listener.port [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 66

- ejbserver.rmi.remote.listener.port [バッチサーバ用のキー] 150
- ejbserver.rmi.request.timeout [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 66
- ejbserver.rmi.request.timeout [Java アプリケーション] 613
- ejbserver.rmi.request.timeout [サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー] 363
- ejbserver.rmi.request.timeout [バッチアプリケーション用のキー] 166
- ejbserver.rmi.request.timeout [バッチサーバ用のキー] 150
- ejbserver.rmi.stateless.unique\_id.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 67, 306
- ejbserver.security.digest.algorithm [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 67
- ejbserver.security.service.url [Java アプリケーション] 614
- ejbserver.server.eheap.ajp13.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 68
- ejbserver.server.eheap.httpsession.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 68
- ejbserver.server.j2ee.feature [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 69
- ejbserver.server.mutex.invocation.timeout [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 69, 306
- ejbserver.server.prf.PRFDID [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 69
- ejbserver.server.prf.PRFDID [Java アプリケーション] 614
- ejbserver.server.prf.PRFDID [バッチサーバ用のキー] 151
- ejbserver.server.prf.processName 623
- ejbserver.server.threaddump.fileenum [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 69
- ejbserver.server.threaddump.fileenum [バッチサーバ用のキー] 151
- ejbserver.serverName [Java アプリケーション] 614
- ejbserver.stateful.passivate.switch [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 70
- ejbserver.stdoutlog.autoflush [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 70
- ejbserver.stdoutlog.autoflush [Java アプリケーション] 615
- ejbserver.stdoutlog.autoflush [バッチサーバ用のキー] 151
- ejbserver.watch.defaultRequestQueue.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 71
- ejbserver.watch.defaultRequestQueue.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 71
- ejbserver.watch.defaultRequestQueue.threshold [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 71
- ejbserver.watch.defaultRequestQueue.writefile.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 71
- ejbserver.watch.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 71
- ejbserver.watch.enabled [バッチサーバ用のキー] 151
- ejbserver.watch.fileDescriptor.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 72
- ejbserver.watch.fileDescriptor.enabled [バッチサーバ用のキー] 151
- ejbserver.watch.fileDescriptor.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 72
- ejbserver.watch.fileDescriptor.interval [バッチサーバ用のキー] 151
- ejbserver.watch.fileDescriptor.threshold [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 72
- ejbserver.watch.fileDescriptor.threshold [バッチサーバ用のキー] 151
- ejbserver.watch.fileDescriptor.writefile.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 72
- ejbserver.watch.fileDescriptor.writefile.enabled [バッチサーバ用のキー] 151
- ejbserver.watch.memory.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 72
- ejbserver.watch.memory.enabled [バッチサーバ用のキー] 151
- ejbserver.watch.memory.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 73
- ejbserver.watch.memory.interval [バッチサーバ用のキー] 151
- ejbserver.watch.memory.threshold [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 73
- ejbserver.watch.memory.threshold [バッチサーバ用のキー] 151
- ejbserver.watch.memory.writefile.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 73
- ejbserver.watch.memory.writefile.enabled [バッチサーバ用のキー] 151
- ejbserver.watch.thread.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 73
- ejbserver.watch.thread.enabled [バッチサーバ用のキー] 151
- ejbserver.watch.thread.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 73



ejbserver.watch.thread.interval [バッチサーバ用のキー] 151  
 .ejbserver.watch.thread.threshold [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 73  
 .ejbserver.watch.thread.threshold [バッチサーバ用のキー] 152  
 .ejbserver.watch.thread.writefile.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 74  
 .ejbserver.watch.thread.writefile.enabled [バッチサーバ用のキー] 152  
 .ejbserver.watch.threddump.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 74  
 .ejbserver.watch.threddump.enabled [バッチサーバ用のキー] 152  
 .ejbserver.watch.threddump.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 74  
 .ejbserver.watch.threddump.interval [バッチサーバ用のキー] 152  
 .ejbserver.watch.threddump.threshold [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 74  
 .ejbserver.watch.threddump.threshold [バッチサーバ用のキー] 152  
 .ejbserver.watch.threddump.writefile.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 74  
 .ejbserver.watch.threddump.writefile.enabled [バッチサーバ用のキー] 152  
 .ejbserver.webj2ee.connectionAutoClose.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 74  
 entityBeanHomeTable 771  
 entityBeanLocalComponentTable 798  
 entityBeanLocalHomeTable 796  
 entityBeanRemoteTable 773  
 entityBeanTable 769  
 ErrorDivideFileNum 260  
 ErrorDivideTimeDifference 260  
 ErrorDivideTimeInterval 260  
 ErrorWraparoundFileNum 260  
 ErrorWraparoundFilesize 260

## F

---

filter\_priority [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 449

## G

---

gateway\_host [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 450  
 gateway\_https\_scheme [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 450

gateway\_port [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 450

Group 251

## H

---

hitachi\_web.properties 11  
 https.cipherSuites [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 75  
 https.cipherSuites [Java アプリケーション] 615  
 https.cipherSuites [バッチアプリケーション用のキー] 166  
 https.cipherSuites [バッチサーバ用のキー] 152  
 https.protocols [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 75  
 https.protocols [Java アプリケーション] 615  
 https.protocols [バッチアプリケーション用のキー] 166  
 https.protocols [バッチサーバ用のキー] 152  
 HttpsdCustomLogFileDir 260  
 HttpsdCustomlogFormat 261  
 HttpsdCustomMethod 261  
 HttpsdErrorLogFileDir 261  
 HttpsdErrorMethod 261  
 HttpsdLogFileDir 262  
 HttpsdRequestLogFileDir 262  
 HttpsdRequestMethod 262  
 httpServerConnectorTable 755  
 httpServerTable 753  
 HTTP Server のログの出力方法を設定するパラメタ 259  
 HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイル 453  
 HTTP Server 用リダイレクタ動作定義を設定するパラメタ 255  
 HWSKeepStartServers 251  
 HWSLogTimeVerbose 252  
 HWSRequestIofilter 262  
 HWSRequestLogLevel 262  
 HWSRequestModuleDebug 263  
 HWSRequestModuleInfo 263  
 HWSRequestRequest 263

## I

---

imq.admin.tcp.port [CJMSP ブローカー個別プロパティファイルのキー] 435  
 imq.autocreate.destination.maxNumMsgs [CJMSP ブローカー共通プロパティファイルのキー] 433  
 imq.autocreate.destination.maxNumMsgs [CJMSP ブローカー個別プロパティファイルのキー] 437

- imq.autocreate.destination.maxTotalMsgBytes  
 [CJMSP ブローカー共通プロパティファイルの  
 キー] 433
- imq.autocreate.destination.maxTotalMsgBytes  
 [CJMSP ブローカー個別プロパティファイルの  
 キー] 437
- imq.autocreate.queue.consumerFlowLimit  
 [CJMSP ブローカー共通プロパティファイルの  
 キー] 433
- imq.autocreate.queue.consumerFlowLimit  
 [CJMSP ブローカー個別プロパティファイルの  
 キー] 437
- imq.autocreate.topic.consumerFlowLimit [CJMSP  
 ブローカー共通プロパティファイルのキー] 433
- imq.autocreate.topic.consumerFlowLimit [CJMSP  
 ブローカー個別プロパティファイルのキー] 438
- imq.hostname [CJMSP ブローカー共通プロパティ  
 ファイルのキー] 432
- imq.hostname [CJMSP ブローカー個別プロパティ  
 ファイルのキー] 435
- imq.instanceconfig.version [CJMSP ブローカー個別  
 プロパティファイルのキー] 439
- imq.jms.tcp.port [CJMSP ブローカー個別プロパティ  
 ファイルのキー] 435
- imq.metrics.interval [CJMSP ブローカー共通プロパ  
 ティファイルのキー] 433
- imq.metrics.interval [CJMSP ブローカー個別プロパ  
 ティファイルのキー] 438
- imq.persist.file.sync.enabled [CJMSP ブローカー共  
 通プロパティファイルのキー] 432
- imq.persist.file.sync.enabled [CJMSP ブローカー個  
 別プロパティファイルのキー] 436
- imq.portmapper.port [CJMSP ブローカー個別プロ  
 パティファイルのキー] 436
- isapi\_redirect.conf 449
- J**
- 
- j2eeApplicationTable 758
- j2eeContainerTable 750
- J2EE アプリケーションを実行するシステムで指定で  
 きるタグ 224
- J2EE アプリケーションを実行するシステムで使用す  
 るファイルの一覧 168
- J2EE サーバ共通メッセージマッピングファイル  
 537
- J2EE サーバ個別用メッセージマッピングファイル  
 537
- J2EE サーバで使用するファイル 9
- J2EE サーバの JavaVM のシステムプロパティに設定  
 できるパラメタ 304
- J2EE サーバの拡張パラメタ 308
- J2EE サーバのカスタマイズ用キー 24
- J2EE サーバ用 Web アプリケーションプロパティ  
 ファイル 11
- J2EE サーバ用オプション定義ファイル 13
- J2EE サーバ用オプション定義を設定するパラメタ  
 303
- J2EE サーバ用セキュリティポリシーファイル 127
- J2EE サーバ用ユーザプロパティファイル 23
- J2EE サーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタ  
 265
- java.endorsed.dirs 623
- java.naming.factory.initial [J2EE サーバのカスタマ  
 イズ用キー] 75
- java.naming.factory.initial [Java アプリケーション]  
 616
- java.naming.factory.initial [バッチサーバ用のキー]  
 152
- java.naming.factory.object 623
- java.naming.factory.state 623
- java.naming.provider.url [Java アプリケーション]  
 616
- java.naming.provider.url [バッチアプリケーション  
 用のキー] 166
- java.rmi.server.hostname [Management Server 環  
 境設定ファイルのキー] 504
- java.security.policy 624
- javax.rmi.CORBA.PortableRemoteObjectClass  
 624
- javax.rmi.CORBA.StubClass 624
- javax.rmi.CORBA.UtilClass 623
- javax.xml.datatype.DatatypeFactory [Java アプリ  
 ケーション] 616
- javax.xml.parsers.DocumentBuilderFactory [Java  
 アプリケーション] 616
- javax.xml.parsers.SAXParserFactory [Java アプリ  
 ケーション] 616
- javax.xml.transform.TransformerFactory [Java ア  
 プリケーション] 616
- javax.xml.validation.SchemaFactory¥:http¥://  
 www.w3.org/2001/XMLSchema [Java アプリ  
 ケーション] 617
- javax.xml.xpath.XPathFactory¥:http¥://  
 java.sun.com/jaxp/xpath/dom [Java アプリケー  
 ション] 616
- Java アプリケーションで使用するファイル 595

- Java アプリケーション用オプション定義ファイル 597
- Java アプリケーション用ユーザプロパティファイル 603
- JkConnectTimeout [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 255, 454
- JkGatewayHost [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 255, 454
- JkGatewayHttpsScheme [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 255, 454
- JkGatewayPort [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 255, 455
- JkLogFileDir [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 255, 455
- JkLogFileNum [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 255, 455
- JkLogFilePrefix [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 456
- JkLogFileSize [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 256, 456
- JkLogLevel [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 256, 456
- JkModulePriority [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 256, 456
- JkMount [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 256
- JkOptions [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 456
- JkPrfId [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 256, 457
- JkRequestRetryCount [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 256, 457
- JkSendTimeout [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 256
- JkSendTimeout [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 457
- JkTraceLogFileDir [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 256, 458
- JkTraceLogFileNum [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 256, 458
- JkTraceLogFilePrefix [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 458
- JkTraceLogFileSize [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 257, 458
- JkTraceLog [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 256, 457
- JkTranslateBackcompat [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 257, 459
- JkWorkersFile [HTTP Server 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 459
- JP1/IM 連携用システムログメッセージマッピングファイル 536
- JP1/IM 連携用モニタ起動コマンドの設定ファイル 534
- JP1 イベントへの変換 538
- JP1 連携を設定するパラメタ 321, 338
- JPA で使用するファイル 365
- jvm.type [J2EE サーバ用オプション] 16, 309
- jvm.type [Java アプリケーション用のキー] 600
- jvm.type [バッチサーバ用のキー] 139
- jvmTable 751
- 
- ## K
- 
- KeepAliveTimeout 252
- 
- ## L
- 
- lb.ACOS.privilegedexec.password [負荷分散機定義プロパティファイルのキー] 554, 569
- lb.host [負荷分散機定義プロパティファイルのキー] 553, 568
- lb.password [負荷分散機定義プロパティファイルのキー] 554, 569
- lb.persistence.cookie-insert.cookieName [ティア別プロパティファイルのキー] 566
- lb.persistence.method [ティア別プロパティファイルのキー] 566
- lb.port [負荷分散機定義プロパティファイルのキー] 554, 569
- lb.properties 180
- lb.protocol [負荷分散機定義プロパティファイルのキー] 553, 569
- lb.timeout [負荷分散機定義プロパティファイルのキー] 554, 569
- lb.type [負荷分散機定義プロパティファイルのキー] 553, 568
- lb.user [負荷分散機定義プロパティファイルのキー] 554, 569
- lb.use [ティア別プロパティファイルのキー] 565
- lb.virtualserver.host [ティア別プロパティファイルのキー] 566
- lb.virtualserver.name [ティア別プロパティファイルのキー] 566
- lb.virtualserver.port [ティア別プロパティファイルのキー] 566
- Listen 252

log\_file\_dir [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 450  
 log\_file\_num [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 450  
 log\_file\_prefix [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 450  
 log\_file\_size [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 450  
 log\_level [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 450  
 LogLevel 253

## M

maction.<Management アクション ID>.command [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 514  
 maction.<Management アクション ID>.exclusive\_time [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 514  
 maction.<Management アクション ID>.max\_executable\_actions [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 514  
 maction.<Management アクション ID>.timeout.forced\_stop [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 514  
 maction.<Management アクション ID>.timeout [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 514  
 maction.message.<メッセージ ID>.mactions [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 515  
 maction.mevent.receiving\_info.keep\_size.max [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 515  
 maction.properties 514  
 maction.server.<論理サーバ名>.mactions [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 515  
 maction.tier.<Web システム名>.<物理ティア種別名>.mactions [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 515  
 maction.unit.<Web システム名>.<サービスユニット名>.mactions [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 515  
 Management Server 環境設定ファイル 496  
 Management Server 管理ファイル用退避対象定義ファイル 523  
 Management Server 用オプション定義ファイル 507  
 Management Server 用環境変数定義ファイル 508  
 Management Server 用メッセージマッピングファイル 536  
 Management アクション実行用プロパティファイル 514  
 Management イベント発行用プロパティファイル 518  
 Management イベント発行用プロパティを設定するパラメタ 320, 337  
 Management イベント発行用メッセージ ID リストファイル 520  
 manager.<論理サーバ名>.jpl event.system.mapping.properties 537  
 manager.cfg 510  
 manager.jpl event.system.filtering.severity.alert 321  
 manager.jpl event.system.filtering.severity.critical 321  
 manager.jpl event.system.filtering.severity.emergency 322  
 manager.jpl event.system.filtering.severity.error 322  
 manager.jpl event.system.filtering.severity.information 322  
 manager.jpl event.system.filtering.severity.notice 322  
 manager.jpl event.system.filtering.severity.warning 322  
 manager.jpl event.system.mapping.properties 537  
 manager.jpl event.user.filtering.enabled 323  
 manager.jpl event.user.filtering.filter 323  
 manager.jpl event.user.mapping.level.config 323  
 manager.jpl event.user.mapping.level.fine 323  
 manager.jpl event.user.mapping.level.finer 323  
 manager.jpl event.user.mapping.level.finest 324  
 manager.jpl event.user.mapping.level.info 324  
 manager.jpl event.user.mapping.level.severe 324  
 manager.jpl event.user.mapping.level.warning 325  
 manager.mevent.logical\_server\_name [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 518  
 manager.mevent.message\_id.list 321  
 manager.mevent.message\_id.list [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 519  
 manager.mevent.retry.interval 321  
 manager.mevent.retry.interval [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 519  
 manager.mevent.retry.limit 321

- manager.mevent.retry.limit [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 518
- manager.mevent.send.host [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 518
- manager.mevent.send.max 321
- manager.mevent.send.max [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 519
- manager.mevent.send.port [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 518
- manager.mevent.send.timeout 321
- manager.mevent.send.timeout [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 518
- manager.mevent.sender.bind.host 321
- manager.mevent.sender.bind.host [Management アクション実行用プロパティファイルのキー] 519
- Manager 設定ファイル 510
- Manager で使用するファイル 467
- Manager で使用するファイルの一覧 468
- MaxClients 253
- messageDrivenBeanTable 799
- Microsoft IIS 用マッピング定義ファイル 461
- Microsoft IIS 用リダイレクト動作定義ファイル 449
- mngagent.<実サーバ名>.properties 494
- mngagent.agent\_name [運用監視エージェントプロパティファイルのキー] 494
- mngagent.connector.host 320
- mngagent.connector.host [運用監視エージェントプロパティファイルのキー] 495
- mngagent.connector.port 320
- mngagent.connector.port [運用監視エージェントプロパティファイルのキー] 495
- mngagent.domain\_name [運用監視エージェントプロパティファイルのキー] 494
- mngagent.log.filename [運用監視エージェントプロパティファイルのキー] 494
- mngagent.log.filesize 320
- mngagent.log.filesize [運用監視エージェントプロパティファイルのキー] 495
- mngsvr.jp1event.event\_server\_name [Management Server 環境設定ファイルのキー] 504
- mngsvr.myhost.name [Management Server 環境設定ファイルのキー] 504
- mngsvrmonitor.browser [JP1/IM 連携用モニタ起動コマンドの設定ファイルのキー] 534
- mngsvrmonitor.connect.host [JP1/IM 連携用モニタ起動コマンドの設定ファイルのキー] 534
- mngsvrmonitor.connect.password [JP1/IM 連携用モニタ起動コマンドの設定ファイルのキー] 534
- mngsvrmonitor.connect.userid [JP1/IM 連携用モニタ起動コマンドの設定ファイルのキー] 534
- mngsvrutil.apply\_user [mngsvrutil コマンドのクライアント側共通定義ファイルのキー] 532
- mngsvrutil.auth.failed\_wait [mngsvrutil コマンドのサーバ側定義ファイルのキー] 529
- mngsvrutil.auth.log\_challenged [mngsvrutil コマンドのサーバ側定義ファイルのキー] 529
- mngsvrutil.auth.log\_denied [mngsvrutil コマンドのサーバ側定義ファイルのキー] 529
- mngsvrutil.auth.log\_failed [mngsvrutil コマンドのサーバ側定義ファイルのキー] 530
- mngsvrutil.auth.log\_succeeded [mngsvrutil コマンドのサーバ側定義ファイルのキー] 530
- mngsvrutil.compat.header\_format [mngsvrutil コマンドのサーバ側定義ファイルのキー] 530
- mngsvrutil.compat.monitoring\_tree [mngsvrutil コマンドのサーバ側定義ファイルのキー] 530
- mngsvrutil.connect.host [mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイルのキー] 525
- mngsvrutil.connect.password [mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイルのキー] 526
- mngsvrutil.connect.userid [mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイルのキー] 526
- mngsvrutil.output.file [mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイルのキー] 526
- mngsvrutil.output.format [mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイルのキー] 526
- mngsvrutil.output.suppress\_header [mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイルのキー] 526
- mngsvrutil.session.max\_inactive\_interval [mngsvrutil コマンドのサーバ側定義ファイルのキー] 530
- mngsvrutil.target\_kind [mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイルのキー] 527
- mngsvrutil.target\_name [mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイルのキー] 526
- mngsvrutil.target\_server\_name [mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイルのキー] 527
- mngsvrutilcl.properties 532
- mngsvrutil コマンドのクライアント側共通定義ファイル 532
- mngsvrutil コマンドのクライアント側定義ファイル 525
- mngsvrutil コマンドのサーバ側定義ファイル 529
- mod\_jk.conf 453
- mserver.cfg 507
- mserver.jp1event.system.mapping.properties 536
- mserver.properties 496

mserverenv.cfg 508  
 mstartup.force.watchtime 246  
 mstartup.no 246  
 mstartup.premised.serverName 248  
 mstartup.restartcnt 248  
 mstartup.retrywait 248  
 mstartup.start.watchtime 248  
 mstartup.watchtime 248

## O

org.omg.CORBA.ORBClass 624  
 org.omg.CORBA.ORBSingletonClass 624  
 org.omg.PortableInterceptor.ORBInitializerClass.  
 com.hitachi.software.ejb.security.std.intercepto  
 r.SecurityClientInterceptorInit 624  
 org.w3c.dom.DOMImplementationSourceList  
 [Java アプリケーション] 617  
 org.xml.sax.driver [Java アプリケーション] 617  
 org.xml.sax.parser [Java アプリケーション] 617

## P

prf\_id 450  
 PRFID 329  
 prfspool 329  
 PrfTraceBufferSize 329  
 PrfTraceCount 329  
 PrfTraceFileSize 329  
 PrfTraceLevel 329

## Q

queueTable 801

## R

rasetup.cfg 555  
 rasetup コマンド用設定ファイル 555  
 realservname 248  
 receive\_client\_timeout [Microsoft IIS 用リダイレク  
 タ動作定義ファイルのキー] 451  
 request\_retry\_count [Microsoft IIS 用リダイレクタ  
 動作定義ファイルのキー] 451  
 RequestDivideFileNum 264  
 RequestDivideTimeDifference 264  
 RequestDivideTimeInterval 264  
 requestUrlTable 781  
 RequestWraparoundFileNum 264  
 RequestWraparoundFilesize 264  
 resourceAdapterTable 786

## S

SecurityManager の使用を設定するパラメタ 325  
 send\_timeout [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定  
 義ファイルのキー] 451  
 server.policy 127, 154  
 ServerName 252  
 servletTable 779  
 SetBy 251  
 setup.CC.group [管理者設定用プロパティファイルの  
 キー] 578  
 setup.CC.user [管理者設定用プロパティファイルの  
 キー] 578  
 setup.cfg (セットアップウィザード用設定ファイル)  
 541  
 setup.log.dir [rasetup コマンド用設定ファイルの  
 キー] 555  
 setup.log.dir [セットアップウィザード用設定ファイ  
 ルのキー] 541  
 setup.log.filenum [rasetup コマンド用設定ファイ  
 ルのキー] 556  
 setup.log.filenum [セットアップウィザード用設定  
 ファイルのキー] 542  
 setup.log.filesize [rasetup コマンド用設定ファイ  
 ルのキー] 556  
 setup.log.filesize [セットアップウィザード用設定  
 ファイルのキー] 542  
 setup.log.style [rasetup コマンド用設定ファイ  
 ルのキー] 556  
 setup.log.time [rasetup コマンド用設定ファイ  
 ルのキー] 556  
 setup.maintenance.log.filenum [rasetup コマンド  
 用設定ファイルのキー] 556  
 setup.maintenance.log.filenum [セットアップウィ  
 ザード用設定ファイルのキー] 542  
 setup.maintenance.log.filesize [rasetup コマンド用  
 設定ファイルのキー] 556  
 setup.maintenance.log.filesize [セットアップウィ  
 ザード用設定ファイルのキー] 542  
 setup.manager.group [管理者設定用プロパティファ  
 イルのキー] 578  
 setup.mng.administrator.password [管理者設定用  
 プロパティファイルのキー] 578  
 setup.mng.administrator.userid [管理者設定用プロ  
 パティファイルのキー] 577  
 SFO サーバ (互換用機能) 244  
 SFO サーバの JavaVM のシステムプロパティに設定  
 できるパラメタ 336  
 SFO サーバの拡張パラメタ 337



- SFO サーバ用オプション定義を設定するパラメタ 335
- SFO サーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタ 331
- sinaviagent.cfg 557
- sinaviagent.log.dir [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 557
- sinaviagent.log.fileenum [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 558
- sinaviagent.log.filesize [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 558
- sinaviagent.log.level [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 559
- sinaviagent.log.style [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 559
- sinaviagent.log.time [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 559
- sinaviagent.maintenance.log.fileenum [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 561
- sinaviagent.maintenance.log.filesize [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 561
- sinaviagent.process.consolelog.enabled [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 561
- sinaviagent.process.consolelog.fileenum [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 561
- sinaviagent.process.consolelog.filesize [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 561
- sinaviagent.process.consolelog.style [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 562
- sinaviagent.process.consolelog.time [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 561
- sinaviagent.service.log.fileenum [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 559
- sinaviagent.service.log.filesize [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 559
- sinaviagent.service.log.level [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 559
- sinaviagent.service.maintenance.log.fileenum [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 561
- sinaviagent.service.maintenance.log.filesize [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 561
- sinaviagent.snactl.log.fileenum [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 560
- sinaviagent.snactl.log.filesize [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 560
- sinaviagent.snactl.log.level [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 560
- sinaviagent.snactl.maintenance.log.fileenum [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 561
- sinaviagent.snactl.maintenance.log.filesize [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 561
- sinaviagent.spool.dir [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 558
- sinaviagent.work.dir [サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル] 558
- snapshot ログ収集対象定義ファイル 583
- snapshot ログ収集対象定義ファイルで使用できる変数 584
- StartServers 254
- statefulSessionBeanHomeMethodTable 810
- statefulSessionBeanHomeTable 766
- statefulSessionBeanLocalComponentMethodTable 816
- statefulSessionBeanLocalComponentTable 794
- statefulSessionBeanLocalHomeMethodTable 814
- statefulSessionBeanLocalHomeTable 793
- statefulSessionBeanRemoteMethodTable 812
- statefulSessionBeanRemoteTable 768
- statefulSessionBeanTable 764
- statelessSessionBeanHomeMethodTable 803
- statelessSessionBeanHomeTable 761
- statelessSessionBeanLocalComponentMethodTable 808
- statelessSessionBeanLocalComponentTable 791
- statelessSessionBeanLocalHomeMethodTable 806
- statelessSessionBeanLocalHomeTable 790
- statelessSessionBeanRemoteMethodTable 804
- statelessSessionBeanRemoteTable 763
- statelessSessionBeanTable 760
- ## T
- 
- ThreadsPerChild 254
- tier.properties 565
- tier.startup.no [ティア別プロパティファイルのキー] 567
- tier.target.os [ティア別プロパティファイルのキー] 567
- tierlb.properties 568
- trace\_log\_file\_dir [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 451
- trace\_log\_file\_num [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 451
- trace\_log\_file\_prefix [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 451

trace\_log\_file\_size [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 452  
 trace\_log [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 451  
 transactionTable 752

## U

uriworkermap.properties 461  
 use.security 325  
 User 254  
 user.env.variable 249  
 usrconf 353  
 USRCONF\_JVM\_ARGS [サーバ管理コマンド用オプション定義ファイルのキー (UNIX 用)] 353  
 USRCONF\_JVM\_ARGS [サーバ管理コマンド用オプション定義ファイルのキー (Windows 用)] 356  
 USRCONF\_JVM\_CLASSPATH [サーバ管理コマンド用オプション定義ファイルのキー (Windows 用)] 356  
 USRCONF\_JVM\_CLPATH [サーバ管理コマンド用オプション定義ファイルのキー (UNIX 用)] 353  
 USRCONF\_JVM\_LIBPATH [サーバ管理コマンド用オプション定義ファイルのキー (UNIX 用)] 353  
 USRCONF\_JVM\_LIBPATH [サーバ管理コマンド用オプション定義ファイルのキー (Windows 用)] 356  
 usrconf.bat 356  
 usrconf.cfg 13, 137, 160, 597  
 usrconf.properties 23, 141, 165, 359, 603

## V

vbj.java2iiop.jvm.maxHeapSize 287  
 vbj.java2iiop.jvm.maxHeapSize [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 76  
 vbj.java2iiop.jvm.minHeapSize 288  
 vbj.java2iiop.jvm.minHeapSize [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 76  
 vbroker.agent.enableLocator [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 77, 306  
 vbroker.agent.enableLocator [Java アプリケーション] 618  
 vbroker.agent.enableLocator [バッチサーバ用のキー] 152  
 vbroker.agent.port [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 77  
 vbroker.agent.port [サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー] 364  
 vbroker.agent.port [バッチサーバ用のキー] 152

vbroker.ce.iiopeccm.htc.readerPerConnection [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 77  
 vbroker.ce.iiopeccm.htc.readerPerConnection [Java アプリケーション] 618  
 vbroker.ce.iiopeccm.htc.readerPerConnection [バッチサーバ用のキー] 153  
 vbroker.ce.iiopeccm.htc.threadStarter [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 77  
 vbroker.ce.iiopeccm.htc.threadStarter [バッチサーバ用のキー] 153  
 vbroker.orb.htc.comt.entryCount [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 77, 307  
 vbroker.orb.htc.comt.entryCount [Java アプリケーション] 618  
 vbroker.orb.htc.comt.entryCount [バッチサーバ用のキー] 153  
 vbroker.orb.htc.comt.fileCount [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 77, 307  
 vbroker.orb.htc.comt.fileCount [Java アプリケーション] 618  
 vbroker.orb.htc.comt.fileCount [バッチサーバ用のキー] 153  
 vbroker.orb.htc.mtr.trace [Java アプリケーション] 618  
 vbroker.orb.htc.tracePath [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 77  
 vbroker.orb.htc.tracePath [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 307  
 vbroker.orb.htc.tracePath [Java アプリケーション] 618  
 vbroker.orb.htc.tracePath [サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー] 364  
 vbroker.orb.htc.tracePath [バッチサーバ用のキー] 153  
 vbroker.se.iiopeccm.host [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 78  
 vbroker.se.iiopeccm.host [運用監視エージェントプロパティファイルのキー] 495  
 vbroker.se.iiopeccm.host [バッチサーバ用のキー] 153  
 vbroker.se.iiopeccm.proxyHost [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 78  
 vbroker.se.iiopeccm.scm.iiopeccm.listener.port [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 78  
 vbroker.se.iiopeccm.scm.iiopeccm.listener.port [運用監視エージェントプロパティファイルのキー] 495  
 vbroker.se.iiopeccm.scm.iiopeccm.listener.port [サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー] 364  
 vbroker.se.iiopeccm.scm.iiopeccm.listener.port [バッチサーバ用のキー] 153



- vbroker.se.iioop\_ts.proxyHost [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 79  
 version.properties 570  
 vm.interface.version [インタフェースバージョン定義ファイルのキー] 570  
 vm.target.edition [インタフェースバージョン定義ファイルのキー] 571  
 vmi.apply\_user [仮想サーバマネージャのクライアント共通設定プロパティファイルのキー] 574  
 vmi.connect.m [仮想サーバマネージャのクライアント共通設定プロパティファイルのキー] 574  
 vmi.connect.m [仮想サーバマネージャのクライアント設定プロパティファイルのキー] 576  
 vmi.connect.p [仮想サーバマネージャのクライアント共通設定プロパティファイルのキー] 575  
 vmi.connect.p [仮想サーバマネージャのクライアント設定プロパティファイルのキー] 576  
 vmi.connect.u [仮想サーバマネージャのクライアント共通設定プロパティファイルのキー] 575  
 vmi.connect.u [仮想サーバマネージャのクライアント設定プロパティファイルのキー] 576  
 vmi.connect.wait [仮想サーバマネージャのクライアント共通設定プロパティファイルのキー] 575  
 vmi.connect.wait [仮想サーバマネージャのクライアント設定プロパティファイルのキー] 576  
 vmi.jp1.base.auth.enabled [仮想サーバマネージャプロパティファイルのキー] 573  
 vmi.properties 572  
 vmi.serverconnectionagent.connect.timeout [仮想サーバマネージャプロパティファイルのキー] 572  
 vmi.serverconnectionagent.exec.timeout [仮想サーバマネージャプロパティファイルのキー] 573  
 vmi.serverconnectionagent.socket.timeout [仮想サーバマネージャプロパティファイルのキー] 573  
 vmi.spool.dir [仮想サーバマネージャプロパティファイルのキー] 572  
 vmiclient.properties 574  
 vmsetup.properties 577
- ## W
- 
- webApplicationTable 775  
 webContainerTable 818  
 webserver.application.lower\_version [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 80  
 webserver.connector.ajp12.backlog [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 80, 307  
 webserver.connector.ajp12.max\_threads [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 80, 307  
 webserver.connector.ajp12.port [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 81, 307  
 webserver.connector.ajp13.backlog [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 81  
 webserver.connector.ajp13.bind\_host [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 81  
 webserver.connector.ajp13.bind\_host [バッチサーバ用のキー] 153  
 webserver.connector.ajp13.max\_threads [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 82  
 webserver.connector.ajp13.port [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 82  
 webserver.connector.ajp13.port [Management Server 環境設定ファイルのキー] 505  
 webserver.connector.ajp13.port [バッチサーバ用のキー] 153  
 webserver.connector.ajp13.receive\_timeout [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 82  
 webserver.connector.ajp13.send\_timeout [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 82  
 webserver.connector.http.bind\_host [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 82  
 webserver.connector.http.bind\_host [Management Server 環境設定ファイルのキー] 505  
 webserver.connector.http.permitted.hosts [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 83  
 webserver.connector.http.permitted.hosts [Management Server 環境設定ファイルのキー] 505  
 webserver.connector.http.port [Management Server 環境設定ファイルのキー] 506  
 webserver.connector.inprocess\_http.backlog [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 83  
 webserver.connector.inprocess\_http.bind\_host [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 83  
 webserver.connector.inprocess\_http.enabled\_methods [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 84  
 webserver.connector.inprocess\_http.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 83  
 webserver.connector.inprocess\_http.error\_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.file.content\_type [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 85  
 webserver.connector.inprocess\_http.error\_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.file [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 84

- webserver.connector.inprocess\_http.error\_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.redirect\_url [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 85
- webserver.connector.inprocess\_http.error\_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.request\_url [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 85
- webserver.connector.inprocess\_http.error\_custom.<エラーページカスタマイズ定義名>.status [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 86
- webserver.connector.inprocess\_http.error\_custom.list [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 84
- webserver.connector.inprocess\_http.gateway.host [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 86
- webserver.connector.inprocess\_http.gateway.http\_scheme [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 87
- webserver.connector.inprocess\_http.gateway.port [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 86
- webserver.connector.inprocess\_http.hostname\_lookups [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 87, 307
- webserver.connector.inprocess\_http.init\_threads [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 88
- webserver.connector.inprocess\_http.keep\_start\_threads [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 88
- webserver.connector.inprocess\_http.limit.max\_headers [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 89
- webserver.connector.inprocess\_http.limit.max\_request\_body [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 89
- webserver.connector.inprocess\_http.limit.max\_request\_header [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 89
- webserver.connector.inprocess\_http.limit.max\_request\_line [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 89
- webserver.connector.inprocess\_http.max\_connections [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 90
- webserver.connector.inprocess\_http.max\_execute\_threads [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 90
- webserver.connector.inprocess\_http.max\_spare\_threads [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 90
- webserver.connector.inprocess\_http.min\_spare\_threads [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 90
- webserver.connector.inprocess\_http.permitted\_hosts [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 91
- webserver.connector.inprocess\_http.persistent\_connection.max\_connections [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 91
- webserver.connector.inprocess\_http.persistent\_connection.max\_requests [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 92
- webserver.connector.inprocess\_http.persistent\_connection.timeout [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 92
- webserver.connector.inprocess\_http.port [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 92
- webserver.connector.inprocess\_http.receive\_timeout [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 92
- webserver.connector.inprocess\_http.redirect.<リダイレクト定義名>.file.content\_type [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 93
- webserver.connector.inprocess\_http.redirect.<リダイレクト定義名>.file [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 92
- webserver.connector.inprocess\_http.redirect.<リダイレクト定義名>.redirect\_url [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 93
- webserver.connector.inprocess\_http.redirect.<リダイレクト定義名>.request\_url [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 94
- webserver.connector.inprocess\_http.redirect.<リダイレクト定義名>.status [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 94
- webserver.connector.inprocess\_http.redirect.list [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 94
- webserver.connector.inprocess\_http.rejection\_threads [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 95
- webserver.connector.inprocess\_http.response.header.server [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 95
- webserver.connector.inprocess\_http.send\_timeout [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 95
- webserver.connector.limit.max\_parameter\_count [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 95
- webserver.connector.limit.max\_post\_form\_data [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 96
- webserver.connector.redirect\_https.port [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 97
- webserver.container.ac.logEnabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 98
- webserver.container.jaxws.webservice.no\_webxml.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 98
- webserver.container.jaxws.webservice.wsee.no\_webxml.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 98
- webserver.container.jaxws.webservice.wsee.warn\_ame [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 99
- webserver.container.server\_id.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 99

- webserver.container.server\_id.name [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 99
- webserver.container.server\_id.value [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 100
- webserver.container.servlet.default\_mapping.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 100
- webserver.container.thread\_control.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 100
- webserver.container.thread\_control.queue\_size [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 101
- webserver.context.check\_interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 101
- webserver.context.reload\_delay\_timeout [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 102
- webserver.context.update.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 102
- webserver.dbsfo.attribute\_data\_size.max [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 103
- webserver.dbsfo.check\_size.mode [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 103
- webserver.dbsfo.connector.name [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 103
- webserver.dbsfo.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 103
- webserver.dbsfo.exception\_type\_backcompat [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 103
- webserver.dbsfo.exclude.extensions [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 103
- webserver.dbsfo.exclude.uris [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 103
- webserver.dbsfo.integrity\_mode.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 104
- webserver.dbsfo.negotiation.high\_level [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 104
- webserver.dbsfo.session\_read\_only.uris [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 104
- webserver.dbsfo.thread\_control\_queue.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 104
- webserver.eadssfo.application.cache.name [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 105
- webserver.eadssfo.check\_size.mode [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 105
- webserver.eadssfo.client.retry.count  
webserver.eadssfo.client.retry.count 105
- webserver.eadssfo.client.retry.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 105
- webserver.eadssfo.eads.client.<接続先 EADs サーバ名>.address [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 105
- webserver.eadssfo.eads.client.<接続先 EADs サーバ名>.port [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 105
- webserver.eadssfo.eads.client.node.list [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 105
- webserver.eadssfo.eads.connection.buffer\_size [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 105
- webserver.eadssfo.eads.connection.retry [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 106
- webserver.eadssfo.eads.connection.timeout [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 106
- webserver.eadssfo.eads.connectionPool.pool\_size [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 106
- webserver.eadssfo.eads.logger.commDump.enable [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 106
- webserver.eadssfo.eads.logger.commTrace.enable [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 106
- webserver.eadssfo.eads.logger.commTrace.filename [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 106
- webserver.eadssfo.eads.logger.commTrace.file\_size [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 106
- webserver.eadssfo.eads.logger.dir [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 106
- webserver.eadssfo.eads.logger.message.console.enable [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 106
- webserver.eadssfo.eads.logger.message.filename [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 106
- webserver.eadssfo.eads.logger.message.file\_size [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 106
- webserver.eadssfo.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 107
- webserver.eadssfo.exclude.url\_patterns [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 107
- webserver.eadssfo.session\_read\_only.url\_patterns [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 107
- webserver.eadssfo.session.cache.name [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 107
- webserver.errorpage.stack\_trace.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 108, 307
- webserver.http.request.encoding [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 108
- webserver.http.request.uri\_decode.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 108
- webserver.http.response.encoding [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 109
- webserver.jsp.additional.import.list [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 109
- webserver.jsp.check\_interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 109

- webserver.jsp.compile.backcompat [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 110
- webserver.jsp.debugging.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 114
- webserver.jsp.el2\_2.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 111
- webserver.jsp.jsp\_page.bom.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 114
- webserver.jsp.keepgenerated [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 111
- webserver.jsp.keepgenerated [J2EE サーバ用オプション] 11
- webserver.jsp.pageEncoding [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 111
- webserver.jsp.precompile.jsp\_work\_dir [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 111, 307
- webserver.jsp.tld.mapping.java\_ee\_tag\_library.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 114
- webserver.jsp.translation.backcompat.customAction.declareVariable [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 112
- webserver.jsp.translation.backcompat.tag.noCheckRtexprvalue [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 112
- webserver.jsp.translation.backcompat.tag.rtxprvalueTerminate [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 112
- webserver.jsp.translation.backcompat.taglib.noCheckPrefix [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 113
- webserver.jsp.translation.backcompat.useBean.noCheckClass [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 113
- webserver.jsp.translation.customAction.ignoreCaseAttributeName [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 113
- webserver.jsp.translation.useBean.noCheckDuplicateId [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 114
- webserver.jsp.update.interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 113
- webserver.logger.access\_log.<フォーマット名> [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 115
- webserver.logger.access\_log.format\_list [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 115
- webserver.logger.access\_log.inprocess\_http.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 115
- webserver.logger.access\_log.inprocess\_http.filename [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 116
- webserver.logger.access\_log.inprocess\_http.filename [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 116
- webserver.logger.access\_log.inprocess\_http.filesize [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 116
- webserver.logger.access\_log.inprocess\_http.usage\_format [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 117
- webserver.logger.communication\_trace.inprocess\_http.filename [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 117, 307
- webserver.logger.thread\_trace.inprocess\_http.filename [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 117, 307
- webserver.servlet\_api.exception.getCause.backcompat [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 119
- webserver.ServletContainerInitializer.jar.include.path [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 119
- webserver.session.cookie\_config.http\_only [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 119
- webserver.session.cookie\_config.name [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 120
- webserver.session.delete\_cookie.backcompat [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 120, 308
- webserver.session.max.log\_interval [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 120, 307
- webserver.session.max.throwHttpSessionLimitExceededException [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 121
- webserver.session.server\_id.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 121, 307
- webserver.session.server\_id.value [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 122
- webserver.session.tracking\_mode [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 122
- webserver.sfo.negotiation.ignore\_serverId [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 308
- webserver.shutdown.port [Management Server 環境設定ファイルのキー] 506
- webserver.static\_content.cache.enabled [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 123
- webserver.static\_content.cache.filesize.threshold [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 124
- webserver.static\_content.cache.size [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 124
- webserver.static\_content.encoding.extension [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 124
- webserver.work.clean [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 125
- webserver.work.directory [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 125

webserver.xml.validate [J2EE サーバのカスタマイズ用キー] 126  
 webserver.xml.validate [J2EE サーバ用オプション] 11  
 Web アプリケーションで使用するファイルの一覧 632  
 Web アプリケーション用 DD (web.xml) 828  
 Web サーバ用定義を設定するパラメタ 251  
 Web サーバ連携で使用するファイル 447  
 Web サーバ連携で使用するファイルの一覧 448  
 Web システムの属性定義 224, 236  
 worker\_file [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 452  
 worker\_mount\_file [Microsoft IIS 用リダイレクタ動作定義ファイルのキー] 452  
 worker.<ワーカ名>.<パラメタ> [ワーカ定義ファイルのキー] 258, 462  
 worker.<ワーカ名>.balanced\_workers [ワーカごとの定義パラメタ] 258, 463  
 worker.<ワーカ名>.cachesize [ワーカごとの定義パラメタ] 258, 463  
 worker.<ワーカ名>.default\_worker [ワーカごとの定義パラメタ] 258, 463  
 worker.<ワーカ名>.delegate\_error\_code [ワーカごとの定義パラメタ] 258, 463  
 worker.<ワーカ名>.host [ワーカごとの定義パラメタ] 258, 463  
 worker.<ワーカ名>.lbfactor [ワーカごとの定義パラメタ] 258, 463  
 worker.<ワーカ名>.port [ワーカごとの定義パラメタ] 258, 464  
 worker.<ワーカ名>.post\_data [ワーカごとの定義パラメタ] 258, 464  
 worker.<ワーカ名>.post\_size\_workers [ワーカごとの定義パラメタ] 258, 464  
 worker.<ワーカ名>.receive\_timeout [ワーカごとの定義パラメタ] 258, 464  
 worker.<ワーカ名>.type ごとの定義パラメタ 465  
 worker.<ワーカ名>.type [ワーカごとの定義パラメタ] 258, 464  
 worker.list [ワーカ定義ファイルのキー] 258, 462  
 workers.properties 462

## い

インタフェースバージョン定義ファイル 570

## う

運用監視エージェントプロパティファイル 494

運用監視エージェントプロパティを設定するパラメタ 320, 337  
 運用管理エージェント自動起動用設定ファイル 488  
 運用管理エージェント設定ファイル 491  
 運用管理エージェントプロパティファイル 470  
 運用管理エージェント用オプション定義ファイル 489

## か

拡張 MIB オブジェクト定義ファイル 750  
 拡張子と MIME タイプの対応づけ 828  
 各論理サーバ共通で指定できるパラメタ 246  
 各論理サーバ共通で指定できるパラメタ (互換用) 833  
 仮想化システムで使用するファイル 551  
 仮想化システムで使用するファイルの一覧 552  
 仮想サーバグループ情報ファイル 579  
 仮想サーバマネージャ側の負荷分散機接続設定プロパティファイル 553  
 仮想サーバマネージャのクライアント共通設定プロパティファイル 574  
 仮想サーバマネージャのクライアント設定プロパティファイル 576  
 仮想サーバマネージャプロパティファイル 572  
 簡易構築定義ファイル 183  
 簡易構築定義ファイルおよび構成変更定義ファイルに指定できるタグ 224  
 監査ログ定義ファイル 589  
 監査ログの設定で使用するファイル 587  
 管理者設定用プロパティファイル 577

## <

クライアント共通設定プロパティファイル 175  
 クライアント設定プロパティファイル 171  
 グローバルトランザクション 48

## こ

構成変更定義ファイル 215  
 コンパイル対象外リストファイル 633

## さ

サーバ管理コマンドで使用するファイル 351  
 サーバ管理コマンドのカスタマイズ用キー 359  
 サーバ管理コマンドの予約済みキー 165, 359  
 サーバ管理コマンド用システムプロパティファイル 359  
 サーバ設定プロパティファイル 170  
 サーバ通信エージェント用オプション定義ファイル 557  
 サービスユニットの定義 231, 239

サービスユニット・ホスト追加用の構成変更定義ファイル 217  
 作業ディレクトリ 14

## し

---

実行結果リストファイル 634  
 使用するサーバと指定するパラメタの参照先の対応 265

## す

---

スケールアウト用ホスト定義ファイル 221

## て

---

ティア側の負荷分散機接続設定プロパティファイル 568  
 ティア別プロパティファイル 565

## は

---

バッチアプリケーション用オプション定義ファイル 160  
 バッチアプリケーション用ユーザプロパティファイル 165  
 バッチアプリケーションを実行するシステムで指定できるタグ 236  
 バッチアプリケーションを実行するシステムで使用するファイルの一覧 169  
 バッチサーバで使用するファイル 135  
 バッチサーバの JavaVM のシステムプロパティに設定できるパラメタ 318  
 バッチサーバの拡張パラメタ 319  
 バッチサーバのカスタマイズ用キー 142  
 バッチサーバ用オプション定義ファイル 137  
 バッチサーバ用オプション定義を設定するパラメタ 317  
 バッチサーバ用セキュリティポリシーファイル 154  
 バッチサーバ用ユーザプロパティファイル 141  
 バッチサーバ用ユーザプロパティを設定するパラメタ 310

## ふ

---

負荷分散機定義プロパティファイル 180  
 負荷分散機の定義 225  
 物理ティアの定義 227, 237

## ほ

---

保護区リストファイル 132, 158  
 ホストの定義 235, 242

## ま

---

マッピング定義 454

## も

---

モジュール定義 453

## ら

---

ライトトランザクション 48

## り

---

リダイレクタ定義 454

## ろ

---

ログの運用で使用するファイル 581  
 論理 CTM で指定できるパラメタ 342  
 論理 CTM ドメインマネージャで指定できるパラメタ 340  
 論理 J2EE サーバで指定できるパラメタ 265  
 論理 J2EE サーバで指定できるパラメタ (互換用) 835  
 論理 SFO サーバで指定できるパラメタ 331  
 論理 SFO サーバで指定できるパラメタ (互換用) 841  
 論理 Web サーバで指定できるパラメタ 251  
 論理 Web サーバで指定できるパラメタ (互換用) 834  
 論理サーバ参照定義ファイル 219  
 論理サーバのパラメタ変更用の構成変更定義ファイル 215  
 論理スマートエージェントで指定できるパラメタ 347  
 論理ネーミングサービスで指定できるパラメタ 349  
 論理パフォーマンストレーサで指定できるパラメタ 329  
 論理ユーザサーバで指定できるパラメタ 348

## わ

---

ワーカごとの定義パラメタ 258, 463  
 ワーカ定義ファイル 462  
 ワーカ定義ファイルに指定できるキー 258, 462  
 ワーカ定義を設定するパラメタ 257